



黙阿弥全集

第十六巻

黙阿弥全集

第十六巻

解説

默阿彌は明治十四年十一月、六十六歳の時、新富座に於て河竹新七としての一世一代の狂言『島衛』を新作上演し、引退披露をなした。親交ありし座主守田勘彌は作者の爲に座の前へ口上看板を掲げた。其口上は次の如く紋番附に轉載されてゐる。狂言作者の爲に座元の名義で口上を述べたのは異例の名譽に屬する。次の如くに讀まれる。

一御區中樣益御機嫌克被遊御座恐悅至極に奉存候隨而狂言作者河竹新七義追々老年に及世之流行に送れ候迚四五年前より退身致度と申出候得共作者無人之折柄今四五年相勤候樣申延候所早くも其期限に至り是非々々今年者退身致度と再三之願ひ難默止則願ひに任せ當狂言を一世一代と仕り退身爲致候且新七義は天保五年五世鶴屋南北門人と成り勝諺藏と名乘り作者見習に出勤致し其後故有りて河竹新七之名を嗣ぎ弘化四年人々の進めにより立作者と相成り今年迄三十五年之間書綴り候新狂言御評判に預り候も全く御贔屓樣方之御蔭に而今般目出度退身致し候は作者冥加に叶ひし事故當人は心魂に徹し厚く御禮奉申上候猶當狂言も拙作ながら書納めに候得ば惡舖所は御見流被下御評判宜舖願上候又一座之俳優も舊來之馴染に共々力を盡し相つとめ候得ば何卒新狂言初日より被仰合賑々舖御見物に御來車之程偏に奉希上候

座長守田かん彌

尙別圖の「狂言作者」としたのは、此の興行の時の狂言作者連名である。最初の竹柴金作は後の三世河竹新七。第二の竹柴瓢助は四方梅彥。終りから一番目の竹柴進三は後の竹柴其水、二番目の竹柴幸治は久保田彥作、三番目の河竹新七は卽ち默阿彌である。

一御邑中様益御機嫌克被遊御座恐悦至極ニ奉存候随而狂言作者河竹新七義追々
老年ニ及世之流行ニ後れ候迚四五年以前より退隠致度と申出候得共作者少人之折柄
今四五年相勤候様申延候所早くも其期限ニ至り是非今年支退隠致度と再三之頼ニ
難黙止則願之儀任せ当狂言を一世一代と仕り退隠為致候且新七義ハ天保五年五世鶴屋南北
門人と成り勝諺蔵と名乗り作者見習ニ出勤致し其後故有りて河竹新七と名を開き
弘化四年人々の推挙ありて立作者と相成り今年迄三十五年之間無数の新狂言を作り相評判を
取り候も全く御贔屓御引立之御蔭ニ而今般目出度退身致し候へ共作者実脇々ニ而〔illegible〕
世継之儀ハ未熟ニ候得共当狂言より改而善〔illegible〕仕候間何卒
河竹新七之跡目相譲り候間以来御見捨なく御贔屓之程偏ニ奉希上候
狂言作者一同連名を以御披露之為奉申上候以上　守田勘弥

狂言

作者

竹柴金〔illegible〕
竹柴〔illegible〕
竹柴〔illegible〕
竹柴〔illegible〕
竹柴〔illegible〕
竹柴〔illegible〕
竹柴〔illegible〕
竹柴〔illegible〕

河竹新七
竹柴〔illegible〕
竹柴〔illegible〕

明治十四年十一月二十日
午前第八時より〔illegible〕







河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集 第十六卷

東京 春陽堂刊行

默阿彌全集　第十六卷目次

天衣紛上野初花（河内山と直侍）……一

島衛月白浪（島ちどり）……四〇七

浮世清玄廓夜櫻（浮世清玄）……六二九

北條九代名家功（高時、義貞）……七八九

（附錄）與行年表……八七五

挿繪目次

◎引退口上（卷頭、玻璃版）……

◎明石の島藏（着色木版、國周筆）……

◎松江の玄關（玻璃版、國周筆）……一頁の前

◎辨天湯前（玻璃版、周重筆）……四〇七頁の前

◎浮世淸玄（玻璃版、國政筆）……六二九頁の前

◎高時（玻璃版、舞臺寫眞）……七八九頁の前

御定連より御好みに伯圓氏の得意の讀物てうど時候も吉原に是で二度目の裏馴染其三千歳に市之丞が嫌れて歸る堤の稻妻初雷かごろつきの黑闇丑喧嘩買花に嵐のお藤が難儀を淸兵衞からの賴みにより乘込む使僧の網代駕籠三衣よ着ど宗俊と松江の殿が目覺えの頰の黑子に大膳が見出す衒を見脫すは心高木が學びの力以前は素讀の指南せし寺田も今は漸と命毛繫ぐ筆職人貧に迫りて拾ひし鯛に妻や悴に言譯も淚に濕る門口へ身を捨てに行く半七が危急を救ふ直侍東左衞門が影富を突當て取る二百兩夫が小判の耳になり詮議嚴しく喜兵衞が情に惜む名殘の水放れ跡を濁さぬ鳥目の金子が身請によろこぶ藤五郎素性を問へば同胞のちなみをむすぶ河内山覺悟の繩目に片岡が惡行つもる雪の捕物

古木再新樹植添

天衣紛上野初花

「河内山と直侍」（増補河内山）は明治十四年三月、新富座に於て書卸された、作者六十六歳の時のことである。これより前明治七年十月河原崎座に「雲上野三衣策前」と題し、講談に出發した同じ題材を劇化し、團十郎（河内山）、三十郎（直次郎）、家橘（松江侯）等によつて演ぜられたがそれに尙一層の復雜さを加へて增訂し、全く面目を一新したのが此の作である。新富座の全盛時代を聯想せしむる最も恰好の作であり、又作者晩年の世話物中出色のものであることは言ふを俟たない。作中でも松江家の玄關に於ける河内山、入谷の蕎麥屋より大口寮に於ける直侍、三千歲、金子市之丞の件は傑れた場面でもあり、未曾有の好評を博して今日に及んでゐる。名優揃ひの大一座に對して各特有の個性を發揮せしめつゝ、舞臺效果にも成功し、作品としても一貫した情調と興趣とを表現し得たものと稱すべきである。

書卸しの時の役割は市川團十郎（河内山宗俊、使僧道海實は宗俊）、尾上菊五郎（片岡直次郎）、岩井半四郎（大口の抱へ三千歲、腰元浪路）、中村宗十郎（筆職人寺田幸兵衞、高木小左衞門）、市川左團次（金子市之丞、比企東左衞門）、坂東家橘（松江出雲守、島屋手代半七、市川小團次（くらやみの丑松、宮崎數馬）、中村鶴藏（寮番喜兵衞、老女岩崎、魚賣藤五郎）、坂東しう調（幸兵衞、女房おもと、東左衞門娘おてい）、市川團右衞門（北村大膳、番頭傳右衞門、番頭九兵衞）、尾上梅五郎（按摩丈賀、中間勘八）、中村鶴助（和泉屋淸兵衞）、岩井しげ松（上州屋おまき）、尾上梅三郎（番新千代春）、澤村淸十郎（新造千代川）、尾上菊之助（幸兵衞悴新之助）等であつた。

挿繪にしたのは國周筆の錦繪と團十郎の舞臺寫眞で、質店の宗俊である。

大正十四年一月　　　編者誌す





天衣紛上野初花（河内山と直侍――六幕）

序幕

湯島天神境内の場
長者町上州屋の場

〔役名――河内山宗俊、金子市之丞、くらやみの丑松、上州屋番頭傳右衛門、元木彌九郎、大塚伊四藏、富の札賣七兵衛、神主左司馬、和泉屋清兵衛、手代音助。幸兵衛女房お元、上州屋後家おまき、同下女おしげ、茶屋娘おせん、丁稚長松、其他。〕

（湯島天神境内の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中奥深に石の大鳥居、この左右石の獅子、同じく奉納の燈籠、この後一面本社より横に松金屋の入口、其の外を見たる書割の張物、上の方斜に竹矢來の小屋、是れへ定紋附の幕を張り、此の前に大戸の出這入り、天滿宮奉納劍術試合催主金子市之丞と記したる建札を立てあり、下の方屋根附の水茶屋、奥の方一間の腰掛、後誂への聯をかけ、此の外銅の銅壺茶道具など飾り、御憩所といふ掛行燈、軒提灯をかけ、舞臺よき所へ床几二三脚竝べ、日覆より松の釣枝、總て湯島天神境内の體。爰に七兵衛やつし裝、富の札賣にてなり、○△□◎の四

人何れも床几へかゝり居る、おせん前垂掛け茶屋娘にて皆々へ茶を出して居る。此の見得よろしく、大拍子にて幕明く。

七兵　今日は堀田原の先生が、此の天神樣へ奉納の、劍術の試合があるので、此の御社内は思はぬ群集、こつちもお蔭で富の札を大層に賣りました。

せん　皆さん、お茶を一つお上りなされませ。

○　その堀田原の先生といふのは、當時江戶で名人だと噂の高い劍術遣ひ、この建札にもある通り、金子市之丞といふお人。

△　男も好いが氣合もよく、淺草切つての好い顏だが、侍の癖に喧嘩早く達者な腕であばれるから、何處でもおぞけを震ふさうだ。

□　その先生が試合と聞いては、おら達もどうか見物したいものだが、さうしてやつぱり角力のやうに、木戶錢を取つて見せるのかな。

◎　それとも先きが侍だけ、町人のものは取らぬといつて、たゞなら滅法安いものだが、もし姐さん、幾らぐらゐで見られるだらうな。

せん　そりやもう奉納の試合ゆゑ、幾らといつて木戶錢を、お取んなさるのではござりませんから、ほ

んの思召しでようございませう。

七兵 極つた木戸を取らぬ替り、四人で一人前小二朱づゝはづめば、御の字でございませう。

○ 百疋位で先生の、試合が見物出來るなら安いものだ。

△ 一人前天窓割りに、小二朱づゝ集めて行かう。

□ これさ、さう現金に取らなくつてもよいぢやあないか。

◎ そんなら姐さん、試合場へちよつと案内して下せえ。（ト立ちかゝるを、七兵衞留めて）

七兵 あゝもし〳〵、其の劍術のけんとくを祝つて、どうか富の札を一枚宛お買ひなすつて下さいまし、もう突日は近々ゆゑ、今が札の買ひ時でございます。

○ 富の札なら買つてもよいが、此の前も五六度追目をして試したが、今年は何處も暗劍殺、

△ 吉方でないといふから、どうせおら達には當るめえ。

□ 然し直との相談だ、一枚幾らに負けなさる。

◎ 安けりやあ、溝の中へうつちやる氣で買つて見ませう。

七兵 それは有難うございます、一枚二朱と四百文でございますが、口錢なしに二百文お負け申して置きませう。

○　それぢやあ四枚貰ひませう。
七兵　それは有難うござります、當りさうなのを差上げます。
○　姐さん、これを帳場へあげて、棧敷へ案内して下さい。
せん　はい〳〵畏まりました、さあ皆さん、斯うおいでなされませ。
七兵　御ゆつくりと御見物なさいまし。（ト大拍子になり、仕出し四人おせん附いて上手木戸の入口へ入る。）今日も金子先生のお蔭で大層人が出たので、こつちも思はずお相伴、もう百枚足らず札を賣つたが、どうか慾には千枚も賣つて、祝儀を貰ひたいものだ。
ト三味線入り大拍子になり、花道よりお元やつし裝世話女房のこしらへにて出來り、花道へ留り、
お元　今日は臨時のお神樂でも天神樣にあるかして、常より大層賑かだが、長者町のお袋さまもお參りにお出でなされたと見える、お宮にお出でなされまするか、お目に掛りたいものぢやわいな。
ト本舞臺へ來る、此の時上手よりおまき大家の後家のこしらへ、おしげ下女のこしらへにて附添ひ、丁稚風呂敷包みを背負ひ出來るをお元見て、
これは長者町のお袋さま、只今お歸りでござりますか。
まき　思ひ掛けないそなたはお元、今日は何處へ行つたのぢや。

しげ　お前さんも天神さまへお參りでござりますか。
もと　いえ〳〵さうではござりませぬ、久しく上りませぬゆゑ只今お店へ上りましたら、天神さまへお參りにお出でなされたと承はり、お跡を慕うて參りましたわいな。
新之　お跡を慕うてお出でとは、おつかさんはお袋さまに、何ぞ用でもあるのかえ。
もと　お袋さまに伺ひたいことがあつて、來たのぢやわいな。
まき　何は兎もあれ爰は往來、茶屋でゆつくりと話しませう。
もと　左樣なら、お供をいたしませうわいな。（ト右の鳴物にて皆々床几へかゝる。）
せん　もうお歸りでござりましたか、今日はお早うござりましたな。
まき　お百度も段々慣れ、早かつたかも知れぬわいの。（ト兩人床几へ腰をかける、お元思入あつて、）
もと　この間からお見舞に上りませうと存じましたが、何とやら暇なしで御無沙汰になりましたが、承はりますればお屋敷からお孃さまのお暇が出ませぬと申すこと、嘸御心配でござりませうな。
まき　よう尋ねて下すつた、ひよんな所へ御奉公に上げたがこつちの災難、今更いふも愚痴ながらお元どの、まあ聞いて下さんせ。（ト合方になり、）丁度娘が十四の春、あるお人がお世話にて松江樣へお小姓奉公、お高といひ御有福なお暮しゆゑに何一つ申し分はなけれども、どうしたことやら殿

樣が外に女子のないやうに娘をきつい御執心、是非お妾にしたいといふて表向きのお掛合、下ざま育ちの娘が身では有難いとも勿體ないとも、心で思へど知つての通り、去年連合が死なれてより後家を立てぬくわたしが心配、後にも先にもたゞ一人力と頼むは娘のおふぢ、もう年頃ゆゑお暇を願つて早う聟を取り、家督を讓つて初孫の顔が見たいと殿樣の、御意に背いてお暇を願うたなれどもお許しなく、其の上ならず此の頃は一間とやらへ娘を押籠め、文さへ宿へ遣つてはならぬと殿樣よりのおつしやり附けと、聞いてびつくり二三日は、三度の食さへ喉へ通らず、毎日泣いて居ますわいなう。

もと　そのお話しも此の間御後見の清兵衛樣から承はつてござりますが、何をいふにもお大名、多くの人の手を經ねばお暇願ひもついそれとお許しにはならぬとのこと、御恩になつたお店の御難儀、どうか工風はあるまいかと心配いたして居りますが、御存じの通り連合の幸兵衛どのは去年からぶら〳〵病で床につき、歩行が心に任せぬゆゑ、今日はせめて御見舞に上つて、御樣子を伺ひ來いと申しますゆゑ、お跡を慕ひ爰まで參りましたけれど、すりやあのやつぱりお孃さまの、まだお暇は出ませぬかいなあ。

まき　それに附けても氣にかゝるは、二三日あとに朋輩の宿へ届いた文の内へ、おふぢの文を封じてあ

つたをそこの家から內々で、届けてくれた其の文の樣子で猶々苦勞の增したは、日頃意地の惡いといふお年寄の岩崎どのが、是非殿樣のお心に隨はせると娘に迫り、打ち打擲こそなさらぬけれど、否といふなら一生涯宿へ下げぬとおつしやつて、晝夜お勸めなさるよし、只さへ內氣な娘ゆゑこんな辛い目に遭ふより、いつそ死んだがましであらうと、ひよんなことでもしはせぬかと、それが一倍苦勞になり、夜の目も睡らず泣き明かし、心配して居ますわいなあ。

しげ　ほんにお側でお袋さまの御心配をばなさるのを、見聞きするさへおいとしうて泣いてばつかり居りますが、先きは名におふお大名こつちは町家のことゆゑに、たゞ此の上は神樣の御利益願ふ外はないと、お袋さまをお勸め申し、七日の間この湯島の天神樣へお百度を、あげて願うて居りますが、それさへ今日が七日の滿願。

新之　天神樣のお惠みがなければ賴みの綱も切れ、御心配をなされますゆゑ、お袋さまにはこれが元でお煩ひでもなされませぬかと、おつかさん、わたしも苦勞でなりませぬ。

まき　おゝよく言やつた新之助、外に小僧も多くあれど主人と思へば大切に、優しいそなたが今の詞、

しげ　ほんに外の小僧どんは暇さへあれば遊ぶのに、影陽なくお袋さまを大事になさんす新之助どの、

まき　人は氏より育ちとやら、是れといふもお前の丹精。お元どの、お前に禮を言ひますぞいなう。

ト　よろしく思入れ、お元もこなしあつて、

もと　あゝこれ勿體ないことおつしやりますな、朋輩衆に立勝り御奉公をば大切に、せねばならぬは當り前、私どもが身の上を、まだおしげさんには御存じはござんすまいが、重なる御恩のあらましを、まあ聞いて下さんせいなあ。（ト合方になり、）元私の親といふは小梅村の植木屋にて、親父がお店へお出入りゆゑ、しかもわたしが十四の年、お小間使ひに上つてから丁度足掛け五年越し、御恩になつた其の上に、十八の年にお袋さまがお眼鏡にて、今の夫幸兵衛どのが御地面内に居つたのを、丁度似合の年頃と縁附けて下すつたが、間もなく夫婦のその中へこの新之助を儲けまして、假初ながら十餘年、世帶を張つて稼いでも段々續く不仕合せに、餘儀なく場末の橋場へ引込み、微な暮しの筆職人、以前わたしが勤めたる御縁つなぎで九つから、又新之助をお願ひ申し親子二代の御主人樣、厚いお世話になりますれば、人に勝つた忠義を盡し、お袋さまを大切にせねば罰が當りますわいなあ。

まき　ほんにそなた衆夫婦の者が、これ程までに實直な善い心がけで居なさるに、幸兵衛どのが病氣ゆゑ、はか〴〵しい稼ぎもならず、それゆゑ今では橋場にて兎角難儀を。

もと　え、

まゝ　いえさ、難儀といつたは病氣のこと。（ト兩人よろしく、新之助思入あつて、）

新之　もしお袋さま、今朝お迎ひに上りました御親類方が、もうお家へお出でなされたでござりませう。

しげ　ほんにお前の言ふ通り、御後見の和泉屋樣が、嘸お待兼ねでござりませう。

まき　娘の事で相談せうと、親類中へ迎ひを出せば、少しも早く歸りませう。

新之　おつかさんはこれから直に、橋場へお歸りなされますか。

もと　いや、お袋さまをお家までお送り申しませうわいな。

まき　おゝ、まだ話したいこともあれば、家へ一緒に來てくりやいの。

せん　もうお歸りでございますか。

しげ　おせんさん、お茶代を爰へ置きます。

せん　はい、有難うござります。

もと　左樣なればお袋さま。

まき　お元も一緒に。

もと　どれ、お送り申しませうか。

ト唄になり、おまき先にお元、新之助、おしげ附いて花道へはひる、此の時後より以前の七兵衞出來り、

七兵　今行つた後家様は、長者町の質屋のお内儀、家の娘で心配筋とはどんなことかおせん坊、お前知つて居るか。
せん　委しい事は知りませんが、あすこの家のお孃さんが松江様へお小姓に上つた所、殿様のお目に止つて、是非お妾にしたいといふので、大層親御さんが氣を揉んでおいでなさいます。
七兵　さういふ口ならこちと等は二つ返事で悦ぶが、工面の好い衆は、とんだことを心配するものだ。
せん　それはさうと七兵衞さん、今日金子様の試合場へ、札賣中で三兩上げると、今さう言つて來ましたぞえ。
七兵　三兩とは大はづみだ、其の上山の茶屋と矢場で五兩上げるといふことだから、定めて大層寄ることだらう、あゝ氣の惡い話しだ。

ト大拍子になり、此の内上手大戸の内にて、大勢にて喧嘩々々とわや〳〵言ふ、ばた〳〵にて木戸の内より、黒闇の丑松三尺傳法のこしらへにて出來るを、達附裝の世話役二人是れを宥めて出る、此の後より試合裝の門弟四人好みの鬘後鉢卷、袴、稽古着、竹具足裝にて竹刀を持ち出來り、丑松へ掛るを、世話役双方を留め、

世一　あゝこれ、靜かになさいまし、相手は高が町人ゆゑ、まあ〳〵放しておやんなせえ。

同二　これ、若え兄ィも、おとなしくして靜かに見物して行くがいゝ、野暮なことは言はねえで、
同一　わし等に任せて、
兩人　下さいまし〱。（ト留めるを丑松振拂ひ）
丑松　うつちやつて置いてくんねえ、見て惡いならこんなものを、誰が嬉しがつて見るものか、出ろと
いふから出たが惡いか。
門一　いや惡いとは申さぬが、今日金子先生が、天滿宮へ奉納の、
同二　藝道磨くこの試合を、見世物同樣手前達に、惡口言はるゝ謂れはない。
同三　わいら如きにけちを附けられ、此の儘にして歸しては、
同四　先生の御恥辱ゆゑ、今一言申して見よ、日頃の手並我々が、
同一　一本參るぞ。
四人　覺悟いたせ。（ト立ちかゝるを丑松こなしあつて）
丑松　おゝ打つなら勝手に打つて見ろ、所の者へ渡りも附けず、花會同樣小屋をかけ、人寄せをしやあ
がるから、それで言分附けに來たのだ。
門一　又しても劍術を、花會などゝは無禮の一言、

同二　神へ奉納いたすのを、師匠が私慾か何ぞのやうに、
同三　言分附けに參つたとは、いよ〳〵以て奇怪至極、
同四　師匠に代り我々が、其の舌の根を、
四人　拔いてくれん。（ト立ちかゝるを、丑松尻目に掛け、）
丑松　えゝ、しやらくせえ、靜にしろ、うぬ等のやうなぴい〳〵を相手にしては此方の名折だ、喧嘩をするなら小屋の主人、金子とやらに出ろと言へ、うぬ等は默つて見物しろ。
門一　やあ、人も無げなるその雜言、もう了簡が、
四人　相成らぬ。（ト四人竹刀にて打つてかゝる、此の時上手木戶の內にて、）
彌九
伊四　あいや何れも、暫く待つた。
門一　や、あのお聲は、
四人　小先生、
彌九
伊四　まあ〳〵何れも、鎭りめされ。
ト誂への合方になり、木戶の內より彌九郞伊四藏くりさげ鬘大小袴稽古着試合の裝、門弟頭にて出來り、兩人床几へかゝる、丑松見て、

丑松　そんなら、こんたは、
彌九　いゝや金子先生ならず、我々共は堀田原の、道場預かり大木彌九郎、
伊四　まつた拙者は塾頭たる、大塚伊四藏と申す者だが、此の場の樣子はあれなる小屋にて、
彌九　逐一聞いて其の方が、住所姓名承はり度く、品によつたら相手にも、ならうと存じて何れもを、
伊四　お留め申して兩人が、先生の名代に、そちへ面會
兩人　いたしに參つた。
丑松　そんならお前さん方が、門弟衆の頭分か、わつちやァ下谷山崎町の遊び人、黑闇の丑松といふけちな奴でごぜえます。
彌九　むゝ、そんならそなたが丑松か。
伊四　して今日の試合をば、何で言分、
兩人　附けに參つた。
丑松　それは言はずと知れたこと、下谷切つて此の湯島は、云はゞこつちの繩張內、なぜだんまりで小屋を掛け、花會じみた錢貰ひを、渡りを附けずにしなさるのだ。
兩人　何と申す。（ト聖天の入りし合方になり）

丑松　堀田原の道場で金看板の劍術指南、表は立派な堅氣だが其の內幕は內會仕、扶持方棒を捻つて脅す案山子の弓矢と違ひ、木偶の坊でも湯島から下谷切つてはそれ〴〵に、渡りを附ける利道を、横に曲つて奉納の試合はほんのぼく〳〵除けで、近所の矢場や水茶屋から集めッこの錢金を貰やあ言はずと花會だ、木戶は無錢で見物を入れても幾らか水引を掛けたものをなぜ貰つた、いはゞ見世物同樣ゆゑ、近所に遊ぶおら達へ何で渡りを附けねえのだ、形は小粒の兄イでも名は高島の親讓り、うぬ等に割を喰やあしねえぞ。（トきつと言ふ、彌九郎伊四藏むつとして、）

彌九　こいつが〳〵、言はしておけば過言千萬、諸藝のうちでも上に立つ天下御免の劍道試合、それを見世物同樣に、何でわいらへ渡りを附けうぞ。

伊四　殊に藝者屋料理屋を責めて集めしなんぞとは、我々のみか先生までお名の汚れる其の詞、一錢たりとも此の方より、貰つた覺えはかツつて無いぞ。

丑松　達て錢を集めぬと、云ふなら矢場や水茶屋から、贈つたものをなぜ返さぬ。

兩人　や。

丑松　默つて取りやあ花會だ、錢貰ひだから丑松が言分を附けに來たのだ。

トきつと言ふを七兵衞、世話役よろしく丑松を留めて、

七兵　これ〳〵兄イ、お前のいふのも尤もだが、何を言ふにも堀田原で名高い先きは大先生、爰で喧嘩をした日には、

世一　假令こつちに理があつても、

同二　七分の負けは武士と町人、

七兵　まあ了簡してわし等に任せ、爰は綺麗に、

皆々　歸つて下せえ〳〵。

丑松　いゝや厭だ、こつちも一旦言出したら金輪際動きやあしねえ、それとも歸つてくれろなら、いゝしらちを附けて返して下せえ。（ト言ふを彌九郎、伊四藏小癪なことを言ふ奴だといふ思入あつて合方になり）

彌九　高が相手は素町人と思つてこれまで勘辨いたすに、言はして置けば好い氣になり、何ぞといふと金錢を集むるやうに申しなせど、其の方などが手拭や富士大山の神酒を配り、錢を集むる頼母子や湯治場行きの奉加帳、弱い稼業をいぢめるやうな賤しい事なら遊人の、其の方共へ渡りとやらを附けまいものでもないけれど、

伊四　しかも免許と筆太に大きく書いたあの建札、天滿宮へ奉納の劍術試合の此の催し、それはこつちも盛り場で人寄せをいたすゆゑ、金子氏より奉行所へ屆けをなしていたしたこと、それともわい

らへ渡りを附けねば、人を集むる催しが出來ぬといふお觸でも、あらばそつちが望み通り、

門一　渡りを附けて遣はさうが、

同二　武士の表の劍術試合、

同三　わいら如きの下知を受け、

同四　何で催しいたさうぞ。

彌九　達て渡りの錢が欲しくば、金子氏の名代に、

伊四　我々共が取扱ひ、渡りをやるが其の代り、金は金だが、

門弟
皆々　延鐵だぞ。（ト刀をぬき掛ける、丑松少し氣味の惡きこなしあつて、氣を替へ）

丑松　何だ〳〵、何だといふと大小を捻り廻して脅しやあがるが、そんな嫋りを喰ッたッてびくともする丑松ぢやあねえ。さあ、切るなら綺麗に、さあ殺せ。

彌九　おゝ、望みとあるなら、

門弟
皆々　いでわれ〳〵が。

ト皆々思入あつて刀を拔き、丑松の目先へ突附ける、これにて丑松ぞつとせし思入、これを見兼ねて、七兵衞世話役双方をあわてゝ留めて、

七兵　あゝこれ〳〵、めつたなことをなされまするな、此の御社内で切つ張つがあつてはお山の大難儀、これさ兄イ、何にも言はず了簡して、この儘歸つておくんなせえ。
世一　相手は不足なこつちは町人、刀の穢れになりますから、
同二　まあ〳〵皆さんも、わしらに免じ堪忍なされて、
三人　下さりませ〳〵。（ト留めるを機に門弟皆々思入あつて、）
彌九　此の方とても多人數を、集會いたすこの催し、決して事は好まねど餘りといへば彼れが惡口、
伊四　人の難儀になる喧嘩、了簡いたして、
門弟皆々　遣はすぞ。
七兵　あれあの通りおつしやれば、兄イも爰は大負けに負けて、今日は、
三人　歸つてくだせえ〳〵。（ト留める、丑松も爰で切られては犬死だといふ思入あつて、）
丑松　喧嘩は留めるが花だといふから、今日は一番凹まされ、指を啣へて歸るとしよう。
彌九　そつちが歸らば我々とて、血を見ぬ刀をその儘に、
伊四　社内を穢さず勘辨なし、元の鞘へ、
門弟皆々　納めてやらう。

丑松　然し此の儘歸るとも、見掛けはけちな小野郎でも一寸の蟲に五分の魂、きつとお禮に參ります。

彌九　おゝ其の念には決して及ばぬ、我が先生の邸宅は堀田原で名に高く、雷名轟く金子氏、いつ何時でも尋ねて參れ。

伊四　然しいくら大きなことを言つても、武士に出合つては町人風情の悲しさに、手出しもならず尻込みなし、此のまゝこそ〱歸るとは、

彌九　見れば見るほど、

門弟皆々　みじめなざまだ。

丑松　二本棒を相手ゆゑ、爰で命の遣り取りは七分の損と今日は歸るが、此の仕返しには度胸を据ゑ、こつちが死ぬかそつちを殺すか、生死二つが別れの鐘、入相までに、

彌九　どうしたと、

丑松　きつと來るから待つて居ろ。

トきつと見得、聖天の入りし誂への合方になり、丑松無念を忍び花道へ逸散にはひる。門弟皆々後を見送り、

彌九　鼻柱の強い奴だが、我等を見てぶる〱顫へ、尻込みなして逃げて行くとは、口程でもない弱い

奴だ。

伊四　これなる札賣七兵衞や、世話役二人が留めぬなら、もう今頃は彼奴が身體は、粉微塵になるところ、

門一　留めたを機にこそ〳〵と、

同二　無念を忍んで歸つたは、

同三　よく〳〵命は惜しいと見える。

同四　これに附けても先生の、

彌九　お腕前には向う見ずの、彼等も辟易、

門弟皆々　いたすと見える。（ト是れにて七兵衞世話役も安心して、）

七兵　いや、何にしろ無難に濟み、こんな目出度いことはないが、是れといふのも先生方に恐れて兄イも行つたと見えるが、

世一　先きも名うての遊人、もしや再び仲間を集め、

同二　若し仕返しに來はせぬか、あゝ又それが、

三人　心配でござりまする。

彌九　いや〳〵、口では仕返しに來るなど〻申せども、何で再び手出しがならう、何は格別今日は思つたよりは大入にて、

伊四　勸進角力に劣らねば、此の悦びに先生へおねだり申して二三日は、夫のお馴染の大口樓で、何れも一杯やるといたさう、それにつけても先生へ、

門弟四人　今の喧嘩の納りを、

彌九　逐一お話し申したければ、世話役衆も一緒に來やれ。

三人　そんならお供をいたしませう。

門弟四人　然らば御兩所。

彌九伊四　さゝ、御同道、(ト袴の塵を拂ふを道具替りの知せ、)仕らう。

ト唄になり、皆々よろしく此の道具廻る。

(上州屋見世先の場)――本舞臺四間の間常足の蹴込み、上手一間障子屋體、軒に山形に上の字の印の紺暖簾を掛け、正面上の方一間中仕切間平戸の戸棚、この前に帳場格子眞中に暖簾口、下手一面の板羽目、これに質物の帳面を掛けし書割り、いつもの所門口、この外井筒の印の附きたる路地口、

下手黒塀、總て下谷長者町上州屋見世先の體。帳場格子の内に傳右衞門着流し前垂掛け番頭にて帳面を調べ居る、平舞臺よき所に音助着流し前垂掛け、手代にて流れの質物を調べ居る、此の脇に丁稚長松入質を片脇へ積み上げ質札を讀上げて居る、此の模樣角兵衞の鳴物にて道具留る。

長松　千三百四十五番、元金二分三朱市次郎、十兵衞四ツ入り青梅給羽織一枚、（ト讀上げる、傳右衞門帳面へ合判を押す、）千三百四十六番、元金三分二朱百藏、千助紬立縞女小袖一枚、外に二百文入替捨利の貸なり。（トよろしく讀上げる、傳右衞門帳面へ合判を押すことあつて、）

傳右　こりや〳〵長松、合判を押した分は、藏へ持つて行つて來い。

長松　へい〳〵畏まりました。（ト件の入質を持ち暖簾口へはひる。此の内音助流れの質物を調べることあつて、）

音助　もし番頭さん、まだ此の質は八ケ月だから、流すには早うございます。

傳右　いや〳〵八ケ月なら流れの口ぢや、元利を持つて請けに來ても、出して遣つてはならぬぞよ。

音助　何處の質屋でも、二ケ月位は待つてやるは當り前だ。

傳右　いや〳〵そんな猶豫をしては質屋渡世は飯が喰へぬ、然しこんなに番頭が家の身代を延してあげても、後家御さまは只の一度優しい詞を掛けてはくれず、剩さへ娘御を屋敷から下げて此のわしと妻さうとはなさらないで、聟穿鑿をさつしやるゆゑ、遂にはこんな騷動が起り、親類寄つて無

駄評定、はてさて馬鹿げたことだわえ。

晋助　そんならいよ／＼この質は、流れの口でござりますか。

傳右　わしが承知だ流してしまへ。（ト此の時奥より長松盆と采配を持ち、和藤内の身振にて出來り）

長松　南無三、質が流れた。（ト聲色を遣ふ。）

傳右　えゝ喧しいわえ、何ぞといふと芝居の眞似をして、汝のやうな奴は、ぺい／＼役者にでもなってしまへ。

長松　誰がぺい／＼役者になるものか、おいらは市川團十郎の弟子になるのだ。

傳右　どうして／＼おのれなどが、團十郎の弟子になられるものだ、團右衛門の弟子が相應だ。

長松　誰があんなでく／＼役者の、弟子なんぞになるものか。

晋助　これ／＼長松どうしたものだ、番頭さんに利いた風な口答へをしては濟まないぞ。

長松　お袋さんの所へ這ひこんで、油を取られた恥かき番頭、何の構ふことがあるものか。

傳右　うぬ、とんだことをぬかしあがる。（ト立掛る、爰へ奥より以前の新之助お元出來り）

しげ　若し番頭さん、お袋さまがお呼びなされます、ちよつとおいでなされませ。

傳右　お袋さまがお呼びなされずば、捨て置く奴ではなけれども主と病是非がない、此の餓鬼め記えて

居ろ。（ト暖簾口へはひる。）

新之　これ長松どん、今奥で聞いて居たが、あんなことを口へ出して、お前が言つては濟まないよ。

長松　それでも本當のことだものを。

新之　假令實のことであるとも、お店を預かる番頭さんに猥なことがあつたといつては、お家の暖簾に拘るゆゑ、決してこれから言ひなさんな。

晋助　おゝ、こりや新之助のいふ通り、お袋さまの恥になるから、世間の人に喋るなよ。

しげ　ほんにそれゆゑお袋さんが、御親類方へ聞かせまいと奥でお案じなされますから、御用はなけれど番頭さんを、わたしが奥へやりましたわいな。（ト奥より以前の傳右衞門棕櫚箒を持ち出で）

傳右　さあ長松、今の事をもう一言、この番頭に言つて見ろ。

長松　おゝ、言はなくつてさ、彈かれ番頭の助平番頭、

傳右　うぬ、さうぬかせば、

ト外へ逃出す長松を傳右衞門追廻す、此の内花道より河内山宗俊好みの道行振、誂への木刀をさし出來り、直に舞臺へ來り、傳右衞門を留めながら内へはひる。

や、誰かと思へば、

皆々　河内山さま。
宗俊　年端も行かぬ小僧を捉へ、大人げない番頭どの、いつたいこりやどうしたのだ。
長松　番頭さんが夜這にいつたのを、わしが知つて居りますから、
傳右　又そんな噓をつくか。
宗俊　さういふことなら河内山が、爰で調べを附けてやらうか。
傳右　いえ、決してそれには及びませぬ。
宗俊　及ばぬことなら番頭どの、まあ下に居るがよい。
ト無理に坐らせる、これにて長松は暖簾口へ逃げてはひる、新之助茶を汲んで出て、
新之　お茶をお上りなされませ。（ト宗俊茶碗を取つて、）
宗俊　同じ小僧でも、今のと違つて、此の子は大層おとなしいね。
しげ　新之助どのは學者の忰、育ちが違ひまするから、おとなしうござります。
傳右　して河内山さんには、何しにお出でなすつた。
宗俊　當家へ何しに參るものだ、質物を置きに參つたのだ。（ト合方きつぱりとなり、）
傳右　して、お置きなさる品物は。（ト是れにて宗俊差してゐる木刀を出し、）

宗俊　これを取つて貰ひたい。（ト傳右衞門に渡す、取つて見てふめぬといふ思入あつて、）

傳右　刀劍類はふめぬ内にも、取分け是れは桑の木刀、目貫が無垢でもあることか赤銅の二疋獅子、ふゝめる所がございませぬが、いくら貸せとおつしやります。

宗俊　たんともいらねえ、五十兩貸して下せえ。

皆々　えゝ。（トびつくりする。）

宗俊　着類と違つて刀劍は質屋ではふめぬものだが、假令桑の木刀でも、此の河内山の名前が附けば伽羅の木刀も同じこと、淸く五十兩貸してくりやれ。

傳右　はゝゝゝ、御酒機嫌か存じませぬが夜見世で買へば、五匁目か銀一兩で買へる木刀、御常談にも程がございます。

宗俊　これ〳〵番頭何を申す、手前常談は決して言はぬ、斯う見えても紀州家から拜領した此の木刀、生涯流せぬ代物だから、五十兩貸してくりやれ。

傳右　何處から拜領なすつたかそこの所は存じませぬが、高の知れた其の木刀、質物にはふめませぬ。

新之　河内山さまが五十兩貸せとおつしやいますからは、あの目貫が後藤家の作彫ではございませぬか。

吾助　いや〳〵そんな物ではない、番頭さんの言ふ通り直をよくふんで一分か二分、三分と貸せぬ木

刀だ。

宗俊　いや假令ふみは違ふとも、河内山の魂とも思つて居るこの木刀、五十や百の端た金で、流しはせぬから貸してくりやれ。

傳右　何だといふと河内山だの宗俊だのとおつしやいますが、お坊主衆のお仲間では貴いお名か存じませぬが、私共へござつては權兵衛八兵衛同樣に、二人名前で質札へお名前の附く置主仲間、お顏づくでは貸されませぬ。

宗俊　それではどうでも貸せぬといふか。

傳右　お貸し申すことは出來ませぬ。（トきつぱりいふ、宗俊思入あつて、）

宗俊　さて〳〵話せぬ番頭だ、後家御に逢つて頼まうから、女中奥へ案内をしてくれ。

しげ　いえ、ちと取込みがござりまして、御親類のお方々がおいでなされてゞござりますれば、

新之　宗俊さまのお頼みでも、奥へはお通し申されませぬ。

宗俊　そち達までが同じやうに、因業なことをいふか。よいわ、河内山が自身に行つて、主人の後家に談判せう。

しげ　いえ〳〵、お通し申されませぬ。

宗俊　え丶、邪魔をせずと、退いて居ろ。（トきつとなる。此の時奥にて、）

まき　そのおいでには及びませぬ、只今それへ參りまする。（ト合方になり、奥より以前のおまきお元附添ひ出來り、下に居て、）これは河内山さま、ようおいでなされました。

宗俊　いつもながら御壯健ぢやの。

まき　いえも、苦勞をいたしまするせゐか、年ばかり寄りまして、とんと意氣地はござりませぬ。

もと（前へ出て、）旦那樣久しうお目にかゝりませぬが、いつもながら御機嫌ようお目出度う存じます。

宗俊　おゝ以前居たお元どのか、五年ばかり逢はなんだがお前もいつも達者で、いゝ女房振りになられたな。

もと　御奉公いたして居つたも此の間のやうでござりましたが、もう悴がこのやうに大きな形になりましたから、嘸更けましたことでござりませう。

宗俊　いや〳〵お前でも後家御でも、以前にさつぱり變りはない。

傳右　もし宗俊さま、いくら油をお掛けなすつても、五十兩は貸しませぬよ。

まき　えゝ、年甲斐もなく控へて居ぬか。（トきつと言ふ、これにて傳右衞門後へ退る。）只今奥で承はりますれば、何か私へ直々にお談じがござりますとのこと、取込みさへござりませねばお通し申しま

すれど、

もと　生憎今日はお内々に取込事がござりまして、御親類方がおいでなされ、御相談がござりますので、お袋さまもお前樣へお氣の毒だとおつしやつてゞござります。

まき　只今元が申します通り、取込みゆゑにお談じを承はつて居られませねば、今日はこの儘にお歸りなされて下さりませ。（ト是れにて宗俊思ひ入あつて、）

宗俊　むう、親類衆を呼集め相談をなされるとは、その取込みはどんな事だな。

まき　その取込みと申しまするは、お前さまも御存じの娘の藤がことにつき、思ひ掛けぬ心配が出來ましてござりまする。

宗俊　思ひ掛けぬ心配とは、もう年頃に器量は好し、男でも拵へて逃げたとでもいふことかな。

まき　いえ、左樣ではござりませぬ。

宗俊　然らば、九死一生の大病でゝもござるかな。

まき　さあ、病煩ひで亡なりますれば、壽命づくともあきらめまするが、

もと　お痛しやお孃さまは、御奉公先きで餓死をなされますのでお袋さまが、お歎きなされてゞござりまする。

宗俊　それは何ういふ譯あつて。（ト合方きつばりとなり）

まき　御存じでもございませうが、四歳以前に娘の藤を松江樣へ傳手があつて、お小姓奉公に上げましたが、殊の外に首尾もよく悦んで居りましたが、此の三月宿下りに參りました其の節に承はりますれば殿樣が、御執心にて時によりお戲れ遊ばすと聞いては心に掛りますゆゑ、お屋敷へ歸りし後お暇を願ひし所お聞き濟みがございませず、それのみならず表向き妾に上げよと奥向きの、お役人からお勤め受けお斷りに詮方なく、實は三月宿下りに參りし節に聟を極め、既に證を取交せば、最早主ある身の上とお斷りを申せしかど、更にお聞入れがございませぬ。

もと　剰へお袋さまがお屋敷へおいでなされましても、お上の御用が多いゆゑ母に逢はせる暇もないと遂に一度お逢はせなされず、幾度お文を上げましても中途で隠す者があつてか、御返事とては更になく、承はればお宿への使ひは封じてあるとやら、やう〳〵此のほど仲のよい御朋輩のお宿へ來た、お文の中にお孃さまのお文が封じ込んであつて、先きから屆けてくれましたお文で、御殿の委しい事が分りましてございまする。

宗俊　して、其の文に記してあつた、奥向きの樣子といふは。

まき　測らず屆いた娘の文、取る間遲しと見ますれば、殿の仰せを背きしとて御老女の岩崎どのが、一

間の內へ押籠めて晝夜共に張番附け、朋輩にさへ逢はせぬ程の憂き目に逢うて居るゆゑに死する覺悟で居るとの文體、狹い心の一途に迫り、ひよんなことでも仕はせぬかと、夜の目も合はぬ親心。

もと　どうがなしてと存じますれど、名におふ先きは御大身、上と下ゆゑ齒も立たず、御親類方をお呼びなされ、今御相談最中ゆゑ、あなたをお通し申しませぬ。

傳右　かゝる混雜の中ゆゑに、今日はこの儘にお歸りなされて、

皆々　下さりませ。（トこれにて宗俊思入あつて、）

宗俊　さて〳〵それは氣の毒千萬、如何に手前勝手な大名だとて、餘りといへば不法な仕方。して、親類打ち寄つて、娘を無事に取り戾すいゝ工夫が附いたかな。

まき　最前から打ち寄つて種々相談いたしますれど、これぞと申す好い工夫も未だ附きませぬでございます。

新之　若し、おつかさん、河內山さんはこんな事にお馴れなされておいでゆゑ、お願ひ申しては何うでございります。

もと　ほんにそなたの言ふ通り、あなたは女出入などを、よくお扱ひなされますが、お孃さまを取戾す

御工夫はございますまいか。
宗俊　その娘を取戻す工風は何の造作もないが、失禮ながらこなた衆は八はい豆腐や目刺鰯の惣菜ばかり喰つて居るから、其の工夫は附くまいて。
もと　それではあなたは常不斷、おいしい物をあがるゆゑ、好い御工夫が附きますか。
宗俊　それはこなたが云ふまでもない、年が年中上綺羅で大々名へ出入をして、上等の物を食して居れば、又分別も上等のよい工夫が幾つも出るて。
もと　あなたへお願ひ申しましたら、取戻しが出來ませうか。
宗俊　強て好みもいたさぬが、賴むとあらば河内山が、直取り戻して進ぜます。
トこれにておまき嬉しき思入にて、
まき　さういふことでございますなら、どうかあなたへ取戻しを、お願ひ申したうござりまする。
宗俊　何といつても先は大名、容易なことでは行かぬから、元手のかゝる仕事だが首尾よく行つた其の上で、禮は幾ら下さるな。
まき　さあ、其のお禮は何程でも、あなたのお氣に入るやうに。
宗俊　いや氣に入るやうにと言つたとて、堅氣な人の了簡では大した金が五兩か十兩、後で兎や角言ふ

のは面倒、おれが方から切出さう。

まき　さうしてお禮の、

もと　お望みは。

宗俊　先づ頼まうと思ふなら、最初手附に百兩渡し、首尾よく娘を屋敷から取戻した其の上で、後金の百兩と、都合で禮が二百兩なら、受合ひ仕事で頼まれよう。

まき　それではあなたへお頼み申せば、

もと　お禮は前後で二百兩、

傳右　途方もない高い禮だ。

宗俊　それで高いと思ふなら、達てとは勸めぬが、千兩出しても頼まれ手は恐らく外にはありますまい、三間間口の居附地主、家藏から地面有金まで讓る娘の命代り、二百兩では安いものだ。

傳右　何の安いことがあるものか、こんな高いものはない。（ト お元思入あつて、）

もと　もしお袋さま、番頭さんはあゝおつしやれど、去年お亡なりなされました旦那さまが此のやうに御丹精なされましたも、お一人のお孃さまにお讓りなさる思召し、金を惜しまず河内山さまへお頼みなされました方が、よろしからうと存じまする。

新之　お跡取りのことなれば、二百兩が三百兩でも、命は金に替られませぬ。
傳右　えゝ、子供のくせに默つて居ぬか。（ト叱り附ける、おまき思入あつて、）
まき　成程お元のいふ通り、金を惜しんで殺しては、あの世の夫へ濟みませぬ、無事に命が助かりまして戻りさへいたすことなら、何分お賴み申しまする。（ト立たうとするを、）
傳右　あゝもしお袋さま、ちよつとお顏を。（ト目まぜで思入あつて、おまきを下手へ連れて來る。）
まき　何ぞ用か。（ト傳右衞門小聲にて、）
傳右　何だではござりませぬ、あの河内山に欺されて百兩といふ金を、たゞお取られなされますか。
まき　何と言やる。
傳右　はて、白無垢鐵火と評判の、河内山ではござりませぬか、今もいまとて碌でもない木刀を持つて來て五十兩貸せと云ふゆゑ、取込みを幸ひ追ひ歸さうと思つた所へ、お前さまがおいでになつて、お孃さまのお話しから取戻しを受合つて、うまく〳〵百兩借りて行くを、太いとお思ひなされませぬか。
まき　それぢやといつて、取り戻す、外に手段がござらぬわいの。
傳右　なに、ないことはござりませぬから、私へお任せなされませ。（ト宗俊の側へ來り、）いやなに宗俊

さま、只今お頼み申さうとお袋さまがおつしやつたが、ちつと外に思ひ附いた好い工夫がござりますれば、先づ百兩の手附の方はお斷り申します。（ト宗俊思入あつて、）

宗俊　年來の懇意ゆゑ娘の命を二百兩で請合うては見たものゝ、いはゞ劍の刄渡りに唯の者には出來ねえ仕事、それを内々横合から水をさして斷るのを一文惜しみの百損とやら、どうで鹿尾菜に油揚の惣菜などをうまがつて喰つてゐる了簡では、二百兩はさて置いて百兩の禮も出し難からう、聞けば奥にも親類が大勢寄つて居るさうだが、みんな鹿尾菜に油揚連中、ふるつた智慧も惣菜ぢやあ碌な工夫も附くまいから、僅かな禮をかなしんで大事の娘を殺すがいゝ、はて氣の毒な事だなあ。

ト宗俊悠々と立上り門口の方へ行きかける。此の時暖簾口より清兵衛羽織着流しにて出て、

清兵　あもし、河内山さま、暫くお待ち下さりませ。（ト皆々清兵衛を見て、）

もと　あなたは和泉屋、

皆々　清兵衛さま。

宗俊　それぢやあこなたは親類の、

清兵　へい、私は當家の後見和泉屋清兵衛と申す者、委細は奥にて承はりましたが、御親切なるお心添へ、ちよつとお禮を申し度く、お止め申してござります。（ト眞中へ住ふ。）

宗俊　同じ鹿尾菜に油揚でも、話せさうな人物だ。（トよき所へ住ひ、）これは〳〵清兵衛どのとやら、さて御心配なことでござるな。（ト合方になり、）

清兵　それに附いてあなたさまへ改めてのお願ひは、どうか無難に娘をば取戻します御工夫を、なされましては下さりませぬか。

宗俊　そりや只今も申す通り、禮の所さへ御承知なら、頼まれて進ぜませう。

清兵　承知の段ではござりませぬ、仰せの通り當金百兩、いざお受取り下さりませ。

　　ト、懐より金を出さうとするを、傳右衛門留めて、

傳右　あゝもし清兵衛さま、百兩質に貸しますれば安利で兩に一匁、又錢質にした日には何十兩といふ利息の、上る金をばむざ〳〵と。（ト言ひかけるを、）

清兵　えゝやかましい、默らつしやい。（トきつと言ふ。）

傳右　へい。（ト控へる、清兵衛思入あつて、）

清兵　これが住所も定らぬ遊人か何ぞなら危ぶむといふ事もあるが、練塀小路で隠れのない御數寄屋衆の宗俊さま、百や二百の金位で後指をさゝれるやうな、みつともないことをなされうか、そんな目利の仕様では、この末共に質見世の番頭役は勤まるまい。（ト是れにて傳右衛門むつとして、）

傳右　いやもし淸兵衞さま、憚りながら私も十一歲からこちらの家へ丁稚奉公に參りまして、年季も首尾よく勤めあげ、旦那さまのお眼鏡で番頭になつた白鼠、稼業に掛けては是れまでに尻尾を出したことのない傳右衞門でござります、目利違ひとおつしやりますが、何が目利違ひでござります。

まき　これ〳〵傳右衞門、何うしたものだ、女世帶に何事も淸兵衞さまへお願ひ申せば、もと御後見の事なれば旦那さまも同じこと、あなた次第になされませ。

傳右　それだといつて、

まき　はてまあ、默つて居やといふに。

トきつといふ、是れにて傳右衞門控へる。此の內淸兵衞懷より百兩包を出し、

淸兵　假令目利が違ふとも、こつちの家へ迷惑の掛らぬやうに百兩は、この淸兵衞が出して置かう。

まき　それをこなたに出させては。

淸兵　はて、お藤が戾つた其の上で、こなたの手から貰ふ氣ゆゑ、まんざら損もしない積りだ。

宗俊　然らばこなたが、其の金子を。

淸兵　手附にお渡し申しますれば、何分共に娘が身の上。（ト金を宗俊の前へ出す。）

宗俊　承知いたした、譬にもいふ善は急げ、是れから直に支度に掛り明日と思へど手都合で、若し延び

たらば明後日までに、きつと息女を取戻し、お家へ連れて參るでござらう。

もと　流石はお内のお後見清兵衛さまのお頼みで、河内山さまがお受合ひなさいますれば大丈夫、

新之　明後日までにはお孃さまが、お歸りなさるでござりませう。

清兵　さうなつたらばどの位、

晉助　嬉しいことで、

皆々　ござりませう。

まき　何分共に吉左右を、お待ち申して居りまする。

傳右　然し、どうやらあぶなもの。

宗俊　若し又これを仕損じたら、再びお目には掛りませぬ。

傳右　來る度毎に無理ばかり、實はおいでのない方が。

まき　あゝこれ、又そのやうな餘計な事を。（ト此の内宗俊件の金を懐へ入れ、木刀をさし門口へ出る、）

清兵　左樣なれば、

まき
もと　河内山さま、

宗俊　必ず心配さつしやるな。

ト門をしめる、唄になり宗俊花道へ行き、腕組をなし考へる思入にて花道へはひる。

傳右　到頭百兩お爲めごかしで、衒り取つて行き居つた。

もと　又しても其のやうな、憎まれ口をきかしやんすか。

まき　餘計なことを言やらずと、奥のお客のもてなしに。

傳右　畏まりましてござりまする。

しげ　左樣なればお袋さま、

音助　この音助も共々に、

傳右　どれ、御挨拶をして來ようか。

ト合方角兵衞獅子にて、傳右衞門先きに音助おしげ附いて奥へはひる、おまき帳場の引出しより百兩を出し、

まき　清兵衞さま、只今のお立替有難うござります。（ト金包を出す、）

清兵　いや、この金はお藤どのが、首尾よく家へ戻つた上、改めて受取りませう。

まき　いえ〳〵それでは濟みませぬ、口ではあんなに請合へど、娘が安否も十が九つ。

もと　それではあなたは宗俊さまを。

新之　お疑ひなされまするか。
まき　さあ首尾よく戻れば煎豆に、花ぢやと思うて居るわいの。
清兵　成程女の御了簡では其のお疑ひもございませうが、世の譬にも言ふ通り悪に強きは善にもと、向うが名うての悪黨だけ、まんざら人の笑ひ草になるやうなことはしますまい。
もと　清兵衛さまのおつしやる通り、斯ういふことには事馴れし宗俊さまが受合ふからは、何か覺えのあることゝ存じますれば明後日までに、お孃さまを取戻しお連れなされるでござりませう。
まき　さうなつたらばどの位、嬉しいことか知れぬわいの。
清兵　いやお元どのは遠方ゆゑ、もう歸られたらようござらう。
もと　宿でも案じて居りますれば、お暇いたすでござります。
新之　家へお歸りなされたら、おとつさんへ此のことを、
もと　今日の土産に話しませう。
清兵　幸兵衛どのにも久しく逢はねば、宜しく言うて下さりませ。
もと　申し聞かすでござりまする。
まき　それでは、明後日、

もと　お伺ひに。（ト辭儀をするを道具替りの知らせ、）

ト唄になり、新之助辭儀をする。お元思入よろしく此の道具廻る。

（天神境内の場）――本舞臺元の湯島の道具、爰に以前の七兵衞、おせん立掛り居る、大拍子にて道具留る。

せん　もし七兵衞さん、さつきの喧嘩はあれ限りで、もう押しては來まいかね。

七兵　いや〳〵相手の丑松は、爰等で名うての遊人、あれぎり默つて居はしまい、破落戸仲間が尻押しで今に押して來るだらう。

せん　ほんに押して來られたら、こつちも負けぬ門弟衆、忽ち爰で大喧嘩、こりやそろ〳〵と今のうち見世を片附けて置きませう。

七兵　おゝそれがいゝ〳〵、早くそこらを片附けなせえ、おれはそこらまで樣子を行つて見て來よう。

せん　もし仕返しに押して來たら、早く知らしておくんなさいよ。

七兵　おゝ合點だ〳〵、どれ行つて見て來ようか。

ト大拍子はた〳〵にて、七兵衞花道へ走りはひる。おせんは茶見世へはひろ。三味線入り大拍子にな

り、花道より以前の宗俊出來り、花道にて、

宗俊　思ひがけねえ上州屋から、とんだ重荷を背負ひ込んだが、それに附いて直次郎に相談せうと湯島へ寄つたら、昨日出たきりまだ家へ歸らねえといふからは、三千歳の所に流して居るか、先づ新吾の方へ先へ行つて、萬事を賴んで置かうと思ふが、根岸も家に居ればいゝが。（ト右の鳴物にて舞臺へ來り、建札を見て、）今日は金子が劍術會、大層人が出たさうだ、今矢場のおゆみに聞いたが、催主の市之丞と山崎町の丑松が、喧嘩をしたといふことだが、如何に血の氣が多いといつてよく喧嘩をする奴だ。

トよろしく思入、ばた〳〵になり、花道より以前の七兵衞走り出來り、

七兵　大變だ〳〵、今に大喧嘩が始まるから、富の札を片附けよう、何にしろ大變だ〳〵。

ト七兵衞の件の富の札の箱などを片附ける、宗俊思入あつて、

宗俊　なに、大喧嘩が始まるとは、して相手は何處のものだ。

七兵　こつちの相手は試合場の催主の金子先生、今こゝへ押して來るのは、山崎町の丑松兄ィで、さつきの喧嘩の仕返しに破落戸仲間が押して來ます。あれ〳〵、もう向ふからやつて來ます〳〵。

宗俊　むゝ、そんなら今矢場で聞いた喧嘩に枝がさいたのか、そいつは斯うしちやあ居られねえわい。

ト ばた／＼になり、上手より左司馬神主にて、仕出し四五人附いて出來り、

神主　これ／＼七兵衛どの、爰へ喧嘩に押して來る、人數は大凡幾人ほどだな。

七兵　何でもしかとは知れませんが、今途中で見掛けたのは、拔身をもつて五六十人、向う鉢卷で押して來ます。

神主　それは何しろ大事だ、そんな喧嘩が始まつては第一お社の不緣起ゆゑ、誰か留めてくれゝばよい。

ト 此の內仕出し皆々宗俊を見て、

仕出　やあ、あなたは塀練小路の、

皆々　河內山さま。（ト是れにて神主、七兵衛心附き、）

神主　おゝ此の騷ぎの混雜で、さつぱりお見反れ申した、あなたが爰にお出でを幸ひ、仲裁をお賴み申すは、宗俊さまより外にはない。

七兵　もし旦那、人助けになる此の仲人、御迷惑でも押して來る、人數を爰で喰留めて、

神主　無難に濟むやう、河內山どの。

仕出　このお山に住む一同が、

皆々　お願ひでござります／＼。（ト よろしく賴む、宗俊是非なき思入あつて、）

宗俊　山崎町の丑松が、發頭人なら知つた顏、わしが爰で喰留めようが、喧嘩の相手の金子殿、門弟衆の出ぬやうに、お前達から留めて下さい。

神主　おゝ、それはお氣遣ひなされますな。

七兵　門弟衆は私共が、一生懸命に宥めます。

宗俊　そんなら、こつちは引受けた。

神主　何分、お願ひ、

皆々　申します〳〵。

トわや〳〵言つて、七兵衛神主仕出し皆々上手木戸の口へはひる、宗俊支度をする、三味線入り大拍子ばた〳〵になり、花道より以前の丑松先きに破落戸△○□◎、その外大勢、何れも遊人、向う鉢卷尻端折り跣足にて、思ひ〳〵の得物を持ち出て來り、皆々花道よき所に留り、

丑松　相手は金子市之丞、さつきの恥を雪ぎに來た、試合の小屋を、

皆々　敲きこはせ〳〵。（ト舞臺へ來る、宗俊手を開き、皆々をきつと留め）

宗俊　喧嘩の樣子はあらまし聞いたが、腹の立つのは尤もだが、爰で喧嘩を始めては多くの人の難儀になること、まあ〳〵おれに預けてくれ〳〵。

ト宗俊皆々をよろしく押戻し、きつと見得、大拍子の入りし合方になり、丑松宗俊を見て、

丑松　だれかと思へば下谷の旦那、折角お前の扱ひだが、さつきの遺恨の仕返しに、是非とも意趣を晴らさねえぢや、此の蟲がをさまらねえ。

△　留立てせずと、打捨つて、

○　思ふ存分、あの小屋を、

□　たゝッこはして兄ィの顔を、

◎　どうぞ立てゝ、

皆々　おくんなせえ。

宗俊　いゝや、一旦留めたからは、何で喧嘩にやられるものか、今打ち合をした日にやあ、本社をはじめ矢場水茶屋どんな難儀をするか知れねえ、相手に遺恨があるとても社内の者に遺恨はあるめえ、今日の喧嘩は不承でもおれに預けて歸つてくれ、顔の潰れるやうなことは、決しておれがしねえから、喧嘩は留手があるのが花。丑松おれが顔を立てゝ、此のまゝどうぞ引いてくりやれ。

丑松　外の事なら旦那のこと、何でも厭とはいはねえが、今日ばッかりは堪忍して下せえ。

△　顔に拘はるこの喧嘩、

○ 相手が劍術遣ひだけ、
□ 恐れて止したと言はれては、
◎ 仲間の者へ面汚し、
丑松 留めずにやつて、
皆々 おくんなせえ〳〵。（ト行かうとするを宗俊留め）
宗俊 これほど言つても手前達は、おれが言ふことは聞かれねえか。
丑松 お氣の毒だがこればかりは、お前の顏を立てられねえ。
宗俊 むゝ、おれが詞がきかれずば、手前達の勝手にしろ。
丑松 そんならやつて、
皆々 くんなさるか。
宗俊 おゝ、遣つてやるから丑松は、おれを殺して喧嘩に行け。
丑松 殺せといつても罪のねえ、何で旦那を殺されよう。
△ そんな事は言はねえで、此のまゝやつて、
皆々 おくんなせえ。（ト合方きつぱりとなり、宗俊こなしあつて）

宗俊　いゝや一旦留めた喧嘩、おれが死んだら知らねえこと、生きてゐるうち一寸でも先きへやつては顔が立たぬ、達ていやだといふのなら、おれから先きへ殺して行け。
丑松　詰らねえことを言ひなさんな、負けるか勝つかそれよりは喧嘩の様子を見物して、おれが死んだら馴染甲斐に、跡で骨でも拾つて下せえ、留めずと早くやつて下せえ〳〵。
宗俊　いゝや爰は通されねえ、行くならおれを殺して行け。
丑松　何でお前が殺されよう。
宗俊　そんならおれが顔を立て、無難に爰を歸つてくれるか。
丑松　それだといつて此の儘に。
宗俊　否なら殺すか。
丑松　さあそれは。
宗俊　歸つてくれるか。
丑松　さあ、
宗俊　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。

宗俊　肚胸を極めて返事をしやれ。
　　　トきつと言ふ、是れにて丑松皆々と顔見合せ是非もないといふこなしあつて、
丑松　あゝ仕方がねえ、誰が留めても引くめえと思つた張も旦那の仲人、不斷の義理に柵んで否と言はれぬ人助け、殺せと體を突附けられては、こりやあ引かにやならねえか。
△　不斷お世話になるおら達、
○　爰は一旦お顏を立つて、
□　旦那に免じて此の儘に、
◎　不足を言はず、
皆々　引きませう。
宗俊　それぢやあおれの言ふことを、聞いて此の儘引いてくれるか。
丑松　旦那に免じて、
皆々　引きませう。（ト是れにて宗俊ほつと思入）
宗俊　そりやあ何より忝けない、引くなら直に引いてくれ。
皆々　あい。（ト皆々顔見合せ、引き兼ねる思入、宗俊こなしあつて）

宗俊　さあ引け。
皆々　あい。
宗俊　さあ〳〵〳〵。（ト皆々を花道の方へ押戻し、きつと見得。丑松是非なき思入にて）
丑松　そんなら旦那のお顏を立つて、此の儘一同、
皆々　どれ、引かうか。
ト右の鳴物になり、丑松先きに子分一同思入あつて、わや〳〵言ひながら花道へはひる、宗俊皆々の跡を見送り、
宗俊　あゝ向う見ずな奴等だなあ。
トほつと思入、この時上手より以前の神主、七兵衞先きに仕出皆々出來り、
七兵　練塀小路の旦那のお蔭で、すんでのこと大喧嘩に、ならうとしたも無難で濟み、
神主　お社はじめお山中が、大仕合せをいたしました、これと申すもあなたのお蔭、
皆々　有難うございます〳〵。（ト禮をいふ、宗俊思入あつて）
宗俊　何の禮には及ばねえ、折よく先きの丑松を知つて居たから穩におれが留めて歸つて行つたが、外の者ぢやあどうして〳〵、おれの手ごツちには及ばぬ所だ、然し相手の金子氏へは、神主殿から

いゝやうに此の失禮を詫びて下せえ。(ト此の時上手、大戸の内にて、)

市之　いや、其のお詫には及び申さぬ、それへ參つて近附旁々今のお禮を申すでござらう。

宗俊　さう言ふ聲は、

皆々　金子先生。

ト合方きつぱりとなり、上手より以前の市之丞先きに彌九郎、伊四藏門弟四人附いて出來り、床几に掛け、

市之　豫て御高名は承はつたが、お目に掛るは今日始めて、拙者は金子市之丞、以後お見知り置かれ下さりませう。(ト市之丞丁寧に挨拶する、宗俊も一禮なし、)

宗俊　手前も貴殿の御雷名疾より承知はいたし居れど、御緣がなくて尊顏を拜すも同じく今日が始めて、どうぞ此の後御別懇に。

市之　いゝや其の儀は拙者より、貴殿へ願ふがこれ順道、何はさて置き今日は、そこ許のお扱ひにて、既に喧嘩と相成るべきを、事なく濟みし身の大慶、厚くお禮を申し上げます。

宗俊　すりや私が不束な其の扱ひに御不足なく、貴殿も御承知下さるとか。

市之　何で不足がござらうぞ、只一旦の張合で、大人げもない互ひの爭論、相手が爰へ押寄せなば、餘

儀なく刄に血を塗りて人の難儀となる所、貴殿のお蔭で何事も、丸く納まる今日の喧嘩、何しに不足に思ひませうぞ。

彌九　すりや先生の言はるゝ通り、我々とても怒りに任せ、町人どもと侮りしが彼れも名うての遊人、

伊四　喧嘩をなさば双方に、怪我のあるのは知れたこと、さすれば折角集つた包み物も茶々ふうちや、

一　其の上いつも道場で、打たれる竹刀の瘤と違ひ、

二　眞劍勝負の白刄の中、切つ張つをいたしては、

三　疵でも負はゞ一生涯、片輪にならねばならぬところ、

四　そこを無難にお扱ひ下されたので命の親、

市之　返す／＼も宗俊どの、お禮は詞に盡し難し、拙者厚くお禮申す。

ト宗俊これを聞き感心の思入あつて、

宗俊　あゝ流石は名うての金子氏、事を好まぬそれでこそ眞の武士の志し、相手は知れた遊人、喧嘩をしても五分々々に兩成敗とは行かぬ御身分、そこを思つて不承でも此の河内山が扱ひを、不足に思はず勘辨なし、其の上ならずそれ程に御賞美あつては仲裁に、入つたわしが痛み入ります。

七兵　お顏の賣れた旦那方ゆゑ、分りも早くお互ひに花を持たせる御挨拶、實に感心いたしました。

神主　男は當つて碎けろと、これからどんな騷ぎになり、此のお社はいふに及ばず、人の難儀になることかと心配したも故なく相濟み、こんな仕合せなことはござりませぬ。

市之　何は格別、某も、お近附の爲め松金屋で、どうか一獻差上げたければ、御苦勞ながら河內山どの、平においでを願ひたうござる。

宗俊　その思召は忝ないが、これから火急な用事があつて、根岸まで參らねばならぬ用を抱へて居れば、何れ近日金子氏お近附になりませう。

市之　御用とあらば又重ねて、

宗俊　ゆつくり一獻汲みませう。

市之　然らば此のまゝ、（ト市之丞床几を立つた木の頭）

宗俊
市之　お別れ申さう。

ト宗俊市之丞辭儀をなす、門弟皆々宗俊へ辭儀をなす、七兵衞、神主は感心の思入、この模樣よろしく、本社の時の太撥の音にて、

ひやうし幕

二幕目

吉原大口入口の場
同三千歳部屋の場
日本堤金杉路の場

〔役名――河内山宗俊、片岡直次郎、金子市之丞、大口の寮番喜兵衛、黒暗の丑松、大口の番頭九兵衛、比企の用人出住太九藏、按摩丈賀、遣手お熊、若い者太助、近半の若い者佐助、臺屋の若い者佐良八、駕籠舁二人。大口の抱へ三千歳、通ひお針お元、番新千代春、新造千代川、同千代山、丈賀悴清賀、小按摩峰山、同榮昌、禿みどり。〕

（大口見世先の場）――本舞臺一面の朱塗りの大格子、上手九尺の入口、是れにて大口と記せし柿の暖簾、上下板塀の張物にて見切り、下手たそや行燈、中央に床几二脚並べ、總て江戸町大口見世先の體、爰に清賀着流し下駄がけ小按摩の裝にて、上手に杖を振上げ、下手に峰山榮昌同じく小按摩にて杖を持ち、清賀を打たうといふこなし、是れを若い者太助臺屋佐良八の兩人中へはひり留めて居る、此の見得太鼓入りの騷ぎ唄にて幕明く、

太助 佐良　まあ、お互ひに勘辨しろ〳〵。

清賀　厭だ〳〵、この廣い往來で避けもしねえで突當り、挨拶なしに行きやあがるから、それで二人を相手にするのだ。

太助　これさ、それが悪い、其の突當つた二人の者もやつぱり同じ盲人のこと。
佐良　惡い氣で突き當つたのぢやあねえ、盲人同士で仕方がねえ。
峰山　それ故こつちもさつきから、譯をいつて詫びるのに、
榮昌　承知しねえでおれの天窓を、瘤の出るほど打ちやあがつた。
清賀　當り前だ、でいし宿からもぐりに來る、手前達に籠められては、默つて此の儘引つ込まれねえ。
峰山　なに、引込まれねえとは、
榮昌
峰山　どういふ譯だ。
清賀　憚りながら斯う見えても手前達とは譯が違ひ、この吉原ぢやあ顏の賣れた、丈賀といふ按摩の悴、どこの見世へ呼ばれても花魁衆の部屋へ行けば、療治は二の次ぎおへゝらへゝらへえで人に知られた清賀といふ親代々の盲人だぞ、面を探つて覺えておけ。（トきつと思入。）
峰山　丸ツ面の巾着野郎と不斷話しに聞いて居たが、おへゝらへえと親父を權に豪勢なことを言つて威張り散らすが、
榮昌　手前のやうな世間見ず、吉原育ちの按摩と違ひ、先づ深川は言ふに及ばず宿場々々の夜明しまで、顏を知られた此の二人、

峰山　御託を吐くのも、

峰山
榮昌　程があるわ。

清賀　おゝ、いゝかげんにしろ、懲らしてやらう。

ト杖を振上げるを、太助佐良八止める、爰へ暖簾口より千代山新造の裝にて出來り、

千山　もし清賀さん、花魁が待つて居るから、早く療治に來ておくれよ。

清賀　はい今行きますが、此奴と喧嘩をして行きます。

太助　これさ、それが惡い、三千歳さんが呼びなさるから、千代山さんと一緒に行きねえ。

佐良　然し毎晩廓へ來て、互ひに出合ふ按摩同士、爰で仲直りをして行くがいゝ。

清賀　仲直りは仕度くねえが、そんなに言つておくんなさるから、爰は一番我慢しませう。

峰山　喧嘩をすれば一人と二人、負けッこはねえけれど、

榮昌　それぢやあ二人がおとなしくねえから、爰で仲直りを、

峰山
榮昌　するとしよう。

佐良　それぢやあ印に、手を拍て〱。（ト按摩三人手を拍ち、）

千山　これで花魁も安心しなさんせうね。

清賀　けんくわ泰平、奥で安心でござりませう。

太助　悪く洒落るぜ、早くお部屋へ行くがいゝ。

佐良　こつちも是れから揚屋町へ、道具を揚げに行かにやあならねえ。（ト清賀小按摩二人に向ひ、）

清賀　おい、今度はすひとんを奢つて遣るぜ。

峰山
榮昌　うまく言つて居やあがる。

ト　やはり右の鳴物になり、千代山清賀の手を引き暖簾口へ、小按摩兩人は呼びながら下手へはひる。

太助　今日は感應寺の富の突日だが、とんだ縁起のいゝ所から、一番臺附を附けようか。

佐良　按摩が三人突當つて、當るといふ辻占だから、こいつあ三の小目に限るぜ。

太助　小目くらで一緒につけてくんねえ。（ト太助懐より額銀を出して渡す。）

佐良　それぢやあ、これから行つて來るぜ。

太助　一番圖星にやつてくんねえ。

佐良　おつと承知だ。

ト流行唄になり、佐良八下手へはひる、此の唄にて暖簾口より喜兵衞紺半纏股引鋏を持ち、更けたる植木屋のこしらへにて出來り、

喜兵　太助さん、今日は晝から大分忙しいの。
太助　情人筋の客が多いので、居續けが大分あるのさ、喜兵衞さん、煙草休みかね。
喜兵　今まで中坪の掃除をして居ましたが、ちよつと息休めに一服やりに出ました。
太助　まあ爰へ掛けなさるがいゝ、（トこれにて喜兵衞煙草を呑みながら床几にかける、）ときに、つかぬことを聞くやうだが、こつちの家へお針に來るお元さんの外、こなたの娘はもう外にないのかね。
喜兵　いえわしの子といふのは、お元の弟に半七と申す悴がありますが、これは子供の時分より神田橋外で島屋といふ大商人へ行つて居ますが、仕合せと評判よく、もう一昨年で年が明き、それから一年一年と今年までも禮奉公、まあ一廉の手代でございます。
太助　それは何より樂しみだ、さういふ息子があるなれば、末始終は安樂だ。
喜兵　いやもう、これさへ家へ歸りますれば一つの安堵でございますが、まづそれまでは此方のお家の、入谷の寮番でございます。
太助　內の寮も田圃のかけはらひ、嘸寒いことだらうね。
喜兵　花魁方でも出養生にお出でなさる時はよいが、不斷は老爺たつた一人、火の氣もろくにございませぬから、たまつたものぢやあございませぬ。

ト流行唄になり、花道よりお元世話女房のこしらへ、前垂掛、駒下駄にて小さな風呂敷包みを抱へ出來り、花道にて向うを見やり、

もと　おゝ父さん、そこに居なさんしたか。

喜兵　おゝ娘か。（トおもと直に舞臺へ來り）

もと　今日はお見世の仕事にかえ。

喜兵　丁度今中坪の掃除をしまつて歸るところ、しておぬしは何處へ行くのだ。

もと　お前にちつと用があつて、入谷のお寮へ行きがけに、ちよつと內證へお寄り申さうと思ふ所でおい。

太助　何の用か知らないが、今日は家も忙しいから庭の掃除もいゝ加減にして、其の用を足しなさるが目に掛り、いゝ都合でござんした。

喜兵　御親切に有難うござりまする。

太助　お元さん、ゆつくりと話しなさるがいゝ。（ト右の唄にて太助暖簾口へはひる、喜兵衛思入あつて、）

喜兵　まお何はさておき聞きたいは、幸兵衛どのゝ病氣はどうぢや。

もと　さあ、其の病人のことに附き、お前にちつと相談があつて、入谷へ行かうと思つた所、父さんま

あ聞いて下さんせ。（ト合方になり）やう〳〵其の日を送つて居るお前の耳へは入れともなけれど、内の人の長煩ひもう半年の餘になれど、これぞといふ驗もなく稼ぎというては此のお見世へ、わたしが通ふお針が當て、それもどうやらかうやらに、おいらん衆の仕着を貰ひ、又はお客の綻びと、餘分なことのある時は此の身につけず口直しや、又暖かなものを買ひ、家へ持つては行くもの、段々詰る痩世帶、つい一月が二月と溜る家賃とお醫者の藥禮、こればつかりは返さにやならず、據ろなく此の間高い利息のお金を借り、一遍片は附けたれど利に利が嵩んで此の末は、どうしようにも仕方なく、途方に暮れてこの事をお前に話し何れぞか、お金を五兩借りたいゆゑ、其の相談に來たわいな。

喜兵　其の入譯を聞かぬ先きから、半年餘りの看病に、定めし困つて居るだらうと、胸に忘れた間はなけれど、何をいふにもおれとても三年あとに婆あに死なれ、跡は僅かな月雇ひに、掃除がてらの入谷の寮番、よしんば旦那に譯を話し、前借を願つた所が五兩といつてはむづかしいが、言はぬ時には金も出來ず、こんな困つたことはない。

もと　いつそのことに島屋に居る弟へ話したことならば、出來ないものでもないけれど、惡い耳を聞かせともなし、とあつて此のまゝ置くときは、返濟方の當てもなし。

喜兵　何ぞいゝ智慧がありさうなものぢや。（ト兩人ぢつとこなしあつて、）おゝ思ひ附いた〳〵、おれが不斷小遣ひ取りに仕込んで置いた小鉢物、あれを集めて賣つたなら、所詮丸々出來ずとも半金ぐらゐにならうから、まあ案じずに居るがいゝ。

もと　それぢやというて父さんが、折角丹精なさんして、ほまちになさる代物を、

喜兵　何の他人のことぢやなし、身に掛つた此の場の難儀、まあ案じずと待つがいゝ。

もと　それでもどうも、

喜兵　はて、いゝといふに。

ト此の前より、後へ九兵衛羽織着流し、大口の番頭のこしらへにて窺ひ居て、此の時前へ出て、

九兵　喜兵衛どの、今旦那が離れの茶の間で尋ねて居た、早く行つてあげて下さい。

喜兵　つい長煙草をいたしまして、申譯もござりませぬ。これ娘、必ず待つて居るがよいぞ。

ト合方になり、喜兵衛九兵衛に會釋して奥へはひる。

もと　どれ、わたしもちよつとお家へ寄つて。（ト上手へ行かうとするを、）

九兵　おい〳〵お針、ちよつと待ちな。

もと　何ぞ御用でござりまするか。

九兵　さあ、用があるから呼んだのだ。
もと　して、何御用でござります。
九兵　まあ、爰へ掛けるがいゝ。
もと　はい。（ト合方きつぱりとなり）
九兵　今後で聞いて居れば、お前達親子して、五兩なければ難儀をすると、困つて居る樣子だが、其の金を出してやらう。（トお元びつくりなし）
もと　え、すりやあなたが親子の難儀を、
九兵　さあ、僅か一月二分の寮番、緣日もの、小鉢物で其の日の呑代稼ぐといふ、そのなけなしの餘祿もので、都合を仕ようと言ひなさるのは、如何にも聞いて氣の毒だ。（ト紙入より金を出し）さあ、これを取つて間に合せなさるがいゝ。
もと　すりや、本當に貸して下さりまするか。
九兵　なに、貸すのぢやない、たゞやるのぢや。
もと　え、そりやまあ何ゆゑ。（ト九兵衞四邊へ思入あつて、）
九兵　實は、お前に惚れたのだ。

もと　え。(ト合方替つて、)

九兵　おぬしがお針に來た時から、ぞつこん惚れたこの九兵衞、そりやあ體は人並よりちつと大きい生れだが心は至つて優形、今差掛つた五兩の金、間に合せるも有りやうはほの字れの字の二つ文字、うん、と承知をしてくれゝば五兩は愚十兩でも、難儀を救ふ法もある、まあ此の金を受取つて、いい返事を聞かして下せえ。(トお元の前へ金を出すを突戻し、)

もと　何の御用と思ひの外、わたしのやうな穢いものを、お捉へなされて番頭さん、大抵常談にも程のあること、思召しは有難いが、それはお斷り申します。

九兵　なに常談を言ふものか、男が齒から外へ出して、嘘を言ふ筈がない、これお元どん、此の金取つておれの言ふことをうんと言つて聞いてくんねえ。(ト九兵衞お元の側へ寄るを飛退き、)

もと　もし番頭さん、好い加減にしなさんせ、わたしは亭主持でござんすぞえ。

九兵　そりや今聞かずとも、疾うより話しに知つて居るが、斯う言出した上からは、一度とは言はないお元どん、たつた一度だ、うんと言ひねえ。(トお元の袖を引くを、)

もと　えゝも、好かない番頭さん、どうぞ放して下さんせ。

九共　そこをどうか。

ト又捉へようとする、爰へ暖簾口より丈賀按摩の装にて、日和下駄にて探りながら出來り、此の中へはひり、

丈賀　間男見附けた、其處動くな。(ト前へ出る。)

九兵　えゝびつくりした、誰だと思つたら丈賀さん、悪い常談をする人だ。

丈賀　そりや此方で言ふせりふ、亭主持のお針を捉へ、番頭さんこそ悪い常談、若し御亭主に聞かれたら七兩二分でござりますぜ。

九兵　所が誰に聞かれても、正直正銘の彈かれ番頭、七兩二分出す謂れはない、然しそれが倍増しでも、そこに絲目は決してないが、丈賀さん、取持つてはくれまいか。

丈賀　金を澤山出しなすつても、此の療治は出來ますまい、それよりやつぱり川岸か角町でお遊びなさるが大丈夫、こりや思ひ切りものでござります。

九兵　お前までがちや〱を入れて、何だか相談がむづかしいわえ。

ト九兵衛腕組をなす、爰へ暖簾口より禿出來り、

禿　番頭さん、旦那がお呼びなさんすよ。

九兵　今直行くとさう言つてくんな。

丈賀　さうおつしやらずと、早くお出でなされませ。
九兵　それはさうでも、もう一と談じ、
丈賀　はて、無駄な時を移さずと、
禿　早くお出でなんしよ。（ト引張る。）
九兵　えゝ子供までが邪魔をしやァがるか。
　　ト流行唄になり、禿九兵衛を引張り暖簾口へはひる。お元跡を見送り、
もと　よい所へ丈賀さん、お蔭で助かりましたわいな。
丈賀　肩を揉むには幅つたい、按摩も好かない九兵衛さん女の好かう筈がないが、成程譬に言ふ通り、
臭い物身知らずとは、今のことであらうわい。
もと　お世話になるゆゑ逢ふ度に一寸脱れにして居れど、實に辛うござりますよ。
丈賀　辛いといへば今後でお前の話しを聞いたれば、五兩の金が入るといふが、若し差支へなさるなら、
色氣でなしに慾の方で、貸して上げるがどうでござるの。
もと　すりや丈賀さんが御親切に、お金を貸して下さいますかえ。
丈賀　いや決して親切に言ふではない、慾に目のない此の丈賀、五兩一分の三月縛り、天引三分が御承

知なら、直間に合して上げませう。

もと　さういふことなら幸兵衛に、話しましてお願ひに上りまする。

丈賀　何時でもいゝから來なさるがいゝ。（ト此の時奧にて、）

禿　丈賀さん、遣手部屋で待つて居るよ。（ト此の聲にて丈賀思入あつて、）

丈賀　はい／＼直上りまする。それぢやあお元さん、何時でもさういひなさるがいゝ。

もと　わたしも內證へ行きますから、手を引いて上げませう。

丈賀　これは憚り、

　トやはり右の唄にて、お元丈賀の手を引き奧へはひる。引違へて九兵衛見返りながら出來り、

九兵　金が五兩入る所から、口說き落さうと思ひの外、慾張り按摩に邪魔をされ、出來かゝつた色も出來ず、こんな馬鹿げたことはねえ。（ト四邊へ思入、平舞臺のお元の落せし簪へ心附き取上げ見て、）此の簪はお元のかんざし、それぢや今おれが引張る時、逃げるはずみに落したのか、せめて是れでも拾つて置かう。

　ト紙入へ入れる。誂へ廓の騷ぎ唄になり、金子市之丞羽織着流し大小、跡より太九藏同じこしらへ、佐助茶屋の若い者にて附添ひ出來り、

市之　山住氏御覽じろ、この里ばかり月夜かなと、世間は淋しい霜枯も、五十間から大門を入ると兩側この賑ひ、實に爰は別世界だ。

太九　如何にも貴殿の仰せの通り、如何なる石部金吉でも爰へ參るとふら〳〵と遊ぶ心になるのが色里、然し此の間の初會のやうに、枕の番は仕度くない。

佐助　生憎お初會の節は落合ひまして、お氣の毒でならないと、花魁からのお言傳でござりました。

太九　はゝあ、左樣なら今晩は、埋合せが出來ようかな。

佐助　そこは私が大請合ひでござりまする。

ト右の唄にて皆々舞臺へ來る、此の内太助出來り、九兵衞と兩人にて出迎ひ、

九兵　これは金子さま、大層お早うございました。

太助　先程よりお待兼ねでござりまする。（ト此の内市之丞床几へかけ、）

市之　疾うに是れへ參る筈を、觀音の奧山でぶら〳〵いたして大きに手間取り、思ひの外遲くなつた。

太九　して申し附け置きし、座敷はあらうな。

太助　お約束でござりますから、ちやんと退けてござります。

佐助　今晩こそはしつぽりと、此の間のお入合せでござります。

九兵　先生方も昨日は、湯島の試合へ御出勤で、大層な大入でござりましたな。
市之　左様に申されては身共甚だ面目ないが、あれは元天神へ奉納にいたさうと、門弟中と企て始めた所が、角力同樣諸家からの見物で、殊の外の賑ひであつた。
九兵　勸進角力と事替り、目新らしい思ひ附き、我も〳〵と參りますので、實に怖いやうでござりました。
市之　其の藏入の金錢を斯樣に每夜遊里へ參り、遣ひ散らすもありやうは、當家の抱へ三千歲を我が手活の花にせんと、身請けの相談いたしたいからぢや。
九兵　そりやもう每度御贔屓になる金子さまのお望みゆゑ、幾重にも親元へ掛合ひまして、きつとお手に入れまする。
市之　して、彼れが親元は、何者ぢやな。
九兵　實親は疾うになくなり、伯父の判で參りましたが、所は山谷熱田の向うで魚賣の藤五郎と申す者でござりました。
市之　次第に依らば親判ぐるみ、引取るまいものでもないから、よく先方へも話してくりやれ。
九兵　さういふ口なら親元でも、必ず承知いたしませう。
太九　女は氏なくして玉の輿と、此の相談が整ひなば、先づ神影流で二とは下らぬ金子氏の御新造株、

扨々羨ましい儀でござる。

左助　山住さまもあなたに負けずに、お相方をお身請なされては如何でござりまする。

太九　初會の時の樣子では、身請けする氣にはなれまいわい。

九兵　まあ何にいたせお座敷もあるし、花魁もお待兼ね、

佐助　さ、お早くお上りなされませ。

市之　いや、餘り待兼ねる方でもなからう。

太九　いえ、待人を掛けて居りました。（ト市之丞思入あつて、）

市之　大方それは。（ト太九藏を見返るを道具替りの知らせ、）人違ひだらう。

九兵
太助　まあ、いらつしやいまし。

トこの模樣よろしく、吉原雀にて道具廻る。

（二階廻し座敷の場）――本舞臺一面の平舞臺、上手一間附屋體、これへ唐紙閉切り、正面通しの櫺子窓、下手一間塗骨障子屋體、續いて廊下の片遠見、此の内二階の上り口、總て大口二階廻し座敷の體、よき所に六枚屛風　夜具蒲團を置き、此の上に直次郎着流し平ぐけ好みのこしらへにて火鉢に寄

添ひ、前に臺の物を置き散らし、番新千代春、新造千代川の兩人酒の相手をして居る、ずつと下手に以前の禿火鉢にて酒の燗をして居る、此の模樣端唄にて道具留る。

千春　みどりどん、お燗は出來たかえ。

禿　あい〳〵。（ト燗徳利を持つて來る。）

千春　さ、お燗のいゝのを一つお上んなんし。（ト直次郎酒を呑みながら。）

直次　昨夜の酒が惡いので、天窓が重くて起きられず、到頭今日も流してしまつた。

千川　生憎お客が落合つたのでおいらんも來る間がなく、どんなにじれつたがつて居なさいました。

直次　流行ッ子とはいふものゝ、何時來ても五つ六つの廻しはかゝさず、お負に今日も名代座敷、これで床の番をすりやあ立目はねえ。

千春　そんな甚助がましいことを言ふのは、そりやあ並のお客のこと、おいらんだつて腹の內はどんなに來たいか知れないけれど、片廻りをすれば遣手衆と內證の前へ惡いから、我慢で外へ行きますのさ。

千川　その替り今日は一日、わたし共の名代で、外の座敷はいゝやうにしますから、長くおしげりなさんせいな。

直次　へえ、おつゥ油を掛けやあがるが、口のやうに行きやあい〻が。

千春　行かなくつてどうしませう、それに今日は晝の內から、花魁の好かないお客が、近半から來て居ますから。

直次　む〻、近半から來た客といふのは、大方金子市之丞だらう。

千川　さあ、それ故直さんも名代座敷で、とんだお相伴でござんすねえ。

直次　それぢやあ三千歲は、金子の座敷か。

千春　いえ、おいらんの爲めになる草加の客が歸るので、今送り出すところでござんす。

直次　道理で顏を見せねえと思つた。

ト端唄になり、二階の口より三千歲部屋着のこしらへにて出來る、この跡よりお熊の遣手更けたるこしらへにて附き出來り、

お熊　もし〳〵おいらん、ちよつと顏を貸して下さい。（ト是れにて兩人下手へ來り、）

三千　何ぞ用かえ。

お熊　外のことぢやァありませぬが、此の間お前さんに借りて上げたお金の期月が遲れたので、矢の催促をされますが、どうか都合は出來ますまいか。

三千　どうといつて今は出來ぬが、もう少し待つて貰つておくれ。
お熊　そんならまる〳〵出來ずとも、半金も出來ますまいか。
三千　其の半金も今といふうては所詮手許で出來ないから、今歸つた草加のお客に、少し無心を言つたから今度來るまで待つて下さんせ。
お熊　さういふことならどのやうにも、先方を延ばして置きますから、どうぞ急いで下さいまし。
三千　來次第に直ぐ渡すよ。
お熊　先がやかましいから、きつとお賴み申しますよ。
三千　あいといふにさ。
お熊　きつとようござりますね、あゝそれで落着いた。
ト右の唄にてお熊廊下口へはひる、三千歲跡を見送りほつと思入あつて、直次郎の側へ來り、
三千　直さん、一つ呑ましておくれ。
直次　呑まねえ酒を、珍らしいの。
三千　呑まない酒も無理に呑まねば、ほんに體が續かぬわいな。
ト直次郎の猪口を取る、千代川酌をし三千歲呑む、千代春思入あつて、

千春　おいらんがおいでなら、これから金子さんの座敷へ行つて、いゝやうに言つて置くから、
千川　昨夜の愚痴をお互ひに、並べたつて言ひなまし。
千春　おいらん、愚痴の言ひッくらで、
千春
千川　お樂しみでありますねえ。
　トやはり右の唄にて、兩人に禿附いて下手へはひる。跡直次郎三千歳殘り、
三千　お前よく待つて居てくれたね。
直次　待つたといふ譯でもねえが、昨夜の酒の持越しで、とう〳〵今日も流したが、今聞いて居れば遣手のお熊が、豪勢やかましいことを言つて居たが、怨靈の催促か。
三千　鑑定通り、こなひだ借りた百兩の催促さ。
直次　むゝ、それぢやあおれの使つた金か。
三千　それで嚴しく言はれるのさ。
直次　あの百兩も殖さうと思つてかゝつた其の晩も、西丸下の御厩ですつかり取られて仕方なく、お前までに難儀をかけたが、實に此の節のやうぢやあ仕様がねえ。
三千　わたしの方も此の頃では、お前ゆゑに爲めになる客も段々なくしてしまひ、無心を言ふ先きもな

く、自分の金か知らねえが遣手衆の催促に、其の外呉服屋小間物屋貸本屋にまで借りが出來、所詮これでは凌ぎ切れず、つい無理酒も呑むぢやあないか。

直次　さういはれると面目ないが、話しを聞けば此の頃は、金子が近く來るさうだが、苦し紛れだ仕方がねえ、無心を言つちやあどうだらう。

三千　あの人なら直にも出來るが、其の代り身請けをすると、必ず言ふに違ひなし、それゆゑどうも言はれぬわいな。

直次　それぢやあどうにも法が附くめえ。

三千　さ、それゆゑわたしや極めたのさ。

直次　なに、極めたとは。

三千　死ぬと極めたわいな。

直次　え。（トびつくりする、三千歳四邊へ思入あつて）

三千　さうは覺悟をしたものゝ、わたしや一人は氣がきかないから、お前一緒に死んでおくれ。

直次　てりやあ死ぬめえものでもねえが、いつてえ何で死ぬ氣になつた。

三千　そりやあ言はずと知れたこと、借金ゆゑに身動きも出來ない所から死ぬつもりさ。

直次　それぢやあ金ゆゑ死なうといふのか。

三千　さうさ。

直次　金ゆゑ死ぬなら、おらあいやだ。

三千　なに、いやだとえ。（ト替つた合方になり）

直次　この結構な世を捨てゝ、死なうといふのは野暮堅い、廓育ちの世間見ず、小さな了簡にも程がある、それとは違つておれなどは、まだすつぺがしの時分から附合ふ友が組屋敷、御家人仲間のすたれ者、悪いことには染み易く、あすこへ行け此處へ行けと一文子から仕込まれて、目も分らねえ盆くらも其處が譬の習ふより馴れた廓の五丁町、打つと買ふとに身を崩し、今ぢやあ立派な遊人、今日ひつてんで顫へて居ても、一晩うんと儲けて來りやあ一夜分限の大旦那、僅かな金の其の爲めに大事な命を捨てた日には、儲ける種を玉なしだ、おぬしももつと氣を大きく、そんなしみつたれな心を出すな、おらあ死ぬのは眞平御免だ。（トよろしく思入。）

三千　わたしだとて何も求めて、死にたいこともないけれど、據なく死ぬ氣になり、お前を同伴に賴んだが、遺繰さへ附くことなら、少しも死にたいことはない。

直次　さあ其の遺繰も今といつちやあちつとのことも出來ねえが、どうか少しも種が出來れば、何處か

で一番取附く積りだ。

三千　それを待つのも空なはなし、慥に出來る金子さんへ賴みたいにも此の身をば、任さにやならぬことゆゑに。

直次　それよりどこかで五十と百兩算段するが一の手だが、いゝ考へがありさうなものだ。

ト兩人思案のこなし、合方きつばりとなり、下手廊下の口より丑松羽織着流し、傳法なるこしらへにて出で來り、下手にて、

丑松　旦那居續けでございますか。

直次　おゝ、山崎町の丑松か。

三千　ようおいでなさんした。（ト此の内丑松下手へ住ひ）

丑松　此の間は次の間へぐつすり醉つて寐てしまひ、とんだおいらんの御厄介、どうぞ堪忍しておくんなせえ。

直次　その間の間へぶッ倒れたのも、大方了簡があつたのだらう。

三千　あれからといふものは、千代春さんが、うは〳〵と、用もろくに手に附かぬわいな。

丑松　浮名儲けはどつとしねえ。ときに旦那、その儲け口のことに附いて、お知らせ申しに參りました。

直次　おつウ用ありさうにごまかして、實は千代春に逢ひに來たのだらう。

丑松　いえ、ごまかしぢやあねえほんのこと、外のことではありませぬが、此の頃隆慶橋の比企といふ小屋敷で出來るのは、流石臺附の元なするだけ、銀張りだといふことを、慥に突留めて來ましたが、何と出掛けちやあどうでござります。

直次　そいつは何より耳寄りだが、さうして其處へ出掛ける手蔓は。

丑松　橋の袂の茶見世の婆あが、こいつが野引で進めますから、旦那拵へにごまかして欺されておいでなせえ。

直次　隆慶橋の比企といつては、小さくとも先きは旗本、こいつは金になりさうだ。

丑松　旦那、こりやあ判で押したやうだ。（ト三千歳思入あつて、）

三千　そんな旨い口が出來たら、今死ぬにも及ぶまいねえ。

直次　どうして〳〵死ぬ所か、これから一番生きかへる積りだ。

丑松　この矢先きでは、爰の座敷も、知らせた利益はなさゝうだ。

直次　はゝあ、金を借りてえのか。

丑松　實は友達が新丁で今喧嘩をしましたから、仲へ入つて口を利き播磨屋へ連込んで一杯呑まして置

きましたが、二把か三把の懐では心細い所から、三兩ばかりお借り申さうと、今のことを知らせながら參つたのでござりまする。

直次　そいつは悪い所だつた、知つての通りこつちも御難で弱り切つて居る所、おいお前、三分か一兩持つて居ねえか。

三千　死なうといふ位の所、どうして〳〵ひど身上さ。

丑松　なに、表でどうにか都合をしませう、其の心配には及びませぬ。

ト此の前より下手へ千代春出來り、

千春　そのお金はわたしが間に合せるから、丑さんこれをお使ひよ。（ト紙に包みし額銀を三兩渡す。）

丑松　それぢやあお前が、貸してくれるか。

千春　丁度三兩あつたから、直さんの代りにそれを使つて居ておくれ。

直次　丑松、また醉倒れざあなるめえぜ。

丑松　違えねえ。それぢやあ明日まで借りるよ。

千春　いつでもいゝから遠慮なくお使ひ、（ト丑松財布へ金をしまひ、下手へ行かうとするを留め、）あゝもし、ちよつと。

丑松　何だ。
千春　お金が出來たつて、そんなに急がずともいゝぢやあないか。
丑松　今播磨屋に待たしてあるから、
千春　それぢやあ晩の引過ぎに、
丑松　そりや承知して居らあな。
千春　きつとだよ。（ト背中を叩く。）
丑松　えゝ、うるせえな。
ト流行唄になり千代春附添ひ、丑松、直次郎に會釋して二階へはひる。兩人跡を見送り、
直次　千春代さんも丑松に、よつぽど惚れて居るやうだ。
三千　そりやあ傳法好きだから、あの人には限らない、誰にでも惚れるよ。
直次　そいつは羨ましいな。
三千　羨ましいもないものだ、二階中で惚れてる癖に。（ト三千歳直次郎を抓る。）
直次　あいてゝゝゝ、とんだちん〳〵だぜ。
ト十日惠比壽の合方になり、下手階子より以前の丈賀四ツ這ひに這ひながら、跡より清賀も這つて出

で來り、

清賀　父さん、何處で落したの。

丈賀　落した所を知つて居れば、こんなにやきもき捜しやあしねえ、其處が分らねえのだ。

清賀　さうよ、所分れば品分るだ。

丈賀　えゝ、洒落どころぢやねえわえ。（ト頻りと四邊を探り居る、直次郎この體を見て、）

直次　こう、あの形を見な、蜆ッ貝を足へ附けた紙でこせえた虎のやうだ。

三千　小按摩さんは今戸燒の蚊燻しのやうだねえ。（ト兩人笑ふ、清賀探りながら、）

清賀　こりやあ所詮知れねえから、おつかあを呼んで來よう。

丈賀　おつかあだつて目は一つだ、さう忽には知れやあしねえ。

三千　丈賀さん、何を落したのだえ。（トこれにて丈賀上手へ思入あつて、）

丈賀　終始持つてゐる紙入を落しました、

直次　それは困つたことをしなすつたの。（ト下手より以前のお熊太助出來り、）

お熊　落し物は知れたのかえ。

丈賀　いくら尋ねても一向に知れませぬ。（ト清賀顏を上げ、）

清賀　下ばかり向いて居たので、顔が腫れぼつたくなつた。
太助　どの間からどの座敷へ行く時だか、ちつとは當りがあるだらう。
丈賀　お針の部屋から此の奥二階の、小菊さんの所へ來る道で、落したのか取られたのか、どうも未だに分りませぬ。
お熊　どつちにしても紛失しては、二階を預かるわたしが濟まない、太助どんお針部屋を尋ねておくれ。
太助　はい〳〵畏りました。
ト太助階子の口へはひる。流行唄になり、廊下より以前のお元紙入を持ち出來り、
もと　丈賀さんが落しなさんした紙入は、これでござんすか。（ト出す、丈賀探り見て、）
丈賀　おゝ此の紙入でございます、どこに是れがございました。
もと　お針部屋の口にあつたゆゑ、今お熊さんに上げようと思つた所、もしやと思つて聞きましたわいな。
丈賀　それは何より有難い、まことに拾ひ物をいたしました。（ト紙入の中を探り見て、）や、大變〳〵中の金がなくなつた。
お熊　なに、金がない、して其のお金はいくらだえ。

丈賀　今日脇から歸つた金五兩、そつくり入つて居りました。
お熊　なに、五兩入つて居たえ。
もと　そりやまあとんだことでござんすね。
清賀　父さん、中をよく改めて見ねえ。
丈賀　いくら中を尋ねても、別に外にありやあしねえ。（ト此の内中を探りながら、お元の落せし簪を出し、）や、簪が一本ある、ちよつと見て下さい。（トお熊受取り、）
お熊　この簪が内にあれば、其の持主が詮議もの、よい手掛りが出たわいな。（トお元心附き天窓を撫で、）
もと　や、そりやわたしの簪、どうしてそれがその中に。
丈賀　なに、お針さんの簪だえ。（ト丈賀きつとなつて、いきなりお元にしがみ附き、）もし、それぢやあこなたが取つたのだな。
もと　めつさうな、何でわたしが其のやうなことを、
丈賀　いや〳〵それに違ひない〳〵、これ悴、そつちの方を押へて居ろ。
清賀　よし〳〵、死んでも放さねえ。（ト清賀お元の袂を捉へる。）
丈賀　これで思ひ當つたのは、さつきわしが見世先きでちよろりと喋べつた五兩の金、聞いて居たはこ

なたばかり、もう天の網で脱れぬから、どうぞ爰へ出して下され〱。

もと　五兩のお金のあることは、わたしが聞いたに違ひないが、何でそんな道に缺けた、さもしいことをしませうかいな。（ト此の內直次郎三千歲樣子を窺ひ居る、お熊思入あつて、）

お熊　そりやお前のいふのも一理あるが、又丈賀さんの疑ふは、現在この紙入から簪の出たのも不思議、それゆゑ疑ひもかゝる譯、外に手掛りもないことゆゑ、夢にも知らないことならば、きつとした證據をお見せ。

もと　さあ、それは。

丈賀　その言譯が出來ぬからは、何でも取つたに違ひない。（ト此の時階子の口にて、）

九兵　違ひないとも〱、其の證人はこの九兵衞だ。（ト以前の九兵衞太助附いて出來る。）

お熊　そんなら、お針の證人は。

丈賀　番頭さん、御存じでござりますか。

九兵　證據といつちやあ簪ばかり、然してつきりそれといふのは、さつき五兩の金に困つて親の喜兵衞と遣繰相談、どうでも出來ねえ貧乏人、途方に暮れた其の所へ、丈賀さんの親切話しに五兩と聞いて氣が替り、盜みをしたに違ひねえ、何とおれの鑑定は、外れッこはなからうの。

もと　そりや五兩の金に困り、父さんと相談はいたしましたが、お金を取らうなどといふ、そんなことは此の身に取り決して覺えはござりませぬ。

九兵　なに、ねえことがあるものか、えゝぐづ〳〵と面倒だ、植木屋を呼べ〳〵。（ト太助階子の口より、）

太助　おい、中庭にゐる喜兵衛さん、早く〳〵。

ト呼び立てる、合方きつぱりとなり、以前の喜兵衛汗を拭きながら出來り、

喜兵　委細は階子で承はりました、皆さま、まつぴら御免下さりませ。（トつか〳〵とお元の側へ寄り、）これ娘、おのれはまあ太い奴だな、どうするか見やあがれ。（トお元を引附け散々に打ち、）如何に貧に迫ればとて、人樣のものを盜むとは呆れ果てた根性だ、それだからさつきあれ程小遣取りの小鉢物を賣つても都合してやると、言つたのを忘れたか、此のことがお部屋へ知れゝばおれの窂番も明日からはもう扶持の喰上げ。（トほろりとこなしあつて、）路頭に迷ふもおのれの蔭、こんな親不孝な奴はありやあしねえ。（ト又打たうとするをお元留めて、）

もと　さあ、其のお腹立ちは尤もだが、假令この身をどのやうに折檻されたとて何で盜みをしませうぞ、そりや父さん、情ない、情ないわいなう。（トお元泣き伏す。）

九兵　成程盜人猛々しいと、眞實らしい空涙、こりや容易なことでは言ふまいぜ。

お熊　いつそ外の者への見せしめに、下へ行つて責めようかね。
太助　この廊下ではお客さまへ、おやかましくて濟まないから、いつそそれがようござりませう。
　　ト是れへ冠せて、
喜兵　そりや御尤もでござりますが、そこはどうか穩便に、只今私より申させますから、
九兵　そんなことをいつて居るより、どうせ憎がられるは合點だ、裸にして改めるがいゝ。
太助　おゝ、合點だ。（ト九兵衞、太助お元の帶へ手を掛けるを）
もと　どうぞ是ればかりは、御勘辨なされて下さりませ。
九兵　それぢやお爰で盗んだ金を、
丈賀　わしに返して下さるか。
もと　それぢやというて、覺えもない。
九兵　そんなら裸になつて見せるか。
もと　それはあんまり、
九兵　金を出すか。
皆々　さあ〳〵〳〵〳〵。

九兵　えゝ、褌まで引ッ剝いで見ろ、さうすれば役徳だ。いやなに、役目だから仕方がねえ。

ト皆々立ちかゝる、これを喜兵衛中へはひり、詫るをきかず、お元の手を捉へるを、始終直次郎三千歳窺ひ居て兩人囁き、直次郎立上つて此の中へはひり、双方を留め、

直次　まあ双方とも、靜にしなせえ。

丈賀　いや靜には出來ませぬ、そりや他人は構ふまいが金を取られたその當人、はい、此の丈賀は默つては居られませぬ。

直次　さうでもあらうが按摩さん、なるたけ穩便にするがいゝ。

丈賀　いや、出來ませぬな、目明が大勢寄つてたかつて、丈賀一人を籠めなさるとは、あんまりそでない仕方ゆゑ、言ふことを言はにやならない。

直次　それだから口を利くのだ、まあ靜に物を言ひねえ。

丈賀　それでも悔しくツてなりませぬもの。

直次　えゝ、靜にしなせえといふに。

丈賀　へえゝゝゝ。（ト丈賀不承々々に控へる、九兵衛皆々を宥め）

九兵　これは片岡の旦那さま、丁度あなたのお座敷の前で、嘸おやかましうござりませうが、かうして

皆々　仲へおはひり下さいました、其のお捌きは。どうなされますな。（ト直次郎思入あつて、）

直次　見込み違ひか盗人で、ねえものを調べなさるから。

九兵　え。

直次　それぢや、留めにはひつたのだ。

九兵　なに、盗人で、

皆々　ないとはえ。（ト合方になり、）

直次　此の盗人は外にあらう。（トきつと言ふ。）

皆々　え。

直次　とさあ、一から十まで並べ立て、言つてしまやあ簪の、鍍金も遂に剝げ易く、地金が出りやあお互ひに赤らむ玉の珊瑚珠、五分もすかねえお前達が捌きなさるを横合から、口を出すのもおせつけえだが、見兼ねて出掛けたこの扱え、今三千歳から借りて來た此の金足の簪を五兩の抵當に明日まで、按摩さんに預けるから、金が出來りやあ引替の仲へはひつた形代に、これで心をみがき上げ、綺麗に笑つてくんなせえ。（ト丈賀に三千歳の簪を渡す。）

丈賀　繁々おいでのお客さまとも、存じませずに盲滅法、あなたに惡口申しまして眞平御免下さりませ。かういふ抵當を受取りませぬでも、あなたとおいらんのお請合なら、これは決して入りませぬから、お戻し申して置きませう。（ト返す。）

直次　いや、何の中でも金錢は他人づくといふものだ、まあそれは取つて置くがいゝ。

丈賀　左樣なら明日まで、お預り申して置きまする。

直次　さあ、これからは皆の手合、このお針さんが盜んだにしろ、其の紙入へおのれが簪入れよう害はあるめえから、よく其處らを考へて、此の人ばかりを疑らず萬事に心を附けるがいゝ。又爺さんも一徹短慮、なんぼ我子と云ひながら疵でも附けたらどうしなさる、お前の娘が取らねえ事はおれがちやんと見ておいた、決して打つたり叩いたり、無暗なことをしなさんなよ。

　ト よろしく思入、喜兵衞お元涙を拭ひ、

もと　おやかましくはござりましたらうが、丁度こちらのお座敷の前が、私親子の身の仕合せ。

喜兵　一途に娘と存じまして、折檻はいたしましたが、あなたの仰せで成程と、又思案し直しまする。

もと　左樣なら品の出るまで、おいらんの簪を。

喜兵　お貸しなされて下さりませ。

直次　決して心配には及ばない、今此女から借りた簪も扱ふ日には金が出來れば花魁へ返してやるから
身に覺えもねえ無實の災難、明るくなつたら早く行きねえ。
ト直次郎懇に云ふ、九兵衞思入あつて、
九兵　いゝお扱ひのお客がはひり、親子二人は大助かり、此の金の間違ひも、うんとせえ言やさつきの
金、いやなに、金が敵の世の中ぢやな。
お熊　內輪で濟んでこのやうな目出度いことはござんせぬ、さもない時は二階廻しのわたし迄が掛り合、
然しお金の出ぬうちは、うつかり油斷は出來ぬぞえ。
太助　兎かういふ內灯りの支度、丈賀さんも稼ぎなせえ。
九兵　これは片岡さま。
皆々　大きにおやかましうござりました。
トやはり右の合方にて喜兵衞お元殘り、皆々二階へはひる。
もと　斯ういふことがござりましては、閾が高くこの後は、こなたへ上り難うござります。
喜兵　どうやら親子馴合のやうに、疑ひかゝつた此の體、共々出入りがあがらねばよいが。
直次　何のそれが取越し苦勞、こりやあ必定娘御に何か遺恨のある奴が、仕組んだ事に違えねえ。

三千　この後共に心を附け、若し何事かあつた時は、大抵二階に直さんが居ないことはござんせぬゆゑ、
直次　いつでもちよつと知らせなせえ。
喜兵　それ承はつて、
喜兵 もと　心丈夫になりました。（ト時の鐘鳴る。）
直次　ありや龍泉寺の入相か、おい爺さん、お前入谷へ歸るのだらうが、道まで娘を送つてやんなせえ。
喜兵　はい〳〵、左樣いたすでござりませう。
もと　左樣なら、お二人さま。
直次　よく氣を附けて行きねえ。（ト合方にて兩人二階の口へはひろ、これと一緒に下手よりお熊出來り、）
お熊　花魁、金子さんのお座敷へちよつと顏を出して下さいまし、やかましく言つて困りますよ。
三千　あい、今直ぐに行くと、さう言つて下さんせ。
お熊　その直ぐ行くも、何度ももう言盡しましたから、實に言譯に困ります。
直次　どうせ昨夜から床の番だ、爰に構はず行くがいゝ。
三千　えゝ人聞きの惡い、お前のことぢやあ幾らなぶられるか知れないよ。
お熊　ほんに、外のお客は、お察し申しますよ。（ト此の内三千歳仕掛を着て、）

三千　それぢやあ直さん、寐ずにおいでよ。

直次　どうして一人で、（トころりと横になるを道具替りの知せ、）寐ずにやあ居られねえ。

（ト臂枕にて寐る、三千歳又坐らうとするをお熊無理に引張る、この模樣神棚の鈴の音すがゝきにて道具廻る。）

（三千歳部屋の場）＝本舞臺眞中一間の床の間、續いて三尺の違ひ棚、この下腰張りの茶壁、上下一間の附屋體、下手屋體の內緣起棚簞笥の書割、總て三千歳部屋の體、爰に以前の市之丞住ひ、上下に燭臺を點し酒肴を取散らし、下手に千代川の新造佐助の若い者酌をして居る、ずつと下手に九兵衞住ひ、附屋體の內に以前の千代山長火鉢の火をおこし居る、此の模樣騷ぎ唄にて道具留る。

佐助　千代川さん、久しぶりで一番行きませう。

千川　へゝ、へぼの癖によしなさんせ。

佐助　いえ、太夫衆に稽古を願つて、なか〳〵負けなくなりました。

千川　例のづゝ拳はいけないよ。（ト佐助を相手に千代川藤八拳を打ち、佐助負ける。）それ御覽、ちつとも上りはしない。

市之　佐助に猪口をやれ〳〵。（ト九兵衞猪口をさすを、千代山留めて）
千山　いえ、この人はお酒を呑まうと思つて、承知で負けますから、お猪口を遣つてはいけませぬ。
佐助　いえ、さういふ譯ではござりませぬ、どうぞ頂戴を願ひます。
千川千山　いえ、やつてはいけませぬよ。（ト兩人爭ふを、佐助猪口を片手に持ち、千代川千代山を留め）
佐助　いや、何れもにはお構えあるな、頂戴一つでねえといふ、二つ三つの續け呑み、祝儀の働きお目に掛けん。こりややい佐ス公が呑み掛けた此の酒を、留められるなら留めて見ろえゝ。
　　トちよつと聲色をつかふ。
千川　大晉狂言氣があるねえ、とてものことに白粉を附けて、本式にして見たうござんす。
佐助　おゝその白粉で思ひ出したが、先程あなたが御持參の白粉を出しませうかな。
市之　おゝ二階の者へ遣はさうと存じ、取つて參つた白粉は、今度宗十郎町の田川謙三が賣出した藥白粉、廣めがてら二階中へ、その方より撒いてくりやれ。（ト此の内佐助白粉の包を出す。）
千川　それはまあ嬉しいね。
佐助　さあ皆さん、二階中へ撒いて下さい。（ト佐助千代川千代山三人にて白粉を撒き）皆さん、是れから使ひ屋さんに頼んで、爰で買つて上げてくんなましよ――。（トちよつと女形の眞似をする。）

市之　いや、御苦勞々々。

九兵　時に先刻御相談をいたし掛けました身請けの一件、折惡しく主人が留守にて金高が分り兼ねまするが、先づ凡そ三百兩と思召して下さりませ。

市之　そりや三百兩が四百兩でも、取極めればよろしいから、主人が戻らば相談してくりやれ。

九兵　畏りましてござりまする、それはさうと山住さまは、何處へおいでなされた。

佐助　大方お手水でござりませう。

千川　いえ〳〵さうぢやござりません、山住さんは小菊さんを、捜しにおいでなさいましたらう。

市之　爰へ遊びに來るものに、女の嫌ひなものはないが、我が門弟でも太九藏ぐらゐ、女の好きなものはない。

九兵　山住さまのお好きなのは、目尻で知れて居りまする。（ト此の時下手より太九藏出來り）

太九　ハックシヨ、誰か噂して居ると見える。

佐助　長いお手水でござりましたな、

太九　いや上り口の角の座敷で、幇間の藝盡しが、つい面白く見惚れて居つた。（ト市之丞の次へ住ひ、）手前の相方もまだ見えぬが、先生の相方三千歳を早く呼んで參らぬか。

佐助　はい、只今お呼び申して參ります。

ト佐助立ちかける、流行唄になり下手よりお熊の遣手三千歳を連れて出來り、よろしく住ふ。

太九　いや小菊の君が見えぬ先き、三千歳が參られたか、金子氏恐悅々々。

お熊　又例の癪が起つて、大きに遲なはりました。（ト三千歳市之丞の側へ住ひ、）

三千　ようおいでなさいました。（トいや〳〵挨拶する。）

市之　いや餘りよくも思はれず、厭がられに來るせるか、來る度每に癪々と、おれの方でも聞き倦きた。

三千　それはまあ、お氣の毒でござりますねえ。

市之　いや氣の毒なことはねえ、年中癪が起るとも直ぐに療治の出來るやう、おぬしを身儘にしてやる氣だ。

三千　そりや又どうして。

市之　おゝ、身請けをするのだ。

三千　え。（トびつくりして兩人顏見合せ、氣味合の思入、誂への合方になり、）

市之　當時廓の五丁町で人に知られたお職株、一といつて二とねえ三千歳、よしんば金を山ほど積んでも、この市之丞が身請けをなしおぬしを氣儘にさす心、そりや遊女の習ひにて言交した男とか又

間夫とかいふ者があるめえものでもねえけれど、身が執心にて廓を出さば誰が批點の打手もなし、さうなる時はそら癪も、いやさ、癪も苦界の勤めなく、花鳥風月音曲も雨の夜雪の樂しみに、過ぎ越し方の辛き身も昔語りに夜話しを駿河半紙の折鶴に、富士と筑波の女夫山、龜の萬年壽の長壽を松の島臺に行末長く暮さうから、苦しい癪も僅かのうち、心を丈夫に持つがいゝ。

太九 さうなる時は誰あらう、神影流の遣ひ手では人も及ばぬ金子氏の、御新造株になられるこなた、光り輝く鼈甲の其の挿物も金足か銀の燻しの芳町形、根掛は珊瑚ぎよく琥珀、櫛の蒔繪は松眠公、誰に押される氣遣ひなし。

九兵 先づ第一に先生の御新造になる其の時は、舅はなし厄介はなし門弟衆を取巻きに、氣隨氣儘の若隱居、そりやもう手元の御用なら、物は相談この九兵衞、賄方にも參る心。

お熊 夜毎に替るお客を取るより、うき川竹の勤めをのがれ、淸き流れの泉水に見晴すお庭の廣座敷、四季の花咲く別莊と、何でもいふ目が出る身の上。

佐助 月に一聲あれ時鳥、自由自在に聞く里は酒屋へ三里豆腐屋へ行かずとお內へ樽附けに、榮耀榮華の出來次第、斯ういふ口は又と外に、なさゝうやうに思ひますが、

太九 この結構な身請けの口へ、

九兵　御相談は、

お熊
佐助　どうでござりますな。(ト皆々勸める。三千歳思入あつて、)

三千　その御相談は、お斷りさ。

市之　なに、斷りとは。

三千　わたしのやうな賤しいものを、お歷々の金子さんがさういうて下さんすは有難いが、二世まで言交した男があるゆゑ、この身はどうも任されませぬ。(トきつぱりと言ふ、市之丞思入あつて、)

市之　すりや言交した男があるゆゑ、此の身請けは出來ぬといふのか。

三千　あいなあ。(ト是れにて市之丞むつとせしこなし、九兵衞見兼ねて、)

九兵　もし／＼おいらん、そりや惡い、勤めの內はどなたでも言交したとか、起請を取るとか、そりやあ世間の皆有りうち、身請けと極れば口約束や起請の反故は當り前、その御心配には及びませぬ。

ト言ふを冠せて、

市之　こりや／＼九兵衞、もういゝ加減にいたして置きやれ、是れほどまでに手を盡し、其の身の爲めを思つても、得心せねば仕方がない、斷るやうにいたして斷れ。

三千　え。

市之　いつぞや貸した百金を、只今返した其の上なら。
三千　いえ、お前に借りた覺えはないぞえ。
お熊　いえさうは言はせませぬ、いつぞや百兩直さんへお間に合したあのお金は、金子さんから出たの
でござんす。
三千　そんならあれは、えゝゝゝゝ。（トびつくりなす、合方きつぱりとなり、）
市之　さあ、今こゝにては返されめえ、二世と約束した男は言はずと知れた直次郎、高が場末の駒込で
大番同心の安御家人、取る扶持米も僅かゆゑ、板木を彫るか文庫を張るか、けちな仕事の内職を
しにやあ暮しの附かねえ奴。
太九　哀れな身分で吉原の大町へ遊びに來るとは、居るか居ねえか知らねえが、さりとは押しの強い奴、
無理算段ですつちやんを、度々やつてはとゞの詰り、金でも借らざあ追附くめえ。
市之　さあ、斯ういはれるが悔しくば、たつた今金を返すか。
三千　さあそれは。
市之　金が出來ずば是非に及ばぬ、賭場の歩きも同樣な直次郎に三千歲を、取られては武士が立たぬ、
それゆゑ身請けいたさにやならぬ。（トきつといふ。）

敵役皆々　おいらん、是れは考へものでござりますよ。

ト よろしく思入、三千歳ちつと俯向きこなし、此の時下手にて、

丑松　留めやあがるな、放せ〳〵。

ト 太鼓入り騒ぎ唄になり、下手より以前の丑松を千代春捨ぜりふにて留めながら出來り、

おい金子さんといふお客人、今お前が言ひなすつた、賭場の歩きとは誰がことだ。

ト 皆々丑松を見遣り、

市之　おゝ、そちは昨日湯島で逢うた、

丑松　えゝ、わつちやあ黑闇の丑松さ。

市之　むゝ、其の丑松なら汝が仲間の、片岡直次郎のことを申した。

丑松　なに、直次郎のことだ、よく言つた。

ト 片肌脱ぎ、立ちかゝるを千代春千代川千代山止める、是れを振拂つて市之丞へ立ちかゝるを、九兵衞留める、是れを毆り附け立ち掛るを太九藏前へ出で、刀の柄に手を掛けるゆゑ、

さあ切れ、切るなら切れ、まだ斷出しの青二才、一寸先きは黑闇と無法無體の渾名を取つた山崎町の丑松だ、下谷で一二の親分を賭場の歩きと言はれちやあ此の儘には通されねえ、手前を爰で

打ち殺すかおれが爰で切られるか、遣る所まで遣ッ附けて兄貴の恥を雪がにやあ、此の丑松の面が立たねえ、さあよくも歩きと吐かしたな。

ト太九藏を尻目にかけ市之丞へきつと思入、是れを九兵衞佐助捨ぜりふにて留めるを、

市之　こりや〳〵二才、まあ待ちやれ、そりや其の方共が親分と不斷崇める直次郎がことを聞いて腹を立つは、破落戸には感心だ、然し身共は侍だぞ、身分違ひの身を以て斷りもなく座敷へ踏込み、亂暴いたす其の時は、われは愚直次郎の、名前を汚すも同樣だぞ、そこらの廉を辨へてよく物を申すがよい。(ト悠々とこなし、)

丑松　二本さすから侍と口幅つたく言ふだらうが、いはゞ田樂同樣なにた山武士の喰せもの、昨日湯島の天神へ表向きでは奉納と、立派に出した建札の、種は花會同樣な矢場や茶見世へ切手を配り、何で金を集めなすつた、人の事よりそつちこそかすり取りぢやアあるめえか、かすり取りなら同格なうぬはやつぱりごろん坊だ。

市之　慈悲を加へて助けて置けば、よいかと心得惡口雜言、昨日湯島でわが一命助けくれたる恩を忘れ、犬に劣りし名さへ丑松、恥辱を受けぬ其のうちに、とつとゝ爰を下り居れ。

丑松　助けたとは何の事だ、既に命の遣り取りをする氣で掛つた其の所へ、練塀小路の旦那に止められ

無念を恢へ歸つたが、實は今日仕返しを、する氣で爰へ飛び込んだ。さあ、もう了簡がならねえぞ。

　　トきつとなるを、

太九　九兵衞、引摺りおろせ。
九兵
佐助　畏りました。さあ、立て。

　　ト太鼓入り騷ぎ唄になり、九兵衞丑松の手を取り下手へ出さうとする、是れを行くまいといふ立廻り、此の内市之丞へ打つて掛るを扇子にて丑松の眉間を打つ、是れにて丑松眉間を押へ、手に附きし糊紅を見て、

丑松　や、こりや打割つたな。もう了簡が。

　　ト三千歲女形皆々止めるをきかず立ち掛る、爰へ下手より以前の直次郎羽織着流しになり出來り、此の中へはひりて留め、

直次　これ丑松、靜かにしろ。
丑松　いや、厭だ、お前の恥だ、放して下せえ。
直次　いゝから、まあ靜かにしろ。

丑松　それでも此のまゝ。

直次　えゝ騒ぐなといふに。（ト丑松を無理に引据ゑる。丑松是にて額を押へ下手へ控へる。直次郎形を正し、下手へ手を支へ。）これはお歴々さま、始めて御目通りいたしますが、私はこれを世話いたします片岡直次郎と申す、元は場末の御家人上り、定めし申し過しもござりませうが、これが不調法は幾重にも私へお免じ下され、御勘辨を願ひまする。（ト詫びる、市之丞思入あつて合方になり。）

市之　かねて名前は聞及ぶ、貴公が片岡直次郎どの、成程見るから優形、この三千歳の惚れたのも實に尤もと思はるゝ。

太九　犬に劣りし丑松が、詫びをいたすは奇特な了簡、兎角女に好かれる奴は米搗扁蛋同様にあやまるものと見ゆるわえ。

直次　兄弟同様懇意にいたす、此奴が無禮をいたしますれば詫言するは當り前、どうぞ御了簡なされた上、これを御縁にあなた方へ、お近附が願ひたうござりまする。

市之　天神切つて下谷では音に聞えし直次郎、僅か二才の子分位で再應詫びをいたすなら、了簡いたして遣はさう。

直次　すりや御了簡下さりますか、それは有難うござりまする。（ト禮を言ふ。）

丑松　え丶、さうあやまるには及ばねえのに。

直次　默つて居ねえ。（ト丑松餘儀なく控へる。市之丞思入あつて、）

市之　先刻より餘程の間、どうやら座敷の興も覺めた、幸ひこれなる片岡に、近附ながら所を替へ、呑み直さうと存ずるが、何と同道してくれまいか。

直次　それはこちより願ふところ、何れへなりとお供仕りますが、然し當家の座敷の内で、

太九　む丶、こりやさうあらう、間夫と浮名を立てられし三千歳の側は放れられまい。

九兵　いえ、そればかりでなく片岡さまも、所替れば品替ると、他へお出掛けになる時は義理にもこちらが散財に。

佐助　嚢中手薄で行く時は、數多の中で恥辱ゆゑ、こりや體よくお脱れの計略。

お熊　それゆゑ何時ぞやおいらんから、廻したお金もそれッ切り、おつと、こりやお門が違つたねえおいらん。（ト直次郎に當附けていふ、太九藏思入あつて、）

太九　譬に申す色男、金と力のなさ丶うな働きのない直次郎、何と先生左樣ではござらぬか。

市之　先づ呑み直すといたすにせよ、お熊に貸したる金子百兩、只今身共に渡してくりやれ。

ト　お熊へ目で知らせる。

お熊　はい〳〵お渡し申しますとも〳〵、おいらんさへ返してくれゝば疾うに期月の切れたお金、あなたへ申し譯がござりませぬ。(ト三千歳に向ひ、)もしおいらん、さつきあれ程いうて置いた、お金は都合出來ますかえ。(ト三千歳當惑の思入にて、)

三千　さあ、そのお金は、

お熊　貸した相手が直さんでは、大方金は出來ますまい。

三千　さあ。

お熊　出來るか出來ぬか三千歳さん、しつかり言つて下さんせ。

トお熊憎くいふ、女形皆々氣の毒なるこなし、三千歳うつむきぢつと思入、此の内直次郎懷中より廿五兩の包を四ツ出し、

直次　その百兩は返してしまえ。(ト三千歳の前へ置く。)

皆々　え。(トびつくりとなす。)

三千　お熊どん、よく改めて取つておくれ。(トお熊金を受取りながら。)

お熊　思ひ掛けないこのお金。(ト丑松きつとなつて、)

丑松　さあ金が出來りやあ恩ひらなしだ、小癪に障つてたまらねえ。(ト言ふを直次郎押へ、)

直次　こりや、お先き眞ッ闇や八雲に怒るばかりが能ぢやあねえ、そこをぢつと我慢をしにやあ始終の名前は賣り出せねえ、一事が萬事これ丑松、立騒がずと、（ト丑松を制し、）我慢をしろ。

トよろしく思入にて留める、お熊は巾着より證文を出し、

お熊　金と引替へ證文は、直ぐお返し申します。（ト三千歳に渡し、）金子さま、思ひがけなく返りまして、あなたも拾ひものをなさいました。（ト市之丞に金を渡す、太九藏思入あつて、）

太九　今の今まで催促され、ぐう／\言つた三千歳の、金はこれなる片岡に遣つたゆゑに出來まいと、思ひの外にこの手際。

九兵　金を枷にと思つた仕事も、どうやらこつちの當違ひ、これぢやあ見す／\頂くお禮も、寶の山へ入りながら、手を空しくして歸るのたとへ。

お熊　どうしてこんな手際のい、、

佐助　器用なことが、

三人　出來ましたえ。（ト九兵衞、お熊、佐助の三人言ふ、直次郎穩かなるこなしに、）

直次　金は世界の湧物と、算盤とつて一兩で何錢といふ益を見る商人衆ぢやあ出來にくいが、羽織は着ても一夜の內乘るか反るかの博奕打、こんな事は不斷もありうち、それともおれを疑ぐつて不思

議な手品と思ふなら、木の葉か金か改めて落さねえやう懐中なせえ。(トよろしく思入。)

市之 いや、流石は立派な申し分、お熊へ貸金慥に取つた、さあ是れからは直次郎、他へ行くことが迷惑なら、廓に近き根岸道、駐春亭まで出張つてくりやれ、あれにてゆつくり呑み直さう。

直次 この身風情をそれ程に、お招き下さる思召、お供をいたして參りませう。

太九 さう口綺麗に受合つても、今日のもつれを口説の種に、女郎の側は放れられまい。

九兵 成程あなたのおつしやる通り、幾日居續けしようとも皆達引かれるお方ゆゑ、こりや一緒には行かれますまい。

直次 いえ、直に跡から駕籠で參れば、一足お先きへお出掛けを。(ト市之丞皆々立上り、)

市之 きつとおぬしを待つて居るぞよ。

直次 はて、御念には及びませぬ。(ト丑松見兼ね、)

丑松 あんまり歯痒い、(ト立ちかゝるを冠せて、)

直次 えゝ、お送り申さずと、爰に居ろ。(ト言ひ紛らす。)

市之 さあ、呑み直して行かうかえ。

ト太鼓入り騒ぎ唄になり、市之丞先きに太九藏、九兵衞、お熊、佐助附添ひ、わや／＼言ひながら下

手へはひろ、丑松無念なるこなし、是れを女形皆々心遣ひの思入、直次郎跡見送り合方になり、

直次　丑、よく辛抱してくれた、悔しからうが手出しをすりやあ、こつちに七分の負けが來て、何ぞの時によくねえから、それで手前を止めたのだ、決して此の後無法をするなよ。

丑松　旦那、わつちやあ、どうもたまらなかつた。

直次　尤もだ／＼がそこが我慢、金が出來りやあ切餅を叩き附けるが世間並、そこを無難に返したから、向ふも素直に取つたのだ、幾等も喧嘩の時節はあるから、斯ういふ場所ぢやあ嗜むがいゝ。

ト丑松を宥める、三千歳思入あつて、

三千　して、お前が拵へた今のお金は、何うしたのだえ。

直次　ありやあ今兄貴から、

皆々　なに、兄さんとはえ。

ト此の時上手の障子を明け、河内山宗俊着流し好みのこしらへにて出て、

宗俊　おれが貸したのだ。（ト皆々びつくりなし、）

三千　そんならあれは、

丑松
皆々　河内山さんが。（ト端唄の合方になり、）

宗俊　丁度折よくこの二階に、居合せたのが勿怪の幸ひ、物事かういふ都合に行きてえ。

丑松　それぢやあ旦那も、今夜は遊びに。

宗俊　なに、ちつと湯島に話しがあつて表向きぢやあ遊びに來たが、實は座敷の明くのを待ち、爰をちつと借りてえのだ。

千春　何んの御遠慮がござりませう、ゆつくりと

三千　今の群が歸つてしまへば、ねえ春さん。

千川　お遣ひなさんせいなあ。

直次　それぢやあ見世へ斷つてくんねえ。

千川　あい、わたしが言つて置きますよ。

三千　この間に外のお客を廻り、

千春　わたしもお前に、ちよつと話しを、

丑松　一緒に行つて聞くとしようか。

トやはり右の唄にて皆々兩人に挨拶なして下手へはひる、跡宗俊直次郎殘り上下を見廻し、思入あつて、

宗俊　湯島、爰へ來やれ。（ト誂への合方になり、直次郎宗俊の側へ住ひ、）

直次　して、話しと言ひなさるは。

宗俊　さあ、外でもねえが長者町の、不斷おれが世話になる曲物屋の上州屋から、據なく賴まれた話しについてそつちを見掛け、是非半口乘つて貰ひてえのだ。

直次　善い話しか惡い話しか、半口乘れと言ひなさるは。

宗俊　あの上州屋の娘お藤、子供のうちから松江侯の屋敷へ上つて御側小姓、よくあるやつだが殿の氣に入り、始終は妾に上げろといふ度々の使ひに、兩親も案じ過して暇を願へど矢先きが惡さに暇が出ず、親類打ち寄り途方に暮れ泣きの涙で居る所へ行き合して樣子を聞き、見て居られぬは外ならぬ質物の外正金の世話になつて居る上州屋、爰等が恩の返しどころと其の娘の身の上を受合つて來た一件で、取戻しの相談するのだ。（ト直次郎腕組をなし、）

直次　成程そこらが恩返しと思ひなさるは結構だが、何といつても相手は大名、どういふことにしなさる積りだ。

宗俊　所詮只ぢやあ行かねえから、丁度時候も十二月、年忘れの茶番をする氣で、一狂言おれが書いた。

直次　そりや何ういふ筋立てだね。

宗俊　世話へ時代を持込んで、名代の鶴屋南北も、三舍を避ける名趣向だ。

直次　悪い方ぢやあ立作者、定めてうまい仕組だらう、早く本讀を聞きたいが、何ぞわッちに役があるか。

宗俊　おゝあるとも／＼、麻上下に大小といふ役をして貰ひてえのだ、何にしろ一夜附の新狂言、今夜根岸の櫻井の家で、本讀の後が直稽古だ。

直次　それぢやあ一緒に行かうかね。

宗俊　どうぞさうして貰ひてえのだ。（卜合方きつぱり、下手より丑松出來り）

丑松　もし譬にいふ壁に耳、何だか話あ知らねえが、人目の多い爰の二階、うつかり油斷は出來ませぬぞ。

宗俊　よく知らせてくれた、それゆゑ今から根岸まで、引揚げようといふ所だ。

丑松　わつちでいゝ役があるなら、遠慮なく遣つて下せえ。

宗俊　どうで委しく話しはするが、おぬしにも役があるのよ。

直次　さうして今借りた百兩は、後で困りなさりやあしねえか。

宗俊　衣裳小道具何やかやの手附に借りた百兩だが、差當つて五十兩、半分の都合が出來めえか。

直次　さういふことなら三千歳に話しをして算段するから、一足先きへ出掛けて下せえ。
　ト是れにて三人立上り、
丑松　根岸といつちやあ是れから田圃、先きまで送つて行きませう。
宗俊　なに、駕籠で行くからそれには及ばぬ。（ト下手へ行きかけ、）ハツクシヨ、（ト嚔をする、）あゝ寒い、風は引きたくねえ。
直次　初日前に大事な體。（ト自分の羽織を脱ぎ、）用心に是れを着なせえ。（ト引ツ掛けてやる。）
宗俊　こいつあ有難えが、是れぢやあおぬしが。
直次　なに、わつちやあ褞袍を借りて行きます。
宗俊　それぢやあ先きへ行つて、稽古に掛るぜ。
直次　丑、下まで送つて、
丑松　おい〳〵。
宗俊　待つて居るよ。（ト端唄にて、宗俊を丑松送り下手へはひる。直次郎送り出し、）
直次　氣を附けて行きねえよ。（ト妥へ下手より、三千歳出來り、）
三千　河内山さんは、もうお歸りだね。

直次　急に用が出來たので、今駕籠で歸つたのだ。
三千　さつき話した草加の客から、やう〱のことで五十兩、今屆けて寄越したから、入るなら間に合せに遣ひなさんせ。（ト五十兩を出す。）
直次　そいつは何より好い都合、さつき借りた百兩も實は兄貴が入る金だ、それぢやあこいつを借りて行かう。（ト金を懷中する。）
三千　お前これから歸るのかえ。
直次　なに歸るのではねえ、根岸に好い內會が今夜出來ると聞いたから、これからそこへ行つて來るのだ。
三千　まあ、今夜はいゝぢやあないか。（ト留めるを、）
直次　是非今夜に限ることだ。
三千　それではきつと待つて居るよ。
直次　えゝ極りを言ふぜ。（ト此の時引けの拍子木鳴る。）何だ、もう引けか、べらぼうと寒くなつた。（ト思入あつて、）おい。（ト立上るを道具替りの知せ、）褞袍を貸してくんねえ。

ト此模樣引の木、端唄の合方にて道具廻る。

（吉原田圃根岸道の場）――本舞臺上手へ斜に棕梠伏せの坂の上り口、正面吉原を見たる灯入の遠見、裾通り田圃の書割り、上下藪疊、よき所に柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て吉原田圃根岸道夜の體。爰に幕明きの峰山、榮昌の小按摩療治歸りにて立ちかゝり居る、この見得時の鐘、新内の合方にて道具留る。

榮昌　峰、もう何時だらうの。
峰山　蕎麥屋が居ねえから分らねえ。
榮昌　なに、蕎麥屋に時を聞くと極つたことはありやしねえ。
峰山　そりやアすいとん屋でも分るだらうが、蕎麥屋の方が紋切形だ。
榮昌　昨夜夜明しをしたせゐか、今夜くれえ睡い晩はねえ。
峰山　引けからこつちの附目だが、ちやんに何とか噓を吐いて、早く歸つて寐るとしよう。
榮昌　おらあ蓑輪たから、こゝで別れるよ。
峰山　一人づゝはどつとしねえな。（ト峰山は上手、榮昌は下手へ行きながら）
榮昌　「逢うて嬉しや、別れの辛さ、」（トちよつとうたふ。）

峰山　えゝも、はい、（ト兩人上下へ行きながら）

兩人　按摩針――

ト別れてはひる、時の鐘木魚入りの合方になり、花道より以前の市之丞、太九藏、尻端折り駐春亭の貸提灯を持ち、出來り花道に止り、

市之　引けを打てば往來の人も稀なる田圃道、幽に聞ゆる吉原の按摩の聲や辻占が、豪勢しんとなつて來た。

太九　それにしても直次郎が、遲くも今夜駐春亭へ來さうなものでござつたが、臆病風に誘れましたな。

市之　彼奴に逢はゞ不便ながら、三千歳めの意趣返し、今夜爰でぶつ放し、身共が身請けいたさにやならぬ。

太九　そこは男の意地づくゆゑ、すつぱりやつておしまひなせえ。

ト合方きつばりとなり、兩人舞臺へ來る、爰へ上手坂の上より九兵衞頰冠り尻端折りにて出來り、提灯にすかし見て、

九兵　もし、金子さまでござりますか。

市之　おゝ九兵衞か。

太九　して、彼奴めは、
九兵　今根岸へ行く駕籠が、直き跡から參りますから、ちよつとお知らせに駈拔けました。
市之　そりや、直次郎に違ひないか。
九兵　誰から出掛ける羽織が證據、駕籠も出入の看板に、間違ふ氣遣ひござりませぬ。
市之　然らばこれにて待ち受けて、喧嘩を仕掛け、ばつさりと。
太九　身共も助太刀いたすでござらう。
市之　いや、主人持は後日が面倒、拙者一人で氣遣ひなし、此の場に構はず少しも早く。
太九　それぢやと申してお一人では、
市之　はて、そこが流義の免許皆傳、（ト腕を叩く。）
太九　然らば九兵衞も同道なし、
七兵　お別れ申すで、
兩人　ござりまする。
市之　早く〳〵。
　　トやはり右の合方にて、太九藏九兵衞下手へはひる。市之丞上手を見遣り思入あつて提灯を消し刀を

抜いて鼻紙にて拭ひきつと思入あつて下手の藪疊へ忍ぶ、時の鐘木魚入りの合方になり、上手の坂より○△の駕籠屋五十間の看板を點けし四ツ手駕籠を擔ぎ出來り、舞臺にてちよつと杖をなし、

○ 旦那、今晩は嘸お待遠でござりましたらう。

△ 生憎お店歸りで出拂ひまして、

○ へお氣の毒さまでござりました。（ト言へども默つて居るゆゑ、）

○ もし旦那々々。こりや廓のお疲れで、大鼾でおいでなさる。

ト爰へ下手より市之丞頬冠りにて窺ひ寄り、棒鼻へ抜身を出す、駕籠屋びつくりなし駕籠を置いて上手へ逃げてはひる、此の内坂の上より直次郎福袍好みの裝にて出來り、此の體を見て後へ忍ぶ、市之丞看板を取り、駕籠の側へ寄つて火影に羽織を見てうなづき、悠々と抜身にて垂を上げる、内に宗俊腕組をなし、鼾をかいて居る、市之丞よく／＼透し見て、

市之 や、こりや片岡の思ひの外。（トこの聲に目を覺し、）

宗俊 駕籠屋々々。

ト呼ぶ、この途端市之丞提灯を吹き消す、時の鐘忍び三重になり、兩人不審の思入あつて後前を窺ひ合ひ、市之丞刀を鯉口へ當てる、宗俊不圖心附き、

や、今光つたのは。

ト目を附けろを市之丞びつしやり鞘へ納める、此の時直次郎駕籠の上より顔を出す、双方見合つて本の頭、

あゝ、星が飛んだのか。

ト氣を替へて言ふ、市之丞は好い肚胸だといふこなし、直次郎はいゝと息込む、三人心々の思入よろしく、時の鐘郭の騒ぎ唄にて、

ひやうし幕

三幕目

松江家上屋敷の場

〔役名――使僧道海實は河内山宗俊、櫻井新之丞實は片岡直次郎、高木小左衞門、松江出雲守、宮崎數馬、北村大膳、老女岩崎、近習六人、中間。腰元浪路、其他。〕

（上屋敷奥殿の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面金地花の丸の襖、上下折返し同じく金地の襖、日覆より同じく金地の大欄間をおろし、花道揚幕の所杉戸の出入り、舞臺花道共一面に薄縁を敷き詰め、

總て松江家上屋敷奥殿の體、爰に○△□◎の腰元居並び、琴唄にて幕明く。

○ もうし皆さんお聞き遊ばせ、同じ朋輩でありながらお腰元の浪路どのは、お氣の毒なことぢやござりませぬか。

△ ほんに左樣でござりまする、能ある者は身を苦めると、美しう生れたが却つて其の身の害となり、

□ 御前樣のお目に留り、妾になれとの御懇望を、背きしゆゑに御不興蒙り、

◎ 此の間から岩崎どのゝお部屋のお次へ押込められ、出ることならぬ籠の鳥とは、おいとしいことでござりまする。

○ 聞けば此の春宿下りの其の節、聟も取極り、結納までも濟みしとやら、

△ いはゞ主ある身の上なれば、それでお斷り申せしを、

□ 御前樣の御意に逆らひ、外に女子のないやうに、

◎ 浪路どのをあのやうに、御執心遊ばすとは、

○ 御癇癖とはいひながら、

△ こりや常事では、

四人 ござりませぬわいなあ。（ト此の時奥にて）

數馬　我が君樣、先づ〳〵お鎭まり遊ばしませう。
出雲　留め立ていたすな、退いた〳〵。
○　あのお聲は、
四人　御前樣。
　　ト早舞になり、正面の襖を明け、浪路窶れたる腰元のこしらへにて逃げて出る、跡より出雲守羽織着流し殿のこしらへにて、拔身を持ち追つて出る、是れを數馬袴一本ざしの近習頭にて留めながら出て、浪路へ思入あつて、
數馬　こりや浪路、それに居つては御前樣の、却つて御意に逆らふゆゑ、早くお次へ立去りませうぞ。
浪路　いえ〳〵お次へ參りますより、御意に背きし上からは、元より死ぬる覺悟ゆゑ御前樣の御手に掛り、いつそ死にたうござりまする。
出雲　死ぬる覺悟とあるからは、猶々以て捨て置かれぬ、手討にいたす、留めるな〳〵。
數馬　あいや、其の儀は相成りませぬ、假令お詞背けばとて操を守る女を捉へ、無體の御戀慕遊ばしまして、御意に悖りし罪ありとお手討に遊ばしなば、不仁の君と世の嘲り、後日の聞えも如何なれば遮つてお留め申す、先づ〳〵お鎭り遊ばしませう。

出雲　やあ、生若輩の身を以ていらざる異見控へてよからう、達て留め立ていたしなば、そちも容赦はいたさぬぞ。

浪路　數馬さまにはわたくしを不便な奴と思召して、お庇ひなされて下さりますれど、私ゆゑにお前さまのお身に凶事でもござりましては、申し譯がござりませねば、必ずお庇ひ下さりますな。

數馬　いゝや、御前をお留め申すは、そなたを庇ふばかりでない、お家のお爲めを思ふゆゑぢや。

出雲　やあ、若年の身で小癪なことを。

浪路　いざ、お手討に遊ばしませ。

數馬　えゝ、早く御前を逃げよと申すに。

出雲　留め立ていたさず、其處退いた。

數馬　假令何樣仰せあるとも、お家の瑕瑾に相成る儀ゆゑ、お留め申さにや相成りませぬ。

出雲　やあ、達て申さば汝も共に。（ト立ち掛るゆゑ、腰元四人出雲守を留めて）

○　先づ／＼お待ち、

四人　遊ばしませ。（ト寄るを出雲守突き退け）

出雲　やあ、汝等までが、控へてよからう。（トきつと言ふ、此の時上手襖の内にて）

大膳　あいや、その御成敗暫らく。

腰元四人　あの、お聲は、

數馬　大膳殿こ（ト管絃になり、上手より大膳上下大小にて出來りよろしく住ふ、出雲守此の體を見て）

出雲　誰かと思へは北村大膳、何ゆゑ成敗留めしぞ。

大膳　お留め申すは外ならず、罪の次第もお糺しなく、それなる數馬をお手討あらば却つて御前の非分に相成り、後日の聞えも如何なれば、それゆゑ拙者が御前に代り、數馬の罪を糺さんと推參いたしてござりまする。

數馬　なに、拙者の罪を糺すとは。

大膳　御身の罪は外ならず、それなる浪路とかねてより、不義をいたしてござらうがな。

女形皆々　えゝゝゝ。（トびつくりなす、出雲守扨はといふこなしにて。）

出雲　すりや、それゆゑに浪路を庇ひ、諫言立てをいたせしか。

數馬　何しに左樣な事共を。

大膳　默りめされい、數馬どの、左樣でなくば何故に御前の御意に背きし者を斯までお庇ひめさるのだ、善惡ともに臣たる身は君の上意に背かぬが忠義を守る武士の常、誠の道を思ひなば腰元浪路を說

き諭しお取持をもいたすべきを、庇ひ立てして妨げるは不義をして居る是れ證據、言譯なすとも叶はぬことぢや。

數馬　こは心得ぬその仰せ、善惡ともに臣たる身は君の上意に背かぬを忠義の道と仰せあれど、お家の瑕瑾になることを諫めもいれず座成りを繕ひ、安閑として控ゆるは是れぞ不忠の第一ゆゑ、お諫め申すは身不肖ながら御近習頭を勤め居れば、役目の表武士の道、それに何ぞや濡衣の身に覺えなき不義などゝは、返す〲も奇怪至極、次第によつては大膳殿重役とは言はせませぬぞ。

大膳　やあ奇怪とは、舌長なり、覺えないとて其の儘に詮議なさいで置くべきか。

數馬　身に覺えなき不義の科、何とて詮議を受くべきや。

大膳　見事白狀いたさせくれん。

數馬　然らば御身が、

大膳　念には及はぬ。

兩人　何を。（トきつとなる。此の時出雲守刀を鞘に納め、下に居て、）

出雲　兩人共に控へてよからう。

兩人　はゝはッ。（ト平伏なす。）

出雲　こりや數馬、それへ出い、いやさ、ずつとそれへ出い。（トきつと言ふ、合方きつぱりとなり數馬前へ進む、）（出雲守思入あつて、）そちは只今大膳が不義者なりと申せしを、覺えがないと申し張るが、罪なき者を何ゆゑに不義者なりと申すべき、眼前證據はその方が謂れなくしてあれなる浪路を、庇ひ立てして止むるが疑ひかゝる不義の科、覺えないといふ何ぞ慥な證據あつてか。

數馬　あいや、證據はござりませねど、覺えなき儀を何ゆゑに無實の罪に落入りませうや、浪路を庇ひ御前樣をお止め申すは忠義の爲め、篤と御賢慮めぐらされ、御疑念お晴らし下さりませう。

ト爰へ下手より、岩崎老女仕掛裝にて出來り、

岩崎　その申し譯は、數馬さま、失禮ながら立ちますまい。（トよろしく住ふ。）

數馬　誰かと思へば岩崎どの、お手前までが同じやうに、左樣な儀を言はるゝは、こりや某を濡衣の罪に落さん企みぢやな。

岩崎　是れは又迷惑千萬、常々よりして情深いこの岩崎が、何ゆゑに罪なきお方に罪を着せ、此の御殿から科人を出しますやうはござりませぬ、御前樣から先達てお預り申しましたこれなる浪路は私の部屋へ引取り次の間に、窮命させて置きますれば立ち振舞で何もかも樣子を覺る老女の役、疾うからあなたと通じて居るに、よも相違はござりますまい。

浪路　いえ〳〵何で私が、其のやうな事をいたしまして、（ト言ふを冠せて、）

岩崎　あれ、しら〴〵しい其の顔附き、疾うからお前が數馬さんと、竊に通じておいでのは、わたしが見拔いて居りますぞえ。

浪路　はあゝ。（ト泣き伏す、大膳思入あつて、）

大膳　いやなに數馬どの、一人ならず二人まで斯く證人の出る上は、よも申し譯はござるまい。

數馬　假令何人證人が出でませうとも此の身に取り、覺えのないが是が潔白、但し浪路と不義いたせし何ぞ證據がござるかな。

大膳　さあ、それは。

岩崎　證據はなけれど樣子にて、覺りましたが何より證據、そんなら不義はせぬといふ、そちらに證據がござりまするか。

數馬　元より覺えのなきことに、何とて證據がござらうや。

大膳　證據がなければ水掛論、それゆゑ詮議いたして見せう。

岩崎　まこと不義せしお覺えなくば、此の場の潔白立てる爲め、あれなる浪路を御前樣へお取持をなされませ。

數馬　でも、一命を差出して操を守るあの浪路、何ゆゑ御前へ取持たれんや。
大膳　とやかう申して脫るゝは、不義をいたして居るゆゑか。
數馬　何ゆゑ左樣な。
岩崎　そんなら取持なさるゝか。
數馬　さあそれは、
大膳
岩崎　さあ、
數馬　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
大膳　潔白たゝざる其の内は、
岩崎　不義の汚名は脫れませぬぞ。（ト兩人にてきつと詰寄る、是れにて數馬ちつとこなし、浪路前へ出て、）
浪路　さうぢや。（ト數馬の差添へに手を掛け、死なうとするを數馬留めて、）
數馬　こりや何ゆゑに我が刀で、自殺なさうとおつしやるのぢや。
浪路　さあ、よしなき此の身が御前樣の、御意に背きしばつかりに、何科もないあなたにまで不義の惡名附けましては、濟まぬ義理ゆゑ申し譯に、せめてあなたのお刀にて、死ぬる覺悟でございます

る。

數馬　いや〳〵それは悪い了簡、降つて湧いたる濡衣の疑ひかゝる我が刀で、そなたが自殺する時は、猶々この身に悪名うけ、迷惑いたさにゃ相成らぬ。

浪路　えゝ、（トびつくりなす。）

數馬　汚名を雪ぐそれまでは、滅多にそなたは殺されぬ。

浪路　すりや死ぬにも死なれませぬか。

○　朋輩同士のことなれば、

△　私共もとも〴〵に、

□　お詫びいたすでござりませうから、

◎　先づ〳〵お待ち、

四人　なされませ。（ト是れにて浪路是非なくはッと泣き伏す。）

大膳　隠すとすれど顯はるゝと、數馬の刀で死なうとせしが、不義をいたせし何よう證據。

岩崎　御前様にも恐れながら、御賢慮あつて兩人の、不義をお糺し下さりませ。

ト是れにて出雲守、双方の様子を窺ひ居て、

出雲　こりや數馬、證據はないと申し張るが、大膳岩崎兩人より訴へ出し不義の科、言譯あらば申して見よ。

數馬　さあ、それは。

出雲　有無の返事は如何なるぞ。（トきつと言ふ。此の時花道揚幕の内にて高木小左衞門の聲にて）

小左　あいや、そのお答へ、申し上げん。

出雲　何と。

小左　宮崎數馬に成代り、高木小左衞門が御返答申し上げるでござりませう。

ト中の舞になり、花道より小左衞門上下大小にて出で來り花道にて平伏する、皆々此の體を見て、

大膳　貴殿は高木小左衞門殿。

岩崎　思ひ掛けない此の御出仕。

出雲　遠慮に及ばぬ、近う〳〵。

小左　然らば御免下さりませう。（ト右の鳴物にて舞臺へ來り、よろしく住ふ。出雲守思入あつて）

出雲　して、其の方は數馬に代り、予に返答をいたすとは、此の場の始終を聞いて居つてか。

大膳　但し次第も御存じなく、數馬の詫に推參ありしか。

岩崎　御詮議半へ横合より、お口出しをなされましては、却つて御意に逆らひませう。

小左　あいや、假令君慮に逆らふとも、數馬に代り某が御諫言申し上げねば、臣たる道が相立たぬ。

出雲　なんと申す。

小左　我が君、あなた樣はなあ。（ト是れより張扇の入りし誂への合方になり、）此の場の始終はお次にてお襖越しに承はり具に承知仕つるが、此の程よりして我が君には、緣邊極まるお腰元へ御執心を掛けさせられ、老女岩崎に申し含め是非に心に隨はせよと、無體の御戀慕遊ばすよし、承はるも苦苦しき以ての外なる御振舞、されど御戀慕なしたまふ浪路に於ては結納まで、取交したる夫あれば、お心には隨はれずとお斷りを申し上ぐるは、女子の道を貫きて操を守る貞婦の常、御意に背いて隨はぬを君には遺恨に思召され、老女へ内意を仰せ付られ一間の内へ當人を押込めおいて窮命させ、母なる者が幾度となくお暇願ひに出づるといへども、虚言を構へ追返し親子の歎きを心地よしと、我意にお募り遊ばすなど、それが一國一城を知しめさるゝ御所行か。

出雲　やあ。

小左　剩さへそれのみならず、押籠め置かれし當人を今日これへ引出し、是非を論ぜずお心に隨へなどと一時に迫り、否と申さば一刀に切つて捨てんと遊ばすは言語に絶えし御亂行、見兼ねしゆゑに

止むを得ずこれなる數馬が遮つて、御諫言申し上げしを用ひたまはぬばかりでなく、不義者なりとの御難題、それと申すもお側にてよしなき事をお進め申す。(ト大膳岩崎へ思入あつて氣を替へ)いやさ、よしなき事を申し募られ、可惜臣下をむざ〳〵と、不義者にして失ひたまふは宜しからず、何卒御心飜へされ、誠の道を守りたまひ、これなる浪路を宿元へ此の儘お下げ遊ばすやう、偏に願ひ奉つりまする。(ト思入にていふ、出雲守むつとせしこなしにて、)

出雲　やあ數馬に代り返答なすと、許しもなきに推參なし、聞度くもなき諫言立て、二言と申さば手は見せぬぞ。

小左　すりや斯くまでに申し上げても、御採用はござりませぬか。

出雲　おゝ、いらざる諫言聞く耳ないわえ。

小左　はて是非もなき御亂行、驕奢に耽り淫酒に募り、理非を論ぜず諫めし者を、無道のお手討ちめさるとあれば、お家のためには替へられませぬ。(トきつとなる。)

大膳　やあ、高木氏には我が君へ、過言を申せしのみならず、君臣の禮を失ひ、

岩崎　どうやら是れでは御前樣へ、お手向ひでもなさるゝ御樣子。

小左　三度諫めて身退くは、忠義といへど忠義にあらず、君の無道をお諫め申し、お用ひなくば是非な

きこと、よしお手向ひいたすとも、御家の光榮計るのが臣たるものゝ忠義の道。

出雲　やあ、予に手向ひなす所存とは、返すぐも憎き奴、それ、大膳切り捨てい。

大膳　はッ、(ト刀を持ち立ち掛り、)君命なれば、覺悟めされ。(ト拔掛けるを小左衞門扇にてしやんと留め、)

小左　御身等如きのなまくら刄金、この小左衞門の身に立たうや。

大膳　何を。

ト引きはづして刀を拔き切つてかゝるを、小左衞門扇にてちよつとあしらひ、トゞ大膳の眉間を打つ、是にて大膳下手へどうとなる、これを見て出雲守刀を取つて立ちかゝるを小左衞門扇を構へてきつと見得、此の留りばたくになり、袴裝の近習一人花道より走り出來り、下に居て、

近習　はッ、申し上げまする。

數馬　あわたゞしい、何事でござる。

近習　只今上野宮樣より、御使僧御入來にござりまする。(ト引返して花道へはひる、皆々思入あつて、)

數馬　なに、宮樣より、

女形
皆々　お使ひとな。(ト心得ぬこなし。)

出雲　先觸もなく上野より、當家へ使僧をたてられしは、

小左　容易ならざる宮のお使ひ、はて、何事の御入來なるか。（ト案じるこなし）

數馬　何は格別、御前樣には。

○　是れより直に。

腰元一同　お出迎ひを、（ト出雲守思入あつて）

出雲　いや、如何なる使ひか存ぜぬが、面會せぬゆゑ、不快と申せ。

小左　あいや、其の儀は相成りますまい、假初ならぬ宮のお使ひ、是非とも御前が御自身にお出迎ひを遊ばさずば、後日の聞えも憚りあり、

出雲　いや、使僧に逢ふは面倒ぢやわえ。

ト言ひ捨てゝ出雲守ついと奥へはひる。是れにて大膳薄氣味惡きこなしにて立上り、

大膳　宮樣よりのお使ひが、只今當家へ參らずば、此の場の落着附けようもの、調べのつかぬ物別れ、命冥加な。（ト思入あつて、唄になり、下手襖の內へはひる。岩崎も思入あつて）

岩崎　これ浪路どの、わたしの部屋へ。（ト浪路を引立てにかゝる、小左衞門留めて）

小左　いや浪路ことは身共が預り、御前へ強諫申し上げても、宿へ歸して遣す間、この儘これへお置きなされい。

岩崎　でも私が御前樣より、預りました浪路ゆゑ、

小左　はて、後日の祟りあらうとも、こなたに迷惑かけ申さぬ。

岩崎　あなたが引受け何事も、

小左　はて、其の念には及ばぬことぢや。

岩崎　それではどうやら約束が、

小左　や。

岩崎　いえ、役目を脱れて樂々しました。

ト唄になり、上手の襖の内へはひる。跡に浪路、數馬、小左衞門の側へ差寄り、合方になり、

浪路　私ゆゑに數馬さまが思はぬ惡名お受け遊ばし、何うなることかと存じましたに、御家老樣の御出仕にて、危い所を脱れまして、何とお禮を申しませうやら、お禮は詞に盡されませぬ。

數馬　これと申すも大膳がよしなき事を御前樣へ、讒言を構へしゆゑ、降つて湧いたる濡衣の、汚名を受けし當惑も、これにて一時の難を脱れ、無事に相濟む御厚恩。

浪路　有難いことで、

兩人　ござりまする。（トよろしく禮をいふ。小左衞門思入あつて、）

小左　いや、其の禮には及ばぬこと、道理を押さば此の方より詫びをいたさにやならぬ仕儀、假令お側に媚び諂ふ佞人共が居らうとも、太守の御身にありながら主ある婦女子に戀慕なし、是非を論ぜず意に背かば手討になさんなんぞとは以ての外なる御亂行、嘸悔しくもあらうなれど我意に募りし御癇癖は、御病氣ゆゑぢやと今少し辛き思ひを怺へ居よ、さすれば近日宿元へ無事に歸宅をいたすやう、此の小左衞門が身に代てもよしなに計らひ得さする間、必ず狹き心より短慮を出しては相成らぬぞ。

浪路　數なりませぬ私を、それ程までに思召し、御家老樣のお心添へ、有難いことでござりまする。

數馬　何は格別、我が君が御病氣體と仰せあれば、高木氏にはお出迎ひのお支度あつて然るべし。

小左　如何にも殿の御名代に出迎ひせずばなるまいが、思ひ掛けなく宮樣より當家へ使僧を立てられしは、如何なる次第か心得ず。

數馬　その御配慮につきまして愚存ながらも拙者めが、思ひ當る儀もござれど、何を申すも他聞の憚かり。

浪路　お邪魔とあれば私共は、お次へ參るでござりませう。

小左　然らば一同遠慮おしやれ。

浪路　心得まして、

女 皆々　ございまする。

ト唄になり、浪路先きに腰元四人ついて下手襖の內へはひる。跡兩人殘り四邊へこなしあつて、

小左　數馬どの、近う。

數馬　はッ。(ト前へ進む。替つた合方になり、)

小左　して、今日のお使ひは、凶事の御沙汰でござらうか、又は吉事の御沙汰なるか、御身は如何思はるゝぞ。

數馬　才に富みたる重役の仰せも待たず拙者めが、發言いたすは差出ながら、多分は今日上野より思ひ掛けなきお使ひは、此の程よりして我が君樣餘り驕奢に募りたまひ世上の風說よろしからねば、將軍家よりお咎めの御沙汰ありしを宮樣の、お扱ひにてお愼みの御內意なるかと存じまするが、貴殿は如何思召しまする。

小左　手前も左樣存ずる所、まことや主家を大切と心痛いたすゆゑにこそ、使僧の御沙汰を推量りつらつら愚慮を回らせば、謹愼のみの沙汰でなく、品によりなば御門主のお扱ひにて、國替か、又は半知で御當主に蟄居を仰せ付けらるゝ御沙汰なるやも計られずと、使僧の趣き聞くまでは胸安か

らぬ臣等が心痛。

數馬　その御苦心も我が君の、御所行よろしからざれば、

小左　次第に依らば何事も、我腹一つに引受けて、

數馬　すりやお覺悟をめされしとか。

小左　思案の極意は、（ト扇にて腹を切る眞似をして見せ、トヾ扇を下に置くを道具替りの知せ。）外にござらぬ。

トぢつと思入、數馬はハッと平伏なす、此の模樣早舞にて道具廻る。

（松江家廣間の場）──本舞臺一面の平舞臺、正面上下三方とも銀地へ花桐の紋散らしの襖、日覆より同じく銀地の大欄間を下し、總て松江家廣間の體、時計の音にて道具留る。ト花道の内にて、

呼ビ　御使僧のお入り。

ト呼ぶ、是れより音樂になり、花道より宗俊青天窓の坊主鬘、紫の衣、錦の袈裟、水晶の珠數を持ち出來る、是れへ袴裝の近習二人附添ひ、案内して出で、花道へ留り下に居る、よき程に舞臺上手の襖を明け、以前の小左衞門、數馬、跡より侍一二三四何れも上下裝にて出で、皆々よろしく出迎へ、

小左　これは〳〵御使僧には、思ひ寄らざる御入來。

數馬　何かは存ぜず御門主よりの、お使ひと承はり、

一　故老のもの共始めとして、

二　其の外近習の若侍、

三　詰合ひ居りし我々共、

四　取るものも取りあへず、

小左　一統お出迎ひ、

皆々　いたしてござる。

宗俊　宮の御内意承はり、罷り越したる拙僧は、北谷道海といへるもの、各方にもお出迎ひ近頃以て大儀至極。

小左　何は格別、御使僧には、

數馬　是れへお通り、

皆々　下さりませう。

宗俊　然らば、許しめされい。

ト右の鳴物にて宗俊舞臺上手へ通り、よろしく住ふ。これにて皆々もよろしく居並び、小左衛門下手

へ向ひ、

小左　こりや誰そあるか、お茶を持て。（ト下手襖の内にて）

小姓二人　はゝあ。

ト答へ袴小姓二人黒塗り蒔繪の書院煙草盆、腰高の茶臺へ銀の湯呑を載せ持ち出で、宗俊の前へ置き兩人辭儀をして後へ下り、下手へはひる。宗俊茶を呑むことよろしくあつて、

宗俊　して出迎ひをいたされし、各方の御姓名は、如何なる御仁か心得の爲め、それにて銘々お名乘り下され。

小左　はッ、身不肖ながら拙者ことは、當家の家老を勤め居る、高木小左衛門と申す者。

數馬　又拙者儀は若年ながら、近習頭を勤め居る、宮崎數馬と申す者。

一　其の外近習大橋伊織。

二　黒澤要。

三　米村伴吾。

四　堀江新六。

五　川口運平。

六　山中林藏。

小左　何れも當家譜代のもの。お見知りおかれ、

皆々　下さりませう。（ト是れにて宗俊思入あつて、）

宗俊　して、御當家の主人たる松江侯には何ゆゑに、この御席へは出られませぬな。

小左　はツ、主人に於ても早速お出迎ひをいたすべきを、折惡しく不快につき、御面會の儀成りかねまするが、恐れ多くはござりますれど、御門主よりの御沙汰の儀は、如何なる次第にござりますれば、

宗俊　すりや松江侯には御不快にて、御面會が成りませぬとな。

小左　御意にござりまする。（ト是れにて宗俊思入あつて、）

宗俊　はてさてそれは殘念至極、御不快とあれば是非もなし。此の儘歸院いたすでござらう。

小左　すりや、お使ひの趣きは、

數馬　臣下の者ゆゑわれ〳〵へは、

一　仰せ聞けられ、

皆々　下さりませぬか。

宗俊　そは申さずとも知れしことなり。（ト誂への合方になり、）松江侯には御門主を、何と心得居らるゝや、忝けなくも一品の御位尊き宮よりして、内命蒙り御當家へ、使僧に立ちし此の道海、假令御不快なればとて家來を以て御門主の、御沙汰を質すなんぞとは、近頃以て其の意を得ず、殊更今日拙僧が内命蒙り參りしは、當松江家の興廢にも拘はる程の大事ゆゑ、宮にも御心勞したまひ、其の方直に面會なし、虚實を糺し參るやうにと、御懇切なる仰せなるに、お逢ひがなくば是非なきこと、此の趣きを立歸り、宮へ言上いたすでござる。

小左　すりや、御使僧には此の儘に、

數馬　お逢ひがなくば、

皆々　御歸院とな。

宗俊　是れぞ佛果にいへる如く、緣なき衆生は度し難し、南無阿彌陀佛々々。（ト珠數を爪繰り立掛る。）

小左　あいや暫く、御使僧には御猶豫願ひ奉つる。

宗俊　して又猶豫を願はるゝは、何ぞ用でもござるかな。

小左　別儀にはござりませねど、名代ゆゑに御沙汰の儀が仰せられぬと申さるゝは、其の意を得ざるお詞かと、憚りながら存じまする。

宗俊　何と言はるゝ。(ト合方きつぱりとなり)

小左　身不肖ながら拙者めも老職の役勤め居れば、主人出雲所勞に犯され、御面會の儀が成兼ねますれば、是非なくいたして名代にお出迎ひの上御沙汰の趣き承はるは是れ當然、他聞を憚る御內命なら餘人を遠ざけ承はり、萬一拙者に越度あれば身命を拋ちましても申し譯を仕つる、名代ゆゑに無禮なりと御立腹ある御使僧にも、則ち宮の御名代、强ち當家の主人のみ禮をみだせし計らひとも、憚りながら存じませぬ。(トきつと言ふ、宗俊もこなしあつて、)

宗俊　いや御家老は御家老だけ理の當然を言はるゝが、御直談の上ならでは發言し難き內命ゆゑ、敢て無禮を怒るにあらねど、使ひの次第は申されぬ。

小左　然らば主人へ其の由を拙者より申し聞け、押して面會いたしまするか、又は所勞に差惱み御歸院を願ひまするか、兎も角も仕つれば、暫時御猶豫願ひまする。

宗俊　然らば暫時、お待ち申さん。

小左　その御承引忝けなし、

數馬　われ〳〵共より御主人へ、

一　この由申し、

皆々　上げませうや。
小左　いや、某參つて申し述べん。(ト立ち掛る、是の時奥より近習一人出で、)
近習　はッ、只今是れへ御前には、御出座あつて御使僧へ、御面會遊ばしまする。
小左　すりや、御主人が、
皆々　お越しとな。

ト時計の音になり、正面の襖を明け以前の出雲守、羽織袴一本ざしにて小姓二人附添ひ出で、出雲守よろしく住ひ、

出雲　御門主よりのお使ひとして、思ひ寄らざる此の御入來、お出迎ひをもいたすべきを、所勞に犯されれ遲刻の段、平に御容赦下されい。
宗俊　さては貴君が御當家の、松江侯にてござるよな。
出雲　如何にも松江出雲守、以後はお見知り下されい。
宗俊　拙僧ことは御門主の身近う仕ゆる院代にて、北谷道海と申すもの、お見知り置かれ下されい。
出雲　何かは知らず使僧のお役目、近頃御苦勞至極にござる。(ト宗俊出雲守の樣子を見て、)
宗俊　松江侯には御不快と、御家來衆より承はりしが、まことに意外の御血色。

出雲　や。

宗俊　御壯健なる御樣子に、拙僧祝着いたしてござる。

ト是れにて出雲守ぢつと思入、小左衞門これを打消すこなしにて、

小左　何は扨て置き御門主より、御沙汰の次第は如何なる儀か、主人へ仰せ聞けられますやう、

數馬　偏に願ひ、

皆々　上げまする。

宗俊　おろそかならぬ內命ゆゑ、御家老始め御家來衆、暫時退座をいたされよ。

小左　左樣ござればわれ〱は、

數馬　暫時お次に、

皆々　控へませうや。

出雲　次へ參つて控へ居よ。

小左　委細承知、

皆々　仕つりまする。

ト合方きつばりとなり、小左衞門先きに數馬その外近習六人附いて下手襖の內へはひる、跡に宗俊出

雲守殘り、

出雲　して、御內命の趣きは、如何なる仔細かお聞かせ下され。（ト宗俊思入あつて、）

宗俊　只今發言いたすでござる。（ト是れより誂への合方になり、）今般拙僧御門主より內命蒙むり御當家へ使ひに立ちしは外ならず、當家の奧を勤め居る腰元浪路といへるものを、速かに宿元へお返しあるやう、御門主より內命受けし此の使ひ。

出雲　や。（ト思入）

宗俊　さゝ、たゞ斯樣にのみ申しては仔細もお分りあるまいが、かねて當宮御門主には圍碁に御心寄せたまひ、好む道には高位なる貴人も下賤の身を論ぜず、お側へ召してのお慰み、日每に出づるお相手の中にも御意に叶ひしは、則ち臺下坂本に年來住める骨董家和泉屋清兵衞といへるもの、宮と合碁に勝敗も互角に打てる仁なりしが、此の程より常と替り物思ひ氣なる樣子にて、お相手いたす盤面の自然と圍みの亂るゝゆゑ、御不審に思召され若し不快にはあらざるかと、直き〱お尋ねありし所、彼れが緣家の獨り娘四歲以前に當家へ御奉公に罷り出で、お奧を勤め居つたるが、然るべき媒介あつて緣邊極り宿元より度々お暇を願ひ出れど、今日まで何の沙汰もなく此の程窃に母なる者が屋敷の樣子を探りて聞けば、如何なる越度のあるゆゑか、娘は一間に押籠められ、

既に命も旦夕に迫りし程の憂き難儀、助かる工夫はあらざるかと縁者の儀ゆゑ私に、相談掛けれど仕方なく、町人風情の身を以て御大身たる松江侯を相手取るべき自力もなく、日夜苦勞の絶えざるゆゑお目立ちまして恐れ入ると、夫の清兵衛の物語りを聞しめされて御門主にも彼れ等を不便と思召され、其の方參つて松江侯へ直談なして少女が一命無事に助けて連れ歸れと、内命蒙り入來せり、使ひの趣き斯くの通り、何卒御承知下されい。

ト思入にて言ふ、出雲守扨はといふこなしあつて、

出雲　こは何事のお使ひかと心を勞しをつたる所、腰元浪路の儀について恐れ多くも御門主へ、お手數掛ける彼れ等の不屆き、返す／＼も憎き親共。

宗俊　いや／＼左樣に仰せられては使ひに立ちし拙僧が、役目の表立ち申さぬ。兎にも角にも一人の娘が命助けたく思召さるゝゆゑにこそ、斯く事々しく御門主より内命蒙る此の道海、如何なる罪がござらうとも、罪科を問はず其の儘に、許して宿へお下げあるやう、只管願ひ奉つる。

出雲　いや折角のお頼みなれど、その儀は承引いたされぬ。

宗俊　すりや、御承引ござらぬとな。

出雲　假令緣邊極まるとも多年勤めし我が家に奉公いたす其の内は、掟を守り家風に背かず、仕へます

るが家來の常、如何に女の分際とて我儘氣儘に主に逆ひ、無禮をなせし彼女めゆゑ、餘の者共の見せしめに聊か窮命申し付けしを、詫びる者にも事を替へ、手蔓を求め御門主へお手數掛けし其の上に、主人へ恥辱を與ふるやから、高位に恐れ此の儘に彼女を許して遣はしなば、末代までの瑕瑾ゆゑ、承引の儀は相成りませぬ。

宗俊　然らば宮のお賴みにても、御承引は相成りませぬか。

出雲　家の掟が立たざるゆゑ、此の儘には許されませぬ。

宗俊　すりや何樣に申しても。

出雲　はて、諄いことを。（トきつと言ふ。宗俊思ひ入あつて、）

宗俊　はて歎はしき御返答、僅か婦女子の事よりして此の松江家の興廢にも、拘はる大事が出來なすが、それでも御承知ござらぬかな。

出雲　なに、興廢に拘はるとは。（ト合方きつぱりとなり、）

宗俊　當家のお爲めを思ふがゆゑ、夫の淸兵衞より聞き込みし以ての外なる御所行もそれとあらはに申し立てず、無事を計らひ參りしかど、御承引なき其の上は、是非なく上へ申し立て、松江殿には腰元の主ある少女に戀慕なし、隨はざるを憤り、科なきものを一間へ押籠め、無道の行ひめさる

ると、老中掛りへ進達なさば、名家と聞えし御當家の、御恥辱にてはござらぬか。

出雲　やあ。（トぎつくり思入。）

宗俊　身不肖ながら御門主の、宮より内命蒙りて、使ひに立ちし此の道海、御不承知とて此の儘に、おめおめ歸院も成り兼ぬれば、老中掛りへ申し達し、科なき少女を押籠め置く調べを上へ願ひ申さん、さすれは御恥辱ばかりでなく次第に依らば興廢にも、拘はる大事にいたりませうが、それでも御承知ござらぬか。

出雲　さあそれは。

宗俊　但し御承知下されて、少女を此の儘お渡しあるか。

出雲　さあ、

宗俊　さあ、

兩人　さあ〱〱。

宗俊　御挨拶は如何でござる。（トきつと言ふ、是れにて出雲守ぢつと差詰り居る、宗俊思入あつて、）御挨拶のござらぬは、こりや御不承知と相見ゆる。是非に及ばぬ此の趣き、老中方へ申し出でん

ト立上る。出雲守是非なき思入にて、

出雲　あいや、暫くお待ち下され。
宗俊　お止めあるは、御承知なるか。
出雲　如何にも、お頼み承知いたした。
宗俊　すりや御承引下さるとな。
出雲　家の掟が立たざるゆゑ、一旦不服を申し張りしが、かばかりの儀を公の沙汰にいたすも好もしからず、それゆゑお頼み承知いたした。
宗俊　それにて愚僧の役目も立ち、是れに上越す悦びなし。
出雲　只此の上は御門主へ、よしなにお詫び下さるやう道海殿のお計らひ、何卒頼み置きまする。
宗俊　その儀は御案じあられまするな、元より事は好みたまはぬ御門主ゆゑに、御承知さへ下さる上は穩便に、事を納める御仁心。
出雲　それにて我等も安堵いたす。
宗俊　愚僧も大慶至極にござる。（ト出雲守後へ思入あつて、）
出雲　こりや誰そ居らぬか、是れへ參れ。（ト手を叩く、下手より以前の近習一人出來り、）
○　はツ、何御用にござりまする。

出雲　お談じ相濟む上からは、お持成の用意いたせ。

〇委細承知いたしまする。（ト直に下手へはひろ、宗俊思入あつて、）

宗俊　して、上州屋の娘儀は、何れに罷り居りまするや、御承引ある上からは、片時も早く宿元へ送り遣はし、母なる者に安堵いたさせ遣はしたし。

出雲　その儀は老女へ申し附け、卽刻支度を整へさせ、御歸院なさるゝ前方に、宿へ送らせ遣はせば、道海殿には御ゆるりと是れにて休息いたされよ。（ト是れにて宗俊窮屈だといふこなしあつて、）

宗俊　然らば娘を宿元へお遣はしある迄は、是れにて休息いたすでござるが、何は格別松江侯には、御不快中と承はる、お褥とてもござらねば嘸かし長座は御難儀ならん、さゝ、御休息御勝手次第。

出雲　病中なれば仰せに任せ、奥へ參つて休息いたせば、暫時御容赦下されい。

宗俊　さゝ、お構ひなくお越しなされい。

出雲　又もや後刻、御意得申さん。（ト唄になり、出雲守奥へはひろ、宗俊跡を見送り四邊へこなしあつて、）

宗俊　強情我慢も大名の、懐子ゆゑ脅しに恐れ、これでこつちの思ふ壺、この虛へ附入り目錄でもせしめて歸るがこつちの附目、是れからいふ目を出さにやあならねえ。

トにつたり思入、爰へ下手の襖より以前の近習四人二の膳附の本膳へ杯をつけ、銚子を持ち出來り、

宗俊の前へ直し、下手へ下り手を支へ、

一　はッ、火急の儀ゆゑ獻立も、粗末にはござりますれど、

二　清淨のみを專一に、調進なせし精進料理、

三　御酒もよいのを吟味いたし、持參いたしてござりますれば、

四　お疲れ休めにお杯を、お取り上げ下さらば、有難く、

四人　存じまする。（ト是れにて宗俊眞面目になり、）

宗俊　お心入れの御持成、忝くはござれども、飮酒は五戒の一つにて、沙門の身には好ましからず、又御膳部の品々も拙僧未だ空腹ならねば、頂戴なせしも同じこと、此の儘お下げ下されい。

一　すりや、お心に、

四人　叶ひませぬか。

宗俊　身不肖ながら一品の御位尊き御門主へ、身近う仕ふる此の道海、在家の料理は好ましからず、相成るべくば山吹の、お茶を一服所望申すと、御重役へお傳へ下さい。

一　はゝッ、委細承知、

四人　仕つる。（ト近習四人件の膳を持つて下手へはひる。跡を見送りて、）

宗俊　精進料理を今の間に調へさせしは流石に大名、それを一番刎ね附けて、箸を取らぬがこつちの祕密、然しそこらに心附く、話せる奴があればいゝ。

ト爰へ下手より以前の數馬、白木の臺へ目錄を載せ持ち出來り、下手に下に居て、

數馬　御門主よりのお扱ひにて主家の害も一時に避け、臣等が悦び是れに過ぎず、重役共も御使僧へ御禮申し上げまする。

宗俊　御丁寧なる御挨拶、拙僧ことも祝着いたすと、よしなに仰せ下されい。

數馬　その儀について御使僧へ御意に叶ひしお成持を、種々心配は仕つれど火急の儀ゆゑ心に任せず、失禮にはござりますれど、扇子一對獻上いたせば、何卒御受納下さるやう偏に願ひ奉つる。

ト件の目錄臺を出す、宗俊是れを見て、態と合點の行かぬ思入にて、

宗俊　こは珍らしき下され物、扇子なりと仰せあれど、見受けし所は目錄包み、是れが扇子でござるかな。

數馬　はゝツ、それぞ黃金の山吹を畫きましたる天地金、末廣々と御受納の儀を、偏に願ひ奉つる。

宗俊　はゝあ、然らば中は金子でござるか。

數馬　失禮ながら扇子料、何卒御受納下さりませう。

宗俊　金子でござれば供方へ、何卒この儘お遣はし下されい。
數馬　あいや、お供方へは別段に、只今同じく扇子料を呈上いたしてござりまする。
宗俊　なに、供方へまでお心附けとな、痛み入つたるお計らひ、折角の思召しゆゑ受納いたすとお傳へ下さい。
數馬　すりや御受納下さりますとな、それにて一統大慶至極。
宗俊　して、上州屋の娘儀は、未だお渡し下されぬか。
數馬　その儀は只今主人より勝手次第に引取るやうにと、暇の願ひ許りしゆゑ、當人ことは蘇生の思ひ、支度萬端取揃へ廣敷へ出で御使僧の、お立ちを相待ち居りますれば、御歸院の折宿元へ、何卒お連れ下さりませ。
宗俊　然らば今日駕籠脇へ附添ひ參りし若侍、櫻井新之丞と申すものに、此の道海が申せしゆゑ卽刻宿へ當人を送り屆け遣はしますやう、御苦勞ながらお傳へ下さい。
數馬　左樣ござれば御使僧の、御歸院なさるゝ前方に、娘を宿へ遣はしませうや。
宗俊　沙門の身にて媚きし娘は同道いたされねば、先きへ宿まで送るやう、仰せ付られ下されい。
數馬　然らば駕籠を申し附け、櫻井氏へお賴み申さん。

宗俊 何卒よしなに、御苦勞ながら、

數馬 委細承知仕つりまする。

ト數馬下手へはひる、宗俊思入あつて件の目錄包みを取上げ、貫目を引いて見て、

宗俊 いはぬ色なる山吹の花を包みし目錄も、明けては見ねど五十兩、何より馳走は、（ト臺の上へ件の包みを置くを道具替りの知らせ、）是れに限る。

トにつたり思入、此の模樣時計の音にて道具廻る。

（太守居間の場）═本舞臺一面の平舞臺、正面上の方九尺の床の間、此の次一間金地の袋戸棚、下の方銀地へ墨繪の襖上下折廻し黒緣帶入の杉戸、左右正面共一面長押附き、總て松江家太守居間の體、眞中褥の上に以前の出雲守着流しにて住ひ、左右に腰元○△□◎の四人住ひ、前に酒肴の道具取り散らしてある、此の模樣靜なる舞の鳴物にて道具留る。

○ 御前樣には最前よりお杯さへ其の儘に、お取上げ遊ばしませず、

△ 物思はし氣の御樣子にて、お考へ事を遊ばしまするが、

□ 何か御意に叶はぬことでもありはいたしませぬか、

◎　不束な私共ゆゑ、不調法の段は幾重にも。

○　御免なされて、

四人　下さりませ。

出雲　いや／＼、何も其の方共に不調法などはありはせぬが、今日上野御門主より使ひに參りし道海は、はて、誰やらに似て居るが、とんと思ひ出されぬゆゑ、心を勞して考へ居るのぢや。

○　ほんにそれ／＼、只今もお廣敷でその噂がござりましたが、上野から來たお使ひ僧は大層好い殿御振ぢやと、みんなが申して居りました。

△　その上お供のお駕籠脇へ附いて參つたお侍は、歌舞伎役者の菊五郎に生寫しぢやと申す評判、

□　役者といへばお使ひ僧は、團十郎の綿繪によく似て居るではござりませぬか。

◎　ほんに團十郎が宗玄でも、いたしましたら彼のやうに、好い坊さんが出來ませうわいな。

ト是れを聞き出雲守思ひ入あつて、

出雲　おゝ、思ひ出したわえ。（ト大きく言ふ。）

○　お思ひお出し、

四人　遊ばせしとは。

出雲　今そち達が申したる、宗玄といふ宗の一字でやう〳〵思ひ出したるが、それともに又違うて居るか、大膳を是へと申せ。

○　はあゝ、（ト立上り下手へ向ひ）大膳さま、御前樣が召しまする。大膳さま〳〵。

ト呼ぶ、下手にて、

大膳　はッ、只今それへ參上仕つる。（ト聲して下手の杉戸を明け、以前の大膳出來り下手へ住ひ）はッ、何ぞ御用でござりまするか。

出雲　おゝ大膳、近う〳〵。

大膳　はッ、御免下しおかれませう。（ト前へ進む、出雲守思入あつて）

出雲　そちを呼んだは別儀でないが、今日上野東叡山より宮の使ひに參りし僧に、其の方面會いたしたか。

大膳　未だ面會いたしませぬが、何か仔細がござりまするか。

出雲　三衣を纏ひ居りしゆゑ予も心附ず居つたるが、彼れが面差いづれにてか見受けし覺えこれあるゆゑ、深く考へ居つたる所、只今是れにて腰元共が宗玄と申せし詞に、やう〳〵思ひ出せしが、御數寄屋坊主の宗俊に、面體似たる使僧の道海、そちに目利をいたさせんと、至急に是れへ召出し

たのぢや。

大膳　その河內山宗俊は、お城使ひの度每に能く出逢ひましてござりますれば、面體恰好物ごしまで、拙者存じて居ります。

出雲　未だ歸院いたさぬ樣子、書院へ參つて目利いたせ。

大膳　はッ、委細承知仕りまする。（ト大膳下手へはひる。）

出雲　萬一かれが河內山の宗俊なれば紛れ者、浪路は渡し遣はされねば只今の內差止め置かん、岩崎をこれへと申せ。

△　はツ。（ト立たうとする。下手より以前の岩崎出來り、）

岩崎　御前樣、嘸御殘念にござりませう。（トよろしく住ふ。）

出雲　只今そちを召寄せんと迎ひの者を遣はす所、して〳〵、いまだ浪路めはそちの部屋に居るであらうな。

岩崎　いえ先刻の仰せ付ゆゑ、當人に申し聞けまするると、毒蛇の口でも脫れたやうに衣類調度を取揃へ、挨拶さへもそこ〳〵に逃げ支度をして居る所へ、お駕籠脇の侍にて櫻井とやらいふ仁が、乘物に乘せ宿元へ片時も早く送り行けば、渡してくれと申しますゆゑ、今方浪路は先方へ引渡しましてご

ざりまする。

○そんなら、最早、

腰元
四人 浪路どのには、

岩崎 籠を放れし小鳥のやうに、いそ〳〵飛んで行きましたゆゑ、もう半道も行きましたかと思ふにつけても御前樣は、嘸御殘念にござりませう。

出雲 それと知つたら容易には、暇を出すでなかりしに、こりや早まつたことをいたした。

ト下手より大膳出來り、

大膳 はッ、篤と透見をいたせし所、御賢慮の如くかの坊主は、河内山めに相違ござりませぬ。

出雲 いよ〳〵それに相違ないか。

大膳 日頃拙者が見覺えある左の高頬に一つの黑子、それが何より證據にござりまする。

出雲 何ゆゑあつて宗俊めが、使僧と僞り參りしか、一圓合點が參らぬわえ。

大膳 御前樣には御存じなけれど、彼の河内山宗俊めは身分柄をも顧ず博奕の徒に打交はり、奸智に長けし曲者なれば、こりや何者にか賴まれて、企みをなせしと覺えたり。

出雲 さては彼れめが奸計にて、腰元浪路を宿元へ、連れ行く企みで參りしか。

大膳　して、浪路めは宿元へ、未だお下げ遊ばしませぬか。
岩崎　いえ左樣の事とも知らぬゆゑ、御前樣のお許しゆゑ、今方宿へ下げました。
○　ても早まつた、
腰元四人　岩崎さま。
岩崎　こりや落着いては居られぬ譯ぢや。（ト岩崎あわてゝ下手へはひる。出雲守思入あつて、）
出雲　然し、世上に似たものは、往々ある習ひに取調べ、
大膳　化顯して引ッ括り、恥面かゝして御覽に入れん。
出雲　然らば大膳ぬかるまいぞ。
大膳　我が君御免、（ト大膳逸散に下手へはひる。出雲守思入あつて、）
出雲　名に負ふ日光御門主の宮の使僧と聞きしゆゑ、心奪はれ恐縮なし茶道風情におめ〳〵と、欺かれしは殘念至極、隱すことほど漏れやすく、必ず好事門を出でず惡事千里を走るの譬、かゝる事ども何時となく世上に流布なす其の時は、出雲守の家の瑕瑾、こりや此の儘には相成らぬ。
ト爰へ下手より數馬出て下に居て、
數馬　御前樣。（ト出雲守見て、）

出雲　委細を聞いたか。
數馬　はッ。
出雲　予も殘念ぢや、推量いたせ。
數馬　何卒事を穩便に、
出雲　一世の恥辱ぢや。（ト刀掛の刀を取つて、とんと突くを道具替りの知せ）捨て置かれぬわえ。
トきつと思入、此の模樣早舞にて道具廻る。
（玄關先の場）――本舞臺三間の間中足の二重、本庇式臺附の大玄關、左右黑緣間平棧の杉戶、正面の鏡大紗綾形の襖、玄關の上下瓦屋根附の白壁、腰通り板羽目、下手よき所に腰掛けの控所、上の方に松の立木、日覆より同じく釣枝、總て松江家玄關先きの體、合方調べにて道具留る。と奥より以前の近習一二三四出來り、式臺へ下り花道へ向ひ、
一　それに控へられしお供方、
二　御使僧のお立ちでござるぞ。（ト呼ぶ、花道の揚幕にて、）
中間　はあゝ。（ト答へ、紺看板の中間一人草履を持ち出來り、式臺の前へ草履を直す。）

三　お供廻りはよろしうござるか。

中間　御門前に揃ひ居ります。

四　然らば奥へ申し上げん。（ト此の時奥にて、）

五六　何れも方、お立ちでござるぞ。

四人　はッ。

ト左右へ別れ、下に居て式臺へ平伏する。是より誂への鳴物になり、よき程に正面の襖を明け、以前の宗俊珠數を爪繰りながら出來る、五六の近習是れを送つて出て、よろしく下に居る、宗俊皆々を見て、

宗俊　これは／＼各々方には、御丁寧なるお取扱ひ、拙僧身に取り過分にござる。

一　急のお立ち、重役共、

二　お見送りも仕つらず、

三　失禮の段は幾重にも、

四　御高免なし、

四人　下さりませう。

宗俊　最早これまで參つてござれば、お見送りには及び申さぬ。
一　左樣ござらば、
四人　御使僧樣。
宗俊　高木氏へよろしう。
六人　はツ。（ト平伏する。是れにて宗俊式臺より下り草履をはかうとする、此の途端後にて、）
大膳　御使僧、暫く、（ト聲を掛ける、是れにて宗俊立ち留り、）
宗俊　お止めありしは、何人なるか。（ト爰へ奧より以前の大膳出來り、）
大膳　暫くお待ち下さりませう。（ト式臺へ下りて平伏する。宗俊大膳を見て、）
宗俊　して、其許はな。
大膳　今日出仕遲刻いたし、御面會をいたさゞりしが、拙者ことは當家の重役北村大膳と申すもの、お見知り置かれ下さりませう。
宗俊　すりや、其許が聞き及ぶ北村氏でござるよな。
大膳　して御使僧の御尊名はな。
宗俊　拙僧の名でござるか。

大膳　はッ、仰せ聞けられ下されい。（ト宗俊思入あつて、）

宗俊　こは改まりしそのお尋ね、拙僧ことは上野なる當御門主に仕ふまつる北谷道海と申すもの。

大膳　すりや、其許が道海殿とな。

ト宗俊の顏をぢつと見上げる。宗俊思入あつて態とさあらぬ體にて、

宗俊　以後はお見知り下されい。

大膳　あいや、只今お顏を見知るに及ばず、その以前より見知つて居るが、いつお手前はお茶道を、脫しめされて三衣を纏ひ、沙門の道へ入られしぞ。

宗俊　こは異なことを申さるゝが、茶道を脫し沙門に入りし、拙僧嘗て覺えない。

大膳　おとぼけあるな宗俊殿、日頃お城の使ひを勤むるこの大膳を見忘られしか、お數寄屋坊主の其の內でも、頭と呼ばるゝ河內山、何で身共が見忘れませうや。

宗俊　いや、拙僧は左樣な名前をば貴殿に呼ばるゝ覺えなし、他人の空似と世上には、よくも似たものも往々ござれば、人違ひばしめさるゝな。

大膳　やあ、いか樣にしらを切らるゝ共、脫れぬ證據は覺えある、左りの高頰に一つの黑子。

宗俊　やあ。（トぎつくり思入。）

大膳　何と相違はござるまい。（トきつと言ふ、是れにて宗俊これまでといふこなしあつて、）

宗俊　大膳殿には知つて居つたか、はゝゝゝゝ。（ト笑ふ。皆々びつくりして、）

一　さてこそ、使僧は、

六人　贋ものよな。

宗俊　いかにも使僧と僞つたは、お數寄屋坊主の頭たる、河内山宗俊だ。

大膳　それ、何れも。

六人　はツ。（ト近習六人身構して立掛る、是れにて中間はびつくりして花道へ逃げて入る、宗俊きつとなり、）

宗俊　えゝ、仰々しい、靜にしろ。（ト二重へ腰をかける、是れにて誂への琴入りの合方になり、）惡に強きは善にもと、世の譬にも言ふ如く、親の歎きが不便さに、娘の命を助ける爲め腹に巧みの魂膽を、練塀小路に隱れなきお數寄屋坊主の宗俊が、天窓の圓いを幸ひに法衣でしがを忍ぶが岡、神の御末の一品親王宮の使ひと僞つて、神風よりも御威光の風を吹かして大膽にも、出雲守の上屋敷へ仕掛けた仕事の曰窓、家中一統白壁と思ひの外に歸りがけ、邪魔な所へ北村大膳、腐れ欒を附けたら知らず、拔きさしならねえ高頰の黑子、星をさゝれて見出されたら、そつちで歸れと言はうとも、こつちで此儘歸られねえ、此玄關の表向きおれに騙りの名を附けて、若年寄へ差出すか、

但しは騙を押し隠し、御使ひ僧で無難に歸すか、二つに一つの挨拶を聞かねえ内は宗俊も、たゞ此儘にやあ歸られねえ。（トきつと言ふ、大膳嘲笑ひ、）

大膳　引かれ者の小唄とやら、所詮脱れぬ期と悟り、出るまゝの其の雜言、如何にもわれが望みの通り騙りと知れる上からは、縛りあげて首打落し、松江の手並を見せてくれん。

宗俊　いゝやさうはなるまいわえ、假令騙りの罪あるとも、若年寄の支配を受けお城を勤めるお數寄屋坊主、御直參の河内山だ、高が國主の大名風情に裁許を受ける謂れはねえ、それとも自由にこの首を、落されるなら落して見ろ。

大膳　さあ、それは。

宗俊　よもや首は、取れめえがな。（ト是れにて大膳是非なき思入にて、）

大膳　然らば騙りの次第を言ひ立て、此の儘上へ差出して、おのれの首を落させくれん。

宗俊　そりやあそつちの了簡次第、騙りと言つて差出せば、どうで命に拘はる兇狀、地獄へ行つて拔かれても此の三寸の舌先で、おれが喋べつたことならば、そこは持前淨玻璃の鏡にかけて身上の知行高に疵が附かば、劍の山よりけんのんだが、それを承知で居るならば、騙りに落しておれを差出せ。

大膳　さあ、それは。
宗俊　それとも無事に納めたくば、御使僧の道海で、このまゝおれを立たせるか。
大膳　さあ。
宗俊　又は騙りで差出すか。
大膳　さあ、
宗俊　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。
宗俊　早く返事を聞かせてくれろ。（トふて〴〵しく言ふ、是れにて大膳こらへ兼ね）
大膳　もうこの上は。
ト立掛る、此の前方より後へ以前の小左衞門出かゝり、此の體を窺ひ居てこの時前へ出で、大膳を留め、
小左　あいや大膳殿、お待ちなされい。
大膳　誰かと思へば高木氏、何ゆゑあつてお留めなさる。
小左　さ、お留め申すは御門主の、内命蒙むる御使僧へ餘りと申せば失禮至極。
大膳　何と。（ト小左衞門態と下に居て）

小左　はッ、お役目相濟む上からは、道海殿には此の儘に、何卒お立ち下されい。
　ト辭儀をなす、大膳思入あつて、
大膳　いや〳〵さうはなりませぬ、貴殿は御存じござるまいが、彼れは騙りの河内山。（ト言ふを冠せて、）
小左　やあ、又しても〳〵東叡山の御使僧に、失禮至極の御雜言、既に先刻廣間に於て殿御對面ありし上、御門主よりの內命にて腰元浪路の一儀相濟み、今御歸院の際に臨み、疑惑めさるは大きな僻事。
大膳　ぢやと申して、みす〳〵騙りに。
小左　はて、みす〳〵堅固な御使僧を、疑惑めされて詮議なし、そでない時は大きな恥辱、殿のお名まで引き出しなば、御家の瑕瑾に相成りまするぞ。
　ト小左衛門思入あつてきつと言ふ、是れにて大膳餘儀なく控へる、宗俊思入あつて悠々と立上り、
宗俊　すりや騙りだと申せしは、心得違ひと言はるゝか。
小左　はツ、よしなき僻目に大膳が貴僧を疑ひ申せし失禮、拙者代つてお詫びいたせば、何卒御歸院下されい。
宗俊　然らば宮の使僧にて、立ち歸つても御疑念なく、苦しうはござらぬか。
小左　はツ、相違あらざる御使僧なれば、此の上ともに內分に、いやさ、何分共に御前よろしう。

宗俊　むゝ、流石は大家の御家老職、お取計らひ感心いたす。（ト草履をはき、花道の方へ行き掛るゆゑ、）

大膳　此の儘返さば君の上意が、（ト立掛る、爰へ奥より以前の數馬つか〳〵と出て、大膳を留め、）

數馬　あいや、御前の上意、お控へなされい。

大膳　すりや我が君より、お止めありしか。

數馬　無禮の粗忽と仰せでござる。

大膳　はて、其の筈ではなかつたが、

ト合點の行かぬ思入、此の內宗俊花道よき所まで行き、跡を見返り大膳を見て、

宗俊　いやなに、高木氏、才智勝れし貴殿に引替へ、北村氏の思慮なき留め立て、拙僧甚だ抱腹いたす、夫の下々で玩ぶ川柳とやら申す雜俳、滑稽者流のざれ言にも、大男總身に智慧が廻りかね、形ほど智慧はござらぬな。（ト是れを聞き、大膳たまりかね、）

大膳　餘りと申せば、

ト花道の方へ行かうとする、此の前方後へ以前の出雲守出で、宗俊の樣子を窺ひ居る、數馬大膳を留めて、

數馬　あこれ、御前でござるぞ。

トきつと言ふ。これにて小左衞門、大膳其の外近習六人後を見返り、出雲守を見てびつくりなし、

小左
皆々　はゝはツ。（ト平伏する、宗俊この體を見て、）

宗俊　馬鹿め。（ト笑ふを木の頭、）むゝはゝゝゝ。

ト嘲笑ふ、舞臺皆々是れを見て太い奴だといふ思入、よろしく太撥の時の太鼓にて、

ひやうし幕

ト此の幕練塀の道具にて、幕引附けると、ばた〳〵になり、花道より直次郎絹羽織袴股立大小の侍にて出來り、花道にて、

直次　こう兄貴、娘は宿へ滯りなく、送り屆けたから安心しねえ。

宗俊　そいつは大きに御苦勞だつた。ときに供方一統へ手當が出たといふことだつたが、定めておぬしも貰つたらうな。

直次　駕籠脇へとして別段に、廿五兩せしめこんだ。

宗俊　それぢやアおれの半分出たか。

直次　はゝあ、それぢやあ兄貴にやあ五十兩出たか。

宗俊　おれの持場だから仕方がねえ。（ト直次郎舞臺を見て）

直次　こう兄貴、後の物見で見て居る樣子だ。

宗俊　えゝ、（ト後をちよつと見て氣を替へ、眞面目になり、）櫻井氏には、お使ひ大儀。

直次　御使僧には、先づお乘物へ。

宗俊　おゝ、左樣いたさう。

ト兩人入れ替り、眞面目に花道へはひる。鳴物打上げ、止めの木にてシヤギリ。

四幕目

橋場寺田閑居の場

〔役名――片岡直次郞、筆職人寺田幸兵衞、島屋の手代半七、魚賣山谷の藤五郞、家主佐次郞兵衞、島屋手代與兵衞、甲子屋若い者三吉。大口の抱へ三千歲、幸兵衞女房お元、裏長屋の女房お鍋、家主下女おかま、裏長屋女房おさら、忰新之助。〕

（裏長屋の場）――本舞臺三間の間庇附の屋體、上手一間臺所寺田と記せし腰障子、櫺子を提灯の皮で張り、此の上三尺の戶袋、下手一間の中窓障子の開け閉てあり、この下三尺の戶袋窓の上鼠壁裾通り板羽目、上の方後へ下げて雪隱の後を見たる板羽目、下の方一間中窓のある障子屋體、この前四ツ目垣、上手よき所に流し附の井戶、釣瓶あり、總て橋場總泉寺門前裏長屋の體。おなべ結び髮裏長屋

女房のこしらへにて、盥を控へ洗濯をして居る、おさら同じく女房にて手桶を置き水を汲み居る、おかま島田髷下女のこしらへにて、手桶を持ち立掛り居る、紙礁の合方へ通り神樂を冠せ幕明く、

さら　大家さんのおかまどん、水を汲むなら爰へお出し。
かま　有難うござりまする、今わたくしが汲みます。
さら　遠慮せずと早くお出し、一杯汲むも二杯汲むも同じことでありますよ。
かま　それぢやあお願ひ申しませうか。（ト手桶を出す、おさら水を汲んでやる、）
なべ　何ぞおかまどんに貰つたか、大層胡麻を摺んなさるね。
さら　何も貰やあしないけれど、五月ばかり店賃の借りがあるので、おかまどんが度々催促に來なさるから、水くらゐ汲んであげにやならない。
なべ　おや、お前の所でも借りがあるかえ、わたしの所でも三月溜つてやう／＼昨日五兩取りの前垂無盡が當つたので、二月借を返しました。
さら　雨露凌ぐ店賃だから晦日々々にあげたいものだが、一升買ひをして居るうちは大家さんの御厄介だ。
かま　そりやお前さん方ばかりぢやない、十五軒ある店の內で借りのない家は一軒もない、大きな聲で

は言はれないが、爰の寺田といふ家などは御亭主が久しく煩つてゐる、半年から溜つて居る、能く催促に參ります。

なべ　以前は讀物の師匠をして立派にして居なすつたさうだが、不仕合せで長者町から貧乏長屋の、この橋場へ引越し早々から御亭主に煩はれ、ひどく困つて居なさる樣子。

さら　それゆゑ此の頃お上さんが、吉原の大口へ通ひお針に行かれるので、少しは都合がよいやうだ。

かま　それにあゝいふお上さんゆゑ女郎衆に可愛がられ、殘り物を貰つて來るので何時が日にも見たことのない魚の骨が、裏口に捨てゝあることがあります。

なべ　聞けば女郎衆ばかりでなく、九兵衞とかいふ番頭が、大層可愛がるといふことだ。

さら　さういふ內職をしなすつたら、店賃の借りはなさゝうなものだに。

かま　やつと一月入れたきり、まだ五月溜つて居ります。

トやはり右の合方にて障子を明け、お元前垂がけ世話女房のこしらへにて、手桶を提げ出來り、

もと　これはお隣りのお上さん、お洗濯でござりますか。（ト三人びつくりなし、間の惡き思入）

なべ　此の冷たいのに洗濯をいたしたくもござりませんが、昨夜宿六がづぶ六醉つて溝へ落ちて來ましたから、仕方なしに洗ひますのさ。

もと　それはお危うござりましたが、お怪我をなされはしませんだか。
なべ　膝ッ小僧を少しばかり、擦剝きましてござります。
さら　權兵衞さんもわたしのとこのも、酒といふと眼がないが、實に生醉は鼻ッ摘み、ふつ／＼厭になりますね。
なべ　もう十年も若ければ疾うに追ン出て行くけれど、四十になつては夜鷹にでも出るより外に仕樣がないから、まあ辛抱をして居ますのさ。
かま　寺田さんは御酒が嫌ひで、お上さんはお仕合せだ。
もと　その代り病身で、年中煩つて居ります。
なべ　それはお上さんのお手當が、過ぎますせゐでござりませう。
もと　なに、過ぎますせゐとは。
なべ　いえ、お酒をおあがりなさらぬから、大方御膳が過ぎませう。
もと　いえ／＼御膳は二膳より餘計喰べたことはござりませぬ。
さら　御病身な體では、二膳あがれば澤山だ。
かま　續けて三膳あがつたら、必ず病に障りませう。

さら　成るたけ控へ目になされませ。
なべ　然し夫婦の中の樂しみゆゑ、
もと　何とおつしやります。
なべ　いえ、今日は正月の十六日、息子さんが宿下りにおいでなさいませうから。
さら　嘸お樂しみでございませう。
もと　仰しやる通り昨夜から宿下りに參りますを、待ちに待つて居りますが、何ぞ用でもございますか、もう午過でございますのに、未だに參りませぬゆゑ、今方宿では今戸橋まで忰の參るのを見にまゐりました。
なべ　おゝ、幸兵衛さんも今戸橋まで歩いておいでなさるやうでは、よッぽどよいと見えますな。
もと　あら方よろしうございます。
かま　おゝ噂をすれば影とやら、幸兵衛さんが向うから、
さら　歸つておいでなさいました。

トやはり紙碪の合方、通り神樂にて花道より幸兵衛羽織着流し草履下駄にて、誂への鯛を提げ出來り、花道にて、

幸兵　今日は悴新之助が宿下りに來る賽日ゆゑ、何ぞ魚を喰したいと今戸橋まで迎ひがてら、深川物を見に行つたが、不漁なせゐか一人も來ず、悴の顔も見えぬため、すご〳〵歸つて來る途中、思ひがけない鯛を得しは、夫の氷中に鯉を得しは王祥が親を思ふゆゑ、これは子ゆゑに天の賜、嘸女房が悦ぶであらう、（ト舞臺へ來る、此の内お元水を汲む、）お元、今歸つた。

もと　まだ新之助は見えませなんだか。

幸兵　餘程橋臺に待つて居たが、新之助が見えぬゆゑ、山谷を廻つて來はせぬかと、取つて返す其の道で此の鯛を買つて來た。（トお元をはじめ皆々に見せる。）

なべ　これはまあ見事な鯛でござりますな、此の頃の不漁續き、嘸高うござりましたらう。

さら　お宿下りの御馳走が、これではしつかり出來ませう。（トお元無駄な物をといふ思入あつて、）

もと　悴が宿下りに參つたとて、小さな鰈でも買へば濟むのに、何でこんな大きな鯛を買つてお出でなさいました。

幸兵　以前懇意な魚屋に今戸橋で測らず出逢ひ、安く負けてくれたゆゑ、つい張込んで買つて來た。

もと　さういふことなら仕方もないが、今では是れをこしらへる庖丁さへもない中で。

幸兵　はて庖刀は大家さまへ、御無心申して借りるがよい。

かま　いえ〱私共に庖刀は菜切庖刀があるばかり、もう私が參つても三年越しでござりますが、遂に一度庖刀でこしらへるやうな魚をば、買つたことはござりませぬ。

幸兵　大家さまに庖刀がなくば、鰹節小刀でこしらへようか。

なべ　お恥しいがわたし等は、鯛を買つたことがなければ、拵へることは言ふに及ばず、

さら　うしほはどんな味なものか、喰べたことがござりませぬ。

幸兵　今にこれを拵へましたら、うしほなりと煮附なりと、御馳走いたしませう。

さら　それは有難うございますが、うしほをお貰ひ申しましたら、

なべ　又宿六がぐでんになり、溝へでも落ちませう。

幸兵　何にしろこれを入れる大鉢はあるまいかな。

もと　長者町から引越す時、邪魔なものは一纏めに、みんな賣つてしまつたゆゑ、大鉢などはござりませぬ。

幸兵　それではどうしたものであらうな。

もと　擂鉢へでも入れて置きませう。

幸兵　定めて俎板もなからうな。

もと　何が内にござりませう。

幸兵　こりや厄介なものを、買ひ込んだわえ。

ト右の合方にて幸兵衞は鯛を提げ、お元は手桶を提げて臺所口へ入る、跡三人顏見合せ小聲にて、

なべ　おさらさん、お前何とお思ひだか、幸兵衞さんが買つたといふ今の鯛は大したもの。

さら　爰等であれを遣ふのは金波樓か甲子屋、小料理茶屋では遣ひきれぬに、

かま　いくらで買つたか知らないが、年季小僧の宿下りには、食過ぎるではありませんか。

なべ　寄るとさはると井戸端は、人の噂をする所だが、二朱や一分で買へぬものを。

さら　稼ぎも細い筆屋さんが、一兩からあるあの鯛を、買つたといふは合點が行かぬ。

かま　惡推か知らないが、金を出して買つたのでは、あるまいかと思ひます。

なべ　こりやお前の言ふ通り、人は見掛けに寄らぬから、

さら　安値で買うたとごまかしてるが、

かま　何處でか盗んで來たかも知れぬ。（ト此の時窓の障子を明け、お元顏を出す、三人びつくりして）

なべ　思ひがけない、

三人　お上さん。

もと　まだ皆さんは井戸端で、話しておいでなさいましたか。
なべ　つい浮々と噂話しで、
さら　腰を抜かしてしまひました。
かま　どれ叱られぬうち、
三人　歸りませう。（ト三人立ちかゝる。）
もと　障子越しゆゑ分りませぬが、今盗んだとおつしやいましたは、
かま　さあ、今盗んだと申しましたは、明巣を覗ふ泥坊が、いくらも裏へ參ります。
もと　それは不用心なことでござりますな。
なべ　ほんになけなしの一張羅を、
さら　取られぬうちに歸りなせう。
かま　左樣なれば、
三人　お上さん。
もと　後程お目に、（ト障子へ手を掛けるを道具替りの知せ、）掛りませう。
ト障子を締める。三人ほつと思入、通り神樂にて道具廻る。

（幸兵衞内の場）――本舞臺四間通し常足の二重、本庇本緣附正面一間の押入戸棚、張交の襖、續いて三尺の佛檀内に誂への位牌、佛具よろしく、障子開閉てあり、此の下一間障子出入り、續いて鼠壁大木小口切りの踏段、上の方後へ下げて障子屋體、下の方後へ下げて一間の雪隱、三尺暖簾の入口通ひの竹緣、この前摺鉢の手水鉢四ツ目垣、いつもの所竹の簀戸、玉椿の生垣、總て前の屋體表口の體、摺鉢に入れし鯛を緣側へ置き、二重に幸兵衞腕組をなし鯛へ思入、門口の外に與兵衞着流し股引雪踏、若い者こしらへにて立ちかゝり居る、合方紙碪の音にて道具止る。

與兵　もし、ちよつとお聞き申したいことがござります。

幸兵　何でござりますな。

與兵　筆職をなさいます、寺田幸兵衞さまといふのは、こちらでござりますか。

幸兵　はい、幸兵衞は手前でござります。

與兵　左樣なら御免下さりませ。（ト與兵衞内へ入り、二重へ腰を掛ける。）

幸兵　どちらからおいでなさいました。

與兵　私は神田の島屋から參りましたが、初めて上りましたゆゑ、方々尋ねて參りました。

幸兵　それは御苦勞でござりましたが、何ぞ御用でござりますか。

奥兵　手前店へ御縁家から奉公に來てござる半七どのが、昨日出たきり今に店へ歸られず、番頭さんも今朝までは內々にいたされましたが、打捨て置かれませぬは、掛先を二百兩受取つて歸らぬゆゑ、遊びにでも行かれたか但しは取られでもしたことか、御縁家ゆゑにちよつとこちらへお尋ね申しに參りました。（ト幸兵衞びつくりなし、）

幸兵　それはとんだことをいたしましたが、手前方へは二月ほど參つたこともござりませぬ、何にいたせ親父の方へ、その事をおつしやりましたか。

奥兵　今入谷の喜兵衞さんへもお屆け申して參りました。（ト合方にて、奥より以前のお元出で、）

もと　今奥で承はりましたが、半七が掛先のお金を持つて歸りませぬとか。

幸兵　中々以て一朱たりとも、御主人の物を掠めるなど、、不正な事のないことはおれが能く知つてるが、如何いたしたことなるか、して、掛先は何れより受取りましてござりますな。

奥兵　小日向のお屋敷から受取つたのでござります。

幸兵　小日向なら神田へは、水戸樣前から丸の內。

もと　人通りのない所ゆゑ、物取りにでも逢ひましたか。

幸兵　晝とて油斷のならぬ世の中、

もと　案じられることでござりまする。
與兵　どうか此方へ參られたら、半七どのを取押へ、店へ知せて下さりませ。
幸兵　親父の所か手前の所か、外へ參る所がなければ、今にも是れへ參りましたら、早速お知らせ申しまする。
與兵　何分お賴み申しまする。（ト立ちかゝろ。）
もと　是れはまあ遠方を、御苦勞さまでござりまする。
與兵　左樣なれば幸兵衞さま。
幸兵　憚りながらお店へよろしく。
與兵　畏りました。（ト右の鳴物にて與兵衞花道へはひろ。跡に兩人案じろ思入にて、）
もと　どういふ事で半七が掛先などの金を持つて、日頃に似合はぬことをしたか、合點の行かぬことでござんす。
幸兵　お主の金を遣ふなどゝ、そんなことはない筈だが、堅いやうでも若い者ゆゑ、不圖したことの出來心、（ト件の鯛へ思入あつて、）道に缺けたことをなしたか。
もと　便り少ない父さんや、姉に苦勞を掛けるとは、不幸なことでござんすなあ。

ト お元ぢつと思入、下手より縫包みの大きな犬出來り、跡より佐次郎兵衛中形の下襦袢、半纏着流し
草履下駄、家主のこしらへにて出來り、

佐次 えゝ此の犬はさつきから、爰らをうろ〳〵歩いて居るが、何處からまぐれて來居つたか、裏に子供が多いから嚙附でもしてはならぬ、しッ〳〵。

ト 佐次郎兵衛犬を下手へ追込む、お元門口へ來て、

もと 大家さま、何をなされまする。

佐次 知らぬ犬が裏へ來たから、今追出してしまつたのだ。(ト言ひながら内へ入り、) 幸兵衛どの、内であつたか。

幸兵 これは〳〵大家さま、ようこそおいでなされました。

もと あれへお通り下されませ。

佐次 いや構はつしやるな〳〵。(ト摺鉢の鯛へ目を附け、) 今下女の話しに聞いた、鯛といふは是れだな。

もと それではお内のお釜どんが、お話しいたしましたか。

佐次 あれが話しに聞いたれど、大方それは鯛ではあるまい、赤魚か目張に違ひないと話すをけなして來て見れば、目の下一尺五寸もある鯛も鯛も立派な鯛、何でこんなものを買はしつた。

幸兵　今日は忰新之助が宿下りに參りますゆゑ、小鰈の一枚も買ひませうと存じまして、今戸橋へ參りますと、以前懇意の魚屋に思ひ掛けなく出逢ひまして、極安くしてくれましたゆゑ、ついこれを買ひました。

佐次　極安いといつたとて二朱や三朱で賣りはしまい、こんな鯛を買ふほどの金があるなら店賃の、なぜ勘定をしないのだ、長煩ひで困るといふから地主の方へ立替へて、今日までこなたに貸して置いたは、金氣は家に鐵漿より外にないと思ふから。かういふ鯛を買ふからは、金があるに違ひない、丸々出來ずば半分でも、今店賃の勘定さつしやい。

幸兵　まことに左樣おつしやいましては申し譯もござりませぬが、中々金がござりまして買つた譯ではござりませぬ、假令一朱でも一分でも除けて置きます金があれば御勘定の內へ入れますが、實の所は其の者に以前多くの貸しがあつて、小鰈を買ふその代で、これを負けてくれました。

佐次　それでは以前貸しのある魚屋ゆゑに小鰈を、買ふ値でこれを買つたとか、さうしていくらで買つたのだ。

幸兵　はい、只の一朱で買ひました。

佐次　目の下一尺五寸あるこの鯛が、只の一朱か、それは滅法安いものだ。然し忰が今日來たところが

僅か親子三人に此の鯛は多過ぎよう。

幸兵　それゆゑ之れを拵へて向ふ三軒兩隣りへ、上げますつもりでござります。

佐次　それは止さつせえ、無駄なことだ、おれが長屋に居る者は鰯か小鰭か鯖が精切り、喰附けぬ鯛を喰つて食傷でもした時は情が却つて害になる、一切たりとも止さつせい、あい等に喰すは勿體ない。其の代り多ければ是れまで貸した店賃の、利息と思つて家主へそつくり片身くれるがよい。

幸兵　如何にも店賃の申し譯に、あなたへ片身上げませうが、遂に是れまで魚屋の參つたことのないお家、

佐次　おゝ不斷はお寺と渾名の家主、斯ういふ時に腹一杯、鯛でも喰ふのが役德だ。

もと　然し不斷あがり附けぬ、お魚を上りましては、

佐次　はて、食傷しても大事ない。

幸兵　左樣ならば拵へましたら、

もと　片身あなたへ差上げませう。

佐次　身ばかりでなく頭も半分、大きい方をよこしなせえ。（ト言ひながら門口へ出る。）

幸兵　畏りましてござります。

佐次　今夜は二分はずまねばなるまい。（ト右の合方にて佐次郎兵衞下手へ入る、跡見送りお元思入あつて、）
もと　もし幸兵衞どの、お前この鯛を只の一朱で買つて來たと言ひなさんすが、わたしやどうも合點が行かぬ、誰から是れを買ひなさんした。
幸兵　そなたは知らぬが其の以前、おれが貸しのあるものゆゑ、安く賣つてくれたのだ。
もと　そりや何處の、何といふ魚屋さんでござんすえ。
幸兵　さあ、その魚屋は。（ト合方になり、）
もと　連添ふ女房に隱さずと、まことを言つて下さんせ。
幸兵　なに、隱さずとまことを言へとは。
もと　今も今とて井戸端で、幸兵衞どのがあの鯛を買つたといふは嘘らしい、其の日に困る身上で一兩からする高いものを何で買ふ譯がない、大方あれは魚屋から盜んで來たのであらうなどゝ、言ふのも尤もわたしでさへ、まことの事とは思はれませぬ。
幸兵　それでは長屋の上さん達が、盜んで來たと言つて居るか。
もと　はい、障子越しに聞くのが悔しく、窓を明けて顏を出したら、びつくりして三人とも話しを餘所に洗濯と共に流して歸りましたが、まこと是れを知つた人より一朱で買つたに違ひなくば、其の

幸兵　名を言つて下さりませ。（トぢつと言ふ、幸兵衞じゆつなき思入にて、）
今日宿下りに忰が來るゆゑ、爰等で近い甲子屋の物でも取つて喰べさせたいけれど、貯へなければ心に任せず、昔の暮しを思ひ出し、悔しい事と愚痴に迫り、今戸橋から歸る途中、寺門前にこの鯛があつたは人が落したかと、四邊を見れば往來もなく、道に落ちしを拾ふのは本意ならぬことなれど、捨てゝ置けば犬の餌食、可惜物を勿體ないと、拾つて來たは宿下りの新之助に喰したさ、子に迷つたばつかりに、落ちたるものを拾つて來たのだ。

もと　今は兎もあれ其の以前素讀の指南をなされた身で、犬の餌食にならうとも何ゆゑ道に落ちたものを、拾つておいでなされました、それでは忰一人の道を教へることもなりませぬ。

幸兵　今そなたに言はれて見れば、言譯のない我が粗忽、あゝよしないことをいたしたなア。

ト幸兵衞後悔の思入、お元は顏に袖を當て泣き居る、鳥追通り神樂になり、花道より新之助若衆鬘木綿の着附千種の股引白足袋雪踏尻端折り、丁稚のこしらへ、鮨の折を包みし風呂敷包みを提げて出來り、花道にて、

新之　今朝は早く宿下りに家へ行けとお袋さまが、聲を掛けて下すつたれど、十六日で出質が多く朝の御用を勤めてから、兩國へ廻つたので思ひの外遲くなつた、嘸お二人が待つてゞあらう。（ト右の

鳴物にて舞臺へ來り、）はい、御免下さりませ。（ト門口を明け内へはひる、お元涙を拭ひ、）

もと　おゝ新之助か、待つて居たく。

幸兵　何で今日は遲かつたぞ。

新之　今朝は、見世の御用があつて、四つを打つて出ましたのに、お父さんがお好きゆゑ鮨をお土産にあげませうと兩國の與兵衞へ廻り、大きに遲うなりました。

もと　さうとは知らず宿下りが、今日は延びでもしたことかと、お父さんが今戸橋まで見においでなされました。

新之　それはお氣の毒でござりました。

幸兵　そんなことはどうでもよい、まあく早く爰へ來やれ。

新之　はいく。（ト二重へ上り、）まだ御挨拶をいたしませぬが、お父さんの御病氣は、さつぱり宜しうござりますか。

幸兵　不斷程にはならぬけれど、先づあらかた全快いたしました。

新之　おつかさん、お寒いので、お癪が起りはなされませぬか。

もと　仕合せと去年から、一度も起つたことはない。

新之　それは宜しうございまする。（ト懐の木綿の紙入より金包を二ツ出し、）是れはお奥と番頭さんから、
お貰ひ申しましてござります。（ト幸兵衛取りあげ、）

幸兵　これは〳〵、御丁寧なる下されもの。

もと　以前勤めた御縁とて、有難いことでござんすな。（と新之助鮨の笹折を出し、）

新之　これは私のお土産でござります。

幸兵　一夜明ければ寒くとも、冷たいものが好もしい、何より是れは忝ない。

ト新之助紙入より、紙に包みし金を出し、

新之　又このお金はお小遣ひに、おつかひなされて下さりませ。（ト幸兵衛の前へ出す。）

幸兵　なに、そちが小遣ひをくれるとか。

もと　てもまあ優しい心ぢやな。（ト幸兵衛包みを開き見て、）

幸兵　二朱か一分と思ひの外、これは一分で一両あるな。

もと　え、一両持つて参りましたか。（ト両人顔見合せ心得ぬ思入）

幸兵　年季小僧の身の上で、一両といふ此の金を、

もと　どうしてそちは持つて居やるぞ。

幸兵　こりや大方出來心で。（ト兩人盜みをせしといふ思入あつて、）

もと　折角の土產ながら、心に濟まぬこの金子。

幸兵　出所を聞かねば受取られぬぞ。（トきつと言ふ、合方になり新之助思入あつて、）

新之　年季小僧の身の上で、分に過ぎた金子ゆゑお疑ひも無理ならねど、お氣遣ひをなされますな、此の一兩はお上より、賜りましてござりまする。

幸兵　なに、お上より賜りしとは、合點の行かぬ其の詞。

もと　譯を話して聞かしやいの。

新之　この一兩は先達木場へ參つた歸り路、往來のない川端に落ちてあつたを見附けましたが、奉公に出る其の時に道に落ちたを拾ふなと、お父さんのお敎ゆゑ行き過ぎましたが大事のお金、もし子供などが拾ひ取り川へでも打ち込めば勿體ないと存じまして、拾つて直に自身番へその趣きを屆けまして金を預けて歸りましたが、落主がござりませず、五日跡にお上から私へ下さりましたをお袋さまへお預け申し、今日宿下りにお二人へお小遣ひに上げませうと、お貰ひ申して參りました。

幸兵　すりや、此の金は拾ひしとか。（ト幸兵衞ぢつと思入。）

もと　よくもそなたはお父さんの、教を守つて訴へ出た、ても感心なことではある。

新之　自身番へ金を預け、歸つた時に朋輩よりなぜ默つて取つて置かぬと、みんなに笑はれましたけれど、拾つた物を訴へねば盗みをするも同然と、常々おつしやいましたゆゑ、直に訴へましたので自身番で褒められましたも、お父さんのお蔭ゆゑ、有難うござりまする。

ト新之助手を突き禮をいふ、幸兵衞はじゆつなき思入、お元は幸兵衞へ子でさへ訴へるになぜ拾つて來たといふこなし。

幸兵　教を守つて訴へ出たとは、親恥かしき忰の心。

もと　旦那どの。

幸兵　お元。（ト兩人顏見合せ思入あつて）あゝ、忰の前も面目ない。

ト幸兵衞腕を組み後悔の思入、お元ちつと俯き居る、新之助は合點の行かぬこなし、鳥追通り神樂になり、花道より直次郎羽織着流し雪踏好みのこしらへ、三千歳後帶餘所行きのこしらへ、駒下駄にて出來り、花道へ止り、

直次　牛に引かれて善光寺參りと、今日はお前に連れられて、田圃道を方々歩いた。

三千　疾うから死んだかゝさんのお寺參りをしたいものと、思つて居たが出られぬ體、やう〳〵直さん

お前のお陰で、口頃の願ひが叶ひました。

直次　是れといふも練塀小路の、兄貴が仕組んだ狂言へ頭數の役者になり、不意な金が入つたから、體を仕舞つて龜井戸から柳島の寺參り、小梅を斜に土手へ出て、それから橋場の渡し場まで道案內でがつかりした。

三千　わたしも歩きつけないので、よつぽどさつきは困つたが、眞崎の甲子屋に、久しく居たので草臥も、さつぱり忘れてしまひました。

直次　是れから尋ねるお針の家は、總泉寺の門前か。

三千　たしか向ふの家でござんす。

直次　それぢやあ向ふへちよつと寄つて、山谷の內で打ち止めか。

三千　いゝ道順でありましたね。（ト本舞臺へ來り門口から內を見て、）おゝお元さん、お內は爰かえ。

ト門口を開ける、お元見て、

もと　おや、おいらんでござりますか。（ト門口へ來て、）よくおいでなさいました。

三千　今日は餘所出で柳島から、こちらへ廻つて來ましたから、ちよつとお寄り申しました。

もと　誰も遠慮はござりませぬ、こちらへお通り下さりませ。（ト直次郎を見て、）何方かと存じましたら

いつぞや御厄介になりました、直次郎さまでござりますか。

直次　今日は三千歳が寺參りなしたいといふので、連れて出ました。

幸兵　穢くろしいが、これお元、これへお通し申さぬか。

もと　宿でもあのやうに申しますから、あれへおいで下さりませ。

三千　それでは直さん、ちよつとあそこへ。

直次　眞平御免下さりませ。

ト合方きつぱりとなり、幸兵衛下手へ來り、直次郎三千歳二重上下へ住ふ、新之助は下手へ來る、お元煙草盆を出す。

幸兵　これは三千歳さまでござりますか、毎度妻があがりまして、種々御厚情に預り有難うござります。

三千　いえもう、わたしこそ子供のうちから、苦界の里へ入つたゆゑ針を持つことを知らねば、お元さんのみんなお世話、お前さんよりわたしの方で、お禮を言はねばなりませぬ。

もと　そんな事をおつしやつては、勿體なうござります、もし幸兵衛どの、一緒においでなさいましたは、いつぞやわたしが疑ひを受けた時にお世話になつた、お客さまでござります。

幸兵　その節は手前妻が厚いお世話になりまして、有難うござりまする、殊には今日此處へようおいで

下さりました。

直次　不斷お上さんのお世話になるから、ちよつとお寄り申したいと三千歳が申すので、共々上つてお邪魔になります。

幸兵　これお元、何はなくともおいらんが、初めておいでなされたゆゑ、

もと　わたしも左樣存じますが、爰等に何もお肴が、

直次　いやその御心配には及びませぬ、今甲子屋へお土産の肴を言ひ附けて置きました。

幸兵　左樣なら甲子屋へ、おつしやり附けでございますか。

もと　それはお氣の毒でござりますな。（ト直次郎新之助を見て、）

直次　そこにおいでのは御子息かね。

幸兵　はい、左樣にござります。

もと　今日宿下りに參りましてござります。

新之　おつかさんがお世話になり、有難うござります。

直次　はて、お前は何處かで見たやうだが。

新之　はい、私は長者町の、上州屋に居りまする。

直次　おゝ、河内山が置附けの質屋のうちの小僧さんか。（ト此の内お元徒折の蓋をとり、八寸の膳へ載せ）
もと　これは忰が宿下りの、土産に持つて参りましたが、お一つお取り下さりませ。
直次　これは有難うござります、こりや與兵衛でござりますな。
もと　きついお目利でござります。
ト　お元茶を出す、此の内花道より三吉紺の腹掛股引甲子屋の紺半纏出前持のこしらへにて岡持と一升徳利を提げ出で、直に舞臺へ來て、
三吉　筆屋さんのお内は、こちらでござりますか。
もと　はい、手前でござりまする。（ト三吉内へはひる。）
直次　おい甲子屋か．御苦勞々々。
三吉　大きに遲なはりましてござります。（ト二ツ物の鉢肴と徳利を出し、摺鉢にある鯛を見て）この不漁に珍らしい佳い鯛がござりますが、こりやお内のでござりますか。
幸兵　はい、先刻求めました。
三吉　左樣でござりましたか。（ト不審の思入）道具は明日取りに上ります。
直次　お上さんによく言つてくんな。

三吉　畏まりましてござります。（ト門口へ出て、）今日あの鯛は一兩二分か二兩出さねば買へないが、どうして爰の內で買へたか、合點の行かぬことだなあ。（ト通り神樂にて三吉早足にて花道へはひる。）

三千　これはほんのお土産のしるし、一口あがつて下さいまし。

幸兵　こちらでお禮に上らねばならぬを、お土産に預りましては、まことに恐れ入ります。

もと　折角の思召しゆゑ、お持たせを開きまして、一口お上げ申しませう。

幸兵　おゝ、それがよい〳〵、穢くろしうはござりますが、奥は田圃を見晴しまして景色がよろしうござりますから、奥へおいで下さりませ。

直次　今呑んで來ましたから、其の御心配には及びませぬ。

幸兵　ではござりませうが、態と一口、

もと　どうぞ上つて下さいまし。

直次　それぢやあ仰せに隨つて、

三千　見晴しのよいお座敷へ。

もと　いえ、お座敷とおつしやつては、

幸兵　實にお恥かしうござります。

直次　どれ、御厄介に、

兩人　なりませうか。

ト合方通り神樂になり、直次郎三千歳先きにお元肴を持ち奥へはひり、直に出て來て、燗德利猪口などを膳へ載せて奥へはひる、此の內新之助は鯛に思入あつて、

新之　お父さん、この鯛はお買ひなされたのでござりますか。

幸兵　是れはそなたに喰べさせようと、今朝買つて置いたのだ。

新之　こりや餘程いたしましたらうに、なぜお買ひなされました。

幸兵　なぜ買つたとは。

新之　此の間お孃さまがお屋敷からお歸りなされ、お祝ひのあつた其の時に、おつかさまがお手傳ひにおいでなされてお泊りなされ、御不都合になつたことを詳しくお聞き申したゆゑ、どうかお貢ぎ申したいと思ひましても小僧の身の上、心の內で思ふのみ、天道さまのお惠みで思ひ掛けなく一兩のお金をお貰ひ申しましたは、孝行せよとのお授けと土產に持つて參りましたは、これで大概一月のお米の代はありませうと子供心に算用して、お內の助けをいたす心、干物を買つても濟みますのに、なぜ此のやうな無駄物を、あなたはお買ひなされました。

幸兵　まことにそなたにさう言はれると、面目もないことなれど、實は以前懇意なものより買つたといへど貰つたも同樣、なか〳〵無駄に鯛などを買ひ求めはいたさぬぞ。

新之　長いことではござりますが、どうぞ私の年の明くまで御辛抱なされて下さりませ、それ迄には出世してお二人共にお樂をさせ、產の御恩を送りますから、お待ちなされて下さりませ。

幸兵　おゝ忝ない志し、最早病氣も全快したれば是れから職を精出して、共稼ぎに稼いだら取り續くに違ひない、必ず心配してくれるな。

ト紙碪の合方通り神樂になり、花道より藤五郎紺の腹掛股引長半纏、上へ甲子屋の紺半纏草鞋魚賣りのこしらへにて、以前の三吉と一緒に出來り、

藤五　これ三公、鯛のあるといふはどこの內だ。

三吉　つい眞向うの筆屋の內だ。（ト言ひながら舞臺へ來り、）

藤五　それぢやあ爰の家にあるか。

三吉　あれ、擂鉢へ入れてあります。

ト兩人門口より內を窺ふ、下手より以前の佐次郎兵衛出來り、これを見て、

佐次　これ、貴樣達は何を捜すのだ。

藤五　鯛のある内を捜します。
佐次　鯛のあるのは爰の内だが、それぢやあ貴様が賣つたのか。
藤五　いえ、賣つたのではござりませぬ。
佐次　拵へにでも來たのなら、おれが片身貰ふ約束、早く拵へて貰ひたい。(トこれに構はず、)
藤五　はい、御免なさいまし。(ト藤五郎内へはひる。)
幸兵　どちらからでござります。
藤五　ちとお聞き申したいことがござります。
幸兵　なに、聞きたいことゝは。
藤五　憚りながら此の鯛は、どこでお買ひなされました。
幸兵　え、(トぎつくりなし、)何處で買つてもよいではないか。(ト三吉内へはひり、)
三吉　さつき肴を持つて來た時、失禮ながら此のお内に、不釣合な鯛があるから、此のちやんに話したのだ。
藤五　どこでお買ひなすつたか、買先きをお聞き申しませう。
幸兵　何で買先きを聞かつしやるのだ。

藤五　聞くのはさつき盗まれた、わつちが鯛に違ひねえから、買先きを言つておくんなせえ。

幸兵　さあ、其の買先きは。（ト幸兵衞言兼ねる。佐次郎兵衞内へはひる。）

佐次　片身貰ひに出て來たが、味に縺れたこの鯛は、どこでこなたが買つて來たのか、其の買先きを言はつせえ。

幸兵　さあ、それは。

新之　これお父さん、何處で買つておいでなされたのだ。

幸兵　さあ、それは。

三吉　その買先きが言へぬからは、盗んで來たに違ひない、

幸兵　何しに左樣な。

藤五　そんなら何處で買ひなすつた。

幸兵　さあ。

佐次　其の買先きを言はつしやらぬか。

幸兵　さあ。

藤五　言はぬからは、盗んだか。

幸兵 さあ、

藤五 さあ、

皆々 さあ〳〵〳〵。

藤五 きり〳〵返事をしねえのか。

トきつと言ふ、幸兵衞是非なき思入、新之助俯伏き泣き居る、奧よりお元出て來て、

もと これ幸兵衞どの、もう斯うなつたら是非がない有體に言つて下さんせ、お前の明りの立たぬ時はわたしまでも吉原で、疑ひ受けたがまことゝなり、夫婦共に盜みをするかと、人さまに思はれるのが、わたしや悲しうござりまする。（トお元泣く、幸兵衞思入あつて、）

幸兵 斯くなる上は是非に及ばぬ、包まず懺悔をいたしますが、今日忰が宿下りに參る時刻が遲いゆゑ今戸橋まで見に參りし其の甲斐もなく忰は見えず、すご〳〵內へ歸る途中、道に落ちてあつた此の鯛、四邊を見れば落したる人も見えねば其の儘に拾ひ取つて歸りしは、申し譯なき我が過り、これと申すも宿下りの忰にこれを喰したい、子ゆゑに迷つて道ならぬ事をなせしは今更に、千悔なすとも返らぬこと、七重の膝を八重に折りお詫びをいたしまするから、拾ひし鯛はその儘にお持ちなされて下さりませ。（ト幸兵衞手を突いて詫び、鯛を藤五郎の前へ出す。）

藤五　いや〳〵拾つたといふは嘘、何んでもこなたが盗んだのだ、それとも道で拾つたといふ何ぞ慥な證據があるか。

幸兵　さあ、證據といつては。

藤五　證據がなければ盗んだのだ、詞の詫ぢやあ濟まされねえ。

三吉　今更鯛を持つて行けとは、いけツ太え奴だな。

ト此の内下手へ以前のおなべ、おさら出て、囁き合ひ居て門の外から、

なべ　おや〳〵、それではあの鯛は、幸兵衛さんが盗んだのか。

さら　大方そんなことだらうと、わたし達は思つて居た。

なべ　まだしもう〳〵しほの一杯も、貰はないのがこつちの仕合せ。

さら　あらをしやぶつて引合ひに、附いては埋らぬ話しであつた。（ト佐次郎兵衛幸兵衛に詰寄り、）

佐次　いやはや呆れ返つたことだ、鯛を肴に一杯と二合買つたが損になつた、長煩ひで店賃も出來ぬこと〻思ふから、快く貸して置いたが、其の根性では家主を倒す心で借りたのだ、さういふ者に店は貸されぬ、後とも云はずにたつた今、店を明けて貰ひたい。

なべ　こりや大家さまのおつしやる通り、店立てがようございます。

さら　わたし共も泥坊と、軒並びは眞平だ。
もと　お前方まで同じやうに、拾つたものを盜んだと、何を證據に言ひなさんす。
なべ　天から降つたら知らぬこと、大道中にこの鯛が、落ちて居よう筈がない。
さら　こりや泥坊したに違ひない。
幸兵　私が盜みしとお疑ひなされまするは、御尤もでございますが、決して盜みはいたしませぬ。
佐次　そんなら盜まぬといふ、證據があるか。
幸兵　さあ、其の證據は。
佐次　證據なければ、
なべ
さら　こなたは泥坊。
藤五　さあ、自身番へうしやあがれ。（ト幸兵衞の胸ぐくしを取り、引つ立てる、是れを新之助止めて、）
新之　あゝもし待つて下さりませ、お父さんは病氣擧句、わたしを代りに自身番へ、連れて行つて下さりませ。
幸兵　こりや〳〵新之助、退いて居よ。
もと　怪我でもしてはならぬわいの。

新之　どうぞ代りにわたしをば、連れて行つて下さりませ。

藤五　邪魔な小僧め、退いて居ろ。

ト獅子の狂ひの鳴物になり、藤五郎幸兵衛を引立てようとする、新之助止めるを突倒す。此の時奥より直次郎出て、藤五郎を止め、

直次　樣子は奥で聞きました、まあ〳〵待つて下さりませ。

藤五　いや〳〵、止めて下さりますな。

直次　惡いやうにはしまいから、暫く待つて下さりませ。

ト直次郎藤五郎を止める、幸兵衛面目なき思入にて、

幸兵　始めておいでなされた、こなた樣のお耳に入り、面目次第もござりませぬ。

直次　盜んだと言ひ拾つたと言ひ、今爭ひの出來ましたは此の鯛でござりますか。（ト件の鯛を篤と改め見て、）こいや拾はれたに違ひない。

藤五　なに、拾つたに違ひないとは、

佐次　何を證據に言はつしやる。

直次　盜まれたといふこなたの鯛に、よもや疵はありますまいな。

藤五　おゝ遣ひ物にする鯛ゆゑ、一分の疵もありはしない。

直次　疵がないと言ひなされば、盗んだ者は外にあります。

藤五　して、盗んだる、

皆々　その者は。

直次　今この鯛の背の所に、しかとした齒形があれば、察する所犬が銜へて、途中へ捨てたに違ひない。

ト佐次郎兵衞見て、

佐次　成程、これは犬の齒形。

なべ　それでは犬が、

なべさら　盗んだのか。

藤五　假令犬が盗まうとも、途中に落ちてあつたものを、拾つて家へ持つて歸れば、何でもかでも泥坊だ。

直次　これ魚屋さん、鯛を盗まれ腹も立たうが、わたしも爰へ來合せて止めに入つた上からは、わたしに賣つてくんなさい、不漁擧句の鯛だから、定めて直段も高からうが、假令五兩が十兩でもそこに絲目は附けないから、内分にしてくんなせえ。

藤五　折角のお扱ひだが、どうも了簡がなりませぬ。
直次　なに、了簡がならぬとは。
藤五　見世へ飾つて賣る鯛なら、損せえ行かにやあ不承しますが、得意先から註文で買つて來た鯛だから、一兩のものを十層倍、十兩金をくんなすつても、得意先きへ濟まねえから、此の野郎を泥坊にして、恥をかゝせにやあ了簡ならねえ。
直次　成程、お前が得意先きへ濟まないといふは尤もだ、何處から頼まれなすつたか、共々お詫びをしようから、疵の附いたこの鯛はわたしに賣つてくんなさい、いくらなりとも望み次第、お前に代は拂ひませう。
藤五　お扱ひは有難いが、場末ながら眞崎の甲子屋の買出しで、川岸へ行かうが新場へ行かうが、少しは顔を知られた男だ、金に轉んで了簡したと世間の人に言はれちやあ、棒手仲間で幅が利かねえ、貧乏暮しにこんな鯛は喰ふことが出來ねえから、盗みましたと言ひなさりやあ頭ぐれえはくれてやらあ、盗んだものを拾つたと、ごまかされちやあ了簡ならねえ。
直次　それぢやあこれ程頼んでも、お前は了簡ならねえとか。
藤五　言ひ出したら何處が何處まで、後へ引かねえ山谷の藤五郎、何でもかでも表沙汰にしにやあおれ

の腹が癒ねえ。（ト藤五郎きッとなる、此の時奥より三千歳出來り）
三千　折角人が止めるのに、もういゝ加減におしでないか。
藤五　いゝ加減に出來るものか。（ト三千歳を見て、）や、手前は娘か。
三千　そんなに大きな聲をせずと、まあ靜におしなねえ。
直次　それぢやあ、お前は三千歳の、
藤五　あい、わつちァ親父でござりまする。
幸兵　思ひ掛けないおいらんの、
もと　親御さんでござりましたか。
藤五　どうして娘は爰に居たのか。
三千　今日直さんに連れられて、久し振りでお寺へ參り、こちらの內のお上さんに不斷仕事のお世話になるから、ちよつとお禮に門から寄り、これから家へ行くつもりさ。
藤五　むゝ、それぢやあ噂に聞いて居た、直さんといふは、お前さんかえ。
直次　不圖した緣で、二年越し三千歳の所へ行きますのさ。
藤五　娘が客のお前さんに、强情なことを言ひましたが、知らぬ昔でござりますから、了簡して下さい

まし。

直次　不断話しに聞いて居たが、つひぞ是れまで逢はなんだから、とつさんとは知らなんだ、斯う名乗り合ふ上からは、是れで了簡してくんなせえ。（ト一分銀を三兩包んで出す。）

藤五　いえ〳〵是れには及びませぬ、娘がお世話になる上に、犬が引いたとあるからは、金を取つては濟みませぬ。

直次　是れを取つてくんなさらにやあ、お前よりこつちが濟まねえ。

藤五　いえ〳〵、これは取られません。

三千　お前がそれを取んなさらぬと、止めに入つた甲斐がないから、幾らで買つたか知らないが、それだけお前貰つてお置きな。

藤五　不漁舉句で二分高く、一兩二分で買つたから、それぢやあ半分貰ひませう。

直次　さういふことなら一分の口錢、二兩お前に上げようから、これで了簡してくんなせえ。

ト直次郎二兩紙に包み、藤五郎へ渡す。

藤五　これぢやァあんまり儲かり過ぎます。

なべ　思ひ掛けない魚屋さんと、あのおいらんと親子とは。

さら　何處にどんな知つた人が、

三吉　ほんにあるか知れませぬ。

佐次　何にしても魚屋さんの娘にしては美し過ぎる、譬にもいふ鳶が鷹、こりやあお前の實の娘か。

藤五　實の娘ぢやあござりませぬ、わつちが女房の妹の娘、胤は立派な武家ださうだが仔細あつて音信不通、妹が死んだ其の時に取片附から醫者の禮、何やかやで七ツの年に僅かな金で賣りましたのさ。

佐次　そんなことであつたらう、目尻の下つた爺さんとは、實に鼈とお月さまだ。

藤五　おゝ鼈といへば、重箱の鯉でも買つて馳走をしようか。

三千　馳走は決していらないが、お前一足先きへ歸り、

藤五　おゝ、掃除をして待つて居よう。

直次　それぢやあ爺さん、

藤五　とんだ厄介になりました。（ト合方通り神樂になり、藤五郎三吉花道へはひる。）

佐次　時に鯛の片が附いたら、わしの貸した店賃の片も附けて貰ひたい。

直次　そりやおつしやる迄もなく、あなたの片も附けまするが、店賃の貸しといふのは。

佐次　一月が二分一朱で五月溜つて三兩二朱、丸々出來ずば半分でも、片を附けて貰ひたい。

直次　僅ばかりの三兩二朱、殘らず只今上げませう。（ト紙入より金を出すを見て、）

幸兵　思召しは有難けれど、緣も由緣もないお方に、もとそれをお出させ申しては。

直次　はて、わたしとて萬更緣の、いやさ、緣にからまる三千歲が、お世話になればお禮代り、必ず遠慮をなされますな。

幸兵　でも、三兩といふお金を。

三千　堅い心のお二人ゆゑ濟まぬと思ひなさんせうが、この直さんの懷では僅な金ゆゑ其の儘に、借りておきなさいまし。

幸兵　それでは恐れ入りますが、暫く拜借いたしまする。

直次　こつちはあげる心ゆゑ、決して心配なさいますな。さあ大家さん、一分が三兩、二朱が一つ、殘らず勘定いたします。（ト佐次郎兵衞金を受取り、）

佐次　是れは思ひ掛けない金、家賃は慥に受取りました。いや、よい客がござつたので幸兵衞殿も仕合せなれば、この大家も大仕合せ、然し五月溜つた金を日なしで貸したことならば、大した利息が

取れように。
なべ　ほんにさつきの魚屋さんは、二分口錢を貰ひました。
さら　大家さまも三兩二朱の、利息をお貰ひなされませいな。
直次　大家さんへ金は失禮、利息代りに此の鯛を、上げてはどうでござりませう。
幸兵　どうぞさうして下さりませ。
佐次　なに、この鯛をおれにくれる、それは千萬忝けない。
なべ　大家さんが利息代りに、鯛をお貰ひなされたら、
さら　定めて店子のわたし等へ、お裾分がござりませう。
佐次　どうして〳〵遣るものか、鰯の外に味を知らぬ、こなた衆には無駄なことだ。
なべ　それでは喰はして、
兩人　下さいませぬか。
佐次　匂ひを嗅いで居るがいゝ。（ト門口へ來て、）これ、おかまや〳〵、大きな皿を持つて來い。
かま　はい〳〵、畏まりました。（ト下手より以前のおかま大皿を持ち出て來る。）
佐次　これ、此の鯛をみんな貰つた。

かま　それはよいことをなされましたな。
佐次　早く家へ持つて行つてくれ。
かま　はい〳〵、

ト鯛を皿へ入れ門口へ出て躓き、ばつたり轉び鯛を投り出す、此の時下手より以前の犬出て鯛を銜へ逸散に花道へはひる。

なべ　やあ、今の鯛を犬が取つた。
佐次　なに、犬に取られた。
さら　あれ〳〵向ふへ銜へて行きます。
佐次　おのれ、それを遣るものか。（ト佐次郎兵衞跡を追掛けて行く。）
かま　今日こそ鯛が喰はれると、思ひの外に犬に取られ、皿を割つたゞけが儲け。
なべ　今にしつかり、
兩人　小言だらう。
かま　樂しみなことだねえ。（ト通り神樂にておなべ、おさら、おかま下手へはひる。直次郎跡を見て）
直次　一旦念の掛つた鯛か、到頭犬が銜へて行つた。（ト合方になり、直次郎元の所へ來る。）

もと　よい所へおいらんがお出でなされたばツかりに、お客さまのお情で恥をかゝずにしまひました、何とお禮を申しませうか。

新之　まことに有難うござりまする。(ト兩人禮を言ふ。)

もと　是れは悴が故あつてお上より貰ひましたを、私共へ小遣ひに持つて參りし此の一兩、どうか只今の其の內へ、是れをお取り下さりませ。(ト以前の一兩を直次郎の前へ出す。)

直次　折角その子が親達へ、持つて來た金とあれば、其の志しの通るやう、內で遣ひなさるがいゝ。

もと　それではどうも濟みませぬ。

直次　して濟まないと、言ひなさるは。

幸兵　何の御緣もないお方の、御厄介になりまして、濟まぬことでござりまする。(ト直次郎思入あつて、)

直次　緣がないとおつしやるは手前をお忘れなされたか、今日測らずお目に掛り、御身にかゝる災難を取扱ひましたのは、子供の折にお世話になつた、御恩送りでござります。

幸兵　なに、子供の折に世話になつた、御恩送りと言はるゝは。

もと　そんなら以前を御存じなるか。

直次　以前駒込白山下で素讀の御指南なされたる、寺田幸之進樣の、御子息でござりませうな。

幸兵　如何いたして、御存じなるぞ。

直次　さつき是れへ參つた時、見覺えのあるお顏に、正しくあなたは寺田樣の御子息なりと存じました
が、迂濶なことも申されず奧へ通る其の時に、覗いて見たる佛檀の位牌に覺えの紋所、寺田姓と
記しあるので、さてこそ寺田の御子息と、參つた時からわたくしは存しましてござります。

幸兵　年限經つて思ひ出さぬが、誰殿でござつたな。

直次　あなたの方は多くのお弟子にお覺えもござりますまいが、わたくしは駒込の富士前に居りました
片岡直次郎にござります。

幸兵　さう言はるれば幼顏、こなたにも覺えあり、大番同心を勤められし直藏殿の子息でありしか。

三千　それでは以前直さんの、お師匠さまでござりましたか。

もと　久し振りにてお名乘り申すも、不思議なことでござります。

直次　幼年の折大學を、敎へてお貰ひ申したが、產れ附いての怠け者に、中途で止めてしまひましたが、
其の後師匠も亡くなられ、手前も家出なせしゆゑ、遂には以前の御恩も忘れお尋ね申したこともな
く、音信不通になりましたを濟まないことゝ存じましたが、此の三千歲が緣となり測らず今日お
目に掛り、ほんの九牛が一毛の御恩送りをいたしたも、盡きぬ御緣でござります。

幸兵　父が素讀の指南せしゆゑ、我も幼年の折よりして學事に心を寄せしかど、未熟な業に家督せし其の甲斐もなく白山より長者町に移轉なし、素讀の指南いたせしが運拙くておもはしからず、再び橋場へ居を移し懇意の者の勸めにより卸し筆を結ひ習ひ、軸より細き煙をはやう／＼立てゝ命をば果敢なく繋ぐ身貧な暮し、名乘り合ふのも恥かしき我が心中を推察下され。

直次　あなたの堅い御了簡では、左樣思召しますも御尤もではござりますが、是れが見ず知らずの者ではなし、以前御恩を受けた私、その御遠慮には及びませぬ。

幸兵　知らぬ人なら兎も角も、以前を存ぜし片岡氏へ、五常の道を教へし身で道に落ちたる物を拾ひ恥辱を受けし此の幸兵衛、今日に限りしことなれど、貧に迫つて日々に斯樣なことをいたすかと定めて心に思はれん、何やうそれを言解くとも、よも誠とは思はれまい。

もと　そりや私も同じこと、先頃二階で丈賀どのゝ金が失せしその時に、疑ひ受けしもお二人さんのお執成しにて明りも立ち、常に替らず仕事に參れど、斯ういふことがある上は、あれもまことに私が盗みしことゝおいらんも、思召すでござりませう。

幸兵　旁以て各へ合す面もあらざる仕儀、身の潔白を立つるには、（ト戸棚より脇差を出し）自殺いたして相果てん。（ト柄へ手を掛けるを直次郎留めて、）

直次　あこれ、早まつたことをなされますな。
三千　何ゆゑあなたは其の樣な、短氣なことをなされまする。
幸兵　生き甲斐のない體ゆゑ、一命捨てゝ潔白立て、家名の恥辱を雪ぐ所存。
直次　それは惡い御了簡、些細なことで大切な命を捨てるとおつしやるは、素讀の指南をなされまする學者の身にも似合はぬこと、まあ〳〵お待ちなされませ。
　ト直次郎きつと止める。新之助思入あつて、
新之　今日お父さんが往來で鯛を拾つておいでのも、元の起りは宿下りのわたしにそれを喰べさせんと思召してのことなれば、わたしも死なねばなりませぬ、一緒に殺して下さりませ。
もと　おゝ新之助、よう言うた、そりやそなたが死ぬならば何しに後へ一人殘らう、母も一緒に死ぬわいな。
直次　今お聞きなさる通り、あなたが一途の御了簡で一命お捨てなされますれば、直に爰でお二人とも死ぬと言つておいでなさるが、一人ならず三人の終には命に拘はりまする。
三千　死ぬのは何時でも死なれますから、早まつたことなさんすな。
幸兵　ではござれども一命を、捨てねば明りが立ちませぬ。

直次　一時は人が兎や斯うと惡い噂をいたさうとも、長い内には知れまする、それを一途に今爰で自殺なされればお二人も、共に死ぬのは知れたこと、然すれば寺田の御家名も是れ限り絶えねばなりませぬ、爰の所をとつくりと御思案なされて幸兵衞樣、思ひ止つて下さりませ。

三千　思ひ止つて下さんせぬと、わたし等二人も心に掛り、爰を歸るに歸られませぬ。

もと　お二人さまがあのやうに、事を分けておつしやれば、

新之　おつかさんや私を、不便と思つてお父さん、

もと　思ひ止つて下さりませ。（ト幸兵衞ぢつと思入あつて、）

幸兵　以前師弟の縁によりお止め下さる片岡殿、御親切に絆されて、死ぬのは思ひ止まりまする。

直次　そりや思ひ止まつて下さりまするか。

幸兵　如何にも、思ひ止まりまする。

直次　そのお詞を承はり、私共も安心いたし、

三千　歸り心がようござんす。

もと　最前夫の恥を救ひ、今又命をお助け下さり、何とお禮を申しませうか。

幸兵　詞でお禮は盡されぬ。

もと　一生御恩は、
三人　忘れませぬ。（ト三人兩人へ辭儀をなす、ばた〳〵になり以前の藤五郎走り出來り、）
藤五　これ娘、もう日が西へ廻つたのに、あんまり來やうが遲いから、待ち草臥て迎ひに來た。
三千　ついお話しが長くなつて、無待遠にござんしたらう。
藤五　お風呂はどん〳〵沸ないが、掃除はきれいにして置いた、ちつとも早く內へ來てくれ。
直次　それぢやあ直にお暇いたさう。
幸兵　久し振りでの面會に、何一つ持成なく、却つて厚き惠みに預り、まことに以て恥入りまする。
もと　これを御緣に又その內、
三千　わたしや籠の鳥なれど、
直次　こつちは自由の體ゆゑ、何れ近日ゆつくりと、
幸兵　おいでをお待ち申しまする。
藤五　春とはいへど日が短かい、さあ〳〵早く出掛けぬか。（ト直次郎外へ出る。）
幸兵　左樣なれば、
もと
新之　お二人さま。

直次　そのうちお目に、

直次
三千　掛りませう。

卜鳥追通り神樂にて、賑かに直次郎三千歳藤五郎附いて花道へはひる。と時の鐘床の淨瑠璃になり、

〽日も早西へ傾きし雀の軒の弱竹へ、啼音せはしき小雀を養ふ親の愛しみ、内にも親子打ち寄りて、

卜此の内幸兵衛ぢつと思入、お元は兩人を見送り元の所へ來る、淨瑠璃の切れ合方になり、幸兵衛新之助に向ひ、

幸兵　これ悴、嘸やそちは此の親を、賴み少なく思ふであらうが、不圖した心の迷ひから道に落ちたる物を拾ひ、四邊近所へ顏向けもならぬやうな恥辱を取りしも、皆天道の御罰なり、まことにそちにも面目ないがこれも一つの身の戒め、心迷へば誰にても斯かる恥辱を受けねはならぬ、奉公中は道ならぬ所業を決していたすまいぞ。

新之　それはあなたの敎へを守り、陰陽なく勤めますゆゑ、流石は素讀の指南をなす寺田殿の子息たけと、敎へのよきをお袋さまや番頭さんがお褒めなさるに、なぜお父さんは日頃に似すさもしいことをなされました、惡事千里でこの事が店の衆へ知れましたら褒められたのが水となり、後指を

さゝれますのがまことに悔しうござりまする。

ト手拭顔に押し當て、四邊を憚る忍び泣き、見る父親は我が越度に、胸を裂かるゝ思ひにて。

ト新之助手拭を顔へ當て泣伏す。

幸兵　おゝ尤もだ〳〵、親の心の迷ひにて、そちが肩身を狹うなし恥辱を與へし我が不所存、今となつては千悔なすとも、返らぬ事ゆゑ許してくりやれ。

新之　そのお詫びには及びませぬから、どうぞ是れから此の樣な事を、必ずなされて下さりますな。

幸兵　一生涯の我が恥辱、これに懲りぬことはない。

もと　どうぞそなたはまつたうに御奉公を勤めてくりやれ、わたしの弟半七なども辛抱人と思つて居たに、二百兩の掛先きを持つてお店へ歸らぬよし、惡い友に誘はれて遊びにでも行つたであらうが、親兄弟に苦勞を掛け、ほんに不孝なことではある。

新之　それでは島屋へ行つておいでの、半七さんは掛先きを、持つて何處へかおいでとか。

もと　成人したら此の樣な、惡い耳を聞かしてくれるな。

新之　それはお案じなされまするな、御年季中を大事に勤め、お禮奉公した上で旦那樣から暖簾を貰ひ立派に店を持つ心、さうなりましたらお二人に、お樂をおさせ申しますからお待ちなされて下さ

りませ。
もと　辛い苦勞ももう十年、そなたの内へ歸るのを、樂しみに待ちませう。
幸兵　最前からの混雜で、ついそれなりにいたしたが、あの半七はどうしたか、親父殿の所へ行つて、ちよつと樣子を聞いて來ようか。
もと　いえ／＼行くには及びませぬ、今にこちらへ相談に來なさんすに違ひない、道が違ふと無駄足ゆゑ、先づそれよりか新之助を、何處ぞへ遊びにやりませう。
幸兵　惡い折の宿下りに、餘計な苦勞をそちに掛けたが、觀音樣へでも行つて來ぬか。
新之　いえ、觀音樣はお袋さまの、お供で不斷參りますから行きたくもござりませぬ、見世物などを見ますよりお父さんとおつかさんの、御無事なお顏を見ますのが、何より樂みでござります。
もと　ても、可愛いことを言ひますなあ。
幸兵　さういふことなら爰から近い、眞崎の神明宮へお參りに行つて來るがよい。
もと　以前は兎もあれ橋場に居れば、今は所の氏神ゆゑ、
新之　成程爰に居りますれば、お參り申して參りませう。
幸兵　おゝお參りに行くならば、お元一緒に行つてやりやれ。

ちよ　ほんに左樣いたしませう。

新之　それではちよつと神明樣へ。

幸兵　ゆつくりと行つて來やれ。

もと　どれ、一緒に行きませうか。

〽胸の苦勞も恩愛に、暫し忘れて母親は我が子を伴ひ出で、行く、跡見送りて幸兵衞は吐息をついて佛壇より、塗りは剝げても金色に昔知らるゝ代々の位牌取出し拜をなし、

ト此の内お元新之助を連れ花道へはひる。幸兵衞跡を見送り思入あつて、佛壇より誂への位牌を出し合方にて、

幸兵　子ゆゑに迷つて思はずも道に落ちたる物を拾ひ、身に盜人の惡名受け、家名を穢しましたるも、過ぎし昔親人が素讀をお敎へなされたる片岡直次郎が計らずも、參り合して扱ひくれ事故なく濟みたるも、是れ親人の餘光にて、子孫へ殘すお惠みゆゑ有難うござりまする。（ト辭儀をなし、）さはさりながら冥土にて我を腑甲斐なき者と御立腹でござりませうが、未熟な業に靑雲來らず貧に迫りてなせしこと、不孝の罪は幾重にもお許しなされて下さりませ。

〽位牌へ向ひ手をつかへ在すが如く亡父へ、我が非を詫ぶる其の折柄、異見はなせど幸兵衞

が若しや一途に迫りはせぬかと、取つて返せし直次郎、

ト幸兵衞位牌へ向ひよろしく思入、時の鐘を打ち込み、花道より以前の直次郎出來り、花道にて

直次 師匠の子息幸兵衞樣へ最前異見はなしたれど、堅い心に一途に迫り、短氣なことをなされはせぬかと、胸に思へば三千歲が親父の所に居るうちに烏啼きが氣に掛り、再び取つて返したが先づ兎も角も表から、內の樣子を窺はう。

〽差足なして門口より門を覗きて打ちうなづき、

ト時の鐘、舞臺へ來り、外より內を窺ひ、

幸兵衞樣には恙なく、回向をなされてござる樣子、先づこれにて安堵した。(ト言ひながら向うを見て)や、向うへ誰か人が來る、どこぞへこつそり隱れて居よう。

〽四邊見廻しかたへなる垣の小蔭へ入相の、(ト時の鐘にて直次郎下手生垣の蔭へはひる。)

〽鐘の音送る雨東風も我が身に寒き半七が、顏を包みて大寺の森を目當に佇みて、

ト時の鐘、花道より半七着流し頰冠り雪踏にて出來り、花道にて、

半七 どう考へても言譯に、死ぬより外に思案はなく、たつた一人の姉さんに此の世の別れに一目逢ひたく、やう／＼忍んで爰まで來たが、どうぞ內に居られゝばよいが。

〽思案に暮れしとつおいつ、門へ來りて差覗き、

ト半七しな〳〵と舞臺へ來り、門口より家を見て、

内には義理ある兄さまの外、聞けば此の頃吉原へ通ひお針に行くとやら、それでは内に居られぬか。

〽いふ聲聞いて幸兵衞か、

幸兵　そこへござつたは、何方でござります。

半七　はい、わたくしでござります。（ト門口を明ける。）

幸兵　さういふ聲は、半七どのか。

半七　まことに御無沙汰いたしました。

幸兵　奉公して居る身の上では、無沙汰になるは當り前、さあ〳〵爰へござれ〳〵。

半七　左樣なら、御免なされませ。（ト合方にて二重下手へ來り）して姉さんは居りませぬか。

幸兵　今日は賽日で新之助が宿下りに來たゆゑ、今眞崎の神明樣へあれを連れて參りに行つた。

半七　左樣なら眞崎へ、お參りに行かれましたか。

幸兵　もう今に歸る時分、まあゆつくりとしたがよい。

半七　ちと火急な用事があつて、長居をしては居られませぬ。
幸兵　なに、火急な用とは。
半七　主人の用で遠方へ、急に參らねばなりませぬ。
幸兵　上方へでも行かるゝのか。
半七　お察しの通り上方へ、火急な用事で參ります。
幸兵　さういふことならもう今に、お元が歸つて來ようから、暇乞をして行くがよい。
半七　たつた一人の姉ゆゑに、暇乞をいたしたく駈抜けて參りましたが、火急なことゆゑ斯うして居る間も、心が急かれてなりませぬ。
幸兵　心が急かれてならぬとは、追手でもかゝるのか。
半七　え。（トぎつくり思入し）
幸兵　兄弟なれどそなたとは、義理ある仲ゆゑ隔てるのか、なぜ明してはくれぬのぢや。

ト誂への合方になり、花道よりお元新之助歸り來り、門口にて内の樣子を窺ひ居る。

半七　何とおつしやります。
幸兵　聞けば主人の掛先きを、二百兩取つた儘昨夜店へ歸らぬよし、それを路用に上方へこなたは遊山

に出掛けるのか。

半七　え、それではこちらへ其の事が、

幸兵　さつき店の若い衆が、わしが所へ屆けに來た。

〽さてはとばかり半七は、最早包むに詮術なく、(ト半七ハツと思入あつて)

半七　主人よりこちらへも知らせがあつたとあるからは、包み隱さず申しまする。おつしやる通り掛先きを二百兩受取つて歸る途中に其の金を、騙に等しき罠にかゝり掠め取られましたゆゑ、主人へ對して濟まぬゆゑ上方筋へ參りますと申しましたは僞りにて、實は金の言譯に死ぬる覺悟でござりますゆゑ、お暇乞に參りました。

〽死ぬる覺悟で參りしと、言ふを門にて聞く姉は、心も空に駈入りて、

ト門の外にて聞いてゐたるお元は、新之助を連れ内へ駈入り、

もと　樣子は門で聞いて居た、半七そなたは死ぬ心か。

半七　おゝ、姉さんか。

新之　兄さん、何で死なしやんすのぢや。

半七　死なねばならぬことがあつて、暇乞に忍んで來たのだ。

〽姉は弟に詰め寄りて、

もと これ弟、そなたは何で掛先きの金を取つて遣つたぞ、便り少ない父さんが大口さまの寮番して辛い奉公しなさんすも、そなたの出世を樂しみに、我が身の年の寄るも忘れ、もう何年で店持になると明暮指折つて待ちに待つて居なさるのに、なぜ此の樣な惡い耳を親や姉に聞かせるぞ、定めし金は榮耀に遣ひ、今更主人へ言譯に死ぬといふのは何事ぞ、言はうやうない不孝者めが。

〽不孝者めと腹立てど淚先立つ姉の慈悲、子は賢しくも執成して、

新之 ませた事を言ふ奴と定めてお思ひなされませうが、私などもお前さんを手本になして御奉公をいたしませうと存じます程、常から堅いお心でこんなことをなされましたは、是れには譯がござりませう、早うそれをおつしやりませ。

ト お元疊を叩いて言ふ、新之助思入あつて、

幸兵 三つ子に習ふ淺瀨の譬へ、新之助が申す如く如何なることで二百兩掛先を遣ひしか、貧苦に迫る幸兵衞ゆゑ、物の多足にならずとも譯を話して聞かしてくれ。

〽いふに半七顏を上げ、

半七 昨夜店へ歸らぬうち所々へ追手の掛りし半七、人目を忍んで參りましたは、死ぬる覺悟にござり

ますゆゑ、此の世の名殘り二つには、譯をお話し申したさ。

幸兵　して、其の金を遣ひしは、

ちと　如何なることで、

兩人　あつたるぞ。（ト誂への合方になり、半七思入あつて、）

半七　先達て小日向の大久保様に、お姫様の御婚禮がござりまして、お召物からお土産物まで其の代金は三百兩ほど、昨日内金に二百兩金子を受取り歸る途中、水道端の水茶屋にちよつと休んで居るうちに、隆慶橋の比企様といふ一二度上つたことのあるお旗本様にお目にかゝり、ちと頼みたい用があるから一緒に屋敷へ來てくれとおつしやりますゆゑ上つたところ、今日は空身で何處へ行つたと、お尋ねゆゑに小日向の、大久保様へお拂ひを、受取りに參りまして、二百兩内金を頂戴いたして參りましたと、うつかり言つたが我が誤り、明日何々を持つて來いと種々御註文のあつた上、いつになく御酒が出て、今日は一杯飲んで行けと何と言つてもお歸しならず、御同役が側に居る侍衆が其の内に、小さな富の箱を出し、是れは酒宴の一興に半七そちもはひるがよいと無理にお勸めなされしゆゑ、お得意先きに厭とも言はれず、御機嫌取りに其の中へはひりましてござりまする。

幸兵　それぞ此の頃世間に流行る、蔭富とやらいふものぢや。

もと　お得意様ゆゑ其の中へ、はひつてそれからどうしたのぢや。

半七　さあ、僅か一枚二十宛ゆゑ札を買へとおつしやいますから、是れも商ひの其の爲めとうつかり十枚買つたところ、突番数の其の内に買つた札は一枚も出ず、剩さへ札料をお聞き申せば以ての外一枚二十は錢でなく二十兩の目安ゆゑ、丁度十枚二百兩金を出せとおつしやるゆゑ、それは大きな事の間違ひ、二十は錢と存じましたと言譯なせど聞き入れず、卑怯な奴と無理無體所持なす金を取り上げて疾く〳〵歸れと門前へ突き出されて仕方なく〳〵、我が身の粗忽に金を失ひ其の儘店へ歸られず、兎やせん角と思案に迷ひ昨夜は野宿をいたしましたが、どう考へても言譯に死ぬより外に思案はなく、此の世の名殘りにお二人へ、お目にかゝりに參りました。

〽涙ながらに半七がいふもおど〳〵後や先、側に聞き居る三人も共に悔しく齒嚙をなし、

ト半七よろしく思入にて言ふ、幸兵衞お元も悔しき思入。

幸兵　すりや小石川の比企といふ、屋敷でそなたに蔭富を無理にすゝめて札を買はせ、二百兩欺き取りしか。

もと　御旗本の身を以ていはゞ物取り同樣な非道なことして金を取るとは、言はうやうない太い奴。

新之　その小石川の比企といふは、下谷あたりで評判の勝負事をするお屋敷、とんだ所へ兄さんは商ひにおいでなされましたな。

半七　さういふ屋敷と露知らず町家と違ひ小さくても屋敷は御用が多いゆゑ、得意にせうと言ふなりに向ふの罠に掛つた悔しさ、腹は立てども上と下、手向ひなさば其の場にて手討にされんも知れませねば悄々歸つて參りました、此の世の別れにお二人へお目にかゝつて歎かれし。一部始終をお話し申し、附いては親父の身の上をお頼み申して死ぬ覺悟、斯ういふ内も心が急けば、最早お暇いたしまする。

へ死ぬる覺悟で半七が、立つを二人は押し止め、（ト半七思入あつて立つを兩人止めて）

幸兵　それではこなたは二百兩の、金を失ふ言譯に、

もと　これから命を捨つる氣か。

半七　さあ、生きて居つては御主人へ、申し譯がござりませぬ。

幸兵　以前ならば二百兩、金を立替へ遣はさうに、言うて返らぬ今の貧苦。

もと　どうか弟が死なぬやう、よい思案はござりますまいか。

半七　餘計な苦勞をお二人へ、掛けては猶々濟まぬ譯。（ト行きかけるを幸兵衞止めて）

幸兵　心の急くは尤もだが、死ぬには及ばぬ、暫く待て。
もと　よい思案がございますか。
幸兵　別に思案もないけれど、假令向うが旗本でも道に缺けたことをなせば、理を以て表向き比企へ掛合ひ欺きし二百兩を取返し、お主へお詫びをなす所存。
もと　おゝ、其の二百兩を取返せば、弟の命も助かります。
半七　然しあなたへ、御苦勞掛けては、
幸兵　はて譬にもいふ親は泣寄り、かゝる時に力を添へるが、縁を結びし誼なるぞ。
新之　そんならこれからお父さんは、
幸兵　小石川へ赴いて、二百兩を取返さん。
〽用意の羽織取出し、身支度をする門口へ、
ト幸兵衞羽織を引掛ける、此の時生垣の蔭より直次郎出で、
直次　寺田樣、暫くお待ち下さりませ。（ト門口を明けて内へはひる。）
幸兵　や、さういふ此方は、
もと　最前おいでの片岡樣。

幸兵　何ゆゑ再び、
兩人　此の所へ。
〽聞くも忙しき混雜に、禮儀を餘所に座に附いて、（ト直次郎下手へ來り）
直次　手前が再び參つたは、一旦お留め申したが、あなたの御身が案じられ早まつたことをなされはせぬかと、取つて返せし門口で、お內の樣子を窺へば御內室の弟御、これにござる半七どのが比企の屋敷の畏に掛り、二百兩取られたる一部始終を測らずも承はりましてござります、嘸お腹が立ちませう。
幸兵　それゆゑこれより屋敷へ行き、掠め取つたる二百兩を、取返す所存なるを、何ゆゑ待てと止められしぞ。
直次　さあ、あなたをお止め申したは、これよりおいでなされたところで、なか〳〵以て其の金をお渡し申す氣遣ひなし、事に依りなばどのやうなあなたの御身に御難儀が、掛るまいとも申されませぬ。
幸兵　とは又何ゆゑ。
直次　相手と目指す小石川の、比企といふ旗本は、元より知行も小祿にて親代々の貧乏に、惡い事のみ

たくらむゆゑ、あの近邊で厄病神と人の厭がる東左衛門、水道端へ待網掛け茶見世の婆アが相摺で客ふ屋敷へ引きずり込み、先づ臺附から勸めこみ、場末は藪蚊が多いゆゑ、夏喰はれない呪禁とびんころがしから段々に、一粒よりは二粒の勝負と目先きを晦ます毒賽に、化す狐のこん／＼は毛色の替つた白無垢鐵火、爰へ集まる眷族は皆ぺてん師の一つ穴、惡事に掛けては正一位の位を取つた者共ゆゑ、あなたがおいでなされても所詮金は返しませぬ、敎へを受けた御恩返しに手前が參つて二百兩、取返して上げませうから、お任せなされて下さりませ。

幸兵 それではそなたが、其の金を、

もと 取返して下さりますとか。

直次 取返して上げますと、申しますも子供の時から惡戯で、よく先生にも叱られましたが、其の代りには喧嘩をして、遂に一度是れまでに、負けたことがござりませぬ、相手が强けりや命がけ遣る・所までやりまする、假令向うが旗本で御直參の權威をふるとも、こつちも同じ天下の御家人彼奴等の脅しは恐れませぬ、姿を替て待網にかゝつた上で掛合附け、押す所をば押したらば、二百石を捨しるより欺して取つた二百兩を、返すはうが割事ゆゑ、きつと取返して上げますから、必ずお案じなされますな。

ヘ命をかけて片岡が、弱きを救ふ俠氣は、流石は江戸の育ちなり、
ト直次郎よろしく思入、三人嬉しき思入あつて、

幸兵　生先き長い半七の、命に拘はりますことゆゑ、
もと　どうぞ無事に助かりますやう、
半七　ひとへにお願ひ、
三人　申しまする。
直次　先づ一兩日半七さんは、どこぞへ隠れておいでなさい、先きへ行き時こちらまでちよつと御沙汰をいたします。
半七　よいお方がおいで下され、危い命が助かりました。
幸兵　そなたばかりか最前は、
もと　既にこちらの三人も、
新之　命を捨てるところをば、
幸兵　助けられたる、
もと　再度のお情。

直次　それもこれまで、種々なわろさを、
幸兵　や、
直次　いや、悪いあとは必ず好いもの、吉左右お待ちなされませ。（ト立上る。）
幸兵　左様なれば、片岡氏。
半七　何分よろしう。
直次　承知しました。（ト門口へ出る。本釣鐘を打込む。）丁度出際に鳴る鐘は、
半七　ありや淺草の、
新之　六ツの鐘、
幸兵　風が南か常よりも。
もと　手に取るやうに、
半七　聞ゆる鐘。
直次　むゝ、手に取るかねは、（ト手を握る、木頭の替りに本釣鐘を打込む。）いゝ辻占だ。
ト本釣鐘へかすめて通り神樂、紙砧を冠せ、皆々よろしく、

ひやうし幕

五幕目

隆慶橋茶屋の場
水道端比企邸の場
小石川御堀端の場

〔役名〕＝札差伊勢屋清三郎實は片岡直次郎、比企東左衛門、金子市之丞、島屋の手代牛七、黒鴨の供松藏實はくらやみの丑松、比企の用人山住太九藏、同中間川獺勘八、大木彌九郎、大塚伊四藏、小物問屋九四郎、貸本屋和助、お斷賣韋駄天三次。茶見世婆お虎、比企の娘おてい、同腰元お次、札差丁稚長松實は豆藏金太。〕

（茶見世の場）＝本舞臺一面の平舞臺後水道端屋敷町の遠見、上の方に片葢の橋の袂を見せ、下の方屋根附の出茶屋、茶道具よろしく、柱に小町水夕顔白粉の看板を掛け、よき所に柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て隆慶橋袂の體。爰に床几を二三脚並べ、勘八紺看板の中間にて眞中の床几へ腰を掛け大福餅を喰つて居る、下手の床几に仕出し三人腰を掛け煙草を呑み居る、下手にお虎茶店の婆のこしらへにて茶を運び居る、此の見得おいとこ節の合方、水の音にて幕明く。

とら　もし勘八さん、爰は吹きさらしで寒いから、あつちへはひつてあたつておいでな。

勘八　いや大福を喰つて居る所へ、いゝゝあたつて行けとはいゝ辻占だ、今日は丁度湯島の突日だ、お虎婆ア

さんお前と乘りで、札を一枚買はうぢやねえか。

とら　ほんに此の節は富流行ゆゑ、一の富でも取れることなら、隨分乘りで買ひもしようが、いゝ見德でもあるのかね。

勘八　別に見德もねえけれど、お前がお虎でおれが勘八、かんぱ二十四と積つて、虎は千里といふことがあるから、千二百四十番なら、きつと當るに違ひねえ。

とら　おやまあ、とんだお茶番だ。

○仕出　どうやら旨いそちらの話し、

△　當ると聞いては見脫されぬ、

□　どうか其の口へ乘りたいものだ。

勘八　お前方が乘んなさるなら、三人といふ瘤をつけて、千二百四十番へ三番殖して、四十三番ならきつと當るに違ひなしだ。

とら　然し五人が當つた日には、千兩取れても二百兩づゝ、何だか儲けが少ないやうだ。

勘八　その替り又當らねえ所が、僅の損で濟むのだから、何でも味方は大勢がいゝ。

とら　いえ〳〵わたしやあ割が惡いから、當ると極つたら一人で買はうよ。

○　はて、まだ當るか當らないか。
△　札さへ買はぬ其の先きに。
□　爭ひをしても詰らない。
勘八　何にしろ延喜だから、みんなで火鉢へあたつて行かう。
とら　いえ〳〵延喜にあたるのなら、わたしの火鉢だから一人であたる。
皆々　いや、慾張つた婆アさんだ。
　　ト笑つて居る。矢張り右の合方にて、上手より二幕目の太九藏羽織着流し大小雪踏にて出來り、勘八を見て、
太九　それに居るのは、勘八ではないか。
勘八　これは御用人樣、どちらへお出でなさいます。
太九　今日は湯島の突日だから、遊びがてら見に行くのぢや。
とら　湯島へお出でなさいますなら、只今お供をいたしますから、まあ一服お上りなさい。
太九　扨はお虎も慾張つて、富の札でも買つてあるのか。（ト床几へ掛ける。）
勘八　いえまだ札は買ひませんが、今私が見德がいゝから、乘りで一枚買はぬかといへば、乘りで當

つては詰らぬから、一人で買つて當てるのだと、慾張つたことを言つて居ります。

太九　いや、それなれば見合せるがよい、多分今日はこの太九藏が、一の富を取る積りだ。

とら　そんなら何ぞお前さんもよい見德がございましたか。（ト太九藏紙入より富の札を出し、）

太九　その見德でこの通り、七百十六番といふ札を買つてあるのが當り札だ。

勘八　さうして七百十六番が、よい見德とおつしやるは。

太九　其の譯といふは、福祿壽と鉢合せをした夢をあり〳〵と見た、所で七福神の七の數、又鉢合せをした所で八を合せて十六番、則ち七百十六番とは、動きの取れぬ見德であらう。

勘八　成程これはよい見德、七福神のその中でも福祿壽などは大あたま、こいつは大きく當りませう。

とら　さういふ見德がございますなら、札を買ふのは見合せますが、あなたがお當りなさつたら、しつかり奢つて下さいまし。

太九　おゝ奢らうとも〳〵、着物の一枚づゝも着せてやらう。

とら　それは有難うございます、今からお禮を言つておきます。

○　何にしろ旦那さんが、湯島へお出でなさるなら、

△　私共も見物がてら、樣子が行つて見たいゆゑ、

□ 富の場所まで御一緒に、お連れなすつて下さいまし。
太九 見たいなら行くがよいが、巾着切りやすりが居て、懐中物を覘ふから、よく氣を附けて見るがよい。
○ それは用心、
三人 して居りますよ。
太九 然らば場所へ行つて來ようか。
とら お歸りをお待ち申します。
○ 婆アさん、茶代は爰へ置いたよ。
とら 旦那がお當りなされたら、皆さん知せておくんなさい。
太九 はて、きつと當るに違ひない。
勘八 福祿壽さま、行つてお出でなさい。
太九 どうやら頭が伸びて參つた。
ト唄になり、太九藏先きに、仕出し三人附いて花道へはひろ。跡をおとら見送りて、
とら どうかこつちも太九藏さんに、一の富でも取らせて遣り、しつかり割を貰ひたいものだ。

勘八　どうして〳〵、吝嗇だから取らねえうちはあゝ言ふが、取つたら掴つて放しやあしねえ。

とら　ほんに其の割で思ひ出したが、此の間お前の旦那が島屋の手代を、ぺてんに掛けて二百兩取んなすつたが、其の時かれこれ掛り合つた、わたしへ割がたつた一兩、旦那も隨分赤螺だねえ。

勘八　一兩貰やあ結構だ、他人だからくれたが、おれなんざあ骨を折つて、たつた一分で追拂ひ、主と病で泣き寐入りだ。

とら　然しお前のお屋敷には、富があるので二朱一分の、小遣ひぐらゐになるといふもの。

勘八　どうか、あゝいふ鳥を引ッかけ、上ッ汁でも吸ひてえものだ。

トやはりおいとこ節の合方になり、花道より小間物屋九四郎、貸本屋和助着流し雪踏尻端折りにて、兩人とも荷を背負ひ出來り、花道にて、

和助　そこへおいでのは、小間物屋の九四郎さんぢやあございませんか。

九四　お前は本屋の和助さん、どこへこれからおいでのだ。

和助　得意先きから頼まれて、比企の屋敷へ今日は富の臺附を持つて行きますのさ。

九四　わたしもやッぱり比企の屋敷へ、臺附を持つて行きますから、それぢやあ一緒に行きませう。

和助　それはいゝところで逢ひました。（ト兩人舞臺へ來る、お虎見て）

とら　これは小間物屋さんに本屋さん、お揃ひで御精が出ますね。
九四　勘八さんも爰においてか、丁度いゝ所で逢ひました。（下雨人床几へ荷をおろして掛ける。）
勘八　扨は二人で儲け口へでも、これから行かうといふのかね。
和助　得意先から頼まれた臺附を持つてお屋敷へ、是れから行かうといふのだが、まだ行つても間に合ひませうか。
勘八　いゝとも〳〵、湯島の富で一を突くのは七つだから、八ッ半までは大丈夫だ。
九四　どうか今日は儲けたいものだ。
とら　小間物屋さんも此の間は、三の小目では損をしたと勘八さんから聞きましたが、見德でも間違へましたか。
九四　何さ、隣りの上さんが産をしたから、子を産んだのを見德に、三の小目と附けた所が、一ッ違ひの四の小目で、見德違ひをやらかした。
和助　成程隣りが三だから、四と附けるが理詰めだが、六部が湯へはひつて四が出たのを、荷を置いて居たと同じことで、見德違ひはあるものだ。
勘八　時に今日の臺附には、何ぞ見德がありますかね。

九四　別に兒德もありませんが、昨夜の夢に蜂にさゝれ、頭が大きく腫れたと見たから、八の大目を附けました。

和助　わしやあ又、馬琴ものゝ質屋の庫を得意先きから、小僧が借りに來たから、七の小目と附けました。

とら　小間物屋さんも本屋さんも、割を取つたお仲間だが、どうか島屋の手代のやうな、いゝ鳥でもかかればいゝが。

九四　何でもあゝいふ相手でなければ、

和助　うまい酒は呑まれません。

勘八　酒のかはりに、茶でも呑まう。

ト　お虎茶などを運ぶ、花道より直次郎羽織着流し雪踏がけ、札差の旦那のこしらへにて、小僧長松を供に連れて出來り、花道にて、

直次　これ長松、どこぞこゝらに茶見世はないか、此の寒いので、持病が起つた。

長松　あの橋の際の水茶屋で、お休みなさつてはどうでございます。

直次　葭簀張で汚なさうだが、病氣の時は仕方がない、少しの間休んで行かう。

長松　お茶の水は近所にあつても、ろくな茶見世はござゐいません。

直次　えゝ生利なことは言はぬものだ。（ト直次郎舞臺へ來り、）皆さん、御免下さいまし。

ト床几へかける。

とら　これは旦那樣いらつしやいまし、只今お煮花を差上げます。

直次　いや〳〵煮花はあとにして、湯を一杯貰ひたいものぢや。

とら　へい〳〵畏まりました。（ト直次郎腹の痛むこなしあつて、床几へ掛けて居る。）

長松　お藥でもお呑みなさるなら、どこぞへ行つて買つて參りませう。

直次　いや〳〵、爰に萬金丹があるから、これで少しは落着くだらう。

ト紙入より藥包を出す、爰へお虎湯を汲んで持來り、

とら　お腹がお痛みなされますなら、婆アが擦つてお上げ申しませう。

直次　いや〳〵それには及びませぬが、此の二三日寒いので持病の疝癪が起つたと見え、下ッ腹が差込んでならぬ。

とら　それは嘸お困りでござりませう。

ト直次郎藥と湯を呑んで居る、お虎件の紙入より富の札の出かゝり居るを見てこちらへ來り、勸八に

長松 旦那さん、お紙入をお仕舞ひなさい。
　　囁く、勘八見て兩人よろしく思入、長松これに目を附け、

直次 差込むので忘れて居た。
　　ト紙入を懐へ入れる、此の内そこの四人囁き合ひ、直次郎を見ていゝ鳥だといふ思入あつて、

九四 もしお客さん、其のお藥で納りませずば、直この近所にお醫者もあれば、

和助 誰の難儀も同じこと、袖すりあふも御縁とやら、お世話をいたして上げませう。

直次 御親切なお心添へ、どうか今の萬金丹で落着きさうでござりますから、又差込んだらお願ひ申しませう。

とら お見受け申せば湯島へでも、お出での御様子でござりますが、萬金丹で落着くとはよい見徳でござります。

直次 えゝ、どうして湯島へ行くことを。

とら いえ、只今あなたがお紙入から藥をお出しなされます時、富の札が見えましたゆゑ、それでお察し申しました。

直次 いやもう實は下手の横好きで、つひに當つたこともないに、好きな道ゆゑ札を買ひ、何處の富へ

も出掛けますが、萬金丹で落着いたをよい見德と言はるゝのは、こなたもよつほど富の方では苦勞人と見えますな。

とら　いえ、私は存じませんが、見世へお寄りのお客さまが、何時でも富の見德で、お金儲けをなさるので、それで知つて居りまする。

直次　それでは富の見德で、儲ける御仁がありますとか。

とら　ござりますとも〳〵、爰においでの衆達は、富で儲けたお客さま、あなたもやつて御覽じませ。

ト勘八前へ出て、

勘八　さうおつしやれば此の旦那は、どこでかお見掛け申したやうだが、富の場所にて兩三度お顏を見たに違ひない、あなたはどちらでござります。

直次　へい、私は藏前の大代地に居りまする、伊勢屋清三郎と申しますな、藏宿稼業でござりまする。

勘八　おゝ違えねえ、さうおつしやれば、いつか藏前の大代地で、お見掛け申したことがあつた。

とら　それぢやあ、お前は此の旦那を、疾うから知つておいでのかえ。

勘八　知つて居るとも〳〵、先きさまでは知るまいが、こつちは主人に言ひつかつてよく藏前へ使ひに行き、旦那は度々お見掛け申した。

直次　いやもう、どこにどういふ知つたお方がござりますか知れぬもの、悪いことは出來ませぬ。

勘八　さうして湯島へお出でなさるに、こちらの方へお廻りは、何處へかお出でゝござりますか。

直次　ちきこの先きの出入屋敷へお下げ金を取りに參り、丁度湯島の突日ゆゑ、歸りに廻つて當り札を見て歸らうとそれを樂しみ、早く用事を達すつもり。

とら　ても、好い鳥が、（ト言ひかけるを、）

勘八　えへん〳〵。（ト紛らすこなし、）

長松　旦那さん、もうお差込みは直りましたか。

直次　もうすつぱりと直つてしまつた。

長松　茶碗の茶澁を御覽になつたら、又起るかも知れません。

直次　えゝ餘計なことは言はぬものぢや。

勘八　もし旦那え、さう又富がお好きでは、定めてあなたも臺附をお附けなさるでござりませうね。

直次　いや、富の札は買ひますが、臺附などゝいふ事は、どんなものやら知りませぬ。

ト九四郎和助これを聞いて居て、

九四　それでは旦那は臺附を、まだ御存じはござりませんとか。

和助　私共は富よりも、臺附の方が面白く、
九四　富のある日はお得意先きから、幾らも賴まれ附けますが、
利助　いつでもそれで利を得まして、旨い儲けをいたします。
直次　さうして其の臺附とは、どういふ譯にいたすものか、お聞かせなされて下さりませぬか。
とら　折角のお賴みだから、皆さん敎へておあげなさい。
勘八　先づ臺附といふものは、富の札數が一萬枚あれば、千枚を一の臺として、二千、三千が二、三の臺、千一番から千四百九十九番までを小目と云ひ、千五百番から千九百九十九番までを大目といひます。
九四　そこで當りの一の富が千三百十番なら、臺の小目が當り、二千六百十番なら二の大目の當り。
和助　後はお話し申さずとも其の順で押して行けば、直き分る事でござりますが、當れば割は十六割、一朱附ければ一兩取れます。
直次　それは何にしろ旨いお話し、さうして千から下が出たら、それは何と唱へまする。
勘八　千から下は百が臺で、百四十九番までをやはり小目と唱へます。
九四　百五十番から百九十九番までを大目といひ、

和助　やつぱり割は同じこと、こんな面白いものはございません。
直次　それであらまし分りましたが、慣れないものがいたしましては、やつぱり旨く行きますまい。
とら　いえ、これぱかりは見徳次第で、下手も上手もございません、何もお慰みでございますからお附けなすつて御覧なさい、一度附けると忘られません。
直次　さうしてそれを附けますには、何處へ參つて附けますのか、定めて場所がございませう。
勘八　その臺附の扱ひなら、わたしが勤めて居るお邸の御主人さまが、お道樂に内々お世話をしてなります。
直次　へえゝ、それではあなたの御主人様が、そのお扱ひをなされますとか。
九四　御身分のあるお旗本が、元方をしておいでゆゑ。
和助　どんなに大きく當つても、元の潰れる氣遣ひなし。
とら　ほんに無盡の堅いのより、もつと慥でございまする。
直次　どうかさういふお屋敷なら、これから直にお近附きに上つて置きたうございますが、お連れなされては下さりませぬか。
勘八　身元の知れないお人は、氣味を惡がりお逢ひはないが、わたしが慥に見知つたお方と、元から懇

直次　意な積りにて、旨く話して上げませう。

勘八　何分よろしくあなたから、お話しなされて下さりませ。

とら　それでは爰の婆ァさんと、跡から一緒においでなさい。

勘八　もし勘八さん、きつといゝかえ。

直次　はて、どうかするから案じなさんな。（ト勘八お虎顏見合せ、思入あつて上手へはひる。）

とら　時に其の見德といふのは、どういふことでござりますな。（トお虎小町水の看板へ指さし）

直次　私共で取次ぎます白粉下の小町水、これを見德にいたしますれば、本家は則ち馬喰町一丁目の岳陽堂、そこで一丁目を臺として小町水を小目として、臺の小目を附けます。

九四　成程それで分りましたが、此の白粉下の小町水は、平尾氏の發明で近い頃の賣出しだが、やんごとなき御方が不斷おつかひなさるので、大層今では廣まつて、諸國へ出るのが大きいさうだ。

直次　私共でも取次ぎますが、瀨戸物町の山崎で製しまして、馬喰町の岳陽堂で賣りひろめます夕顏白粉と申すのは、古今無類の上製にて、小町水の上へつけると極くよろしうござります。

和助　その夕顏白粉は、薄化粧によいといつて、藝者が專ら買ふさうだ。

　　近い頃の當り物ゆゑ、臺の小目をお附けなされば、きつと當りますでござります。

とら　私共へも廣めてくれと、小町水と夕顏白粉が澤山參つて居りますから、旦那あなたへ上げませうか。

ト箱へ入りし小町水と白粉を出す。

直次　いや、わたしより皆さまへお上げ申した方がよからう。
とら　それぢやあ皆さん、お手を貸して下さいまし。
九四　あい〳〵。（トむ虎九四郎和助にて土間へ蒔く、此の内長松居睡りなして居る。）
和助
直次　さうして二人の衆達は、どちらへおいでゞござりまする。
九四　私共は臺附をこれからつけて置きまして、
和助　お話し賣りの來ますのを、樂しみにして待つ積り。
直次　それではお話し〳〵と、よく斷出して歩きますが、あれを待つのでござりますか。
九四　今日湯島にて一の富を突いて、何千何番と讀み上げるのを直と書留め、臺附をする連中へ知らせて歩くがお話し賣りさ。
和助　僅四文で大目小目の相場が分り、臺附で十六割の儲けを見るとは、實に一度すると忘られません。
直次　お話しの四文と申しますのは、其のことでござりますか。

とら　そのくせ湯島のお若い衆は、一分だざうでござります。（ト此の時長松目を覺し、）

長松　そんなら今のは夢であつたか。（ト時代にいふ、）

九四　芝居の夢でも、

九四和助　見たのであらう。

長松　いえ、使ひに行つた夢を見た。

直次　夢はこぞうの、（ト床几を放れ、立上るを道具替りの知らせ、）つかひと見えます。

ト皆々笑ふ、此の模様おいとこ節にて道具廻る。

（比企屋敷の場）――本舞臺常足の二重、上の方一間塗骨の障子屋體、ずつと下の方九尺の玄關、この前本緣程の式臺、正面の鏡白地の襖、二重の正面古びたる石摺の襖、例の所切戸口、此の脇へ四ツ目垣の見切りよろしく、總て水道端旗本邸の體、二重上手に東左衞門袴一本ざし旗本のこしらへにて机の上へ帳面を置き富の出番を繰つて居る、下手におてい島田髷振袖装屋敷娘のこしらへにて、詰めかけて居る、此の見得常の合方にて道具留る。

てい　モウシお父上樣、これ程わたしが申しましてもあなたはお聞き下さりませぬか、お爲めを思ふ御異見もお聞入れがござりませねば、餘儀なくお組のお頭へお訴へ申しましても、比企の家名を瀆

さぬやうにいたしませねば此の家へ、生れましたる甲斐もなく、御先祖樣へ濟みませぬが、慾に迷うて人に倍大きな耳に聞えませぬか。

東左 えゝやかましい、靜かにいたせ、今日は湯島の突日ゆゑ富の出番を繰つて見て、大目か小目か一の富の當りを附ける勘考中、ざわ〳〵とかしましい、假令何を申さうとも、そちなどの言ふことが耳へ入つてよいものか。

てい お耳へ入らぬとおつしやれば、大きな聲をいたしましても御異見せねばなりませぬ、お年若の身ではなし好いお年をなされまして、御了簡違ひにも程がある、何御不自由なくお上から御扶持を戴く御身分で、なぜ御法度の蔭富などを好い氣になつてなされまする、若しも是れがお頭のお耳へでも入りましたら、お家の御恥辱ばかりでなく、次第に依つては御扶持まで、お取上げになる所へ、あなたはお氣が附きませぬか。

東左 えゝ又してもやかましい、其の位なことは申さずとも、百も二百も承知ぢやわえ。

てい さあ、御承知ならば猶のこと、なぜお止めなされませぬ、まだそればかりか此の間も、神田橋の島屋の手代を欺し、臺附を無理に勸めて札を買はせ二百兩といふ大金を貪りお取りなされましたは、いゝゆすり衒りも同じこと、それといふのも御朋友のお仲間内が惡いゆゑ、互ひに惡事を自慢ら

しくなされますとは何事ぞ、人に異見をする程のお年を抱へて臺所の元方などをなされては、猶猶罪が重りますぞえ。

東左　えゝがやがやと言はれては邪魔になつてならぬから、喋べりたくば次へ參つて、勝手に一人でしやべつて居れ。

ていいえいえ獨りで申す程なら言はずに我慢をいたしますが、假令お邪魔になりましてもお耳へ入れねばなりませぬのは、此の間も町方の洗湯へ參りまして、つい羽目一重の男湯で大聲揚げて話して居るを聞くも氣になるあなたのお噂、比企の屋敷は陰富の元締をする筒取りゆゑ、ありや旗本の比企ではない博奕のしきに違ひない、今にお手が入るであらうと、口々に言ふ陰言を四邊の人も聞きながら、私の顏をじろじろと見られた時の恥かしさ、風呂へもろくろく入りませんで、そこそこにして歸りました、どうぞお組のお頭からお手の入らぬそのうちに、惡事はお止め下されませ、そればつかりが心配で、夜の目もおちおち寢られませぬわいなあ。

ト思入にて言ふ、東左衞門うるさいといふこなしにて、

東左　えゝ、さりとては執拗い奴ぢや、世間の奴等が何と言はうとも蛆蟲同然な素町人、取るに足らねば捨て置け、そちが左樣に案じるなら安心の爲め言つて聞かすが、慶元兩度の戰ひに勳功のある

天下の旗本、それを神君の思召しにて皆小祿を與へて置けば先祖の功も無駄な穿鑿、中でも僅三百石や四百石取る小ッ旗本は附合に追ひ倒され、借金ばかり殖えるゆゑ、何か銘々内職でも覺えてせねばおち／＼と物見遊山や酒を呑み、榮耀な眞似は出來ぬから、そこで斯樣に臺附の元締をして陰富の催しなどもいたすのだ、そちも春着の一枚も算段をして上へ引張り、芝居の一幕も覗かるゝは皆陰富の餘德ゆゑ、馬鹿正直なことを申さず、親の心に任せて置きやれ。

てい　いえ／＼着物も入りませず、芝居も見ずともよろしいゆゑ、道に背いた催しはお止めなされて下さりませ。

東左　えゝ、また／＼申すか、控へて居らう。

てい　いえ控へては居られませぬ、お聞入れがござりませずば、此の身をお殺し下さりませ。

東左　やあ、不當を申すと許さぬぞ。

ト立ち掛らうとする、爰へ奥より彌九郎伊四藏着流し一本差し、旗本仲間のこしらへにて出來り、此の中へ割つて入り、

彌九　おいや御主人、お腹も立たうが、先づ／＼我等へお任せ下さい。

伊四　又おていどのも其のやうに、必ず野暮を言ひたまふな。

てい　いえ／＼言はずに居りましては、家名の爲めになりませぬ。

彌九　はて百石高の旗本は、手内職でもせぬ時は喰へぬは上でも御承知ゆゑ、そこはお組のお頭も大目に見ればこちらなどへ、必ず手などは入れませぬ。

伊四　さうとも／＼、富の臺附元締ぐらゐはまだ／＼罪の輕い口、隱し賣女の宿をしたり、猿彦道のいきをして利益を見まするものさへある。

彌九　その上手前の親類に、若年寄の公用人を勤役して居るものがござれば、

伊四　萬一惡い噂があれば、内々通達いたす約定、氣を揉む所は少しもござらぬ。

てい　いえ餘所では何をなされませうとも、私方では道ならぬ陰富などはいたされませぬ。

東左　やあ、御兩所までがお諭しあるに、聞入れなければ捨て置かぬぞ。

トきつとなる、爰へ奥より腰元お次出來り、

つぎ　もうしお孃さま、善惡ともに親御さまへお詞返すはよろしからず、まあ／＼お奥へいらつしやいまし。

てい　いえ／＼わたしやどうあつても。

つぎ　はてまあ、おいでなされませ。（ト無理に手を取り、奥へ連れてはひる。東左衞門跡を見送り）

東左　手前の娘にあのやうな不具が何で出來ましたか、思はぬ儀にて御兩所にも、とんだ御厄介に相成りました。

彌九　これと申すも一昨年御病死めされた奥方が、貴殿に似合はぬ堅蔵にて、兎に角お氣が合はなんだが、

伊四　その御氣質を受けられて、野暮にかたまり片意地を、言はるゝものと相見える。

東左　邪魔がはひつて肝腎の、出番を繰るのが遲刻いたした。

ト　やはり帳面を繰つて居る、茲へ花道より以前の勘八出來り、直に舞臺へ來て切戸口より内へはひり、

勘八　旦那さま、お悦びなさいまし。

彌九　誰かと思へば。そちや勘八。

伊四　悦び顏をいたし居るは、

東左　一の富でも當つたか。

勘八　まだ刻限が早いゆゑ富の樣子は聞きませぬが、先達てのやうな好い鳥が、又かゝりましてござりまする。

東左　なに、好い鳥がかゝつたとは、それはまことのことなるか。

勘八　お虎婆ァの見世へ參り網を張つて居りますと、小僧を供に人品の好い旦那株の町人が、立寄つたのは好い鳥と、丁度居合はす小間物屋や本屋と共に勸め込み、たうとう富の臺附を遣つて見たいと言はせるやうに、旨い話しに持ち込みまして、お知らせ申しに參りました。

東左　流石は勘八、出來す〳〵。して、町人は何れのものか、身元の所はまだ聞かぬか。

勘八　そこは下郎がぬからぬ顏で、鎌を引ッかけ聞きましたが、伊勢清といふ藏前の札差稼業の旦那株と申すことでござりまする。

彌九　いや、主人とあれば猶以て、取りでがあつて面白い。

伊四　然らば直さま其の鳥を、屋敷へ連れて參ればよいに。

勘八　いえ、一緒に連れて參つては重々しくなりませぬから、勿體を附け私から願つてやらうと手堅く見せ、一足先きへ參りました。

東左　骨折りの程感心いたす、早く其奴が參ればよいが。（ト勘八向うを見て、）

勘八　あれ〳〵、向うへやつて參りました。

彌九　然らばこちらも威光を附け、

伊四　思ひの儘に化すが肝要、

東左　次へ參つて案內いたせ。

勘八　へい〳〵畏まりました。

ト皆々座なり改めよろしく住ひ、勘八は下手へ行き控へる。よき程に誂への合方になり、花道より以前のお虎先きに、直次郎、九四郎、和助、跡より長松附いて出來り、花道にし、

直次　左樣なら此のお屋敷が、比企樣とやらでござりますか。

とら　左樣でござります、いやもう御內福といふものは見得も飾りも構はぬもので、お屋敷は穢ないが千五百石のお旗本ゆゑ、御身上などはそれは〳〵しつかりしたものでござります。

直次　只今入つた御門なども、大分いたんで居りますが、これでも御內福でござりますか。

九四　山師の玄關で、立派より穢ない所が却つて直打、

和助　兎角分限といふものは、構はぬものでござりまする。

長松　只見た所は貧乏屋敷だ。

直次　えゝ又喋べるか、默つて居ろ。

とら　さあ、斯うおいでなさいまし。（ト皆々舞臺へ來て、お虎玄關の前に立ち、）賴ます。

ト大きく言ふ。

勘八　どうれ。（ト答へ玄關の所へ出て、）お丶お虎どの、御苦勞でござる。
とら　さうして殿樣の御樣子は、どんな鹽梅でござります。
勘八　丁度折よく御在宅で、お願ひ申して見たところが、身元の所を其の方とお虎とで請合ふなら、連中へ入れてやらうと有難い、わしもやう〳〵安心しました。
とら　それは何より有難い、旦那お悦びなされませ、お聞きの通りでござりまする。
直次　これといふも皆さんのお蔭、何分よろしくお賴み申しまする。
九四　時に勘八さん、奧へ通つてよからうか。
和助　御苦勞ついでに伺つて下さい。
勘八　申し上げてあるから遠慮はない、皆さんでお通りなさい。
長松　旦那さま、それぢやア私はお先きへ歸ります。
直次　今言ひ附けた金子の事を番頭に言つて、お屋敷へ迎ひのものをよこしてくれ。
長松　へい〳〵、畏まりました。（ト行きかけるゆゑ、）
直次　これ〳〵、お屋敷を覺えて居るか、間違へぬやうに覺えて行け。
長松　へい、德利門番のお屋敷だと、

直次　えゝ、餘計なことを、

長松　いえなに、存じて居ります。(ト長松花道へ引返してはひる。)

勘八　さあ皆さん、お通りなさい。

九四　左樣なら、お前さんから、

とら　お先きへおはひりなさいまし。

直次　いえ、私は始めてゆゑ、どうぞお先きへ皆さんから。

とら　それではわたしが、お先きへはひらう。

(トお虎先きに玄關より上り、こちらへ來り、勘八下手へ手をつかへ、

勘八　殿樣、お連れ申して參りました。(ト東左衞門やはり机の所に住ひ居て、)

東左　それではお前が、伊勢淸どのとやらでござるか。

直次　左樣にござりまする、私が藏前の伊勢屋淸三郎と申しまする、藏宿稼業をいたすもの、お初にお目見得いたしまする。

東左　手前は當家の東左衞門、以後は入懇に賴みまする。

直次　承はればこなた樣で、富の臺附とやらの元締をなされますると申すこと、好きな道ゆゑ私もどん

なものかと御樣子を伺ひました其の上で、御連中へ加入いたしたく、お願ひ申してござりまするが、早速お聞き濟み下さいまして、斯樣な有難いことはござりませぬ。

九四　殿樣、御機嫌よろしう。

和助　先達ては有難うござりまする。（ト兩人辭儀をする。）

東左　小間物屋の九四郎どんに、貸本屋の和助どんか、相替らずよくござつた。

彌九　さて兩人とも、今日は、

伊四　儲け口で參つたのぢやな。

九四　お察しの通り、得意先さから臺附を賴まれまして、

和助　又慾張りに參りましたが、段々口が殖えますゆゑ、書附にして參りました。

東左　いや割のよいことゝ申すと、兎角連中が殖えてならぬ。

とら　實は私も工面をいたして、一株入れてお貰ひ申したく、樂しみにして居りましたが、さう御連中が殖えましたら、此の次まで待ちませう。

勘八　利の附く金を借りてしても、割に當る富は臺附、おいらも給金をお預け申して、此の次からはひるとしよう。

彌九　九四郎どのには、先達て旨いことをやられたさうぢや。
伊四　十兩づけで百五十兩、利を見られたとは羨ましい。
九四　いえ、あれが私の金子なら、株の一つも買はれますが、賴まれもののゆゑつまりません。
和助　然し一割の禮を貰つても、十五兩になる札の世話料、こんな生業はありやしない。
とら　何でもお金のある方には、何時でも旨いことをされるとやら、あゝわたしも元手のお金がほしい。
東左　何はなくともお客人へ、御酒を一獻獻じたい、勘八奥へ言附けてくれ。
勘八　へい〱畏りました。（ト奥へはひろ、直次郎思入あつて、）
直次　始めて出ましたお屋敷さまへ、手土産も持ちませんで、御馳走などに相成りましては。
東左　いや〱馳走と申した所が、山の手料理のほんの有合せ、心配なものはお上げ申さぬ。
ト九四郎和助紙入より金と書附を出し、
九四　得意先きから賴まれました。
和助　金子をお請取り下さりませ。（ト出す、彌九郎請取り、書附を見て、）
彌九　こりや先日より連中が、三人程殖えてござるが、
伊四　それではこちらの御主人の、又御厄介が殖えるといふもの。

東左　いや／＼何も慰み半分、氏子繁昌は悦ばしい。

ト金を請取り、机の上へおく、直次郎是れを見て紙入より金を十兩出し、紙の上へ載せ、

直次　如何いたしてよろしいか、少しも勝手が知れませねば、どうか是れにてよろしき様に、お附けなされて下さりませ。

彌九　お客人にも臺附へ、

伊四　十兩お附けなされるとか。

直次　勝手が知れて參りますれば、又如何様とも附けまするが、初心の儀ゆゑ十兩金、よろしうお願ひ申しまする。

東左　慥に金子はお預り申す、此の前三回小目が續けば、今日は大目に相違ない、只今一緒に控帳へ記した上でお話し申さう。

直次　何分よろしく願ひまする。

ト爰へ奥より以前の勘八廣蓋へ酒肴の道具を載せ、腰元お次燗徳利を持ち出來り、

勘八　お肴の參るその間、御酒をお先へ持つてまゐりました。

つぎ　お燗のよい内お初め遊ばしませ。

東左　身共はよいからお客人へ、どうか勸めてあげてくりやれ。
直次　いえ、私は不調法ゆゑ、こちらさまよりお始め下さい。
東左　然らば身共が亭主役に、取敢ず始めよう。（ト是れより皆々捨ゼリフに酒盛よろしくあつて）
直次　して、殿さまへ伺ひまするが、此の臺附と申すものは、富のある日でござりませんでは、出來ぬものでござりまするか。
東左　されば、各富のある日を、樂しみにして附けるゆゑ、突日でなければ出來申さぬ。
直次　成程左樣でござりませうが、是れが毎日出來ましたら好い慰みでござりませうが、私などは毎日でも、好きな道ゆゑ厭ひませぬ。
彌九　それゆゑ、こちらのお宅などでも、
伊四　蔭富といふお催しを。（ト言ひかけろ、東左衞門態と憚かるこなしあつて）
東左　あこれ、船中にては申さぬことぢや。（トおち消すこなし、直次郎思入あつて）
直次　爰へ持參をいたしました、金子は僅かでござりますが、只今小僧に申し附け店へ申してやりましたれば、大方今に見世の者が持參いたすでござりませうから、お催しでもござりますなら、お加へなされて下さりませ。

とら　ても、いゝ鳥が、

勘八　えへん〳〵。

とら　いえなに、いゝ時に參り合せ、私までが御馳走になれます。

東左　これおつぎ、お燗のあとをつけて參れ。

つぎ　畏まりました。（トお次燗德利を持ち奧へはひる、東左衞門思入あつて、）

東左　いやなに、お客人、左程御執心にござるなら御覽に入れるものがあるが、世間へ他言はなりませぬぞ。

直次　如何なる品かは存じませぬが、決して他言はいたしませぬ。

東左　然らば只今お目に掛けん。（ト上手障子屋體の內より、誂への箱を取り出し來り、）お客人、これを見られよ。（ト出す、直次郞手に取りて見て、）

直次　これはとんと、富の箱の雛形の樣でござりまする。

東左　言はるゝ如く富の箱を小振りに造りしものでござる、臺附をして利を得まする此の連中の六韜三略、それを每日手前の宅にて富になぞらへ札を突き、先づ十枚ある札なれば一より五までを小目と唱へ、六より十を大目と名附け、卽座の勝負を催しては、札の出順を鍛錬なし、呼吸を考へ表

向きの富の臺をば附けますゆゑ、毎度利得を得まするも、世間へ祕するその一品、決して他言はなりませぬ。

直次　成程これはよい御工風、稽古の爲になりますから、此の御連中でなされますを拜見させては下さりませぬか。

東左　實は今日連中が揃ひ次第に催す積り、先づ〳〵樣子を御覽なされい。

彌九　我々共の虎の巻を、

伊四　お明しなされし上からは、

九四　人數の揃ふ其の間、

和助　お奧で稽古の一勝負。

とら　お手が足りずば私も、

勘八　頭數ゆゑはひるがよい。

直次　お稽古賃を差出しますから、どうぞお敎へ下さりませ。

東左　然らば各　奧の間で、

彌九　それでは一緒に、

皆々　お客人。

直次　では、お稽古を願ひませうか。

ト彌九郎件の箱を持ちて先きに立ち、伊四藏、九四郎、和助、直次郎、お虎附いて皆々上手障子屋體の内へ入る、跡に東左衞門、勘八殘り、

勘八　旦那樣、何と好い鳥でござりませうが。

東左　よいとも／＼大極上、跡から金子が參るといへば、幾ら來るかは知らねども未練ヿなしに太く短く、來たゞけこつちへ捲揚げよう。

勘八　この御褒美には下郎めにも、ずつしりお禮がござりませうな。

東左　皆まで申すな、胸にあるわえ。

ト兩人悦び居る、合方きつぱりとなり、花道より丑松紺の着附同じく紐附股引草履がけ、黒鴨の供のこしらへにて、風呂敷包みを背負ひて出來り、直に舞臺下手へ來り、

丑松　お頼み申します。

勘八　どうれ。（ト玄關の所へ出る。）

丑松　比企樣と申すお屋敷は、こちら樣でござりますか。

勘八　比企の屋敷は此方だが、どこからこなたは來さしッた。
丑松　私は藏前の伊勢清から參りましたが、主人がこなたに居られますならどうかお逢はせ下さりませ。
勘八　それでは金子を御持參で、主人の迎ひに參られたのか。
丑松　さつき小僧へおつしやり附の、金子を持參いたしましたと、憚りながらお傳へ下さい。
勘八　やれ〳〵それは御苦勞だつた。（トこちらへ來り小聲になり）もし、旦那樣、金子を持つて參りました。
東左　さうして、幾ら持つて來た。
勘八　いえ、そこ所は聞きませぬ。
東左　えゝ氣の利かぬ白痴者め、ついでに高を聞いて參れ。
勘八　へい〳〵畏まりました。（ト又こちらへ來り）今奥へ申した所が、幾らばかり持つて來たか、聞いてくれろとおつしやつた。
丑松　五百兩でよいとのことゆゑ、おつしやり附だけ持つて參つたと、憚りながらお傳へ下さい。
勘八　なに、五百兩。（トびつくりしたるこなしにて）其の通りお傳へ申さう、（トこちらへ來り、）もし旦那樣、五百兩持つて參りました。

東左　何だ五百兩持つて來た、さて〳〵好い鳥もかゝるものだ、どれ〳〵おれが逢つてやらう。（ト切戸口を明け丑松を見て）これ〳〵、伊勢屋のお使ひとやら、そこは玄關の吹き曝しだ、さあ〳〵こつちへ掛けさつしやれ、やれ〳〵嘸かし寒かつたらう。これ勘八、どういふものだ、なぜ火鉢でもあげぬのだ。

勘八　へい〳〵。

東左　いやさ、酒の取つたのがあるではないか、臺所へお連れ申して、なぜ御酒でも進ぜぬのぢや。

勘八　へい〳〵。

東左　何ぞ前町へ申し附け、溫かいもので馳走をいたせ。

勘八　へい〳〵。

東左　これ〳〵お使ひ、臺所へござつて、何もないが寒さ凌ぎに呑んで下さい。

丑松　いえ〳〵、それには及びませぬ。

東左　いや〳〵遠慮をさつしやるな。こりや〳〵勘八、お連れ申さぬか。

勘八　へい〳〵、さあお使ひさん、一緒に來なさい。

丑松　それでは仰せに隨ひまして。

勘八　はて、遠慮なしに來なせえといふに。

ト勘八先きに丑松件の風呂敷包みを持ち、玄關の奥へはひる、跡見送りて東左衞門悦ばしきこなしにて

東左　いや馬鹿な奴もあるもので、樣子も知れぬ臺附を五百兩附ける積りか、態々これへ取り寄せたはよく／＼金に愛想を盡かされ、冥利に盡きた奴と見える、（ト思入あつて氣を替へ、）いや／＼、それとも五百兩といふ金を元手におろす奴では、大きな腹のある奴か、さう侮つてばかりも居られぬ、どんな手並か見て來てやらう。

ト東左衞門奥へはひる、跡沈んだ合方になり、花道より以前の太九藏腕組をなし、悄々として出來り、花道に立ち留り、

太九　人の事よりおのれの事と、さつきお虎の見世先きで、一緒に連れて行つてくれと頼んだ奴等に富の場所は、すりが居るから氣を附けろと教へた身共が、すりに逢ひ、富の札まで入つて居る懷中物を拔かれてしまひ、突くのを待つて居た所が札がなければ仕方がない、是れを思へば福祿壽の夢を見たのは逆夢か、逆さについた身共の目も、是れではさつぱり當てにならぬ。

ト舞臺へ來り、悄々と内へはひる。奥より東左衞門出來り、

東左　おゝ太九藏戻つたか、富の樣子はどうだ／＼。

太九　今日の樣な間の惡い、生憎な日はござりませぬ。

東左　さては手前の買つた札は、當らなんだと相見える。

太九　いえ當らぬのは時の運、聊悔みはいたしませぬが、湯島の社内ですりに逢ひ富の札まで入れてある、懷中物を拔かれてしまひ、すご〳〵歸る途中にて才槌頭に突當り、昨夜見ました福祿壽と鉢合せより痛み入り、これが所謂泣ッ面へ、はち合せでがなござりませう。

東左　いや、惡い後はよいと申して、手前が外で損をいたせば、身共は内で德を取り、大金儲けをいたすから、手前の損は埋めてやるわい。

太九　して儲口とおつしやりまするは、どんな仕事でござりまする。

東左　只今奧にて同役の元木大塚兩人と、九四郎和助が相手となり、富の勝負をいたして居る相手といふは藏前の、伊勢清といふ大家の主人、金子は澤山持つて居れど樣子を知らぬ獸ゆゑ、初めのうちは甘茶を呑ませ段々大きく張込んで膏の乘つた所にて、根こそげこつちへせしめる手筈、ざつと積つて五百兩は、最早ほつほへはひつた同然。

太九　それではわたしが留守の内に、好い鳥がかゝりましたか。

東左　今に根こそげ剝かれるとも知らぬ馬鹿めが夢中になり、奧で勝負をして居るから、障子の蔭から

覗いて見やれ。

太九　然らばどんな獸か、樣子をお見せ下さりませ。

東左　丁度こちらを向いて居れば、正面からよく見やれ。

太九　どれ、鹽まぐろと出かけませう。(ト上手障子屋體の所へ行き、覗いて見てびつくりなし、)もし旦那樣、あれが伊勢淸でござりますか。

東左　おゝ藏前の札差で、伊勢淸といふ大家の主人だ。

太九　そんならあなたは、まだ彼奴を、御存じはござりませぬか。

東左　なに、知らぬかとは、そりやなぜだ。

太九　あれは駒込片町で惡と噂の御家人上り、直侍といふ奴で、太いで名代の河内山とは、兄弟分でござります。

東左　えゝ。(トびつくりなす。)

太九　とんだ奴めが此のお宅へ、舞ひ込みましてござりますな。

東左　さては屋敷で陰富の出來るを知つて札差の、主人に化けてうせ居つたか。

太九　先づ化けましてお目出たう。

東左　えゝ、洒落るのも時によるわえ。(ト氣の揉めるこなし、爰へ下手の奥より以前の勘八出來り、)

勘八　もし旦那樣、五百兩あると申しました風呂敷包みの箱の中を、そつと貫目を引きましたら、瓦の重みでござります。

東左　そりやあ言はずと知れたことだ、われがいゝ氣で連れ込んだ、彼奴は惡の直侍だ。

勘八　えゝ、そんなら彼奴が御家人の。

太九　何であんな惡い奴を、手前は屋敷へ連込んだのだ。

勘八　道理で迎ひに來た奴も、酒をがぶ〳〵喰ひまして、一癖あると思ひました。

東左　えゝ、そんな奴に酒などを、何でそんなに呑ませたのだ。

勘八　それでもあなたのおつしやり附け。

東左　えゝ、あれはほんの盤面だ。

太九　これは幾らか遣りませねば、容易に出ては行きますまい。

東左　なには兎もあれ臺所で、酒を呑むのを止めさせろ。

勘八　へい〳〵畏りました。

太九　どんな奴だか見て參らう。(ト太九藏勘八下手へはひる、東左衞門思入あつて、)

東左　あゝ、こりやどうか仕樣がありさうなものだ。
　　ト當惑のこなし、正面の奥より以前のおていち出來り、
てい　父上樣、これだから私が申さぬことはござりませぬ。
東左　えゝ、今更言つても返らぬわえ。
てい　いいえ、こんなことになりまするも、お心柄でござりまする。
東左　いや、あんな奴を引き入れたのは、お虎婆ァと勘八めだ、身共は少しも知らぬことだわ。
てい　それと申すもお前樣が、よしないことをなさるゆゑ。
東左　いや案じるには及ばぬこと、權威を以て脅してくれん。（ト立ち上るを留めて、）
てい　どうぞ世間へ知れぬやう。
東左　はて、弱身を見せて。（ト袂を拂ふを道具替りの知らせ、）たまるものか。
　　トきつと思入、おていは案じるこなしよろしく、此の模樣早き合方にて道具廻る。

（奥座敷の場）――本舞臺一面の平舞臺、上下折廻し古びたる白地の襖、正面上の方九尺の床の間、此の次地袋、違ひ棚、下の方腰長の壁、總て此の道具古びたる誂へ、眞中に毛氈を敷き、彌九郎目安

の帳面を控へ、伊四藏件の富の箱を前へ置き札を突いて居る、上手に以前の直次郎、下手に九四郎、和助、お虎何れも帳紙の札を目安の帳の上へ置いて居る。この見得誂への合方にて道具留る、と伊四藏箱の内より札を突き上げ、

伊四　第九番の當り。

彌九　今度は大目で伊勢清さんだ。

直次　それでは私がお貰ひ申しませう。（札を搔き寄せることよろしく、）

九四　伊勢清さんは始めてにしては、中々お上手でござりまする。

和助　此の鹽梅で大きく附けられては、忽ちこつちが潰れになり、

とら　頭數の私などは、もう怖くツて手が出ませぬ。

彌九　お虎婆アさんに身共の分を、三兩預けて附けさせたが、もうすつかりと耗つた樣子。

伊四　それでは初心の伊勢清さんが、一番勝利を得られたのか。

直次　へい、先刻十兩臺附に出しましたのを差引いて、十兩程儲かりました。

九四　お虎婆アさんを抜きにして、もつと大きく遣りませう。

和助　せめて五兩づゝも附けませんでは、勝負の埒が明きません。

彌九　それでは目安を控へるのは、お虎婆アさんに賴むといたさう。
とら　お安い御用と申したいが、生憎無筆で讀めません。
伊四　身共が近眼でそなたが無筆、これはちつと不都合だ。
直次　その內追々御連中が、お見えなさるでござりませう。
彌九　どうかいつもの連中が、もう四五人も參ればよいが。
　　ト此の時下手の襖を明け、以前の東左衞門出來り、
東左　いや、もう連中は參らぬから、爰らで止めて貰ひませう。
直次　あなたはこちらの旦那樣。
東九　やう／＼これから膏が乘り、
伊四　伊勢淸どのも樣子が知れ、
九四　これから勝負になるところ、
和助　今仕舞つては詰りませぬ。
とら　なぜそんなことをおつしやいます。
東左　はて、客人の相伴で、先刻過した酒機嫌で、座興に斯樣なことをさせたが、醉が覺めればよから

ぬなぐさみ、爰らで仕舞にして下さい。

彌九　でも、これなりになつたのでは、

伊四　われ〳〵共がほんの犬死。

東左　はて、犬死よりも相手が犬ゆゑ。（ト直次郎へこなしあつて、氣を替へ）いやさ、相手の居ないが何より證據、斯樣な座興はいたさぬことだ。（ト宜しく呑込ませる、皆々合點の行かぬ思入にて）

彌九　何だかさつぱり、

皆々　解せぬわえ。（ト直次郎扨はといふ思入あつて）

直次　いえ御座興だとおつしやりますが、實はこちらのお屋敷樣で、大きな富が出來ると聞き、傳手を求めて態々と上りましたる清三郎、少々手元が薄いゆゑ、宅へ金子を取りにやり、只今持參をさせたれば、どうか今宵は夜と共に、乘るか反るかで機嫌よく、勝負をさせて下さりませ。

彌九　それはこつちで、

皆々　望むところだ。

東左　はてさてこれは呑込みの惡い、いやさ、まだ各には醉つてござるか、蔭富などの催しを何でいたしてよいものか。

彌九　これ〱御主人、何を言はるゝ。
伊四　こなたに毎日あることを、
九四　知つて來たなら猶のこと。
和助　こんな相手は又とない。
とら　よいお客ではござりませぬか。
東左　はて、これ程に申すのを、まだ悟らずに、いやさ、まだ左樣な儀を言つて居るか。
　　トよろしく思入、直次郎も思入あつて、
直次　何だかをかしな御樣子で、急に座興とおつしやるが、相手のお方も懷を減らしておいでの御樣子
ゆゑ、是非とも今夜は大袈裟に、勝負をさせて下さりませ。
　　トづう〱しきこなし、これにて皆々さてはと氣が附く、東左衞門態ときつとなり、
東左　いや、其の相手が氣に入らぬから、座興と言つて斷るのだ。
直次　なに、相手が氣に入らぬとは。
東左　おゝさ、伊勢淸といふ藏宿の主人と名乘つて此の屋敷へ、よくも喰せに參つたな。
彌九　さては相手は、

皆々　喰せ者か。（トびつくり思入。）

直次　さあ、假令相手は喰せ者でも、正眞正銘の金子を出して、お相手いたすに仔細はない、さう嫌ふことはござりますまい。

東左　いや嫌はうが嫌ふまいが、それは主人の了簡次第、相手にせぬから早く歸れ。

直次　さうまた何も愛嬌なく、おつしやることはござりません。

東左　いや、言はなくつてどうするものか、われも目先きの見えぬ奴、なぜ此の屋敷へ立入つた。

直次　どういたしました。（ト是れより誂への合方になり。）

東左　八百萬石のお膝元に八萬騎ある旗本も、千石以上の高取りは同じ格でも肩衣に拘はる筋と身を愼み、まさかに澁の出るやうな亂暴もして歩かぬが、小石川から牛込かけ砂利に等しき旗本の小祿取りは二腰の、扶持方棒を權にかひ、町家へ出ては暴れまはり、惡と名の附く其の内でも、水道端の比企といつては五本の指に折られて居る、おれの屋敷へ手前達が化けて來るのは氣が知れぬ、腹から匹夫のびいびいつくなら、此の儘たゞは歸さぬが、一合取つても侍の扶持をけがした奴だけに、見脫しやるから早く歸れ。（トこれにて直次郎思入あつて、）

直次　それぢやあわつちの實名を、こなたは知つて居なさるか。

東左　おゝ其の名は片岡直次郎といふ、元は公儀の大番同心、御家人上りといふことは、いくら化けても知つて居る。
直次　どうしてそれを知られたか。
　　　ト びつくりこなし、爰へ下手の襖を明け、以前の太九藏勘八出來り、
太九　その見知り人はこの太九藏、よもや身共を忘れはしまい。（ト前へ出ろ、直次郎太九藏を見て、）
直次　こなたはいつぞや吉原へ、金子と一緒に來た侍。
勘八　その名も山住太九藏さんといふ、爰の屋敷の御用人だわ。
直次　さう何もかも知られたら、こいつは頭巾を脱がずばなるまい。
彌九　さては噂に聞いて居る。
伊四　直侍とは、此奴であつたか。
九四　さうとは知らず二十兩、
和助　態と勝たせてやつたのは、
とら　今となつては馬鹿々々しい。
勘八　いや、とんだ奴を連れ込んだ。

東左　態と勝たせて二十兩手前に持たせて歸すのも、ひど算段で借込んだ損料着物の身の廻りや、人を賴んだ雇ひ賃と思つて器用に遣すから、無駄な御託を吐かねえで、日の暮れぬ内早く歸れ。

直次　そつちで歸れと言はねえでも、小ッ旗本の貧乏屋敷、普請の工面も出來ぬかしてがたぴしとした建附に破れ障子の風穴から、吹込む北風が身に染みちやあ所詮長居は出來ねえが、とてものことに若し殿樣、歸るやうにして下せえ。

東左　なに、歸るやうにしてくれとは。

直次　さあしみッたれたこなたの目ぢやあ、損料物と思ふか知らぬが、黑の羽織に絲織の上着は元より下着まで、一分一厘裄丈の違はぬ仕立は平生から、癇でそぐはぬべんべらは、我慢の出來ぬ性分に體は化けても着物まで化かしたものは着て來ねえ、符牒の附いた代物を更に切らせて身の廻りも仕立卸しで來たからは、縫目が口をあくやうな頓馬な仕事と違ふから、只この儘ぢやあ歸られねえ。

ト爰へ下手より以前の丑松出來り、

丑松　おい兄貴、まだそればかりのことぢやあねえ、此の黑鴨の打扮も縞の名にいふ織色をめくら揃ひで損料を安く踏むかは知らねえが、殘らず更にこせえ込み、元手を掛けて來たからは、十や二十

の端た金で追拂はれちやあ引合はねえ、捨値に賣つても何本と相場が立たにやあ賣れねえから、氣張つて買つて貰ひなせえ。

勘八　そりやこそ此奴も喰せ者だ。（ト東左衞門思入あつて、）

東左　そりやあ錦を着て來ようと幾ら元手を掛けようとも、いはゞそつちの勝手なればこちらで知つたことぢやあねえ、割に合はうが合ふめえが、二十兩なら御の字だ、無駄を言はずと早く歸れ。

直次　それぢやあ勝たせた二十兩より、もう出せねえと言ひなさるのか。

東左　おゝ、勝負で勝つたら知らぬこと、わいらの樣なびいつくに、假令二朱でも無駄な金を、たゞ遣つてたまるものか。

直次　呉れなけりやあ貰はぬが、小ッ旗本でも直參の列に加はる槍一筋、先祖が建てた古家の土臺は腐つて曲つても、筋の違つた制禁の蔭富をしてそれで濟むか。

東左　やあ。（トぎつくり思入、）

直次　いやさ、是れを言ひ立て組頭へ、訴へたらば濟むめえが。

トきつと言ふ、これにて皆々顏見合せぢつと思入、丑松こなしあつて、

丑松　その蔭富の出來るのを、慥に聞いて元を掛け、惡事の種を擧げに來たら、望み通りの金を並べ扱

つたなら知らぬこと、さもねえ内は一寸でも動かねえからさう思へ。

トづう〳〵しきこなし、爰へ奥より以前のお次出で、

つぎ　旦那樣、お客來でござりまする。

東左　なに、客來とは誰が參つた。

つぎ　堀田原の先生が、急に御面談がいたしたいと、お待ちなされてござりまする。

東左　丁度立端に、いやさ、太九藏、ちよつと耳を貸せ。

太九　はッ。（ト東左衞門太九藏に囁くことよろしく、）して其の高は、この位で。

ト袂へ手を入れて思入。

東左　いや、此の位で、（ト袂の内にて手を握るこなしあつて氣を替へ、）いやさ、金は出さぬから、其の氣で扱へ。（トお次附いて東左衞門奥へはひる、太九藏思入あつて前へ出で、）

太九　さて直次郎どん、こなたも斯うして元を掛け、仕組んで來たと言ひなされば、まさかに勝の二十兩で歸る譯にもなるまいから、そこは用人の役柄だけ、身共が扱つてやりませう。

直次　左樣ならお前さんが、お扱ひ下さるとか、それは近頃御苦勞でござります。

太九　時にこなた衆の見込では身裝を張込み新らしく、仕立卸しにこしらへて元手の掛つた仕事だから、

十や二十では歸られぬと大きなことを云はつしやるが、今もこなたの言はるゝ通り、御普請前でお手許も至つて不如意の此のお屋敷、たんとのことは出來ぬから、其の二十兩へ十兩足して、三十兩にいたさうから、それで器用に歸るがよい。

直次　いえ思召しは有難いが、その樣なお扱ひなら、まあお斷り申しませう。

太九　それでは、十兩で不承知かな。

丑松　扱ひ〳〵と立派に言ふから、氣の利いたことでも言ふかと思やあ、十兩ばかりの目腐れ金、なんぼ目尻の下つた奴でも、あんまり安直に附けやあがるな、欲しくばそつちへくれてやるわ。

太九　はて、さう言つては物がない、然らば身共が五兩、〳〵〳〵なやんで十五兩にして進ぜるから、それで器用に歸るがよい。

直次　いえ、折角の思召しだが、お斷り申します。

太九　十五兩でも不承知とは、身共も口が利きにくいが、何といたさう、是非がない、乘りかゝつた不承と思ひ、もう五兩足して二十兩とするから、それで器用に歸るがよい。

丑松　えゝ白痴が古着でも買やあしめえし、刻んで相場を附けやあがるな。

太九　二十兩でも不承知か。

直次　先づお斷り申します。
太九　えゝ思ひ切つて十兩買ひ上げ、三十兩にしてやらう、さすれば先の二十兩とも五十兩にならうから、よもやそれなら言分あるまい。
彌九　五十兩なら上相場、言分あらう筈はない。
伊四　それで兎やかう言ひ募り、表沙汰になる時は、
九四　却つてそつちも喰ひ込み、
和助　いゝいすりの科は脱れぬぞ。
勘八　虻も取らず蜂も取らず、
とら　ほんに爰等が負け所だらう。
直次　いやいゝいすりの科と言ひなさるが、貧乏屋敷へいゝいすりに來て、苦しい金を取るやうな、目先の見えぬことはしません。
太九　然らば何で五十兩まで、扱ひ金をせり上げさせ、今まで不承知を申したのだ。
直次　その不承知をいふ譯は、濡れ手で粟の掴み取り、ぺてんに掛けた二百兩を、取返さうと出て來たのだ。

太九　なに、二百兩、

皆々　取返すとは。

直次　島屋の手代半七を、無理に勸めてぺてんに掛け、金を取つたといふことを慥に聞いて貰ひに來たのだ。

太九　その又金子を、何ゆゑに、

彌九　緣も由緣もなき奴が、

伊四　横合から出て、呉れと言ふのだ。

九四　いはゞ勝負で負けた金、

和助　ぺてんに掛けたと言ひがゝりは、

勘八　いすり騙りに違ひねえ、

とら　返せなどゝは蟲がいゝよ。

直次　いや緣のねえことはねえ、あの半七は直次郎が素讀の師匠の義理ある弟、ぺてんに掛けられ此の間主人の金を二百兩こつちの屋敷で貪られ、言譯なさに身を投げて死ぬと覺悟をした所へ、丁度折よく行合せ、やう／＼命は助けたが、金がなければ主人方へ歸參の出來ぬ日蔭者、明るい體に

してやらうと、取られた金の二百兩を元々通りに貰ひに來た、耳を揃へて渡しなせえ。

太九　味にからんだ義理合の誼を言ひ立て此の屋敷へ、おつなことからぐづり込み、ぺてんに掛けたと言ひがゝるが、おのが勝手で札を買ひ、得心づくでした仕事だ。

彌九　さうとも〳〵、二百兩位は愚なこと、假令千兩取られても、

伊四　附目が出れば其の代り、三千兩にもなる臺附。

九四　乘るか反るかでやつたのは、

和助　慾があるからした仕事、

勘八　それを兎やかう言ひがゝるは、

とら　やつぱりいすりに違ひない。

直次　そりやあ湯島や愛宕にある、天下御免の富ならば、假令何枚札を買ひ反故同然にならうと目が出ねばそれまでとあきらめるのは當り前だが、博奕に類する制禁の蔭富をして屋敷內へ、初心な者を引き摺り込み、厭だと言ふを無理やりに僅か一枚二十だと買はした札は二十兩、十枚だから二百兩と言ひかけをして取つたのは、大道でする最中より酷い仕事の鼻ッ張り、爰に居合す衆達も大方ぐるの一つ穴、ぺてんに掛けたと言はれても五分も動きは取れめえが。

丑松　それとも天下の御法度の博奕や富の臺附を旗本仲間で自儘に賣り、陰富をしていゝといふ御免の沙汰でもあつたのか。

皆々　さあ、それは。

丑松　よもや、御免はありやしめえ。

直次　さあぺてんに掛けた二百兩を、耳を揃へて爰へ出すか、但しはこれを老中へ、進達をして調べようか、二つに一つの返事をしろ。

彌九　おゝ進達するならいたして見ろ、天下の法度といふことを、承知の上でした仕事だ。

伊四　こつちも罪は脱れぬが、そつちもいすりの兇状で、其の儘たゞは濟まねえぞ。

直次　そりやあそつちで言はねえでも、背中へ背負つた棒の數、百も合點二三度は暗へ所へも博奕で行き墨の入つた二の腕に肩書のある體だが、まだ切られるといふ程の重い惡事もしねえから、遠島位の兇状で、佐渡か三宅へ行かうとも高がこつちは大番同心、そつちは僅か二百石か三百石でも旗本の列に加はる知行を捨て、喰ひ込んぢやあ合ふめえが、それとも五一三六に中へ行くのが承知なら、こつちに聊か否やはねえ、よく考へて極めなせえ。

丑松　成程兄貴のいふ通り、三百石でも旗本の知行を棒に振るがいゝか、詫り賃の二百兩返して詫びを

するがいゝか、爰は一番考へものだ。（ト是れにて太九藏氣の揉めるこなしにて、）

太九　これ〳〵貴公もどうしたものだ、得心づくでしたことをぺてんに掛けたと言ひ掛り、二百兩とは相場が高い、身共も口を利きかけて引込む譯にも行かぬから、御主人へ願つて見て、二十兩へ八十兩足して百兩にしてやらう、それで器用に歸るがいゝ。

直次　いや二百兩が一兩缺けても、こつちはうんとは言はぬから、其の扱ひは止して下せえ。

太九　それでは氣張つて、

皆々　百兩でも。

直次　金を取られた半七が、主人へ歸參の叶ふやうに、ならねえ内は不承知だ。

トきつぱり言ふ、太九藏思入あつて、

太九　はて、其の二百兩も惡錢ゆゑ、半はめりに御主人がお出しなされた樣子だから、身共が中を扱つて、百兩持たせて歸すといふを、不承知ならば勝手にしろ。

直次　それぢやあ是れから老中へ、進達しても構はねえか。

太九　おゝ、どうともそつちの、

皆々　勝手にしろ。

直次　勝手にしねえでどうするものか。
丑松　それぢやあ兄貴、出かけよう。
　　　ト兩人立上り下手へ行きかけろ、爰へ下手の襖を開け、金子市之丞羽織着流し大小をさして出來り、
市之　あいや片岡氏、暫く待たれよ。（ト前へ出ろ、直次郎丑松後を見返り）
直次　や、思ひ掛けねえ、金子さん。
丑松　そんなら今の客といつたは、
太九　市之丞樣で、
皆々　ござつたか。（ト是れにて市之丞よろしく住ひ）
市之　測らず只今參り合せ、委細は次にて承はつたが、片岡氏とは市之丞知らぬ中でもござらぬゆゑ、邪魔を承知で差出てござる、先づ〳〵各下に居られよ。
　　　トよろしくこなし、直次郎丑松顏見合せ、思入あつて下に居ろ、太九歲皆々市之丞の側へ來り、
太九　左樣の譯なら金子氏、どうかあなたのお扱ひにて、
彌九　無事にこの場の納まるやう、
伊四　われ〳〵共も共々に、

九四　どうぞお願ひ、

皆々　申しまする。(ト是れより合方替つて、)

市之　是れへ出ました上からは、惡いやうには計らひませぬ、先づ〳〵身共にお任せなされい。(トこちらへ向ひ、)直次郎殿、ちよつとこれへ。

直次　いや、外のことなら知らぬこと、此のお扱ひは金子さん、口を出さずに居て下せえ。

市之　はて、承はれば由縁ある島屋の手代半七の、歸參の爲めの二百兩、取戻しに來たお身とやら、さすればそれを比企氏より、返濟させたらよくござらう。

太九　いえ、それを返す位なら。

市之　さゝ、外の儀なれば市之丞が、どの樣にも扱ひますが、何を申すも旗本屋敷で、天下の法を犯し、荒立てられぬ蔭富の催しせしがこちらの失、又先方はその金子を私慾に遣ふ心でなく、義理ある者が主人方へ歸參の爲めにいたすとあれば、表の立ちし二百兩、それゆゑ只今比企氏へ手前が篤と申し諭し、預り參りし二百兩、萬事拙者にお任せなされい。(ト懷中より金包みを出す。)

太九　すりや、あの主人が、

皆々　御得心にて。

市之　はて、一旦綺麗にすつぱりと、返すも後ですつぱりと、（ト思入あつて氣を替へ）いやさ、切放れよく返すがよろしい。

太九　はてさて、それは、

皆々　惜しいものだ。（ト市之丞思入あつて、）

市之　いやなに直次郎どの、本來なれば此の金子へ、肴料でも添へるのぢやが、思ひ寄らざる扱ひゆゑ不行屆きは御容赦下され。（ト直次郎の前へ差出す、直次郎思入あつて、）

直次　むゝ、すりや先達ての遺恨ある此の直次郎の詞を立て、花を持たせて二百兩、耳を揃へて下さるとか。

市之　はて、遺恨は遺恨、道は道、天理に缺けし金子ゆゑ、身共が扱ひ元々へ、返すは道を立てたきゆゑ、疑念を晴らして請取られよ。

直次　いや流石は名高い金子さん、恐れ入つたるお扱ひ、まことに感心いたしました。

丑松　相手が名うての旗本ゆゑ、どうで只ぢやあ濟むめえと切られる覺悟で居たところ、市之丞さんのお扱ひで、双方無事に納るとは、こんな目出たいことはねえ。

市之　身共も双方納まつて、心嬉しく思ふゆゑ、どこぞで一酌汲みたいが、兎角不自由なこの土地柄、

何れ近日松金屋へ出張つて一盞催すから、迎ひを上げたら來て下さい。
直次　いえ、そのお禮はこちらからいたす心で居りますから、御招待をして近々に、きつと一杯催しませう。
丑松　それぢやあ兄貴、暮れねえ内に、ちつとも早く出掛けよう。
太九　いや金子氏が參られずば、態と勝たせた二十兩、せめてへ、へ、へずつてやらうもの。
彌九　見す〳〵衒り取られるとは。
伊四　思へば〳〵。（トきつとなるを止めて、）
市之　はて、何事も手前の胸に、（トよろしく思入、直次郎市之丞の樣子を見て、）
直次　若しや歸りを、
市之　や。
直次　いえ、お暇申します。（ト唄になり、丑松附いて直次郎下手の襖の内へはひる。）
勘八　どれ、鹽花でも振つてやらう。（ト同じく下手へはひる、奧より以前のおてい出で、）
てい　市之丞樣のお蔭にて、無事に此の場も濟み、やう〳〵安心いたしました。
太九　心得難いは片岡めに、御遺恨のある金子氏。

彌九　殊に剛氣の其許が、
伊四　言ふなり次第に二百兩、
九四　渡してお遣りなされしは、
和助　御了簡でもござりましてか、
とら　あんまり齒痒うござりまする。（ト此の内市之丞煙草を呑み居て、）
市之　これと申すも御當家の、爲めを思ひしこの扱ひ。
太九　さてはやつぱり、
皆々　むざ〳〵と。
市之　はて、花を持たして歸せしは、夜半の嵐にすつぱりと、
　　ト切つてしまはうといふこなしよろしく、おてい是れを見て取り、
てい　そんなら、若しや。（トびつくりする、市之丞氣を替へ、）
市之　はて、散らす黃金は、（ト煙管にて灰吹を叩くを道具替りの知らせ、）湧きものでござる。
　　トにつたり思入、太九藏皆々扱はと悅ぶ、おていはこれを案じるこなし、此の模樣合方にて道具廻る。

（小石川堀端の場）——本舞臺常足の二重八枚飾り、石垣の蹴込み、後奥深に水戸の邸の表門を見たる夜の遠見、所々に腰を掛ける程の捨石を並べ、上手よき所に疊んである葭簀張りの出茶屋、下手に柳の立木、總て小石川濠端の體。爰に幕明きの仕出し三人立掛り居る、浪の音にて道具留まる。

○湯島の富といふものを、生れて始めて行つて見たが、話しに聞いたより大層なものだ。

△その上今日は當り札に、間違ひがあるとかいつて、富の半で揉めが出來、

□いつもは暮れぬその內に、早く仕舞になるさうだが、今日はとつぷり日が暮れた。

○早く歸つて湯へでも這入り、一の富でも取つた積りで、

△一杯やつて早寐とやらかし、

□長者に成つた夢でも見よう。

○それがいゝ〳〵。

ト仕出し三人は下手へはひろ、跡下座の唄になり、花道より二幕目の半七、着流し雪踏にて悄々として出來り、花道にて、

半七　今日は湯島の突日とやらで、富でも取らうといふ人は、寄ると觸ると噂とり〴〵、その臺附の賣買を聞いてもぞつと身の毛立つは、比企の屋敷で此の間銜り取られた二百兩、あれがなければ御

主人へ歸參のならぬ半七を、不便な奴と思召し、片岡さまが掛合に行つて下さる約束も、今日暮方に小石川の水戸さま前で待つて居ろと、おつしやつては下されど、向うも惡漢と名の高い比企の屋敷のことなれば容易なことでは二百兩耳を揃へて渡すまい。あゝどうか首尾よく行けばよいが。(ト又唄になり、半七舞臺へ來り、立止り、)それに附けてもあの金が、そつくり戻らぬ其の時は、再び主人へ歸られず、といつて何時が何時までも義理ある中の幸兵衞どのゝ、厄介になつて居るも氣の毒、金が出來ずばいつそのこと、親父や姉に歎きをば掛けるは不孝と思へども、死んで主人へ言譯をするより外に思案はない、早く安否が聞きたいものぢや。

ト右の唄にて、半七うろ〳〵して居る、爰へ下手より以前の丑松先きに、小さな提灯を持ち、直次郎と連れ立ち出來る、半七此の體を見て、

丑松　おゝ、半七どのか。
それへお出でなされましたは、片岡さまではござりませぬか。
半七　へい、私でござりまする。
直次　約束違はず半七どの、よく待つて居て下すつた、嘸立つて居て寒かつたらう。
半七　私よりはあなた方が、嘸お寒からうと思ひまして、お氣の毒でなりませぬ。

直次　いや人のことは人がすると云へば、氣の毒がるには及ばねえ。
半七　さうして早速伺ひまするが、定めてあちらの惡黨手合が、無法を申したでござりませうな。
直次　さあ無法なことも言ひましたが、そこはこつちも負けねえ氣で、到頭取戻して來た。
半七　えゝ、そんなら金子をそつくりと、渡しましてござりますか。
丑松　十兩位からせり上げて到頭しまひが二百兩、惡黨め等にも似合はねえ、よつほど未練な奴等だつた。
半七　やれ〳〵それはお二人さまも、嘸お骨折りでござりましたらう。
ト直次郎懷中より以前の金を出し、
直次　そつくり仕舞つてあつたと見え、封じた儘で二百兩、慥にそなたに渡します。
ト半七請取り、
半七　お蔭さまで私の、命が是れで助かりまする。
直次　少しも早く橋場へ行き、二人の衆に見せなさい。
半七　是れを見せたらそれは〳〵、悅ぶことでござりませう。
丑松　これでお前も命拾ひだ。

直次　然し折角拾つた命、一人で歸すは物騷だ、丑松お前御苦勞ながら、一緒に送つてやつて下せえ。
半七　いえ、此の上御苦勞かけましては、お氣の毒でござりまする。
丑松　はて、佛造つて魂入れずと、道に間違ひでもあつた日にやあ、兄貴もわつちも犬死だ、送つてやるから遠慮をしなさんな。
直次　それぢやあ丑松、頼んだぜ。
丑松　さうして兄貴は爰で別れて、これから何處へ行きなさる。
直次　おらあ今夜新宿の、馴染の内に内會があつて、河内山が行つて居るから、そこへ後から行く約束、いづれお前に明日の朝逢つて今夜の末を話さう。
半七　左樣なれば私は、お詞に甘えまして、是れでお別れ申しまする。
直次　隨分道を氣を附けなせえ。
丑松　それぢあ兄貴、明日の朝お前の來るのを待つて居ます。
直次　橋場の歸りに北廓へ行くなら、今夜おれが山へ行つたは、あいつに言はずに置いてくれ。
丑松　そりやあ大丈夫言やあしません。
半七　それでは、これにて片岡樣。

直次　二人の衆へ、よく言つて下さい。

半七　有難うございまする。

ト浪の音合方になり、丑松附いて半七上手へはひろ。直次郎跡を見送り、

直次　幸兵衛どのから頼まれた歸參の金の二百兩も、思ひの外に手輕く戻り、是れでこつちも義理が立ち、人の命も助かれば、そでねえことをしながらも、少しは惡事の罪滅し、此の頃にねえ好い心持ちだ。

ト下手へ行きにかゝる。此の時下手奥の方より以前の市之丞出來り、兩人ちよつと行合ひ、市之丞直次郎を透し見て、

市之　あいや片岡氏、ちよと待つて下せえ。

直次　さういふ聲は、

市之　金子市之丞だ。

直次　なに、金子さんか。（ト思入。此の時後の遠見へ切拔きし灯入の月出る。）

市之　直に跡から追掛けたが、枝道多きこの邊の横へ切れでもめされしか、すんでにこなたを見はぐるところ、よく爰に居て下さつた。

直次　さうして何ぞ御用でも。

市之　さ、用があるからこなたの跡、慕つて參つた市之丞、まあ下に居て貰ひたい。

ト是れより誂への合方になり、兩人有合ふ石へ腰を掛け、

直次　して私に御用とは、どういふ譯か聞かせて下さい。

市之　其の用といふは外でもない、ちと折入つて御身から申し受けたいものあつて、それで追掛け參つたのぢや。(ト直次郎思入あつて、)

直次　その貰ひたいとおつしやるは、若しや廓の三千歳を、くれといふのぢやござりませぬか。

市之　いや三千歳よりもまだ外に、申し受けたいものがある。

直次　して、其の外に貰ひたいとは。

市之　そなたの命が貰ひたい。

直次　何と。(トきつとなる。)

市之　いつぞや廓の大口で、思ひがけなく出逢ひし折、根岸へ行くといふ噂を、ちらりと聞いてこれ幸ひ、丁度時刻も引過ぎに里をはなれし戸なし駕籠、しかも所は金杉へ土手から下りる坂道に、垂れのすきから裾の出た羽織を目當に一突きと思ひの外にその駕籠へ、乘つて居たのはその前方湯島

で出逢つた河内山、何の遺恨もなきものを殺すも無益の殺生と闇に紛れて其の儘に、無事に別れてしまつたが、いつぞは遺恨を返さうと思ひに思つた直次郎、今夜ばかりは否應なし、お身の命は貰つたぞ。

直次　こなたが身請をしようといふ、其の三千歳の邪魔をした、此の直次郎の言ふなりに、二百兩といふ金を返し綺麗に捌いた扱ひは、大方こんなことであらうと、此方も推量したゆゑに、請取る金は頼まれた其の半七に爰で逢ひ、首尾よく渡して丑松に、内へ送らせやつたれば一本立ちの直次郎、實は一足跡へ殘り、こなたの來るのを待つて居た。

市之　むゝ、流石は名うての直侍、待つて居たとはいゝ肚胸、その腹からの匹夫でなき性根と見たゆゑ此處で眞劍勝負をいたさうと、跡から附けた小石川、水府の前の宵の口、暮れて往來も途切れたは二人の爲めによき都合、邪魔のなきうち直次郎、いざ立上つて勝負いたせ。

ト市之丞立上り、刀の目釘をしめしきつとなる、直次郎やはり下に居て、

直次　いや折角のお望みだが、立上るのは止しにしよう。

市之　然らば心がおくれたか。

直次　いや山が崩れて來ようともびッくりともせぬ直次郎、勝負と聞いておくれるやうなそんな肚胸は

持たねえが、いはゞ破落戸同様な安御家人の悲しさは、武士といふのは名ばかりで、子供の折からきずなんこ、札と賽とに氣は入れても勤めの外は大小を差すのが厭で飛び歩き、腕に覺えた壺皿と切込む札のいかさまより、外に知らねえわたしだから、眞影流の達人と呼ばるゝ程のこなたとは所詮勝負になるめえから、さつき貰つた二百兩のお禮と思つて此の命、器用に爰で進ぜるから、首からなりと腕からなりと、すつぱりやつてくんなせえ。（トぢつと思入、市之丞こなしあつて）

市之　すりや一流を極めたる、達人ゆゑに及ばぬと、見切りを附けて立合はぬか。

直次　龍車に向ふ蟷螂の、所詮及ばぬことだから、立合ふことは止しませう。

ト是れにて市之丞せゝら笑ひ、

市之　それも尤も駒込の場末に育つた安御家人、非番の折に鋤鍬で畑を耕す業はすれど、竹刀を持つて道場へ通ふ武術の業は知るまい、そのわざ物の一刀も腰に帶せし長曾根の切味ためす片手打ち、得心ならばばらしてくれん。

直次　及ばぬことゝ知つたゆゑ、清く命を渡さうと覺悟して居る直次郎、逃げも隠れもしねえから、憎まれ口を利かねえで、早くすつぱりやんなせえ。（トぢつとなつて體を突附ける。）

市之　おゝ、望み通りに、

ト刀の柄に手をかけ、躊躇ひ居る、直次郎まだ切らぬかといふ思入にて、眼を開き後を見返り、

直次　何を猶豫をしなさるのだ、邪魔のなき内切つて下せえ。（ト市之丞思入あつて、）

市之　いや、切るのは止めにいたさう。

直次　なに、切るのを止めるとは。

市之　さ、及ばぬまでも立上り、又向ひ立てをいたしなば、果し合ひにも相成るが、手出しもせずに居るものを、切るは後日の名折れゆゑ、望んだ命も預けて置かう。

直次　いゝや、そりやあ入らぬ遠慮、是れが途中の行違ひか出合頭の喧嘩なら、假令相手が鬼神でも肚胸をすゑて打ち合ふが、女の遺恨で附け覘ふ相手と知つて二百兩、淸く渡したこなたゆゑ、こつちも人に頼まれた義理が立つたる其の返禮、望む命をすつぱりと淸く渡すが互ひの義理。さあ、すつぱりとやんなせえ。

市之　いや其の肚胸が頼もしい、世の人情で言つて見れば、先づ十人が九人まで叶はぬまでも立合ふか、又は卑怯に逃げ出すか大概知れた人心、それを綺麗に肚胸を据ゑ、恥を厭はず劍道の嗜みなきを言ひ明し、及ばぬゆゑにすつぱりと切つてくれとは大丈夫、それを無慚に切るときは、唯の師匠と誹謗され、身共の腕が鈍るゆゑ、貰ふ時節の來るまでは、望んだ命を預けて置かう。

ト是れにて直次郎感心の思入あつて、

直次　それぢやお唯の武家と違ひ、多くの弟子を取立て、當時名高い先生だけ、腕の鈍るをかへりみて、覺悟の命は取らぬとか。

市之　まだ先生と尊るゝ左樣な株はあらざれど、僅な弟子でも師匠といはれ、堀田原の片隅に、町道場の看板を掲げて見れば刄向はぬもの〻命は取りたくない。

直次　いや、成程人の上へ立つ、師匠の性根は別なものだ。

市之　然し一旦市之丞の、望みかゝつた命ゆゑ、

直次　そりやァ今夜は助かるとも、後日に出逢ふその時は、

市之　預けた命を取戻すか、

直次　又は運よく脱れるか、

市之　二つ一つは臺附の、

直次　一二爭ふ兄弟、

市之　戀の遺恨で命まで、

直次　取られる處を預けられ、

市之　互ひに無事で別るゝとは、

直次　これも後日の、

ト此の時上手より頰冠りなせし男一人、着流し尻端折りにて走り出來り、

○　お話し〳〵。（ト呼びながら花道へ駈けてはひる。兩人これを見送り、）

直次 市之　まことにお話しの、（ト直次郎は體の塵を拂ふ、市之丞は大小の腰を直す、双方見合つて木の頭、）種だなあ。

ト兩人につたり思入、此の模樣浪の音迷兒の鳴物にて、よろしく、

ひやうし幕

六幕目

入谷村蕎麥屋の場
同大口屋別莊の場

（淨瑠璃）軒の雫に袖濡す、思ひ入谷の別莊に、忍逢春雪解（淸元連中）

〔役名――片岡直次郎、寺田幸兵衞、金子市之丞、くらやみの丑松、大口の番頭九兵衞、寮番喜兵衞、按摩丈賀、蕎麥屋仁八、見る目の勘次、嗅ぐ鼻の千太、捕手。大口の抱へ三千歳、幸兵衞女房お元、同女房おかう、小按摩淸賀、番頭新造千代春、新造千代鶴。〕

（入谷村蕎麥屋の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面紺の暖簾口、上手一間押入戸棚、下手一間蕎麥の小蒸籠丼を重れたる書割、上の方一間障子屋體、いつもの所屋根附雪の積りし門口、下の方一間葺下しの下家、三尺繩暖簾を掛け、三尺板羽目、二八蕎麥うんどんといふ行燈を掛け、下手より花道一面に雪布を敷き、門口の内幅廣の床几を置く、下手に蕎麥釜の土竈、二重に膳丼湯桶などを置き、總て入谷村蕎麥屋の體。爰に勘次、千太半合羽紺の股引足駄にて腰を掛け、膳を据ゑ、丼を持ちぶつかけを喰つて居る、下手釜前に仁八紺の着附襷掛けにて蕎麥を拵へ、おかう結び髮前垂掛けにて給仕をして居る、此見得四竹節雪おろしにて幕開く。舞臺の下手へ日覆より雪を降らせ、兩人蕎麥を喰つて、

勘次　おいお上さん、替りをくんねえ。

かう　はい／＼畏まりました。お替りが出ますよ。

仁八　あい／＼。（ト仁八蕎麥をこしらへにかゝる。）

千太　雪が降るとはいひながら、大層今夜は寒いね。

かう　まことにお寒うございます、ちつとお當りなさいまし。（ト火鉢を出す。）

勘次　春の雪は降るそばから直ぐ解けてしまふものだが、さつぱり今夜は解けねえな。

千太　これで夜通し降つたらば、明日はしつかり積るだらう。

仁八　からッ風の吹くよりかおしめりにはようございますが、わたし共の生業などは降られてはいけません。
勘次　なに、お前のとこばかりぢやあねえ、下駄屋傘屋のその外は、何生業でもいけやあしねえ。
千太　雨と違つて一寸降つても、雪ぢやあ十日片附かねえ。
かう　町と違つて此の邊は、道が惡くッて困ります。
仁八　あい、出來たよ。（トおかう盆へ丼を二つ載せ、）
かう　はい、お替りでございます。（ト勘次千太捨ゼリフにて喰ひながら、）
勘次　もし親方、爰等にたしか吉原の、大口の寮があつたね。
仁八　大口の寮は、この先きの横町を左りへ曲つて、角から二軒目でございます。
千太　あすこの内で評判の、三千歳といふおいらんが、こつちへ來て居るさうだね。
仁八　ぶら／＼病で此の間から、新造を連れて來て居ます。
勘次　あの寮を預つて居るのは、慥出入の植木屋だね。
かう　はい左樣でございます、喜兵衛といふ達者な人でございます。
勘次　外には誰も居ねえかえ。

仁八　飯炊の婆ァさんに、お針が一人に新造が二人、それに按摩が毎晩來ます。
千太　蕎麥は大方お前の所へ、さう言つて來るのだらうね。
仁八　はい、時折お誂へがござりますので、寮へ持つて參ります。
千太　表口は洗ひ出しの化粧庇の意氣な門だが、裏口はどこからはひるね。
仁八　裏口は新道の、炭團屋の裏でござります。
勘次　あゝ、あの裏からはひるのかえ。（ト此の內湯を呑み錢を置き、）ときに、もう行かうぢやねえか。
千太　蕎麥を喰つて溫まつたから、此の勢ひで遣ッつけよう。
かう　是れからどちらへお出でなさいます。
勘次　淺草へ行くのだが、外を廻ると遠いから、田圃を突切つて行きますのさ。
千太　太郎樣の門前まで、出拔けるうちが極く難儀だ。
仁八　此の先きの石橋が、一枚落ちて居りますから、氣を附けてお出でなさい。
勘次　あい、有難うございます。
かう　お靜にお出でなさいまし。（ト勘次千太門口へ出て、）
勘次　あゝ寒い／＼、西ならひで吹ッ切られるやうだ。

千太　一思ひに遣ッつけよう。（ト四ツ竹節雪おろしにて、兩人下手へはひる。）

仁八　今の二人は何者だか、堅氣な人とも見えないが、何であんなに大口の寮を委しく聞いたのだか。

かう　大方あすこに色でもあつて、それで聞いて行つたのだらう。

仁八　二人とも女郎衆などに、可愛がられる風でもないが、何ぞ當りのあることか。

かう　裏口などを聞いたから、泥坊ぢやァあるまいかね。

仁八　なに、泥坊なら顏を晒して、あんなことを聞きやあしない。

かう　何だか氣味が惡いから、今夜は早くしまはうぢやないか。

仁八　むゝ、此の雪ぢやあ往來はなし、出前も言つて來さうもないから、もう仕舞つてもいゝけれど、何時も大口へ行く丈賀さんが、まだ今夜は來なさらねえの。

かう　大方雪で休みなすつたらう、爰を通りさへしなされば、きつとあがつて行きなさる。

仁八　おいらの所の一得意、あんな好きな人はない。

トおかう丼を片附け洗つて居る、端唄の合方雪おろし、日覆より雪を降らし、花道より直次郎好みの半纏頬冠り尻端折り下駄がけ、大黒傘をさし出來り、花道へ止り、後先へ思入あつて、

直次　今朝の南が吹替り、西ならひで雪になつたが、近年にねえ今年の寒さで、思ひの外積つたせゐか、

まだ今夜も五つ前だが九つ過ぎに歩くやうだ、さつぱり往來の人に逢はず、おれが爲めにやあ有難え。（ト舞臺へ來り行燈を見て、）爰等に知つた者もねえから、蕎麥を一杯喰つていかうか。（ト門口から內を覗き、）お、、好い鹽梅に誰も居ねえ。（ト頰冠りを解いて、後で結へ內へはひる。）

仁八　へい、いらつしやいまし。

直次　おい、天麩羅で一合つけてくんねえ。

仁八　お生憎でございますが、天麩羅はございません。

直次　なけりやあ、たゞのかけでいゝ。

仁八　はい〳〵。（ト丼を取つて拵へる、おかうは德利の燗をする、直次郎火鉢を引寄せ、）

直次　あゝ寒い〳〵、手の先きがぴり〳〵するが、一杯やらにやあ溫まらねえ。

かう　嘸お寒うございましたらう。

直次　田圃の路の吹晒しで、すつかり縮み上つてしまつた。

かう　へい、お待遠でございました。

ト膳の上へ丼と燗德利、猪口を添へ持つて來る、直次郎捨ぜりふにて酒を呑みながら、

直次　もし、爰等に慥吉原の、大口の寮がありましたね。

仁八　はい、此の先きの横町でござります。
直次　あゝ、この先きの横町かえ。
かう　今もお聞きなされたお方がござりました。
直次　どんな人が聞きました。
かう　合羽掛けで小傳法な、二人連でござりました。
直次　あゝ、さうであつたか。（ト思入あつて、）お上さん、もう少し熱くしておくんなせえ。
かう　はい〳〵。

トおかう徳利の燗を直す、直次郎は蕎麥を喰ふ、雪おろし四ッ竹節になり、花道より丈賀二幕目の按摩にて、古き番傘をさして杖を突き出來り。

丈賀　あゝ降るわ〳〵、今の間に下駄の齒へ雪が溜つて歩きにくい、按摩泣かせといふ天氣だ。（ト言ひながら本舞臺へ來り門口から、）親方、よく今夜は仕舞はなかつたね。（ト杖で探りながら内へはひる。）
仁八　おゝ丈賀さんか、今も噂をして居ました。
丈賀　定めて惡く言つて居たらうね。
仁八　何で惡く言ふものか、わたしの所の一得意だ。

丈賀　一得意はごま過ぎるが、極熱で一杯くんなせえ。
かう　仁八　あい〳〵。（ト蕎麥をこしらへる。）
今夜はおいでが遲いから、お休みかと思ひました。
丈賀　どうして〳〵、一晩でも休まないのは、大口さんの寮へ此の頃來て居なさる、三千歳さんといふおいらんが、廓と違つて淋しいから毎晩療治に來てくれとお賴みゆゑ、名代に悴を先きへ遣つて置いて、暮れてから泊り仕事に、毎晩かゝさず行きますのさ。
仁八　そりやあいゝお得意だね。
かう　はい、お替り附きでござります。（ト膳へ丼を二ツ載せ、丈賀の前へ持つて來る、丈賀喰ひながら、）
丈賀　こいつァ滅法熱くていゝ。
かう　その三千歳さんといふおいらんは、何病でござります。
丈賀　おいらん方の病氣といへば、七分は大概梅毒だが、此の三千歳さんの所へ來る直さんといふ情人が、何か惡いことがあつて、久しく影を見せないので、それを氣病にぶら〳〵病、家でも大事のおいらんだから、出養生に出したのさ。
仁八　その直さんといふ人は、どんな人か知らないが、女郎を氣病で煩はすとは、男冥利に叶つたこと

だ。

丈賀　どうで男と生れた甲斐に、そんな目に逢ひたいものだね。

かう　惚れられはしまいけれど、其處へ毎晩呼ばれるのは、丈賀さんは仕合せだ、嘸御馳走がありませうね。

丈賀　あるどころぢやあござりません、酒もあれば肴もあり、三日にあげず鰻の御馳走、實にうまい物の喰ひ飽きだ。

仁八　そんなにうまい物があるのに、蕎麥をあがるは無駄なものだね。

丈賀　わたしの蕎麥は蟲が好くので、ぷんと匂ひが鼻へはひると、喰はずには居られない。

ト丈賀蕎麥を喰ふ、此の內直次郎思入あつて聲を替へて、

直次　もし親方、硯箱を貸しておくんなせえな。

仁八　生憎でござりますが、硯はござりますが、筆がござりませぬ。

かう　そこに一本あつたぢやあないかね。

仁八　あの筆は首がない。

直次　え、（ト思入あつて、）それぢやあ筆は入らねえから、硯を貸しておくんなせえ。

仁八　はい〳〵。

ト硯へ墨を載せて出す、直次郎取つて楊枝の先きを噛んでこれへ墨を附け、鼻紙へ書く、此の内丈賀蕎麥を喰ひ、湯を貰つて呑む、直次郎は硯を返し錢を置いて、

直次　あい、大きにお世話になりました。

仁八　へい、お歸りなさいまし。（ト雪おろし四ッ竹節にて、直次郎門口へ出で頬冠りをしながら、）

直次　今蕎麥を喰ひに來たは、大口へ來る按摩の丈賀、寮へ來て居る三千歳の所へ行くとは丁度幸ひ、爰で丈賀の歸りを待受け、この手紙を屆けて貰はう。

ト右の鳴物にて直次郎下手へ行く、是れにて道具半廻しになり、蕎麥屋の入口上手になり、下手一面雪の積りし建仁寺垣、中央にひらきの開きし庭口の道具になる、直次郎傘の雪を落しながら、

もう丈賀が來さうなものだ。（ト蕎麥屋の内にて、）

仁八　少し雪が小降りになつた。

かう　この間に早くお出でなさい。

丈賀　又明日逢ひませう。（トやはり右の鳴物にて、蕎麥屋より丈賀杖を突き出來り、）山下から坂木かけ、好い蕎麥はいくらもあるが、何處の家も盛りが悪りい、蕎麥はちつと次ぎだけれど、盛りのいゝのは

愛に限る。（ト言ひながら下手へ來る事）

直次　おい、丈賀さん〳〵。

丈賀　はい、どなたゞね。

直次　お前、おれの聲を忘れたか。

丈賀　おゝ、さうおつしやるは、三千歳さんのお客の、直さんでござりますか。（トこれへ冠せて）

直次　これさ、大きな聲をしなさんな。（ト直次郎四邊へ思入）

丈賀　もし、お前さんゆゑ三千歳さんは、後の月からぶら〳〵煩ひ、出養生にこの入谷の寮へ來てお出でなさいます。

直次　そのことは、今蕎麥屋で聞いた。

丈賀　あ、あそこにおいでなさいましたか。

直次　おらあお前の後に居た。

丈賀　後に目がないから、存じませなんだ。

直次　前にも目はないくせに。

丈賀　これはあやま針の療治。

直次　古い洒落をいふぢやあねえか。
丈賀　所が恐れ入谷だからさ。
直次　いや常談は扨置いて、お前にちつと頼みがある。
丈賀　なに、私へお頼みとは。
直次　この手紙をこつそりと、三千歳へ屆けてくんねえ。（ト鼻紙へ書きし手紙を、丈賀へ手渡しにする。）
丈賀　畏まりました。療治をする時こつそりと、お手渡しにいたしませう。
ト紙入へ入れる、直次郎一分銀を紙へ包み、
直次　こりやあ少しばかりだが。（ト手渡しにする、丈賀頂いて、）
丈賀　これは有難うござります。（ト紙入へ入れ、）お前さんにおいらんが逢ひたがつておいでなさいますから、一緒にお連れ申したいが、番頭の赤鬼九兵衛がお針を張りに來て居ますから、うつかりお連れ申されない。
直次　それぢやあ九兵衛が來て居るか。
丈賀　これも內證の言ひ附けで、大方見張りでござりませう。
直次　九兵衛が居ては猶のこと、大事の用が書いてあるから、落しちやあいかねえぜ。

丈賀　そりやあ大丈夫でござります。(ト雪おろし四ツ竹節にて、丈賀下手へはひる、直次郎跡を見送り、)

直次　思ひがけねえ丈賀に逢つて、手紙を持たしてやつたから、もう逢はれぬと思つて居た、三千歳に逢はれるわえ。

ト時の鐘雪おろしになり、上手より丑松頰冠りの上へ饅頭笠を冠り、赤合羽尻端折りにて出來る、直次郎は上手の方へ行かうとして行合ひ、左右へよけて入替り、丑松直次郎を透し見て、

丑松　そこへ行くのは、兄貴ぢやあねえか。

直次　おゝ、さういふ聲は。

丑松　丑松だ。

直次　よく似て居ると思つたが、やつぱりそれぢやあ丑松か。

丑松　お前どこへ行きなさるのだ。

直次　おらあこれから田圃を突切り、淺草の方へ行く積りだ。

丑松　あつちへ行くのは止しにしねえ。

直次　なに、止せとは。(ト時の鐘誂へ端唄の合方になり、)

丑松　お前の惡事が露顯して、定廻りへ御下知になり、手先手合が集つて淺草から吉原かけ、網を張つ

て待つて居るから、引返して山の手へ、ちつとの内隱れて居ねえ。

直次　其の噂を聞いたから、おれも暫く隱れて居たが、今夜の雪を幸ひに橋場へ行かうと思つたが、それぢやあ手前の意見に附いて、これから跡へ引ッ返さう。

丑松　こんなに嚴しくなつたのも、小石川の比企の屋敷へお手が入つて召捕られ、富の臺附、貸元、筒敷、拷問にまで掛つても、流石は惡といはるゝだけ東左衞門は落ちねえさうだが、目尻の下つた用人の太九藏が意氣地なく、何もかも喋つたので、たうとう脫れず罪に落ち、改易になるといふことだ。表向は殿樣だが、內證は破落戶同樣な旗本仲間のいゝいかさま師、そこでいつかの意趣返しに、彼奴がお前を抱き込む氣で、申し立てたに違えねえ、それで嚴しく搜すのだ。

直次　おらあ上野の一件と思つて影を隱したが、それぢやあ比企の一件か、三百石でも旗本の家が一軒潰れりやあこつちの身にも拘る筈、こいつあおれも覺悟して、行く支度をしにやあならねえ。

丑松　お前もおれも押借りで、二度まで墨が入つたからは、どうで始終は切られる體、時代おくれのせりふたが所詮二十五の曉まで首尾よく越せねえ喰詰め者、今度行きやあ二度と再びもうこの娑婆へは出られねえから、脫れるだけは脫れる氣で、是れから旅へ出掛ける氣だ。

直次　さうして手前はどつちへ行くのだ。

丑松　今夜の雪を幸ひに、草加まで出拔けて置いて、上州の方へ行かうと思ひ、今練塀小路の旦那へ行き路用の金を貰つたから、この入谷に居る伯母に逢つて後の事を頼んで置き、直に千住へ出る氣だが、さうして兄貴はこれからどこへ。

直次　おれも江戸に居られねえから、旅へ出る氣で橋場まで、宵の内に行つて來て、今夜の内に高井戸か布田あたりまで乘越して、それから旅の姿に替へ、身延參りの信者と見せ、甲州に居るお袋に逢ひ、先づほとぼりの冷めるうち、京大阪を廻つて來る氣だ。

丑松　それぢやあ是れから兄貴にも、一年經つて逢はれるか、二年經つて逢はれるか、見留のつかねえ旅の空。

直次　明日を待たずに今夜の内、この江戸の地を離れゝば、

丑松　長い別れになる二人、どこぞで一杯やりてえが、

直次　町と違つて入谷ぢやあ、喰物見世は蕎麥屋ばかり、

丑松　天か玉子のぬきで呑むのも、しみッたれなはなしだから、

直次　祝ひ延して此の儘に、別れて行くも降る雪より、

丑松　互ひに積る身の惡事に、

直次 氷柱のやうな槍にかゝるか、
丑松 又は氷の刄にかゝるか、
直次 襟に冷てえならひ風、
丑松 筑波おろしに行く先きの、
直次 見えぬ吹雪が天の助け、
丑松 そんなら兄貴。
直次 達者で居ろよ。

ト雪おろし端唄にて、直次郎思入あつて花道へはひる、丑松跡を見送り居る、時の鐘を打込み、思入あつて、

丑松 あゝ寒い〳〵、又牡丹餅のやうなのが降つて來た、是れぢやあ草加まで行けねえが、今夜まご〳〵して居る内喰ひ込んぢやあ詰らねえが、こいつあ一番考へものだ。（ト前の端唄の殘りになり、丑松思入あつて、）比企の屋敷の一件から直侍を手分けして手先きの衆が搜して居るが、人に勝れて素早いから、たうとう今日まで逃げ果せ、御難を脫れて甲州路へ身延參りとごまかして石和川を越してしまへば鵜縄にかゝる氣遣ひなし、これから紺屋の親分へこの事を行つて知らすれば、法

論石より重い罪も、此の一廉でおれは抜け、龍の口の首の座や佐渡へ送られる氣遣えなし、こいつあ是れから宗旨を替へ、中へいつて知らしてやらう。（ト合方にて上手へ行きかけ、思入あつて）如何におれが脱れるとて、是れまで世話になつた人を、喰ひ込ますも不實なはなし、こいつあ止して旅へ行かうか。（ト下手へ行きかけ、思入あつて）知らしておれが脱れようか。（ト端唄の切になり、丑松思入あつて、どつちにしたら好からうな。

ト思案の思入、上手門口を明け、仁八額を出し、隣の庭口を見て、

仁八　おゝ、隣りの庭口が明いて居るが、何か取られるといかないから、早く知らして上げるがいゝ。

ト丑松を怪しく思つて門口をしめる、丑松これを聞き、

丑松　むゝ、知らせろといふいゝ見徳、こいつあ早く、（ト饅頭笠を冠るを、道具替りの知らせ）知らせようわえ。

ト時の鐘、端唄、雪おろしにてよろしく道具廻る。

（入谷村大口寮の場）――本舞臺四間の間平舞臺、正面上手一間の床の間、續いて一間違ひ棚、この下小形の襖、上の方一間下地窓腰張りの茶壁、この隅障子出入り、下の方一間折廻し障子、床の間に掛物花瓶に梅を活け、よき所に丸行燈、總て入谷村大口寮の體。爰に三千歳部屋着好みのこしらへ褥の上に

住ひ、側に手焙の火鉢、煙草盆長煙管などを置く、後に清賀の小按摩肩を揉み居る、下手長火鉢に千代春の番頭新造、千代鶴の新造火鉢へ當りながら草双紙を見て居る、此の見得誂への端唄にて道具留る。

千春　これ清賀さん、精を出して揉まないと、さつきのお菓子は上げないよ。

清賀　いえ、精を出さないどころか、汗をかいて揉んで居ります。

千鶴　おいらん居睡りをしましたらうね。

三千　あゝ、肩へ取付いて少し揉むと、直に居睡りが出たよ。

清賀　そんな嘘をおつきなさいますな、今夜は居睡りのいの字もしませぬ。

千春　お前などは目がないから、睡いことはなさゝうなものだに。

清賀　なに、盲目だつて睡うございます。

千鶴　いつぞは聞いて見ようと思つたが、おつかさんもおめくかえ。

清賀　いえ、お袋は目がありますと立派にも言へませんが、片目で一つあります。

三千　それぢやあお前の所では、三人寄つて目が一つかえ。

清賀　お話しでも附けるなら、三の小目がようござりまする。

千春　洒落たことをお言ひでないよ。

清賀　いや、富といへば湯島から、おいらんの所へおいでなさる、直さんはどうなさいました。
三千　よくお前にがらかつたが、久しくこつちへ來なさらないよ。
千鶴　ほんに手紙もおよこしなされず、どうなすつたのでござりませう。
千春　明日は使屋のをぢさんに、方々聞いて貰ひませう。
三千　わたしの病氣も其の元は、直さんの身を案じるゆゑ、煩ふ程に思つて居るに、なぜ便りをして下さんせぬか。
千春　九兵衛どんが來て居ますから、大きな聲をなさいますな。
三千　又今日も來て居るのかえ。
千春　この間からお針さんがこつちへ仕事においでだから、跡を追つて來ますのさ。
三千　あの人の國には鏡がないか、無駄なことを止せばよいに。
千鶴　あれでもずつといゝつもりで、おつにめかして居りますよ。
清賀　めかしたつて赤鬼と、誰が情人になるものか。
千鶴　よし〳〵、九兵衛どんに言ッ附けてやらう。
清賀　どうぞ默つて居ておくんなさい。

ト右の合方にて、下手障子屋體より、お元世話女房のこしらへにて出來り、

もと　おいらん、大層降つて參りましたね。

三千　おや、まだお歸りでなかつたかえ。

もと　早く歸ればようございましたが、親父の半纏が切れましたから繼を當てゝやりましたので、大きに遲くなりました。

千春　これから橋場へ歸るのも、よつぽどの道だから、今夜は泊つておいでなさいな。

もと　有難うございますが、まだたんと積りませぬから、今の内參りませう。

千鶴　それぢやあお歸りなさんすかえ。

もと　私が歸りませぬと、宿が一人で困ります。

千春　亭主孝行なことでござりますね。

清賀　お針さんは此の雪でも、家へ歸るといひなさるに、おいらの親父はなぜ來ないか。

三千　いつも來なさる時分だが、今夜は雪で休みなすつたか。

千春　それ共情人の所へでも、行きなすつたのかも知れないぜ。

清賀　なに、情人などはありませんが、少し餘計な錢があると引張女を買ひに行きますので、いつでも

跡でお袋と大喧嘩が始まります。

千鶴　おとつさんが強いか、おつかさんが強いか。

清賀　そりやあ一つでも目があるから、お袋が強うござります。此間もおッ伏せられて酷い目に逢ひました、それといふのもでいゝしに置いたお金といふ女按摩へ、かん／＼のうを極めこんで、木魚講になつたのでお袋が怒り出し、なけなしの金を三兩遣つて追出してしまひました。

ト此の時下手障子屋體より、以前の丈賀探り／＼出來り、

丈賀　よく親のことを惡くいつたな。

もと　おや、何時の間にか丈賀さんが、後に立つて居なすつた。

千春　こりやとんだことを、

千鶴　聞かれたね。

清賀　なに、聞かれたつて構やあしませぬ、無いことを言やあしまいし。

丈賀　親の恥を觸れ歩く不孝な奴でも子と思へば、嘸この雪で寒からうと、燒芋を買つて來ましたが、今のを聞いては遣りませぬ。

清賀　なに、燒芋などは貰はなくつてもいゝ、今蕎麥饅頭をお貰ひ申した。

丈賀　こちら樣で可愛がつて、いろ〳〵な物を下さるので、口が奢つて此の頃は、燒芋などは喰べませぬ。

清賀　喰はないことはないけれど、とつさんお前が溫石替りに腹へ押附けて來た燒芋は、汚なくつて喰はれるものか。

丈賀　厭なら決して喰ふには及ばぬ、不斷お世話になるお禮に、千代鶴さんへ上げませう。

ト懷から塵紙へ包んだ燒芋を出す。

千鶴　我が子さへ喰べぬものを、誰がそれを貰ふものかね。

清賀　決して喰べてはいけませぬ、惡くすると虱が居ます。

千春　おや、燒芋にかえ。

丈賀　まだそんなことを言やあがるか。（ト丈賀淸賀の天窓を打つ。）

清賀　あいたゝゝゝ。

もと　あんまり口が過ぎるから、おとつさんに打たれたのだ、早くあつちへ逃げておいで。

ト　お元淸賀を突き遣る、淸賀天窓を押へながら、

清賀　盲目坊主の助平親父め。

丈賀　おれも盲目なら、手前も盲目だ。
三千　何だねお前、大人氣ない、子供を相手に靜におしな。
丈賀　おいらんへは濟みませんが、あんまり憎うございますから。
清賀　そんなら拵へなけりやあいゝに。
丈賀　まだそんなことを言ふか。
千春　さあ〳〵早く逃げな〳〵。（ト合方にて千代春千代鶴清賀を連れて奥へはひる。）
千鶴
もと　あの子が逃げて行つたので、丈賀さんの鳴りも鎭まり。
三千　大風の吹いた跡のやうだ。
丈賀　あゝ濟まぬことをいたしました。（ト思入あつて、）もしおいらん、爰においでなさいますは、お針さんばかりでござりますか。
もと　皆さんは、清賀さんと一緒に行きなさいました。
丈賀　お氣の毒だが少しの内、奥へ行つて下さいませぬか。
もと　何ぞ内證の御用かえ。
丈賀　はい、左様でござります。

三千　何の用か知らないが、お元さんに遠慮はないから、構はず話しなさんせ。
丈賀　左樣なれば、こつそりと、是れを御覽下さりませ。
ト合方きつばりとなり、丈賀紙入から以前の手紙を出す、三千歲行燈を引き寄せ手紙を見てびつくりなし、
三千　や、こりや直さんから。（ト嬉しき思入。）
丈賀　あもし、壁に耳でござります。
三千　お元さん、そこに見て居て下さいまし。
もと　はい、畏まりました。（トお元下手を窺ふ、三千歲手紙を見て嬉しき思入あつて、）
三千　何處で、お前お逢ひだい。
丈賀　この先きの蕎麥屋の前で、思ひがけなくお出逢ひ申し、そつと是れを屆けてくれと、お頼まれ申しました。
三千　よく屆けておくれだつた。（ト煙草箱の引出しから金を出して紙に包み、）丈賀さん、少しばかりだが。
ト丈賀に遣る。
丈賀　是れは有難うござります、さつきも直さんから、お貰ひ申しましてござります。
もと　今お話しの樣子では、片岡さんからおいらんへ、お便りがござりましたか。

三千　今夜わたしに逢ひ度いと、手紙を寄越しなさんした。（ト此の時奥より千代春千代鶴出て、）

千春　おいらん、嘸お嬉しう、

兩人　ございませうね。

三千　あ、靜におしよ。（ト千代春に囁く、千代春千代鶴に囁く。）

千春　それでは今夜この近所へ、忍んで來て居なさいますか。

千鶴　どうか庭からこつそりと、座敷へお連れ申したいが。

丈賀　うつかりそれはいけませぬ、見る目嗅ぐ鼻兼帶の赤鬼といふ異名をとつた、九兵衛どのが來て居ますぜ。

千春　どうかしておいらんに、お逢はせ申したいが。

千鶴　九兵衛どんを歸してしまふ、よい工夫はありますまいか。（トお元思入あつて、）

もと　九兵衛どのなら、私が連れ出して上げませう。

三千　そんなら、お前が。

もと　これから家へ歸りますのに、廣徳寺前が淋しいゆゑ、丁度幸ひ道連れに頼んで一緒に參ります。

丈賀　お針さんにほの字だから、嬉しがつて出掛けませう、まことにこれは妙案だ。

ト此の時下手障子屋體より、二幕目の九兵衞、半合羽着流しにて出來り、

九兵　丈賀さん、何時來なすつた。

丈賀　今しがた參りました。

九兵　もうちつと早かつたら、一つ揉んで貰はうに。

丈賀　つい雪で道が惡く、何時もより遲くなりました。

三千　九兵衞どん、お前今夜は泊るのかえ。

九兵　はい歸つてもよし泊つてもよし、お元さん、お前はどうする。

もと　わたしや歸らうと思ひますが、一人では淋しいから、どうしようかと思ひます。

九兵　お前が泊ればおれも泊るが、これから家へ歸るのなら、橋場まで送つて上げよう。

もと　それは有難うござりまする、然しお氣の毒でござりますね。

九兵　なに氣の毒なことがあるものか、どうであつちへ歸り道だ。

千春　九兵衞どんはお元さんと、連立つて歸れば本望だね。

千鶴　丁度今夜は雪は降るし、相々傘で手に手を取り、

丈賀　さし詰め爰は清元だね。

千春　おゝ、清元といへば、隣の寮へ家元が來て居なすつたから、

千鶴　今に淨瑠璃が始まりませう。

九兵　その淨瑠璃の文句を借り、道行心で出掛けませう。（トお元思入あつて、）

もと　それではおいらん、私はもうお暇いたします。

三千　今夜のお禮は、きつと後で、

もと　何のお禮に及びませう、日頃お世話になりまする、御恩送りでござります。

九兵　さあ、歸るとなつたら、少しも早く。

千春　ほんにこれから、

千春 千鶴　橋場までは、

丈賀　外を廻れば一里足らず。

三千　九兵衛どん、頼んだよ。

九兵　きつと送り屆けます。（ト合方雪おろしにて、九兵衛お元障子屋體へはひる。跡を見送りて、）

千春　邪魔を拂つた上からは、少しも早く庭口の門を開けて置きたいものだが、

千鶴　用心の爲め門へ、大きな錠がおろしてあれば、鍵がなければ開けられず、

三千　お元さんの親ではあれど、寮番の喜兵衞さんに、貸してくれとも言はれぬ譯。
丈賀　一つよければ又一つ、まゝにならぬが浮世の中。
千春　じれッたいでは、
千鶴
千春　ありませんか。（ト此の時下手障子を開け、二幕目の喜兵衞半纏着流しにて出來り、）
喜兵　若し千代春さん、あんまり今夜は寒いから、湯へ一杯入つて來ますから、跡をお賴み申します。
千春　坂本の湯へおいでか、ゆつくりと行つておいで。
喜兵　行つて來る內此の鍵を、預つて置いて下さいまし。（ト懷から木札の附きし鍵を出して渡す。）
千春　喜兵衞さん、この鍵は、
喜兵　そりやあ裏の門の鍵だ。
三千　え、それでは今の話しをば、
千春　お前は聞いて、
兩人　居なさんしたか。
喜兵　春氣で少し逆上るせゐか、此の間から耳が遠く、お前さん方のひそ〳〵話しは、何にもわしには聞えませぬ。

丈賀　いや流石は以前の苦勞人、それと言はずに、門の鍵を。（ト喜兵衞空耳に聞きし思入にて）

喜兵　なに、鍛冶屋の小僧がいゝ、ありやあ爰らで評判で、よく湯へ來ては唄つて居るが、中でもおはこの都々一は、ぴんとおろした心の錠も合鍵や互ひの胸にある、取られてならぬ大事の鍵ゆゑ、預けて行くも此の喜兵衞が、胸にあるから遠慮なく。

ト門を開けろといふ思入、三千歲嬉しきこなしにて、

三千　何にも言はぬ、喜兵衞さん。

喜兵　あもし、（ト抑へ、四邊を見廻し、）今夜はしつぽり、（ト立上るを道具替りの知らせ）降りませう。

ト端唄へ雪おろしを冠せ、三千歲は手を合せ拜む、此の模樣よろしく道具廻る。

（大口寮座敷の場）――本舞臺四間常足の二重、三尺の本椽附、雪の積りし本庇、正面床の間中釘へ梅と椿を活けし籠花活を掛け、下手銀地へ梅柳菫蒲公英を描きし嵩谷の襖、上の方後へ下げて臂掛窓の障子屋體、この前梅の立木、石燈籠、いつもの所屋根附二枚開きの門、門へ錠をおろし、此の下板羽目皆雪持ち、下手より花道へ掛け一面雪布を敷き、總て前の寮庭口の體。雪おろしにて道具止る。と雪おろしを打上げ、伊豫簾の内にて、

口上 浄瑠璃名題「軒の雫に袖濡す、思ひ入谷の別莊に、忍逢春雪解、浄瑠璃太夫清元延壽太夫――」
(ト太夫三絃の連名を讀み、)いよ〳〵此の所浄瑠璃はじまり、其の爲め、口上左樣。
ト知せに附き、下手屋體の伊豫簾を巻上げろ、爰に清元連中羽織袴にて仕ひ直に浄瑠璃になる。
〽冴えかへる春の寒さに降る雨も、暮れていつしか雪となり、上野の鐘の音もこほる細き流れの幾曲り、末は田川へ入谷村。
ト本釣鐘を打ち込み、合方にて花道より以前の直次郎頰冠りにて出來り、花道へ止る。
〽廓へ近き畦道も右か左りか白妙に、往來のなきを幸ひと、人目を忍びたゝずみて、
トやはり本釣鐘、直次郎後先を見廻し、
直次 思ひがけなく丈賀に出逢ひ、賴んで遣つたさつきの手紙、もう三千歲へ屆いた時分、門のしまりが開けてあるか、そつと門から當つて見よう。
〽雪をよすがに直次郎、たしかに爰と目覺えの門の樞へ立寄れば、風に鳴子の音高く、驚く折柄新造が燈火携へ立ち出でゝ、
ト此の内直次郎四邊へ思入あつて舞臺へ來り、門の側へ來り、石に躓き門に當る、是れにて鳴子鳴り、直次郎驚く途端庇の雪落ちろ、此の時奥より千代春鍵を持ち、千代鶴行燈を提げて出來り、

千春　今門の鳴子の鳴つたのは、風のやうではなかつたが。
千鶴　大方爰へ直さんが、
千春　あゝこれ、靜におしよ。

〽さし足なして千代春が、樞へ寄りて聲ひそめ、

ト千代春庭下駄をはき、門の側へ來て小聲にて、

直さんでございますか。
直次　おゝ、さういふは千代春さんか。
千春　今錠を開けますから、少し待つてゝ下さいまし。
千鶴　わたしは早くおいらんへ、お知らせ申して參りませう。

〽氣轉きかして奥と口、互ひに心合鍵に樞を開けて伴ふ折柄、門の外には丑松が内の樣子を窺ひて、一人うなづき雪道を、飛ぶが如くに走り行く、

ト此の内千代鶴奥へはひる、千代春は錠を開け門を拔き、門を開け直次郎を内へ入れ跡をしめる、此の時下手より以前の丑松頰冠りにて出來り、内を窺ひ、思入あつて花道へ逸散にはひる。

千春　もし直さん、よくおいでなさいましたね。

直次　やつとの思ひで、忍んで來た。
千春　どんなにおいらんがお前さんを、お案じ申したか知れませぬ。
直次　聞けば煩つて居るさうだね。
千春　それも、お前さんゆゑでござります。
〽晴れて逢はれぬ戀中は、人に心を奥の間より知らせ嬉しく三千歳が、飛び立つばかり立出で〻譯も涙に縋り附き、
ト此の内直次郎足の雪を拂ひ、二重へ上ろ、千代春傘たゝ片附けて上ろ。よき程に奥より以前の三千歳、千代鶴附いて出來り、直次郎を見て嬉しき思入にて、
三千　直さん、逢ひ度うござんした。
直次　これ、大きな聲をしてくれるな。
千春　いえ、大きな聲をなすつても大丈夫でござります、寮番の喜兵衛さんは御存じの通り、お元さんが實の親でござりますから、何もかも知りぬいて、それと言はずに門の鍵をわたしに預けて、今し方湯へ入りに行きました。
千鶴　奥に居るのは御飯炊の二合半のお米どんに、お馴染の丈賀さん、二人とも臺所でお酒を呑んで居

ましたが、醉つたと見えて其の儘に、肱を枕の高鼾、氣遣ひなものはございませんから、ゆつくりとなさいまし。

三千　直さんに逢つたら、言はうくと思つたことも、つい嬉しいので忘れてしまひ、何から先きへ言はうやら。

直次　これが旅へでもおれが行つて、一年と二年逢はなんだら、話しも溜つて居ようけれど、後の月から廿日ばかり、まだ一月にもなりやあしねえに。

千春　是まで廓で三日にあげずおいでなさんした直さんゆゑ、僅廿日ばかりでも、おいらんの氣では一年も逢はないやうでござんせう。

千鶴　斯うして寮へおいらんが來ておいでなさんすも、お前さんのおいでがないゆゑ、それを氣病にぶらくく煩ひ。

千春　お醫者樣の藥より、お前さんの優しい詞が、何よりよくきゝますから。

千鶴　早く直して下さいまし。

直次　折角二人の賴みだが、此の療治はおれには出來ねえ。

千春　そりや又、

兩人　何で。

直次　以前ならば居續け日和、三日も流すところだが、雪を見掛けて今宵の内に、直に別れて歸らにやならねえ。

三千　久し振りでござんしたに、雪を見掛けて歸るとは、どういふ譯でござんすえ。

直次　さあ、其の譯は言ふに言はれぬ。（ト二人へ憚る思入、千代春思入あつて、）

千春　もう湯に行つた喜兵衞さんが、歸つてくる時分ゆゑ、

千鶴　わたし等二人は奧へ行つて、張番をして居ますから、

千春　そこでゆつくり、

兩人　お話しなさんせ。

〽廓に馴れたる新造が話しの邪魔と次の間に、粹を通して入りにける。

ト千代春千代鶴うなづき合つて奧へはひろ、跡新内模樣になり。

〽跡には二人さし合ひも涙拭うて三千歳が、恨めしさうに顏を見て、

ト三千歳直次郎に縋り、ぢつと思入、誂への合方になり、

三千　これ此の樣に瘦せるほど、思つて居るにちよつとでも、なぜ顏を見せて下さんせぬ。

直次　惡事千里でおれがことも、定めて噂に聞いたであらうが、晴れて世間の歩けねえ捜されて居るおれが體、それゆゑ廓へも足を拔き、久しく麻布の狸穴に、穴籠りをして居たのだ。

三千　金子さんが來る度に、お前のことを惡く言へど、何時でも中途で立つてしまひ、委しく聞いたことはないが、世間晴れて步けぬとは、どういふ譯でござんすえ。

直次　是れまで廓へ足を近く、人に不審を受けるまで三日に揚げず通つたが、見得の場所ゆゑ遂に一度隱す惡事は言はなんだが、今夜別れていつ逢はれるか、見留めの附かねえ身の上に、隱すことを打明けて話した上で相談なし、年が明けたら夫婦にならうと誓ひを立てゝ約束したが、所詮一緒になれねえから、（ト紙入より起請を出し、）取交してゐる起請を返し、今夜別れてしまふ氣だ。

三千　え、そりやまあどういふ譯あつて。

直次　世間を憚かるおれが身の上、斯ういふ譯と話したら、おれに愛想が盡きるだらう。

三千　なに、お前に愛想が盡きるとは。

直次　何を隱さう、是れまでに、遣つた金は一兩でも、正路な金はありやあしねえ。

三千　えゝ。（ト合方きつばりとなり。）

直次　黑の羽織にお太刀をきめ、いつも小僧を供に連れ、言はずと裝は札差の旦那でごまかすいゝかさま

師、素人めかして內會の中へ入つて側中滲ひ、凄みを喰して脅した上、金と轉んで賽の目の四の五の言つてゆするが內職、其の相摺は兄弟分、惡事に黑人の白無垢鐵火、御數寄屋坊主の河內山、支配違ひに町方で久しい間見脫したも、捨て、置かれぬ輪王寺のお名前衒り二つには、比企の屋敷で二百兩ゆすつた事がぱつとして、とんだ憂き目に大目小目、臺附ゆゑに東左衞門がたうとう知行も揚屋入り、それやこれやの響きから、嚴しい詮議になつたゆゑ、暫く影を隱したが、今度行けば切られるか輕くて伊豆か佐渡ヶ島、危ねえ船に乘らにやあならねえ、さうした日には約束も水の泡ゆゑさつぱりと、綺麗に緣を切つた上、見掛けた山もねえけれど、笹子を越えて甲府に居る大恩受けたお袋に、逢つてそれから上方へ高飛びをするおれが了簡、此の世の別れに今夜來たが、斯ういふ惡事をする者とは、お前も今日まで知らなんだらう。(ト三千歲思入あつて、)

三千　何ほわたしが、、、ぼんやりでも、それを知らずに居ませうか、お前が、、、ゆすり衒りをするのは、わたしは疾うから知つて居ます。

直次　それぢやあ疾うから、知つて居るとか。

三千　金子さんが來る度に、お前を思ひ切らせようと、斯ういふゆすり衒りがあれば、どうで終ひは切られるか、又は島へ流されるか、所詮此の世に居られぬから、早く思ひ切つてしまへと、言ふの

もわたしは空吹く風、夫婦約束したからは沖に漂ふ小舟同然、得心づくで乗つたらば早手にあへば覆り、死ぬは元より覺悟の前、お前のことゆゑ切れるといふは、わたしに後の難儀をば掛けまい爲めでござんせうが、それは却つて恨みでござんす、此の世で添はれぬことならば、彼の世へ行つて世間晴れ、夫婦になる氣でござんすぞえ。

直次　さういふことなら約束を、反故にしめえが今日別れて、何時逢はれるか知れねえ體、これから何處へ行かうともどうで隱れて居るからは、長く便りも出來めえが、必ずおれを恨んでくれるな。

三千　長く便りのないことなら、いつそのことにお前の手に掛け、殺して行つて下さんせ。

直次　なに、殺して行けとは。

三千　僅別れて居てさへも、（ト是より口説になり）

クドキ〽一日逢はねば千日の思ひにわたしや煩うて、針や藥のしるしさへ泣きの涙に紙濡らし、枕に結ぶ夢覺めていとゞ思ひのます鏡、見る度毎に面瘦せて、どうで存へ居られねば殺して行つて下さんせと、男に縋り歎くにぞ、（ト新内模様のくどき、三千歳直次郎宜しくあつて、）

直次　そりやあ惡い了簡だ、實の親はないにもせよ、養ひ親の藤五郎どのに恩も返さず先立つは、此の上もねえ不孝のことだ、おれが明日にも召捕られ、假令切られて死んだとて、一緒に死なうなど

といふ無分別を出してくれるな。〽今更言うて返らぬが、悪事をなしてお仕置を受くれば先祖代々の、墓へ入れぬ身の上に、回向院の下屋敷へおれが墓を立てくれ、それがそなたへ此の世の頼み。〽これが頼みと手を取りて、共に涙にくれにける。（ト直次郎よろしく思入。）

三千　いえ〳〵わたしやどうあつても、お前が死ねば死ぬ覺悟、假令此の世の頼みでも存へる氣はござんせぬ。

〽男も愚痴に搦まれて持餘したる折柄に、始終を聞きて寮番の、喜兵衞は一間を立出て、

ト直次郎困る思入、奥より以前の喜兵衞出來り、

喜兵　片岡さま、久しくお目に掛りませぬ。

直次　おゝ寮番の喜兵衞どのか、あ、お前に逢うては面目ない。

喜兵　いえ、今夜は雪でこの寮へ參る者もござりませねば、御心配には及びませぬ。

三千　思ひ掛けなく直さんに、逢ふのはお前のお蔭ゆゑ。

喜兵　是れは不斷一方ならず親子がお世話になりますゆゑ、分けてお禮を申さにやならぬは、末の悴の半七が危い命も片岡さまの、お蔭で助かりましたれば、そのお禮を申さうと、是れへ參つて襖越

し。

直次　それでは、今の話しをば、

三千　お前はそこで聞かしやんしたか。(ト喜兵衛思入あつて、合方きつぱりとなり)

喜兵　さあ承はつてござりますが、殺してくれとおつしやつたとて、殺されるものでもなければ、死ぬのをふツつり思ひ切り、今宵の雪を幸ひに手に手を取つて甲州へ、爰からお逃げなされませ、さうした事ならおいらんも、嘸御本望でござりませう。

直次　志しは忝けないが山坂多い甲州路、女の足では覺束ないが、難所は駕籠で越すにもせよ、律義を見込んで大口から、寮番にした喜兵衛どの、爰から逃げればこなたの越度。

三千　嬉しいことは嬉しいが、お前の難儀になることを、知りつゝ何うまあ逃げられませう。

喜兵　越度は元より覺悟の前、數年出入の大口樣濟まぬことではござりますが、先達ても内證で旦那さまとお上さまが私へのお話に、あの三千歳は一方ならず稼出すゆゑに、お客も多く内證の爲になつたれば、惡い噂も聞き流し、病氣といふから保養の爲め入谷の寮へやつて置くも、逢ひたい人があるならば勝手に逢せる主人の情とお慈悲深いお二人樣、それゆゑお勸め申します、よしや是れが越度となり、喜兵衛が難儀になりますとも、娘は元より私まで三千歳さまのお世話になり、

取分け悴半七には命の親の片岡さま、爰等が御恩の送りどころ、邪魔のないうち少しも早く爰をお逃げなされませ。

〽斯ういふうちも寸善尺魔、障りのなきうちさあ〳〵と、言へど此方は水鳥の、浮寝の床の水放れ、葭蘆原を立ち兼ぬれば、

ト此の内喜兵衛早く逃げろと勸める、直次郎ぢつと思入、三千歳思入あつて、

三千　喜兵衛さんもあのやうに、事を分けて言はしやんすれば、足手纏ひでござんせうが、連れて逃げて下さんせ。

直次　これが常の旅ならば連れて行くまいものでもねえが、跡より追手の掛る身の上、女を連れゝば目に立つて足の附くのは知れたこと、どうも連れては行かれねえ。

三千　そんなら殺して下さんすか。

直次　何でそなたが殺されようぞ。

三千　そんなら、連れて逃げて下さんすか。

直次　さあ、

三千
喜兵　さあ、

三人　さあ〳〵。

喜兵　一緒にお逃げなされませ。（ト直次郎思入あつて、）

直次　死ぬといふのを振捨てゝ、行くのも情のないことだが、とあつて連れて行く時は、忽ちこの身は召捕られ、四鳥に掛る今日の仕儀、こりやどうしたらよからうぞ。

〽實に桓山の苦しみも斯くやとばかり降る雪に、積る思ひぞ、

ト直次郎立上るを三千歳引留め、喜兵衞もしと留める、此の模樣三重雪おろしにて下手の淨瑠璃臺を黑幕と張物にて消し、舞臺はこれと一緒に廻る。

（淺草觀音裏手の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中に屋根附の石地藏、樒の花を立て、この前に賽錢箱、この傍に大樹の榎、日覆より同じく釣枝、上の方雪の積りし樹木の張物、下の方藪疊み、向ふ六鄕侯の屋敷の遠見、總て雪持ち、舞臺花道共雪布を敷き、總て淺草觀音裏手の體、爰に丸兵衞尻端折り疊みし傘を振上げ、下手にお元下に居て打たれし思入、雪おろし凄き合方へ、題目太鼓を冠せし鳴物にて道具留る。と日覆より雪を降らし、

もと　こりや、丸兵衞さんには無法にも、何でわたしを打たしやんす。

九兵　何でとは知れたこと、入谷の寮から外を廻り、道の遠いも合點で、山崎町から氣を長く、爰までおれが口說いて來たが、得心しねえ上からは毆つた傘の破れかぶれ、大きな體で抱きすくめ、爰でおぬしをなぐさんで、腹を癒るからさう思へ。

もと　そんならお前の言ふことを、わたしが承知せぬゆゑに、爰で手籠めにしなさるとか、假令命を取らるゝとも、何でこの身を任さうぞ。

九兵　いくら強情張つたとて、人家を離れた觀音裏、晝はシヤギリや辻打の音の絕えねえ奥山も、暮てはしんと鳴る鐘の響きも遠いならひ風、殊に今夜はこの雪で往來のねえ六鄕田圃、宵に呑んだ五合の酒の醒めねえ其の內に、早く返事をするがいゝ。（トお元思入あつて、）

もと　入谷の寮にこなたが居ては、邪魔になるゆゑ連れ出したも、一方ならずお世話になる三千歲さんへの恩返し、途中でまいて逃げようと思ひの外に附纏はれ、放れぬからは仕方がない、爰で命を捨つるのも前の世からの約束ごと、假令打たうが殺さうがお前に此の身は任せぬから、憎いと思はゞ一思ひに、わたしを殺して下さんせいな。

九兵　いゝや、滅多にわれは殺さぬ、縛つて置いても息のある內、存分おれがなぐさまねば思ひに思つた念が晴れねえ。どうで跡で殺さにやあ生かして置けば強婬の兇狀受けにやあならねえから、後

でゆつくり殺してやらう。

もと　さう聞く上は此の儘に、何でおのれの手籠めにならうぞ。

ト　お元思入あつて雪を取つて九兵衞に打附け、逃げにかゝるを、九兵衞引戻しちよつと立廻つて帶の端を足で踏まへ、

九兵　うぬ、手向ひしやあがるな。(ト打附けられし體の雪を拂ひ、)もう此の上は、手短かに、

ト合方一ツ鉦、雪おろしを冠せ、九兵衞お元にむしやぶり附くを突放して逃げるを、帶を手繰つて引寄せ兩人立廻り、此の内上手より四幕目の幸兵衞、山岡頭巾羽織下駄がけ、古き傘を半分すぼめ風を厭ひ出て來り、此の中へはひり、ちよつと立廻つて、お元幸兵衞に縋り、

もと　どうぞ、助けて下さりませ。(ト幸兵衞お元を見て、)

幸兵　や、お元ぢやないか。

もと　幸兵衞どのか。(ト嬉しき思入にて縋り附く、九兵衞これを聞き、)

九兵　南無三、亭主に來られては、(ト九兵衞逃げにかゝるを引戻し、)

幸兵　こなたは何時ぞや宅へ來た、大口屋の番頭か。

九兵　それ知られたら、(ト振拂つて行くを引附け、)

幸兵　こりやお元、如何いたせしことなるぞ。

もと　入谷の家から淺草へ、一緒に歸る道すがら、兎やかう言つた其の果が人家離れしこの田圃で、わたしを捉へて無理口說、一足お前が遅ければ此の身を穢されますところ、よい所へ來て下さんしたなあ。

幸兵　雪に塒を取り損じてか、日が暮れてから啼く烏、今宵は月もあらざるに何ゆゑ啼くかと心掛り、殊には宵から胸騷ぎ、途中で凶事でもありはせぬかと、遠い所を入谷まで通ひお針も世帶の爲、不便なことゝ思ふゆゑ、迎ひがてらに爰へ來てそちが難儀を救うたり、これぞ烏の知らせなるぞ。

もと　思ひがけない此の所へ、お前が尋ねてござんしたは、心の内で地藏樣へ何卒お助け下さいましとお願ひ申して居りましたが、お導きでござりましたか、えゝ、有難うござります。

ト　お元地藏尊を拜む、幸兵衛思入あつて、

幸兵　先達てよりおのれに逢つたら詮議をなさうと思つて居たが、いつぞや是れなる女房が、大口の二階にて、按摩の金を盗みしと濡衣着せしも日頃から、口說くをきかぬ意趣返し、おのれが仕業であらうがな。

九兵　何でおれが知るものだ。誰が取つたか知らねえが、お針部屋に紙入のあつたが證據になつたのだ。

幸兵　其の紙入に女房の、落せし銀の簪が入れてありしと申すこと、是れぞ遺恨のある者が企みしことに疑ひなし、さあ有體にそれを言はゞ、此の場のことは此の儘に、今降る雪の解け易く、水にいたして遣はさう。
九兵　此の場の事を此の儘に、水にいたして下さるは、それは何より忝けないが、丈賀の金は覺えもないこと。
幸兵　それを言はねば是非に及ばぬ、主ある妻へ道ならぬ强姪仕掛し番頭九兵衞、その儘には許さぬぞ。
九兵　え。（ト ぎつくり思入。）
幸兵　今こそ浮世に零落て稼業も細き筆職人、見る影もなきものなれど、以前は大小たばさみし我も武士の端なれば、今宵の道の用心に一腰さして來たからは、覺悟極めて返答いたせ。
　　ト羽織の下へ隱せし一腰を見せろ、九兵衞是れを見てぎよつとなし、
九兵　强姪仕掛けし身の罪を許して下さることならば、包み隱さず申します、如何にもお察しなされた通り、いつぞや口說いたその時に、恥しめられた意趣ばらしに、按摩の金をわしが盜み、幸ひ其の時門口で拾つた銀の簪を、盜んだ證據に紙入の、中へ入れて置いたのは、わしが仕業でございます。

幸兵　おゝ、よく隱さずに申せしぞ、これでお元が疑ひ晴れ、もと盜まぬことが三千歳さんや、二階中へ知れまする。

九兵　これさへ言へば強婬の、罪を許して下さる約束、どれ、お暇いたしませう。

ト九兵衞氣味惡き思入にて、こそ〳〵と下手へ行くを、

幸兵　九兵衞待て。

九兵　え、待てとお留めなされたは。

幸兵　同道いたす所がある。

九兵　そりや又何處へ。

幸兵　召連れ訴へいたしてくれる。

九兵　えゝ、（トびつくりする。）

幸兵　表向きにいたさねば、盜みをせしと女房が、受けし汚名が晴れざるぞ。

九兵　すりやそれゆゑに、もと繩を掛けねば腹が癒ぬ。

九兵　さう聞く上は、（ト逃げに掛るをお元留める、幸兵衞九兵衞を引捉へ）

幸兵　おのれは滅多に、(ト胸づくしを取り引廻すを、道具替りの知らせ、)逃さぬぞ。

ト引き据ゑる、此の見得早き合方、雪おろしにて道具廻る。

(元の座敷の場)　―　本舞臺元の寮の道具、上手に床を敷き六枚屏風を立廻し、側に丸行燈煙草盆を置き、床の三重、雪おろしにて道具留る。と直に床の淨瑠璃になる、

〽降りしきる春の雪より三千歳が、積る思ひにしつぽりと放れぬ床の蝶番ひ、屏風の外に新造が四邊を忍び小聲にて、(ト此の内奥より千代鶴出來り、屏風の側へ來て、)

千鶴　もしおいらん、明けてもようございますか。

三千　千代鶴さん、何ぞ用かえ。

千鶴　よもやと思つた此の雪に、とんだ人が參りました。

三千　とんだ人とは、誰が來たのだえ。

千鶴　市之丞さんが來なさいました。

直次　なに、市之丞が來た。(ト合方にて屏風を明ける。蒲團の上に直次郎三千歳居て、)

三千　たゞでもあるか此の雪に、何だといつて此の寮まで。

千鶴　病氣見舞に來たといつて、奥へ通つて居なさいます。
直次　何しに爰へ尋ねて來たか、うつかりおれは逢はれねえ。
三千　それでは其處の小座敷に、こつそり隱れて居なさいまし。
直次　むゝ、隱れて樣子を窺はう。
〽囁くこなたへ、寮番が、（ト三千歳直次郎に囁く、此の時奥より喜兵衞出て、）
喜兵　いや、そのお氣遣ひには及びませぬ。
直次　なに、氣遣ひに及ばぬとは。
喜兵　市之丞さんは鳥目にて、見える顏はして居れど、夜は皆目見えぬ樣子。
直次　むゝ、それぢやあ鳥目で見えねえとか。
三千　見えずば何も小座敷へ、隱れることもござんせん。
直次　何にしろ屛風の蔭で、殘つた酒を吞みながら、何しに來たか樣子を見よう。
三千　ほんに、それがようござんす。
喜兵　今にも爰へござつたら、此の喜兵衞が工夫して、見えるか見えぬか試して見ませう。
ト此の時奥にて、

市之　千代春、奥へ案内しやれ。

喜兵　あの聲は、

千鶴　市之丞さん。

〽いふに來ぬ間と三千歳が屏風の内へ隱す月、戀と鳥目に闇の夜をたどる風情、市之丞、新造が案内に出來り、

ト三千歳直次郎を屏風の内へ入れる。奥より市之丞羽織着流し、大小鳥目の思入にて出來り、後より千代春附添ひ出で、

千春　さあ、こちらへお出でなさいまし。

市之　何だか闇い座敷だなあ。

〽喜兵衛が氣轉の煙草盆、出す途端につまづきて、

ト喜兵衛思入あつて煙草盆を眞中へ出す、市之丞これへ躓き、ばつたり轉ぶ。

千春　あゝ、お危うございます。（ト介抱して、）誰が置いたか煙草盆が、爰へ出て居りました。

ト煙草盆を取りのける。

市之　餘り座敷が暗いゆゑ、思はずそれへ躓いた。

千春　さあ金子さん、爰へおいでなさいまし。
〽聲をしるべに座につきて、
ト市之丞始終鳥目にて見えぬこなしあつて、眞中へ住ひ、目の見える思入にて四邊を見廻し、
市之　初めて來たが此の寮は、茶人が指圖をしたと見え、なか〳〵好事な拵へだ。
ト喜兵衞目を試す思入にて、
喜兵　金子樣のおつしやる通り、俗を離れたよい普請、取分け襖は名の高い畫師が描いたと申しますが、見事なことでござりまする。（ト市之丞脇の方を見て、）
市之　成程見事によく描いた、花は四季の草花ぢやな。
喜兵　いえ〳〵、襖は梅柳菫蒲公英でござります。
市之　成程是れは植木屋だけ、花はそちが委しい譯だ。
喜兵　畫師は何と申しますか、私に名が讀めませぬが。（ト市之丞思入あつて、）
市之　むゝ、畫師は文晁、いや抱一上人だ。
千春　いえ〳〵あれは嵩谷さんが、おかきなされたのでござります。
ト是れにて皆々鳥目で見えぬといふ思入、市之丞は間の惡きこなしにて、話した餘所になし、

市之　いや〳〵おれが來たのに、三千歲はなぜ爰へ來ないのだ。
千鶴　いえ〳〵おいらんは爰においでなさいます。
市之　む〻、そこに居たか、なぜそこに居たならば、能く來たと一言位詞を掛けてもい〻ではないか。
三千　喜兵衛さんと襖のお話し、口を出したらお邪魔と存じ、それで默つて居りましたが、何でまた此の雪に、爰へおいでなさいました。
市之　この大雪に入谷まで、何で態々來るものだ、おぬしの顔を見に來たのだ。
千鶴　嘸お寒うござりましたらうに、能くおいでなさいましたな。
ト市之丞思入あつて、合方きつばりとなり、
市之　聞けば病氣で此間から、入谷の寮に居るとのことゆゑ、見舞ながら今夜來たは、悦ばせようと思つて來たのだ。
三千　どういふことか知らないが、悦ばせようとおつしやるのは。
市之　譬にもいふ籠の鳥、自儘に外へ出られねば嘸窮屈であらうと思ひ、今日は上野明日は隅田と、勝手に保養の出來るやうに、してやつたらば氣の鬱ぐ病氣も早く治らうと、山谷の養父藤五郎へ話しをした上同道なし、今日大口へ掛合つて、おぬしが身請けをおれがした。

三千　えゝ

〽思ひがけなき一言に人々はッと驚けば、屛風を明けて三千歳が直次郎と顏見合せ、暫し詞もなかりしが、（ト皆々驚き、三千歳屛風を明け、直次郎と顏見合せ思入あつて、）

喜兵　そんなら、わたしの身請けをば。

千春　山谷にござる親元の、藤五郎どのも承知にて、

千春　金子さんが、

千鶴　なされましたか。

市之　最早苦界の勤めを放れ、今日から素人のおぬしの身の上、爰に居るが厭ならば何處でも心の濟んだ所へ新たに家をこしらへて遣らう、どうした緣か來る度に優しい詞を掛けられたことはなけれど思ひ切られず、嫌はれるを合點で身請けまでした市之丞、萬更憎くもあるまいな。

三千　思召しは有難いが、わたしや身儘になるのが厭、生涯女郎が仕度うござんす。

市之　なに、生涯女郎が仕度いとは。（ト合方替つて三千歳思入あつて、）

三千　金子さんに身請けをされゝば、末は夫婦にならうといふ野暮な起請誓紙まで、取替した直さんに、もう逢ふことが出來ないから、わたしや嬉しくござりません、生涯苦界の勤めをしても好いた男

に逢ふのが樂しみ、それゆゑわたしや身請けをされ、素人になるのが厭でござんす。

市之　廓中で三千歳が間夫と噂の直侍、定めて夫婦約束もしてある仲ゆゑ逢ひたからうが、もう逢ふことは出來ないぞ。

三千　そりや何ゆゑに直さんに、もう逢ふことがならぬとは。

市之　ゆすり衒りも度重り、捨てゝ置かれず町方から四方へお手が廻つたからは、もう浮々と爰等邊りへ忍んで來られぬ直侍、大方江戸を跡になし旅へ高飛したらうが、天の網がかゝつたら、所詮脱れぬ舊惡は、是れまで數度の押借りに、二度の入墨重追放も今度行けば首はねえ。

〽我が身の惡事を言ひ立てられ、聞くに忍びず急き立つを暫しと止むる新造三千歳、こなたは鳥目に氣も附かず、

ト此の内直次郎屏風の内で蝶足の膳に酒肴あるを控へ、千代春を相手に酒を呑み居て、これを聞ききつとなるを千代春留める、三千歳構はずに呑めといふ思入にて猪口をさす、市之丞は手探りに煙草を呑み思入あつて、

〽不斷からして囚人の五分月代にお仕置が何より似合ふ直侍、獄門にでも掛るには苦味走つて好い面だ、いかに千住の仕置場を二階から見る吉原でも、獄門面に惚れるとは、よつほどおぬしも物

好きだ。

三千　蓼喰ふ蟲も好き〴〵と、假令是れから直さんが、どんなお仕置受けようとも、死骸はわたしが引取つて千住へ葬り墓を建て、比翼塚の昔にならひ、長く浮名を殘しますのさ。

市之　それぢやあ末々直次郎と、千住へ浮名を殘す氣か、思ひなしかさういへば、おぬしも囚人面になつた。

ト市之丞憎く言ふ、喜兵衞この内市之丞を打つ眞似などして、

喜兵　直次郎さまはおいらんの間夫と浮名の立つたお方、戀の遺恨でそのやうに口汚なくおつしやりますが、惡いことをなさるとて高の知れた勝負事、輕くて五十重くて一百、千萬金にも替られぬ首を切られるなどゝいふ、そんなことがござりませうか。

〽聞くも悔しく寮番が、判官贔屓に言ひ破れば、新造達も口々に、（ト喜兵衞悔しき思入）

千春　あんまり惡くおつしやると、お前さんの心が知れ、假令身請けをなさんしても、隨はないのが廓の意氣地、どんなことにならうも知れず、

千鶴　お前さんも劍術では、當時名高い金子さん、厭がる者を身請けせずとも何處へか情人を拵へて、

千春　なぜ身請けをなさんせぬ、腕が惡いぢやや、

千春 ござんせぬか。

千鶴 そりやおぬし達が言はずとも、百も承知して居るが、厭がられても言ひ出したら、跡へは引かぬ

市之 市之丞、三日たりとも身請けして女房にせねば武士が立たぬ、一旦思ひを晴した上は、直次郎が満足な人間ならば好合つた、仲ゆゑ綺麗にくれてやるが、根が駒込の片端で二人扶持に俵取りの高の知れた大番同心、生くら刄金の大小は僅な祿の扶持方棒、惡黨がつても甘口な羊羹色の黒羽織、うすッぺらの安御家人、御數寄屋坊主の河内山と兄弟分になつた所から、下谷廻りのかすり取り、藝者や又は圍者弱い者をばいぢめて歩き、いはゞ破落戸錢貰ひ、この市之丞の目から見れば、取るに足らねえこつぱ野郞、焚附にしかならねえ奴。それに惚れるは三千歳も、生涯自身に飯を炊く氣か、慾を知らねえ奴だなあ。

〽あくまで金子がさみなすを、憎しと思ふ三千歳に、もう了簡がと片岡が、怺へ兼て立掛るを、喜兵衛が縋り止むる跫音、市之丞は聞耳立て、

ト此の内三千歳始め新造口惜しき思入、直次郎立ち掛るを喜兵衛留め、ちよつと立廻る、市之丞見えぬ思入にて聞耳を立て、

今の音は、ありや何だ。

三千　ありや猫でござんす。

市之　むゝ、それでは猫が騷いだのか、爰等をうそ〳〵歩くのは、大方泥坊猫だらう、飯でも喰はして追出してしまへ。（トこれにて直次郎恠へ氣れ、）

直次　これ、泥坊猫とは誰のことだ。

喜兵　腹の立つのは尤もだが、急かずとお待ちなされませ。（ト喜兵衞留める。）

直次　今まで恠へに恠へて居たが、生れ附いての癇癪に、もう了簡をしちやあ居られぬ。

市之　や、さういふそちは。

直次　小石川一いつぞや出逢つた、おれは片岡直次郎だ。

市之　むゝ、喰詰者の直侍か。

直次　惡黨がつても甘口な羊羹色の黑羽織と、今もこなたが言ふ通り、ゆすり衒りで二度の墨三度の飯も喰詰めて晝間歩けぬ直次郎、四方へお手が廻つたら長く娑婆には居られぬ體、今にも御用になる時は言はずと切られる獄門首、とてものことに手のきいたこなたに切つて貰ひてえ。さあ、すつぱりとやつてくれ。

市之　眞影流で五本の指に折られる金子市之丞、いゝゆすり衒りで細つた首を、切るのは豆腐を切るよりも

最易きことなれど、何でおれに切れと言ふのだ。

直次　今爰で聞いて居れば、今日大口から三千歲を身請けしたとあるからは、言はずと知れたこなたの女房、それを盜んで抱いて寐た此の直次郎は間男だ、眞影流で五本の指へ折らるゝ金子市之丞、おれを切らずばなるめえぜ。

市之　むゝ。（ト思入。）

直次　さあ、すつぱりと切つてくれ、どうで切られる體だから、腕からなりと足からなりと、勝手な所から切つてくれ。

ト手足を眼前へ突き出せど、見えぬ鳥目に素知らぬ顏、側に氣遣ふ三千歲も共にその身を突き附けて、

ト此の內直次郎市之丞の眼前へ腕を出し又足を突出す、市之丞見えぬ思入、三千歲こなしあつて側へ寄り、

三千　さあ、切るなら直さんばかりでなく、相手のわたしも共々に、爰で切つて下さんせ。

市之　すりや、其の方まで切れといふか。

三千　此の世は愚、あの世を掛け、夫婦約束したからは、一緒に冥土へ行きたうござんす。

喜兵　斯う言はれてはお二人を切らねばならぬ所なれど、なんぼあなたの腕が利いても、皆目お見えなさらねば、

市之　や、

喜兵　いやさ、目先きの見えぬお方でなければ、滅多に切りはなされますまい、今日身請けをなされたを聞いたはたつた今のこと、その前までは大口の抱へ遊女のことなれば、日毎々々に來る客へその身を任すが廓の勤め、殊には夫婦約束までなされた間夫の直次郎さま、これまで身請をなされた方より、間夫へ手切れを出すことも、世間にいくらもござりますれば、爰はこの儘今日までの事はさつぱり水に流し、切らぬが花でござりませう。

ト市之丞思入あつて、

市之　如何にもそちが申す通り、身共は切らぬ心なるぞ。

直次　それぢやあ二人を、

三千　切らぬとか。

直次

市之　切るのは何の造作もないが、いざといふその時には天下の役に立つ我が腕、小石川でも助けたがその方如きに手はおろさぬ、おれが爰で切らずともゆすり衒りの重罪で、今にも御用となる時は

直次　世に首切りと名の高い、山田淺右衞門の手にかゝり、綺麗に首を切つて貰へ。

直次　その差圖は受けねえが、女房約束して置いた此の三千歳を身請けされ、遺恨重なる市之丞、こなたにおらあ切られてえのだ。

市之　天下の勇士と言はるゝ身共が、女郎の遺恨で直次郎を切つたと世上で言はれては、劍道仲間の笑ひの種、それゆゑ此の場で手はおろさぬ。

直次　そつちで切らずばこつちから。（ト直次郎懷中から短刀を出す。）

市之　情を仇に、おれを切る氣か。

直次　むゝ、市之丞覺悟しろ。

〽用意の短刀拔くより早く、切つてかゝれば身を開き、目は見えねども劍道に秀でし手練の市之丞、いらつて又も突きかゝるむら立つ雲の勢ひに、時ならざりし稻妻のきらめく如く突きかゝる刃を忽ち打落し、襟上取つてむづと引附け、

ト直次郎短刀を拔き切つてかゝる、市之丞身を躱し鳥目にて目に見えぬ思入の立廻り、此の内三千歳、喜兵衞、千代春、千代鶴留めようとして氣を揉む思入、トゞ直次郎の突きかける短刀を市之丞煙管にて打落し、直次郎の襟上を取つてぐつと引附け、

市之 今一刀に其方を殺すは易きことながら、今日までも劍道を磨き上げたる市之丞が刀の穢れになれば殺さぬ、ゆすり衒りの科により、天下の仕置を受けて死ね。（ト直次郎を突放す。）

直次 えゝ、優れし手練に不覺を取りしか、叶はぬまでも。

〽又立ちかゝるを後より、喜兵衛がしかと抱き留め、
　ト直次郎短刀を拾ひ、又立ちかゝるを、喜兵衛抱き留め、

喜兵 さゝ、嘸殘念でござりませうが、劍道指南の金子さまに、所詮及ばぬことなれば。

直次 それだといつて。

喜兵 急かずとお待ちなされませ。

〽あせるを止むる此方には、見るも悔しく三千歳が、
　ト直次郎を喜兵衛、千代春、千代鶴にて留める、三千歳思入あつて、

三千 さあ、直さんが切られずばわたしを切つて下さんせ、假令身請けをなさんしても、お前に此の身は任せませぬ、冥土へ行つて直さんとわたしや添ふ氣でござんすから、すつぱり切つて下さんせ。

市之 それではそちは命を捨て、喰詰者の直次郎と、冥土で夫婦になりたいとか。

三千 死なば一緒に死なうといふ、誓ひし中ゆゑ直さんと、一緒にわたしや死にたうござんす。

市之　三日飼へば犬ですらその恩を思ふといふに、大金出して身請けなし、苦界の勤めを引かせたる、恩を思はず殺してくれとは、犬に劣つた心底ゆゑ、刀の穢れにそちも切らぬ。

三千　そんならわたしも切らしやんせぬか。

市之　一旦武士の意地を立て、身請けはしたが直次郎に、命を捨てゝも添ひ度いとは、さりとは見下げ果てた奴、色も戀もさめたゆゑ、そちはふッつり思ひ切つた。

三千　え。

市之　既に此の身も畜生に、いや、猫や犬に等しき二人、畜生同志夫婦になりやれ。

へ何か一物有り氣な詞に、樣子窺ふ其の折柄門弟先きに迎ひの乘物、門前近く舁き据ゑて、ト市之丞思入にて言ふ、直次郎三千歳も合點のゆかぬこなし、雪おろしになり花道より千平袴股立大小草鞋、靑漆の紙合羽饅頭笠を冠り、跡より紺看板赤合羽草鞋饅頭笠を冠りし中間、桐油の掛りしあんぽつ駕籠を擔ぎ出來り、門の外へおろし門を明けて、

千平　お迎ひ。（ト大きく言ふ。）

市之　千平迎ひに參りしか。

千平　ますく雪の降りますゆゑ、お駕籠を持つてお迎ひに、參りましてござりまする。

市之　おゝ、駕籠が參らば歸るであらう。

〽刀を杖に立ち上る、目先きへ突出す煙草盆、左りへよけるを見るよりも、

ト市之丞立上る、喜兵衞又煙草盆を前へ出す、市之丞是れをよけて前へ出るを喜兵衞見て、

喜兵　や、あなたはお目が見えまするか。（ト市之丞思入あつて、）

市之　なに、目が見えるかとは。

喜兵　どうやらあなたは御不自由な、樣子にお見受け申しますゆゑ。

市之　今まで包み隱し居つたが、實は鳥目で皆目見えぬ。

喜兵　それで安心いたしました。（ト天窓を打つ眞似をしたことをして思入、市之丞は立上り、）

市之　これ片岡、これまで廓の買論もこなたは名古屋身共は不破、嫌はれたが悔しさに一旦武士の意地を立て、身請けはしたが畜生に劣つた性根の三千歳ゆゑ、すつぱり思ひ切つたれば反故に等しき年季證文、夫の諺の牛は牛連れ泥坊猫へ痩犬を證文添へて進ぜるから、何れへなりとも連れて行きやれ。

〽證文投げつけ悠々と、門の方へと出で行くを、

ト市之丞上包みをせし證文を出して投げつけ門弟が直せし下駄をはき、門弟傘をさし掛け門の外へ出

ろ、直次郎悔しき思入にて、

直次　及ばぬ腕に默つて居たが、泥坊猫と言はれては。（ト立ちかゝるを喜兵衞初め皆々留め、）

喜兵　さあ、猫といはうが犬といはうが、右から左へ聞き流し、ぢつと辛抱なされませ。

直次　それだといつて此の儘に。

三千　何と言はうと是れ限りゆゑ、言はしてお置き、

三人　なさんせいなあ。（トぢつと留める、）

市之　まだ〳〵そんなことをいふか、一流極めた者なら知らず、御家人風情で及ばぬことだ、そんな野暮を言はずとも身請けをなした三千歳を、只其の方へ遣はせば極樂落しで取つた鼠を、猫が貰ふも同じこと、喉を鳴らして何故悦ばぬ、さりとは馬鹿げた奴だなあ。

直次　何だと。（ト立ちかけるを、）

三千　もし、（ト三千歳は前、喜兵衞は後より直次郎を留める。）

市之　どれ、歸宅いたさうか。

〽刀片手に乘物へ移れば直に舁き上げて、元來し道へ急ぎ行く、

ト市之丞跡を見返り思入あつて駕籠へ乘り、直に戸を引き、千平附いて花道へはひる、跡合方、直次

郎跡を見送り、悔しき思入にて、

直次　武士とはいへど安御家人、腕に覺えがないばッかり、市之丞に惡口され恥辱を取りしか口惜しい。

喜兵　お腹は立たうが片岡さま、まあ〳〵お待ちなされませ、どうも合點の行かぬのは高金出して身請けせし三千歳さんに證文添へ、思ひ切つたとお前さまに、讓つて行つたは一つの不思議。

直次　成程こなたの言ふ通り、考へて見りや合點が行かぬ。

千春　身請け〳〵と口では言へど、

千鶴　もしや嘘ではござんすまいか。

喜兵　嘘か實かこの證文、これを御覽なされませ。

ト喜兵衞市之丞が置いて行きし年季證文を出す、三千歳取つて開き見て、

三千　これはまことの年季證文、

千春　それではまことで、

兩人　ござんしたか。（ト直次郎思入あつて、）

直次　鳥目といふも胡散だが、おれに惡口した上で身請けをなした三千歳に、證文添へてくれたのは、猶々合點が行かぬわえ。

喜兵　さあ合點の行かぬことなれど、證文添へて下されば、今は身まゝの三千歳さま。
三千　何れへなりとも、わたしを一緒に。
直次　連れて行くのは易けれど、山坂道に足手まとひ。
喜兵　とあつて、お連れなされねば、
千春　跡に殘つておいらんは、
千鶴　所詮生きてはござんすまい。
直次　それぢやあどうでも、一緒に行く氣か。
三千　連れて行つて下さんせいな。
ト此の以前下手より以前の勘次千太出で門口より窺ひ居る、直次郎ちよつとこれを見てぎつくり思入、勘次千太は下手へはひる。
直次　どれ、更けねえうちに出掛けようか。（ト門口を窺ふ。奥より勘次千太十手を持つて出で、）
勘次
千太　御上意。（ト聲を掛ける。）
直次　南無三、（ト逃げにかゝるを、）
兩人　捕つた。（ト打つてかゝるを、身を躱してちよつと立廻り、平舞臺へ下り、兩人を相手に立廻り、）

三千　こりやもう惡事が、

喜兵　露顯なせしか。（ト直次郎又立廻つて門口へ出て）

直次　三千歳、

三千　直さん、

直次　もう此の世では、逢はねえぞ。（ト早き合方にて兩人を投げ退け、逸散に花道へ逃げてはひる。）

勘次　それ、逃すな。（ト兩人跡を追ひかけ花道へはひる。）

喜兵　えゝ、もう一足早かつたら、

千春　捕手の衆も、

千春
千鶴　來まいもの。

三千　これが別れと、（ト二重の柱へつかまるを道具替りの知らせ）なつたかいな。

ト向うを見て泣く。皆々よろしく、此の模樣早き合方、雪おろしにて道具廻る。

（入谷田圃の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面高二重の土手、眞中に榎の大樹、日覆より同じく釣枝、上の方樹木の張物にて見切り、下の方一面の藪疊み、皆雪持ち。後在體の遠見。上手土手に田川

の樋の口、平舞臺同じく流れの浪板、此の外舞臺花道とも雪布を敷き、總て入谷田圃の體、雪おろしにて道具留まる。トばた〳〵になり、上手より勘次先きに○△の捕手二人、下手より千太先きに、□◎の捕手二人走り出來り、行逢ひ、

勘次　おゝ、千太か。
千太　殘念なことをしたぢやあねえか。
勘次　入谷の寮へ三千歳が、來て居ることを聞いたから、宵から附けて居たところ、
千太　山崎町の丑松が、今夜來たと知らしたゆゑ、袋の鼠と思ひの外、
○　形は小さし身は輕し、拔けつ潜りつ逃げ出して、
△　到頭行方を見失つたが、一方道の入谷田圃、
□　向うへ先刻廻つたから、外へ逃げ出る道はねえ。
◎　大方爰らの藪の中に、隱れて居るに違えねえ。
勘次　斯う追込んだ上からは、これから四方へ手分けして、
千太　今夜一晩附けて居れば、必ず出るに疑ひなし、
○　何にしろ雪明りで、

△ 向うの見えるが一つの取柄、

□ もう一通りこゝ等を捜し、

◎ 四方へわかつて網を張り、

勘次 彼奴の出るのを、

六人 待つて居よう。

ト雪おろしにて三人づゝ上下へ分れ走りはひろ。本釣鐘誂への合方になり、藪疊を押分け、以前の直次郎出で、上下へ思入あつて、

直次 誰しも女で身を果すが、今夜三千歳に逢はなんだら、もう今頃は高井戸か布田あたりまで行かれたに、入谷の蕎麥屋で按摩の丈賀に逢つたが因果で足を留め、既に喰ひ込むところ危く脱れて此の藪へ隠れて息をついて居たが、今二人の話しを聞けば、山崎町の丑松がおのれの科を脱れんと言附口をした樣子、さりとはけちな了簡だが意趣を返してやりてえにも、四方へ捕手が廻つたからは、最早脱れぬおれが身の上、どうか爰を逃げてえものだが。

ト向うへ思入、此の時下手へ勘次先きに○△の二人十手を持ち窺ひ出ろ、直次郎これをきつと見て、ぎつくり思入あつて下手を見ろ、千太先きに□◎の二人十手を持ち窺ひ出ろ、直次郎最早これまでと

いふ思入にてきつと見得、本釣鐘誂への合方きつぱりとなり、直次郎花道の方へ行きかける、勘次つか／＼と行き、

勘次　捕つた。（ト十手で打つてかゝるを身をかはし、）

直次　又うしやあがつたか。（トちよつと立廻つて、勘次を投げのける。）

千太　それ。

ト指圖する。どん／＼呼子をあしらひ、六人一緒に打つてかゝる、直次郎拔けつ潛りつ立廻つて二重へ上り、尻を端折りきつと見得、竹笛入りの合方、雪しきりに降り、直次郎懐より短刀を出し、これを拔き切つてかゝる、六人十手にて打落さうとする、段々雪降り、皆々雪に辷り凍える好みの立廻りよろしくあつて、爰へ上手よりお元幸兵衞出來り、此の體を見てびつくりなし、下手へ逃げるを捕手突廻し、ごつちやの立廻りになり、捕手直次郎と心得幸兵衞に組附く、これにて羽織を引取り舞臺へ捨てる、直次郎羽織に躓きちよつと下に居る時、羽織を取つて引掛け、逸散に花道へ行き、思入あつて花道へ走りはひる。捕手六人それ逃すなと跡を追掛けはひる。幸兵衞羽織を搜す思入にて、直次郎が落せし紙入を取上げ、出掛り居る書附を見て、

幸兵　爰に落散る紙入の、中より出でし一通は。（ト開き、すかし見るをお元見て、）

もと　どうやら女子の手跡の樣子。

幸兵　正しくこれは起請にて、直次郎さま三千歳と、あり〳〵記しあるからは。

もと　そんなら今のは。（ト千太窺ひ居て、）

千太　それを。（ト幸兵衞にかゝるをちよつと立廻つて、）

幸兵　片岡どので、（ト千太を投げるを木の頭にあつたるか。
ト紙入を持つたまゝ向うを見込む、千太起きようとするをお元押へ附ける、此の模樣よろしく寺鐘、雪おろしにて、

ひやうし幕

大切

上野屛風坂外の場
池端宗俊妾宅の場
入谷淨心寺裏の場
廣小路見世開の場

〔役名　河内山宗俊、片岡直次郎、金子市之丞、くらやみの丑松、番頭九兵衞、和泉屋淸兵衞、ごろ

河内山直侍

つき三人、見ろ目の勘次、嗅ぐ鼻の千太。藤五郎娘おとせ、幸兵衛女房お元、上州屋の後家おまき、河内山の妾おみつ、同下女おさき其他。」

（上野屛風坂外の場）——本舞臺一面の平舞臺、眞中へ下げて屋根附黒く澁塗りの門、左右土手の上に柵矢來、溝濠の書割り、上の方箱番屋、下の方柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て上野屛風坂下通用門夜の體。爰に着流し三尺帶ごろつきのこしらへの□酒に醉ひたるを○△二人にて介抱して居る、此の見得三味線入り、道樂寺の木魚の音にて幕明く。

○　これ手前もいゝ加減にしねえか。其の位ぐでんになつたら、もう呑まなくつてもいゝぢやあねえか。

△　廣小路の蓬萊屋だつて、土地の者だと思ふから、機嫌よく呑ましたのだ。

□　手前達は呑まねえからそんなことをいふが、呑ませやうが氣に喰はねえから、それでおれがぐづぐづいふのだ。

○　氣に喰つても喰はなくつても、今日見世開きで客が多く、てんてこ舞をして居る中で刺身に茶碗に燒肴で、酒も四五本出した上、

△　又椀盛で飯を出し、殘らず喰つた其の上で、一把づゝの祝儀を貰ひ、何も言ふ所はありやあしね

え。

□一分ばかりの金を貰つて何もそんなに蓬萊屋に肩を持つにやあ及ばねえ、三枚橋から山下はごろつき仲間の繩張りだ、おれが歸らうと言つたらば、もう一銚子と引留めるのが酒呑には嬉しいのだ。

○そりや嬉しくもあらうけれど、今日は見世開きでごたつくから、向うでも留めねえのだ。

△あれ程呑んでも呑み足らざあ、貰つた金で家へ歸り、一升買つて呑むがいゝ。

□そりやあ手前達が言はねえでも、金で買ふのは知つて居るが、たゞ呑むから呑みてえのだ。

○そんなしみたれなことを言はねえで、

△歸れと言つたら早く歸れ。（ト胸倉を取つてこづく。）

□これ、何でほん〳〵言やあがるのだ、初音の鼓ぢやあるめえし。

○往來中でみつともねえから、くだを卷くのはよし野にして、

△もう大概に靜にしろ、

□いゝや靜にならねえ、おれが役はたゞ呑む(忠信)だ。

○いや、とんだ上方俄だ。

ト右の鳴物にて兩人□を引張り上手へはひると、花道より一、紺の腹掛股引三尺帶尻端折り草履にて足早に出來り、上手より二、三、三尺帶着流し草履下駄、何れも傳法なこしらへにて出來り舞臺で行逢ひ、

二　おゝ、そこへ來たのはでこ萬か、今山下で喧嘩があつたといふが、相手は誰だか知らねえか。

一　おゝ其の喧嘩はおれが見て來たが、山崎町の丑松に、相手は湯島の直旦那だ。

三　直旦那に丑松か、知つたら留めに行かうもの、さうしてどつちが負けになつた。

一　喧嘩に素早い直旦那だから、丑松がひどく毆られた。

二　そりやあ彼奴が毆られる筈だ、遺恨は此間入谷の寮へ、直さんが忍んで來たを、おのが兇狀を脫れようと、言附口をしたものだから、それで毆られたんだらう。

三　どつちの贔屓もしねえけれど、うぬが科を脫れようと、手先の衆に知らせたのは、丑松野郎が惡いから毆られても仕方がねえ。

二　あの晩入谷を逃げなすつたから、遠くへ行つたと思つたら、まだ江戸に居なすつたか。

一　三千歲といふ情人があるから、それで遠ツ走りが出來ねえのか、何にしろ爰らに居たら、今に喰ひ込みなさるだらう。

ト時の鐘、合方ばた〱になり、花道より丑松鉢卷尻端折り、小丸太を搔込み出來り、

丑松　逃足の早い奴だが、直侍め、何處へ行つたか、何でもかでも今夜の内、打たれた意趣を返さにやあ置かねえ。（トばた／＼にて舞臺へ來る。）

二　おゝ、そこへ來たは丑松か。

三　險相かへてどこへ行くのだ。

丑松　喧嘩の相手を逃したから、毆らうと思つて追つかけて來たのだ。

二　その話しをでこ萬から、今おら達も聞いた所だが。

三　相手は湯島の直さんぢやあねえか。

丑松　ちつとおれに遺恨があつて、今袴腰で出會し、叩き合つたが向ふが素早く、葭簀張りの丸太を取つておれが眉間を毆りやあがつたから、直丸太を引つたくり、毆り返さうと思ふ所へ、燒場行きの早桶が來て、闇紛れでごつちやになり、其の間に逃げて行きやあがつたが、手前達は逢はなんだか。

二　いゝや、おら達は逢はなんだ。

一　喧嘩にかけてははしこいから、何處へ行つたか知れやあしめえ。

丑松　あの野郎を毆らなくつちやあ、おれの癇癪が納まらねえ。

二　そりやあ殴られたとて仕方がねえ、全體手前が悪いからだ。（ト丑松むつとして、）

丑松　手前達はをかしなことを言ふが、何がおれが悪いのだ。

二　悪いのはおら達が今言はねえでも知れたこと、胸に覺えがあるだらう、これまで随分直さんのお世話になつた手前の體。

一　恩になつたを忘れてしまひ、忍んで入谷の寮へ來たのを手前の難儀を脱れようと、手先の衆に知らしたは、遊人にねえことだ。

三　こりやあ直さんが腹を立つて殴つたのは當り前、しみッたれなおら達でも、默つちやあ居られねえ。

丑松　此奴らあ一把か二把、不斷手當を貰ふのでおつうごまをすりやあがるな、おれが彼奴を知らせたのは身脱れをするばかりぢやあねえ、假にも天下の旗本を改易にした科のある奴、手先手合に知らせたのは、こりやあ年中無生業で遊んで暮す御奉公だ、それをとや斯う言やがれば、手前達も喰ひ込ますぞ。

二　おゝ喰ひ込すなら喰ひ込して見ろ、手前のやうなゆすり衒りや、荒挊ぎをする者とは違はあ。

一　寒の内でせえ下馬一枚、ぶる〳〵して居るごろつきだが、しら几帳面の博奕打だ。

三　いゝすどりを喰つて行つた所が、高が五十か一百の叩きに逢つて出る體。
一　手前の脅しは、
三人　怖かあねえぞ。
丑松　僅かな錢を貰やあがつて、直侍の肩を持ち、尻押しをする意氣地なし、背中にべつたり十文字の痣の絶えねえ丑松だ、うぬ等の腹とは膽が違ふ、一番こゝで腕を出し、片ツ端から足を折り、動けぬやうにしてくれるぞ。
二　いや腕を出すのは知らねえが、場ぎやうで年中足を出す一文なしのぴい〳〵野郎。
一　是れまでみんな直さんの、お世話になつたおら達ゆゑ、
三　悪く言ふのを聞いちやあ居られぬ、横合からでも喧嘩を買ひ、
二　しめてやるから、
三人　覺悟をしろ。
丑松　えゝ、しやらくせえことを吐かしやあがるな。
二　それ叩きしめろ。
兩人　合點だ。

ト早めたる木魚の合方になり、三人縫包みにて打つてかゝる、丑松丸太にて三人と立廻る、此の内ばたばたになり、下手より金子の門弟イロハニの四人竹刀を擔ぎ、稽古歸りにて出來り、丑松を見て、

イ　や、おのれは何日ぞや湯島にて、

ロ　亂暴なせし遊人、

ハ　何日ぞの意趣を返さうと、

ニ　思つた所を丁度幸ひ、

イ　喧嘩はこつちへ、

四人　賣つて下せえ。

一　おゝ、望みとあれば、

三人　そつちへ賣つた。

丑松　何を小癪な。

ト双盤入り誂への鳴物になり、門弟四人竹刀で打つて掛る、丑松これを相手に立廻り、一二三は上手へ入り。跡丑松四人を相手に立廻りよろしく、よき見得、右の鳴物にて道具廻る。

（河内山妾宅の場）――本舞臺三間の間常足の二重、柿葺の本屋根本緣附き、正面四尺五寸の床の間、墨畫の掛物、この脇出入り瓦燈口、太鼓張りの襖、下手銀張り、錆畫の地袋戸棚、下手のつま一間腰高障子、御影石の沓脱ぎ、上の方一間跡へ下げて下窓、障子を立切り、此の上下地窓のある屋根附の屋體、下手に屋根附きの潛りのある門、出入りあり、門の柱より舞臺へ四ツ目垣にて見切り左右建仁寺垣、常磐木を見せ、二重に數寄屋行燈を置く、上手におみつ丸髷妾のこしらへにて住ひ、下手に序幕のおまき、清兵衛住ひ、ずつと下手におさきの下女拵へ居る、此の見得一中節の合方にて道具留る。

みつ　左樣なら長者町の、上州屋さまでございますか。

まき　お初にお目に掛りますが、私は上州屋の後家まきと申すもの。

清兵　私は後見の清兵衛にございます、先頃は旦那樣の御厚情にあづかりまして、

まき　お陰さまで娘を一人拾ひましてございます。

みつ　此の間はお禮として結構な品々を、私までへ下さりまして有難うございまする。

まき　お禮で痛み入りまする。

清兵　さて先刻はお使ひを下さりましてございますが、其の儀に付きまして旦那樣へお目に掛りたうございまする。

みつ　先程より旦那にも、お待ち申してゞございました。
さき　上州屋さまのお出でをば、お奥へお知らせ申しませう。（ト奥にて、）
宗俊　いや知らせには及ばぬ、只今それへ参りまする。
ト合方きつばりとなり、奥より宗俊羽織着流し好みのこしらへにて出來る。おみつ下女に囁く、下女は心得て奥へはひる。
まき　これ〳〵おまきどの、清兵衛どのも御一緒に、ようこそお出で下された。
まき　先刻お使ひにござりましたゆゑ、早速清兵衛を呼び寄せまして、仰せの趣きを相談いたし、
清兵　お禮旁々御返事に、同道いたしてござります。
宗俊　御繁用でござらうのに、態々おいで下されて、忝なう存じ申す。
ト奥より下女茶盆へ急須茶碗を載せて持つて出來り、茶臺にて茶碗を出し、
さき　はい、お茶をお上りなさりませ。
ト兩人へ茶を出す、宗俊おみつへ囁く、おみつ思入あつておまきに向ひ、
みつ　少し用事がござりますれば、御免なされて下さりませ。
まき　いえも、御遠慮には及びませぬ。

みつ　御ゆるりとお話しなされませ。

ト一中節の合方にて、おみつ下女奥へはひる。宗俊四邊へ思入あつて、

宗俊　さて先刻は餘儀ない事にて、御無心を申しましたが、お聞き入れ下さりましたかな。

まき　外ならぬあなたのことゆゑ、仰せの通り御用立て申したうございますが、お蔭を持ちまして宿元へ歸りました娘へ急に聟を迎へ家督を讓りまするので、何やかや物入り多く、少々不都合にございますゆゑ、二百金御用立て申します、どうぞこれにてお間にお合はせ下さりませ。

清兵　折角仰せ越されましたる、お頼みだけ整ひ兼ね、まことに恐れ入りますが、只今も申し上げます通り火急に聟を取りますので、支度は元より弘め萬端多分の出金がございますので、御用達申し兼ねますゆゑ、申し譯に私も同道いたしてございまする。

宗俊　餘儀ないことで三百金火急に入用でござるゆゑ御無心申したが、御令孃へ御婚姻にてお物入とあれば是非に及ばぬ、二百金でよろしうござる、跡は都合いたすでござる。

まき　左樣なれば二百兩御用達申しまする。

ト清兵衞懷中より百兩包みを二ツ出すをおまき宗俊の前へ出す。

宗俊　早速お聞き濟み下すつて、忝なうございます。（ト金を取つて戴き、）念の爲め借用證書を。

清兵　いえ、是れへ認めて參りましたれば、御調印下さりませ。（ト懐より借用證文を出す。）

宗俊　すりやお認め下すつたか、お手數を掛けました。（ト宗俊手箱から印形を出し、證文へ押し、おまきへ渡し。）それで宜しうござるかな。

清兵　宜しい所ではござりませぬ、ほんの掟でござります。（ト證文を懐へ入れる。）

宗俊　して、只今仰せられし御令孃の聟殿は、何れより參られまするな。

清兵　里方と申しますは至つて貧しき者なれど、前々より存ぜし者にて如何にも貰ふ當人が實體なものでござりますゆゑ、私が媒人いたし、貰ふ約束をいたしましたが、支度なども行屆きませねば萬端こちらで買ひ整へ、見苦しくないやうにいたしますので、おまきどの多分の物入にござります。

宗俊　長者町の居附地主指折のお家ゆゑお物入はお察し申す、何にいたせ支度までこちらでなすつて下さるとは仕合せな聟どのだが、何れに居らるゝ者でござるな。

まき　元手前方に居りました、あなたも御存じの、元の弟にござりまする。

清兵　神田橋外の島屋の家に子飼から居りました半七と申すものにござりますが、至つて實體な産れにて、殊に男が好いゆゑにとうから娘のお藤どのが、いや、お藤どのとは似合の年配、よい釣合でござります。

宗俊　むゝ、それは慥小石川の比企の屋敷でぺてんに掛り二百兩取られしを、我が友達の片岡が先方より取返し、歸參をさせしと申すことを此の間承はつたが、さて〳〵仕合せなことでござる。

まき　漸く聟を取りまして家督を讓りまするのも、あなた樣の皆お蔭、それに附きまして上野から松江樣へ命乞にお出でなされて下さりましたお役僧樣へ上りまして、お禮を申し上げたうござります。

宗俊　この間も其の事をお頼みでござつたが、決してそれには及びませぬ。

清兵　左樣ではござりますが、又も此の上お願ひ申すことがござりませうかも知れませねば、

まき　どうぞおつしやつて下さりませ。（ト宗俊思入あつて、）

宗俊　決して心配に及ばぬと申すは、外でもござらぬ其の役僧は、手前でござる。

清兵　なに、手前と仰せ、

兩人　られますは。

宗俊　御不審は御尤も、輪王寺の役僧と申し、松江の邸へ參つたは、河内山宗俊でござる。

兩人　え、それならあなたが、（トびつくりする。）

宗俊　首尾よく松江を衒つてござる。

清兵　すりや、御同勢の、

兩人　御人數まで。

宗俊　供頭の侍は何日ぞやお宅へ同道せし朋友片岡直次郎、その外陸尺中間まで、皆近邊のならずもの。

トこれを聞き、兩人ぎよつとせし思入にて、

まき　それでは、今にも此のことが、

清兵　露顯いたした其の時は、

宗俊　名におふ高位のお名前衒り、罪科は重き網代駕籠、遠島がものはござらう。

まき　さうなる時は、私共も、

清兵　如何なるお咎め着ませうか。

宗俊　決して氣遣ひいたされるな、假令今にも御沙汰あつて召捕になるとても、舌三寸で三間間口の御家へ煙も掛けさせませぬ。斯かる巧みをなすからは露顯の時は斯う／＼とかねて腹稿いたしござる、今日押して二百兩借用せしも其の用意、もし同心どもが調べにでもお家へ參つたことならば、萬事河内山が計らひにて存ぜぬ趣き申されよ、科は手前が引受けて、いさゝか御苦勞掛けませぬ。

まき　何分共に其の時は、お助けなされて下さりませ。

宗俊　委細承知いたしてござる。（ト清兵衞氣味の惡き思入にて）

清兵　時におまきどの、もうお暇いたさうではござらぬか。

まき　ほんに色々用事もあれば、

宗俊　左樣ならお歸りでござるか、餘儀なき無心をお聞き下され、千萬忝なうござる。

まき　其のお禮には及びませぬが、

清兵　若しもの時は何分にも、

宗俊　それは心配いたされるな。

まき　左樣なれば、

兩人　河内山さま。

宗俊　お宿へよろしう、

兩人　はッ、（ト辭儀をなし、元の一中節の合方になり、下手より門を明けて外へ出る。）

まき　清兵衞どの。

清兵　おまきどの、とんだことをいたしたな。

まき　これが露顯いたしたなら。

清兵　家に拘はる一大事。（ト宗俊立上り外を見て）
宗俊　まだおいでなされぬか。
清兵　はッ、お暇いたすで、
兩人　ござります。（ト唄になり、兩人投首して花道へはひる。宗俊跡を見送り）
宗俊　最早露顯の小口ゆゑ、上野の衒りをせし事を心得の爲め話したら、堅い心に引き較べ兩人共におど〳〵と、色を變へて歸つたが、氣の小さなものだなあ。
　ト合方になり、元の所へ住ひ奥よりおみつ出で、
みつ　もう歸りましてござりますか。
宗俊　今二人とも顫へて歸つた。
みつ　よく二百兩貸しましたね。
宗俊　何といつても一人娘を助けてやつた恩があるゆゑ、速かに貸してくれた、昨夜手前に話した通り最早奉行へ老中から沙汰があつたとあるからは、もう長いことはない、此の二百兩を預けて置くから一包みは妻に渡し、一包みは手前が持つて、身の片附をするがいゝ。
みつ　それではどうでも、近いうちに。

宗俊　長い別れをせずばなるまい。
みつ　悲しいことでござりますな。（ト泣く。）
宗俊　樂しみ盡くれば悲しみの、必ずあるが浮世の習ひ。
みつ　それぢやといつて、
宗俊　はて、今更言つても仕方がねえ。
みつ　はあゝ。（ト泣伏す。宗俊氣を替へ、）
宗俊　昨日挽いた茶を呑まなんだ、ちよつと一服立てゝくりやれ。
みつ　はい。
宗俊　これを奥へしまつて置け。（ト金を渡す。）
みつ　畏まりました。

ト合方にておみつ涙を拭ひ、金包みを懷へ入れ奥へはひる。宗俊煙草盆の火入れへ香を入れる、此の内花道より直次郎頰冠りにて出來り、

直次　入谷を逃げたほとぼりの冷めた時分と思つたから、今夜こつそり忍んで來たが、折よくさつき丑松に出合つて意趣を返したからは、兄貴に逢つて行きてえものだ。

ト舞臺へ來り門口から内を窺ふ、此の内おみつ茶碗を袱紗へ載せて持ち出來り、宗俊取上げ呑まうとする、直次郎は門の戸をそつと明ける、此の音に宗俊下手を見て、

宗俊　おみつ、誰か表へ來たぢやあねえか。

みつ　はい、參つたやうでござります。（ト下手へ來て、）

ト直次郎門を明け、そつと内へはひり。

直次　おみつさん、わたしだ。

みつ　や、直さんでござりますか。

直次　あこれ、靜にしてくんなせえ。（ト跡を見廻し、門口をしめる、）

宗俊　おゝ、誰かと思つたら片岡か。

直次　やつとの思ひで今夜來た。

宗俊　此の間から逢ひたかつた、幸ひ今夜は差合がないから、ずつと爰へ來てくんねえ。

直次　圍へ上る足でもねえ。

ト合方きつぱりとなり、宗俊茶を呑み、直次郎手拭で足を拂ひ二重へ上り、下手へ住ふ。

宗俊　これおみつ、裏口がけんのんだ、誰ぞ來たら留守だと言へ。

みつ　あい、直さんゆつくりお話しなさいよ。（ト合方にておみつ奥へはひる。）

宗俊　よく今夜來てくれた、色々話すことがあるが、早速に聞きたいは、四方へ上から手が廻り捜されて居る體、これから何處へ行くつもりだ。

直次　定めて噂に聞いたらうが、此の間入谷田圃で既に喰ひ込むところ、たうとう其の夜逃げ果せ、三河島の百姓家に昨夜まで隱れて居たが、山崎町の丑松が言附口をしやあがつたから、彼奴に意趣を返さうと今夜暮れて出て來たが、折よくさつき出會し意趣を返して腹が癒たから、此の節人の通らねえ厚木街道から根方を廻つて、一先づ甲州へふけるつもりだ。（ト宗俊思入あつて、）

宗俊　そりやあ片岡お前でもねえ、無駄なことだ、よせばいゝに。

直次　なに、無駄なことだとは。（ト誂への合方になり、）

宗俊　山崎町のぐれ宿で小皿丁半のかすり取り、あんなしみつたれな小野郎を相手にするは大人げねえ、そんなことは捨てゝ置いて、なぜ甲州へ行くならば、其の晩直にふけねえのだ。

直次　意趣を返して行きてえのと、一つは四方へ手分をして、おれが行方を捜して居る、其のほとぼりを冷す爲め、三河島に隱れて居たのだ。

宗俊　こつちはほとぼりを冷す氣でも、向うはちつとも冷めやあしねえ、勘次や千太が追込んで籠の鳥と

思つて居たを、逃がしてしまつた悔しさに、五街道は言ふに及ばず間道までも手が廻つて、一日歩けば二日と待たず直にお前の足が附き、羽根を廣げて甲州へ高飛びをする積りでも、天の網を掛けられたら所詮逃げることは出來ねえ、旅で番太の手にかゝり唐丸籠で宿送りだ。

直次　是れまで長年苦勞を掛けた甲州に居るお袋に、逢つて來ようと思つたが、富士參りの道者の外は人の通らぬ根方を行つても、甲州までは行かれめえか。

宗俊　空を翔り地の底を潛つて行つたら知らぬこと、假令根方を廻らうとも、天下の政事の屆く所は所詮逃げることは出來ねえ。

直次　上から見えぬ壺皿の中せえ見拔く兄貴の眼力、お前がさう言ひなさるからは、此奴あおれも逃げられねえか。

宗俊　全體江戸を逃げようと、思ふが第一心得違えだ。

直次　なに、心得違えとは。

宗俊　憎まれ口を利くやうだが、以前をいへば駒込で僅かな扶持の大番同心、二朱の女郎も容易には買へねえ身分であつたのが、外へ出るには古渡り唐棧、内では結城を不斷に着て、今日は鈴木の長燒に明日は山谷の會席と、榮耀を極めた其のはてが、當時流行の大口で三千歳といふお職を買

ひ、物日の仕舞も器用にして何處の旦那といはれても、恥かしくねえ遊びをする金は殘らず不正な金、拔荷を買つた問屋へ行き、八丁堀の聲色で騙り取つたこともあれば、又は女犯の寺院へ行き凄味なセリフで和尚を脅しゆすり取つたこともある、此の外種々な惡事をして只取る金で贅澤をしぬいた上にその科で、尋ねられると噂を聞き高飛びをして逃げようとは、あんまり蟲が好過ぎるだらう、奉行へ下知が廻つたらもうそれまでと覺悟して、上の仕置を受けるがいゝ、さもない時は善惡の道が立たず第一に、邪正を照す天道が誠の人に濟まねえ譯だ。爰の道理を思つたら逃げ隱れせず繩に掛り、上の仕置きを受けた方が、おれは立派でいゝかと思ふ。

ト思入にて言ふ、直次郎も思入あつて、

直次　むゝ、それぢやお上野の騙りが割れ、今にも御下知になつた時、お前は逃げずに行く心か。

宗俊　おゝ、その覺悟は疾うからして居る。

直次　疾うから覺悟をして居るとか。

宗俊　伯母のひきで二十年奉行の下知を脱れた宗俊、もうよい加減に改心しろと度々異見も聞いたれど、三日すれば忘られず始終は乞食の手に掛るも、承知でゆすりも段々に登る上野の役僧と紫衣にしがを隱し、化けおふせたるお名前衒りに捨てゝ置かれず老中より、沙汰になつたといふ事を聞

いた時から覺悟して、女房は元より妾にも離緣狀を渡し置き、手當の金も二百兩上州屋から借り込んでおみつに預けて置いたれば、心殘りのない體、今日か明日かと捕手の來るのを遊びにも出ず待つて居るのだ。（ト　これを聞き、直次郎感心せし思入にて、）

直次　成程兄貴は兄貴だけ、及ばぬことを早く知つて、捕手の來るのを待つて居るとは思ひ切りのいゝ覺悟、今のお前の一言で不孝を盡してお袋に詫びといふのは表向き、實は甲州へ逃げる氣だが、今日といふ今日ふツつりと逃げることは思ひ切り、上野の衙りも侍になつて行つた上からは、脱れぬ科のおれも同類、お前と一緒に繩にかゝり、重き仕置に逢つたらば、千住へ並んで首を晒さう。

宗俊　それでこそ眞の惡黨、さう性根が据つたら、逃げ隠れをするに及ばぬ、脇へ行かずと爰に居ておれと一緒に行くがいゝ。

直次　今日まで世間を忍んで居たが、兄貴の意見で甲州へ逃げることも思ひ切つたら、肩身が廣くなつたやうだ。

宗俊　何にしろ斯うして居ても、今にも知れねえ二人の身の上、此の世の別れに一杯やらう。

直次　實は今日まで好きな酒も、喉へ通らず呑まなんだ。

宗俊　行くと覺悟をした上は、泊りは知れた、ゆつくりしねえ。（ト時の鐘。）
直次　晝と違つて日が暮れると、直に五つを打つやうだ。
宗俊　春も二月の逃月に、これから段々詰るばかり、
直次　少しの內でも命を延ばし、
宗俊　今夜は夜通し、
直次　呑みやせう。（ト宗俊側にある驛路の鈴を鳴らす。奧よりおみつ出で）
みつ　御用でござりますか。
宗俊　ちよつと一杯やりてえが、何ぞ肴をさう言つてくれ。
みつ　今蓬萊屋の賣出しで、三つ物が參りました。
宗俊　そりやあ丁度幸ひだ、直に爰へ出してくれ。
みつ　これ、さきや、その肴を持つて來や。
さき　はい〳〵。

ト奧より下女廣蓋へ三ツ物と肴燗德利、猪口を載せて持ち出で、下へ置く途端、ばつたりと嚴しき音する、直次郎びつくりなし、

直次　や、今の音は。（ト此の時指金の猫鼠を銜へ出る）

さき　猫が鼠を捕りました。

みつ　それでは棚から飛んだ音か。（ト宗俊これを見て、）

宗俊　この間から覗つて居つたが、到頭猫に捕られたか。

直次　こつちも今に此の如く、

ト鼠を見る、此の時下手より黒四天の捕手二人出で、門口より窺ふ、宗俊これを見て、

宗俊　天命盡くれば、（トうなづく、捕手下に居るを道具替りの知らせ）脱れられねえ。

ト是非がないといふ思入、一中節の合方にて此の道具廻る。

（淨心寺裏手の場）――本舞臺一面の平舞臺、上の方に松の大樹、此の傍に小さな稻荷の宮、向う玉椿の生垣。この後へ五輪、高き石塔の上を見せ、後黒幕、下の方樹木の張物、總て入谷村淨心寺裏手の體、木魚入りの合方にて道具留る。

トばた／＼になり、上手より前幕の三千歳走り出で來り、跡よりお元追掛け來り、舞臺にてちよつと立廻り、お元三千歳をきつと留めて、

もと　もしおいらん、何處へおいでなされまする。

三千　急に行かねばならぬことゆゑ、どうぞ放して下さんせ。

もと　今日弟が身の出世に、父さんに其の事を知らせに參りし門口で、こつそり脱けてお出でなさるは何か仔細のある事と、跡を追掛け參りましたが何處へお出でなされまする。それをおつしやつて下さりませ。

三千　さあ、今しがた仲町へ買物に行つた千代春さんが、坂本通りで直さんを見掛けたゆゑ呼び掛けたれど素知らぬ振で跡をも見ず、山下の方へ逸散に行かしやんしたと聞いたゆゑ、そつと寮を脱出したは此の間の晩入谷田圃で、幸兵衞さんが拾つたとてお前が持つて來なさつた直さんの紙入に、わたしの送つた起請があるゆゑ、あれを此方へ置くときは夫婦約束したことも、緣が切れたも同然に、今夜逢うて其の起請を、直さんに返したく、跡を追うて來ましたわいな。

もと　すりや彼の紙入に取交せし起請が入れてあつたゆゑ、それを元へ返さうと、跡を追うてござんしたとか。

三千　それゆゑどうぞお元さん、留めずに遣つて下さんせいな。

もと　さうして尋ぬる直さんは、何處においでなさいますか。

三千　さあ、何處に居なさることか知れねど、山下の方へ行かしやんしたと、千代春さんが言うたゆゑあちらを搜しに行くのでござんす。

もと　そりや止しになされませ、お前さんがあの邊の道を知つておいでなされば氣遣ふことはござりませぬが、勝手の知れぬ山下をうろ〱なさつて惡漢に、どんな憂き目に逢はうも知れねば、思ひ止つて入谷の寮へ、早うお歸りなされませ。

三千　御親切は嬉しいが、是非とも今夜直さんに。

もと　そりやさうでもござりませうが、不斷お世話になります私、惡いことは申しませぬ。

三千　それぢやといつて。

もと　はてまあ、お歸りなされませ。

ト　お元三千歳を留める、やはり合方にて、上手より前幕の市之丞羽織袴大小にて出來り、

市之　おゝお元どの、よく留めてくれられしぞ。

三千　や、思ひがけない金子さん。

もと　何處へお出でなされました。

市之　今日はこれなる淨心寺に、緣家の者の法事あつて夜食の馳走に長座なし、歸りがけに大口の寮へ

門から訪れしに三千歳が見えぬとて、喜兵衛を始め新造等が立騒いで居つたゆゑ、その儘歸る途中なるぞ。

もと　見ればお供もお連れなされず、この闇の夜にたゞお一人、

三千　あの折烏目とおつしやいましたが、どうやらお眼が見える樣子。（ト市之丞思入あつて、）

市之　おゝ、兩眼ともに明らかなるぞ。

三千　何ゆゑ烏目とおつしやいましたぞ。（ト誂への合方になり、）

市之　仔細あつて三千歳を身請けなして歸る折、入谷の寮へ立寄りしに、間夫と噂の直次郎が參り居りし樣子ゆゑ、さそくに烏目と僞りしは身共に憚ることあらうと、皆目見えぬ振をなせしは戀路の情を汲みしゆゑ、まつた直次郎を惡口せしは、何時ぞや比企の屋敷歸り、小石川にて出逢ひし折彼れもさる者我で腕に、及ばぬことを知つたるか命を投げ出し手向ひせず、其の潔よき心に惚れ切らうと思つた念も止み、切らずに笑つて別れしゆゑ、其の腕前を知らざれば態と怒りを起させて手練の程を試せしは、深き所存あつてのことだ。

もと　如何の御所存あつてのことか、身請けなされしおいらんを、戀の敵の直次郎さんへ綺麗にお上げなされしは。

三千　どういふ譯のあつてのことか、わたしや合點がいきませぬ。
市之　合點のいかぬ其の譯は、嫌はれるのを承知にて武士の意氣地に身請けなし、遺恨重なる直次郎に鼻を明してやらうと思ひ、金策なして親元の藤五郎へ掛合つて委しく素性を尋ねしに、聞いてびつくり驚きしは、腹は替れど三千歳は肉身分けし我が妹。
三千　えゝ。（トびつくりこなし）
もと　思ひ掛けないおいらんを、
三千　肉身分けし妹とは。
市之　我が實父は會津の藩にて蒲田市之進と申す者、この市之丞は若年より放蕩ゆゑに勘氣を受け、浪人なして母方の苗字を名乘り金子といふ。そちが母は我が實父市之進の腰元にて、奉公中に父が手を附け懷姙せしゆゑ宿へ下げ、産み落したが則ちそちにて、母の悋氣に手當を貰ひ其の後音信なさゞる內に、そちが母は病死なし、取片附の金に困り、廓へ賣りしと養父なる藤五郎が委しき話しに、さては妹であつたるかと、我も初めて知つたるぞ。
三千　そんならわたしは市之丞さんの、實の妹でござんしたか。
もと　不思議な御緣でござりましたなあ。

市之　それと素性を知つて見れば、胤は替らぬ一人の妹に苦界の勤めをさするも不便に、表向は武士の意地、二日なりとも女房になすと惚れたる體にて身請けなし、直次郎と夫婦になさん元より心で手練を試し、年季證文を遣はせしは別れ程經し兄が情。あゝ今々思へば三千歳そちに、嫌はれたのが互ひの仕合せ、直次郎のやうに市之丞が惚れられたことならば、世間へ顏の合はされぬ、畜生道へ落ちねばならぬ。

三千　朋輩などが間惚れして、なぜ市之丞さんを嫌ふのぢやと、言はれたこともあつたれど、どうしたことかわたしはいやで、振り通したも亡き親の、お止めなされしことなるか。

もと　これといふのもおいらんが、お心立てがよいゆゑに、神や佛の皆お惠み。

市之　今直次郎を尋ねたとて、爰等あたりにうろ〳〵といたしてをらう筈がない、其の身に積る惡事にて高飛びなしたであらうけれど、最早四方へ手が廻れば遠からずして召捕られ、入牢いたさば其の方よりつど〳〵手當の見舞を入れ、目出度く出牢なすを待つて、若し又罪科脱れずして死罪の刑に逢はうとも、其の時共々死なうなどゝ不了簡をば出さずに、跡懇に弔ふが、死するに勝る女の貞節、必ず早まつたことといたすな。

三千　是れまでつれなく當りしも、實の妹に憎しとも思召さずに有難い事を分けたる今の御異見、實は

もと　今宵廻り合はずば、死なうと覺悟いたしましたが、思ひ止つてながらへまする。
三千　おゝそれは何よりよい思召し、直さんとても助かるか助からぬかは後日の事、金子さんの御異見を守つて死なうなどゝいふ、御了簡をお出しなされまするな。
もと　死なうと思ふも兩親は、疾うに此の世に亡き人にて、便り少ない此の身ゆゑ。
三千　それも測らず金子さんが、お兄さんであるからは。
もと　思ひ掛けないわたしの力。
三千　嘸お嬉しうござりませう。

ト兩人よろしく思入、ばた〳〵になり、下手より紺看板の中間箱提灯を持ち出來り、

中間　はッ、お迎ひに出ましてござります。
市之　おゝ萬助か、大儀であつた。
中間　只今これへ參ります、道すがらの風說に、世上で名高い河內山と直侍が召捕られ、八丁堀へ引かれましたと、申すことでござりまする。
三千　えゝ、すりや直さんは、宗俊さんと、
もと　お召捕りになりしとか。

市之　さては天網脱れざりしか。

三千　せめて別れに、

もと　たゞ一目。（ト兩人立ちかゝるを、）

市之　必ず急くな。（ト留めるを道具替りの知らせ、）逢はしてやるぞ。

ト時の鐘、早き合方にて道具廻る。

（蓬萊屋見世開きの場）――本舞臺四間上寄りに潛り附の大戸、是れへ「今日賣切」といふびらを張り、上下中窓格子障子を立て、此の上下竪らこ下見、庇の上手摺附き二階の前側をおろし、上の方蒸籠、下の方酒樽を積みし書割りの張物、是れへびらを張り、長提灯を多く附け、總て上野廣小路蓬萊屋見世開きの體。爰に仕出し四人○△□◎立ちかゝり居る、流行唄にて賑かに道具留る、

○　今度蓬萊屋が普請を仕直し、今日賣出しの見世開きであつたが、近年にない好い景氣だ。

△　晝の八ツに賣切れて、それから後は內輪の客、皆町內の衆ばかり。

□　地主方が先棒で、近所の藝者も大勢呼び、二階も拔ける大騷ぎ。

◎　然し目出度い見世開きだから、づぶ六づぶ八などが出來て、間違ひがなければいゝが。

○いや間違ひといへば今しがた、山崎町の丑松と大喧嘩をした相手といふは、白無垢鐵火の直侍、
△その直侍も河内山も池の端の妾宅で、今捕られたといふことだ。
□大方上野の役僧に、化けて松江の屋敷へ行つた、衒りが露顯したのだらう。
◎何にしろ、あの二人が召捕られて行つたらば、嘸牢内は富貴だらう。
○此の町内のごろつき手合も、送つて行くといつて居た。
△不斷二人を旦那々々と、みんなごまを摺つて居たから、
□こりやあ送りが大勢で、賑かなことだらう。
◎噂をすれば影とやら、あの提灯が送りの衆だ。
○どれ、爰に居て、
四人　見て行かうか。
トかすめて騷ぎの鳴物になり、上手より直次郎絲織の着附、博多の帶藤くら草履、鼻紙を懷へ入れ平繩に掛り、町内の印半纏を着たる番人二人繩を取り、勘次千太半合羽脚袢麻裏草履にて附添ひ、以前の一、二、三始め大勢思ひ〳〵のこしらへにて長提灯を持ち、送り出來る、直次郎皆々を見て、
直次　こりやあ皆さん有難うござります、何處まで行つても同じことゆゑ、爰から歸つて下さいまし。

二　いや、大番屋までわつち等は、
皆々　是非お送り申します。
直次　それぢやァあんまり大仰過ぎて、上へ對して濟みませぬ、それに是れから駕籠を願つて、三橋を越して乘りますから、どうぞ歸つて下さいまし。
勘次　今夜に限つた義理でもねえから、明日みんな大番屋へ、
千太　見舞でも持つて來るがいゝ。
一　是非みんなあつちまで送る氣で來ましたが、
三　さうおつしやるなら今晩は、
皆々　これでお別れ申します。
直次　大きに御苦勞でござりました。（ト此の時前幕の九兵衞繩に掛り、番人に引かれて出來り）
九兵　旦那、あなたのお供をいたします。
直次　誰かと思へば手前は九兵衞、何で御用になつたのだ。
九兵　按摩の金を五兩盗み、お針のお元へなすつた科で、たうとう喰ひ込みました。
直次　えゝ、しみつたれな奴だな。

九兵　どうぞあつちへ參つたら、足でも擦らせて下さいまし。

トばた〳〵になり、下手より以前の丑松鉢卷尻端折り跣足にて、丸太の切を持ち出で、

丑松　さつきの返報、覺えて居ろ。（ト打つてかゝるを身を躱し、）

直次　えゝ、何をぢたばたしやあがるのだ。

勘次　御用になつた囚人へ、

千太　手出しをすると許さぬぞ。

直次　これ丑松、嘸手前悔しからうが繩が掛りやあ天下の囚人、おれに手出しは出來ねえぞ、さつきの意趣が返し度くば、もう少し待つて居ろ、今におれが口一つで二つ入つた墨の色揚げ、手前を中へ呼んで遣るから、其の時ゆつくり意趣を返せ。

丑松　それまで待つて居られるものか。（ト又打つてかゝるを、送りの人數丑松を留め、）

二　これ丑松、旦那に向つて何をするのだ。

一　目先きの見えねえ、

皆々　奴ぢやあねえか。

丑松　何の天下の囚人だつて、命を捨てりやあ事は濟む。

勘次　まだ〱そんなことを言へば、

千太　手前も一緒に送つてやるぞ。（ト暴れる丑松を取つて押へ、早繩を掛ける。）

一　それ見たことか、

皆々　よせばいゝに。（トばた〱にて、下手より以前の三千歳お元出で、）

三千　もし、直さん。

直次　おゝ、三千歳か。

三千　情ないことになりましたなあ。（ト泣く。）

直次　斯うなるのも豫ての覺悟、みッともねえから泣いてくれるな。

三千　これが泣かずに居られませうか。

もと　我が身の弟半七が、御恩になりし片岡さま、お名殘り惜しうござりまする。

九兵　おぬしゆゑに此の繩目、何とかおれにも言つてくれぬか。

もと　あい、よい氣味でござんすわいな。

ト此の時上手より宗俊黑の着附草履にて繩に掛り、これを番人二人繩を取り、送りの者大勢長提灯にて附添ひ、跡より市之丞中間附いて出來る。

宗俊　おゝ、三千歳來たか。
三千　この世の別れに參りました。
宗俊　今金子氏に承はつたが、兄妹とは知らなんだ。
直次　なに、兄妹とは。
市之　此の三千歳は市之丞が、腹替りの兄妹なるぞ。
直次　そりやどういふ譯で。
宗俊　委細は跡で話さうが、金子氏から過分の土産を、下すつたからお禮を申せ。
直次　それは有難うござりまする。
市之　前以は戀の敵同士も、今は繫る緣の端、隨分共に身を大事に、
三千　再びお歸りなさるのを、
もと　お待ち申して居りまする。
丑松　兇狀重き衒りの本人、百年經つても出られるものか。
宗俊　高位のお名を衒りしも、人命救ふ爲なれば、河内山が申し開かば、
直次　危い首も繫がつて、

市之　やがて目出度う。（ト屋體の内にて、）

大勢　祝うて一つ。（ト大勢にてよい〳〵と手を拍つ。）

宗俊　はて、幸先きよき、

皆々　手打ちぢやなあ。（ト皆々よろしく、此時樂屋頭取出て、）

頭取　先づ今日は、これ限り。

ト目出度打出し

河内山と直侍（終り）

島衛月白浪

若葉の闇に奥山から西と東へ別れたる千太は親の世になきを白川宿で伯父に逢ひ聞て涙に袖濡す辨天お照が母親の無心に困る百圓を惠む替りに貰ひし指輪夫を證據に拔差のならぬ難へ言掛れど瓦解以前に強談で人に知られし浪士故餘儀なく其場は物別れ扨島藏は霧深き旅路に幾夜明石潟三歳ぶりにて磯右衛門お濱にめぐり大津繪の心の鬼も忽に發起なせしは悴の不具惡の報いは早手の難船憂事積る牛込に今は堅氣の酒屋店醬油を買ひし小娘から辛き浮世に淸兵衛が難儀を知つて百圓を貢いで歸る我家の門面も九月の約束に尋ねて來たる松島を連出す九段の招魂社前身も及ばぬ明石が異見に小蔭に忍ぶ野州德迄改心なして浮雲の空もはれゆく望月が助力に千圓金ととのひとがを自訴なす大切まで夏より冬へつゞききやうげん

「島衛月白浪」は明治十四年十一月、新富座に書卸された、作者六十六歳のことである。作者が二世河竹新七から黙阿彌になるとき、一世一代書納めの引退劇として企圖され、勸善懲惡を主旨とした白浪物世話物として好評を以て迎へられた物である。扉の「語り」にも述べられてある如く此の年の六月新富座に上演した「古代形新染浴衣」にちらりとその發端を見せておいて、此の作を期待せしめたものであつた。五世菊五郎の島藏、先代左團次の千太何れも適役であり、大詰の招魂社鳥居先の場は力強い一場面として、いつも觀客に多大の感動を與へてゐる。清元の名曲「かりがね」は本篇中に綴られた淨瑠璃である。尚、多くの場合一流れの新曲中、二幕三幕以外は門弟に助筆させる習慣であるのだが、此の作は五幕全部を、助手なしに書上げたものであつた。

書卸しの時の役割は尾上菊五郎（明石の島藏）、市川左團次（松島千太、福島屋清兵衛）、市川團十郎（望月輝）、岩井半四郎（旅藝者辨天お照）、市川團右衛門（漁夫磯右衛門）、尾上松助（野州徳、お照母ねぢ金お市）、中村福助（福島屋娘おなか）、中村荒次郎（漁夫沖藏）、大谷門藏（辻講釋古井辨山）、岩井しげ松（旅籠屋女房おむら）、板東しう調（島藏妹お濱）、坂東竹次郎（探索方瀬栗菊藏）、尾上菊之助（島藏悴岩松）等であつた。

口繪にした着色木版は國周筆の錦繪で、插繪にしたのは守川周重筆の錦繪である。

大正十四年一月　　編者誌す



島衞月白浪（明石の島藏、松島千太＝五幕）

序幕　白川宿旅籠屋の場
同　明神峠山越の場

〔役名――士族望月輝、銀行手代濱崎千右衞門實は松島千太、人力車夫野州德、辻講釋古川辨山。旅藝者辨天お照、旅籠屋の女房おみち、お照の母猝金お市、探索方、道者、旅役者、其他。〕

（白川宿奥州屋の場）――本舞臺四間通しの屋體、上手二間常足の二重、揚緣付下手一間落間、正面奥州屋といふ紺の暖簾口、上手間平戸の戸棚、落間の所折廻し板羽目、上の方戸袋しつくひ塗りにて、「御泊宿白川宿奥州屋」と記しあり、見附の柱「御泊宿奥州屋」と書きし行燈を掛け、軒口に一新講の旗を立て下の方冠木門、見越しの松、すべて奥州街道白川宿旅籠屋の體、見世先の床几、邊丹に次は立役鈍四郎は女形の旅役者のこしらへにて、腰を掛け、太助、半次宿屋の若い者着流し駒下駄にて立掛り、二重におしの、おのぶ宿屋下女のこしらへ、燭臺の掃除をして居る、此見得米山甚句にて幕明く。

太助　もし、明神の夜芝居は大層はひるさうでござりますね。

邊丹　仕合せと初日から一ぱいでござります。

半次　こりやあ全く花形の、お前さん方が出るせゐだ。
鈍四　有難いことに、何處へ行つてもはひらないことはない。
邊丹　玆は二人共東京で、たゝき込んだ腕だから、
しの　おやく\お前さん方は、東京でござりますか。
のぶ　私達は田舍廻りの役者衆かと思ひました。
邊丹　白川は開けた所と豫て話に聞いて居たが、私等を田舍役者と見る樣では開けないね。
鈍四　大方舞臺は見なさるまいが、名を聞いたばかりでも東京役者か田舍役者か知れさうなものだ。
太助　まだ番付を見なかつたが、額が出張つたお前さんは、何といふ名でござります。
邊丹　たゞお前さんでいゝ事を、額が出張つてゐるだけ餘計なことだ。
太助　つい目に付いたから言ひましたが、お前さんは何といひます。
邊丹　額の出張つた私かえ。
しの　人のことよりお前さんが、出張つたといふくせに。
邊丹　うつかり是は卷込まれたのだ、私は市川左團次の弟子で、市川邊丹次といひます。
太助　成程名は體を顯はすと、へたん次はいゝ名だ。

半次　そちらの色の黒いお方は、
鈍四　私は岩井半四郎の弟子で、岩井鈍四郎といひます、
半次　誰が付けたか是もいゝ名だ、半四郎の弟子だといつては、それぢやあお前は、
鈍四　あい、娘形でござります。
半次　貉形とは珍らしい名だが、ハア顔が貉に似て居るからか。
鈍四　いえ、貉ではない娘形さ。
太助　貉といふのは無理はない、どうでお前方は旅稼ぎで、獣に違ひない。
しの　さうして、毎晩狂言が替るさうでござりますが、
のぶ　今夜は何をなさいます。
澄丹　御贔屓様からお好みで、忠臣藏の五六七と三幕續けて致します。
鈍四　澄丹次さんが勘平で、私がおかるを致します。
太助　それぢやあ猪が出ますね。
澄丹　はい、五段目へ出ます。
半次　狸も出ますか。

鈍四　狸の出るのは六段目さ。
太助　豚も出ますか。
淺丹　何で豚が出るものか。
太助　さういふお前が東京の、奥山の豚によく顔が似てゐるからさ。
しの　それではお輕勘平は、
のぶ　豚と貉でござりますね。
太助　こりやあ犬のカメ芝居や、猿芝居より優しだらう。
淺丹　あんまり馬鹿にしなさんな。
鈍四　これでも役者一疋だよ。
太助　いや獸といはれたとて、腹を立つことはない、左團次だの半四郎だのと、虎の威をかる狐だもの。
兩人　なに、狐とは、
太助　東京役者といひなさるのは、人を化しなさるからさ。
淺丹　こいつあ旅と知られたか。

鈍四　尻尾を出さない其内に、
邊丹　早く行つてシャギらせよう。
太助　狸囃子をかえ。
鈍四　もういゝ加減にしておくれ、
邊丹　どれ、樂屋へ行くとしようか。
　　ト米山甚句にて兩人下手へはひる。
太助　彼奴等は旅役者で、下ッ腹に毛のない奴等だ。
半次　然し二人で燻し付け、たうとう尻尾を出さしてやつた。
しの　どんなことをするものだか、晝だと行つて見られるけれど、
のぶ　暮方から忙しいので、夜芝居では行かれない。
太助　今年は春の博覽會から日光參り伊勢參り、大層田舍が出たではないか。
半次　それといふのも近年は、何處の田舍も豐年で、宿屋も道者が一番多い。
太助　噂をすれば影とやら、道者が一群やつて來た。
　　ト米山甚句になり、花道より東右衞門更けたる田舍道者脚絆草鞋、二枚繼の蓙を引掛け、蝙蝠傘を持

ち、陸兵衞、奥藏同じこしらへにて出來り花道にて、

東右　作右衞門が博覽會の歸りがけに泊つた時、大層手當がよかつたといふ、奥州屋といふは向うの内だ。

陸兵　旅籠代は世間並二十五錢取るさうだが、食物がよくて、夜具がよく、

奥藏　其上團扇を一本宛土産にくれるといふことだから、外の宿よりよつほど得だ。

東右　少し泊るにやあ早いけれど、悪い所へ泊るより奥州屋へ泊らう。

陸兵　隨分今日は草臥たから、早泊りがようござらう。

奥藏　綺麗な内に湯へはひり、ゆつくり一ぱいやりませう。

ト甚句で本舞臺へ來る、太助半次立掛り、

太助　あなた方はお泊りでござりますか。

半次　一新講の奥州屋でござりまする。

東右　在所の者の指圖により、お前の所へ泊る積りだ。

兩人　それは有難うござりまする。

半次　さあ、是へお掛けなされませ。

しの　お荷物やお笠は、こちらへお出しなされませ。

ト此内捨ぜりふにて、三人腰を掛け半次すゝぎの盥を持つて來る、おしの、おのぶは荷物、笠を片付ける、三人は草鞋を解き足を洗ふ。

のぶ　おかみさん、お泊りがござります。（ト奥にて、）

みち　あい〳〵。（ト奥よりおみち宿屋女房のこしらへにて出來り、）これは〳〵どなた様も、お早いお着でござります。

東右　先達て村の者が、博覽會の歸りがけ、お前の所へ泊つたところ、丁寧にしてくれられたから、少し早くも泊れといふので、

陸兵　もう一宿行かれるのを、

奥藏　お前のとこへ泊りました。

みち　それは御贔屓になされて下さいまして、有難うござりまする。あなた方はどちらでいらつしやいます。

東右　我等は奥州松島在だ。

みち　へい、松島のお方でござりますか、この三月から引續き博覽會を御見物に、多くのお泊りがござ

いましたが、作右衛門様の御近所でござりますか。
東右　おゝ、其作右衛門の隣りでござります。
みち　左樣でござりましたか。（ト此内足を洗ひ上へ上る。）
のぶ　お茶をお上りなされませう。（ト三人へ茶を出す、半次は脚袢草鞋を片付ける。）
陸兵　これ若い衆、脚袢の間違はぬ樣にして下さい。
奥藏　ついでに草鞋も賴みますぞ。
半次　直に札を付けますから、決して間違ひは致しませぬ。
しの　お湯が宜しうござりますが、直におはひりなされますか。
のぶ　御膳を先へ召上りますか。
東右　どうで一杯やりますから、湯へ先に、
三人　はひりませう。
みち　それではお湯へ御案内申しや。
女中
兩人　畏りました。
東右　どれ、草臥を休めようか。

女中
兩人　さあ入らつしやいまし。

ト米山甚句になり、東右衞門等兩人、おしの荷物を持ち、おのぶ付いて暖簾口へはひる。

みち　脚袢へ直に札を付けなよ。
太助　なに札を付けるには及びませぬ、三足共汚ない脚袢だ。
半次　これよりきたない脚袢はないから、間違へた方が德用だ。
みち　又そんなことをいふか、堅いが名代でお客樣の絶間のない此方の內、假令脚袢一足でも間違ひがあつては家の疵、よく氣を付けて置いてくりや。
兩人　畏りました。

ト右の合方にて、下手より幸助菊藏羽織まち高袴半靴探索方のこしらへにて出來り、

菊藏　おかみさん、此間は。
みち　これは瀨栗さんに鳥方さん、何ぞお調べでござりますか。
幸助　ちつとお前に聞きたいことがある。
みち　旅人のことでござりますか。（ト兩人揚緣へ腰を掛け、）
菊藏　十日程お前の所に、天氣のいゝに逗留して、土地の藝者の辨天お照と、

幸助　毎日車へ相乘りで、爰ら近所を遊んで歩く、東京の客は何者だ。
みち　あのお方は東京の、銀行の御手代衆だと申すことでござります。
菊藏　宿帳をお見せなさい。
みち　はい、畏りました。（ト宿帳を出して見せ、）これに名前がござります。（ト菊藏見て、）
菊藏　「東京日本橋區南茅場町五十番地、濱崎千右衞門」
幸助　こりやあお前の所で馴染の客かえ。
みち　いえ、お馴染ではござりませぬ。
太助　あのお客は人力車の、野州德が連れて參つた、
半助　初めてのお客でござります。
菊藏　いつたい何處へ行く旅人だね。
みち　松島が生れ故郷で、親を尋ねて參るとやら申すことでござります。
菊藏　遊山旅か知らねえが、十日間の長逗留、名所古跡を見るでもなく、
幸助　藝者を連れて遊び歩き荒ツぽい遣ひ振だから、此間から目を付けて居たのだ。
みち　さうおつしやれば銀行のお手代衆には、そぐはぬ物言ひ、漢語交りの其内に、勇みな詞がござり

ます。

太助　めつたなことは言はれないが、

半次　どろ衆かも知れませぬ。

菊藏　何ぞ怪しいことがあつたら、そつと知らしておくんなせえ。

みち　畏まりました。

菊藏　決して迷惑は掛けねえから、隱しだてをしなさんな。

幸助　跡で露顯する日には、叱られた上何がしか、罰金を取られるぜ。

みち　決して隱しは、

三人　致しませぬ。

菊藏　それぢやあおかみさん、賴みましたよ。

みち　畏まりました。

幸助　どれ、料理茶屋を、

兩人　探つて來よう。（ト右の合方にて下手へはひる。）

太助　どうも怪しいと思つたが、探索方の目にとまり、

半次　内々調べになつてゐるとは、誰の目も違はぬものだ。

ト花道より千右衛門麥藁のシャッポ單羽織、袷着流し駒下駄、お照縮緬の着付、宿場藝者のこしらへにて出來り、あとより下總松、半纏半股引き、人力車夫のこしらへ、肩へケットを掛け、二人乘の車を引出て來り、

千右　車も一日乘續けは却つて腰が痛くなり、歩く方がよッぽど樂だ。

お照　そりやあ私が大きいから、窮屈なせゐでござりませう。

松　明日は相乘でなく、一人乘りで一人宛お乘りなされませ。

千右　程の惡いことをいふぢやあねえか、東京にも二人とない辨天お照と名の高い、白川一の藝者衆と相乘がしたいばかりに、腰の痛えを我慢するのだ。

お照　エヽモ憎らしい、そんなことを言つて。（ト右の騷ぎ唄にて三人舞臺へ來る。）

太助　これは旦那、お歸りなされませ。

千右　車を下りて歩いたので、思ひの外遲くなつた。

半次　いえ、お遲いことはござりませぬ。

みち　今日はどちらへおいでなされました。

千右　何處といふ當はなく、松公が案内者で、方々名所を見て歩き、今夜は溫泉へ一泊しようと思つたが、何處へ泊つてもこつち位泊り心のいゝ内はねえ。
みち　それは有難うござりまする。
松　さつき左樣おつしやりましたが、夜芝居へおいでなされますか。
千右　どんな役者が出て居るか、話の種に行つて見よう。
お照　上手な役者が居るといふから、一幕見たうござりますね。
太助　そりやあおよしなされませ、中々以てあなた方の御覽なさる芝居ぢやござりませぬ。
半次　先刻も見世へ參りましたが、市川邊丹次に岩井鈍四郎、下手らしい役者でござります。
千右　いや生中の役者より、妙な方がをかしくつていゝ。
お照　私も行つて見たいから、松さん晩に來ておくれよ。
松　畏まりしてござります、今日は旦那の御贔屓の、徳が用事がござりまして、替りにわたくしが上りましたが、嘸お乘りにくうございましたらう。
千右　少しも乘りにくいことはない。
松　今晩芝居へいらつしやいますには、徳がお供を致します。

千右　お前も一緒に來てくんねえ。
松　へい、後押に上ります。
千右　それ迄行つて一ぺいやんねえ。（ト紙入から小札を出してやる。）
松　これは有難うござります。お照さん、旦那へ宜しく。（ト辭儀をする。）
太助　松公しつかり呑めるな。
松　いえ、晩の仕事がござりますから、一合やつておきます。（ト下手へ車を引いてはひる。）
みち　旦那、お湯をおめしなさいませんか。
千右　今溫泉へはひつて來たから、今夜は湯は止しにしませう。
太助　左樣なれば、
兩人　お二階へ。
千右　いや、爰で一ぷくやりませう。

ト千右衞門お照床几へ腰を掛ける。又元の米山甚句になり、花道よりお市色氣のある婆アのこしらへ、草履がけ、辨山半合羽草履にてカバンを提げ、兩人共蝙蝠傘を杖に突出來り、花道にて、

辨山　おつかア、奧州屋といふは向うだぜ。

お市　爰の宿屋に逗留して居る、銀行の手代衆に毎日呼ばれて出て居るさうだ。
辨山　何にしろ銀行の手代といやあ、金があらう。
お市　無心をいふにやあいゝ幸先だ。
辨山　おつかアお照は向うの床几に居るぜ。
お市　おゝ違えねえ、あれは娘だ。（ト兩人舞臺へ來り、）お照、此間は。
お照　おやおつかさん、よくおいでだね。
お市　あんまりよくも來ねえのさ、五十里ある白川迄、わざ／＼來るからは、どうでろくなことではねえ。
辨山　お照さん、久しくお目にかゝりませぬ。
お照　誰かと思つたら辨山さん、お前一緒においでかえ。
辨山　席の都合で此間から遊んでをります所故、座敷でも出來ようかと、おつかさんのお供をしてこちらへ一緒に參りました。
太助　まあ是へお掛けなされませ。（ト床几を出す。）
お市　是は有難うござります。

ト捨ぜりふにてお市、辨山床几へ腰を掛ける。千右衞門は脇を向いて煙草をのみゐる。

お照　おつかさん、何の用で出ておいでだえ。

お市　用といふのは外でもねえ、鬱陶しいといふだらうが、又金を借りに來たのだ。

お照　此間郵便で持たして上げた十圓は、お前の方へ屆いたらうね。

お市　そりやあ郵便だから、三日目に間違ひなく屆いたが、此節諸式が高いので、今の夷の十圓は大黑銀のあつた時分の一兩にかならないから、直になくなつてしまふわな。

お照　さうしてお前内へおいでか。

お市　今泉屋へいつたらば、お客樣で此方の内に、出て居ると聞いたから、

辨山　お前を尋ねて爰へ來たのだ。

みち　もしお照さん、何の御用か知らないが、爰は人が來ますから、二階へおいでなさいましな。

お照　はい、有難うござります。（トお市、辨山思入あつて、）

お市　どうで今夜は此宿へ泊らうと思つた所、爰のお内が綺麗だから、爰へ泊るとしようかね。

辨山　私もさう思つた居た所だ。

太助　左樣なら、お泊りなさいますか。

お市　今夜はお世話になりませう。

太助　旦那、あなたもお二階へいらつしやいまし。

千右　暮れると芝居へ出掛けるから、今の内一杯やらうか。

お照　お相手を致しませう。（トお市お照の袖を引き、）

お市　お照、あなたは。（ト思入）

お照　あい、銀行へお勤めなさる、濱崎樣とおつしやるお方で、御贔屓になりますから、ちよつとお禮を申しておくれ。

お市　これはお初にお目に掛りますが、不束な娘をば御贔屓になされて下さりまして、有難うござります。

千右　此の子の話に聞いて居た、お母さんはお前かえ、幾つの時の子かしらぬが、大層お前は若いね。

お市　これは私が十八の時に産んだ子でござります。

千右　それぢやあお前のほんの子かえ。

太助　ほんの子ならば、鳶が鷹だ。

お市　何だとえ。

太助　いや、兎も角も旦那を初め、
半次　お二階へいらつしやいまし。
千右　それぢやあお照、
お照　おつかさんも御一緒に。
お市　どれ、御厄介に、
兩人　なりませう。
半次　さあいらつしやいまし。
　ト宿場騷ぎになり、千右衞門、お照、お市、辨山、半次付いて暖簾口へはひる。太助傘を片附ける。
太助　もしお上さん、今のお袋だといふ人は、一筋繩ではいけませんね。
みち　なか〳〵喰へさうもない婆アさんだが、一緒に來たのは何だらう。
太助　何でも講釋師か噺し家だが、私の鑑定では、あの婆アさんの情人だと思ひます。
みち　なるほど此方のいふ通り、大方そんなことだらうよ。
太助　それはさうと探索方の、賴んでいつた濱崎樣、
みち　どうも樣子がをかしいが、

太助　證據の上らぬ其内に、

みち　早く立つて、（ト立上るを道具替りの知せ、）下さればよいが。

ト宿場騷ぎになり、心にかゝる思入宜しく道具廻る。

（二階の場）＝＝本舞臺一面の平舞臺、正面上手床の間、下手秋田蕗の襖、上下折廻し障子、下の方階子の上り口、すべて旅籠屋二階の體。爰にお市辨山、下手にお照住ひ、宿場騷ぎの合方にて道具留る。

お市　これお照、今度が無心の言ひじまひだが、百圓都合してくんねえな。

お照　此間郵便でわざ〳〵持たして上げたのを、何にお前しなすつたのだ。

お市　何にもしねえ朝夕の暮しに皆んな遣つたが、子に親が世話になるのは、當り前とはいひながら度度言ふのも氣の毒故、今度上野の山下へ大道講釋の席をこしらへ、辨山さんにたゝかして、おいらが木戸から中賣按摩、二人前も稼ぐ積りだ。

辨山　不圖した事からおつかアと、今では夫婦の樣になり、共稼ぎに稼いで居れど、人の持つて居る場所へ出ては長い錢も取れないが、自前稼ぎに骨ツきり晝夜を掛けて叩いたら、きつと儲るに違ひ

ない、其處で資本を拵へて、山下もよりへ席を建て、生涯樂にする積りだ。

お市　辨山さんと共稼ぎに稼いで苦勞はかけないから、是を無心の言納めと、思つて百圓貸してくんな。

お照　そりやァあんまり無理ぢやあないか。

お市　なに、無理とは。（卜合方になり、）

お照　これが東京の新橋か柳橋に出て居たら、賴んで借りるお客もあれど、通り一遍の奧州街道、土地の人でも曖昧なことをしなけりや一圓でも吳れるお客はありやあしない、十圓お前に上げるのも並大抵なことぢやあない、お氣の毒だがおつかさん、所詮都合が出來ないから、堪忍しておくんなさい。

お市　いや堪忍することは出來ねえ、忘れもしめえ六歲の時手前の親父にごねられて、跡は女の手一つ故困る中で藝事まで、仕込んで己が育つたのは、斯ういふ御難の其の時に役に立てよう爲めばかり、藝者で金が出來ねえなら、娼妓になつて一年ばかり、稼いでくれりやあ出來る金だ。

辨山　旅の藝者は曖昧な、皆娼法をする中で、眞面目にするのは大きな損、其曖昧をすると思つて、おつかさんの賴みを聞き、娼妓になつてくんなせえ、それともそれが出來ないなら、お前を贔屓に逗留して居る、あの銀行の旦那殿へ、無心をいつたら出來ように。

お照　お金は持つて居なさるが、わづか十日ばかりのお馴染、そんな事が言はれるものかね。
お市　客へ無心が言はれずば、娼妓になつてこしらへて呉れ。
辨山　お前がウンと言ひなされば、宇都宮の貸座敷に私の懇意の者があれば、其處へ話を向けたらば、直に百圓前借で、右から左へ出來る金。
お市　否でも應でも手前の體で、百圓こせへて貰ひたい。
お照　是が初めてのことならば、丸々出來ずば半分でも、都合して上げようけれど、今度は貸して上げられない、路用位は上げようから、明日歸つて下さんせ。
お市　路用位な端金を、貰つて何で歸るものだ、親の爲めに娼妓になるのは世間に幾らもあることだ、厭と言やァこつちも意地づく、何でもかでも娼妓にして、百圓取らにやあ歸らねえ。
辨山　お前も厭ではあらうけれど、實は負債が多いので、裁判所や勸解へ出訴されて毎日出るが、其處はでもだが席上で、喋り付けてゐる辨山故、舌に任して言譯すれど、借りたものなら返せといふ此一言に限りでも出さうと思ふ大困難、お前が百圓貸してくれねば、たつた一人のお袋が路頭に迷はにやならないから、ウンといつて娼妓になり、金を貸してくんなせえ。（ト お照思入あつて、）
お照　折角のお頼みだが、今日ばかりはおつかさん、お斷り申しますよ。

お市　なに、斷るとは。

お照　お前がほんとに身を持つて、席を出すといふことなら、出來ないながらも都合して、上げまいものではないけれど、辨山さんと二人して今日は芝居翌日は涼み、榮耀に遣ふ金の爲め、苦界へ此身を沈めるのは、わたしや厭でござります。

お市　厭とは何のことだ、言はしておけばいゝかと思つて、口幅ッてえことを言やあがるな、辨山さんを亭主に持つたも、手前の仕送りが足りねえからだ、五圓や十圓の端た金で芝居や花見に行かれるものか、よく考へて見やあがれ。

辨山　私だつて十九や二十の若い者といふではなし、互ひに頭の禿げた同士、斯うして夫婦になつたのも、言はゞ茶呑友達だ、なか／＼お前が送つた金で芝居や納涼に行く樣な、そんな浮いた仲ぢやあない。

お市　喰ふに困つて借りに來たが、どうでも金は出來ねえか。

お照　お氣の毒だが、今度ばかりは。

辨山　それぢやあ出來ないといひなさるのか。

お照　どうぞ堪忍して下さいまし。（トお市思入あつて、）

お市　金が出來にやあ東京へ歸る事の出來ねえ體、身でも投げて死なにやあならねえ、迚も死ぬなら爰で死んで、お照に恥をかゝせてやらう。

トお市手拭を首へまき、己が手に引張りアッといふ、辨山是を留め、

辨山　これおつかァあぶねえ、何をするのだ。

お市　首を締めて己ァ死ぬのだ。

辨山　死ぬのは何時でも死なれるから、短氣なことをしなさんな。

お市　いゝや留めずに放して下せえ。

辨山　是が留めずに居られるものか。（トお市首をしめようとするを、辨山留めること宜しく）

お照　何でお前は其様に、早まつたことをしなさんす。

お市　誰しも惜しい命だけれど、死ぬと覺悟を極めたのは、手前が己を殺すのだ。

お照　私がお前を殺すとは。

お市　頼みを聞いてくれねえから、こんな不孝な奴はねえ。（ト大きな聲をする）

辨山　これさ〳〵、大きな聲をしなさんな。

お市　あゝ親殺しだ〳〵。（トわざとどたばた騒ぐ、是を辨山留める、お照も留めて）

お照　これかゝさん、何が恨みで此樣に私に恥をかゝせなさんす。

お市　金を貸してくれねえから。あゝ親殺しだ〳〵。（ト奥よりおみち、太助、半次出て、お市を留め、）

みち　あもしお袋樣、まあ〳〵お靜になされませ。

太助　親殺し〳〵と、大きな聲をなさいますが、

半次　お巡り樣のお耳へでも、はひつた日には大騷動。

お市　いや〳〵何でもかでもこゝで死ぬのだ、留めて下さるな。

みち　隣近所へ聞えましても、内の外聞になりますから、

太助　お靜になすつて、

三人　下さりませ。

お市　いや〳〵、何でも死ぬのだ〳〵。

みち　そんなに死ぬ〳〵とおつしやいますが、自分で首がしめられますか。

お市　え。

太助　締められるなら、己が手に、

半次　首を締めて御覽じませ。

お市　む〻。（ト詰まろ辨山思入あつて、）

辨山　これ〳〵おつかァ、自分で死なれぬこともないが、爰の内へ厄介をかけるのが氣の毒だ、死ぬのは止めにしたがよい。

お市　お〻さうだ〳〵、娘に恥はか〻せたいが、お上さんへ濟まないから、爰で死ぬのは止めにして、是から宇都宮へ連れて行つて、娼妓にせう。

辨山　それが何より上策だ。

お市　さあ、己と一緒にあゆびやあがれ。

ト　お市お照の手を取り引立てる、此時奥より以前の千右衛門出てお市を留め、

千右　樣子は奥で委しく聞いた、立騒がずと靜にしねえ。

お市　貴方がお留めなさるなら、無理にとは申しませぬが、親を蔑にしますから。

千右　定めて腹も立たうけれど、私がどうか捌かうから、まあ不承してくんなせえ。

辨山　折角旦那が立入つて、不承しろとおつしやるから、まァおつかあ靜にしねえ。

お市　靜にもしようけれど、金が出來ねえ其時は。

千右　そりやァ心配しなさんな、金は己が出して遣る氣だ。

お市　え、それでは貴方が、
兩人　其の金を。
千右　後共言はず、それ百圓。（ト懐から十圓札で紙に包みし百圓を投出しやる、お市取上げ）
お市　それでは是を下さいますか。
辨山　是で命が助かります。
兩人　えゝ有難うございます。（と頂く、お照思入あつて）
お照　それを貴方に出させては。
千右　はて、大した金といふぢやあなし、僅百圓ばかりの金、決して心配しなさんな。
お照　そりやさうでもございませうが、未だまあ纔十日ばかり、深いお馴染でもない事故。
千右　假令三日でも懇意になりやあ、己ア百年も馴染んだ氣だ、今此金を出さなけりやあ留めに入つた甲斐がないから、默つて己に出させなせえ。
お照　何とお禮を申さうか、有難うございます。（ト禮を言ふ、おみち不審に思ひ、）
みつ　田舍と違つて東京の、繁華な土地のお客樣、お馴染淺いお照さんへ百圓お上げなさるとは、
太助　多くのお金を取扱ふ、

半次　銀行勤めのお方故。
お市　何にしろよい旦那に、御贔屓になるはお照の仕合せ、就ては親の私迄、大仕合せでござります。
辨山　若し此金の出來ぬ時は、我持前の張扇で、叩き立てようと思つたが、旦那が綺麗なお捌きで、きざを言はずに歸られます。
千右　お前方も爰の内へ、今夜泊るとあるからは、後にゆつくり話しませう。
お市　何れお禮に改めて、
兩人　上りますでござります。
太助　いや、お二人樣は此間に、
半次　お湯へおはひりなさりませ。
お市　思はぬ汗をかきましたから、
辨山　どれ一ぱいはひりませうか。
太助
半次　さあ、おいでなさいまし。
ト宿場騷ぎになり、お市、辨山、太助、半次奥へはひる。跡千右衛門、お照おみち殘り、
みち　お照さん、よく旦那へお禮をお言ひよ。

お照　まことに貴方のお蔭故、危い難儀を脱れまして、有難うござります。
千右　なに、其の禮には及ばねえ、旅藝者には人のいゝお前が可愛さうだから、百圓出してやつたのだ。
お照　お馴染薄いお前樣に、百圓といふ大金を、お氣の毒でござります。
千右　其日稼ぎの人ならば、百圓は大金だが、銀行などへ勤める者は、何十萬といふ金を取扱ふが生業故、百や二百は端金、決して心配しなさんな。然し氣の毒だと思ふなら、百圓替りにお前から貰ひたいものがある。
お照　え、百圓替りに貰ひたいものとは。
千右　そんなにびつくりしなさんな、望みといふはお前の掛けてる、其の指輪をおれにくんねえ。
お照　こんな粗末な指輪をば。
千右　たゞお前のを貰ひたいのだ。
お照　お望みならば上げませう。（ト　お照指輪を拔いて千右衞門へ遣る。おみち思入あつて、）
みち　是はどうか二番目の、筋になりさうでござりますな。
千右　そんな株は此方にないことだ。
お照　それはさうと三年あと迄、東京にをりましたが、旦那はどちらでござります。

千右　己等の内は茅場町だ。

お照　茅場町は藥師樣の御近所でござりますか。

千右　直藥師の裏門前だ。

お照　おや、私もあすこにをりました。

千右　え。

お照　何番地でござります。

千右　慥四十六番地だ。

みち　それでは旦那宿帳と、

千右　なに、違やあしねえ筈だが。

　　ト千右衛門困る思入、爰へ下手の障子を明け、以前の東右衛門、陸兵衛、奥藏出來り、座敷を間違へし思入にて、

東右　いや是は御免なさいまし、つい座敷を間違へました。

陸平　とんだ粗相を、

三人　しましたな。

みち　いえ、同じ間取でござりますから、御尤もでござります。（ト東右衞門千右衞門を見て）
東右　や、其處に居るのは。（ト千右衞門見て）
千右　おゝ、お前は伯父御か。
東右　やれ千太か、よく達者で居たな。
陸平　なに、千太といふは誰だえ。
東右　笘作の悴の千太よ。
陸平　立派な男になつたから、
奥藏　途中で逢つても分らねえ。
お照　それでは旦那は皆さんと、
みち　御懇意でござりますか。
千右　おゝ、みんな以前の馴染の衆だ。
みち　お馴染とござりますなら、是へおいでなされませ。（ト是にて三人捨ぜりふにてよき所へ住ひ）
千右　伯父さん初め皆さん方、お替りもござりませず、お目出たうござります。
東右　四五年此方便りがないから、死んだかと思つて居た。

千右　在所に居ますお袋へ、久しく便りをしませなんだが、替ることはござりませぬか。
東右　それぢやお手前、何にも知らぬか。
千右　なに、知らぬかとは。（ト誂への合方になり、）
東右　替るとも〳〵、大替りに替つたわ。
千右　内を出てから生業用で、九州路から長崎へ長らく行つて居りましたから、さつぱり存じませなんだが、替りましたとおつしやるのは。
東右　此方の親父は正直だつたが、所謂前世の因果とやら、便りに思つた一人の此方は家を出てしまひ、爺ィ婆ァでやう〳〵と、その日を送つて居た所、生れ付いての酒好が、病ひの元で中氣になり、口はもどらず體は利かず、田畑の仕事も出來ぬ上、藥の代は段々溜り、煎じ詰つた痩世帶、明日の米にも困る樣になつたを近所で不便に思ひ、米や麥や味噌醤油野菜物迄送つてくれ人の惠みで生きて居たが、定業故か私の所へ禮に來るとて二本杖で出たさうだが、轉びでもしたことか、常願寺の池へ落ち、遂にはかなく死んでしまつた。
千右　親父が死んだといふことは、東京へ出た村の人に立ちながら聞きましたが、そんな死に樣をした事は、話さぬ故に知りませなんだ。

陸兵　寺から知らして來た故に村中行つて池から引上げ、直に家へ連て行つたが、早桶を買ふ錢もなく、

奥藏　せうことなしに味噌樽の古いのへ死骸を入れ、さし擔ひで寺へ持込みお經をざつと上げて貰ひ、

東右　わしが施主で葬むつたが、可愛さうなは手前のお袋、跡に殘つた婆ァ殿、中氣病でも亭主故、杖に思つて居た所、非業な死をばした後は、明けても暮れても泣いてばかり、千太が居たならば居たならばといつても返らぬ旅の空、生死の程も知れざれば、食ふに困るとあぢきなき浮世に倦きたか笘作殿が、百ヶ日の晩に裏の井戸へ飛込んで、是もはかない死をしました。

ト涙を拭ひながら言ふ。

千太　すりやお袋も死んだ親父が百ヶ日の其晩に、井戸へ身を投げ死にましたか、二人が二人水で死ぬとは、何たる因果なことなるか。（ト愁ひの思入。）

陸兵　ほんに爺樣も婆ァ樣も村の日待に寄合つても話の末はこなたの噂、親を捨て家出なし、憎い奴だと口には言へど、目には一ぱい涙を持ち、

奥藏　達者で居るなら逢ひたいと、明暮言つて居られたが、到頭逢はずに非業な最期、斯ういふ立派な男になつたを、一目見せてやりたかつた。

ト此内始終千右衞門はお照へ憚り、いゝ加減に言つてくれゝばよいといふこなしの內、親の死んだこ

とを聞き、愁ひの思入。

東右　さうして、見れば以前と違ひ立派な裝をして居るが、今は何をして居るぞ。

千右　在所に居ては一生涯大した出世も出來ませねば、東京へ出て人にならうと、故鄕を後に五年跡、傳手を求めて銀行へ奉公にはひりましたが此身に運の向く時節か、重役衆の氣に入りて段々出世します故、爰ぞ人になる所と、勉強をした功顯れ今は二等手代となり、商法上で九州路へ久しく行つて居りましたが、今度歸りました故五週間の暇を貰ひ、親父はなくともお袋へ出世を話して悅ばせようと參つた甲斐も情ない今は世に亡き二人の衆、もう一年早かつたら逢はれましたに殘念な、手當に持つて參つた金も手向の金になりましたか、果敢ないことでござりまする。

ト淚を拭ひ宜しく思入。

陸兵　ほんにこなたが立派になつたを、二人の衆が見たならば、どんなに悅ぶことだらうに、

奥藏　一年遲いばつかりに、墓場へ行かねば逢はれぬ兩親、惜しいことをしましたな。

東右　して今聞けば銀行の、二等手代になつたといふが、千太手前が勤めて居る、其の銀行は何といふ銀行だ。

千右　たゞ、銀行でござります。

東右　三井を初め諸所にあるが、さうして所は何處にあるぞ。
千右　茅場町でござります。
東右　して何番の銀行だ。（ト千右衛門ぐつと詰り、）
千右　三百三十三番でござります。（ト東右衛門は心得ぬ思入にて、）
東右　近頃諸縣に銀行が大層出來たといふことだが、まだ日本全國中に二百番は出來ぬ筈だが。
千右　え。（トぎつくり思入にて、）
東右　三百三十三番とは。
千右　さあ是は近所に山王のお旅所がある故に、山王の猿にかたどり、三百三十三番でござります。
東右　それは珍らしい銀行だな。
陸平　わし等は田舍者だけれど、新聞が大好故、凡東京の小新聞はあらかた買つて讀んで見るが、
奥藏　まだ廣告の其内にも、三百三十三番といふ銀行は、まだない樣だ。
東右　何にしろ出世して、折角親に逢ひに來たに、二人共死んでしまひ、逢ひに來た詮がないな。
千右　いや、思ひがけなく伯父さんに、爰でお目にかゝりますれば、親に逢つたも同じこと、直にこれから歸つてもよい譯でもござりますが、爰迄參りましたから、墓參りをして參りませう。

東右　手前が行つて花を上げ、水を手向けてやつたらば、草葉の蔭で悦ぶだらうが、それに附けても二人が死んだ跡が仕樣がなく、手前は出た限り便りはなく、死んだか生きたか分からぬから、此衆達とも相談して、一先家を疊んでしまひ、家財を賣つた其の金は永世無緣にならぬやう、みんな寺へ納めてしまつた。

千右　何から何迄伯父さんの、厚いお世話になりまして、有難うござります。（ト此時おのぶ出來り）

のぶ　松島のお客樣、御膳をおあがりなされませ。

陸兵　酒肴も出來ましたかな。

のぶ　はい、お燗も出來てをりまする。

奧藏　それでは一杯やりませうか。

千右　まだ伯父さんに種々と、お聞き申したいこともござりますが、

東右　こつちも言ひたいことがあるが、どうで一つ旅籠屋故、後に又話しませう。

みち　左樣なればお客樣、

東右　いや、おやかましうござりました。

ト米山甚句になり、東右衞門、陸兵衞、奧藏、おのぶ付いて下手へはひろ。跡見送り千太伸をしよう

として心付き、俯き悒ぎ居る思入。

お照　今お聞き申しますれば、お前さんの親御さんは、お二人ともお亡なりなされ、嘸本意ないことでござりませうな。

みち　側でお聞き申すさへ、お氣の毒でござりまする。

千右　若い時には親達に、少しは苦勞もかけたから、生涯樂にさせようとわざ〳〵金を持つた來た、其甲斐もなく死んだと聞いたら、俄に胸が塞がつて、心持が惡くなつた。（ト悒ぐ思入。）

お照　さういふ時には憂さ晴し、一と口どうでござります。

千右　いや、酒もあんまり呑みたくない。（ト此時階子の口よりおしの出來り、）

しの　もし旦那樣、夜芝居へおいでなさいましと、車屋の德どんがお迎ひに參りました。

千右　おゝ迎ひに來たか。（ト千太思入あつて、）こりやあ憂さ晴しに、芝居へ行かうか。

みち　それが宜しうござりませう。

千右　お照、お前も一緒に行きな。

お照　あい、お供致しませう。

千右　おかみさん、カバンを出して下さい。

みち　畏りました。
お照　そんなら、旦那。
千右　芝居で憂さを晴らさうか。

ト端唄になり、千太思入あつて、お照おみちおしの付いて階子の口へはひる。合方になり、下手より東右衞門、陸兵衞、奥藏出來り、階子の口を覗き思入あつて、

陸兵
奥藏　東右衞門殿。
東右　二人の衆。（ト合方きつばりとなり、）
陸兵　千太が立派な裝になつたは、
奥藏　どうも合點が行かないな。
東右　おゝ行かぬとも〳〵、第一合點の行かぬのは、三百三十三番といふ銀行は聞いたことがない。
陸兵　多分口から出任せに、
奥藏　嘘をついたと思はるゝ。
東右　子供の折から手癖が惡く、十五の年に懲役に行つてから猶惡くなり、種々異見も加へたが、糠に釘で少しも利かず、再び赤い仕着せを着たが、それから國にも居られなく、上州邊から東京へ行

つたといふ噂を聞いたが、それ限り便もない事故、大方終身懲役になつたことゝ思つて居たが、思ひがけない今夜の出逢。

陸兵　見れば立派な裝をして、爰の內に十日ほど、

奥藏　藝者を上げて逗留するは、

東右　どうで堅氣な金ではあるまい。

陸兵　掛り合にならぬ內、

奥藏　明日早く立ちませう。

東右　翌日はともあれ今宵の內も。

ト此內上手の障子を明け、以前の辨山窺ひ居て、扨は盜人であつたかといふ思入、東右衛門是を見てびつくりなす、辨山障子をしめる。

成程譬の、(トうなづくを道具替りの知せ、)壁に耳だ、(ト三人思入、宿場騷ぎにて此道具廻る。)

(明神山の場)――本舞臺上寄に三間高二重の岩組、後同じく畫心の岩組にて見切り平舞臺上の方柱迄岩の張物で見切り、下手谷の心にて杉の梢を見せ、よき所に飛込の穴、向う遠山夜るの遠見、日覆より杉の釣枝、總て明神山の體。道具半程より時の鐘山おろしにて道具留る。と合方山颪にて下手よ

り宿屋の若い者弓張提灯を持ち、紺看板の中間手紙を持出來り、舞臺にて、

中間　これ宿屋の若い衆、おらが旦那は暮合から、何處へおいでなされたのだ。

若者　此山向うの大信寺といふ禪寺の和尙樣は學問が能く、詩作が能く、分けて書を能く書かつしやるので旦那樣に逢ひたいと、內の主人が檀家故和尙樣に賴まれて、今日お連れ申したのだ。

中間　それでは大方詩や歌の面白くない話だらう、今日のお供を脫れたのは、大仕合をしました。

若者　今又お前が旦那樣に、急に逢ひたいとおつしやるのは。

中間　東京から別配達で郵便が來ましたから、どんな御用か知れぬ故、直にお届け申したいのだ。

若者　一體お前の旦那樣は、官へお勤めなさるのか。

中間　いや旦那は勤をさつしやれば、よい月給が取れるさうだが、窮屈な事が嫌ひ故、金を貸して氣樂に暮し、今度も松島見物から歸りがけでござります。

若者　然しさうして遊歴をなさるは何よりお樂み、結構なことでござります、

中間　是といふのも、內證がよい故、

若者　兎角世界は金のことだ。（ト時の鐘）

中間　や、あの鐘は。

若者　もう十時だから急きませう。

ト時の鐘合方山颪にて二重を上り、上手へはひる。平舞臺上手より二人乘の人力車へ以前のお照、千右衞門を乘せ、車夫の德是を引き、以前の松跡押をして出來り、

千右　おい、德公こゝでいゝから下してくんな。

德　芝居へおいでなされませぬか。

千右　芝居はこれからもうわづか、此山道を越すばかり、どうで車は引けないから、爰から下りて歩いて行かう。

お照　何だか氣味の惡い所、爰へ下りずと芝居迄、乘つて行かうぢやありませんか。

千右　なに、此の山を越すばかり、怖いことはありやあしねえ。

德　何ならお供を致しませうか。

千右　いや、送るにやあ及ばねえ。

ト是にて車より千右衞門、お照下りて千右衞門小さなカバンより紙包の札を出し、

是で歸つて呑むがいゝ。（ト德取つて、）

德　毎度有難うござります。これ松や、旦那へお禮を申せ。

松　旦那、有難うございます。

千右　大きに夜道を御苦勞だつた。（ト徳思入あつて、）

徳　もし旦那、おねだり申しては濟みませんが、もう少し下さいませぬか。

千右　なに、もう少し呉れと、（ト思入あつて、）わづかな所も夜道故、五十錢遣つたらば、言草を言ふとこはあるめえ。

徳　そりやア常のお客なら、結構過ぎた酒手だが、江戸で名高い銀行の旦那にしては少ねえ酒手だ。

ト不承々々に言ふ。

お照　これ徳どん、お前酒にでも醉つたのかえ、毎日旦那にお貰ひ申すに何でそんなきざを言ふのだ。

徳　言つてもいゝから、言ひますのさ。（ト松聞兼ね思入にて、）

松　これさ兄貴、何を言ふのだ、此間から仲間内でも、いゝ旦那に可愛がられると、皆が羨ましがつて居るのだ。

徳　手前達の知つたことぢやあねえ、今に酒手を貰つて遣るから默つてそつちへ引込んで居ろ。

松　何だか己にやアさつぱり讀めねえ。

千右　これ、通り一遍の旅先だが、斯うして毎日乘るからは吝嗇なことをする時は、東京の恥になるか

ら、出る度毎に酒手を遣り、手前達に兎やかうと言はれることは仕ねえ氣だが、己に酒手を増してくれとは、どういふ譯があつて言ふのだ。（ト是にて徳づう〳〵しく、）
徳　おい千兄イ、お前己を忘れたか。
千右　なに、忘れたとは。（ト少し凄みのある誂へ合方になり、）
徳　五年後に竊盗で、お前と一緒に佃に居た、野州生れの徳次郎だ。
千右　え。（トぎつくり思入、）
徳　間もなくおらア滿期で出たから、見忘れたかも知れねえが、外役先でお前と一緒に、一つ鎖に繋がれて土を擔いだことがあるぜ。
千右　それぢやあ手前も竊盗で、
徳　赤い仕着も二三度着やした。
松　コウ兄貴、あの旦那も五年後懲役になつたのか。
徳　やつぱり己と同じ科で、佃で苦役をしなすつたのだ。
松　見掛に寄らねえものだなあ。
徳　南部の袷に博多の帶、無地御召の單羽織に、ゴウルの時計、麥藁シャツポ、何處へ出しても銀行

の立派な手代と見えるこしらへ、虚か事實か灰吹にかけて分析したならば、いゝか惡いか知れやせう。

千右　世間にいくらも似た者が、他人の猿似であるものだ、そりやあ人違ひだぜ。

徳　お前の目からは小僧子と思つてごまかす氣だらうが、假令三日が間でも一つ飯を喰つたからは、人違ひをするものか、是が六十七十なら、耄祿をすることもあるが、まだ二十五にならねえ己だ。何で顏を忘れるものだ、然しお前は忘れたらう、こつちはけちな竊盜に、差入物もろくには來ず幅の利かねえ無籍者、滿期で出たから故鄕へ歸り上州路から奥州かけ、ほそい腕で車を引くのも、言はゞ此身のぼく除だ、一里引いてもわづか六錢長い錢の取れねえのも内職にする荒稼ぎで太く短く榮耀をせう爲め、一晩宿場へ友子を連れ兄ィと言はれて呑める程、お前も苦役をした體、器用に金を呉んなせえ。（トきつと思入、千太悔しき思入あつて、）

千右　手前達に脅されて、酒手を遣るもこけな譯だが、ちつとこつちに目的があるから、今夜は言ふなりに、酒手を遣るから早く歸れ。（トカバンから十圓札を出して遣る、徳取つて）

徳　兄貴、十圓かえ。

千右　それで不足を言ふならば、こつちも意地だ一錢でも、餘計な錢は遣らねえぞ。（ト千太きつと言ふ。）

徳　只貰ふ金だから不足をいふわけはねえが、もう十圓も貰ひてえのだ。

松　こう〳〵徳兄イ、いゝ加減に言はねえか、わづか宿から十町ばかり堅氣の人なら二錢の酒手だ、十圓貰やァ五圓づゝ、單衣の一枚も着られるわけだ。

徳　えゝ目先の見えねえ事を言へ、己が腕で取る金だ、誰が山にするものだ。

松　それぢやァ半分呉れねえのか。

徳　二十錢か三十錢手前に遣りやァ澤山だが、一圓やるから默つて居ろ。

松　たゞの酒手と違ふから、半分呉れざァ七分三分、三圓己にくんねえな。

徳　えゝ餘計な口を利きやあがるな。

松　それだといつて一圓は、あんまり酷い相場だから、

徳　手前がぐづ〳〵ぬかすので、こつちの話の氣が拔けた、もう十圓と言ひてえのだが、仕方がねえ不承をしませう。

松　長追すりやあぼろよりか、棒が出るから了簡しろ。（ト徳煙草入へ札を入れ）

徳　それぢやあ千太、いや、酒手を貰へば旦那様、

千右　口數きかずと、早く行け。

徳　お照さん、宜しくお禮を。（トお照へ思入、松車を上げ）

松　今夜は是で切上げて、

徳　宿場で愉快を極込まうか。

ト時の鐘合方にて、徳、松車を引いて上手へはひる。此内お照氣味の惡き思入にて、

お照　さあ旦那、氣味の惡い所故少しも早く參りませう。

千右　そんなに急くには及ばねえ、ちつとお前に話しがあるから、まあゆつくりとするがいゝ。

お照　何のお話しか存じませぬが、こんな所でなさらずと、内でお話しなされませ。

千右　内ぢやあ四邊の人目があるから、言ひてえ事も言はれねえ。

お照　それだといつて氣味の惡い、人通りのない此山中、わたしや怖くてなりません。

千右　其の怖がるのも尤もだ、晝と違つて日が暮れば往來稀な明神越、どんな話しをしようとも狐狸の其外は、聞手のねえのが己がやまだ。

お照　さうして私に話しとは、どんなことでございます。（ト千右衛門思入あつて、）

千右　長くいふにも及ばねえが、色になつてくんねえな。

お照　えゝ、（トびつくりする。時の鐘、少し凄みの合方になり）

千右　そんなに驚く事はねえ、先刻も聞いて居たらうが、久しく逢はねえ親達に逢はうと思つて東京から松島へ行く一人旅、お前の樣な美しい藝者があるとも白川へおくれて泊つた奥州屋、一人で酒も旨くねえから、相手に口を掛けた時、はい今晩はと座敷へ來たお前の顔を見てびつくり、辨天といふ名を取つた宿一番の女だと聞いた其晩襟元へ、ぞつと染込む夜嵐に、少し風氣を幸ひと、長逗留をして居たも、實はお前を手に入れたく、無駄な金も遣つたが、旅藝者には珍らしい金で轉ばぬ氣性故さつき貰つた此指環を、お前と一緒に居る心で、のろい奴だが指へはめ、明日は一先松島へ行つて歸りに口說かうと思つて居たも親達が、死んだとあれば行くのは無駄、是から直に東京へ歸る土產に前借を、返して連れて行きてえのだ、定めて厭でもあらうけれど惚れられたのが身の因果、うんと言つてくんなせえ。

お照　見る影もない旅藝者を、それ程思つて下さいますは、有難うございますが、お前さんのお心に隨はれない譯あれば、どうぞ許して下さいまし。

千右　どんなことか知らねえが、隨はれぬといふ譯は、

お照　さあ、其譯は。

千右　それを聞かにやあ思ひ切られぬ。（トお照思入あつて、）

お照　何をお隱し申しませう、わたしや東京に言交した、男がござりまする故。

千右　そりやあ男もあるだらうが、浮氣家業をするからは、そんな野暮を言はねえで、旅の恥はかき捨と、おれがいふ事を聞いてくんねえ。

お照　浮氣家業はして居れど、末は夫婦にならうといふ神へ誓ひを掛けた仲、親の賴みに仕方なく浮世を忍ぶ文字摺りの此の奧州の白川へ、前借をして來た私、旅の藝者は十が八九、お客の座敷で曖昧なことをするのが常なれど、男がある故今日迄も、そんな噂のない藝者、御贔屓にして下さいますなら、色氣なしでお座敷ばかり、御酒の相手に私をば、どうぞ呼んで下さいまし。

千右　大方そんな言譯と、思つて今夜芝居へ行くと云つて連出したは、否應いはさぬ己が狂言、さつき仕馴れぬ立役になつて百圓出したのも、よくある筋だがお前の體へ、金で恩を着せる爲、厭でもあらうがお袋に娼妓にされたと諦めて、堅い心を引いて取り夢と思つて濡の場を、一幕見せてくんなせえ。

お照　それほど迄におつしやるなら、幸ひ丁度お袋が參つて居れば相談して、明日御返事致しませう。

千右　もう此の土地に足を留め、明日迄待つちやあ居られねえ、大概己が身の上も人の話しで悟つたらうが、今迄大きな法螺を吹き銀行手代といつたは僞り、實はおらア盗人だ。

お照　えゝ。（ト合方きつぱりとなり、）

千右　何もそんなにびつくりして逃げるにやあ及ばねえ、盗人だとて同じ人間、ぎやつと生れた其時から人の物を我物と、盗む心はありやあしねえ、元はみんな堅氣だが多くは酒と女と博奕、身の詰りからする盗み、初手は明巣のちよつくら持ち、初犯で纔な懲役から二犯三犯段々と功を積んで强盜迄、修行して來た松島千太、どうで始終は天の罰、運も佃で終身懲役、こゝで手前を助けたところが、一等減じるわけでもなけりやあ、かばつてやるにも當らねえから、それで爰へ連出したのだ、網に掛つた鳥同樣、もう羽根たゝきもさせやあしねえ。

お照　そんならどうでも此場にて、

千右　是ほど言つても逃げる氣か。

お照　さあそれは。

千右　さあ、

お照　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

千右　こりや手短に縛り上げ、引さらつて行かにやあならねえ。（ト尻を端折りお照を手荒く引据る。）

お照　あれ、誰ぞ來て下さいまし〳〵。
千右　えゝやかましい、靜にしやあがれ。
ト　お照振切つて逃げるを立廻つて引付け手拭で縛らうとする。此時上手へ以前の德案内して、探索方兩人捕繩を持ち松附いて出來り、囁き合ひツカ〳〵と出て、
菊藏　松島千太、
兩人　御用だぞ。（ト千太見て、）
千右　や、こりや探索か。
菊藏　此間から盜賊と、にらんだ眼に違ひなく、
幸七　慥な證據が上つた上は、のがれぬ所だ、
兩人　覺悟なせ。
千右　さう知られたら仕方がねえ、察しの通り强盜で、其名を知られた松島千太、汝等が繩にかゝるものか。
菊藏　明神山へ追込んだ、
幸七　獲物を逃して、

兩人　なるものか。（ト兩人組付くを振解く、此内お照うろ／＼するを徳捉へ）

徳　お照さんは、おい等と一緒に、

松　早く此方へ逃げなせえ。（ト徳、松、お照を引張り上手へはひる。）

千右　扨は徳めが、訴人をしたな。

菊藏
幸助　知れたことだ。

ト時の鐘、誂への鳴物になり、兩人千太へ繩を掛けようといふ捕物の立廻り宜しくあつて、千太カバッと引さらひ、下手谷間の切穴へ飛込む、山颪烈しく、

菊藏　やあ、崖から谷へ飛込んだが、下は巖石鋭き谷間、

幸助　多分は岩で體を打ち、くたばつたに違ひねえ。

菊藏　何にもせよ、谷へ下り、

幸助　彼奴が行方を、

兩人　捜してくれん。

ト山颪ばた／＼にて、兩人逸散に下手へはひる。矢張ばた／＼にて、上手よりお照逃げて出來るを徳、松追掛け來て、お照を引付け、

徳　はて聞譯のねえお照さん、今夜千太が夜芝居へお前を連れて行くといふは、深い巧みのある事と悟つた故に酒手をゆすり、探索方へ密告して、今の難儀を助けたのだ、千太の替りに己達の此處で自由になつてくんねえ。

お照　危い所を助かつて、やれ嬉しやと思つたら、やつぱりお前も同じ事、私を手籠めにしようといふのか。

徳　そりやあお前が辨天と、言はれる顏のすることだ、二目と見られぬ女なら、此方も科を着ることだ、誰が手籠にするものだ。

松　兎やかういふ間に芝居のはね、人通りのねえ其の内に、

徳　ちつとも早く。

松　おゝ合點だ。

ト山颪早き合方にて兩人お照を引倒す。此時本鐵砲の音する。三人びつくりし、お照は俯伏になる、坂の上より望月輝、羽織まち高袴帽子短銃を持出て來り、此内徳は打たれはしないかと體を見ることあつて、ホツとして輝を見付け、

扨は今のは。

兩人　こなたゞな。

輝　理不盡致す人力車夫、警察官へ引立てようか。

德　そんな脅しをくふものか。（ト輝へ立掛る、輝短銃を差附け、）

輝　命はいらぬか。

德　やあ、こいつは叶はぬ。

松　逃げろ〳〵。（トばた〳〵にて兩人花道へ逃げてはひる、お照顏を上げ、）

お照　何方樣でござりますか。危い所をお助け下され、えゝ有難うござりまする。

輝　お照、嘸怖かつたらうな。

お照　え、さうおつしやるは、（ト誂へ灯入の月を下し、お照輝を見て、）おゝ望月樣。

輝　これ、（ト押へるを木の頭、）あゝ、いゝ月だな。

ト月を見上げる、お照は手を合せ嬉しき思入、誂への合方、山颪にて、

ひやうし幕

二幕目

明石浦漁師町の場
同播磨灘難風の場

〔役名＝明石の島藏、漁夫磯右衞門、同沖藏、同浪六、島藏妹おはま、悴岩松、其他。〕

（明石浦漁夫町の場）＝本舞臺三間の間平舞臺、正面眞中柿木綿の暖簾口、上手押入戸棚、是へ三尺の佛檀、阿彌陀の掛物、佛具宜しく誂への位牌、供物を備へ燈明を付け、此前へ手習机、此上へ香爐線香を載せ、下手鼠壁上の方一間折廻し障子屋體、いつもの所丸太の門口、竹簀戸下の方粗朶垣、後ろ海の遠見、總て播州明石浦漁夫内の體、上手に西念墨衣齋坊主の打扮、續いて喜太六、藤助着流し漁夫のこしらへ、おくろ同じく女房のこしらへ、四人共膳に向ひ眞中に磯右衞門白髮鬘漁夫の親仁にて住ひ、下手にお濱島田鬘漁夫の娘のこしらへにてお櫃を側へ置き盆を持ち給仕をしてゐる、岩松若衆鬘着流しにて香爐へ線香を上げてゐる、此見得波の音濱唄にて幕明く、

磯右　西念さんは生業だが、皆の衆は忙しいのに、よう念佛に來て下すつた。

藤助　外と違つて不斷から、親仁どんには一方ならず何やかや世話になれば、

喜太　假令生業を休んでも、此方の内の法事故、馳走になりに來ましたのぢや。

お黑　取分け私はおなぎさんと、お心安くした中故、何事置いても來ずには居られぬ。

お濱　おくろさんのお蔭にて、御膳拵へが早く出來、嚥姉さんも草葉の蔭で悅んでござりませう。

西念　今日の膳部の鹽梅は、妹御がさつしやつたか、まことに旨う出來ました。
お濱　何の旨いことがござりませう、仕慣れぬ私の摑み料理、何も彼も不鹽梅で上りにくうござりましたらう。
藤助　西念さんの言はるゝ通り、なか〳〵旨いことであつた。
喜太　爰ら近所の煮賣屋では、こんな料理は所詮出來ぬ。
磯右　いや爰ら近所にないどいふは、ちと褒め過ぎさつしやりませう。
お黑　いや〳〵酢和の胡麻ではなく、いゝ鹽梅でござりました。
西念　ときに膳を引いて下さりませぬか。
お濱　はい、只今引きますでござります。
お黑　どれ、手傳うて上げませう。
　ト皆々捨ぜりふにて、お濱お黑膳を片付、岩松前へ出て手をつき、
岩松　今日は何方も母樣へ、御供養を下さいまして、有難うござりまする。
西念　最前から佛前へ絕えず線香上げさつしやつて、殊勝に回向さつしやるのは、でも感心なことではある。

藤助　外の者が千遍の、念佛を唱へるより、

喜太　血の餘りの岩松が、十遍唱へる念佛が、

お黑　おなぎさんはどの位、嬉しいことか知れぬわいな。

磯右　今更いつても返らぬが、此岩松がお袋は生れだち素直にて、知つての通りの悴故、無理な小言も言つたれど遂に一度逆らうて喧嘩をしたこともなければ、假令にもいふ小舅のお濱を邪魔にしたことなく、眞身の如く可愛がり、取分けわしを大事にして痒い所へ手が屆くほど、よう世話をしてくれた申分のない嫁を、惜しいことをしましたわいの。（ト淚を拭ふ。）

藤助　そりやこなたばかりぢやない。あかの他人の私らさへ、

喜太　廻りも早い三年忌の、明日が忌日に當る故、

お黑　達者な時の噂して、貰ひ泣してをります。

西念　然しおなぎ殿が亡なつても、實の娘のお濱どのがまだ緣付かずにござつたのが、磯右衛門殿の仕合せぢや。

磯右　そりや西念さんの言はるゝ通り、兄の不孝に引替へて妹が勝れた親孝行、それに孫がやさしいので此二人を樂しみに、毎日矢張漁に出て、まだ殺生を致します。

西念　して、島藏どのは三年跡國を出て行かれたが、今では何處に居さつしやる。

磯右　いゝも惡いもお前方が知つての通り三年跡、筋の惡いことをして、八十日の懲役に行つたを嫁が苦勞になしそれを氣病に煩ひ付き、遂に滿期にならぬ內養生叶はず果敢ない最期、丁度三十五日の日に日數も立つて歸つて來たが、少しは面目ないかして此ほとぼりのさめる內、東京へ行つて雇にはひり人となつて歸る迄、此岩松の養育を賴むといつて內を出た限り、頓とそれから音信不通、どうしたことゝ思つた所、博覽會を見に行つた國の者が東京で逢つたといへば死にもせず、達者で居ると見えまする。（ト岩松思入あつて、）

岩松　手が書けぬなら仕方がないが、おとつさんはよく書くのに、何故便りをなさらぬか、おつかさんには死に別れ便り少ない私をば、可愛くお思ひなされぬのか、居所が知れたら此方から恨みを言つて上げねばならぬ。

お濱　そなたが恨むも尤もだが、內を出る時兄さんが人に成らねば歸らぬから、母に替つて岩松の世話を賴むとくれ〴〵も、私へ言つて行かしやんしたが、便りのないは思はしいことがないのであらうわいの。

磯右　どうで親に苦勞をかける不孝者の島藏故、天道樣の御罰でも人に成らるゝことはない、病ひが直

ればよいけれど、直らぬ時は終ひには、生涯土を擔いでも生きてゐたらばお目出度で、赦免にな
るまいものでもない、どうぞ切られてくれねばよいが。

西念　いや／＼そんなことはあるまい、根が利口な島藏殿、そでないことをさつしやつたも、附合ふ友
が悪いゆゑ、

藤助　明けても暮れても賭事に、終には所々へ借が出來、

喜太　所謂貧の盜みにて、金が欲しさの出來心。

お黑　まさか命にかゝはることを、馬鹿でないからなさるまい。

藤助　必ず案じ、

三人　さつしやるな。

西念　何にしろ親孝行な、よい妹御のあるのが仕合せ。

磯右　どうで忰は當にならねば、此妹へ聟を取り、位牌所を立てさす積り、目に叶つた者があつたら、
一人世話をして下され。

西念　よいのがあつたら世話をしませう。

藤助　然しうつかり其話しは、世間へぱつとせぬがよい、皆の衆も知つて居る、

喜太　ならず者の沖藏が、お濱殿に惚込んで女房にしたいと言つて居れば、
お黑　此話しを聞いたらば、押掛聟に來ようも知れぬ、彼奴には匂ひも、
三人　かゞされぬ。
西念　時に皆の衆、跡へ客もござらうから、こちらはお暇せうではないか。
藤助　おゝ歸りませうとも〳〵、是から皆で寺へ行き、
喜太　墓を綺麗に掃除して、
お黑　お花を手向けて上げませう。
お濱　それは有難うござります。
岩松　皆さんがおいでなら、私もお參り致しませう。
磯右　どうで明日參詣すれど、そちは母のことなれば、お參り申して來たがよい。
岩松　そんなら行つて參ります。
喜太　もう岩松も步けるか。
岩松　お寺位は參られます。
お黑　よく早く癒つたな。

西念　左樣なれば磯右衛門殿。
磯右　皆の衆、
藤助　又明日、
四人　逢ひませう。
ト波の音濱唄になり、西念、藤助、喜太六、お黑、岩松樫の杖に縋り跛を引き花道へはひる。
磯右　おゝお濱大儀であつた、たつた一人で膳拵へ、嘸草臥れたことであらう。
お濱　いえ〳〵草臥れは致しませぬ、今日の料理が曲りなり出來るもみんな姉さんが、不斷敎へて下さんした故、御恩返しにどの樣にも、私がせねばならぬわいな。
磯右　是に付けても島藏め、連添ふ女房の年忌もしらず、何處に居をることぢややら、眞人間になつたらば手紙位はよこす筈、やつぱりごろつき居ると見える。
お濱　遊んでならばよいけれど、惡い病ひがある故に、案じられてならぬわいな。
ト案じる思入、波の音濱唄になり、花道より沖藏着流し三尺帶、皮草履をはき出來り花道にて、
沖藏　今日島藏の女房が三年忌の逮夜にて、漁夫仲間を呼んださうだが、今西念坊に聞いたれば皆歸つたといふこと故、直談じに談じこんで、お濱を女房に貰はにやおかぬ。（ト舞臺へ來り、）磯右衛門

殿、內でござるか。
磯右　おゝ、沖藏殿か。
お濱　あゝ來ずともよいに。
沖藏　え、
お濱　ようござんしたなあ。（トツンとする。）
沖藏　今日はおなぎ殿の三年忌、よく法事をさつしやつたな。
磯右　あれが里も死に絕えて、跡を立てる者もなく、こつちでせねば仕方がない。（トお濱思入あつて、）
お濱　父さん、わたしや臺所を片付けて來ますぞえ。
磯右　殘り者が晚に來れば、支度をして置いてくれ。
お濱　どれ、支度して置きませう。（ト合方にてお濱膳部を持ち奥へはひる。）
磯右　ときに何ぞ用でもあつてか。
沖藏　今日はこなたに賴みがあるから、何でもうんと聞いてくれ。
磯右　身に叶つたことならば、賴みを聞くまいものでもない。
沖藏　それは何より忝い。

磯右　して其の頼みと言はつしやるは。

沖藏　外でもない此方の娘を、己が女房に貰ひたいと、仲間の者から言込んだが、おなぎ殿の三回忌法事前は取込んで返事がならぬと言はつしやるので、仕方なしに待つて居たが今日は和尙直勸化にお濱殿を貰ひに來た、私が頼みを聞いて下さい。

磯右　外ならぬこなた故頼みを聞いて進ぜたいが、知つての通り島藏が國を出てから便りはなし、孫とてもまだ年がゆかねば跡を繼がせる譯にも行かず、據なくお濱めに聟を取つて掛らねば、よい年をして何時迄も己が漁夫をせねばならぬ、此譯故に氣の毒ながらお濱はこなたに遣られぬわい。

沖藏　なるほどこなたの言ふのも尤も、そんなら嫁には貰ふまい、わしを聟にして下さい、さうしたならば隱居させ、こなたに漁はさせませぬぞ。

磯右　それは何より忝いが、然し夫婦の緣ばかりは親の自由にならぬもの、篤と娘に話した上で、否やの返事は後からしませう。

沖藏　いや自身に頼みに來たからは、何でもかでも否やの返事を、今日聞かして貰ひたい、私がお濱殿に惚れて居ることは、漁夫仲間で誰一人それを知らぬ者はない、夫婦になられぬ上からは、明石の濱にも居られぬ譯、何處へか影を隱さにやならぬ。

磯右　それは甚迷惑な、縁談ばかりは當人の心に濟まねば極められぬ。
沖藏　何でもかでもお濱殿と、夫婦にならねば男が立たぬ。
磯右　そんな無理なことはない、今返事の出來ぬといふは、十が九つ話しをしたら、こなたはお濱の氣に入るまい。
沖藏　なに、此沖藏が氣にいらぬと。（ト沖藏むつとする、磯右衞門思入あつて、）
磯右　わしが聟にする氣がなければ、娘も亭主に持つ氣はあるまい。
沖藏　むゝ、さう嫌はれゝばもう賴まぬ、私も明石の此濱で少しは人に知られた沖藏、外聞惡く爰にも居られぬ、是から伊豆か相模の漁場へ巢を替へて行かねばならぬ、其時どんな置土產を置いて行くか知れねえぞ。
磯右　それは氣味の惡いことだが、吳れるとあらば置土產を、貰はずにも置かれまい。
沖藏　娘を一人失ふも、親の心一つだぞ。
磯右　そんな脅しを恐れる樣な、磯右衞門だと思つて居るか、年は取つても漁に出たら若い者に負けぬ腕、いらぬ無駄口たゝかずとも、己が厭で貰はぬ聟、さあきり〳〵と歸らつせえ。
沖藏　おゝ、歸らねえでどうするものだ。（ト沖藏門口へ出る。）

磯右　えゝ、けち〳〵野郎め、一昨日うせろ。（ト門口をしめる。）

沖藏　今に意趣を返すから、親父め覺えてうしやァがれ。

ト波の音濱唄にて沖藏花道へはひろ、奥よりお濱出來り、

お濱　もし父さん、よい加減になさんすりやよいに、あんな馬鹿な男故、どんな事をしようも知れぬわいな。

磯右　どんな事をするものか、口ばかりの意氣地なし、

お濱　ほんに譬に言ふ通り、

磯右　惣身へ智慧の廻り兼ねる、

お濱　無駄に大きな、

磯右　野郎だなあ。

ト波の音ばた〳〵になり、花道より以前の藤助走り出來り、

藤助　これ親仁殿、悦ばつしやい〳〵。

磯右　なに、悦べとは、何の事だ。

藤助　さつき便りがないといつた、島藏殿が歸つて來た。

磯右　え、悴が歸つて來ましたか。
お濱　そりやほんまのことでござんすか。
藤助　今九郎兵衞殿の所へ寄つて、話しをして居らるゝ故、先へ私が知せに來ました。
磯右　そりやよく知らして下されました。
藤助　どれ、仲間の者へも知らしてやらう。（ト ばた〳〵にて下手へはひる。）
磯右　島藏が歸るといへば、其處等を綺麗に片付けておけ。
お濱　あい〳〵、こんな嬉しいことはない。
磯右　お〻嬉しからう〳〵。（ト兩人嬉しき思入にて四邊を片付ける、お濱門口から花道の方を見て、）
お濱　もし〳〵父さん、向うへ兄さんが見えるわいな。
磯右　お〻見えるか〳〵。（ト兩人悅ぶ、是より床の淨瑠璃になる。）
上るり〽過ぎし日は昨日か今日と思へども早くも三歳たつ霧に暫し隱れし島藏が、旅寐に幾夜明石潟馴れし故卿へ立歸り、
ト是へ波の音を冠せ、花道より島藏好みの着附、達磨合羽脚袢尻端折り、大きなカバンを提げ、蝙蝠傘を杖に突き出來り、花道にて、

島藏　わづか三年たゝぬ内に、往來幅が廣くなり、穢い橋が綺麗になつて、以前に勝る立派な學校、こんな所にも石造や煉瓦造りの見えるのは、世界は益々開けて來たな。

〽歸るを松の片庇、親は迎ひに立出て、（ト島藏舞臺へ來る、磯右衛門門口へ出て）

磯右　おゝ島藏、歸つたか〳〵。

島藏　や、親父樣、先づお替りのないお顏を見て、まことに嬉しうございます。

お濱　兄さん、よう歸つて下さんしたな。

島藏　おゝ妹、そちも達者でよかつたな。

磯右　まあ〳〵足を洗つて、早く上れ。

島藏　いえ、足は汚れはしませぬから、洗ふには及びませぬ。

磯右　そんなら早く上るがよい。

お濱　兄さん、爰へござんせいな。

〽妹は心の花蓙を敷いて兄をばもてなせば、島藏設けの座に付いて。

ト　お濱花蓙を出して眞中へ敷く、此の上へ磯右衛門島藏住ひ、

島藏　岩松が見えませぬが、何處ぞへ參りましたか。

磯右　明日はお袋の三年忌故、墓へ花を上げながら逮夜參りに行きをつた。
島藏　此の世にある内おなぎにも、餘計な苦勞を掛けたから、此三年忌に間に合ふ樣旅中を急いで參りました。
お濱　もう行つてから餘程の間、今に歸つて來ませうわいな。
磯右　よく歸つて來てくれた、是で明日の施主が出來た。
お濱　草葉の蔭で姉さんも、嘸お悦びなさんせう。（ト島藏思入あつて、）
島藏　なには扨置親父樣へ、お詫を先へせねばならぬ。（ト誂の合方になり、）三年跡に不埒から八十日の御處刑受け滿期になつて歸つたれど、所に居るのも外聞惡く、其のほとぼりのさめる內東京へ出て雇ひにでも入つて人に成らうと存じ、出は出ましたが思はしからず、なまじ便りをしたならば又もや餘計に御苦勞掛け、不孝に不孝を重ねます故、是迄便りを致しませぬはお許しなされて下さりませ。
磯右　假令苦勞をしようとも、何故知らしてはくれなんだ、やうやく此春東京に居る事を聞いたれど、それ迄とんと居所が知れねば、村の者に聞かれても、ならず者は居所の知れぬ方が結句よいと、口では言へど心では血を分けた我子だもの、何處にどうしてゐることか、懲役にでもなりはせぬ

かと、たゞの一晩其方が事を、胸に忘れたことはない。

お濱 此間も父さんが、夜中に大きな聲をして、島藏達者で歸つたかと言はしやんすので私も目が覺め何うしたことゝ聞いたれば、今島藏が歸つて來た夢を見たと言はしやんして、是程親が思ふのに何故便りをしてくれぬかと、父さんが泣かしやんすので、私も甥の岩松も貰ひ泣きに泣きましたわいな。

〽嬉しいに付け悲しいにつけ涙脆きは女子の常、聞く島藏も歎息なし、

　トお濱泣く、島藏思入あつて、

島藏 子供の折から惡戯で、お世話をやかした其の果が道に背いたことをして、終に繩目の恥をかき、それを氣病に女房が懲役中にはかなく死に、不便なことゝ思ふに付け過ぎた月日を考へれば、唯の一日孝行せず濟まないことゝ氣が付けば、所に居るのも面目なく、繁華な土地の東京で雇奉公してなりと、人となつて故鄕へ錦を飾つて歸らうと、思ひ立つて出ましたが、是ぞと申すことがない故、遂に御無沙汰を致しました、やう〳〵出世に取付きましたは、伊太利國の異人の所へ、ボーイに這入りました所、身の仕合せに主人の氣に入り、半年ばかり勤める內、番頭に取立てられ、生絲の仕入を任せられ、何萬といふ金高に步合の禮も大した金、やう〳〵人に成りましたの

で、主人も親に逢つて來いと、親切に言はれますので、三週間の暇を貰ひ、至急に出立なしましたれば、土產物さへ買ふ間なく、何も持つて參りませぬ。

磯右　無事な顏を見せてくれるが、何よりの土產なれば、品物などは決して入らぬ。

島藏　長年御苦勞掛けた上、懲役中の差入物から死んだ女房が取片附け、まだ其上に忰の養育、種々御厄介をかけましたれば、せめてもの御恩送りに樂をおさせ申し度くそれのみ心掛けましたが、思ひがけなく天の惠みで、はからず金を得ました故、取る物も取敢ず參りましてござります。

磯右　親が我子の世話するは、こりや世間の當前、禮も何も入るものか、惡い心が直りさへすりや、何よりそれが恩返し。

お濱　父さんの言はしやんす通り、お前が身を持つて下さんすりや、私迄も共々に、まことに嬉しうござります。

磯右　誰より彼より死んだおなぎが、嘸悅ぶことであらう。

〽言ふ尾に付いて妹が飾る位牌を取出し、（ト お濱佛檀より位牌を出し、机の上に載せ。）

お濱　これ姉さん、お前も聞いて居なさんしたらう、兄さんが出世して今日歸つてござんした、嬉しいことでござんせうな。（ト 島藏も位牌へ向ひ。）

島藏　あゝ長年手前に苦勞を掛けたが、やう／＼己も人になつて、今日親父樣へ御恩送りをする樣な身になつたから、草葉の蔭で悦んでくれ、今更言つても返らぬが、今日迄達者で居たならば、少しは樂をさせようものを、

〽流石夫婦の情合に、落つる涙を押隱し、（ト島藏ホロリと思入あつて、）

いや、心ばかりでござりますが、親父樣への御恩送り、是をお受け下さりませ。

トカバンの中より金を出し、磯右衞門の前へ出す、

磯右　志しは忝いが、こんな心配には及ばぬものを。（ト島藏又金包を出し、）

島藏　妹、是はそちへ土産、好な物でも買つたがいゝ。（トお濱にやる。）

お濱　私に迄お土産を、有難うござりまする。

〽頂くこなたに磯右衞門、包みを取上げ不審顏、（ト磯右衞門金包を取上げ思入あつて、）

磯右　や、是は餘程の金包、島藏中にはいくらあるぞ。

島藏　はい、三百圓ござります。

磯右　え、三百圓あるとか。

島藏　左樣でござりまする。

お濱　大したお金でござりますなあ。
磯右　はあゝ。
〽はつとばかりに包みを投出し、聲を上げて泣伏せば、（ト磯右衞門包を投出し泣伏す、）
お濱　父さん、何を泣かしやんす。
磯右　是が泣かずに居られるものか。
お濱　そりや何故でござりまする。
磯右　悴の心が直らぬ故、
島藏　何とおつしやります。
磯右　今日持つて來た此の金は、（ト四邊へ思入あつて、）盜んだ金であらうがな。
島藏　え、（トぎつくり思入合方きつぱりとなり、）以前が以前の島藏故、お疑ひもござりませうが、左樣な金ではござりませぬ、今も申し上げます通り、外國人の贔屓になり、買物方を引受けて一切致してをりますが、日本人と事替り外國人は腹が大きく、まだ新參の私へ千圓金を貸して下され、そちも商法するがよいと、許しを受けて先達て生絲を千圓買ひましたが、間もなく非常に直が上り、わづかな内に三百圓思はぬ利益を得ました故、是は天より賜物と存じまして御恩送りに、持

つて參つた三百圓、不正な金ではござりませぬ。

磯右 いや／＼それは呑込めぬ、外國人がどの位腹が大きなものだとて、昨日抱へた奉公人に今日千圓の大金を、よもや貸しは致すまい、何故さういふ身分になつたら、やうやく人に成りましたと、早く知らしてよこさぬぞ。

島藏 さあ、それは。

磯右 昔と違つて郵便で、手紙を出せば四日か五日で、便りの出來る世の中に、なぜ知らしてはよこさぬぞ。

島藏 さあ。

磯右 外國館へボーイにはひり、主人の氣に入り番頭に取立てられて斯う／＼と、最初からの手續を知らしてよこした上ならば、嘘でもまことゝ思ふ故、志しの此金を貰ふまいものでもないが、今日出し拔に歸つて來て、土產にくれた三百圓、まことのことでも嘘だと思ふ、貧乏暮しはして居れど、人樣の物は箸片々盜んだことのない磯右衞門、不正の金は望みでない早く持つて歸りをれ。

〽包を取つて投返せば、（ト金包を島藏の前へ投付ける、）

島藏 すりや此金を親父樣には、不正の金とおつしやりますか。

磯右　しかと其方の手に入つた不正であらぬ證據が無ければ、此の三百圓は受けられぬ。

島藏　折角此の身の御恩返しと、思つた金も水の泡、はて是非もないことだなあ。（ト當惑の思入）

磯右　これ娘、そちが貰うた其の金も、兄へ返してしまふがよい。

お濱　父さんのお詞故、折角下さいましたけれど、餘儀なくお返し申します。惡う思うて下さんすな。

ト島藏の前へ包を出す。

島藏　正路の金に相違なけれど、差當つて是れといふ證據がなければ仕方がない、一度歸つて確とした證據を持つて出直さう。

お濱　わざ〳〵おいでなさんしたに、父さんの機嫌が惡く、お氣の毒でござりまする。

ト島藏ぢつと思入あつて、

島藏　是に付けても人間は、正路に心を持たねばいけぬ。一旦惡事をしたばかり、見繼ぎの爲めに持つて來た、札も今では反故同然、是皆我身がなした科、人を恨むところはない。

へ先非を悔いて島藏が手を拱いて默然と、暫し詞は荒磯の、濱邊傳ひに岩松が杖に縋りて立歸り、

ト此内島藏腕組をなし、ぢつと思入、花道より以前の岩松杖に縋り、びつこを引きながら出來り、

岩松　おぢいさん、今歸りました。
磯石　おゝ、岩松歸つたか。
お濱　これ、父さんがござんしたぞ。
岩松　えゝ、おとつさんがおいでだと。

〽聞く嬉しさに躓いて、はつとばかりに打轉べば、

ト岩松嬉しき思入にて、ツカ〳〵と內へはひり、躓きてばつたり轉ぶをお濱介抱して、

お濱　あゝ足の惡いに、あぶないわいの。（ト岩松這ひ寄り、）
岩松　おとつさん、よくお歸りでござります。
島藏　おゝ岩松か、爰へ來い、見違へる程大きくなつたな。
岩松　お前樣もお變りなく、お嬉しうござります。
島藏　三年逢はぬ其內に、大層行儀がよくなつた。
お濱　此一二年は學校でも、試驗の度每及第して、何時も甲の御褒美を貰ひ、今は一級になつてぢやわいな。
島藏　それといふのも一方ならぬ、親父樣の御丹誠、有難うござります。

お濱　おとつさんに其方の書いた、お清書をお目に掛けや。

岩松　はい。

〽はいとばかりに岩松が、足を引いて立上れば、（ト岩松びつこを引て立上るを、島藏見て、）

島藏　や、そちは足を何うしたぞ。

岩松　さあ、是れは。

磯右　島藏そちから預かつた、此の岩松を不具にして、まことに己が面目ない。

島藏　どうして忰は此樣な、びつこにはなりましたぞ。

〽問はれて親父は吐息をつき、（ト磯右衞門思入あつて、）

磯右　しかも先月のことであつたが、研ぎ上げた出刀庖刀を、下へ置くのもあぶないと、ちよつと棚へ上げたのを、取紛れて忘れてしまひ、其の晩猫が鼠を追掛け、棚から落した庖刀が、下に寐て居た岩松の足へ當つて思はぬ大疵、筋を一本切つたので、たうとうびつこにしてしまつた。

岩松　もう痛くはござりませぬが、まだ結へてをりまする。（ト左の足を白布で結びあるを見せる、）

島藏　それはとんだ怪我をしたが、幾日のことでござりました。

磯右　幾日の晩であつたけな。

お濱　あい、二十日の晩でござりました。
島藏　すりや先月の二十日の晩、
〽胸にぎつくり島藏が、（ト島藏思入あつて）
して刻限は、何時であつた。
お濱　十二時前でござりました。
島藏　すりや先月二十日の晩、十二時前であつたとか。
〽扨は其夜に福島屋の主人へ疵を負はせたる酬いなるかと後悔なし、（ト島藏宜しく思入あつて）
あゝ惡いことは出來ぬなあ。
磯右　なに、惡いことが出來ぬとは。
島藏　悴が思はぬ其の怪我は、わしがさしたのでござりまする。
磯右　合點の行かぬ其の詞、
お濱　兄さん、お前がしたことゝは。
岩松　どういふ譯でござりまする。
〽言ふに島藏門口の外を窺ひ座をしめて、（ト島藏門口より外を見て、元の所へ住ひ）

島藏　此身の懺悔一通り、親父樣も妹も篤と聞いて下され。（ト 誂の合方になり、）人に成らうと東京へ參りましたが知邊はなく、曖昧宿の口入や安泊へ泊り込み浮々月日を送る內、二枚の着物は一枚賣り鰹と共にわた拔の袷も光る身の垢に、どうで穢れた體故又竊盜を初めた所、間もなく取られて八十日苦役の內に兄弟の緣を結んだ喰詰もの、奥州無籍の松島千太と滿期で出てから言合せ、大きな仕事をしたらば止さうと、二十日の晩に淺草で質屋の內へ忍び込み、刄物で主人を脅し付け引攫つたる金包みを、明けて二人がびつくりしたは、十圓札でしかも千圓、思ひがけねえ大仕事、爰らが盜みの止め所と、五百圓宛二つに分け、千太は奥州私は播州右と左へ別れたが、故鄉へ飾る身裝を拵へ、再び盜みは止めようと心を淸めて伊勢へ參り、京大阪から明石へ來て久し振にて親父に逢ひ、不孝の詫に持つて來た、三百圓も盜み物と見透されたでぎつくりと、轟く胸へ又候や此岩松が足の怪我、千圓盜んだ其時に支へる主人が向う脛、引拂つて逃げましたが、時日も違はぬ先月の、しかも二十日の十二時前。

磯右　え。

島藏　親の惡事が忽に、我子に報ふ悴が怪我、惡いことは出來ませぬ。

〽先非を悔いて島藏が、懺悔をなせば聞く親は、身の行末をかこち泣き、

磯右　扨こそ己が持つて來た金は盜みし金なるか、其の根性が止まざれば生涯柿の仕着を着て、土を擔がにやならぬぞよ。（ト磯右衞門額へ手拭を當てゝ泣く、岩松思入あつて、）

岩松　これお父さん、子として親を恥しめるは、天の道に缺けますが、

〽お前は學問せぬ故に、親に孝行することを御存じなければ是迄に、おぢい樣に御苦勞をお掛けなさるを子心にも、

濟まぬ事となり替り、孝行しようと思へども、

〽生れも付かぬ此の不具、お年取られたおぢい樣や年端も行かぬわたしをば、不便と思召すならば、

盜を止めて下さりませ。

〽縋り歎けは恩愛に、情を知らぬ强盜も胸に迫りて涙に咽せ、

ト岩松宜しくこなし、島藏せつなき思入あつて、

島藏　おゝ其の恨は尤もだ、今も手前が言ふ通り、己が育つ時分には、學校などゝいふものは話しに聞いたこともなく、漁夫の餓鬼が手習は無駄なことだといふ中で、親のお蔭で寺屋へ行き、先づ商賣往來迄やつとのことで上げたれど、童子教さへ習はねば、五常の道を知らねえから親が勝手で

拵へた子だ、孝行するにやァ及ばねえと己が勝手に理窟を付け、親を親とも思はずに、實に己は不孝をした、手前などは開明の此の結構な世に生れ、物の道理の分かるのは、何れの果も學校で子供が敎を受ける故、こんな有難い事はねえ、誰に異見をされるより手前に言はるゝ此異見は、

〽棒鎖の責にあふよりも、胸にこたへる身の苦しさ。（ト島藏思入あつて、）

向後盜みを止めるから、己に替つて親父樣へ長く孝行してくりやれ。

〽手を取交し親と子が、暫し淚にくれにける。

岩松　そんなら是からふッつりと、盜を止めて下さりますか。

島藏　むゝ、やめなくッてどうするものだ。

お濱　おゝ岩松、よく言つた、其方の異見で兄さんが、盜みを止めると言はしやんすれば、こんな手柄なことはない。

磯右　まことに止めることならば、盜みし金を先へ返し、其身の罪を名乘つて出ろ。

島藏　故鄕へ飾る身裝を拵へ百圓足らず遣ひましたが、持つて來た三百圓にまだ百圓ござりますから、もう百圓足しますれば、五百圓になりますから、是から直に東京へ歸りまして死に身に稼ぎ、不足の金が調へたら先方へ返して警察署へ、强盜せしを自首なして、上の仕置を受けませう。

へ親子囁く門口より內の樣子を立聞く沖藏、妹はびつくり立掛れば、見付けられじと逃行けり。

ト此以前下手より以前の沖藏忍び足にて出來り、門口より窺ふ、お濱是を見てびつくりなし、門口へ行く、沖藏下手へ足早にはひろ。

お濱　もし兄さん、靜にしなさんせ、今門口から沖藏が樣子を聞いて居りました。

島藏　なに沖藏が聞いて居た、して其處いらにまだゐるか。

お濱　私が門を覗いたので、びつくりなして蘆原の蔭へ逃げて行きました。

磯右　それは大變彼奴めは、こつちの內に遺恨があればそちが惡事を警察署へきつと知すに違ひない。

島藏　訴へられては五百圓の、金を返すに都合が惡い、少しも早く逃げませう。

お濱　それはお名殘惜しけれど、

島藏　長居をすれば身の破滅、

お濱　まだ種々のお話あれど、

島藏　眉に火の付く此急場、是でお暇致しまする。

磯右　所詮陸では追手の者に、捕へられるに違ひない、濱邊へ行つて漁船雇ひ、神戶迄乘付けろ。

島藏　承知しました。
岩松　すりや父さんは是から直に、
島藏　長く居られぬ己が體、
岩松　本意ないことでござりますな。（ト岩松島藏に縋り泣く。）
磯右　おゝ、そちよりか此親が、どの位本意ないか、知れぬけれども是非がない。
お濱　せめて今宵一ト夜さと、
磯右　留めたい所をせり立つて、歸すも其身を思ふ故、
島藏　左樣なれば親父樣、お達者で居て下さりませ。
磯右　そちも無事で居てくりやれ。
島藏　はツ、（ト島藏立掛る。）
岩松　もし、とゝ樣。
〽縋り付かれて島藏が、見合す顔が親と子の是が別れとなる鐘に、心せかれて振拂ひ、
ト島藏岩松宜しく愁ひの思入あつて、時の鐘、島藏振拂ひ、
島藏　怪我をするなよ。

〽跡をも見ずに氣強くも、濱邊をさして急ぎ行く。

ト波の音ばた〳〵にて島藏カバンと蝙蝠傘を持ち逸散に花道へ入る。岩松泣伏す、お濱は門口より見送る、磯右衛門は岩松を介抱しながら、

磯右　お濱、もう行つたか。

お濱　一もくさんに行かしやんしたわいな。

岩松　もう父さんには逢はれませぬか。

磯右　いや、逢はれぬことはないけれど、どうで親父は是から懲役、十年立たずば逢はれまい。

岩松　悲しいことでござりますなあ。

〽今更何と岩松が、涙に暮るゝ門口へ、立歸つたる沖藏が、

ト波の音になり、下手より以前の沖藏出來り、

沖藏　親父どん、又來ました。

磯右　おゝ沖藏殿、何しに來た。

沖藏　己の來たのは外でもない、くどい樣だが娘をくれぬか。

磯右　先刻も其方に言ふ通り、聟を取らねばならぬお濱、人の女房にや遣られぬぞ。

沖藏　女房に呉れずば此己を、お濱の聟にしてくれぬか。
磯右　舅の己が氣に入らねば、嫁にも遣らねば聟にも取らぬ。
沖藏　さういふからは島藏に、繩を掛けるが合點か。
磯右　なに、悴に繩を掛けるとは。
沖藏　今門口へ來かゝつて、殘らず聞いた悴が惡事。
磯右　や。
沖藏　それを是から訴人せうか。
磯右　さあそれは、
沖藏　それとも己に娘をくれるか。
磯右　さあ、
沖藏　訴人をせうか。
磯右　さあ、
沖藏　さあ、
兩人　さあ〳〵〳〵。

沖藏　親子返事は、どゝどうだ。（ト磯右衞門思入あつて、）
磯右　其返事は明日の朝迄、どうか待つてくれまいか。
沖藏　いや／＼、明日のことは扨置き、一時の間も待つことならぬ。
磯右　其處をどうぞ、明日の朝迄。
沖藏　えゝしつこい、待たれぬといふに。（ト留めるを振拂ひ、行かうとするをお濱縋り留め、）
お濱　さう言はずと沖藏さん、明日迄待つて下さんせいな。（トぢつと留め沖藏ぐつたりとなる。）
岩松　此間に早う漁船で。
沖藏　や。
磯右　もう大丈夫、落ちたであらう。
沖藏　いや、落ちたと聞いては斯うしちや居られぬ。（ト行かうとするをお濱抱き留め、）
お濱　はてまあ、待つて下さんせいなあ。（ト波の音風の音烈しく、疾風の來た思入。）
沖藏　やゝ、俄に吹來る此疾風。
お濱　海が荒れるか、
岩松　あの波音。

磯右　こりや島藏が乘出しても、

沖藏　沖で難船するは必定。

磯右　いや、案じられる。（ト沖藏行かうとするを、引すゑるを道具替りの知らせ）事ぢやなあ。

ト花道の方へ思入、お濱岩松案じるこなし、波の音烈しく、此道具廻る。

本舞臺一面に波布を張り、後闇おとし、日覆より村雲の張物を下し、浪の音にて道具留る。と雨落より波の張物を出し、上の方へ岩組を出し、總て播州明石浦難風の體、宜しく道具納まる、と床の淨瑠璃になり、

〽實に船中は板一枚下は地獄と、諺に、もれぬ疾風の村雲に忽ち暴風吹起り逆浪高き明石浦、沖に漂ふ漁船も秋の木の葉の散るごとく、見る間に影も荒波に浮きつ沈みつ島藏が船も危く一生懸命、矢聲を掛けて漕來り、

ト此内波の音誂への鳴物にて、上手より誂へ丸物の漁船、是に以前の島藏肌脱尻端折りにて、櫂にて波を切り、波六鉢卷筒ッぽ脚絆にて櫓を押し出來り、文句の内舟動き難儀のこなし宜しくあつて、

島藏　今迄晴れし晴天も、俄に空がかき曇り、思ひがけねえ此疾風、是ぢやあ神戸へ乘切れねえ。

波六　神戸どころか此の濱へ乗付けようと思つても、烈しい風に寄付かれず、今日の天氣は見そこなつた。

島藏　少し風がなげるかと思つて居るに少しもなげず、段々強くなつて來るが、さつきは沖を三菱の蒸汽船が通つたが、今なら助けて貰はうもの。

波六　こいつあ親方地方迄、此の鹽梅ぢやあ乗付けられねえ。

島藏　なに、乗付けられねえことはねえ、力一ぺえやッ付けろ。

波六　合點だ。

ト波の音誂への鳴物烈しく波六櫓を押切る、仕掛にて船動き乗切れぬ思入、波六櫓の早緒が切れ櫓を持つたまゝ波幕の中へ落ちる、波の花ぱつと立ち、島藏びつくりして、

島藏　やゝ、早緒が切れて落こちたか。(ト此時鳴物烈しく、舟動き島藏舟の中へどうとなり呆れし思入)是迄積る身の惡事、爰で舟が覆へり、鮫や鯨の餌食になるとも自業自得、仕方はねえが腰に付けたる四百圓、いつぞや盗んだ福島屋へ返すこともならぬのみか、天下の寶を流すのが如何にしても勿體ねえ、神や佛を願つたところが善人ならぬ惡黨故、助けて下さる氣遣ひねえ、生業づくとは言ひながら、思はぬ疾風で波六が命を捨てたは不便なことだ、何にしろ櫓を流せば、是から先は

風次第、流れるより外仕樣がねえ。（ト又波を切り、）是も惡事の報いなるか。

ト風の音鳴物烈しく島藏凌ぎ兼れ、たぢ／＼として舟より波布の切穴へ落ちる、波の花ぱつと立つ、よき程に島藏ずつぷり濡れて浮上り、舟の小緣へ手を掛けるを木の頭、本水を吹くをキザミ、右の鳴物にて宜しく、

ひやうし幕

三幕目

神樂坂辨天湯の場

望月輝町住居の場

（淨瑠璃）

隣で語る淨瑠璃に

過し其夜を思ひ出

色增艶夕映　（淸元連中）

〔役名――望月輝、松島千太、明石の島藏、辻講師古川辨山、小道具屋藤助、木拾ひ八兵衞。輝の妻お照、お照母猝金お市、おせい、お常、およく等。〕

（辨天湯の場）――本舞臺五間湯の前側、眞中三尺格子窓、下笹らこ板羽目、上の方四尺の潛り付き障子、是へ男湯と記し、此上格子窓下笹らこ板羽目、下の方同じ障子、女湯と記し、此の下上手と同じ本庇、眞中に鐵の針金で釣りし瓦斯燈、上より二階手摺付の前側を下し、下の方九尺庇付一間

の口、雇人請宿百足屋と記しある腰障子、此下三尺戸袋、總て神樂坂邊湯屋の體。下手に長床几を置き、是へお常結び髪着流し前垂掛、女髪結のこしらへ櫛を包みし小風呂敷を持ち、お欲天窓禿げし結び髪、半纏がけ、口入女房のこしらへにて兩人腰を掛け煙草をのみ居る、傍に八兵衞穢き半纏三尺帶木拾ひのこしらへ、明籠の天秤棒へ腰を掛居る、道樂寺の合方木魚の音にて幕明く。

お欲　これお常さん、まあ爰へ掛けて一服おあがりな。

お常　今日は朝から忙しくッて歩き續け立續けでがつかりしましたから、一服呑んで行かうかね。（ト床几へ腰を掛け、）もしをばさん、お前は元淺草の廣小路においでだつたが、あれから直此地へおいでか。

お欲　いえ、去年の六月時分迄車坂に居りました。

お常　さういへば新富町で霜夜の鐘をした時に、猿十郎がお前をしたね。

お欲　安泊りに泊つて居る浪人の子を世話をしたが、それを芝居でしたさうだ。（ト此内八兵衞お常を見て、）

八兵　もし髪結さん、お前さんは淺草においでなさりやあしませぬか。

お常　あい、お察しの通り五月迄、東仲町の福島屋といふ質屋の内に居りましたよ。

八兵　半四郎娘と評判の、いゝ娘のあつた家だね。

お常　よくお前知つておいでだね。

八兵　此間迄大風呂に木拾ひをして居りました。

お欲　ほんに私も廣小路の蓬萊屋に居た時分、よく女中衆を連れて行つたが、彼處の内も潰れたさうだね。

お常　お前も噂にお聞きだらうが、疾からお内が左り前で、無據竹の塚から千圓金を借りた晩に、泥坊が這入つてそれを盜まれ、剩へ内の旦那の左の足を切つて逃げ、やう〳〵疵所が癒つてから、約束をした聟さんを貰ふ其晩杯前に、おそのさんが内を拔出し、言交した六三さんの内へ駈込み、大騷動になつた時、私はそれを執持つた科によつて暇になり、以前髮結をしたことがあつたを幸ひ爰へ來て、此生業を初めたので、どうなりかうなりして居ますが、お内はたうとう潰れてしまひ、今御難儀をなさいますから、御恩送りに朝夕の、お世話を私がしますのさ。

お欲　それは聞くのもお氣の毒だが、何にしろお常さんお前はまことに仕合せだ、凡女のする仕事で、髮結位なものはない、私などの生業も田舍行の曖昧女か、官員さんの後妻か、さういふ口に有付くといゝ金が取れるけれど、一季半季の雇ぢやあ纔一圓で五錢宛だから五圓や七圓の給金ぢやあ高の知れた端た錢、それも每日ありやあいゝが、たまさか取つて日に割ると、たつた二十錢か三十錢宿でも遠いと見に行くのに、下駄の代にも足りやあしない。（ト女湯の内にて、）

お清　御新造さま、おあぶなうござります。

ト誂への端唄になり、女湯の口よりお照着流し、御新造のこしらへにて出て來る、後よりお清下女のこしらへにて浴衣を包みし風呂敷包を抱へ出て來る。

お照　糠袋を持つて來たか。

お清　はい、手拭と一緒に持つて參りました。

お常　是は御新造樣、只今お湯でござりますか。

お照　おゝお常さんか、朝から待つて居たけれど、お前の來やうが遲いから、お湯へ先へ來ましたよ。

お常　ついお晝前立込みまして、お氣の毒樣でござります。明日早く上りませうか。

お照　いえ、今日是から來ておくれな。

お常　畏りましてござゐます。明日何方へぞいらつしやいますか。

お清　明日は新富町へいらつしやいます。

お常　それはお樂しみでござりますな、お前お供でござりますか。

お清　連れて行つてやるとおつしやつたので、今ツから樂みで、今夜大方寐られますまい。

お常　まことにお羨しいことでござります。

お照　どうで棧敷は二間物だから、都合がよくば一緒においでな。
お常　それは有難うござります。(ト お欲前へ出て、)
お欲　御新造樣、此間は。
お照　おゝ口入のをばさんか。
お欲　此間上げました此子は、如何でござります。
お照　まことに氣輕でいゝ上に、器量がよいから給仕をさせるに、綺麗でよいと私より、大層旦那のお氣に入つたよ。
お常　それは御油斷はなりませんぜ。
お照　そりやお前のいふ通り、なかなか油斷はならぬわいな。
お清　御新造樣迄同じ樣に、私をおいぢめなさいますか。
お欲　旦那樣のお手が付いて、お妾にでもお前がなれば、請宿は大仕合せ、お禮が餘計取れるのに、
お清　えゝ、欲張つたことばかり、
お欲　そりやお前知れたこと、欲ばかりで生きて居るのだ。
お照　それではお常さん、きつと來ておくれよ。

お常　只今直あがります。
お照　清や、行かうかの。
お清　さあ、いらつしやいまし。（ト端唄にてお照、お清付いて花道へはひる。）
お常　あの中代地の大工の娘は、お前が世話をしなすつたのか。
お欲　あい、中働きに住はしたのさ。
お常　あの子などこそ旦那を取れば、いゝ金が取れるのに。
お欲　内は世話場の樣だけれど、お袋が堅いので、そんなことはさせねえさうだ。
八兵　今時綺麗な娘を持つて堅い奉公は珍らしい。今の立派な御新造は、髮結さんの勤めて居た、半四郎娘によく似て居るね。
お常　ほんにお前のいふ通り、お園さんに生寫しさ。
お欲　お園さんはどうなすつたね。
お常　六三さんに添はれなければ、死ぬといふので仕方なく、不釣合の大工の所へ、たうとうお遣りなすつたのさ。
お欲　それぢやあ立派な内を捨て、叩き大工の女房に、今ぢやあなつて居なさるとか。

八兵　いや、蓼喰ふ蟲も好き好きだね。

お常　ほんに馬鹿げた話さね。

八兵　どれ、一廻り廻つて來ようか。（ト八兵衞荷を擔ぎ下手へはひる。男湯の内にて、）

千太　なに釣にやあ及ばねえ。

ト前の合方にて男の口より、千太着流し三尺帶駒下駄にて出て來り、手拭を絞りながら、

もし、今女湯から出た御新造は、めつぽふいゝ女だが、ありやあ何處の御新造だね。

お常　あれは此河岸通りで、官員だか士族だか、望月輝といふお方の御新造樣さ。

千太　元は藝者ぢやあなかつたか。

お欲　旅藝者だといふことだが、何にしろ別嬪だから、何處へ行つても賣れるね。

お常　御新造樣といへば、今直に來てくれとおつしやつたを、ついしやべつて居て遲くなつた、どれ早く行きませう。

お欲　又歸りにお寄りよ。

お常　はい、おやかましうござりました。

ト右の合方にて、お常早足に花道へ行き掛け、千太を見て、日外來た泥坊に似てゐるといふ思入。

お欲　お常さん何ぞお忘れか。

お常　いえ、何も忘れは致しませんよ。（ト合方にて足早に花道へはひる。）

千太　今の女は、何處でか己が見たことのある女だが。（ト思入。）

お欲　あれは元淺草の東仲町の、福島屋といふ質屋の內に居た女さ。（ト千太思入あつて、）

千太　むゝ、福島屋の內に居た女か、何だかぢろ〳〵見て行つたが、こいつァうつかり出來ねえわえ。

ト　お欲思入あつて、

お欲　さつき仕ました子守の宿を、帳面へ付けなんだ、どれ忘れぬ內に付けて置かう。

ト　お欲下手の腰障子を明けてはひる。千太四邊を見廻し、思入あつて、

千太　犬も歩けば棒に當ると、何ぞ仕事を仕ようと思つて、爰の湯へ入つたばつかり、思ひがけねえ白川で百圓出して馬鹿を見た、お照の居所がやうやく知れた、あの折德が知らしたので探索掛りに取卷れ崖から谷へ飛込んだが、運よく何處も怪我をせず、たうとう夜通し逃げおふせ、歸り道は日光から筑波を廻つて潮來へ行き、遊びてえ程遊んだが、何處へ行つても東京位金になる所がねえから、先月此地へ歸つて來て安泊りとけいづ屋を下宿に仕馴れた挊ぎを初め、今日は千住明日は廓と、所を替へて每晚遊ぶが、お照位の女がねえから、あれが行方を搜して居たに思ひ掛な

く出合つたは、金を拾つた樣なものだ、是に付けても淺草の山で別れた明石の島藏、こつちに居る内二人で泊つた安泊りやけいづ屋へ立廻つて來ねえからは、まだ東京へ出て來ねえか、何をするにも相手はなく、生中肚胸の惡い奴とうつかり組むとばれの元、早く兄貴に逢ひてえものだ、(ト懷へ手を入れ思入あつて)おゝ二階の戸棚へ守を忘れた、どれ上つて取つて來ようか

ト端唄になり、千太男湯の口へはひると、花道より島藏、着流し羽織駒下駄商人のこしらへ、跡より藤助羽織着流し、低き駒下駄、風呂敷包の短刀を持ち出來り花道にて、

藤助　もし、其處へおいでなさいますは、明石屋さんではござりませぬか。

島藏　おゝ、お前は田町の刀屋さん、何處へおいでなさいます。

藤助　今お宅へ上りましたら、たつた今神樂坂へおいでなすつたとおつしやるから、お跡を追掛けて參りました。

島藏　急なことでございますか。

藤助　ちよつとお話がござります。

島藏　何の御用か知らないが、向うへ行つて聞きませう。

ト兩人舞臺へ來り、藤助床几を前へ出し、

藤助　まあ是へお掛けなされませ。

島藏　爰へ掛けてもようござりますか。

藤助　是は私が心易い請宿の床几だから、掛けても宜しうござります。

島藏　それでは御免下さりませ。（ト兩人床几へ掛け合方にて、）して私へ御用とは。

藤助　いえ、外のことではござりませぬが、お前さんから拵をお頼みなされた、此の脇差、（ト風呂敷を明け中より拵へ付の脇差を出し、）是は勝れた業物でござりますが、御存じでござりますか。

島藏　實はそれは此の血、いや、親類の士族から買つてくれと頼まれて、無據買つた脇差、よいか惡いか存じませぬ。

藤助　銘はござりませぬけれど、餘り勝れし金色故、何でも是は名作と鑑定をしましたから、さる目利に見せましたら、無銘ながら正眞の五郎入道正宗だと申しますので私も、びつくりなして歸りがけ此河岸通においでなさる、望月輝樣といふ古物好のお得意へちよつとお見せ申しますと、假令無銘でも正宗なら求めたいから先方へ話して見てくれとお頼み故に、失禮ながらお話を致しますが、昔と違つて平民では、今は差されぬ此脇差、何と直をよく先方へ、お賣りなすつては如何でございます。

島藏　おつしやる通り平民が今差す事はない脇差、元よりそんな名作とも知らずに買つたものなれば、隨分賣つてもよいけれど、銘はなくとも正宗と聞いては何だか賣惜しい。

藤助　いや、御尤もでござりますが、銘があれば正宗なれど何ぼ出來が優れても、無銘の物は證據にならず、向うが惚れて居りますから、賣つた方がようござりますぜ。

島藏　して先方では何の位に、あれをお買ひなさる氣だ。

藤助　百圓ならば買ひたいと申されましてござりますが、極くほしい樣子故、もう二三十圓は出しましても引取りますでござりませう。（ト島藏思入あつて、）

島藏　何れ篤と考へて、後からお返事を致しませうから、內へ持つて行つて下さいまし。

藤助　よく考へて御覽じませだが、大概ならば思ひ切つてお讓りがようござりませう。

島藏　何れお返事を致しませう。

藤助　是れが出來ればわたくしも、お禮にあり付きまするから、何分お賴み申します。

ト右の合方にて、藤助上手へはひる。島藏四邊へ思入あつて、

島藏　あれはいつか廣小路の天道干にあつたのを、二圓半で買つた脇差、世にも稀なる正宗とは、ほんに夢にも知らなんだが、あれが百圓に賣れるなら、こんなに苦勞をしねえものを、やつとのこと

で五百圓、やう〳〵金が出來たれば、假令千圓揃はずとも、早く返してしまひたいものだ。いや其晩更けて淺草の、山で別れた松島千太、再び出逢ふ約束の九月も最早末になつたが、まだ東京へ出て來ねえか、己と逢つて酒と女で身を持つことが出來ねえから、所詮彼奴は止めやあしめえ、旅を稼いで道中で、若し御用にでもなりやあしねえか。（ト思入。男湯にて、）

千太　姐さん、又明日來るよ。（ト合方にて男湯の口より以前の千太出來り、）　あんまり娘の世辭のいゝので、又二十錢損をした。（ト行きかけるを島藏見て、）

島藏　や、千太ぢやあねえか。

千太　おゝ、兄貴か。

島藏　それぢやあ手前も東京へ、

千太　約束通り出かけて來た。

島藏　よく間違へずに出て來たな。

千太　何にしろお前も達者で、

島藏　手前も無事で、目出度かつた。

千太　まあ兄貴、爰へ掛けねえ。（ト合方きつぱりとなり、兩人床几へ掛け思入あつて、）

島藏　さうしてあれから松島の、親の所へ出掛けたか。

千太　久し振で行くことだから、すつかり身裝をこしらへて、先づ銀行の手代と化け、白川迄行つた所少し風邪氣で十日ばかり逗留して居る其内に、伯父御と村の者に逢ひ、樣子を聞くと去年の秋親父も老母も死んで仕舞ひ、跡に身寄も何にもねえから、内を疊んで其金を寺へ納めて仕舞つたと聞いて見りやあ行くのも無駄故、明日は直に引かへさうと思ふ其晩拵が知れ、すんでにくれい込むところ、首尾よく其場を逃延びて、歸り掛けに日光から筑波へ廻り鹿島香取潮來迄彼方此方を遊び歩き、約束をした九月故此間こつちへ歸つた來たが、兄貴お前はどうしなすつた。

島藏　己もあれから身裝をこしらへ直に故鄕の明石へ行き、敷居の高い親父の内へ、不孝の詫に三百圓金を持つて行つた所、親父がそれを請けねえのに大きな聲ぢやあ言えねえが、己が惡事を知つた奴が、訴人をすると聞いたから仕方なく〳〵妹や悴に別れて漁場から、舟で神戸へ乘切る途中明石浦で疾風に逢ひ、賴みに思ふ船頭が艪を持つた儘落ちて流され、一人殘つた此己も鮫の餌食になる所運があつてか三菱の蒸汽船に助けられ、危い所を恙なく、此の東京へ歸つたから、爰らが人の氣の付く所と生れ替つた心になり、今は堅氣の小商人、若い者と小僧を使ひ、小賣酒屋の見世を出した。

千太　それぢやァあれぎり拵ぎはしねえか。
島藏　さつぱりと止めてしまつた。
千太　小商ひをするからは、定めて女房を持つたらうな。
島藏　まだ女房は持たねえが、堅氣になつて酒見世を出したことを郵便で親父へ知らしてやつた所、丁度幸ひ妹が内に居られぬことがあつて、倅を連れて明石からわざ〳〵此方へ出て來たから、女房替りに飯を炊かして、水入らずでやつてゐるのだ。
千太　そりやあ何にしろ仕合せだが、いゝ商法に當るかね。
島藏　大した儲はないけれど、倦きずにやるのが商ひだから、辛抱してやつて居ます。
千太　人に勝れたいゝ腕を持つて居ながら小賣位な、商法するのは馬鹿げて居るぜ。
島藏　其替り一生涯、土を擔ぐには及ばねえ。
千太　して、何處へ見世を出したのだ。
島藏　神樂坂下の左側で、明石屋といふ紺暖簾のかゝつてゐるが目印だ。
千太　何れ改めて尋ねて行かう。
島藏　内へ來るなら妹が、己と違つて堅氣だから、拵ぎの話しはしてくれるな。

千太　そりやあ己も承知してゐる。

島藏　それぢやあ千太。

千太　近い内に尋ねて行かう。

ト端唄になり、千太思入あつて花道へはひろ、島藏跡を見送り思入あつて、

島藏　懲役中に懇意になり、血汐を吞んで兄弟の縁を結んだあの千太、逢つたらとつくり異見を言つて止めさせようと思つたが、所詮止めらることぢやァあるめえ。身裝も惡い風體で度々内へ來る日には、遂には世間の目に留り、いつか暴れるは知れたこと、どうか福島屋の行方を尋ね、金を返してしまふ迄、御用の聲を聞きたくねえ。あゝ以前は二となき友達だつたが、今となつては我身の害、飛んだ者と兄弟の緣を結んだ、

ト島藏立上ろ、此時湯屋の内にて、チョン〳〵と木を打つ、

ことだなあ。（トぢつと思入、誂の端唄にて道具廻る。）

（望月宅の場）――本舞臺四間通し常足の二重、柿葺の本庇本緣付、正面上手一間床の間好みの掛物、花入宜しく、眞中太鼓張りの襖出這入りあり、跡腰張根岸土の茶壁、上の方、九尺隣の二階家伊豫簾を下し、隣の境四ツ目垣、下の方丸太の柱上を丸くせし西洋門、跡建仁寺垣見越の松、門の柱

より舞臺迄前四ッ目迄にて見切り、總て望月宅の體。二重へ誂への鏡臺を直し、お照是へ向ひ櫛で鬢をかきゐる、お常は紙で手を拭ひ髪を結び上げし心、お淸くせ直しの金盥櫛など片付け居る、此見得端唄にて道具留る。

お淸　御新造樣、大層今日はよく出來ました。

お照　髷の恰好がいつもよりよく出來た樣だね。

お常　お內と違つて、お芝居へいらつしやいますのだから、念入りに致しました。

お淸　念入りは念入りだけ、まことに綺麗でございます。

お常　明日は何時から新富町へいらつしやいます。

お照　初まりが九時だから、八時を打つと出掛けますよ。

お常　それでは今夜湯へはひつて、おつくりをして置きませう。

お照　もう今日はおしまひかえ。

お常　いえ、まだもう一二軒參りませねばなりませぬ。

お淸　一二軒なら止しになさいな。

お常　そりやなぜでございます。

お清　今日お隣の松本樣へ、濱町の家元が來て、今に淨瑠璃が初まりますす。
お常　それは承りたうございますが、ワキは誰でございます。
お清　家元の獨吟で、三味線は久し振の順三郎が彈きますとさ。
お常　家元さんの獨吟とは、聞事でございますね。
お照　もう今に初まるだらうから、お茶でも呑んで遊んでおいでな。
お常　さういふ事と承つては、仕事はどうでもようございます。
お照　清の親父も今日來ると、淨瑠璃が聞かれたのに。
お清　明日お供のお召物が、間に合はぬといけませぬ故、急いで使をやりましたから、昨日持つて參りました。
お常　お父さんはお達者かえ。
お清　まことに達者でございます。
お常　いつか代地の六三さんの所で、お目に掛つたことがあつたが、なか〳〵おとつさんは氣が若く、二階番でも張る氣があるね。
お清　御存じの通り目尻が下つて、看板に僞なしでございます。

お照　飛んだ氣輕でよいけれど、旦那樣の前などでそんな事を言ひなさんなよ。

お清　是から丁寧に申しますから、御免なされて下さりませ。

お常　つい大工さんが出てなりませんね。（ト奧より下女出來り手を突いて、）

下女　御新造樣、只今お里の御隱居樣が、裏口からいらつしやいました。

お照　なに、おつかさんがおいでだえ。お里といふのも面目ないね。

下女　直にお通し申しませうか。

お照　あゝ、是へお通し申しな。

下女　畏まりました。

お照　辨山さんもいつしよか。

下女　左樣でござります。（ト下女奧へはひる。）

お照　ほんに私のおつかさんも、清が親父と同じ樣に。

お清　お目尻がお下りでござりますか。

お照　それにおの字がいるものかな。

お常　是に似ましたお話がござります、私共の隣の內でゆもじを洗つて干しますと、急に雨が降つて參

つて一つ長屋におの字を付けるお上さんがござりまして、折角おゆもじをお洗ひなすつたに、俄のおふりでお困りなさいませう。
お清　又お常さんの嘘ばかり。
お常　いえ〳〵嘘ぢやあござりませぬが、ゆもじの洗濯におふり〳〵〳〵はよいぢやあござりませぬか。
お照　ほゝゝゝゝ。
ト笑ふ、合方きつばりとなり、奥より序幕のお市紋付の羽織、辨山も羽織にて出來り、
お市　お照、久しく逢はなんだな。
お照　おや、おつかさんに辨山さん、よくおいでなさいました。
辨山　あんまり御無沙汰を致しましたから、御伺ひに上りました。
お清　こちらへお通りなさりませ。
お市　それぢやお邪魔にならない所へ、御神輿を据ゑませう。（トお市、辨山上手へ住ふ、お常見て）
お常　おや、お前さんはよく見世へ曲物においでなすつた、辨山さんぢやあござりませぬか。
辨山　おや、お前は福島屋のお常どんか、いつ髪結を初めなすつた。
お常　彼處の內を出ましてから、初めましてござります。

辨山　いゝ生業を初めなすつたが、定めて御亭主を持ちなすつたらうね。

お常　いえ、まだ一人でござります。

辨山　まだ一人とは氣が惡いが、さうしてお前の內は何處だ。

お常　つい神樂町一丁目でござります。

辨山　一丁目は何番地だ。（ト　お市悋氣の思入にて、）

お市　そんなに委しく聞なくつてもいゝに。

辨山　聞いたつていゝぢやあないか。

お市　お前が只の人ならいゝが、女と見ると目がないからさ。

お淸　おや、それではあなたも親父同樣、女がお好きでございますか。

辨山　それは言はずと知れたこと、貴顯紳士を初めとして下等社會の我輩迄、世界に好かざる者はなしだ。

お常　ほんに女流行でござりますね、ほゝゝ。

お照　今日は何ご辨山さん、面白いものを一くさり、讀んでお聞かせなさいましな。

辨山　どうして〳〵、此方樣で辻講釋の私が、何を辯じられませう、只おつかさんの後に付いて女の

お話でもして、ちよつとお座を持つばかり、講釋などは出來ませぬ。
お市　それはさうと、旦那はお內か。
お照　はい、お內でござりますが、何ぞ旦那に御用かえ。
お市　ちつとお願ひがあつて來たのだ。
お照　なに、お願ひとは。
お市　外でもない、小遣がなくなつたから、貰ひ度いのだ。
お照　此間おいでの時、來月分の小遣を貸してくれとお言ひだから、二月ぶり上げたのに、もうあれが無いのかえ。
お市　もう無いかといつたつて、何も無駄遣ひに遣やアしねえ、家主に店賃の借が五月溜つて居る上、一圓死置買の米が三度に酒屋に薪屋、こざ〳〵借りを殘らず返し、質に入れて置いた袷を二枚出したので、十錢札も殘りはしねえ。
お照　それでは又もう一月も、貸してくれとお言ひのか。
お市　一月位借りたとて、芝居の一度も見に行けば直に無くなつてしまふから、又借りに來にやあならねえ、そつちも聞くのが厭だらうが、こつちも言ひに來るのが厭だ、年跨ぎになるけれど、來年

の二月迄、三十圓貸してくんな。

お照　此間のが濟んだらば、お願ひ申して上げようけれど、まだそれが濟まぬ内は。

辨山　なるほど度々のことなれば、おつしやり憎うござりませうが、今度は月の切れる迄決して跡は上りませぬ、保證人に私が一緒に上りましたから、何卒旦那へ今一度お願ひなすつて下さりませ。

お照　何ぼ氣のいゝ旦那でも、先達から度々故、今日はお願ひ申されない。

お市　なに言はれねえことがあるものだ、手前を遣る時十圓宛月々送る約束は、證書を取つて極めたのだ、三月や四月前貸に貸したつていゝ譯だ、おらァ手前のお袋だぞ、二等親でも權妻なら召仕のことだから、言はずと旦那は主人故、達てとも言はれねえが、結納貰つてやつた娘、假令身分は違ふともおらァ輝殿の親だぞ、親が今日喰ふに困り路頭に迷ふを子の身として、餘所に見ちやあ濟むめえぜ、手前の口から言はれにやあ己が直に旦那に逢つて、金を借りて行かにやあならねえ。

ト大きな聲をするを、辨山留めて、

辨山　これさおつかァ、靜にしねえ、他人も側に聞いて居るに、大きな聲をしなさんな。

お市　大きな聲をしたくもねえが、切ねえ中で諸藝迄仕込んで手前を育つたは、此方が年を取つた時世話にならう其の爲めだ、親を親と大切に敬ひせえすりやあ言やあしねえ、つッ慳貪に物を言ふか

ち、つい大きな聲をするのだ。

辨山　まあ己に任して靜にしねえ。(トお照に向ひ、)もしお照さん、嘸御迷惑でござりませうが、もう此後來年迄御無理は申しませぬから、旦那へお願ひ下さいまし。

お照　お前さんがさうお言ひなら、お話し申して見ませうが、今お書物をなすつてだから、後迄待つて下さいまし。

辨山　おゝ待ちますとも／＼、何時迄でもお待ち申します。

お市　しかしまじ／＼待つて居るも、退屈でいかねえから、其内一本付けて貰はう。

辨山　なるほどそれはいゝお捌き、ゆつくり一杯頂戴致さう。

お市　お照、何ぞないか。

お照　晝間のお肴がありますから、淸に出させて上げませう。

お淸　車海老の鬼がら燒と、こちの煮たのがござります、あれをお上げ申しませう。

お市　肴も何もいりやアしねえ、ちよつと香々があればいゝのだ。

辨山　實はさつきから咽ぐびだから、早く付けて下さいまし。

お淸　畏りました。

辨山　然しさしでは旨くない、お常さんお前もおいでな。

お常　酒外れはしないものだから、お相でも致しませう。

お市　それぢやあおてる、

お照　ゆつくりとおあがりなさい。

お市　どれ、跡の見られぬ酒を呑まうか。

ト端唄になり、お市、辨山、お常、お清付いて奥へはひる。跡合方彈流し、お照思入あつて、

お照　惡い人でも實の親、長い年月育てられた恩がある故仕方もないが、何ぼ仕送る約束でも、十日にあげず無心に來て、氣隨氣儘に言ひたいがい、何の小言もおつしやらぬが旦那へ對して氣の毒で、實に此身を切らるゝ思ひ、末始終はおつかさん故私が愛想を盡されて若しも離縁になつたらば、又もや元の旅藝者、彈く三味線の棹よりも心細い私が身の上、絃は切れても切ることのならぬ義理ある親子の緣、苦勞の絶えぬことぢやわいな。

ト お照ぢつと思入、知らせに付き上手隣りの二階の簾を巻上げる。爰に清元連中羽織袴にて居並び、前彈なしに一中模樣獨吟の淨瑠璃になる。

上るり〽雁金を結びし蚊屋も昨日今日、殘る暑さも忘れてし肌に冷たき風立ちて、晝も音を啼く蟋

蟀に哀れを添うる秋の末、（トお照煙草をのみながら是を聞きて、）

隣のお内へ濱町の家元が來て、淨瑠璃があると聞いたが、もう初まつたか、常ならどんなに面白くよい樂しみをする所、折も折とて母さんが無心に來たので氣が揉めて、聞くことさへもならぬわいな。

〽我身一ツにあらねども憂にわけなきことにさへ、露の涙の飜れ萩、曇り勝ちなる空癖に、夕日の影の薄紅葉、梅も櫻も色替へる中に常磐の松の色、

ト此内お照思案に餘る思入にて、涙を拭ひ宜しくこなし、よき程に奥より序幕の望月着流し好みのこしらへにて出來り、ちよつと淨瑠璃を聞く思入あつて、

輝　隣の主人が贔屓だから、お藥かと思つたら、今日は太夫の淨瑠璃だな。

お照　おや、旦那にはいつの間に、爰へおいでなさいました。

輝　橋場から頼まれた大幅を書いたので、暫し勞れを休めようと、筆と煙管を取替へた所へ淨瑠璃が聞えた故、幸ひ鬱氣を散ぜん爲め、爰へ一段聞きに來たのだ。

お照　丁度宜しうござりました。今初まつたばかりでございますが、いつもながら家元はいゝ聲でござりますな。

輝　當時獨吟で語るのは、延壽太夫に限る樣だ。

お照　夕立なども獨吟で、語つたのでござりますね。

輝　あの淨瑠璃は短くて、だれる所がなくていゝ。

お照　ほんに夕立と申しますれば、あの文句にもござりますが、わたしや貴方に白川で危い難儀を助けられ、其の晩お宿へ一緒に參り、御酒のお相手した後で、貴方に手をば取られし時、「紅癡うつる顏の色」で、どんなに嬉しうござりましたらう。

輝　あの前一度金花樓へ呼んだことがあつたれど、側の人目にしげ〳〵とそなたの顏を見なんだが、助けた晩に差向ひ初めてとつくり見てびつくり、手に持つ煙管をうつかり落し、こんな女が世にあるものかと、馬鹿なことだがぞつとするほど、其艷色に惚込んで酒に醉つたる體にもてなし、手を取る迄の心配は、實に胸がどき〳〵した。

お照　そりや貴方より私こそ。（ト望月を見て恥しき思入、クドキ模樣になり。）

〽まだ其時は卯の花の夏の初めに白川の關はなけれど人目をば、厭ふ隔ての旅の宿飛かふ蝶に燈火の消えて若葉の木下闇、思はぬ首尾にしつぽりと結びし夢も短夜に覺めて恨みの明の鐘、（トお照クドキ模樣の振宜しくあつて、）

丁度幸ひ母さんが來て居た故に前借を、返して直に東京へ貴方と二人相乘の、車で歸るわたしの嬉しさ。

輝　浮いた家業に珍らしい堅い心の其方ゆゑ、表向妻となせしが、朋友共の受もよく、先づ持當てしと思ひしに、玉に疵なはお袋だ。

お照　それ故まことに貴方へ對し、お氣の毒でなりませぬ。

輝　何の氣の毒なことがあるものか、斯うして緣を結ぶからは己が爲にも姑は親、決して遠慮するには及ばぬ、聞けば今し方來られたさうだが、大方今日も無心だらうな。

お照　おつしやる通り今日も又無心に參りました故、どうも貴方へ濟みませぬ。

輝　濟むも濟まぬもあるものか、無心といふも十圓か高が二十圓のことだらう、機嫌よく貸してやるがいゝ。

お照　そんならお貸し下さりますか、えゝ有難うござります。（ト端唄模樣になり、）

〽空ほの暗き東雲に木の間隱れの時鳥、鬢のほつれを搔上げる櫛の雫か雫か雨か、濡れて嬉しき朝の雨、（ト此内兩人淨瑠璃を聞く思入、）

あのまあ端唄の意氣なこと、どうしてあゝいふ聲が出るか、嘸女が惚れませうね。

輝　割には情人が出來ないさうだ。

〽早夏秋もいつしかに、過ぎて時雨の冬近く散るや木の葉のはら〳〵と、風に亂るゝ荻芒、

ト此内花道より、以前の千太出來り、花道にて向うだといふ思入あつて、舞臺下手へ來り、

千太　さつき神樂坂の湯屋の前で、聞いたは慥に爰の內、なるほどこりやァ立派なものだ、こつちも一番慇懃に、案內をしてやらう。（ト門の傍へ來て、）賴まう〳〵。

輝　お〻表へ誰か案內がある。

お照　清を呼んで取次がせませう。

ト煙草盆の引出しより驛路の鈴を出し鳴らす、直に奥より以前のお淸出來り、

お淸　はい、御用でござりますか。

お照　表へ誰方かおいでなすつた。

お淸　はッ、左樣でござりますか、お取次を致しませう。（ト下手へ來り門を明け、）何方からおいでなされました。

千太　奥州の白川から、千太と申す者が參りましたと、御新造樣へおつしやつて下さりませ。

お淸　畏まりました。（トこちらへ來る、）

お照　お使は何處からだ。

お清　はい、奥州の白川から千太といふ者が參りましたと、御新造樣へ申上げてくれと、申しましてござりまする。

お照　え、（トぎつくり思入あつて）それでは爰へ尋ねて來たのか。

輝　お照、知つた者か。

お照　はい。（ト俯向く）

〽草の主人は誰ぞとも、名を白菊の咲出て、匂ふ此家ぞ、

ト此内千太門の内へはひる、お照顔見合せびつくり思入あつて俯向く。三重にて清元連中を消す。

千太　まつぴら御免下さりませ。

お照　千太さんか。

千太　お照さん、久し振りで逢ひましたね。

ト誂への合方になり、千太下手へ住ふ、お照思入あつて、

お照　お前は達者で居なさんしたか。

千太　あの折谷へ飛込んで助かる迄も大怪我と、思ひの外に疵もなく、あぶねえ命を拾つた故、日光山か

ら筑波を掛け土地に名代の雷と共に諸方をごろ付き歩き、やう〳〵先月此方へ出たが、さうしてお前は白川から、何時此地へ出て來たのだ。

お照　わたしもあの折旣のこと命を捨てる所であつたが、危い所へ此旦那が、お通りなされてお助け下され、まだ其上に前借も綺麗に濟まして東京へ、旦那と一緒に歸りました。

千太　それぢやあ危い難儀をば助けられたが緣となり、御新造樣になつたのか、なるほど女は氏なくて玉の輿の立身出世、何にしろ目出てえことだ。

輝　何れの人か存ぜぬが、お照が懇意とあるからは、茶でも早く進ぜぬか。

お淸　畏りました。

千太　いえ其のお茶には及びませぬ、お火を一つ貸して下さいまし。

お淸　さあ一ぷくお上りなされませ。（ト千太の前へ煙草盆を出す、千太思入あつて、）

千太　お照さん、お前の煙管を貸してくんねえ。

お照　いえ、此の煙管は。（ト煙管を脇へやる。）

千太　何も身裝が惡いといつて、穢ながるには及ばねえ、旦那の前では言憎いが白川に居た時分には、一つ物を半分宛喰つたことがあるぢやあねえか。（トきざにいふ、お照思入あつて、）

お照　成程私が白川に、藝者をして居た其時に、お前に呼ばれて十日程座敷へ出たことはあるが、口廣いことだが、遂に一度私しや曖昧なことをした覺えはありませぬ。

千太　そりやあ今更知らねえと、しらを切られても證據はなし、其晩並べた枕より外に知つて居る者はねえから、知らねえと言はれても仕方がねえが、お前の母が東京から金の無心に來た時に、出來ずば旅の娼妓にすると退引ならねえ場合を見兼ね、百圓出してやつたのは、よもや忘れはしめえね。

お照　むゝ、（トおてるぎつくり思入あつて、）其時お前がおつかさんへ、百圓渡しなすつたは忘れはしない、覺えてをります。

千太　通り一遍の旅藝者に、たゞ百圓といふ金を遣ります者がありませうか、枕を並べて寐た上で、末は夫婦にならうといふ堅い約束しましたから、百圓金をやつたのだ、それを知らねえと言はれては默つて聞いて居られねえ。もし旦那、わつちが虛言を言はねえ證據は、是でお察し下さりませ。

ト輝思入あつて、

輝　いかにもこなたのいふ通り東京ならば知らぬこと、只一通りで呼んだ藝者に、百圓遣らう譯がない、して又旅で此照と、言交したと言はるゝには、何ぞ證據があつてのことか。

千太　其の證據はお照から、指輪を貰つて置きました。
お照　え。（ト悄りする、千太左の藥指へはめし、誂への指輪を見せ、）
千太　しかも銀臺金鍍金で、丁子車に照といふ名前を彫つてあるのが證據。
お照　それはお前が其折に逢てほしいと言はしやんす故、無據上げた指輪、それが證據になりますものか。
千太　是が證據にならねえとは、よくそんなことが言はれたことだ、言交した其時に後日の證據に取交した、ダイヤモンドのはひつてゐる、金の指輪を持つて居ねえか。
お照　わたしやお前に指輪などを、貰つたことはありませぬ。
千太　貰はねえとは情ねえ、かういふ旦那が出來たから大方己が遣つた指輪は、小間物屋へでも賣つてしまひ、今知らねえといふのだらう。え丶騙されたか口惜しい。
（ト千太わざと悔しき思入、お照も悔しき思入にて、）
お照　口惜しいのはお前より、私がどんなに口惜しいか、身に覺えもないことを、指輪をやつたと言掛けられ、旦那の前へ言譯がない。
千太　なに、言譯のねえことはねえ、以前言交した男だと、言つてしまへば濟むことだ。

お照　また〳〵そんなことを言つて。(トお照立掛るを輝留めて、

輝　これお照、靜にしやれ、覺えがないといつたとて、言はゞ互ひに水掛論、證據にならぬ譯だ。

千太　そつちは證據があるめえが、此方は貰つた此の指輪、是が何より確な證據だ。

ト此時奥より以前のお市、辨山、お常出來り、

お市　さつきからがや〳〵と、騷々しいから出て來たか、お前は銀行の喰せ者、

辨山　何で此方のお内へ來たのだ。

千太　白川以來尋ねて居た、お照が此方に居る事を、知つて態々尋ねて來たのだ。

お常　お前はさつき湯屋の前で、御新造樣を聞いた人だね。

千太　おゝ内を聞いたはお前だつたか、おらア此方の御新造の、斯う見えても昔の情人だ。

お市　何をお前は愚圖々々と、そんなきざな事を言つて娘に難儀を掛けるのだ、なるほど己が白川で娼妓にすると脅した時、百圓出したに違えねえが、何もあの時娘が頼んで、出して貰つた金ぢやえねえ、言はゞお前が醉狂で己に百圓渡したのだ、其時無理に娘から貰つた指輪を種にして、言交した證據などゝ、爰へゆすりに來たのだな。

千太　己ァゆすりに來やあしねえ、一旦末は夫婦にならうといふ約束をして置いて、爰の御新造になつたから、當り前なら出刄庖刀でも持つて振込む所だが、どうで立派な旦那衆と競べものにならねえこちと等、見替られるは當り前、然し言替した女をば人に取られて其儘に默つて見ても居られねえから、祝儀がてら今日來たは、是からお照と兄弟の縁を結んで兄となり、旦那のお世話になりてえのだ。

辨山　これ〳〵千太さん、お前のいふのも尤もだが、そんな事を言はねえで、男は當つて碎けろと、早い話にしなさい、お前が百圓出したことは、私も側で知つて居るから、幾らか貰つて上げようから、そんなきざを言はないで、うんと言つて靜にしねえ。

お常　口を出しては濟みませんが、新聞屋にでも聞かれると、直に明日の續き物、ぱつと世間へしますから、爰はこつそりと辨山さんに任してお金を貰ふ方が、上分別でござりますぜ。

辨山　不承でもあらうけれど、私が辯をふるふから、どうか任してくんなせえ。

千太　御親切に有難いが、二十や三十貰つたとて、夏の氷で見てゐる間に、直に消えてしまふから、金をお貰ひ申す氣はねえ、生涯お世話になりてえのだ。

辨山　さう强情を言ひなさりやあ、無據派出所へ次第を申上げにやあならねえ、つまらねことで拘引さ

れ、調を請けて古疵が起るまいものでもねえ、さうした日には藪をつッ突いて、蛇を出す樣なものだぜ。

千太　そりやあお前が言はねえでも、どうで暗え體だから拘引されて調べられたら、脫れられねえ兇狀持ち、長く佃へ行かにやあならねえ、お前達も己が金を貰つたからは其時は、一緒に誘つて連れて行くから、馴れてもつらい懲役の味を覺えて汐風に、吹かれて惡事の黑人になんねえ。

ト此內お常お淸に囁いて、

お淸　それでは何時かお園さんの、お內へはひつた押込かえ。(ト千太ぎつくりして、)

千太　何だと、

お常　いえ、お前の體が泥坊に、よく似て居るといつたのさ。

千太　なに、此の千太が泥坊だと、何を證據に己が體へ、汝等は惡名を付けやあがるのだ。

辨山　これ〳〵千太さん、高が女の言つた事、相手にするのは大人げねえ。

千太　斯ういふ噂をされた日にやあ、探索方の耳に入り、今に繩の掛る體、其時こそは引合に呼出し狀を付けるから、何奴も此奴も待つてゐろ。(トきつといふ、お市前へ出て、)

お市　これ、お前も上部は氣の利いたい、遊び人の樣に見えるが、おいらが若い時分に流行た脅しのゆ

すり文句、それをお生で今言ふは箍の緩んだ年でもねえが、あんまり時代おくれだぜ、それも堅氣の商人なら恐れもせうが餓鬼の折から、見世物小屋で駄菓子を賣り渾名を取つたねちがねお市、賭博の鉢が初まりで、幾度行つたか知れねえ私、佃の味も知つて居るから、お前の脅しは喰ひたくねえ。

辨山　扨差替つて身の恥を辯じたくもないけれど、飯より好に猿彦道で、私も土をば擔いだが辻講釋で叩き込んだ國定忠次の話をするので、若い者に可愛がられ、思はぬ樂をして來た辨山、私も苦役をして來た體だ。

お市　まん更素人でねえ二人、お前がいくら怖がらしてもびつくりともしねえから、野暮を言はずと辨山に任して幾らか旦那から、貰つて早く歸んなせえ。（ト千太思入あつて、）

千太　黒人がつた事を言つても、まだ素人のお前方、佃の味も知つて居ようが高が賭博で八十日の處刑で苦役をした二人、自慢話をする樣だが、十五の年に奥州で八十日の懲役が初犯でそれから二犯三犯、行く度毎に等級が段々登る泥坊學問、今ぢやあ教師になる程の此科ならば何年と、體が暗くなるに付け、刑事の律が明るくなり、憚りながら今行つても生涯出られぬ終身の、古い手合に立てられて凌げぬ夏の暑い夜は、いたはる親仁に夜通しあふがせ、又冬の夜の寒さにはすりの小

僧を辻番替り、日には幾度數知れぬ差入物の初穗を貰ひ、湯は穢れねえ其内に入る程の松島千太だ、同じ赤い仕着は着ても、筋の違つた己に向つて、手前達が惡黨がつた、知つたか振りは聞くのが大儀だ。（ト宜しく思入にて言ふ。）

お市　何だ、御大層な事を言つて、手前ふりやァおら達が知つたか振りを聞くのが大儀だ、いゝ男がつた事を言つても、己が目からは小僧ッ子の、手前達が脅しを喰つて、引込む樣な己ぢやあねえぞまだ肩上のある時から、四六屋體の宿屋へ賣られ、旅から旅を鞍替へに拵いで歩いた枕搜し、證據はしかも舊幕の、墨を直した久利加羅お市、腕を見て物を言へ。

ト片肌脫いでくりからの彫物を見せる。

辨山　今は堅氣になつたけれど、一旦ひゞの入つた體に、相見互ひと中へ立入り、金を貰つて遣らうといふのだ。

お市　有難いことゝ三拜して、それを貰つて歸りやあよし、否だと言やあ分署へ訴へ、手前の體へ、繩を掛けるぞ。

千太　それをこつちァ待つて居るのだ、さあ爰の內から突出してくれ。

お常　テモふてぐ〵しいあの言草。

お清　お巡りさんへ申しませうか。

お照　お知せ申せば表向、旦那のお恥になる事故、まあ内分にしたがよい。

お常
お清　それだと申して。

お照　はてまあ、靜にしやといふに。（トお照兩人を留める。）

千太　さあ、愚圖々々せずと早く突出せ。

お市　おゝ、突出さねえで。

お市
辨山　どうするものだ。（ト兩人立掛るを輝留めて）

輝　兩人共先づ待ちやれ、隣家が至つて近ければ洩聞えなば我恥辱。さう高聲に申さずに、まあ靜にしたがよい。

お市　邊り近所を憚るから、大きな聲をしたくもないが、高が知れたごろつきが御大層なことをいふから、默つて聞いちやあゐられませぬ。

輝　それは世上の譬にいふ夫の賣言葉に買言葉、角目立ちしも事丸く己が納める所存故、こなた衆は次の間へ暫く退座してくりやれ。

お市　そのやうにお出しとおつしやるなら、お次へ參りませうけれど、

辨山　私共が居りませなんだら、どんな事をしようも知れねば、
輝　いや、斯う見た所が善惡の分からぬ人とも見えざれば、決して氣遣ひするには及ばぬ。
お市　でも、亂暴な、
兩人　者だから。
輝　はて、兎も角も任して置きやれ。
お照　かうして旦那がお留めなさるは、何か深い思召の、あつてのことでござりませう。
お常　爰は仰せに從つて、お二人さんは一先づ切上げ、
お清　奥へおいでなされませ。
お市　行けとおつしやることだから、行きもしようが相手はごろつき。
辨山　お心好しの旦那樣の、所詮手際に行きますまい。
輝　手際に行かぬ其時は、又お前方を賴まうから、先づ構はずと行つて下せえ。
お市　さうおつしやるなら仕方がねえ。
辨山　奥へ行つて今の殘りを、
お常　御馳走になりませうか。

お照　あゝ、ゆつくりとお上りよ。
お市　そんなら、旦那、
辨山　若しお手にあまつたら、
輝　えゝ、口數利かずと、
お清　さあ、おいでなされませ
ト端唄にてお市、辨山、お常、お清皆々千太へ思入あつて奥へはひる、跡輝思入あつて、
輝　これ、千太殿とやら、最前から此場の樣子、側で親しく聞いた故どうか無事に扱ひたいが、手前に任してくれまいか。
千太　外ならねえお前さんが、扱つて下さることなら、宜しくお任せ申しませう。
輝　それは千萬忝い、お照、手箱を此處へ。
お照　はい。
ト合方きつぱりとなり、奥へはひり、直誂への手箱を持つて來て、輝の側へ置く、中より金包を出し、
輝　如何なる深き譯あるか、以前の事は存ぜぬが、お照が爲めに白川でこなたが出した百圓を、今日の土産に進ぜるから、是を持つて歸られよ。（ト輝千太の前へ金包を出す。）

千太　有難うはござりますが、此お扱ひでは歸られませぬ。
輝　此の扱で歸られぬとは。
千太　思召しではござりますが、百圓ばかりの金を貰つて、お禮を言つて歸られませぬ。
お照　さうしてお前は何の位、金が欲しいと言ひなさるのだ。
千太　一旦己が白川で夫婦約束したお照、默つて女房にしなさりやあ言はずと知れた間男だ、昔ならば七兩二分だが、諸式と共に間男も百層倍に値が上り、先七百五十圓だが、其處を一番大負に元直限りに五百圓、手切に金を貰ひてえのだ。
お照　手切などゝは何の事、わたしやお前と其樣な、約束した覺えはない。
千太　今更覺えがあるのないのと、そんなことを言つたとて、こつちは證據のあることだ。
輝　如何なる證據があるかは知らねど、身共は母のお市から、結納遣つて貰つたお照、送籍迄も濟んだ上は、天下晴れての輝が妻、藝者勤めの其内に、夫婦約束したとあらば、其節送籍なしたるか。
千太　や。
輝　送籍なければ妻にあらず、表向に公裁を仰がば證據は立たざるぞ。
千太　證據が立つか立たねえは、己が口にあることだ、此頃流行演說の論は上手か知らねえが、罪に落

すと落さねえ悪事に馴れた言取りは、是りやア旦那の知らねえこと、出る所へ出て此下太が、恐れながらと言ひ上げたら、毒が變じて藥指、拔差しならねえ指輪の證據、嘘かまことは附石で下地の銀が出ようとも何處が何處迄言交したと、言張る日には私通に落ち、示談にしろと下るは必定、其時こそはお照に遣つた、ダイヤモンドの入つてゐる無垢の指輪に手切を突込み贓品買に踏ましても、三百圓なら買ふ代物、紙屑買なら知らぬこと立派な旦那が百圓とは、あんまり酷い見倒し樣、此相場ぢやあ賣らねえから、出る所へ出て恥をかきねえ。(ト思入あつて言ふ。)

輝　いかにもそなたの言ふとほり、罪に落すと落さゞる悪事に馴れた言取は、身共は存ぜぬことなれど、お照が覺えもないことを指輪を證據に言張つて、罪に落すと申すのか。

千太　そりやあわつちが出る所へ、出て喋つたら二人共、罪に落すは造作もねえ。

お照　それでは私が知らぬ事を、指輪を證據に言交したと、いくらお前が言張つても其善悪を分けるのが、それがお上のお役故、言張つたとて通りはしまい。

千太　通らぬ事を言張つて、通すが悪事に馴れた言取り、出る所へ出て腕を見ねえ。

ト輝何を云ふかといふ思入あつて、

輝　いや、腕も臑もあるものか、高の知れた錢貰ひ、素直に出れば百圓を色を付けて二百圓に、直して

やるまいものでもないが、そんな脅しを言ふからは、一圓たりとも餘計は遣らぬ、一旦出した金ゆゑに、此の百圓でよくば遣らう、厭なら指輪を證據にして出る所へ出て言つて見ろ、御大層な事は言ふが、己が目からはすりか竊盗、兇器を持つた強盗のまだ大舞臺は踏みはしめえ、田舍を拵ぐ旅役者、鬘の名に呼ぶ千日か五十日の苦役をして、惡黨めいた長臺詞、つじつま合はぬ聲色を聞いて居るのは傍痛い。（ト輝せゝら笑ふ。千太思入あつて、）

千太　豪氣に筋なことを言ふが、お前は以前囚獄の、小役人でもして居たのか。

輝　手前も見掛に似合ねえ、目先の見えねえ奴だなあ。（ト輝胡坐をかく。）

千太　何と。（トきつとなる。）

輝　己を只の金貸と、思つて爰へゆすりに來たか。

千太　え。（びつくり思入。）

輝　こんな事も十四五年維新此方言はなんだが、久し振で浚はうか、元は幕府の昵近で千石取りの何某だが、弘化の頃より億川の威勢が衰へ世の中は所謂強い者勝に徒黨を組んで白晝から、軍用金を名義として、豪家へ押入り強談にて、多分の金を出金させ、遊里へ立入り遣ひ捨て、後には所所へ強盗に入つて巨萬の金を盗み、榮耀榮華をした果が遂には惡事が露顯なし、金瓶樓に遊んで

居た其夜座敷へ踏込まれ、無刀に是非なく捕縛され、町奉行の詮議に逢つたが、只借りたとのみ言張つて更に伏罪なさゞるゆゑ、數度牢問に掛けられて手前達が痛さを知らねえ石を抱いたこともある、白狀なしても斬罪の處刑を受ける大罪に、迚も死ぬなら無罪で死なんと、覺悟を極めし其折柄、上野に於て戰爭起り五月半ばに雨降つて遂に世界の地かたまり、王政復古の代となりて假令重罪の者たりとも一同赦免の令出て、晴天白日の身となりしは、是天朝の御仁政、爰ぞ改心なす時と緣家に預けし金圓を資本となして金を貸したが、元より惡運强き身に、する事なす事大利を得、一度暗き囚獄に居りしも今は望月輝、刑事に掛けたら百般とも法律心得居る身共、手前達が口先で罪に取つて落さうなどゝは、夫の蟷螂が斧を以て龍車に向ふに等しければ、及ばぬことだ、止しにしやれ。（ト宜しく思入にて言ふ。千太是を聞きびつくりせし思入あつて、）

千太　さういふ豪氣なお方とも知らずに爰へゆすりに來たは、わつちの目先が見えねえのだ、つまらぬことを言つたのは、癪にも障りましたらうが、堪忍しておくんなせえ。

輝　堪忍するもしねえもない、惡い事と氣が付いたら、是から手前も改心なし、此の百圓を資本として、商法開いて良民とならば生涯其身の德だ。（ト千太思入あつて、）

千太　いえ、思召しは有難いが、今お前さんの素性を聞き一旦返した百圓を恐れて貰つて歸つたと、後

日に人に言はれては、何ぼけちな野郎でも、あんまり意氣地のねえ譯だ、こりやあお貰ひ申しますめえ。

輝　これ、そんな野暮は言はねえで、此の百圓を持つて行け。

千太　お市婆アを甘く見りやあ、又今お前に甘く見られ、なるほど世界は一文上り、是からわつちも功を積み、お貰ひ申す時節が來たら、此の百圓をお貰ひ申さう、先づそれ迄は輝さん、お預け申して置きませう。(卜奥よりお市、辨山出て、)

お市　これ、樣子は奥で聞いて居たが、そんな痩我慢を言はねえで、折角旦那が下さる百圓、

辨山　有難いと三拜して、貰つて行くがいゝぢやあねえか。

千太　そりやあおれも錢がねえから、きざを言つて貰ひに來たが、今日は何と言はうとも此の百圓は貰えねえ。

輝　厭だと言ふならよしにしろ、達て遣らうとは言はねえわ。(卜千太思入あつて、)

千太　大きにおやかましうございました。(卜ずッと立上るをお市金包を取つて、)

お市　そんならどうでも此金を、貰はずこなたは歸る氣か。

千太　是が堅氣の商人なら、千圓元をおろさにやあ、百圓の金は儲からねえから飛付いても貰はうが、

しみッたれな野郎でも百や二百の端た金は、今夜の内にも手に入る體、恥をかいちやあ貰えねえ。

輝　それではよして早く歸れ。

千太　おゝ歸らねえでどうするものだ。（ト千太思入あつて、門口へ出る。）

お市　みす〳〵取れる百圓を、

辨山　取らぬは欲を知らねえことだ。

千太　今日其金を取らねえでも、事によつたら命迄、

輝　や、

千太　いや、時節が來たら貰ひに來やせう。

ト唄になり、千太今に見ろといふ思入あつて、花道へはひろ。お市跡を見送り、

お市　いや馬鹿な奴もあるものだ。（ト輝思入あつて、）

輝　相手にするも大人げないから、蟲を怺へて聞いて居たが、あんまり癪に障るから、言はないでもいゝことを言つて、みんなの手前も面目ない。

お照　ほんに旦那が其以前、さういふお方といふことは、今日迄存じませなんだ。

お市　何處が何處迄以前から、

辨山　立派な旦那と思ひました。
輝　お照は日頃内氣だから、今の話を聞いたらば、己が厭になつたらうな。
お照　いゝえ、さういふお方なら、わたしや嬉しうございます。
輝　なに、嬉しいとは。
お市　お照も一度懲役に、なつたことがござります。
輝　そりや又何で。
お市　旦那、レコでござります。（ト指をかぎにして見せる。）
お照　あれおつかさん、そんなことを。
輝　そりやあさつぱり知らなんだ。
辨山　眞逆湯屋でもありますまいね。
お市　今は堅氣な御新造だが、以前は宿場の枕搜しさ。
お照　あれ恥かしい、そんなことを。（トお照袖で顏を隱す。）
輝　辨天といふ渾名を取つた、此美しい顏を持つて、
お市　枕さがしを、

辨山　したといふのは。

輝　蛇喰ふと聞けば恐ろし雉子の聲。

お照　え。

輝　人は見掛けに、（トお照の顏を見るを木の頭。）よらないものだ。

トにつこり笑ふ、お照は恥しきこなし、此模樣宜しく端唄にて、

ひやうし幕

四幕目

神樂坂明石屋の場
宮比町裏長屋の場

「役名」——明石屋島藏、松島千太、明石屋の若い者德藏實は野州德、磯右衛門、人力車夫げんこの半太、古道具屋眼七、島藏悴岩松。島藏妹お濱、女髮結お常、丁稚三太、其他。」

（明石屋の場）——本舞臺四間通しの屋體、下手一間の土間上手三間常足の二重、本庇本椽付き、此の上一間の間平戸の戸棚、此の下鼠壁諸帳面を掛け、上の方一間障子附屋體、下落間、向う二段に香み口付本物の酒樽を並べ、此前に升、漏斗を入れし桶、よき所に味噌樽、鹽笊を置き下の方一間物置き、内に醤油樽の書割、此前に駒寄内に大半切、一升樽五六本あり、軒口に明石屋といふ紺暖簾を掛け、舞臺に長床几を二脚並べ總て牛込神樂町酒見世の體。二重にお濱二幕目の娘前垂掛にて帳を付居る、

平舞臺に序幕の德藏柿素の着付同じく前垂、若い者のこしらへにて立掛り、門口に車夫半太花色の筒ッぽ、同じく半股引人力車夫のこしらへ、ガラス德利を持ち、上揑作藏紺の印半纏三尺帶同じく德利を持ち、立掛りゐる、合方飴屋の唐人笛にて幕明く。

德藏　お前さんは何を上げます。

半太　いゝのを二合ついでくんねえ。(ト德利を出す、德藏受取り、)

德藏　いゝのは一合三錢でございますが、宜しうございますか。

半太　一里曳かにやあ六錢の錢の取れねえ人力車が、二合呑んぢやあ合はねえが、僅なことで二錢五厘は水ッぽくて呑まれねえ。

德藏　いえ、私共の内の二錢五厘は、水ッぽいことはございませぬ、外の内の三錢と同じことでございます。

半太　同じことなら五厘でも、安い方にしようかね。

お濱　まあお口に合ふか合ひませぬか、ちよつと上つて御覽じませ。

ト此内德藏利き酒を茶碗へついで出す、車夫呑んで、

半太　なるほど是はいゝ酒だ、是を二合ついでくんねえ。

徳藏　はい〳〵、畏りました。

お濱　お負け申して上げなよ。

徳藏　はい〳〵。（ト酒をつぐ。）

作藏　お前の所は新見世だが、賣り物がいゝに、量りがいゝから、客の絶えることがないね。

お濱　引札替り當分は、品のよいのを元直限り、お安く上げますでござります。

半太　何でも今の世の中は、よくッて安く賣らなけりやァ、大きな商ひはありやあしねえ。

作藏　然し元直のある商賣、泥坊ならば知らぬこと、さう安くは賣られまい。

ト お濱ぎつくり思入、徳藏は徳利を出し、

徳藏　たつぷりお負け申しました。

半太　そりやあ何より有難い。

徳藏　お前さんは何を上げます。

作藏　おいらは醬油を二合くんねえ。

徳藏　醬油は並が二錢五厘、よいのが三錢でござります。

作藏　お前の所は物がいゝから、二錢五厘にして置かう。

徳藏　はい〳〵畏りました。
作藏　わたしやあ左官の土こねだが、此頃下町へ仕事に行くので、辨當の菜を辛く煮るので、醤油が澤山入つていけない。若い衆、氣をつけてついでくんねえ。
徳藏　おつしやいませずと五勺ほど、お負け申してござります。（ト德利を出す。）
作藏　それぢやあ天保が六枚に、青が一文。
半太　おいらは銅貨で五枚あるよ。（ト兩人錢を出す。）
徳藏　是は有難うござります。はい代濟。（ト錢をくすねて錢箱へ打込む。）
半太　どれ、内へ行つて一ぱいやらうか。
作藏　今日はしつかりになつたと見えるね。（ト兩人捨ぜりふにて花道へ行き、）今の酒屋の若い者が、ちよろり錢をくすねたが、爲めにならねえ奉公人だ。
半太　彼奴は野州德といふ奧州海道の人力だが、どうして此方へ來て居るか。
作藏　油斷のならねえ奴だねえ。（ト兩人思入あつて、右の鳴物にて花道へはひる。）
お濱　岩松が招魂社へ行つたぎりで歸らぬ故、跡から三太を迎ひにやつたが、木乃伊とりが木乃伊になると譬の通り、同じ樣に遊んで居ると見えるわいな。

徳藏　おつしやる通り三太どんも、遊んで居ると見えますが、私が行つて見て參りませう。

お濱　跡が私一人では、お客が來た時困るゆゑ迎ひに行くには及ばぬが、達者の體でない岩松、早く歸つて來ればよいに。

ト替つた合方になり、花道より前幕の島藏羽織雪踏にて出來り、花道に留り、

島藏　己が持つて居る短刀を、望月といふ金貸がどういふ望みがあつてのことか、昨日百圓に直を付けたに賣らぬ故に段々付上げ、今も道具屋へ寄つたらば、二百圓迄買ふといふ由、思ひ掛ない此金の我手に入るも福島屋へ、返す時節が來つたか、是に付けても仲町から何れへ今は行かれたか、早く在所を知りたいものだ。（ト本舞臺へ來り、）お濱、今歸つた。

お濱　お丶兄さん、お歸りなさんしたか。

島藏　川岸から歸りに一二軒、寄道をしたので遲くなつた。

徳藏　旦那樣お歸りなされませ、相場は如何でござりました。

島藏　引續いての入津で、雜物が二割下り、小賣見世は賣りよくなつた。

徳藏　それは宜しうござりますな。

島藏　今日は見世は如何だつたな。

徳藏 今少し途切れましたが、朝から立續けで、二時を打つてお晝をば食べるくらゐでござります。
島藏 そりやお大きに御苦勞だつた。
お濱 三太が役に立たぬから、見世のことから持出し迄、皆徳藏が一人でする故、大抵なことぢやござんせぬ。
島藏 小賣店はうつとしいから、よく働いてくれさへすれば、此方も骨は盜まない、芝居でも見せてやるから、それを樂しみに働いてくれ。
徳藏 私の樣な不調法者を遣つて下さりますれば、決して骨は惜しみませぬ。どうぞ旦那末長く、お目を掛けて下さいまし。
島藏 こなたさへ辛抱すれば、此方は何時迄も遣ふ氣だ。つい忙しいので聞かなんだが、是迄何處に奉公してゐた。
徳藏 いえ、奉公は此方が初めて、年は取つてをりますが、初奉公でござります。
お濱 さうして徳藏、そなたの生れは。
徳藏 へい、私は野州の佐野でござります。
島藏 酒屋は外の生業と違ひ、歩くのが元手だが、足は丈夫であらうな。

徳藏　實は是迄奥州で人力を曳いて居りましたから、歩きますのは何里でも、大丈夫でございます。

島藏　それは何より望むところだ。(ト徳藏思入あつて、)

徳藏　いや、旦那がお歸りなすつたら、裏の炭を今の内積込んでおきませう。

島藏　おゝ今夜はどうか降りさうだ、御苦勞だが積んでくれ。

徳藏　畏りましてござります。(ト合方にて徳藏下手へはひる、島藏跡を見送り、)

島藏　お瀧、あの男はどうだな。

お瀧　大層よく働きまして、氣が利いてをります。

島藏　然し男の奉公人は、間拔はいゝが氣が利いて居るのは、ゑて油斷がならねえから、手前よく氣を付けてくれろ。

お瀧　そりやもう氣をつけて居りますわいな。

ト合方唐人笛になり、花道より岩松着流し、草履下駄、樫の木の杖を突き丁稚三太付いて出來り、

三太　岩松さん、あぶないから靜においでなさいまし。

岩松　大きに遲くなつたから、少しも早く歸りたい。

三太　轉んで怪我でもなすつては、私が濟みません。

岩松　なに、杖があれば大丈夫だ。（ト杖を突き跛の思入にて舞臺へ來り、）伯母さん、大きに遲くなりました。

お濱　おゝ、岩松歸つたか、平生より遲いから、三太を迎ひに遣つたわいの。

岩松　有難うござります。

三太　丁度噴水の所で、お目にかゝり、直にお連れ申しました。（ト岩松前へ出て、）

岩松　おとツつァんお歸りなさいましたか。

島藏　招魂社へ行くならば、一人で行かずに三太をば一緒に連れて行くがよい。

岩松　今度から左樣致しませう、今日も一人で參つた故、いぢめられましてござります。

島藏　なに、いぢめられたとは。（ト誂への合方になり、）

岩松　何時もわたしをいぢめます惡童子が大勢で、酒屋の跛々とはやし立てゝいぢめた上、杖を持つて行きましたを、丁度其處へ來合せて叱つてくれたお人があつたが、是もわたしと同じ事、やつぱりびつこでござります故、惡童子が馬鹿にして言ふ事を聞かぬ所へ、お巡り樣がおいでなされお叱りなされましたので、杖を置いて一もくさんに、みんな逃げて行きました。

島藏　それはあぶないことであつた、今も己がいふ通り、此後一人で行かぬがよい。

お滝　さうしてお前と同じ様な、片足悪い其お人は。

岩松　まことに見るから親切な、よいお人でございますが、不思議なことにはわたくしと同じ左の足の怪我、話を聞けば月日も替らず同じ四月二十日の晩、切られた時刻は十二時前、

島藏　え、（ト思入あつて、）すりや四月二十日の晩、十二時前に切られしとか。

お滝　若しやいつぞや兄さんが、お話しなされし其人なるか。

島藏　して、其人の年恰好は、

岩松　年は五十位にて、鼻は高く目は大きく、よい格幅でございます。

三太　わたしも側で見て居ましたが、役者で言へば高島屋に、よく似てゐるかと思ひました。

ト島藏思入あつて、

島藏　扨はいよ〳〵其人なるか。

お滝　そんなら、お前が。

島藏　これ、（ト押へて、）三太手前は裏へ行つて、炭を積む手傳をしろ。

三太　畏りました。（ト三太下手へはひる、島藏思入あつて、）

島藏　正しくそれと思はるゝが、して其人の內は何處だ。

岩松　三太が急ぎまするので、つい聞かずにしまひました。
島藏　内が知れたら早速に、是から尋ねて行かうもの。
岩松　粗相なことを致しました。
島藏　はて、殘念なことだなあ。（ト殘念な思入。）
お瀧　これ岩松、臺所が不用心故、奥へ行つて見て居てくれ。
岩松　はい、張番をして居りませう。

ト合方にて岩松びつこを引き奥へはひる、島藏思入あつて、

島藏　豫てそちにも言ふ通り、少しも早く返し度く、此間も仲町へ行つて様子を聞いたれど、借金故に行先が口留めがしてあることやら、何處で聞いても曖昧にて浦和在へ逼塞したと、差配人さへよいことを言はねば詮方なさに諸々方々、草を分けて尋ねる折柄、悴が逢つたは正しく其人、所を聞いてくれたなら、かゝる苦勞はせまいもの。
お瀧　それほど世話になつたらば、所を聞けばよかつたに、利口な様でもまだ子供、何故聞いては來なんだか。
島藏　今更言つても返らぬことだ。

ト合方きつぱりとなり、花道よりお仲島田鬘、落ぶれし世話娘のこしらへにて出來り、

お仲 此五月迄淺草で、何不自由なく居たものが不仕合せ故是非なく〳〵、生れし所を立退いて今は幽な裏家住居、常が御膳は炊いてくれゝど髪を結に出た留守は、馴れぬ買物せねばならぬ、思へばづらいこつちやわいな。

ト本舞臺へ來り、門口を行つたり來たりする、此内島藏思案の思入、不圖お仲を見て、

島藏 これお濱、あの娘御はさつきから行つたり來たりして居るが、何を尋ねるのだか聞いて見やれ。

お濱 はい、聞いて見ませうわいな。(ト門口へ出て、)もしお姉えさん、何でお尋ねなされますのか。

ト お仲間の惡さうな思入にて、

お仲 こちらは酒屋でござりますな。

お濱 はい、左樣でござります。

お仲 どうぞお醬油を二合持つて來て下さいまし。

お濱 畏まりましてござりまする、どちら樣でござります。

お仲 宮比町の米屋の裏でござります。

お濱 只今持つて上りますが、お名前は何とおつしやります。

お仲　福島屋と申します。

お濱　醤油はよいのに致しますか、並のに致しますか。

お仲　よいのが宜しうござりまする。

お濱　畏りましてござりまする。（ト合方にてお仲恥しさうに花道へはひる。跡を見送り）

島藏　お濱、人柄のいゝ娘御だな。

お濱　醤油を小買にする樣な、御身分ではござりますまい。

島藏　何でも以前は立派な内の、御孃樣に違ひない、家名は何とか言つたな。

お濱　福島屋とおつしやいました。（ト島藏思ひ出せしこなしにて、）

島藏　むゝ、福島屋といふからは、若しや淺草仲町の、

お濱　そんならお前が尋ねなさんす、

島藏　今の娘の樣子では、己が尋ねる人かもしれぬ。

お濱　少しも早く德藏に、今の醤油を持たしてやり、内の樣子を見させませう。

島藏　いや、德藏より己が行き、尋ねる人か人でないか、素知らぬ振りで見て來よう。

ト島藏德利へ醤油をつぐ、此内花道より二幕目の磯右衞門脚絆草鞋、竹笠雨除の蓙を引掛け出來り、

磯右 先達て來た郵便に、所書から番地迄委しく書いてあつたので、忰の内か直に知れた、昔と違つて番地のあるので、まことに便利のいゝことだ。(ト舞臺へ來り、門口の表札を見て、)おゝ此處だ〳〵。

島藏 や、あの聲は。(トお濱出て、)

お濱 おゝお前は父さん。

磯右 娘達者か。(ト島藏見て、)

島藏 これは親父樣、よく出掛けておいでなされました。(ト奥より岩松出來り、)

岩松 おぢいさん、御機嫌宜しうござりましたか。

磯右 おゝ岩松、其方も達者か。

お濱 まあ、何はともあれ足を洗つて、此方へお上りなされませ。

ト磯右衞門椽へ腰を掛ける、お濱盥へ水を汲み、磯右衞門の足を洗つてやる、皆々捨臺詞あつて、

磯右 漁たはすれど舟よりも陸を歩く方がいゝから、足に任して出て來たが、二人達者な顔を見て草臥れたのもさつぱり忘れた。

島藏 疾にも是が知れたらば、品川迄も私が今日お迎ひに出ますもの、何故郵便を下さりませぬ。

磯右 先達て己が言つた、意趣を變て返されたが知つての通り書けぬ故、人頼みをするも面倒、それ故

手紙を出さなんだ。

お濱　さあ／＼足は宜しうございます。

岩松　お祖父さん、是へおいでなされませ。

磯右　おい／＼、爰らが居所によからう。（トよき所に住ひ）今日は旅の憂さを忘れ、内へ歸つた樣なや
わい。

島藏　先づ御機嫌のよいお顏を見し、私初め三人とも、

お濱　まことに嬉しう。

三人　ござりまする。

磯右　己も替ることのない、三人の顏を見て、こんな嬉しいことはない。

島藏　して今度お出掛けなされたは、何ぞ火急な用事でもあつてのことでござりますか。

磯右　別に何も用事はないが、沖藏めがお濱をは是非とも呉れろと迫る故、手前が内を持つたを幸ひ、
岩松諸共よこしたが其後度々替りのないことを手紙で知らしてくれたが、今もいふ手が書けねば
內證の事をあからさまに人に言はねばならぬ故、それらこれらで東京へわざ／＼出て來て其實は、
孫の顏が見たいからだ。

お濱　嘸さうでございませう、然し明石に來たより、水が合つてか岩松もまことに達者でございます
から、澤山顏を御覽なされませ。（ト岩松を前へ出す、）

岩松　私もお祖父さんの顏が見たうござります。

磯右　おゝ、まッ黑なぢいが顏、とつくりと見てくりやれ。（ト岩松を引寄せ嬉しき思入、）

お濱　さうして內は誰ぞに賴み、此方へおいでなされましたか。

磯右　なにもない氣散じは、隣の小母御に留守を賴み、其身其儘出て來たのだ。

島藏　よく尋ねて來て下さいました、まあゆつくりと逗留して、所々を見物なされませ。

磯右　今日神奈川から鐵道で、新橋とやらへ來た時に、こりやアメリカへでも來はせぬかと煉瓦造りに
びつくりした。

島藏　まだ／＼あんなことではない、諸官省から三井の銀行、見る所は澤山あります、先づ何よりか
爰から近い招魂社へ、明日にもお參りなすつて御覽なさい。

磯右　博覽會を見に來たものが、歸つてからの話しに聞いたが、大層立派だといふことだ。

島藏　是から每日私が、案內者になりますから、ゆつくりと御見物なされませ。

磯右　國へ土產に殘る所なく、見物をして行きませう、いや土產といへば悅ばすい、土產の話がある。

島藏　そりやどんな話でござりまする。
磯右　手前を載せて明石浦で難船をした波六が、助舟に引上げられ、危い命を助かつたぞ。
お濱　父さんそれは此間の、手紙に書いてござんしたぞえ。
磯右　おゝ手紙に書いてよこしたか、年を取ると同じ事を幾度も言つてならぬ。
島藏　此間のお手紙に、其事がござりまして、まことに安心致しました。
お濱　まあ、何は兎もあれ父さんも、嘸お勞れでござりませうから、奥へおいでなされませ。
岩松　久し振で私が、足を摩つて上げませう。
磯右　それは何より忝い、詞に從ひ奥へ行き、
島藏　悴を相手に何やかや、
お濱　お話しなさるもお樂み。
磯右　どれ、ゆつくりと話さうか。
　　　トお濱岩松磯右衞門を伴ひ、奥へはひる。島藏思入あつて、
島藏　福島屋へ返す金もやう〳〵昨今五百圓、金の員數が揃つた故、そつくり返して身の科を直に自首なし御處刑受け、まことの人に歸るのは、もう遠からずと思つたも、寸善尺魔は兄弟分の千太に

昨日出逢つたが、尋ねて來るに違ひないが、願ひが成就せぬ内に事の破れに成らねばよいが、包む惡事が露顯なし、若し捕れでもした時は今日わざ／＼尋ねて來た親父に苦勞を掛けねばならぬ、どうぞ國へ歸る迄此身を無事にしたいものだ。（ト島藏腕を組み思案の思入、奥より以前のお濱出て）

お濱　もし兄さん。（ト大きく言ふ。）

島藏　えゝ、びつくりした。

お濱　なに、忘れたことがござんすぞえ。

島藏　忘れたことゝは。

お濱　さつきおいでの娘御が、頼んで行つた醤油をば。

島藏　おゝ親父が來たので遲くなつた、一走り行つて來ようか。（ト徳利を取上げる。）

お濱　お前が行かずと徳藏にでも。

島藏　いや、行つて樣子を見て來よう。

お濱　それなら兄さん。

島藏　親父の世話を頼んだぞ。

ト時の鐘合方にて島藏徳利を提げ、花道へはひる。お濱跡を見送り、右の合方にて道具廻る。

（福島屋の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面一間押入戶棚下手鼠壁、此前に簞笥、上に廚子入の阿彌陀佛位牌三ッ具足を並べ、上の方一間跡へ下げて臺所、内に一ッ竈置流し、水桶臺所道具宜しく、いつもの所門口、下の方九尺一間腰障子三尺戶袋總て、宮比町裏長屋の體。二重上手に清兵衞やつし裝にて住ひ下手眼七羽織着流しにて煙草をのみ居る。跡へ下りてお仲火鉢へ鐵瓶を掛け、破れ團扇であふぎ居る、道具半程より稽古唄にて道具留る、と合方彈流し、

清兵　眼七殿、よく尋ねて來て下すつた。

眼七　疾から上らうと存じましたが、拙貧乏暇なしで御無沙汰を致しました。

清兵　世にある時は朝夕に來ずともよい者迄が、ちやはやといつてよく來れど、斯う落ぶれては誰一人尋ねてくれる者はない。

お仲　わざ〳〵尋ねて下さんしたは、私が踊を稽古した、西川の御師匠さんはかり。

眼七　巳根造さんは新聞にもいつか出ました親孝行、不斷あなたのお噂をよく申して居りました、いや親孝行と申しますれば、鬼灯屋の息子をば御存じでござりませうな。

清兵　よく淺草居廻りを、毎日賣つて歩いた小僧か。

眼七　あれが親父は本所の三笠町に居りました、七郎助といふ紙屑屋、元は槍を持たした身分で、石取

でござりましたが瓦解此方零落なし、ひどい難儀を致しましたが、先頃領地の百姓がわざ〳〵國へ呼迎へ、田地を分けてくれたので、今は樂な身分になり百姓をして居りますさうだが、何でも人は正直でなければ惠みはござりませぬ。

清兵　それは何にしろ仕合せなことだ、人のことでも喜ばしい。

眼七　旦那も常からお慈悲深く、正直なお生れ故、今によいことがござりませう。

清兵　其の紙屑屋が仕合せも鬼灯賣が孝行故、それに引替へ娘のお園、娘心の後先見ずに親を捨てし不孝者。

眼七　お園さんがお貰ひ申した、六三どのは參りますか。

清兵　以前なれば勘當をする所なれど當節故、是非なくお園はやつたれど、出入は留めて音信不通。

眼七　それは疾より私も承はつてをりましたが、夜るでも内證でこつそりと上ることかと存じましたが、それではまことにお出入なく、音信不通でござりますか。

お仲　せめて私の所迄、お姉さんからお文でも參りさうなものなれど、何の便りもござりませぬ。

眼七　其のお便はござりますまい。

お仲　そりや何故に。

眼七　御存じなくば私がお話しを致しますが、六三殿が瘧を煩ひ久しく仕事に出ぬ所へ、かてゝ加へてお園さんが同じ病ひで此頃は、二人共日震ひで枕を並べて寐て居れば、實の事は其日に困り、私方へ此間いらぬお道具を五圓ほど賣つた位でござります。

清兵　親を捨てゝ出たからは、天の罰でも其位な報いはなくてならぬ筈だ。

お仲　すりや、六三さんも姉さんも煩うてござんすとか、ちよつと見舞に行きたいにも、表向では行かれぬ身の上、心柄とはいひながらおいとしいことでござりますな。

眼七　お二人共に旦那樣の、罰で斯ういふ憂目を見ると、いつそ悔んでゝござります。

清兵　親の許さぬ色戀をすれば必ず其通り二人共瘧を煩ひ、其日に困る難儀をするも、世間の娘のよい戒め、親はさのみに思はねど天がお許しなさらねば、憂目を見るは當りまへぢや。

ト床の淨瑠璃になり、

上るり〽口には言へど恩愛に不孝な子程不便が増し、寒がる胸の門口を明けて入來る仙次郎、

ト清兵衞お仲ぢつと思入、此内花道より仙次郎羽織着流しにて出來り、門口に窺ひ居て、

仙次　清兵衞殿、内でござるか。

清兵　や、竹の塚の仙次郎殿、よく此處が知れましたな。

仙次　こなたが爰に居ることは、慥に聞いて今日來たのだ。
眼七　まあ此方へお通りなされませ。
仙次　お前は廣小路の道具屋さん、貸金でもあつてござつたのか。
眼七　いえ左樣ではござりませぬ。（ト仙次郎眞中へ住ひ、お仲盆へ茶碗を載せ）
お仲　はい、お茶をお上りなされませ。
仙次　おゝお仲坊、ちつと見ぬ間に大きくなつた、是ではお嫁に行つてもよいな。
お仲　そんな事は存じませぬわいな。
清兵　手前が爰に居りますのを、何處でお聞きなされました。
仙次　どんな所へ逃げようとも、昔と違つて區役所で籍を質せば直に知れる、外國へでも行つたら知らず、內國中に隱れて居れば知れぬといふことはない。
清兵　まことに以てお前樣には、申譯もないことながら、もう少し待つて下さりませ。
仙次　いや待つことはなりませぬ、愛敬もなく斷るのも、金を借りた其晩に其方も金を盗まれゝば、此方も證書を盗まれて、其趣は双方から分署へお屆けなしたれば、貸した借りたは判然すれど、惚れたお園の質にするとて蟒めが口車にうつかり乘つて抵當の地面を外へ賣られてしまひ、半金

返して半金は持參金にしてくれとの頼み聞いたも聟になりたさ、本書の出る迄假證取り、いで婚禮といふ晩に白無垢の儘お園に逃げられ、馬鹿にされた仙次郎、是ではどんな色事師でも敵役にならねばならぬ、詰りが持參の五百圓を、百圓宛五ヶ年賦に取つてくれとの達ての頼みに、當金百圓入れたらば待つてやらうと大負に、負けてやつたに其金を、今日の明日のと言延し、とゞの仕舞が隨德寺、あんまり酷い仕方だから、今日は是非共約束の、金を取らねば歸らぬぞ。

淸兵　御尤もでござりますが、先達も申す如く親類共へ頼母子を催して頼んで置きましたれば、初會を振る迄暫しの內、どうぞ待つて下さりませ。

仙次　いや／＼、今日は待たれぬ／＼、其の頼母子の言譯も是迄幾度聞いたか知れぬ、何でもかでも今日は百圓金を取らねば歸らぬのだ、達て金が出來ぬなら百圓替りに此妹を、私が女房に下さるか。

淸兵　思召しは有難いが、餘り年が違ふのに、唯今是が居りませぬと、實に朝夕困りますから、其儀は御免下さりませ。

仙次　そんなら百圓渡さつしやるか。

淸兵　さあ、それは。

仙次　妹を替りに下さるか。

清兵　さあ、
仙次　さあ、
兩人　さあ〳〵〳〵。
仙次　二つに一つの返事をさつしやれ。
〽のッ引ならぬ此場の切羽、眼七見兼ねて中へ入り、（ト仙次郎きつとなる、眼七見兼れて、）
眼七　さうおつしやるのは無理ではないが、今清兵衛さんの言はるゝ通り、百圓取の賴母子が、きつと今月出來る約束、此の眼七が世話人故請合人に立ちますから、それ迄お待ち下さりませ。
仙次　いや〳〵それ迄待つことならぬ、金が出來ず妹を呉れずば、召連れ訴へをせねばならぬ、さあ己と一緖に來さつせえ。
〽胸ぐら取つて引立つるを、（ト仙次郎淸兵衛の胸ぐらを取り引立てるを、眼七止めて、）
眼七　まあ〳〵お待ちなされませ、是が亂暴人といふではなし、借貸の一件ではお取上げはござりませぬ。
仙次　あつてもなくても連れて行くのだ。
眼七　そんな野暮をおつしやらずと、私にお任せなされませ。

仙次　いや〳〵、任すことはならぬ〳〵。

眼七　お仲さんがお望みなら、私がお世話を致しませうから、どうぞ任して下さりませ。

仙次　まこと世話をすることなら、任してやるまいものでもない。

眼七　きつとお世話致しますから、一緒においで下さりませ。

仙次　外へ行かずと、つい爰で、

眼七　爰では話が出來ませぬ。

仙次　それだといつて、

眼七　はてまあ、おいでなされませ。

〽氣轉きかして眼七が、無理に引出し耳に口、旨い話に乘せられて、打連立ちて出て行く、

ト眼七無理に仙次郎を門口へ連出し囁く、仙次郎うなづき兩人下手へはひる。

〽跡に清兵衞茫然と、

清兵　仙次郎殿が尋ねて來て、催促するも無理ではない、是迄世間へ隱して居たが、二千圓からかさみし借財、無據地所を放し衣類道具も賣拂ひ、今は纔か一圓の金にも困る身となれば、親類中で賴母子講が出來るといふも僞にて、ほんの一回脫れの言譯、まだしも其晩抵當の、證書を盜み取ら

れたが、今では此方の仕合せなるか。

お仲 今日は折よく眼七さんが、連れて行てくれたれど、

清兵 明日又來たらば言譯も、

お仲 泣の涙に袖濡れる、

清兵 時雨降る夜の冬近く、

お仲 哀れ身にしむ秋の暮、

清兵 思へば果敢ない、

兩人 身の上ぢやなあ。

ト親子手に手を取交し、涙に咽ぶ折柄に、德利携へ島藏が確に爰とうなづきて、門へ立寄り小腰を屈め、

ト此内清兵衞お仲宜しく思入。よき程に花道より以前の島藏德利を提げ出來り、花道で向うだといふ思入あつて舞臺へ來り、門口から內を窺ひ、

島藏 へい、御免下さいませ、福島屋樣はこちらでござりますか。(ト兩人門を見て、)

清兵 はい、手前でござります。

島藏　先刻お醬油をさうおつしやいましたが、あいにく男が居りませず、大きに遲なはりましてござりまする。
清兵　代はいかほどでござります。
島藏　是へ持つて參りました。
お仲　持つて來て下さいましたか。
清兵　代はいかほどでござります。
島藏　二合六錢でござります。
清兵　あひにく買つた錢がなく、こりや一錢足りぬわい。
島藏　代は何時でも宜しうござります。
清兵　それでは一錢貸して下され。
お仲　はい、五錢でござります。（ト錢を出す。）
島藏　有難うござります。（ト錢をとり、）旦那樣は淺草でお見掛け申したと思ひますが、以前は彼方でござりますか。（ト淸兵衞ぎつくり思入あつて、）
清兵　いや、それは大方人違ひ、私は以前は芝の者、淺草に居たことはない。
島藏　左樣でござりましたか。

お仲　さういふお前は淺草に、居なさんしたのでござりますか。
島藏　いえ、私も淺草に居つた者ではござりませぬ。
清兵　大きにお世話でござりました。
島藏　左樣なら又何ぞ、御用をお願ひ申します。
〽二足三足行き掛けしが、
正しく今のは福島屋、以前の住居を隱すのは。
〽何か仔細の有磯海、深き樣子を探らんと暫し小陰に身を忍ぶ、（ト島藏思入あつて下手へ入る。）
〽内には斯と知らざれば、娘は親に打向ひ、（ト床の合方になり、お仲思入あつて、）
お仲　もしお父さん、お願ひがござりますが、お聞きなされて下さりますか。
清兵　改つて此の親に、そちが願ひがあるといふは。
お仲　外のことではござりませぬが、私をどうぞ吉原へ、勤めにやつて下さりませ。
清兵　そりや何故に。
お仲　昨夜貴方が夜長故、お目が覺めての一人言に、
〽千圓借りし大事の金、其夜忍びし白浪に盜み取られて疵を受け、片足きかぬ身となれど、

杖と賴まん人もなく、
仙次郎殿へ返す金が、
〽出來ねば死ぬより外はないと、さめ〴〵泣いておつしやるを、寐た振をして聞く悲しさ、
それ故苦界へ身を沈め、お金を借りてお命を、お助け申したい故に。
〽お許しなされて下されと、言ふに父親面目なく、
ト此内お仲さはりの振宜しく、清兵衞思入あつて、

清兵　扨は昨夜の我愚痴を、そちは目が覺め聞いて居つたか。あゝ面目ないことではある、是に付けても親を捨て、婚禮の夜に家出せし、不孝な姉に引替へて、其身を苦界へ沈めても親の難儀を助けたいとは、世にも稀なるそちが孝行、志しは忝いが、今手放す其時は跡に殘つた片輪の己が、仕樣模樣もあらざれば、娼妓にならうといふ事は思ひ止つてくりやいの。

お仲　其の跡々はお常が引受け御不自由の、ない樣に致させますから、私の、願ひをお叶へ下さりませ、實は最前お常に話し、口入をなすその人に、賴んで貰ひましたわいな。

清兵　すりやお常にも打明けて、此事を賴みしとか。

お仲　お常も初手は止めましたが、どうでも此身を沈めねば家の立たぬ入譯を委しう話して聞せし故、

さういふ事なら兎も角も、口入へ行つて其道の樣子を聞いて參りませうと、さつき參りましたわいな。

淸兵　年は今年十六なれど、年弱故に十五年何ヶ月といふそちが身で、娼妓にならうと覺悟せし其心根が不便でならぬ、以前の身ならお孃樣で、何不自由なく致させんに、斯く零落なしたるも、元はといへば我越度、年端も行かぬ其方に迄、斯樣な苦勞をさせるといふは、思へば廣い世の中に助ける神も佛もないか、あゝ情ないことぢやなあ。

∧我身を悔み淸兵衞が、世に捨てられし果敢なさをかこち淚に暮れにける、門に窺ふ口入の老婆が鼻を打ちかめば、お常は怺えずわつと泣込み、

ト淸兵衞宜しく思入、此以前下手より前幕のお常、お欲出て、門口に窺ひ兩人宜しく愁ひの思入あつて、此内お常わつと泣きながら内へはひる。

お常　旦那樣、御尤もでござります。

淸兵　おゝ、お常か。

お常　樣子は門で承りましたが、お慈悲深いお前樣が、こんな御難儀なされまするは、おつしやる通り世の中に、神も佛もござりませぬ。（ト聲を上げて泣く、お欲介抱しながら、）

お欲　おゝお常さん尤もだが、只さへ悲しいお二人さん、お前がそんなに泣出しては、猶々涙の止度がない。

お常　それでも小さい時からして、お育て申したお孃樣が、あんなことをおつしやるかと、思ふとわたしや悲しうて、とても泣かすに居られませぬ。（ト お常又泣く、お欲手拭で顏を拭いて遣り、）

お欲　さあ／＼いゝ加減に泣止みなせえ。（ト拭きながら、）何處が顏だか知れやアしない、成程妙にへこんだ顏だ。

お常　顏はへこんで居るけれど、人にへこまされたことはない、餘計なことをお言ひでない。

清兵　こりやお常、其方へ娘が身の上を賴んだと申す事だが、いよ／＼それに相違ないか。

お常　はい、お仲樣が達てのお賴み、餘儀なく近所に居りまするお婆さんに譯を話しましたれば、さういふことなら娼妓より、藝者の方がよからうと申しましてござりまする。（ト お欲前へ出て、）

お欲　これは旦那樣、御免下さりませ、私は此町内に居りまする口入婆でござります、お常さんとは日頃から御懇意に致します故、お内の事は疾からして承はつてをりますれば、お氣の毒でござりますから、藝者をお勸め申しましたが、娼妓と違つて客を取り身を穢さずに濟みますから、先づ其方になすつた方が、宜しからうと存じます。

お常 丁常幸ひ長唄をよくお唄ひなさる上、踊も多く御存じなれば、打つてつけかと存じます。
お欲 先づ當分百圓借り、向うで座敷の取廻し座附や端唄を仕込む内、何ぞよいことがあつて、お金がお手に入りましたら、話合で金利を出し、取戻して上げませう。
お仲 女郎と違つて藝者なら、猶更嬉しうござります。
お常 こりやお仲さんのお願ひを、お聞きなされて金を借り、難儀をお脱れなされたが、宜しいかと存じます。
清兵 成程其方が申す通り、一時の難儀を助かつたがよいとは思へど仲町と、纔隔てし吉原で、藝者をさせるは家の恥。
お常 そりや左樣でもござりませうが、以前の立派なお內と違ひ、今は斯樣なお住居故、
お欲 お孃樣のお願ひ通り先づ藝者になさいまし、お美しいから大鯰が必ず掛るに疑ひなし、さうなる時は恥所か、却つて見得になりまする。
清兵 成程お前の言ふ通り、身を捨てこそ浮む瀬もあり、詞に從ひ吉原へ、娘を藝者にやりませうし
お仲 そんなら私が願ひを叶へ、
お常 お聞き濟み下さりまするか。

清兵　まことに是非なきこと故に、
〽跡言ひさして清兵衛が、又も我身をかこち泣く門に始終を立聞く島藏、親子にかゝる苦を
さすも我なす業と後悔なし、共に涙を拭ひける、
ト此以前下手より島藏出て、門口にて宜しく思入、お欲こなしあつて、
お欲　御得心なら先方へ、少しも早く話しませう。
〽言ふ折門に窺ふ島藏、小腰屈めて内に入り、（ト島藏門口を明け内へはひる。）
島藏　憚ながら其お話を、暫くお待ち下さりませ。
清兵　や、さういふこなたは、
島藏　只今醬油を持つて參つた、酒屋でござります。
お欲　おゝ、お前さんは此間若い衆を上げました、明石屋さんでござりますか。
島藏　はい、神樂町の小賣酒屋、明石屋島藏でござりまする。
お常　まあこちらへおいでなさいまし。（ト島藏下に居て、）
島藏　今日初めて上りましたが、以前はよしあるお方と存じ、如何なることで此樣に御難儀をなされま
すかと、實は門で最前からお宅の樣子を承はり、貰ひ涙をこぼしました。甚だ失敬ではござりま

すが、其百圓は私が御用立て申しますから、どうか是なるお孃樣を藝者になされまするのを、お見合せ下さりませ。

ト思ひ掛なき一言に、人々顔を見合せて、（ト皆々びつくり思入あつて）

清兵　すりや見ず知らずのお前樣が、百圓といふ金を貸し、娘をお助け下さりまするか。

島藏　世にも稀なる御孝行の、お志しを感じ入り、失敬を顧みずお貸し申しますのでござりまする。

清兵　扨はいよ〳〵此娘が、親を思ふ孝心を、

お仲　不便に思召しまして、

お常　何の御縁もないお方が、

お欲　百圓お貸しなされますとか。

清兵　まことに以つて夢かと思ふ、お慈悲深いお志し、

お仲　何とお禮を申しませうやら、

清兵　えゝ有難う、

兩人　ござりまする。

島藏　幸ひ今日新川へ、酒を買ひに參りましたが、都合によつて買はずに歸り、まだ其儘に懷中に所持

致して居りましたは、お二人樣の御難儀を救ふ知せでござりましたか、お心置なく何時迄も、お遣ひなされて下さりませ。

〽貢ぐ仔細も白紙に包む心の十圓札、主人の前へ差出せば、手に取上げて押頂き、

ト島藏宜しく思入あつて、淸兵衞の前へ出す、取上げ頂いて紙に包みし百圓を出し、

淸兵　我身の愚痴に最前も、此廣い世の中に神も佛もないことかと、恨みましたは勿體ない、思ひがけなく百圓を、お貸しなされて下さりましたは、親子の者には神佛、

お仲　手を合して拜みます。

〽神や佛と手を合せ親子の者が伏拜む金は日外盜みし金に心苦しく島藏は額の汗を押拭ひ、

ト兩人手を合せ島藏を伏拜む、島藏せつなき思入にて、額の汗を拭ひ、

島藏　其樣にお二人して厚く禮をおつしやつては、まことに痛み入りまして、額に汗を覺えまする、元はといへば此金は。

淸兵　えゝ。

島藏　いやさ、元より遊んで居る金故、假令二年が三年でも此方はお貸し申す心、いや御都合のよい其時迄、お返しなさるにや及びませぬ。

お常　ほんにお前さんの様に、お慈悲深いやさしい心の者はない、假令盗んだ金にても、

島藏　や、

お常　いやさ、斯う綺麗には貸されぬもの、實に感心致しました。

お欲　いや、感心せぬは此口入、望む所の百圓が出來れば最早破ればなし。

お常　ほんにお前に氣の毒だが、かういふ事になつたからは、私が五合買はうから、それで不承して下さんせ。

お欲　金が出來れば仕方がない、其替りお常さん、權の字にでも出る女があつたら、直に知して下さいよ。

お常　心當りがありますから、いゝのをお世話致しませう。

お欲　何分お賴み申します。

島藏　飛んだわたしが邪魔をして、

清兵　まことにお前に氣の毒だつた。

島藏　是は少しばかりだが。（ト島藏小札を紙を包み、お欲に遣る。）

お欲　是をお貰ひ申しましては、

お常　お婆さん、無駄足でもなかつたね。

お欲　いゝ商法でござります。

〽口入婆はいそ〳〵と、目に汐寄せて歸りける。（トお欲足早に花道へはひる。）

〽跡に清兵衞手をつかへ、（ト清兵衞思入あつて、）

清兵　縁も由縁もないお方に、百圓といふ大金を唯お借り申しますのは、濟まぬことゝは存じますが、無くてならぬ切務故、お借り申しますでござりまする。

島藏　いえ、假令御縁はないにもせよ、其身を賣つても親御樣の御難儀を救ふといふお娘御の御孝行、承はつて此儘に、どう見捨てゝ歸られませう、以前は立派なお暮しをなさいましたお前樣が、今此苦勞をなされますも、

〽我なす業と胸迫り、浮む涙を呑込みて、（ト島藏せつなき思入あつて）

諸式の高い時節故、よくいふことの暮し負け、お氣の毒でござります。

〽親切面に顯れゝば、こなたも隱す身の上を、包み兼ねて座を進め、（ト清兵衞思入あつて、）

清兵　斯く御親切なるお心に、ほだされまして身の上を包まずお話し申しまするが、元私は淺草東仲町に居りまして、質渡世を致しました福島屋清兵衞と申します者でござります、運惡くして不幸

續き遂に見世も衰微なし、不都合に成りし故、奥野仙次郎といふ人より千圓金を借受けし、其夜庭より強盗が入り金を盗まれました上、左の足を深く斬られ、それから跛になりましたが、其足よりも身の上が歩み兼ねて地所も賣り、一時は片を付けましたれど、追々内も左前に、衣類は元より道具迄賣代なしで故郷を立退き、かゝる裏家に幽な住居、お恥かしうござります。

島藏　お聞き申すも涙の種、以前のお内を故あつてよく存じて居りますれば、おいたはしく存じます。

清兵　只今斯樣な難儀をなすも、其夜入つた強盗故、上でも嚴しく御詮議なされど、未だにお手に入らぬ樣子、憎しと思ふ親子の者が、何故に思ひが屆きませぬか。

お仲　たゞの一日半日でも、思ひ出さぬことはなく、

清兵　今にも盗んだ強盗が、

お仲　知れたことなら喰ひ付いても、

清兵　日頃の恨みを晴らさうと、

お仲　思へど今に知れませぬは、

清兵　實に悔しう、

兩人　ござりまする。

へ現在傍に盗人が居るとも知らず親と子が、悔し涙にかき口説くを、聞く島藏は五體をば刺るゝ思ひの身の苦しさ、いつそ打明け言はうかと口へ出つれど千圓の金調へし其上で、名乗らんものと唾を呑込み、

ト此内清兵衛お仲悔しき思入、島藏は是を聞きせつなきこなし宜しく、

島藏 御尤もでござります、嘸口惜しうござりませう、さ程迄にお二人が憎しと思ふ其一念、必ず賊の身に報い、お上のお手に掛るは必定、又さもなくば煩つて目が潰れるか腰が抜けるか、天の御罰を蒙りて、憂目を見るでござりませう。

清兵 いや、天も當てにはなりませぬ、親子の者が此位難儀をするを見てござるは、聞えぬことでござります。

お仲 いえ、さうばかりも言はれませぬ、今日酒屋樣が百圓のお金を貸して下さいましたは、天のお惠みでござります。

お常 お仲さんのおつしやる通り、思ひがけなくお慈悲深い島藏さんのお情で、お仲さんも吉原へおいでなさらず濟みましたは、惡く言はれぬ天のお助け。

清兵 成程言へばそんなもの、天を惡くも言はれぬな。

〽和らぐ詞を立ちしほに、（ト島藏思入あつて、）

島藏　又お尋ね申しますが、此後共に今日の樣なお困りなさる事があつたら、ちよつと左樣おつしやりませ。及ばずながら私が、お力になるでござります。

清兵　遠くの親類近くの他人と、見ず知らずのお前樣が御親切に言つて下さりますは、有難涙がこぼれます。（ト涙を拭いて禮を云ふ、島藏じゆつなき思入にて、）

島藏　最早近い其内に、天の罰を蒙りて尋ぬる賊が捕へられ、金も返りませうからお氣を長く時の來るを、お待ちなされてござりませ。（ト立掛るを、）

お常　もうお歸りでござりますか。

お仲　何れ、お禮に私が。

島藏　決してそれには及びませぬ。

清兵　左樣ならば、島藏樣。

島藏　其内お目にかゝります。

〽暇乞して門へ出で、ほつと一息つく〴〵と思へば濟まぬ身の科に、心殘して立歸る。

ト島藏花道へ行き、宜しく思入あつて、花道へはひる。

清兵　あゝ忝ないく、此の百圓を仙次郎殿へ渡せば當分氣も樂に、枕を高く夜るも寐られる。斯零落はしたけれど、島藏殿に助けられしは、まだ運命が盡きぬと見える。
お常　是といふのも日頃から、まことを守るあなた故、天の惠みでござります、それに付けても島藏さんは、何といふ情深いよいお方でござりませう、人の物を只取つて難儀を掛ける泥坊とは、何といふ違ひでござりませう。
お仲　其の泥坊で思ひ出したは、顏を包んで見えなんだが、今のお方の裝かたち、日外入つた泥坊に、似て居る樣に思はれます。
お常　えゝめつたなことをおつしやりますな、人に情を掛ける者が、何で盜みを致しませう。
お仲　きつとさうとは思はねど、たゞ恰好が似てる故。
清兵　いや、假にも左樣なことはいふな、かゝる情のある人を。（ト金を取上げる。）
お常　盜人などゝ疑がうては、
清兵　天道樣へ濟まぬわえ。
　〽善か惡かは白浪の、果は後にぞ、
　ト時の鐘、清兵衞金を頂き、三重にて道具廻る。

（元の島藏内の場）━━本舞臺元の酒屋の道具、以前のお濱帳を控へ、三太一升樽を並べ、引合せ居る、合方題目太鼓にて道具留る。

お濱　今日は毘沙門樣の御緣日で、お題目があると見える。

三太　さつきからどんどこ〳〵と、太鼓を叩いて居ります。

お濱　先づ帳合も濟んだから、今の內奧へ行つて、お夜食を喰べてしまひな。

三太　德どんが歸りませぬが、先へ喰べてしまひませう。

お濱　戶棚に香々が出て居るよ。

三太　有難うござります。（ト小僧奧へはひる、お濱向うへ思入あつて、）

お濱　この兄さんはどうなさんしたか、宮比町は纔一町、何處へお廻りなさんしたか、もうお歸りなされさうなものだ。

ト合方題目太鼓にて花道より島藏出來り、花道にて、

島藏　さつき悴が招魂社で、世話になつたといふ人は、正しく今の淸兵衛樣、先達からお行方を尋ねて居たが計らずも、今日お目にかゝつた上は、早く金をお返し申し、此身の科を自首なして、御處刑受けて天下晴れまことの人になりたいが、折も折とて播州から遙々尋ねて來た親父、嘸歎かつ

しやることであらう。あゝ親に不孝なことだなあ。（ト本舞臺へ來り）今歸つた。

お濱　だいぶ遲うござんしたな。

島藏　餘儀ないことで遲うなつた。

お濱　さうしてお前の尋ねなさんす、福島屋さんでござりますか。

島藏　おゝ、如何にも己が尋ねて居た、淺草の福島屋だ。

お濱　それでは先頃千圓の、

島藏　これ、（ト押へて邊りへ思入あつて）人に知れゝば身の大事、必ず大きな聲をするな。して、德藏は内に居るか。

お濱　今どん〳〵の橋本さんへ、酒を持つて行きました。

島藏　人の耳へ入つた時は、己が身の大事だから、めつたなことを言つてくれるな。

お濱　是から氣を付けませうわいな。

ト合方になり、奥より以前の磯右衞門、岩松出來り、

磯右　おゝ、忰歸つたか。

島藏　只今内へ歸りましたが、お湯へでもおいでなされましたか。

磯右　明日ゆつくりはひらうと、今夜は湯をばよしました。（ト磯右衛門眞中へ住ふ。）それはさうと今宵に誰も憚る者はないが、島藏そちは悪い病ひを、よく思ひ切つてくれたな。

島藏　さあ、同日同夜同刻に、此岩松が同じ怪我、悪い報いといふことを初めて存じましたから、すつぱり思ひ切りました。

磯右　實は止めたといふ手紙が、屆いたけれど酒好が、禁酒すると同じことで、どうも思切られぬ事故、實は樣子を見に來たのだ。今其方が留守の內、娘に委しく話を聞いたが、只の一晩夜泊りを、したことがないと聞き、私も安心しましたわいの。

島藏　折角思切りまして、御安心をさせましたが、又もやあなたへ御苦勞を掛けませねばなりませぬ。

磯右　そりや何故に。

島藏　一度犯した罪あれば、明日にも悪事が露顯すれば、輕くて十年重ければ生涯出られぬ終身の、苦役をせねばなりませぬ。

お濱　え、それでは兄さんお前は止めても、一旦なせし科あれば、

岩松　脱れる譯には行きませぬか。

島藏　刄物を持つて押込みにはひつたからは以前なら、五ヶ所の札所を引廻され獄門になる兇狀たが、

今は命が助かつて身は終身の懲役でも、其内お上にお目出度いお祝ひ事があつたらば、再び娑婆へ出られる體、思ふ金さへ整へば直に分署へ自首なして、上の御處刑受ける所存。

岩松　お老爺さんのお顔を見て、悅ぶ甲斐も情ない、さうなる時はお父さんは、佃へおいでなされまするか。

島藏　此身に恥を柿染の、仕着を着ねばなりませぬ。

お濱　さうなつたらばどうしませう。

磯右　あゝ、なした罪故是非がない。（ト皆々ぢつと思入、時の鐘）

島藏　秋の日の釣瓶落し、今の間に暗くなつた、お濱灯を付けな。

お濱　あい／＼。

ト時の鐘誂への合方になり、お濱ランプへ灯を付け、よき所へ掛ける、此内花道より、前幕の千太帶を締め、着流し、駒下駄に出來り、

千太　神樂坂の左側で、明石屋といふ小賣酒屋、慥に向うに違えねえ。（ト思入あつて舞臺へ來り、門から内を覗き、）はい、御免なさいまし。（トお濱立つて來て、）

お濱　いらつしやいまし、何を上げます。

千太　いえ、なにも買物ぢやあござりませぬが、明石屋の島藏さんといふは、此方でござりますか。

お濱　はい、手前でござります。

千太　それぢやァ御免なさいまし。（ト千太ずつと内へはひる、島藏見て、）

島藏　や、松島か。

千太　おゝ兄貴、よく内に居なすつた。

島藏　昨夜來るかと思つて居た。

千太　實は來ようと思つたが脱れられねえ用が出來て、それで昨夜來なかつた。

ト言ひながらよき所へ住ふ、磯右衞門お濱顔を見合せ思入。

磯右　悴、彼方は何處のお方だ。

島藏　此お方は私が、兄弟同様懇意に致す友達でござります。

磯右　それではこなたのお友達か。

島藏　はい、左様にござります。

千太　兄貴、其のお方は。

島藏　是は今度播州から出て來た、私が實の親だ。

千太　おゝそれぢやあ不斷話に聞いた、播州に居るお前の親父か。

島藏　あゝこれ。（ト目で押へる。）

千太　いや、ちやんとして來ればよかつたが、こんなちやんが、いや、こんなお客があらうとも知らずに不斷の裝で來て、お目に掛るも面目ねえ。（ト磯右衛門思入あつて、）

磯右　是は初めてお目にかゝりますが、私は島藏が親磯右衛門と申す者。

お濱　又私は妹の濱、是に居るのは兄の悴。

岩松　岩松と申しまする。

磯右　してお前樣のお名は、

千太　えゝ、わつちが名かえ。

島藏　あゝこれ、此方は、松島千右衛門殿と言はれます。

磯右　千右衛門樣とおつしやりますか。（ト千太ちやんとなつて、）

千太　如何にも、松島千右衛門と申します。

磯右　悴が御懇意とあるからは、

お濱　どうぞ是から、お心易く、

岩松　お願ひ申し、
三人　上げまする。
千太　わつちも時折參りますから、是から兄弟同樣に、心易くしておくんなせえ。
島藏　これ。（ト袖を引く、千太眞面目に。）
千太　いや、下さりませ。
磯右　して、お前樣の御生業は。
千太　わつちの生業は、どろさ。
磯右　へえ、どろとおつしやいますは。
千太　さあ、どろは。（ト島藏引とり。）
島藏　どろといふのは横濱で、諸國の銀貨を取扱ふ、どろ屋のことでござります。
千太　いかにも、わつちやア、其のどろ屋さ。
お濱　よい御生業でござりますな。
磯右　定めてどろ屋は大金を、お取扱ひなされませうな。
千太　出來のいゝ其晩は、何百圓といふ金を、持つて歸ることもあります。

磯右　そりやどういふ譯でござります。
千太　其譯かね。(ト言はうとするを島藏引取り)
島藏　それは、どろの相場があつて荒高下の其時は、何百圓といふ金を儲かることもありますが、纔な高下の其時は、端た金を取りますのさ。
磯右　それでは矢張米相場と、同じ樣なものでござるか。
島藏　同じ樣なものでござります。
千太　何にしろ此世の中に、元手入らずの商法だから。
お濱　元手いらずで出來ますとは。
島藏　さあ、元手入らずと今言つたは、空米相場と同じ事で、其處へ金を積まずとも何萬圓でも生業の出來るが今いふ元手いらず。
千太　只取る樣な商法さ。
磯右　大した金をたゞ取るとは。
お濱　どうやらそれでは。
ト此時紅た〳〵にて德藏逃げて來り、舞臺にて思入あつて下手へはひる。跡より○△□の三人尻端折

にて追掛け出て、お濱の臺詞の留りへ、

三人　泥坊々々々々。(ト四邊を搜す、千太此聲にびつくりして立上るを、島藏押へて、)

島藏　何をそんなに驚くのだ、掏摸が簪でも拔いたのだらう。

千太　おらア又さうとは知らず、疵持つ足にびつくりした。(ト門口の三人思入あつて、)

○　今の掏摸めは何處へ行つたか。

△　爰らで影が見えなくなつた。

□　裏へ入つて搜して見よう。(ト三人下手へはひる。)

島藏　して、千右衛門殿には、今夜何ぞ用でもあつて來なすつたのか。

千太　ちつと內證の話があるが、少し何處ぞへやつてくんねえ。

島藏　承知しました。これお濱、千右衛門殿が內證の話があると言はるゝから、幸ひ今日は寅の日故、神樂坂の毘沙門樣へ、親父樣と三人連れで、お參り申して來るがよい。

お濱　御緣日にはかゝさずにきつとお參り申す故、一緒にお連れ申しませう。

磯右　それではおれも一緒に行くのか。

岩松　植木屋が出て賑やか故、歸りに御覽なされませ。

磯右　おゝ、國へ土産に見物せうか。（ト奥より三太ぶら提灯を持出て、）
三太　毘沙門様ならお供しませう。
島藏　手前も一緒に行くがいゝ。
お濱　そんなら行つて參ります。あなた、御ゆるりと。
千太　ゆつくり跡で話します。（ト皆々門へ出て、）
岩松　さあ、おぢいさん、參りませう。
磯右　おゝ、案内をしてくれ。
　　ト唄になり、花道へ行き、磯右衞門お濱と顔見合せ、思入あつて跡へ歸り、下手へはひる。島藏門口を明け、表へ思入あつて、
島藏　これ千太、あれ程己が言つて置くに、以前の事をべら／＼喋り、おらァびつしより汗になつた。
千太　おれもあんな父さんが來て居ようとは思はねえから、何と言つていゝか知らねえから、實におらあどじついた。
島藏　手前まだ止めねえのか。
千太　酒と女がふッつりと、嫌ひになつたら知らねえこと、一杯やると一晩でも、遊びに行かにやあ寐

られねえから、死ぬ迄おらァ止められねえ。

島藏　いゝ加減に見切りを付けて、手前も足を洗へばいゝ。

千太　さうして兄貴、お前は止めたか。

島藏　己はふッつり止めてしまつた。

千太　何で止めてしまつたのだ。（下誂への合方になり、島藏思入あつて、）

島藏　何でもして惡いことだと、自分で思つた其日には、氣後れがして掏摸も出來ねえ、是には色々譯があつて、ふッつり止める氣になつたのも、一ッでも二ッでも餘計に年を取つて居る上、親兄弟に子迄あるから、老込みやうも早いのだ、何時がいつ迄苦勞を掛けるも本意でねえと心が付き、足を洗つて堅氣になり、纔な儲の小賣酒屋、一合二合の商ひで一生樂に暮す氣だ。

千太　さういふことゝは知らねえから、以前の積りで出て來たが、實は今夜仕事があつて、お前の手をば借りに來たのだ。

島藏　いゝことならば兄弟の縁を結んだ中だから、どんなことでも手を貸さうが、惡い事ならお斷りだ。

千太　向うの相手が士族だから、肚胸の惡い奴等をば、連れて行つた其時は、思ふ仕事が出來ねえ上、

喰え込むめえものでもねえから、お前を今夜頼みに來たのだ、兄弟分の誼をもつて、今夜一緒に行つてくんねえ。

島藏　折角手前の頼みだが、金毘羅樣へ願ひを立て、すつぱり止めてしまつたから、それぱかりは堪忍してくれ。

ト此時下手より磯右衞門お濱岩松出て、門口に窺ひ居る。

千太　そりやアさうでもあらうけれど、明日が日己が手當になり、送りになつた其時に、どんな問を掛けられても言はねえ氣だが、どういふ事で見知り人が、向うにあつて脫れられず、罪に落ちたら千圓盜んだ舊惡で、お前も一緒に行かざアなるめえ。

島藏　むゝ、（トぎつくり思入。）

千太　いくらお前が堅氣になつても、どうで一度は兇狀を着にやあ綺麗になられぬ體、今夜己と一緒に行つて一働きしてくれても、別に罪の重くなる譯もなけりやあこれ兄貴、どうぞ一緒に行つてくんねえ。（ト島藏是非なき思入にて。）

島藏　其事に付いて手前にも話してえことがあるが、何をいふにも爰は町中、隣近所へ憚れば大きな聲で言えねえ身の上、兎も角も此四月、九月末に逢はうと言つて、西と東の生れ故鄕へ羽がひを伸

て別れた二人、運よく天の網を脱れ約束通り九月の末に、目出度く逢つた今宵の出會、達ての頼みを斷るも、あんまり色氣のねえことだから、一緒に行かうが今は行けねえ、親父や妹が歸つて來て用を拵へ後から行くから、暮れては人の通りも少ねえ、招魂社の鳥居前で、己が行くのを待つて居ろ。

千太　それぢやあ俺が頼みを聞いて、今夜一緒に行つてくれるか、それは何より有難い、是でこそ兄弟分だ、お前が行つてくれせえすりやあ、心丈夫に働ける、どうで向うへ忍び込むのは十二時過ぎのことだから、是から何處ぞで一ぺい飲み、十時過ぎに招魂社の鳥居前に待つてゐるから、きつと來てくんなせえ。

島藏　八幡の十時を合圖に出掛けて行くから、待つて居てくれ。（ト千太思入あつて、）

千太　いつか廣小路の天道干で、脅しに買つた脇差を、お前いまだに持つて居るか。

島藏　今はいらねえものだけれど、思ひの外に勝れた業物。

千太　え。

島藏　いや、筋の惡い代物だから、うつかり賣るのも氣味が惡く、そつと隱して持つて居る。

千太　内にあるこそ丁度幸ひ、あれを持つて來てくんねえ。

島藏　それは言はずと己も承知だ。

ト此内門口の三人人の來る思入にて、下手へはひる。引違へて下手より以前の德藏出て、

德藏　小遣ひ取に引こ拔いた財布の中は端た錢、小札が一枚ありやあしねえ。（ト財布を懷へ入れ、門口を明け、）はい、大きに遲くなりました。

島藏　おゝ、德藏か。

德藏　橋本樣へ參りましたら、お遣ひ物になりますので、お供をして築土迄參りましたので、遲くなりました。

島藏　春と違つて秋の日暮は、暮れかゝると瞬く間だ。

德藏　途中で日が暮れてしまひました。（ト言ひながら千太を見てびつくりなし、）や、お前は。

千太　むゝ、德次郎か。（ト千太びつくりこなし、）

德藏　どうして爰へ來なすつた。

島藏　こりやあ新參の奉公人だが、手前は知つて居るのか。

千太　奥州の白河に、己が遊んで居た時分車を曳した若い者、野州德と肩書のある旅を挊ぐ人力車だ。

德藏　まことに親分お前さんに、爰で逢つては面目ない。（ト天窓を押へ蹲る。）

島藏　それぢやあ是もひゞのある、旅挊ぎの人力車か。

千太　己が佃に居た時に、一緒に土を擔いだ奴で、以前を知つて居る所から、足元を見てゆすつた上、己が惡事を探索へ、言ッ付口をしやあがつた。

德藏　實はあの折錢に困り、濟まねえことをしましたが、堪忍しておくんなせえ。其後長く煩らつて難儀をしたのでさつぱり目が覺め、堅氣になる氣で足を洗ひ、こつちのお內へ雇にはひり、樽拾ひになりました、腹が立つならわつちをば存分にしてあの折の、科を許しておくんなせえ。

ト手をつき、天窓を擂付して詫びる、千太思入あつて、

千太　外で逢やあ遺恨があるから、たゞ此儘ぢやあ置かねえが、以前と違つてこつちの內の奉公人とあるからは、己が存分にする日には、兄貴に難儀を掛けにやあならねえ、其處を思つて何にも言はず、此の儒手前は許してやらう。

德藏　それは有難うござります。是といふのもお慈悲深い、こちらに奉公したお蔭、旦那樣、有難うござります。

島藏　目見得に來た其時から、痒い所へ手の屆く心の利いた奉公人、油斷のならねえ男だと、思つて居たが案の定、手前も惡事のある體か。

徳藏　大したことも致しませぬが、三度懲役に行きました。
千太　言ひてえことも言はねえ替り、手前も己に逢つたことを、決して人に言つてくれるな。
徳藏　何しに人に言ひますものか。（ト時の鐘島藏思入あつて、）
島藏　毘沙門樣へ參りに行つた、もう父さんや妹が、歸つて來る時分だから、歸らぬうちに出掛けてくれ。
千太　こつちも逢ふのは面倒だ、歸らぬ内に出掛けよう。（ト下手へ來り、）それぢやァ兄貴、必ず今夜。
島藏　きつと行くから待つて居ろ。（ト千太門口へ出、）
千太　どれ、軍鷄で一ぺいやつて行かうか。
　　ト時の鐘合方にて、千太花道へはひる、徳藏思入あつて、
徳藏　旦那樣、どうしてあなたはあのお人を、御存じでござります。
島藏　あれは以前の友達だ。
徳藏　兄貴々々とお心易く、兄弟の樣に言はれるのは、若しや旦那も。
島藏　え。
徳藏　旦那も定めて私の、以前を聞いて油斷がならぬと思召すでござりませうが、御用奉公する位、心

を改めましたから、油斷がならぬと思召さず、お使ひなされて下さりませ。

島藏　人は一旦惡いことをして、改心をした者が堅氣なものより役に立つ故、決してこつちは疑はねえから、己が內に辛抱してくれ。

德藏　さうおつしやつて下さりますれば、まことに有難うござります。

島藏　まだ飯前だらう、奧へ行つて夜食を喰つてしまふがいゝ。

德藏　それでは頂戴致しませう。（ト德藏立上る時、懷より財布を落す、島藏取上げ）

島藏　や、此財布は。

德藏　いえ、私のでござります。（ト引取つて懷へ入れ、合方になり、德藏奧へはひる、島藏跡を見送り）

島藏　初手から油斷のならねえ奴と、思つて居たが役に立つ故、一年極めで雇つたが、彼奴も旅の挊と聞いては、使つて居るも氣がねえが、今暇を遣つたらば仇を返すに違えねえが、己が望みの叶ふ迄は、先手なづけて置くのが專一、こんなことを親父の耳へどうぞ入れ度くねえものだ。

ト時の鐘、床の淨瑠璃になり、

上るり〽跡には何と島藏が思案にくるゝ秋の末、冬を隣に窺ひし袖に時雨の二人が、門口戸明けて入りければ、

ト此内島藏ぢつと思案の思入、下手より以前の三人出て、門口を明け、ずつと内へはひろ、島藏びつくりなし、

もうお歸りでござりましたか、大層お早うござりましたな。

磯右　おゝ早い筈だ、毘沙門樣へは參らなんだ。

島藏　毘沙門樣へ參らずに、何所へおいでなされました。

磯右　何處へも行かずに門口で、

お濱　最前からの樣子をは、

岩松　殘らず聞いて居りました。

島藏　え、(トぎつくりなし、)それでは千太と二人の話を、

〽南無三大事を聞かれしかと、驚く悴の前へ坐し、(ト島藏びつくり思入、磯右衞門傍へ寄り、)

磯右　島藏、まだ心が直らぬな。

島藏　なに、直らぬとは。(ト誂への合方になり、)

磯右　招魂社の鳥居前で、千太とやらが待合すは、盜みに行くのであらうがな。

島藏　あこれ、めつたなことをおつしやいますな。

磯右　隱してある脇差な、今夜持つて行かうといふは、强盜をなす所存だな。

島藏　さういふ譯ではござりませぬが、今此内で斷るとも、なか〳〵心の曲つた奴故、容易なことでは得心しませぬ、四邊に遠慮のない所で、とつくり千太に言聞せ、思ひ切らす所存故、必ずお案じなされますな。

磯右　いや〳〵、それは嘘ぢや〳〵、やつぱり內々是迄も、盜みをしたに違ひない。

〽濱邊育ちに磯右衞門か、大聲上げるを憚りて、（卜磯右衞門大きな聲をするを留めて）

島藏　これ親父樣、明石と違つて家込みに軒を並べる市中の住居、大きな聲をなされますな、隣りとは云へ壁一重、今此事が洩聞え、召捕になる其時は、改心なした甲斐もなく、一旦盜んだ金を返し、お上の御處刑受けた上、まことの人にならうと思ふ、此の島藏が望みも叶はず、自首せぬ時は强盜に、生涯出られぬ終身の苦役をせねばなりませぬ。

磯右　それも己が心から、人の知つたことではない。

お濱　折角はる〴〵父さんが、國から尋ねてござんしたに、よい耳はお聞せ申さず、又もや御苦勞掛けるのは、兄さん不孝でござりますぞえ。

岩松　お爺い樣のお心休め、今夜は何處へもおいでなさらず、內に居て下さりませ。

〽今更何と岩松に、縋り留められ是非もなく、（ト岩松に縋り留められ、島藏思入あつて、）

島藏　妹が知つて居る通り、改心なして只一夜暮れては外へ出ぬ島藏、ましてや國から親父様がおいでなされたことなれば、常なら今宵は内に居て、御酒でも上げて終夜過越方のお話を致しますでござりますが、千太と約束なしたれば、行かずに居れば又内へ再び彼が參ります故、纔半時か一時の内、どうぞ遣つて下さりませ。

〽言ふをも聞かぬ老の一徹、

磯右　おゝ行くなら勝手に行くがよい、國へ歸つて島藏もさつぱり惡い心が直り、眞人間になりましたと、土産話にしようと思ひ、それを樂みに來た所、やつぱり心が直らずに、夜働を致しますと人に話が出來ようぞ、再び國へ歸られねば、身でも投げて死なねばならぬ。

お濱　父さんが死なさんすりや、私も生きては居りませぬ、ともゞ冥土へ行きまする。それも定まる約束と思へば悲しいこともないが、人並ならぬ岩松を、一人跡へ殘して行くが、わたしや悲しうござりまする。

岩松　さうなる時はわたしも一人何で生きて居りませう、お祖父様や伯母様と、一緒にわたしも死にまする。

お濱　そんならそちも一緒に死ぬか。
岩松　人並ならぬ不具なわたし、跡に殘つて憂目を見るより、死ぬのがましでござります。
お濱　お前故に死なしやんしたおなぎさんの忘れ形見、たつた一人の岩松が死ぬのが可愛うござんせぬか。

〽さりとはつれない心やと、悔み歎けば岩松も、

岩松　わたしがかういふ不具になつたも、親の因果が子に報ふ譬の通り、怪我からして跛者になりし此の岩松。

〽それが智識でさつぱりと、盗みを止めて下さんしたは、

不具になつても私の孝行、嬉しう思うてをりましたに。

〽情ない父樣と、縋り歎くぞいぢらしき。（ト岩松宜しくあつて、）

お濱　はる〴〵遠い明石から、お前の心の直つたを樂しみにしてござんした、
岩松　お年寄られしお祖父樣を、
お濱　殺すも生かすも兄さんの、心一つでござりまする。
岩松　どうぞ行かずに下さりませ。

へ右と左に妹と悴に縋りかき口說かれ、聞くもせつなき島藏が、歎息なして二人を留め、

ト お濱岩松島藏に縋り付いて歎く、島藏せつなき思入にて、

島藏 今岩松が言ふ通り、親の因果が子に報ふ道理を悟り目が覺めて、心を改めふッつりと盜みを思ひ切つた島藏、以前遊んで居た時分兄弟分の緣を結んだ、千太が尋ねて來たのが災難、內では世間を憚る故、向うで賴むを幸ひに人通なき招魂社の鳥居前でとつくりと、異見をなして賊を止めさせ、まことの人になす所存、所謂常が常ならばと、是迄惡い行ひにまことの事と思召さず、親父樣が死ぬとあらば、死出の魁島藏が、命を捨て潔白を立てるは易いことなれど、

へ只の一日孝行せず、不孝に不孝を重ぬる道理、

それ故死なねばならぬのを、恥を忍んで生ながらへ、金を調へ福島屋へ返した上で自首なして、一度上の御法通り苦役を勤め滿期の後、世間も明るき身となつて、子供の折から御苦勞掛けた御恩送りに一日でも、孝行をして島藏が不孝のお詫をする心、嘘僞は申しませねば、暫時の間親父樣、どうぞお暇下さりませ。

へどうぞ許して下されと、事を分けたる島藏が、詞にまこと顯れて、磯右衞門も打ちうなづき、(ト島藏宜しく思入、磯右衞門こなしあつて)

磯右　むゝ僞でないことならば、やるまいものでもないけれど、若し又心が直らねば、直におれは身を投げて生きて再びそちには逢はぬぞ。

島藏　親の命に拘る事、決して背きは致しませぬ。

お濱　明日の朝迄父さんは、私がお留め申しますから、必ず惡い心を出さず、

岩松　お祖父樣のお土産になります樣に、もし父さん、どうぞお願ひ申しまする。

島藏　手前達にも苦勞は掛けぬ、案じるには及ばぬぞ。

磯右　其の詞に僞なくば、許してやるから行つて來い。

島藏　すりや、お許し下さりますとか、えゝ有難うござりまする。

〽親の許しに嬉しやと、安堵なしたる門口へ、立歸つたる丁稚の三太、

ト島藏ほつと思入、ばた〳〵にて下手より三太提灯を持ち出來り、

三太　毘沙門樣で遊んで來いと、お濱さんのお許しで、ゆつくり遊んで來た。（ト門口を明け、）ハイ、只今歸りました。（ト内へはひり、）

お濱　おゝ、三太歸つたか。

三太　今徳藏どんに逢ひましたが、何處へお使に參りました。

お濱　いや、何處へも使にやりはせぬが、
三太　包みを背負つて坂下へ、大層急いで行きました。
島藏　南無三、彼奴に持逃げされたか。
〽聞くより島藏一大事と、奥の一と間へ駈入つたり、
ト島藏つか〳〵と奥へはひろ、皆々立掛り、
お濱　油斷がならぬと思つたが、着物でも盗み出せしか。
磯右　跡を追掛け行かうにも、己は所の勝手がしれず、
岩松　勝手を知つた私は、行くことならぬ此の跛者。
お濱　困つたことが出來ましたな。（トばた〳〵にて奥より島藏出て來ろ。）何ぞ持つて行きましたか。
島藏　簞笥の着類が四五枚見えぬが、それは纔なものなれど、二百圓に買手のある、あの脇差を持つて行つた。
お濱　すりや、脇差を、え丶丶丶。（トびつくりなす。）
島藏　惡い奴と知りながら、奥へ一人置いたが過り。
磯右　少しも早く跡追掛け、

お濱　取押へて下さんせいな。
島藏　いや、追掛けて行くに及ばぬ。
お濱　そりや又何故。
島藏　今徳藏が跡追掛け引とらへて差出さば、必ず惡事を言立つて、己を抱込むに違ひない、さすれば日頃の望みも叶はず、終身娑婆へ出られぬ懲役。（ト本釣鐘を打込む。）やゝ、ありや八幡の十時の鐘。
磯右　千太とやらに招魂社にて、
岩松　父さん、お前が、
お濱　出逢ふ刻限。（ト島藏岩松の杖をとり、）
島藏　道の用心、此の杖を、犬脅しに持つて行かう。
お濱　そんなら、お前は、
岩松　招魂社へ。
島藏　おゝ、約束なれば行かねばならぬ。（ト島藏腹守の胴卷を出し、）親父樣、是を預つて下さりませ。
ト磯右衞門の前へ投げる、磯右衞門取上げ、

磯右 や、此の包みは、
島藏 そりや福島屋へ返す金。
磯右 おゝ、慥に己が預つた。
お濱 そんなら、兄さん。
岩松 少しも早う。
島藏 留守をしつかり。(ト外へ出て門口をしめるを木の頭。) 頼んだぞ。
ト尻を端折り、きつとなる、本釣鐘の寺鐘早き合方にて、宜しく、
ト時の鐘、水の音にてつなぎ、直に引返す。

ひやうし幕

五幕目

招魂社鳥居前の場

「役名――明石の島藏、松島千太、望月輝、野州德、夜蕎麥賣り、堀の内參り等。」
(招魂社の場)……本舞臺上寄りに石の大鳥居、左右石垣の草土手、此上に小松上下松の大樹、日覆より同じく松の釣枝、後銅燈籠一對、石燈籠數多く、本社を見たる夜の遠見、總て招魂社鳥居前の體、

爰に夜蕎麥賣荷を下し、側に尻端折脚絆草履の堀の内參り○△の二人蕎麥を喰つて居る、此見得時の鐘、四つ竹節にて幕明く。

○　おい蕎麥屋さん、もう一ぺい替りをくんねえ。

蕎麥　はい／＼。

△　次手に己も替りを貰はう。

蕎麥　はい／＼。（ト蕎麥屋そばを拵へる。）

○　以前と違つて夜鷹蕎麥は、賣手が今ぢやあ少ねえ樣だね。

蕎麥　おつしやる通り山の手ばかり、下町にはござりませぬ。

△　其替り鍋燒饂飩が、一年増しに多くなつた。

蕎麥　へい、お替りが出來ました。

ト出す、兩人捨臺詞にて喰ひながら、

○　夜鷹蕎麥には珍らしいな。

△　さうよ、めつぽふにいゝ鹽梅だ。

蕎麥　此邊には蕎麥屋が少く、ちよつと不自由でござりますから、大概私の參りますを、お待ちなす

つて下さいます故、蕎麥もしたじも氣を付けますので、此居廻りから三丁目谷を、一廻り廻りますと、あらかた賣れてしまひます。

〇そりやあ必ず賣れる筈だ、したじ鹽梅のいゝことは、居見世の蕎麥屋も同じことだ。

△是では誰でも待つて居る筈だ。

蕎麥　有難うござります。お前さん方は、脚絆がけで、何處へおいでなさいました。

〇今日晝過から堀の内へお參りに出掛けたが、秋の日の短いのに、しがらきで御神輿を据ゑ、

△草臥休めにゆつくりと呑んで、鍋屋横町を暮れて出たから、大層遲くなりました。

蕎麥　そりやあ嘸お草臥なさいましたらう。

△コウ吉公、此の招魂社といふのは、何を祀つたものだな。

〇こりやあ近い頃戰爭で死んだ人を祀つたのだが、身分は輕い兵隊でも、お上の爲めに死んだのだから、こんなに立派に出來たのだ。

△おらあ何時でも外を通つて、中を見たことがないが、斯う見たところが綺麗さうだな。

蕎麥　晝間はひつて御覽じまし、泉水の中に噴水があつて、庭の樹木は大したもので、四季に花が絶えませず、隨分わざ〳〵遠方から、おいでなすつてもようござります。

○ あい、蕎麥屋さん、錢を取んねえ。

蕎麥 へい、有難うございます。（ト錢を取る。）

△ さあ〳〵急いで切り出さう。

○ 蕎麥屋さん、何時だね。

蕎麥 今十時を打ちました。

△ よく芝居でもすることだが、蕎麥屋さんといふと、時を聞くね。

蕎麥 こりやお紋切形でござります。

○ 時を聞いたらちつとも早く、

蕎麥 私も是から一廻り、

△ それぢやあ蕎麥屋さん、

蕎麥 お別れ申します。

○ 蕎麥イ〳〵。

ト右の合方にて、蕎麥屋は上手へ、兩人は花道へはひる。時の鐘、床の淨瑠璃になる。

上るり〽秋の夜のならひか空に風ありて、雲行早く星影も、ところ〴〵に二つ三つ四つ辻過ぎて來

る人を、松島千太が小蔭に佇み、
ト時の鐘風の音にて、上手より前幕の千太頰冠にて出來り、邊りへ思入あつて、

千太　今打つたのは十時だが、まだ島藏が出て來ねえは、見世をしまつて來る積りか、一旦約束をしたからは、まさか來ねえことはあるめえ、何にしろ高臺の風當りが強いから、涼しいどころか寒いので、宵の酒がさめてしまつた、十一時にならねえ内、早く來てくれりやあいゝが。

〽四邊見廻し捨石を、是幸ひと腰を掛け、待つ間程なく向うより息せき來たる島藏が、星の光に透し見て、

ト時の鐘、花道より前幕の島藏出來り、花道に留り向うを見て、

島藏　鳥居の側に人影の見えるは慥に松島千太、十時を打つて出て來たから、己の來るのを待つて居たらう、どれ早く行つて逢つてやらう。

〽暗き夜道も馴れし身に、鳥居の前へ歩み來て、（ト島藏本舞臺へ來り、）

其處に居るのは、千太か。

千太　おゝ兄貴か、よく出て來てくんなすつた。

島藏　内で十時を聞いたから、三十分もおくれたらう、よつぽど爰で待つて居たか。

千太　己も軍鷄屋で二本飲んで、今し方爰へ來たから、何もそんなに待ちやあしねえ。まあ兄貴、爰へ掛けねえ。

島藏　丁度いゝ石があつたな。（ト新内の合方になり、手拭で石の上を拂ひ、兩人捨臺詞にて腰を掛け）

千太　こゝらを新内が流して歩いて、語らせる者があるかなア。

島藏　あるからあゝして歩くのだ、門付や道樂寺は山の手が得意ださうだ。

千太　なるほどこりやア其土地へ、住つて見にやあ知れねえな。

島藏　そりやあさうと手前が今夜、己に一緒に行つてくれといふ、其先きは何者だ。

千太　其先きといふは神樂坂下で、表がゝりはちよつと見ると、官員かと思ふ樣な拵だが、元舊幕の直參で、今書家だとかいつて居るが、腹の中の始れねえ獸、瓦解前に强談で既に首になる所、御一新後に天朝から非常の大赦で放免され、盜んだ金か知らねえが、それから世間へ金を貸し、今望月輝といつて、金に困らぬ樂な身の上、其處へ今夜忍び込み、夫婦を殺して有金を、殘らず浚つて上方へ高飛をする了簡だ。

島藏　むゝ、其の望月輝といふのは、仔細あつて知つて居るが、金はあるに違へねえから、たゞ脅して取つたらいゝに、何で夫婦を殺すのだ。

千太　是にも譯のあることさ。

島藏　して、其殺す譯といふは。

千太　今其輝が表向女房にして居る女といふは、此の四月迄白川で辨天お照と名の高い、枕藝者の旅稼ぎ、そいつに惚れてうか／＼と十日ばかり白川に、長逗留をして居る内、金びらきつて口說いたが、なか／＼向うの目が高く、己が言ふことを聞かねえから、手籠にしようと思つた時、探索方に取卷かれ、危く其場を逃去つて、諸所を經廻り此方へ來て、はからずお照の居所が知れ、昨日ゆすりに行つた所、以前は浪士で强談をして來た果の輝故、向うが一枚役者がよく脅し文句を何とも思はず、己がお照に白川で百圓やつた其金を、返して遣るから是を持つて早く歸れとあべこべに、向うの凄みな臺詞を聞き金を取つて歸るのもあんまり役が惡いから、素手ですご／＼歸つて來たは、其の二番目の仕返しに、今夜お前と一緒に行き、夫婦をばらして遺恨を晴し、盜んだ金を二つに分け、又半年も上方へ下り役者で乘込む積りだ、賴みといふは此一件、厭でもあらうが、これ兄貴、一役助けてくんねえな。（ト島藏思入あつて）

島藏　そりやあ折角の賴みだが、どうも己は聞かれねえ。

千太　聞かれねえとは、そりや何で。

島藏　さつきも手前に言ふ通り、己はすつかり心を改め、盜みは思ひ切つてしまつた。

千太　同じ事を繰返して、くどく言ふにも及ばねえが、いくらお前が思ひ切つても、明日が日己が手當になつたら、言はずとお前は同類で、輕くて十年重けりやあ、生涯出られぬ終身懲役。

島藏　そりやあ手前が言はずとも己も承知はして居るから、御用の聲の掛るのは、覺悟の前で斯うして居るも、少し望みのあることだ、惡い心を入替へて、盜みを止めたも譯のあること、まあ一通り聞いてくれ。

〽見廻す四邊も更ける夜に、行交ふ人の影もなく、千草に蟲の聲ばかり、

ト誂への合方蟲笛になり、島藏四邊へ思入あつて、

日外手前に淺草で別れてあれから生れ故鄕の明石へ尋ねて行つた所、親兄弟に替りはねえが、親父に己が預けておいた一人の倅が跛になり、生れも付ねえ不具になつた譯を聞いて驚いたは、出刄庖刀を親父が研ぎ、棚へ上げて置いたのを、夜更けて猫が鼠を取るはずみに棚からそれを落し下に寐て居た倅の足へ、當つて深い疵を受け、それから遂に跛となり、歩くも自由にならねえ不具妥に不思議は疵を受けた其夜は四月二十日の夜で、しかも時刻は十二時前、己が手前と福島屋へ入つた晩も同じ二十日で、時刻も同じ十二時前、切つたも同じ左の足、

〽親の因果が子に報ふと、世の譬にも言ふけれど、斯う覿面に報ふものかと、心が付いて見る時は、凡そ盗みをした者は、人間一生五十年の坂を越した者はなく、先づ二十五の曉迄に天の罰を蒙つて長く生きて居られねえのは、みんな惡事をした報い、こいつあ心を改めにやあならねえことゝ氣が付いて、すつぱりと止めてしまひ、其時丁度四百圓金が殘つてあつた故、五百圓に是をまとめ、福島屋へ返した上自首して上の御處刑受け、まことの人になる積りで再び歸つて神樂坂へ、小賣酒屋の見世を出し、今は堅氣な明石屋島藏、此譯故に折角の手前の頼みが聞かれねえ。

〽惡の報いを言諭せど、千太は馬の耳に風、

千太　それぢやァお前は福島屋の、亭主の足を切つた日と同じ二十日の其晩に、息子が怪我をした所から臆病風に誘はれて、弱い心になつたのか。

島藏　如何にも手前の言ふ通り、惡事の報いを知つたから、弱い心になつたのだ、只氣の毒なは福島屋千圓盗んだ其金から遂に地面を賣つてしまひ、內を疊んで逼塞なし今は行方もしれぬ故、諸所方方を尋ねる內、今日計らずも見世へ來た、人柄のいゝ小娘が醬油を二合持つて來てくれろといふので名を聞けば、福島屋といふ事を聞いて若しやと醬油を持ち、尋ねて行つて見たところ、案に

逢はず其人にて、宮比町の裏家に住み親子二人が幽な暮し、目も當てられねえ有樣に、丁度幸ひ百圓の金に困つて居る所ゆゑ、それと言はずに金を惠み、十分一の報いをなし、殘の金の四百圓を返して直に自首したさも、折の惡さは明石から堅氣になつたと悅んで、はる〴〵親父が來た故に、無據期を伸ばした所へ今夜思ひがけなく、手前が來ての餘儀ない賴み、內で兎やかういふ時は親父や妹の手前もあり、殊に隣は壁一重、事が洩れゝば互ひの身の上、それで爰へ出て來たが、賴み甲斐のねえ者と思ふであらうが此譯故、一緒に行くのは許してくれ。

千太 隨分お前も是迄は情をしらねえ人だつたが、何でそんな氣になつたか、凡夫盛んに神祟りなしと惡事をなした其報いで、お前にそれだけ罰が當りやあ、己にも當らにやあならねえ譯だ、誰にも報いがあることなら、金を取られた福島屋も生業柄にいかものでも、拵へて賣つた報いだらう、內が潰れて裏店で貧乏ぐらしをして居るも、其身を懲らす天の罰、其處へ盜んだ金を返すはこんな馬鹿げたことはねえ、先づあの時から半年餘り、斯うして樂に暮して居るは、天の罰を當てる程の體に罪がねえからだ、そんな氣の弱いことを言はずに、今夜一緒に行つてくんねえ。

島藏 いくら行つてくれと言つても、己はふッつり止めたから、此賴みは聞かれねえ、一人で行けずば幸ひだ、手前も今夜止めにしろ。（ト千太むつとせし思入にて）

千太　今更言つても仕方がねえが、佃に居た時貝殻のこはれで互ひに腕を切り、血汐を飲んで兄弟の義を結んだ其時に、是から先は生き死にを一緒にしようと言つたのを、よもやそれを忘れやあしめえ、それに頼みを聞かねえのは、あんまり誼がねえぢやあねえか。

島藏　いや、誼があるから留めるのだ。

千太　何だと。（ト合方きつぱりとなり、）

島藏　どんな遺恨があることか、委しいことは知らねえが、今夜手前が切り込んで、向うの二人を殺した上、金を浚つて逃げた所が、昨日ゆすりに行つたからは直に上の目串が付き、それからそれへ電信で知せが廻れば脱れられねえ、三日と立たず捕へられ、送りになつたら賊と違つて、人を殺せば斬罪の處刑は言はずと知れたこと、假令今夜千圓の金を盗んで行つた所が、三日の内に捕られたら遣つた金は五十か一本、纔な金で命を捨てるは、あんまり馬鹿げた事ぢやあねえか。手前も己が意見に付いて、爰らが足の洗ひ所、堅氣になるなら何處が何處迄、兄弟分の誼を思ひ、己が世話をして遣らう、惡いことは言はねえから、二つに分けた五百圓丸で出來ずばいくらでも、金を拵へて福島屋へ返した上で己と一緒に、立派に罪を名乘つて出ろ。

千太　お前も四十にならねえが、豪氣に焼が廻つたな、おらあ八方取巻かれても逃げられるだけ逃げる

氣だ、是から自首をしたところが、一等減じて十年の苦役を佃でしにやあならねえ。己がことを馬鹿だといふが、お前も隨分馬鹿げて居らあ。

島藏　十年苦役をするといふは、そりやあ手前が小さな了簡、盜んだ金を先へ返し改心なして自首すれば、上にも格別御慈悲があつて、一等減じて十年の物なら乃至七年か五年になつたら懲役中、身を慎んで大事に勤め、初犯か二犯の若い者が滿期で出たら強盜を、しようなど、跡先見ずの竊盜に、惡事をすれば天の罰で必ず報いのある證據は、己の忰が斯う／＼と諭して心を和らげさせ、萬に一人改心なす者があつたらお上へ忠節、役人方の目に止らば五年も減じて三年となるは其身の行ひ次第、又三年が二年となり滿期で出たら是迄の、惡事は佃の海へ流し、數年の罪は泡と消え、まことに青天白日の世間晴れた身となつたら、其時一生懸命に、晝夜稼いだことならば、

〽一度は罰を當てた天の、再び惠を受けるは必定。

さつきも己が言ふ通り舊幕時分の十圓から死罪にされる時ならば、とても死ぬなら行掛の駄賃といふもあるけれど、今はお上の御處刑替り千圓盜んだ強盜でも、一命助り終身懲役、此の有難い世の中に人を殺して命を捨てるは、あんまり手前は開けねえ、親から貰つた大事な體を粗末にせずと心を入替へ、己と一緒に堅氣になれ。

〽事を分けたる島藏が、直な詞も横に聞き心ゆがみし松島千太、

千太　お前は親父や妹に可愛い伜があることだから、心を改め堅氣になり、素人になる氣になつたらうが、おらあ親も無けりや兄弟もなし、今更堅氣になつたとて、誰も悦ぶ者はねえから、一生涯盜みをして、してえ三昧なことをしたら、斬られて死んでも本望だ。

島藏　そりやあ手前あんまり愚だ、假令此世に居ねえとて、草葉の蔭で親達が、どんなに案じて居るか知れねえ、死んでしまへば空へ歸り、跡形もねえものならば朝廷初め華族方先祖の祭りはなさりはしめえ、必ず跡のあるもんだから、心を入替へ盜みをやめ、冥土の親に悦ばせろ。

千太　なに、悦ばせるに及ぶものか、親だといつてうぬが勝手に、己を拵へたことだから、恩もなけりやあ義理もねえ、勝手に苦勞をするがいゝ。

〽腹立紛れの憎て口、聞く島藏は呆れ果て、

島藏　手前はそれ程分らねえ木偶の坊とは思はなんだ、今日から口は利かねえから、どうともそつちの勝手にしろ。

千太　おゝ、しなくつてどうするものか、兄弟分になる時に、どんなことでも生死を一緒にしようと約束した、其甲斐もなく此のおれが、頼みを聞いてくれねえけりやあ、兄でもなけりやあ弟でもね

え、縁を切りやあ今日から他人だ、今夜是から切込んで喰へ込んだら其時に、お前を呼びによこすから、支度をして待つて居ねえ。

島藏　それぢやア是程譯を言つても、己が言ふことを聞かねえか。

千太　兄弟分なら兄だから、聞くめえものでもねえけれど、他人となれば五分と五分、誰が言ふことを聞くものか。

島藏　聞かざあ聞くな、こつちも亦他人となりやあ是から自首して、手前に繩を掛けるから卑怯未練に逃げるなよ。

千太　卑怯未練に逃げねえから、何時でも己を迎ひに來い、今夜輝へ切込めば、どうでこつちあ命掛け、二人殺すも三人殺すも取られる首はたつた一つ、惡く留立てしやあがると、島藏汝の命はねえぞ。

〽片肌脫いで懷に隱せし短刀拔放し、目先へ突出す白刄の光、島藏じろりと打見やり、

ト千太きつとなつて立上り、片肌脫ぎ、懷に隱せし短刀を拔き、島藏の前へ突き出す、島藏尻目に掛けてせゝら笑ひ、尻をまくつて傳法なるこなしになり、

島藏　これ、そりやあ素人にいふ臺詞だ、己にいふのは釋迦に說法、こんな無駄なことはねえ、忘れもしめえ佃に居た時、熱氣の世話になつたが緣で、兄弟分の義を結び、滿期の後に娑婆へ出て、强

盗をする脅し文句は、己が教へてやつたのだ、鼠小僧は闇の夜に向うが見えたといふことだが、同じ盗みをして居ながら、あんまり向うが見えねえ奴だ、卽善信士の墓へ參り、樒の水でも飲んで置け、何だ脅しに短刀を拔いて、それで手前は切る心か、石碑の角はかけようが、己の天窓はかけねえぞ。さあ、切れるなら切つて見ろ。

〽恐れげもなく身を差付くれば、千太も引くに引かれねば、

ト島藏體を突付ける、千太思入あつて、

千太　おゝ、切らねえでどうするものだ。

〽言ふより早く切付くれば、飛鳥の如く身を開き、出沒自在の霧隱れ、拔けつ潜りつ挑み合ふ。

ト千太切つてかゝろ、島藏身をかはし、杖にて烈しき立廻り、島藏小手を打つ、千太短刀を落す、是を取らうとするを、島藏留めて兩人きつと見得、是より笛の入りし誂への鳴物になり、兩人摑み合の立廻り宜しくあつて、

〽島藏千太を捻ぢ倒し、落散る短刀取上げて、（ト島藏千太を引倒し、短刀を取上げ胸元へ差付け、）

島藏　さあ千太、今手前を殺すのは有無を言はせず一突だぞ、命を捨てても改心しねえか。（ト突放す。）

千太　誰が改心するものか、殺すといふなら早く殺せ、己を殺せば手前は下手人、一人は死なねえ殺してくれ。

島藏　惡い奴でも人一人、手前を殺せば其替り、己も死ぬのは覺悟のめえだ。

千太　覺悟なら早く殺せ、さあ殺せ〳〵、早く己を殺してくれ。

〽身を摺付ければ島藏が、怺へ兼ねて引倒し、

ト千太憎く島藏に體を摺付ける、島藏胸ぐらを取り引倒し、

島藏　おゝ、殺せとあるなら、殺してやらう。

〽短刀逆手に島藏が、突かんとせしがためらひて、惡人ながらも今日迄は、兄よ弟といひし故、不便に思ひ氣を取直し、（ト島藏宜しく思入あつて、）

賣詞に買詞で、殺せといふなら今殺すが、己も一旦兄弟の縁を結んだことだから、殺してえことはねえ、惡いことだと氣が付いて、盜みを止めることならば、何處が何處迄引受けて生涯世話をしてやる氣だ、手前に分けた五百圓も心さへ改めたら、どうか己が算段して、福島屋へ返した上自首したことなら今もいふ、十年ならば七年か五年になるはお上のお慈悲、それを頼みに思ひ切れ、見得にもならねえことだけれど、金を返して自首するは流石は立派な強盜だと、盜人仲間の噂に

なり、性は善なる人の身に惡いことだと心付き、盜みを止める者が出來たら、聊か上への御奉公人に褒められて生延びるか、惡く言はれて命を捨てるか、爰が生死の境だから、よく了簡を付けて見ろ。

〽流石は兄になるだけの、堪忍強き島藏が、異見も秋の小夜風と、ともに身に沁み惡黨の千太は夢の覺めたる如く、善に返りて兩手を突き、

ト島藏宜しくあつて言ふ、此内千太段々に俯向き、後悔せし思入にて、顏を上げず、よき程に顏を上げ、涙を拭ひ兩手を突き、

千太　これ兄貴、堪忍してくんねえ、お前の異見ですつぱりと、己あ今日から改心した。

島藏　すりや、千太には改心したか。

千太　おゝ、是がせずに居られるものか、五年此方兄弟の緣を結んだ中だとて、己が樣な人でなしを、愛憎も盡かさず幾度となく、眞身の者も及ばぬ異見、今日といふ今日肝にこたへて、己あすつぱり改心した、嘘僞りでない證據は、

〽側に有合ふ短刀を、取るより早く胸元を突かんとなすを取押へ、

ト千太改心せし思入あつて、短刀を取り胸元へ突立てんとするを島藏留めて、

島藏　これ千太、何をするのだ、手前の命が助けてえから、口を酢くして異見もするのだ、今殺す位なら誰が異見をするものだ、改心したといふ側から、何故不了簡なことをするのだ。

ト短刀をもぎ取る。

千太　お前と違つて改心しても、何の役にも立たねえ千太、死ぬのが世界の爲と思つて、命を捨てる氣になつたのだ。

島藏　そんな詰らぬことをせずと、命を大事に堅氣になり、見世でも出して稼いだら、草葉の蔭の親達が嘸悦ぶであらうから、再び惡い心を出すな。

千太　今日から盜みはふッつり止め、是迄長年苦勞を掛けた親の忌日が來たならば、水でも手向けてしやりませう。

島藏　さうしたことならどの位、安心するか知れやあしねえ、とてものことの安心ついで、今夜手前望月へ、切込むことも思ひきつたか。

千太　すつぱり思ひきりました。

島藏　それでおれも安心した。

千太　早く改心したならば、お前に苦勞をかけめえもの。兄貴、堪忍してくんねえ。

〽頭を地へつき詫びる折、樹木の蔭より徳藏が、包みを抱へ立出で、

ト千太詫びる、下手の土手の後より前幕の徳藏、紺木綿の風呂敷包を抱へ出て來る。

徳藏　旦那樣、御免なされて下さりませ。

島藏　や、徳藏か。(ト徳藏下に居て、)

徳藏　千太さんが來たばかり、今日迄隱した素性が知れ、最早長居が出來ないと、思つて路用に簞笥から着類を出した其時に、底にあつた一腰を是幸ひと盗み出し、爰の樹木の蔭へ隱し、夜明になつたら持出さうと、藪蚊に喰はれて居たばかり、最前からの話を聞き、成程今夜盗んだ品をばらして榮耀をした所が、纔か五日か十日にて、又た一年の懲役の苦患をせねばなりませぬから、今日限り私、も惡い心を改めますから、どうぞ許して下さりませ。

〽盗みし品に短刀を、添へてひれ伏し詫びければ、

ト徳藏風呂敷包の上へ短刀を載せて出し、手を突いて詫びる。

島藏　過つて改むるに憚ることなしとやら、惡い心を入替へて、手前もまことの人になるなら、盗んだ科は許してやらう。

徳藏　すりやお許し下さりますか、有難うございます。

千太 今も兄貴がいふ通り早速爰で野州德が、改心したはこつちの規模、斯うなる上はあの折分けた、五百圓の金を拵へ、兄貴と一緒に返したいが、五百圓は扨おいて五圓の金もねえ千太、差當つて望月から百圓取るより當はねえ。

島藏 其望月が懇望故、此短刀を二百圓に賣ればそれにて三百圓、まだ二百圓たりないが、

千太 盜みを止めては一圓でも、金の出來よう當はねえ。

〽金の員數を算うる折柄、(ト上手鳥居の內にて、)

輝 いや、其の二百圓進上申さう、

〽小蔭を出る望月輝、

ト鳥居の內より三紋日の望月羽織着流し、駒下駄にて出て來るを見て、

島藏 や、さうおつしやるは、

千太 望月殿。

輝 島藏殿には初めてなれど、千太殿には計らずも昨日面會なしたる輝、今宵處用で麴町より歸る途中の招魂社、ひそ〳〵話すは何事なるかと、聞くともなしに小蔭にて一部始終を聞きし故、二百圓を進上申す。

島藏　千太は兎もあれ私は、お近付でもない貴方が、小金ならぬ二百圓、下さりますとおつしやるは。
千太　島藏殿へ寸志の謝禮。
輝　とは又何故。
島藏　遺恨によつて千太殿が、今宵邸宅へ切込めば、不意の事故討たるゝか、運よく命助かるとも、如何なる深手を負はうも知れず、危き災難脱れしは、島藏殿が止めし故、恩義に報ふ二百圓。
輝　すりや其金を私へ、お惠みなされて下さりますか。
島藏　かゝるお慈悲な心も知らず、今夜己が切込んだら、しまひは首を切られるところ。
千太　成程惡いことは出來ない、よいことすれば忽に、思ひ掛けなく出來る金。
德藏　噂に聞いたかしらねども、僕も以前は脱れぬ仲間、今兩人が改心せし志を悅びて、二百圓を進上致す。
輝　お慈悲深いお心にあまへて又もお願ひは、昨日手切に下さいますと、おつしやいました百圓をどうぞ千太に下さいまし。
千太　手前も道具屋藤助よりお話し申せし此短刀、高いものだが二百圓にお求めなすつて下さいまし。
島藏

輝　いかにも一旦渡さうと、申せし手切の百圓は、千太殿へ遣はさん、又短刀は懇望故、約束通り二百圓島藏殿へ渡し申さん。
德藏　すりや、最前の短刀は二百圓でござりましたか、お返し申してよかつたは、此德藏が持つて居たら纔な金で賣るところ、
島藏　正宗なりと申せども、銘もあらざる短刀を、
千太　二百圓でお買ひなさるは。
輝　元短刀は先祖より家に傳はる無銘の正宗、重器も瓦解の其折柄、一度人手に渡りし短刀、計らず我手へ戻りし故、高價を厭はず求めし短刀。
島藏　それをお求め下されば、千太が分の五百圓調ひますれば福島屋へ、先刻惠みし百圓に殘りは宅に四百圓。親父に預けておいたれば、是れにて員數も丁度千圓。
千太　思ひがけなく此の金が、今夜こゝへ集りしは、
德藏　改心なせし天の惠み。
島藏　難儀に迫る福島屋を、庇つて今日まで所持したる、日外手に入る千圓の證書を添へて返せし上、
千太　直に兩人警察署へ、罪の次第を自首なさば、

輝　官に於ても特別の、必ず輕き御處刑あらん。
徳藏　此の事柄が新聞へ、出たらば賊のよい教。
島藏　これといふのも外ならぬ、望月樣の皆お蔭。
輝　助力いたすはその以前、此の身も同じ白浪に、
千太　こゝに打寄る人々は、
徳藏　濱の眞砂の竊盜より、
島藏　沖を越したる强盜の、
千太　氣の荒浪も引汐に、
輝　忽ち善に返る浪。
〽善に返りて打悅ぶ、折柄四時の朝淨め、
ト鈴の入りし大拍子、鶏笛になり、皆々思入あつて
島藏　毎朝四時の朝淨め、
あの大拍子は、招魂社の、
千太　不淨を拂ふ鷄の、

徳藏　聲勇ましき夜明前。

輝　空も晴れ行く。

ト空を見上げるを木の頭。

東雲ぢやなあ。

ト皆々引張りよろしく、早き大拍子へ鈴の音を冠せ、

ひやうし幕

鳥　衛（終り）

花の街の吉原に今を盛りの小櫻が間夫は吉田屋松三郎二世を掛けたる戀中も姉のお若が義理詰の異見に別れの涙雨其曉に清玄は身の破傘に骨ばかり瘦衰へし六兵衛が昔忘れぬ忠義の肩揉凝つては解けぬ生靈に身の毛のたちし古骨買屏風を洩れておそはるゝ聲も哀れな庵室に世を牛島の惣太お爪が非道な殺しに身投のをんな助けし露夕がふた面片身替りに幽靈と色になまめく優男善と惡との賞罰はめぐる因果の水ぐるま淀五郎がしらの助太刀に本望遂げし敵討

浮世清玄廓夜櫻

「浮世清玄」は明治十七年四月市村座に書卸された、作者六十九歳のことである。時代物の清水清玄と櫻姫との情話に對して、世話物で清玄と遊女小櫻との情事を創案したものである。「木間星箱根鹿笛」に於て神經病を用ひ怪談に新趣向を凝らした作者は、此の作に於て生靈といふものを舞臺に適用したのであつた。序幕は終りで清玄が破れ傘を借りて櫻の花の散る下を追ひ出される所だの、庵室の殺しなどが好評を以て迎へられた。三幕目で露夕實は清玄の靈が、小櫻に對しては溫顏に見え、敵役どもには幽靈の顏に凄く見えるといふ二面(ふたおもて)の場は瓦斯の燈火を應用して、新奇な舞臺照明を見せたといふことである。五世菊五郎の清玄、露夕の外、中村時藏(後の歌六)の惡漢牛島惣太が出色の出來であつたといふ。

書卸しの時の役割は尾上菊五郎(誓水寺の番僧清玄、清玄の生靈、陰士露夕實は清玄の靈)、中村時藏(小櫻の兄牛島惣太)、岩井松之助(入間屋の抱へ小櫻)、片岡我童(吉田屋松三郎)、關三十郎(誓水寺の下男六兵衞、石濱帶刀)、尾上松助(入間屋の遣手お爪)、尾上菊之助(松井屋のお花)、片岡丸童(松井屋の番頭利兵衞)等であつた。

挿繪にしたのは梅堂國政筆の錦繪である。

大正十四年一月

編者誌す



浮世清玄廓夜櫻（浮世清玄三幕）

序幕

仲之町清水屋の場
江戸町入間屋の場

〔役名――清水寺の役僧清玄、小櫻兄牛島惣太、吉田屋松三郎、同親多治右衛門、石濱帶刀、鳶の者水車の子分音吉、質屋手代利兵衞、小道具屋與市、清水屋若い者喜助、辻占賣。松井屋娘お花、お爪、同下女お民、入間屋傾城小櫻、清水屋女房お瀧、同下女お谷、番頭新造花の戸、新造花川、同花里等。〕

（清水屋見世先の場）――本舞臺三間常足の二重、本庇揚縁の本縁附き、上手二間中障子出入り、下手一間折廻し落間、清水屋といふ柿暖簾、軒口に入間屋内小櫻と記せし、清水の舞臺を染拔きし茶屋暖簾、平舞臺の上手出格子用水箱、下手青竹の四ツ目垣、此の内山吹の下草櫻の立木、清水屋と記せし雪洞を立て、日覆より同じく櫻の釣枝、揚縁に毛氈を敷き、總て仲之町清水屋見世先の體、二重にお瀧着流し前垂、茶屋女房のこしらへ、下手に下女同じく着流し前垂にて煙草盆の掃除をして居る、緣先きに若い衆着流し駒下駄にて腰を掛け、ずつと下手に辻占賣股引尻端折り、辻占の箱を襟へ掛け立掛り居る、この見得賑かなる廓の鳴物にて幕明く。

辻占「通ふ千鳥懸の辻占。」

喜助　おい、辻占を一つ下せえ。
辻占　へい〳〵。(ト袋へ入れて出し、)情人のお心意氣でございますか。
お谷　喜助どんは揚屋町に、向うで達引く女郎衆があるから、大方其の辻占でござんせう。
喜助　所がそれは大違ひ、色氣なし慾一方の辻占さ。
お谷　又お株でごまかして、やつぱり心意氣でごんせう。
辻占　先づお開きなすつて御覽じませ。(ト此内若い衆開き見て、)
喜助　「好かないひよつとこだよ」、いや、こんな辻占は眞平御免だ。
お谷　こはいものだ、よく當るねえ。
喜助　えゝ、馬鹿なことを言ひなさんな。(ト又一つ開き、)「きつと行きます」、いや、是れでわしも請合つたおいらんの前へ顔が立ちます。
お谷　なに、おいらんに請合つたとわえ。
喜助　今日お約束で仕舞になつて居る、吉田屋の若旦那の辻占を取つて見たが、お上さん、きつとお出でなさいます。
お瀧　ほんに喜助は、慾一方商法一三昧の辻占だが、それでお出でにならうかの。

喜助 それに小櫻おいらんは、めつぽふ惚れておいでなさるのに、こつちが極おとなしくッて男が好くッて氣前がいゝから、おいらんばかりぢやございません、藝者衆から新造衆まで、べた惚れでございます。

お瀧 そのおとなしいのを見込んで、慥若旦那の地主さまで、藏前の松井屋とかいふ札差の娘御が、お嫁に來るといふことを、伊勢四郎さんからお話しだつたが、まだ極つたのではないか知らぬ。

喜助 結納までも取交して、御婚禮は來月と極つて居るといふことで、其の松井屋のお孃さんは慥お花さんと申す名で、細面のすらりとした好い娘御でございます。

お谷 おや、冷してたんとおあがりよ、揚屋町のも慥花といふ字が附いたねえ。

辻占 其の心意氣に、もつとお買ひなすつて下さいまし。

お瀧 喜助の惚氣は、辻占位では不承知さ、金子でも奢るがいゝ。

喜助 どうして高が小格子ゆゑ、すいとんが關の山でござります。（ト錢を出して）襤褸の出ねえ內錢を遣るよ。

辻占 是れでは餘計でござります。

喜助 惚氣賃がはひつて居るのだ。

辻占　それは有難うございます。是れから揚屋町へ廻つて、お言傳をします。

喜助　えゝ、現金な男だぜ。

辻占「花の便り戀の辻占。」

トやはり右の合方にて辻占屋呼びながら下手へはひる。此の鳴物にて、花道よりお花文金髷半振袖藏前札差の娘のこしらへ、下女お民着流し雪駄、音吉股引尻端折り麻裏草履、鳶の者のこしらへ、跡より丁稚風呂敷包みを背負ひ附添ひ出來り、

音吉　お孃さん御覧じませ、丁度櫻が眞ッ盛りでございます。

お花　奥山の花屋敷より、又一際景色もよく、今日はよい保養をしましたわいの。

お民　それに爰等を歩きますうち、ひよつと松三郎さまにお目に掛らうかと、私はきよろ／＼して居ります。

お花　あれまた、その樣なこと言やるかいの。（トお民に言ふこなし）

丁稚　兩側の二階へ藝者が上つて、大層客が騒いで居るが、盆の宿入には吉原へ來よう。

音吉　惡く洒落るせ、子供のくせに。

トやはり右の合方にて皆々舞臺へ來る、此の内お瀧、音吉を見附け、

お瀧　頭の所の音吉さん、お久しぶりでござりました。

音吉　大きに御無沙汰をいたしました。今日は頭の名代に店のお嬢さんのお供をして、觀音さまから山を廻り、仲の櫻を見に來ました、ちつと見世を貸しておくんなせえ。

お瀧　それはよくお出掛けなさいました、まあお掛けなさいまし。

音吉　爰は心易い茶屋でございますから、御遠慮なくお掛けなさいまし。

お花　左樣なら、眞平御免。

お民　下さりませ。（ト床几へ掛ける。此の内茶屋女菓子、茶を出す。）

お瀧　仕合せと當春は仲が賑かでございますのに、小櫻さんの暖簾が出たので、一層景氣がよろしうございます

音吉　大暦櫻へ人が出るねえ。

音吉　それに暖簾の色取りが、清水の舞臺を見せたは、賑かでよツほどいゝ。

お民　人間界の小櫻さんといふは、全盛のおいらんと見えますねえ。

お瀧　當時賣出しでございますのに、極くおとなしい上品なおいらんゆゑ、お姫さまのやうだと申す噂で、自然と人が櫻姫と申しますが、今度の暖簾もさるお客が櫻姫といふ趣向で、清水の畫を染拔

いたと申すことでござります。
喜助　今日もおいらんは仕舞が附いてをりますから、今にお客の迎ひがてら、やがて是れへ見えますから、お慰みに孃さんも道中を御見物なさいまし。
お民　小櫻さんなら丁度幸ひ、顏を見てやりませう。（ト言ひかけるを、お花袖を引き、）
お花　あれ、そんなことを言ふと惡いわいな。
お民　何の構ひますものか、あなたのお聟さんをだまして居るゆゑ。
お花　あれ、默つて居やいの。（ト是れにてお民餘儀なく控へる。お瀧扨はといふ思入あつて、）
お瀧　もし音吉さん、頭のお店とおつしやるは、藏前の松井屋さまではござりませぬか。
音吉　いかにも松井屋のお孃さんで、今日觀音さまを出しに遣ひ、實は櫻を見にお出でなすつたのだ。
お瀧　そんなら、いつも頭からお話しのあつた、吉田屋の若旦那へいらつしやるといふ、お孃さんでございましたか、それはよくいらツして下さいました。（トお瀧お花に挨拶をする。）
お花　まことにお恥しうござりまする。（ト顏をそむけて辭儀をする。）
お谷　丁度刻限がよろしうございますから、道中を御覽なすつていらつしやいまし。
音吉　それを當込んでおいでなすつたのだから、晚まで二階を貸して下せえ。

お瀧　今まで大一座がございましたが、丁度お送り申した所ゆゑ、直お二階へいらッして下さいまし。

お花　そんなら暫くお借り申しまする。

お瀧　どれ、御案内いたしませう。

トやはり廓の騒ぎ唄にて、お瀧案内してお花先きに皆々附いて奥へはひる。跡に下女若い者殘り、

喜助　年頃といひ器量といひ、言分のない娘御で、お負けに家が金滿家、あんなのを貰ふ松三郎さんのことを思ふと、實におらあ氣が惡い。

お谷　羨しくッても仕方がないから、今夜お客が引けてから、又揚屋町へ行つておやり。

喜助　あの女ぢやあお孃さんの、所詮穴埋めにやむづかしい。

トやはり右の合方にて、奥より音吉お瀧出來り、

お瀧　内々わたしへ御用とは、何の事でござりますえ。

音吉　外ぢやあねえか、孃さんが今日吉原へお出でなすつたも、實の所は松三郎さんと小櫻さんの顔を見度さと、惚れた男のちん〳〵で兩方兼ねて來たのだから、どつちに知れてもよくねえから、誰にも言はずに置いて下せえ。

お瀧　そりやあお案じなさいますな、お屋敷のお客のつもりで誰も二階へは上げませぬから、今にお

らんのお出での所を、御覽に入れて下さいまし。

音吉　それでおれも安心した。（ト腹掛の隱しより金を出し、二包みにして）是れは少しばかりだが内へ、是れはみんなに遣つてくんねえ。（トお瀧へ渡す。）

お瀧　是れは每度有難うございます。ちよつとお禮を。

喜助
お谷　頭、有難うございます。（ト禮を言ふ。）

音吉　どれ、おれは二階でお伽をしよう。

ト右の合方にて音吉奥へはひる。太鼓入り賑かなる出の唄になり、花道より禿對の着附にて先きに立ち、次に小櫻傾城の裝にて打掛け衣裳、跡より若い者兩人仕着せの着附にて傘をさしかけ、次に番頭新造花の戶、新造花川花里附添ひ、跡よりお爪着流し遣手の打扮にて出來り、皆々花道へ留り、

小櫻　鶯や吉野の沙沙に氣もつかぬと、千代尼が讀みしも思ひやる廓に花の盛り時、

花戶　淸水ならぬ軒每に、色よし原の掛け暖簾、

花川　引くや霞の絲筋に、音も冴え行くや音羽の瀧、

花里　舞臺にあらぬ兩側の、二階は客の山笑ふ、

若一　茶屋は競うて景氣取る、福のお入りを待人の、

若二 思ひ掛額心の錠を、おろして飛込む傘に、
お爪 濡るゝを厭はぬ花の雨、しつぽり今宵もお樂しみ、
花戸 よい辻占は鳥影を、
花川 早うお茶屋で、
女皆々 お待ちなんし。
小櫻 さあ、子供來や。
禿兩人 あい――。

ト皆々舞臺へ來る、此の内お瀧下女若い者出迎ひ、

お瀧 おいらん、大層お早うございました。
喜助 どういたしても、お客がお客だけ、
お谷 お早くお出でになりましたな。
小櫻 さういふ譯ではなけれども、晝のお客が思ひの外早く歸りなんしたから、それゆゑ早く來ましたわいなあ。
お爪 何たか知れたものではありませんよ。

お瀧　まあ此方へお上りなさいまし。
小櫻　そんなら許して下さんせ。
ト合方きつぱりとなり、新造兩人小櫻の手を取り、若い者介錯して皆々二重へ上り、よろしく住ふ。
小櫻思入あつて、
若しお上さん、まだ松さんは見えませんかえ。
お瀧　堅いお約束でございますから、もう程なくおいでゝございませう。
小櫻　何をしておいでなさるか、早く逢ひたいものぢやなあ。
花戸　松さんとても來たいのは、そりや山々でござんせうが、
花川　親御の前もござんせうから、ぱつを見てお出でゆゑ、
花里　さう早くは出られますまいが、
お爪　最う燈火のつく時分ゆゑ、程なくお出で、
女皆々　ござんせうわいな。（ト此の内禿煙草を附けて小櫻へ出し、お瀧思入あつて、）
お瀧　此の間からおいらんの所へ、小梅からお出でなさる誓水寺の御出家さんは、相變らずお近うございますかえ。

お爪　清玄さんは此の四五日家へお出でがござんせぬが、あのお方は外の見世へお出でなさる樣子もないから、今夜あたりは見えませう。

お瀧　廊下でお見掛け申しても、拵へが違つて居ますから、いつでもわたしやだまされますよ。

花戸　清玄さんと三園りの、宗匠ばかりは何時逢つても、皆が役者と間違へます。

喜助　そのくせ清玄さんの和尙さんは、坊さんでござります。

お爪　惡い洒落だね。

皆々　はゝゝゝ。

ト騷ぎ唄になり、花道より松三郞羽織着流し商人息子のこしらへにて、跡より質屋手代利兵衞、小道具屋の與市羽織着流し雪駄にて出來り、

利兵　もし〳〵松三郞さん〳〵。（ト呼びかける、松三郞振り返り。）

松三　何の御用か存じませぬが此の間から風を引き、引籠つては居りましたが、餘儀ない用でこの廓へ搜しものがあつて來ましたが、與市さんとお二人連で櫻を御見物でござりますか。

利兵　道理で月代をおはやしなすつて御病氣擧句と見えますが、是非お前さんにお目にかゝつて、お話し申す事があつて、お跡を尋ねて居りました。

松三　それでは向うの淸水屋の見世へ行つて伺ひませう。（ト三人連立ち舞臺へ來る、若い者これを見掛け、）

喜助　これは若旦那、お待ち申して居りました。

お谷　さあ、あれへお出で下さりませ。

松三　今道で連れができ、一緒に是れへお連れ申した。

お瀧　お連さまなら丁度幸ひ、どうぞ御一緒にお上りなされませ。

利兵　いえ、爰の方が勝手でござります。

與市　暫く爰をお借り申します。

お瀧　そんな事をおつしやらずと、まあよいではございませぬか。

松三　あいや／＼、お仲間の衆だから又お話しもあるだらうから、まあ、其の儘にして置いて下されませ。

ト此の内松三郎等三人緣へ腰を掛ける、小櫻思入あつて、

小櫻　いつもよりお出でが遲く、どんなに案じて居ましたらう。

お爪　おいらんに氣休めの一つも、言つて下さいまし。

ト是れにて松三郎は利兵衞與市へ氣兼ねのこなしあつて、

松三　久しく御無沙汰しましたから、何年振りかで今日は櫻を、見ながら參りました。

花戸　あれまあ若旦那の御常談ばかり、そりやお互ひに惚れあつた中、一晩逢ずにお出でなんしても、」

花川　何年振りとも思召すのは、そりや御無理でもござんせぬが、

花里　現在今日はお約束で、先程からおいらんが爰へお出でゝ、

女皆々　ござんすわいなあ。

松三　それは全盛のおいらんゆゑ、毎日毎夜來る客に爰へお出張りは當り前、何れのお客か羨ましいことだ。（ト言ひ紛らすを、）

小櫻　羨ましいとは誰のこと、是れほど思つて居るものを、針ほども思つて下さんせぬとは、ほんに憎らしいことわいな。

ト小櫻悔しき思入、松三郎四邊を憚り、面目なきこなし、利兵衞は與市と顏見合せ、

利兵與市　ても全盛な。

松三　え。

利兵　いえなに、前々からのお約束を、

與市　大きにお邪魔いたしました。

松三　參會の外參らぬ所へ、久々にて參り合せ面目もござりませぬ。（トお瀧を呼び、）少しこちらに話し

もあれば、皆を二階へやつて下さい。

お瀧　はい〳〵、（トこちらへ來り、）只今お二階は、お屋敷のお客さまでございますから、奥で暫くお待ちなされませ。

小櫻　そんなら松さん、少しも早く、

お爪　お待ち申して、

女
皆々　居りますぞえ。（ト松三郎は汗を拭きながら、）

松三　へい〳〵、何れ上りますでござりまする。

ト利兵衛與市に氣の毒なるこなしにて、しかつめらしく言ふ。

お爪　さあ、おいらん。

女
皆々　ござんせいなあ。

トやはり右の合方にて、お瀧案内して小櫻皆々奥へはひる、松三郎ほつとせしこなし、

松三　大きにお待たせ申しました、して私へ御用とはな。（ト合方になり、）

利兵　外の事ではござりませぬが、いつぞやこなたからお預り申した極附の青磁の香合、二月限りのお約定で百兩お貸し申しました期月は最早切れて居るゆゑ、ちよつと御様子をお聞き申さうと二三

度お家へお尋ね申せど折惡しくお留守ゆゑ、噂を聞けばこの節では廓へ度々お出でといふこと、それぢやあ茶屋で聞いたなら知れるであらうと來掛る途中、計らずお目に掛りましたが、期月も切れたあの質をどう方を附けて下さいますか、御返事が聞きたうございます。

與市　今日利兵衞さんと御一緒にあなたの所へ參りましたは、若しあの品をお拂ひにでもなります事なら私へ、讓つてお貰ひ申し度く、直印は元金が百兩と聞きましたから、二十兩利附をしますと申す其の譯は、あの香合なら一本半に向ける先きがござりますから、二十兩の口錢でお讓りなすつては下さりませぬか。

松三　あの香合のお話しなら私方から出ます筈、實は出入のお屋敷から袋の修覆に下つた品、仕立が出來れば納める品ゆゑ、なか〳〵流すなどゝいふ左樣なことは出來ませぬから、其の御相談はお斷り申しまする。

利兵　さういふことなら是非もないが、期月の切れた品ゆゑに、直ぐに受けて下さいますか。

松三　さあ、受けませねばなりませぬが、まだ袋が出來せねば、今少々お待ちなすつて下さりませ。

利兵　いやそれはいけませぬ。斯うして所々をお尋ね申し、やう〳〵爰で突き止めたも金の入用があつてのこと、若し出來ずば香合を、向ける先きまでこしらへて、同道して來た與市さん、

奥市　利兵衞さんは質屋のことゆゑ、生業違ひと頼まれて御一緒に參りましたは、よく〳〵なことでござりませう、流す譯に行きませぬなら、元利を御都合なさいまして御返濟をなさいまし。

ト兩人よろしく思入、松三郎困りしこなしあつて、

松三　さあ、其の元利とも今というては、

利兵　出來ぬとあれば仕方がない、みす〳〵こなたも二十兩利の附くことゆゑ奥市さんに、讓つた方がよいではないか。

松三　さあ讓られる位なら、直ぐ御返事をいたしますが、全く得意先の代物ゆゑ、

利兵　それでは金を都合して、直ぐお渡しなすつて下さい。

松三　それぢやというて今爰では。（ト此の内奥市胴卷の端を出し、）

奥市　もし吉田屋さん、斯うして金まで持つて來ました、どうぞわしにも儲けさせて下さい。

松三　みす〳〵買人のおいでなさるに、賣れぬといふは餘儀ないわけ、もし利兵衞さん、斯うなすつて下さいまし、ちつと此方に當てはめた金策もござりますから、どうぞ明朝まで待つて下さいまし。

利兵　そりや質屋と道具屋の間柄ゆゑ、因業に待たれぬといふ譯でもないから、顏に免じて明日の朝迄待ちも仕ようがその時に、若し金が出來ぬ時は、

松三 速に與市さまへ賣渡して金子を整へ、元利を勘定いたしまする。
與市 成程これはよい工風、約束違へばこの與市は、三十兩儲かる商ひ。
利兵 又約束が違つても違はいでも、わしの方は明日の朝には質の出ること。
松三 そんなら御得心下さりますな。
利兵 明日まで待ちませう。
松三 やれ〳〵、是れで落着いた。（トほつとこなし、）
利兵 そんなら是れで吉田屋さん、
與市 お別れ申すといたしませう。（ト兩人立上る。）
松三 然し二階で、ちよつと一口、
利兵 いや思召しは有難いが、刻限といひ丁度櫻で、夜になつては歸られませぬ。
與市 大門を入る茗荷に出る生薑、先づ生薑といたしまする。
松三 左樣なればお二人さま、
利兵 明朝お待ち、
兩人 申しまする。（ト騷ぎ唄になり、兩人花道へはひる、松三郎ぢつと思入あつて、）

松三　利兵衞どのが催促に明日は渡すと請合へど、若しこの金の出來ぬときは、人手に渡るあの香合、さすれば屋敷へ言譯立たず、こんな困つたことはない。

ト腕組をなし思案する、此の前より上手へ帶刀山岡頭巾、羽織大小雪駄にて窺ひ居て、

帶刀　松三郎、これに居つたか。

松三　え。（ト振り返り見る、）

帶刀　石濱帶刀ぢや。（ト頭巾を取る、松三郎びつくりなし、）

松三　扨は、今の樣子をば、

帶刀　さあ、聞いたでもあり聞かぬでもなし、先刻より參り合せ、そちに逢ひたくなつたのぢや。

ト松三郎、扨はといふ思入あつて氣を替へ、

松三　先づ是れへお掛け下さりませ。

帶刀　然らば暫時借用いたす。（ト合方になり緣先へ掛ける、松三郎下手へ掛け、）

松三　かゝる場所にてお目に掛り、面目次第もござりませぬ。

帶刀　いや其の斟酌には及び申さぬ、疾うよりそちに逢ひ度いはいつぞや賴みし香合の、袋の修覆を殿樣より度々の御催促、これまで日延いたし置きしが、近日御分家結城樣よりお客來にてお茶の催

し、當家一品の香合ゆゑ、當日あれを御自慢にてお遣ひ遊ばす思召しにて、又々身共へ矢の催促それゆゑそちの出先きを尋ね、測らず是れにて面會せしが、聞きしに勝るこの有様、いやなに、殿様よりの御催促、早速納めて貰ひたいのぢや。

松三　疾うより納めまする筈、仕立てに手間取り延引いたし、申し譯もござりませぬが、其の事につき今日も職人方へ催促に參りましたる戻り掛け、測らずお目通りいたし、恐れ入りましてござりますが、何卒明日午後まで、御猶豫出來ますことなればお聞濟みを願ひまする。（ト帶刀思入あつて、）

帶刀　そりや今日は渡されまい、かゝる遊里の場所へ立入り、全盛いたす身持ゆゑ。

松三　え。

帶刀　いや、遊里の場所へ立入るも、生業柄ゆゑ是非もないが、我が註文の香合が、明日屋敷へ納まらねば此の帶刀が身にかゝり、迷惑いたす儀もあれば、きつと詞を番うたぞよ。

松三　明日までのお日延をお聞濟みさへ下さりますれば、何の相違がござりませう。

帶刀　其の詞を聞く上は、身も是れより歸邸いたし、其の日延を上へ願ひ、明後日のお飾附にお間に合はすと申すであらう。

松三　必ず御心配下さりますな。

帶刀　然らば是れにて別れ申すぞ。（ト立上り思入あつて、）返す〴〵も申し置くが、若しも明日納らぬと、其の方よりも此の帶刀、上を僞る場合に至るぞ、よいか、合點がいたか。

松三　承知いたしてござります。

帶刀　きつと持參せいよ。

ト唄になり帶刀思入あつて花道へはひる。松三郎ぢつと思入、流行唄の合方になり、奥より以前の小櫻出來り、

小櫻　松三郎さん、困つたことになりましたなあ。（ト松三郎の側へ住ふ、）

松三　何れでお聞きなされたか、お出入り屋敷の石濱樣が、この廓までお出でなされ物和かな御催促、まことに面目次第もない、疾くより青磁の香合を持參いたさにやならぬのも、受戻すべき百兩の金に詰つて延引なしたが、明後日のお茶の湯にお飾附になるとあれば、是非とも明日納めねばならぬことに立至つたが、差當つて百兩の金の都合に當惑した。

小櫻　あの香合を質入せしも、元はといへばわたしゆゑ、斯ういふ時に金拵へ、お前の難儀を救ふのが勤めの情でござんすゆゑ、外のお客へ無心を言うたが多分はそれが出來ませう。

松三　それではそなたが外の客へ、金を賴んでくれたとか。

小櫻　今宵は返事のある筈なれば、氣を揉まずに居なさんせいなあ。

ト合方きつぱりとなり、奥より以前のお爪新造三人お瀧下女若い者皆々出來り、

お爪　さあ、もう押附け燈火が點きますから、

お瀧　直ぐお座敷へ。

皆々　お出でなされませいないな。（ト松三郎思入あつて、）

松三　急に用事が出來たから、今宵は直に戻るとしよう。

お爪　爰まで態々お出でなすつて、おいらんに氣を揉ませに、そんなことをおつしやらずと、

お瀧　私も御一緒に、お供いたして參りますから、

花戸　まあ兎も角も、お座敷まで、

花川　おいらんと御一緒に、

花里　直お出で、

皆々　なさんせいな。（ト皆々にて勸める。小櫻心遣ひの思入あつて、）

小櫻　何かの話しは部屋へ行て、ゆつくり相談しませうから、わたしと一緒に座敷まで、

松三　それぢやというて、どうも今宵は。

小櫻　はてまあ、

皆々　ござんせいなあ。

ト賑かな唄になり、皆々わや〳〵言ひながら平舞臺へ下り、お瀧松三郎の手を取り、下女白丁を持ち、小櫻出の通りの人數にて皆々花道へはひる。此の時奧より以前のお花先きにお民、丁稚出で、跡を見送り、ぢつと思入あつて、

お花　ても美しいあの姿、見れば見るほど惚れ〴〵する、

音吉　あれぢやあ誰しも熱くなり、足の近いも尤だ。

お民　それも誰ゆゑ小櫻ゆゑ、思へば憎い女ぢやなあ。

丁稚　いや此の長松は憎くない、可愛い姿の後附、子供でさへも見惚れました。ねえお孃さま。

トお花の前へ顏を出す。

お花　えゝも、わたしの言ふのは、（ト丁稚を袖で打つを道具替りの知らせ、）若旦那ぢやわいの。

トお花顏を隱す、この模樣太鼓入りの座附にて、賑かに道具廻る。

（小櫻部屋の場）――本舞臺一面の平舞臺、上手床の間續いて違ひ棚、この下腰張りの茶壁、上手一間の附屋體、下手九尺次の間夜具棚の書割、三尺延喜棚ずつと下手廊下の片遠見、總て入間屋二階小

櫻部屋の體、よき所に燭臺を點け、以前の松三郎座蒲團に住ひ、側に小櫻煙草を吸附け居る、この模樣端唄にて道具留る、

小櫻　もうお誂へが來ませうから、一口あがつて心配を、ちつと忘れて下さんせ。

松三　忘れたいのは山々なれど、あの香合を受戻し、帶刀樣へ納めぬ時は、あなたが上へ言譯立たず、お暇どころか次第に依れば、どういふ事にならうも知れず、それ故落着いては居られぬわえ。

小櫻　さあ、それもこれも百兩の、お金が出來れば枕を高く、お前も泊つて行かれるのは、此の中よりのお話しで、わたしや知つてゐることゆゑ、どうぞして百兩をこしらへようと此の間、小梅から來る淸玄さまに無心を言うて置いたのが今夜出來る約束ゆゑ、まあ落着いて居なさんせいなあ。

ト松三郎思入あつて、

松三　どうした出雲の引合せか、仲間と春の參會に八百膳へ來た歸りがけ、田圃をぬけて衣紋坂丁度入日の夕霞、引くすがゝきに浮々と茶屋が案内に送られて、

小櫻　お出でなんした其の時に、歸るお客を見世先きへ、送る途端に見かはす顏、實はお茶屋のお內儀に初會惚れして引附けを、差詰めあなたへ賴んだのも、

松三　裏が三度と熱くなり、浮名立田の紅葉より赤らむ恥も構はずに、斯ういふ仲になつたのも、

小櫻　みんなわたしの心から、堅い噂の若旦那を親御に心配さすといふも、

松三　好き合ふ仲に是非もなし、

小櫻　思へば濟まない、

松三　え、

小櫻　ことぢやなあ。

ト小櫻胸へ煙管を當て心遣ひのこなし、端唄にて下手よりお瀧急ぎ出來り、

お瀧　もし〳〵若旦那、大變でござります〳〵。

松三　なに、大變とは、

お瀧　大旦那さまが私共へ、あなたを尋ねてお出でなすつたを、内の者が正直においでなさると申したので、今御案内して參りました。

松三　何ぼ何でも爰では逢はれぬ、どうぞ居ぬと言つて下され。

お瀧　もう御案内いたしましたから、今更仕方がござりませぬ、尤も大旦那のおつしやるには、あなたよりおいらんに、ちよつと逢ひたいとおつしやいました。

小櫻　さういふことなら私ばかり、お目にかゝつて樣子を聞くうち、若旦那は歸つた積りに、隣座敷に

お出でなんし。

松三　そんなら隱れて居る程に、そなた好いやうに言うてくりやれ。

小櫻　それは合點でござんすわいなあ。

お瀧　そんならお連れ申しまする。

ト お瀧下手へはひる、松三郎は上手屋體へはひる。やはり端唄にて、下手よりお瀧先きに多治右衞門少し更けたる鬘、羽織着流し目病にて出來り、

お瀧　おいらん、お連れ申しました。

多治　是れは大きにお世話でござりました。

小櫻　さあこちらへお通り遊ばしませ。

多治　眞平御免下さりませ。（ト上手蒲團の上に住ひ、）

お瀧　おいらん、私は隣座敷のお客の所へちよつと廻つて參りまする。（ト多治右衞門に向ひ、）あなた御ゆつくりお話しなされませ。

ト 小櫻に松三郎の所へ行くといふこなしあつて、上手へはひる。小櫻間の惡きこなしあつて、

小櫻　只今清水屋のお內儀から、あなたの事は承はりましたが、ようおいで遊ばしました。

ト辭儀をする、多治右衛門思入あつて、

多治　好い事なればおいらんに表向で逢ひますが、初めて逢つてこんな事をいふのも無粹と思はれる、野暮な話しで上りました。

小櫻　して其のお話しとおつしやりますのは

多治　定めてお聞きもなすつたらうが、わしは吉田屋松三郎が實の親でござりますが、若しおいらん、折入つて此の親が頼みを聞いては下さるまいか。

小櫻　何とおつしやりまする。（トしんみりとした端唄の合方になり、）

多治　さあ藪から棒に言出して、こなたに頼みといふ譯は、わしが年來住つて居る、地主といふは藏前で松井屋といふ藏宿渡世、その娘御が年頃に丁度幸ひわしが悴の、嫁に仕度いと言込まれ、譬にいふ提灯に釣鐘ほども違ふ身代、願うてもなき縁談ゆゑ二ツ返事で相談整ひ、結納濟んで婚禮は櫻月が過ぎての事と、何かの支度をするうちに松三郎が廓通ひ、樣子を聞けば此の話しのない先きからしてこなさんと、互ひに思ひ思はるゝ、割ない仲ぢやと聞くに附け、猶々頼むに頼みにくいは若い時は吉原で、少しはわしも遊んだ體、野暮な話しは仕度もないが、たゞ切ないは此の事がぱつと世間へ知れる時は、數年御恩になつた地主に、悴が不埒の起りより地立てにでもなる其の

時は、居ても立つても居られぬ仕儀、それゆゑかゝる眼病も厭はず爰へ來ましたは、どうぞ忰を今日限り呼ばぬやうにして下さい、そりやもう先きが地主でなくば、此の緣談を斷つて忰が氣儘にさせますが、さうさせられぬ義理合を姉も共々心配なし、相談の上この廓へ親がわざ〳〵來ましたは、二人の者の苦勞をばこなたが救つて下さると思ひなすつて、若しおいらん、どうぞ聞き屆けて下さるまいか。

ト多治右衞門手を突き賴む、小櫻じゆつなき思入にて、

小櫻 どうぞお手を上げて下さりませ。斯うして勤めをして居る內は、世間の親御が二階へ來て遊ぶお客のことは言はず、其の相方へ惡口する御方が大概世間並、それと是れとは事替り、此の身風情へ手を下げて御尤もなる今のお話し、ほんに淚がこぼれるほどお察し申し上げますが、若旦那を此の後共決して呼んでくれるなとは、又此方にも切ない譯、勤めする身に此の人と思ひ込んだる私の心も、お察しなされて下さりませ。(ト泣くを、)

多治 さゝ、其の悲しみは互ひのこと、實の親と兄弟が難儀をしても松三郎と、添ひ遂げるのが本意なか、それともこなたが思ひ切り、親子三人助かるが本意と思ふか、もしおいらん、戀とはいへど其の實は義理に搦まる人の道、決して無理とは思はねど、わしも切ない今日の切羽、得心をして

は下さるまいか。

小櫻　それぢやというて此の場にて、

多治　得心が出來ませぬか、

小櫻　さあ、それは、

多治　さあ、

小櫻　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

多治　こりや野暮だ、野暮だがおいらん此の事は、どうでも聞いて下されいの。

トきつといふ、小櫻ぢつとなつて、

小櫻　はあゝゝゝゝゝ、（ト泣伏す、此の前よき時分より上手へ以前のお瀧下手へお爪出で、此時中へはひり、）

お爪　始終の樣子はわたし共が、あらまし後で聞きましたが、

お瀧　どちらも決して無理でない、事を分けたるお話しづく、

お爪　然し是れまでおいらんも取止めた松三郎さん、さうおいそれと御返事も、出來ぬ場合もござんせうから、

お瀧　今宵の所はわたしら二人へお預けなすつて大旦那は、お目もお惡いことゆゑに、夜るの風に當らぬやう、一先づお宿へお歸りなすつて、
お爪　跡でとつくりわたくし共が、おいらんへもお話し申し、
お瀧　よい御返事を、
兩人　いたしませうわいな。（ト兩人よろしく宥める、多治右衞門思入あつて、）
多治　成程お二人のいふ通り、今おいそれと返事も出來まい、今宵はこの儘引取りまして、わしが代りにあれが姉を返事を聞きに寄越しますから、どうぞ逢つてやつて下さい。（ト小櫻へ思入あつて、）今夜は來まいが悴が來たら、親の切ない入譯を、どうぞ話してやつて下さい、親の苦勞は悴ゆゑ（ト上手へ思入あつて氣を替へ、）いえ、悴ゆゑなら苦勞をしても、是れは世間にありうちゆゑ、何分お任せ申しまする。
お爪　流石は以前が苦勞人、何にも野暮はおつしやらず、此の儘お歸りなされますを、
お瀧　蔭に若旦那がいらつしやつたら、お悦びでござりませう。
多治　そんならわしは夜更けぬうちに、戻りますから此の後共、何分こなた衆よいやうに、
お爪　二人が請合ふ上からは、

お瀧　惡いやうには、

兩人　いたしませぬ。

多治　そんならおいらん、賴みましたぞ。

小櫻　はい。(ト俯向く。)

お瀧　どれ、お送り申しませう。

ト端唄になり小櫻顏を上げ兼ねる、多治右衞門は上手へ思入あつて目を拭ひながらお瀧多治右衞門の手を引き花道へはひる、上手の障子を明け、松三郎跡を見送り面目ないといふ思入にて出來り、

松三　此の身の不埒に出るにも出られず、息を殺して隱れて居たが、親父も若い時分には道樂をしたこともあるから、爰に居るのは百も承知で、一部始終の話しをばおぬしにしたのは此の身へ異見、目の不自由な親にまで、斯ういふ苦勞を掛けるのも、みんなおれが惡いから、身を切るよりも辛かつた。

小櫻　わたしを親身の親子のやうにお明しなされた今のお話し、別れぬ時は親御へ濟まず、又別るゝは此の身の悲しみ、こりやどうしたらよからうなあ。

お爪　それは心の狹いといふもの、若旦那の御婚禮もまだ間のあることなれば、一寸脫れにお延ばしなさ

れる其の内には、どうにか仕法が附きませうから、まあ安心しておいでなさいまし。

ト お爪よろしく宥める。爰へ下手より番頭新造花の戸出來り、

花戸 もしおいらん、お兄さんがお出でなさんしたが、爰へお呼び申しませうかえ。

お爪 なに、惣太さんが來なさんしたとえ。

小櫻 また無心であらうわいな。

お爪 こちらへ來ない其の先きに、ちつとわたしが用がある、どこに待つておいでだえ。

花戸 内證に旦那とお話しをして居なさいます。

お爪 そんならちよつと逢つて來よう。若旦那御免なさいまし。(ト流行唄にてお爪花の戸附いて下手へ入る。)

松三 お爪がいふ通り婚禮なら、一寸脫れで濟みもしようが、濟まぬはさつきの金の一件。

小櫻 それは今にも清玄さんがお出でなされば分る筈、

松三 それでもどうも氣にかゝり、何だかそはそはしてならぬ。

小櫻 はて、返事のあるまで、しつぽりと、

松三 え、

小櫻 氣を落着けて居なさんせいな。(ト言ひ紛らす。松三郎思入あつて)

松三　そんならおぬしの詞に隨ひ、積る話しを、（ト四邊へ思入あつて小櫻を引寄せるを道具替りの知せ、）
小櫻　しませうわいな。
ト顏見合せ氣味合の思入、所作の切にて此の道具廻る。
（廻し座敷の場）＝本舞臺一面の平舞臺、上手一間の床の間、續いて三尺の地袋、この下腰張りの茶壁、上手障子屋體、下手一間次の間夜具棚の書割、前側の欄間地紙へ櫻の畫の張交ぜ、總て以前の二階續き廻し座敷の體。爰に以前の新造兩人部屋着のこしらへにて、行燈の許に辻占を見て居る、前の鳴物にて道具留る、
花川　さつき清水屋のお上さんからお貰ひ申した辻占で、心意氣がすつかり分つた。
花里　わたしも今明けて見たら、苦勞になる辻占だが、階子段へ待人を掛けて見ようか知らぬ。
花川　階子段の待人は危ないから、止しにおし、此の間も杢市さんがてつぺんからころ〳〵と、板の間へ轉げ落ちたよ。
花里　待人を階子段へ掛けると、きつと誰かおつこちるが、それでは杢市さんが落ちたかえ。
花川　丁度石町さんの大一座で、太夫衆が居合せて、按摩さんが階子から落ちて骨接ぎ療治をするのだから、あんま階子れうぢと洒落たので、どつと一座が大笑ひさ。

花里　道理で杢市さんが石町さんから、頂戴物をしたといつたが、こんな事なら毎日でも二階から落ちたいと、怪我をして悦んで居ましたが、あの按摩さんも變り者さねえ。

花川　變り者の證據には、表を歩く時は、あんまかはりと言つて歩くよ。

花里　あんまかはりとは聞きとれ惡い洒落だね。

ト又辻占を開き居る、流行唄になり、花道より以前の若い者案内して淸玄、坊主臺黑の頭巾同じく羽織着流しにて出來り、

若者　大分今晩は、お遲うございましたな。

淸玄　いつそ吾妻橋へ廻ればよいのを、なまじ竹屋を呼んだので、夜のことで大きに手間取り、却つて遲くなりました。

若者　今晩はお座敷が塞がつて居りますから、櫻の間で御勘辨を願ひます。

淸玄　いつも馴染の櫻の間は、却て居心がようござる。（トやはり右の唄にて舞臺へ來る、新造思入あつて）

花川　おや淸玄さん、ようお出で、

花里　なさいました。

淸玄　相替らず綺麗ぢやの。

花川　また極りでからかひますよ。

花里　善どん、お座敷は、

若者　おいらんがお客でございますから、是れへ願ひます。

花川　ちよつとおいらんに知らせますから、

花里　どうぞ待つて居て下さんせ。

ト新造兩人下手へはひる。若い者燭臺を附け煙草盆など出し、

若者　只今おいらんが、お出でになりますから。

ト下手へはひる。合方きつぱりとなり、上手より小櫻仕掛衣裳にて出來り、

小櫻　清玄さん、よう來て下さんしたなあ。(ト清玄の側へ住ふ。)

清玄　今宵來る約束ゆゑ、假令どんな用があるとも、來ずに居られるものか。

ト小櫻煙草を吸附けて出し、

小櫻　いつもお出の刻限より今宵はよつほど遲いゆゑ、わたしや案じて居ましたわいな。

清玄　いつにない優しい詞、ほんまに案じて居てくれたか。

小櫻　勤めする身の手管とやらで、何を言つてもお客の方は疑はしやんすは無理ならねど、嘘か實かは

樣子でも、大概知れさうなものぢやわいな。

清玄　さう打明けて言はれて見れば、何の疑ふ心はないが、いまだにわしの胸に落ちぬ、疑ふことがあるゆゑに。

小櫻　なに、胸に落ちぬことゝはえ。（トしんみりとした合方になり、）

清玄　思ひ出せば後の月、本堂修覆の寄進を頼みに檀家を廻つて歩く折、仲之町にて測らずもこなたに出逢うた其の時はぞつと身の毛もよだつほど、あゝ好い女子だと煩惱の起るを我が身で異見なし其の日は寺へ戻つたが、さあそれからといふものは夜の勤めに本堂で、經讀む聲も自ら茶屋の二階で騷ぐと聞え、佛へ供へし花立の花も廓の櫻と思ひ、見る物毎に心奪はれ、勿體ないが本尊の阿彌陀如來もおぬしに見え、夜もろく〳〵寐附かれぬ思ひあまつて吉原の、檀家で聞けば入間屋の、小櫻どのといふことを聞いて出家の掟を破り、初會に上つた其の時より夜毎に通ふこの清玄、出家ぢやとても同じ人間、どういふ譯で遂に一度も枕交して下さらぬか、情を賣るが君傾城、わしが胸に落ちぬは此の事、どうぞ明かして下されい。（ト小櫻に迫る。）

小櫻　裏や馴染のそれぎりで來ぬお客とは事替り、是れまで繁々お出でのあなた、やうやくお蔭で茶屋暖簾の出せる體になつたのも、皆お客樣のお蔭ゆゑ其のお一人の清玄さんをわたし風情の身を以

て振るの何のといふやうな、そんなことはござんせぬが、斯うお互ひに打ち明けてお話し申す上からは何をお隱し申しませう、此の身の事にて神佛へ御願を掛けて此の月中、お客に枕交さぬと誓ひを立てし上からは、假令山程お金を積み根引をさせるお客があらうと、帶紐解かぬ願ひゆゑ決してお前ばかりでなく何處のお客も其の通り、それも僅か此の月ぎり、長いことでもないことゆゑ、それまで待つて下さんせ。

清玄　さういふ願のあることなら強ひてとも言はれぬが、よく話しにもある通り、情を賣るが勤めぢやとて好かぬ客には隨はぬと、意氣地を立てぬく者もあれば、わしもおぬしに嫌はれて、枕交さぬことではないかと、どうもまことゝ思へぬわえ。

小櫻　その疑ひはお前より、わたしの方で言はねばならぬ。

清玄　なに、言はねばならぬとは。

小櫻　この間お頼み申した、今宵までといふお金、持つて來て下さんしたか。

清玄　さあ、あの金はな。（トぎつくり思入。）

小櫻　嘘は言はぬと言はしやんすからは、お金も持つてゞござんせう。

清玄　さあ、金はな。

小櫻 今宵間に合はして下さんすかえ。

清玄 さあ、それは。

小櫻 よもや嘘ではござんすまいね。

ト是れにて淸玄ちつと思入。此の時下手へ惣太着流し傳法なるこしらへにて窺ひ居て、此の時前へ出て、

惣太 いや、嘘とも〳〵大の嘘だ。

淸玄 や、こなたは牛島惣太どの。

小櫻 兄さん、何で、嘘とはえ。(ト合方きつぱりなり、惣太思入あつて下手へ住ひ、)

惣太 嘘といつたは外ぢやあねえ、昨夜すつかり取られてしまひ、その遣繰りに盡き果てた所へ浮んだ小梅のお寺、妹の緣で尋ねて行き、淸玄さんに無心を言はうと行つた所が當てが違ひ、昨日こなたは女犯がわれ、寺を追放されたと聞き、力も拔けて歸つたが外に取りつく島もなく、今夜爰へ無心に來たら丁度出逢つた淸玄さん、知らずに手前が無心をするのが、あんまり馬鹿げてたまらねえから、おれが種を明してやるのだ。(トよろしく思入。)

小櫻 そんならあなたは追放の、お身におなりなさんしたか、さすれば今宵の手筈も違ひ、若しやぬし

の身の上に、拘はることになりはせぬか。(ト當惑の思入)
惣太　こう妹、無心どころか事に依ると、今夜の拂ひもむづかしい、こんな相手に掛りあふと、無けなしの仕掛まで質に置かにやあならねえぞ。もし清玄さん、何と噓ぢやァあるめえね。
ト惣太清玄へ思入、是れまで俯向き居てぢつとこなし。
清玄　斯くなる上は何をか隠さん、實はこなたの色香に迷ひ遊里へ通ひし事顯はれ、師の坊の御立腹にて、昨日わしは追放され、今は寄邊のなき身の上、斯くなり果てしもこなたゆゑ、是非に一度の情をば受けねば死すとも浮ばれず、よしや今宵限りなりとも、どうぞ得心して下され。
ト小櫻の側へ寄り添ふを、
小櫻　お前の頼みどころぢやない、無心の金の出來ぬ時は、外に都合をせねばならぬ。清玄さん、ちよつと御免なされませ。(トずつと立上るを、清玄袖を捉へ)
清玄　そりやつれないぞえ小櫻どの、廓の習ひといひながら、今眼前に言うた詞に、打つて替つた情なし詞、わしが得心せぬ内は、爰は立たせぬ立たせぬわい。(ト押へるを、惣太思入あつて)
惣太　追放された身を以て、うぬが一人で買つたやうに外の客の邪魔をすると、其の分ぢやあ置かねえぞ。

清玄　いや返事を聞かぬ其の内は、めつたに爰は放さぬわい。

惣太　えゝ、放せといつたら放さねえか。

ト惣太中へ割つて入り、無理に清玄を引分ける、此の間に小櫻忍んで立退き、

小櫻　兄さん、跡を頼んだぞえ。

ト言捨て上手へ走りはひる。清玄跡を追つかけ行かうとするを惣太留める。此の物音に下手よりお爪若い者兩人出來り、此の中へはひり、清玄を引附け、

お爪　何ほいけ太えといつて、俗でもあるか坊さんがお拂箱になつた身分で、遊びに來るとは大膽な。

若一　茶屋がなけりやあいけねえと、斷つたも押して上り、忍んで來る身分だからと、譯を言ふから客にしたが、

若二　今となつちやお厄介者、茶屋へ下げる譯にも行かねえ、まだ此の間の勘定も、五兩なにがし殘つて居るから、

お爪　今夜は綺麗に拂へばいゝが、

若者　拂ひが附かざあ、

皆々　歸されねえぞ。（ト清玄むつとせしこなしにて、）

清玄　昨日までもちやほやと、言つた詞に引替へて、出て行けがしなる其の惡口、テモ薄情な仕打ちやなあ。

惣太　べらぼうめ、金のある時ちやほや言つて、錢がなけりやあ突出すのは、昔からの紋切形だ、情を掛けて庇つた日には、女郎屋稼業が出來るものか。さ、素ツ裸にして懐を洗つてやれ。

若者兩人　それが好い〳〵。（ト皆々立ち掛るを、）

清玄　まあ〳〵待つて下され。（ト惣太に向ひ、）これ惣太どの、外の者は兎も角も、こなたはそれで濟むまいがな。

惣太　なに、濟まねえとは。

清玄　出家の身ゆゑ愼んで、今日まで誰にも言はなんだが、いつぞや出逢うた小梅堤の、

惣太　や、

清玄　あの夜の事を言つたらば、こなたの爲めになるまいぞ。

惣太　そりやあ言つてくんなさんな、魚心あれば水心、惡いやうにはしねえから、（ト清玄に言ふなといふこなしあつて、お爪に向ひ、）是れまで度々來なすつた大事のお客の清玄さん、何も今晩一晩くらゐ拂ひの金がねえといつて、下すといふがあるものか、まあ静かにするがいゝ。

ト清玄に言つては悪いといふこなしあつて、三人を紛らす、お爪不審の思入あつて、

お爪　手の裏返す其のうちに、立役仕込みの惣太さん、何で急に清玄さんの、お前は肩を、

兩人　持ちなさるえ。(ト替つた合方になり、)

惣太　さあ久し振りで今夜逢つた以前は知り合ふ清玄さん、何もおれが爰の家の奉公人といふぢやあなし、憎まれ口をきくにも及ばぬ、こいつあ一番立役で中へ入つて扱ふ方が、何れもさまにも憎がられず、可愛がられる了簡で、惣太が口をきゝますから、今夜の所は引けも打つし、どうぞ泊めてあげて下せえ。(ト惣太よろしく思入あつていふ。)

お爪　外の人とは譯も違ひ、おいらんの兄さんが、あれ程までに言ひなさるから、今夜は行燈部屋へ泊めてお上げ。

惣太　いやそいつも振りの客のことだ、これまで馴染んで來たお方、まさかさうも行くめえから、爰の座敷へ泊めてくんねえ。

お爪　それだというておいらんを、手籠めにしなさる位だから、

惣太　はて、それもおれが呑込んだ、決して心配しなさんな。

お爪　そんならお前に、

三人　任すとしよう。

惣太　それは有難うござります。（ト淸玄へ思入あつて、）わつちが爰は引受けたから、腹も立たうが今夜の所は、おとなしくして爰の家へ、泊つてお出でなさいまし。

淸玄　存じがけないこなたの扱ひ、實に地獄で佛でござる。

惣太　其の代り今の事は、なにさ、今の事は是れぎり、水に流して下せえまし。

トよろしくこなし、お爪思入あつて、

お爪　さう話しが折合つたら、今夜もお客で忙しいから、お前達も外の座敷を、よく氣を附けてあげておくれ。

若一　お一人でお淋しからうが、

若二　今夜は一人でお休みでございます。

惣太　そんなら淸玄さん、

お爪　お座敷通りは、

お爪
兩人　お氣の毒さねえ。

惣太　これさ、惡口はきかねえものだ。

ト流行唄になり、惣太お爪皆々下手へはひる。清玄腕組をなし、ぢつと思入、誂への合方になり、

清玄　我が兩親は故あつて、非業な御最期なされしゆゑ、菩提の爲めに出家となり、佛門修行いたせしが師の坊の丹精にてやうやく人となりし身が、廓の花の色香に迷ひ眞如の月も雲隱れ、六根の風を以て此の迷ひを晴さんと思へど覆ふ黑雲の、いつか闇路に墮落なし、終には佛陀の御罰にて今日かゝる姿になるも、所謂自業自得なり、斯くなる上は我れ一人、泊りしとても詮術なし、何れへなりと便るといたさう。

ト思入あつて立上る。爰へ下手より幕明の禿、黑塗の盆へ湯呑を載せて出來り、

禿　清玄さん、鹽湯を持つて參りました。

清玄　おゝ、みどりか、それは忝けない。（ト下に居て湯呑を取り、）いつも、そなたに賴むゆゑ、よう忘れずに持つて來たが、今宵は未だ酒の味も、（トほろりと思入あつて氣を替へ、）先づ鹽湯から先へ呑むといたさう。（ト湯を呑む。）

禿　ちと横におなりなんし、足を叩いて上げませう。

清玄　おゝ廓の者は薄情と、いへども子供は正直な、よう親切に言うてくれたが、もうわしは歸るのぢや。

禿　お前が歸るとおいらんに、叱られますから居て下さんせ。

清玄　おぬしは何も知らぬゆゑ、さう思ふのは尤もだが、今宵はもう叱りませぬ。

禿　いえ、それでもお前へ濟みませぬ。

清玄　その親切は忝けないが、今は嵐に散り果てた身に、（ト思はず前なる盆へ映る欄間の櫻へ心附き、）然も座敷は櫻の間、盆にうつりし欄間の畫、（トぢつと思入、）

禿　どうしましたえ。（ト顏を出すを、）

清玄　是れが迷ひの、（ト盆を袖にて抱へるを、道具替りの知らせ、）種ぢやなあ。

ト時の鐘、端唄にて道具廻る。

（元の小櫻部屋の場）——本舞臺元の小櫻部屋の道具、よき所に六枚屛風を立廻し、延喜棚に燈明を上げ、下手長火鉢の際に以前の花の戸急須へ茶を入れて居る。やはり前の端唄にて道具留まる。

花戸　もしおいらん、お茶がはひりましたが、明けてもようございますかえ。（ト屛風の内にて、）

小櫻　よいから取つて下さんせ。

ト合方きつばりとなり、花の戸屛風を後へ取除ける、内に蒲團の上に松三郎小櫻寐卷裝にて住ひ、

枕元に朱塗の行燈、煙草盆などよろしく、花の戸は茶をつきながら、

花戸 おいらんとお話しがちつとも途切れませんから、お察し申してお煎花を入れ、息づぎに上げますよ。

ト出す。

松三 久しく足を抜いたので、色々話しが溜つて居るから、いくら話しても盡きぬのぢや。

花戸 昨夜たつた一晩だのに、久しく足を抜いたとは、成程都々逸の文句の通り、一晩が一年に向ふとは、い〻人は違つたもの、おいらんお樂しみでありますねえ。

小櫻 明日使ひ屋の彦八さんが、江戸へ行くなら言附けて、辨松でも取りにおやり。

花戸 それは御馳走でございます。

小櫻 序にお前、表二階の長崎屋のお客の所を、ちよつと見て來て下さんせ。

花戸 あのお客は猿若町の、松村さんでありますから、どうせ初會ぎりのお客さま、よいやうに言つて置きませう。

小櫻 どうぞよいやうにばつをしておくれ。(ト花の戸呑込み下手へはひる、小櫻跡を見送り松三郎と顔見合せ、ぢつとこなし、しんみりとした合方になり、)松三郎さん、どうしたらようござんせう。

松三　どうといつて當てにした淸玄どのゝ百兩が、出來ぬ上は仕方がない、まだ親がゝりの身の上に、差當つて此の金を才覺をする所がない、せめて四五日日があれば七所借りをしてなりと、纏めることもあるけれど、今宵に迫る切羽の金、所詮出來ねば是非がない、働きのないことなれど思案に盡きた上からは、跡で人に笑はるゝとも、死ぬより外に思案はない。

小櫻　え、そりや何ゆゑに命まで。

松三　さ、今宵中に整はねばさつき約束した通り、明日は質屋で道具屋へ賣られてしまふその時は、再び我が手へ戻らぬ香合、さすればこれまで殿樣をお執成し下された石濱樣のお身の上、もしもの事のある時は、此の身ばかりか親にまで共に難儀を掛けねばならぬ、たゞさへ不孝に不孝を重ね、猶々言譯立たざれば双方兼ねて命を捨て、あの世で詫びをする心、そなたは跡で命日に、香華を手向けて一遍の念佛なりと唱へてくりやれ。（ト愁ひの思入）

小櫻　お前一人死ぬといふは、それはつれなうござんすぞえ、今宵に迫り命まで捨てるやうなお身の上にしたのはみんなわたしゆゑ、どうまあ是れが見て居られませう、お前が死ぬなら共々に、わたしも一緒に死にますわいな。

松三　おれがやうな意氣地なしでも、言交した約束を反故にもせずに死ぬならば、一緒に死なうと言つ

てくれるは涙の出るほど嬉しいが、それでは浮世の心中で、此の松三郎が不埒をした身の言譯にならぬから、命を捨てゝもいはゞ犬死、行方知れぬ香合に、替へて命を捨てたかと、お出入り屋敷へ一ッの言譯、死ぬのは一人おれが死ぬから、おぬしは跡へ殘つてくれ。

小櫻　いえ〳〵何と言はしやんしても、あの世を掛けて起請まで取交した二人の中、お前の死ぬのを餘所に見て、どう存へて居られませう、一緒に死にたうござんすわいな。

松三　日頃の氣にも似合はない、さりとは聞分けのないことだ、一人死なねば香合の質入なして失ひし身の言譯が立たぬから、どうぞそなたは殘つてくれ。

小櫻　その言譯になりませずば、わたしはわたしで所を替へ、お前が死んだといふことを聞いたら直ぐに死にませう。

松三　すりやどうあつても此のおれに、心中立つて死ぬといふか。

小櫻　あい、それが女の情でござんす。

松三　はてさて困つた事ぢやなあ。(ト松三郎ぢつと思入あつて)それ程までに思ふなら、跡は兎もあれ言交した約束通り一緒に死なう。

小櫻　え、そんならわたしと共々に、

松三　笑はゞ笑へ是非がない、今宵一緒に命を捨てよう。

小櫻　それで心が晴れたわいな。

松三　はて頼もしいことぢやなあ。

ト松三郎感心せし思入、小櫻立上り、次の間の鏡臺より剃刀を持つて來り、

小櫻　さ、障りのない内少しも早く、

松三　すりや共々に死ぬ心か。

小櫻　あいなあ。

トわつと泣伏す、松三郎喰しめて泣く、端唄になり一くさりあつて文句の止り、顏見合せ、氣味合ひの思入、

松三　如何に所が廓とて、人の心も知らないで、面白さうなあの端唄、

小櫻　いつぞやぬしが居續けに、しつぽり濡るゝ桐の雨、

松三　その爪彈きの音もしめて、人目忍んで差向ひ、

小櫻　内證の前を憚りしも、

松三　今は互ひの身の詰り、

小櫻　覺悟を死出の山越えて、
松三　冥土へ急ぐ時鳥、
小櫻　消えて行く身の、
松三　この二人。（ト兩人手を取交し泣く、此の時廊下より以前のお瀧出來り）
お瀧　いえ、其のお覺悟には及びませぬ。（ト前へ出る、兩人見て、）
松三　そなたは茶屋のお上さん、
小櫻　そんなら樣子を、何もかも、
お瀧　はい、お部屋の外で聞きましたが、松三郎さまのお姉えさんが、今方家へお出でになり、お文に添へし此の金子、お渡し申して兎も角も、一緒に連れて來るやうにと、お待ちなされてござります
ト懐より誂への手紙と、百兩包みを出す、松三郎取上げ見て、
松三　こりや百兩の金を添へ、樣子ありげなこの手紙。
小櫻　それではお内のお姉えさまが、お金の御都合なされしか。（ト松三郎手紙の上書を見て、）
松三　「おわかさま參る、花より」こりや松井屋の娘の名前。

小櫻　おわかさまとしてあるは、お姉えさんへ松井屋の娘御さんから來たお文。

お瀧　それをお讀みなされますれば、仔細がわかるとおつしやいました。

松三　どれ〳〵、何と書いてあるか、（ト手紙を開き、）「一筆しめし上げり〳〵、さてお宅へ上り御目もじの上、委しいお話しいたしたく存じ候へども、他聞を憚ること多く據なく廻らぬ筆にて御願ひ申し度きは、今日わたくしこと觀世音へ參詣がてら、かね〴〵評判高き吉原の櫻見物いたしたく、幸ひ出入りの音吉を供に連れ見物に參り、仲之町清水屋と申す茶屋、音吉しるべ故、二階を借受け見物の折柄、御舍弟松三郎さまおいでに相成り、御同道の質屋利兵衞さまとやら申すお方に、香合質入の事にて嚴しきお掛合に相成り、今宵百金御こしらへ御座なくては御身の上にも拘はる由承はり、早速御用立て度くは存じ候へども、それにてはあまり烏滸がましくと差控へ歸宅の上、御姉さまゝで右百金さし上げ候まゝ、まことにお手數ながら、仲之町清水屋まで早々御屆け下されたく、未だ足らはぬ身を以て御蔑みも如何とは存じ候へども、行屆ぬ所は幾重にも御許し下され、松三郎さま御難儀御救ひ下され候やう偏に御頼み申し上候、あら〳〵目出度くかしく」（ト讀みをはり、）そんならさつき清水屋の、二階に見えた女連れ、屋敷の客といつたのは、松井屋の娘でありしか。

小櫻　さつきも粹な親御さんの、事を分けたるお賴みに、その松井屋さんの御養子にならねばならぬ義理ありとお聞き申した其の上に、斯うした義理に搦みては、どうでもあなたと別れねばならぬことになりましたか。

お瀧　さうした義理がございますゆゑ、是非弟を連れて來て、逢はせてくれとおつしやつて、お待ちなされてゞござりまする。

松三　これ小櫻、それではちよつと淸水屋へ、行つて來るから待つて居やれ。

小櫻　親御さまといひお姉えさんまで、あなたの事にて御心配、殊に松井屋の娘御さんのお心盡しを聞きましてはお留め申すに留められず、幾ら戀しいあなたでも、お歸し申さにやなりませぬ。

松三　よく言つてくれた、忝ない、そんならお瀧さん參りませう。

お瀧　樣子によれば私が又お連れ申しますから、おいらんどうか少しの間お貸しなすつて下さいまし。

小櫻　いえ、そのお文の樣子では、義理に迫つてお別れ申し、娘御さんと御婚禮をおさせ申さにやなりますまい。

松三　そんなら、思ひ切つたといふのか。

小櫻　さあ、切りたいことはなけれども、浮世の義理に搦まれて、

松三 別れともなき其の仲も、

小櫻 別れにやならぬ浮世の義理。

松三 そんなら小櫻。

小櫻 松三郎さん。

お瀧 まあおいでなされませ。

ト松三郎を連れて廊下へ出て行く、小櫻わつと泣伏す、替つた合方になり、下手の廊下より清玄忍び足にて窺ひ出で、

清玄 小櫻どの、嘸悲しいことだらうの。（ト小櫻の側へ住ふ、小櫻顏を上げ、）

小櫻 や、お前は清玄さん。（ト逃げようとするを清玄しつかと捉へ、）

清玄 いやさうはならぬ、一部始終は聞いて居たが、色男の松三郎と別れてしまへば遠慮は入るまい、どうぞ情ぢや小櫻どの、わしの言ふこと聞いて下され。

小櫻 聞いたとあれば是非がないが、思ふお方に別れしとて、何でお前に隨はれよう、たゞの人でもあることか、御出家の身ぢやござんせぬか、どうぞ放して下さんせいな。

清玄 そりや情ないぞよ、これ小櫻、佛も元は捨てし世の悉達太子の其の昔、耶修陀羅女といふ妻あつ

て、其の子に羅喉羅といふ男子をまうくる、羅喉羅の妻を加以女と呼ぶ、羅什三藏妻子あり、況してや今日は凡俗に等しき破戒の此の清玄、元より木竹にあらざれば男女の情に煩惱の起るも無理か凡夫ぢやもの、此のまゝ別るゝ其の時は、こなた故身を果し、焦れ死にゝ死ぬであらう、どうぞ情ぢや此の事を、聞分けて下されいの。（ト袖を引くに、小櫻困りし思入あつて、）

小櫻　さあ、それも最前言ふ通り、此の月中の事ゆゑに、今宵は許して下さんせ。

清玄　いや聞かぬ〳〵、聞かれぬわい、此の月枕交さぬも皆松三郎へ立てる情、わしやどうあつても思ひ切れぬ、思ひ切ることならぬ〳〵。

小櫻　すりや、是れ程に譯をいうても、

清玄　破戒墮落をせし上は、いつそ手籠めに、

小櫻　え、

清玄　こりやもうたまらぬ。（ト小櫻へ抱附かうとするを、アレエと飛退き、）

小櫻　誰ぞ來て下さんせ。

ト逃げ廻るを、清玄追つかけ小櫻を抱へる。ばた〳〵になり、下手よりお爪先きに、以前の若い者外大勢出來り、お爪清玄を引据ゑ、

お爪　此の坊主め、何をしやあがるのだ、惣太さんの扱ひに情を掛けて泊めてやれば、途方もねえ、おいらんを手籠めにせうとは太え奴だ、うぬは氣でも違つて居るか、本氣の沙汰ぢやねえやうだ、賣物へ疵でも附けりやあ、うぬ其の分にして置かねえぞ。（ト胸倉を取り淸玄をこづく。）

○　お爪どんの言ふ通り、

△　此奴は目附きが違つて居るから、

□　色氣狂ひに違えねえ。

淸玄　いゝやわしは狂氣せぬ、小櫻に惚れたのぢや、そこ退いて居て下され。

ト着附脱げかゝり、よろしく思入。

お爪　こりやあ全く色氣狂ひだ、こんな人を二階へ置くと、どんな掛り合ひになるも知れぬ。

○　面倒だ、會所へ突出せ。

皆々　合點だ。

ト騷ぎ唄になり、淸玄小櫻の袖を取らうとするを皆々支へるごつちやの立廻り、小櫻うろ〳〵逃げ廻ろ、トゞ淸玄小櫻の袖に縋るを振拂ふ機みに片袖切れて淸玄ばつたり轉ぶ。此の間に小櫻上手へ逃げてはひろ。淸玄起上り、

清玄　これ小櫻どのいなう。(ト跡を追つて行かうとするを皆々にて押へ)

お爪　早く下しておしまひよ。

皆々　合點だ。

ト立廻りながら清玄の襟上を皆々にて取り、下手へ引摺りはひる。お爪殘り着附の塵を拂ひ、ほつと思入あつて、

お爪　とんだ色氣狂ひに掛り合つて、大騷ぎをやらかしたが、今夜のやうにごたつく晩はない。

ト上手の障子を明け、惣太窺ひながら出で、

惣太　清玄はもう歸つたか。

お爪　歸つたかもねえもんだ、あの色氣狂ひで困つて居るに、何故出て來ておくれでない。

惣太　おらあちつと差合ひで、實は今避けて居たのだ。

お爪　あの坊さんに恐れるからは、何ぞ惡い尻尾を見られたね。

惣太　お祭しの通り見られたのだ。

お爪　さうして何を見られたえ。

惣太　大きな聲ぢやあ言えねえ話しだ、これ。(トお爪に囁く。)

お爪　それぢやあ、いつかの小僧殺しは。

惣太　これさ。(ト押へるを道具替りの知せ、)野暮に大きな聲ぢやあねえか。

ト　お爪は口を押へる、此の模様大引けの拍子木、火の用心の鐵棒にて道具廻る。

(入間屋表の場)――本舞臺前側一面の大格子、上手一間潜り附大戸の出入り、上手板塀たそや行燈總て入間屋表掛りの體、やはり前の鳴物にて道具留る。と騷ぎの合方ばた〳〵になり、潜りの口より以前の若い者大勢、淸玄の襟上を取つて引摺り出し、捨てぜりふにて表へ突倒し、ぴつしやり戸をしめる、淸玄倒れる機に着附所々破れ、片額石にて擦剝きし心にて糊紅になり、苦痛を怺へながらやうやう起上り、

淸玄　是れまで上る度毎にちやほや言ひし舌の根の、乾かぬうちに今宵の始末、(ト口惜しきこなし、誂への合方雨車になる、)あゝ折惡しう降つて參つた、此の儘濡れては歩かれぬ。(ト大戸の所へ行き、)俄雨で困るから、どうぞ傘を貸して下され、もし〳〵。(ト戸を叩く、内にて、)

若者　え、喧しい、靜かにしろ。

淸玄　どうぞさう言はずと、貸して下され。(ト又叩く、是れにて戸を明け、)

若者　それ、持つて行きやあがれ。(ト古き傘を内より淸玄に叩き附ける、淸玄取上げ開き見て、)

清玄　破れ小袖に破れ傘、斯ういふ姿に成行くも、是れも誰ゆゑ、（ト以前の小櫻の片袖を出し、ぢつと思入。）小櫻ゆゑ、（ト悔しきこなしあつて、又片袖に心殘りし思入。）憎しと思へど執着の、迷ふ心に惹かされて、どうかも一度、（ト上手へ行きかけ、入口を見やり、）ても薄情な、人でなしめが。

トきつと思入、本釣鐘風の音にて櫻の花散る、是れへ目を附け、

散る櫻あり、（ト又上手を見やり、）咲く櫻あり、（トぢつと思入あつて、）どうでも思ひ、（ト片袖を懐へ入れろを木の頭、）切られぬわえ。

ト心殘りの思入にて上手を見込む。この模様雨車端唄の合方にてよろしく、

ひやうし幕

中幕

總泉寺裏庵室の場
江戸町入間屋の場

〔役名――無住庵の清玄、船頭牛島惣太、吉田屋松三郎、誓水寺の下男六兵衛、古骨買嘉三七。遣手熊鷹お爪、雇お針お絹、門附義太夫お竹、入間屋傾城小櫻、同新造花川、同花里、禿ゆかり。〕

（清玄庵室の場）――本舞臺三間の間常足の二重、丸太柱古き茅屋根竹椽附、向ふ上手一間古障子の出入、此の脇三尺の佛檀瀬戸物の佛具、此の下けんどん、下手破れたる鼠壁、左右の棲古障子、上

の方後へ下げて一間葺下しの下家、中窓、此の下ひしぎ竹の下見、いつもの所丸太の門口、竹簀戸、下手丸太の路地口、左右生垣、向う裏長屋下見の書割、生垣の前に刎釣瓶の古びたる井戸、二重上手に二枚折屏風を立て、此の内に木綿蒲團、同じく掻巻括り枕、下手鼠壁に膳棚、箱膳に椀、茶碗など載せ、此の下に古行燈、大和風爐、炭取、土瓶茶碗を置き、竹椽の脇に序幕の古傘立てかけある、平舞臺に木の根の踏段、下手に柳の立木、下手だけ同じく釣枝、總て橋場總泉寺裏庵室の體、門口の外井戸端にお絹木綿やつしにて、通ひお針にて米を磨ぎ居る、側にお竹木綿やつし下駄がけ、義太夫の門附にて、三味線と二合徳利を持ち掛り居る、此の見得時の鐘四ツ竹節にて幕明く。

お竹　をばさん、今日はいつもより歸りがよつぽど早いやうだね。

お絹　仕事の切れ目で、半時ばかり早くしまつて歸つたから、今夜おまんまを炊いて置くのさ。

お竹　寒い時分は三日位炊き込んで置くから都合がいゝが、暑くなると惡くなるので困るねえ。

お絹　朝炊いたおまんまが、晩に饐えてしまふから、寒い方がよつぽどよいよ。

お竹　それに此處らは世間より蚊の出ようが早いから、暑くなるのは眞平だ。

お絹　早いといへばお前も今日は、よつぽど歸りが早いやうだね。

お竹　わたしも今日は思ひがけなく、秋葉のお茶屋へ呼びこまれ、餘計なお錢を貰つたから、晩に一杯呑まうと思つて、二合奢つて來ましたから、おまんまを炊いたら遊びにおいでな。

お絹　それは何より有難い、丁度わたしも入間屋から臺の殘りを貰つて來たから、肴に持つて行きませう。

お竹　いやお前のおいでの入間屋は、大層この頃流行るさうだね。

お絹　お職をはじめおいらん方が一粒選りの玉揃ひ、どれも〳〵美しいが、好い中にも取分けて小櫻さんが愛敬者で、あすこの內は流行るのさ。

お竹　お爪どんといふ意地の惡い、遣手衆があるだらうね。

お絹　あい、朝から晩までがみ〳〵と、小言ばかり言つて居るが、よくお前知つておいでだね。

お竹　元わたしの隣に居て、若い時から知つて居ますが、顏に似合ず色ッぽく、よく男を拵へたッけ。

お絹　今でも其の氣が失せないので、小櫻さんの兄だといふ惣太さんが情人で、毎日二階へ來て居ますよ。

お竹　そりやあ向島の船頭で、わたしも知つて居る人だが、よつほど年が違ふだらうに。

お絹　お爪どんは小金があるから、男の方は小遣ひ取りさ。

お竹　大方そんなことだらうね。

ト四ツ竹節にて、花道より嘉三七肩入のある半纏やつし裝、股引尻端折り草鞋、古骨買のこしらへ古

傘を載せし荷を擔ぎ出來り、直に舞臺へ來り、

嘉三　おゝこりや長屋の上さん達、もうみんなお歸りか。

お竹　をぢさんお前もお歸りかえ。

嘉三　今日は買物が少ないので、米の錢も取れないから、死んだ忰の梅松が墓參りをして來ましたので大きに遲くなりました。

お絹　ほんにお前の息子さんは、惜しいことをしなすつたね。

お竹　此の春家へ宿下りに、來なすつたのがお別れだね。

嘉三　取引きをする傘屋の世話で、御藏前の吉田屋さんへ小僧に上げて置いたところ、よく目を掛けて下すつたが、後の月向島へお使ひに行つた歸りがけ、小梅の土手で惡者にお得意先きから請取つた金を取られて打たれたか脾腹の色が替つて居て果敢ない往生いたしました、何たるわしは因果なことか、三年跡に女房に死なれ、今また忰に死なれたので、がつかりとして力が落ち、稼ぐ心もござりませぬ。

お絹　わたしなども亭主に別れ、續いて子供を二人なくし、其の泣きをしましたから、そりや尤もでござります。

お竹　然しそれを何時までも、くよ〳〵思ふは體の毒、今夜は一杯やりますから、後にをぢさん呑みにおいでな。

嘉三　有難うござります。

お竹　をばさん、お前も早くおいでよ。

お絹　何ぞ今夜はお手前もの〻、浮瑠璃が聞きたいね。

お竹　それは何でもお好み次第さ。

お絹　どれ、早く炊いて行きませう。

ト四ツ竹節にて、お竹お絹下手路地口へはひる、嘉三七は門口を明け、

嘉三　清玄さま、今日は何うでござります。

ト木魚入りの合方になり、正面の障子を明ける、清玄毬栗鬘古びたる鼠の着附、病人のこしらへにて出來り、蒲團の上へ住ひ、

清玄　お〻嘉三七どの、お歸りでござつたか、よう心掛けて朝夕に、わたしを尋ねて下さいます。

嘉三　今日は朝から空がもめ、天窓の重い日であつたが、替ることもござりませぬか。

清玄　胸の痞へは持病ゆゑ、晴れることはござりませぬが、氣分に替りはござりませぬ。

嘉三　それはようござりました。わしなどは頭痛がして、氣分が惡うござりました、それはさうといつもござる、六兵衞どのは參られませぬか。

清玄　寺に用事があると見え、まだ今日は參りませぬ。（ト嘉三七縁端にある古傘を見て、）

嘉三　もし、こゝにある古傘は破れきつて居りますが、賣つてはどうでござります。

清玄　それはいつぞや入間屋から貰うて歸つた破れ傘、これでも無いよりはましなれば、差料にいたします。

嘉三　それを差料になさるなら、是れほど破れぬ傘があるから取替へて進ぜませう。（ト傘の荷の中から古傘を出して、）これは破れも少ないから、是れを差料になされませ。

清玄　それは有難うござります、然し取替へて貰うては。

嘉三　いやこつちは骨が見込みゆゑ、其の遠慮には及びませぬ。（ト古傘を荷の中へ入れ、）左樣なれば、清玄さま。

清玄　早う歸つて休まつしやれ。（ト門口へ出て、）

嘉三　どれ、茶を沸して夜食としませう。（ト四ツ竹節にて、嘉三七荷を擔ぎ下手へはひる。）

清玄　人に人鬼はないもので、獨り者を憐れんで長屋の衆が親切に、よう世話をして下さる、あゝ有難い

ことぢやなあ。(ト時の鐘、床の淨瑠璃になる。)

〽晴れやらぬ卯月の空の曇り勝ち、雨持つ風にさら〳〵と降る音忍ぶ青柳に、軒端小闇き草の庵、爰へ日毎に小梅より尋ぬる下男の六兵衞が、

ト時の鐘蛙の聲にて、花道より六兵衞やつし裝股引尻端折り、風呂敷包を提げて出來り花道にて、

六兵 さつきは今にも降りさうだつたが、よい鹽梅に持直した。雨が降るとこゝら近所は道がぬかつて歩かれぬ、どうぞ天氣にしたいものだ。

〽傾く木戸へ歩み來て、簀戸を押明け入相の、かねて知つたる上り口、

ト六兵衞簀戸を明け内へはひり、

旦那さま、これにおいでなされましたか。(ト合方になり、六兵衞二重下手へ上る。)

清玄 おゝ六兵衞か、だいぶ今日は遲かつたな。

六兵 八ツの葬式がござりまして、それで遲くなりました。

清玄 檀家は、何れに不幸があつたぞ。

六兵 あなたも以前年回にはお經を上げにお出でなされた、赤坂田町の伊勢屋の隱居が、一昨日の晩なくなられ、よい年ゆゑ葬式も大層立派でござりました、それゆゑたんと饅頭を、貰ひましてござ

りますから、お慰みに持つて參りました。〽包み解く〳〵饅頭の、包みを二ツ取り出せば、（ト六兵衞包を解き、紙包の饅頭を二包出す。）

清玄　それは〳〵忝ない、以前は度々貰ふゆゑ、さのみ珍らしくもなかつたが、此の身になつては珍らしい、して此の饅頭は何處のぢやな。

六兵　これは一ツ木で名の高い、小櫻のでござります。

清玄　なに、小櫻の饅頭ぢや。（ト嬉しき思入にて）名を聞いてさへ、嬉しいわいの。〽包み取上げ印を見て、おゝ懷しの小櫻と、悦ぶ體に呆れ果て、

ト清玄饅頭の包を取つて悦ぶを、六兵衞見て呆れしこなし、

六兵　もし清玄さま、あなたはやつぱり浮々と、夢がおさめなされませぬか。

清玄　なに、夢がさめぬかとは、

六兵　その饅頭の包み紙、小櫻といふ名を聞いて、嬉しさうなお顏附き、まだ入間屋の小櫻にお心が殘りますか。

清玄　むゝ。（トぎつくり思入。）

六兵　えゝ、情ないことでござりますな。

〽忠義一途な六兵衛が胸倉とつて引倒せば、

ト六兵衛腹の立つ思入にて、清玄の胸倉を取り引倒す、

清玄　こりや六兵衛、何とするのだ。

六兵　手荒いことをいたしまするは、こりや私ではござりませぬ、お逝れなされたおつかさまが、御折檻をなされますのだ。

〽突ッ放して紙入より、取出す一通差附けて、

ト六兵衛紙入の中より、書置の一通を出し清玄に差附け、

血汐のついたおつかさまの、此の書置は清玄さま、よもお忘れはなされますまい。

清玄　むう。

六兵　我が亡き後は成代り、悴求女に行ひの悪いことがあつたらば、折檻なして異見せよと、お残しなされたお書置、これを反故になされますゆゑおつかさまに成代り、御折檻をいたしまする。

〽又も襟上むんづと取り、打たんとせしが主従の、禮儀に其のまゝ突退けて、

ト清玄を引附け、書置で打たうとして六兵衛思入あつて手を放し、

昨日御異見申した時、向後ふッつり思ひ切るとおつしやつた口の乾かぬうち、小櫻の名に見惚れ

るは、まだお心が直らぬゆゑ。

清玄　六兵衛そなたにさう言はれると、一言返す詞もなく、身に恥入つて面目ない。

〽差しうつむいて恥入りし、姿を見返り詞を改め、

ト清玄ぢつと俯向き居る、六兵衛思入、誂への合方になり、

六兵　改め申すに及びませぬが、あなたの親御は千葉の御家中大江彈正さまというて、お上のお覺えよきゆゑに千五百石の御知行で何不自由のない御用人、如何なる天魔の魅入りしかお家を覗ふ御家老の謀叛に荷擔なされしゆゑ、露顯に及びし其の時に縄目に逢うて獄屋へ入れられ、遂に死罪のお仕置受け、數代傳はる大江のお家も彈正さまで退轉なし、御新造さまは御氣丈にも家中の者に後指さゝれるのが殘念なりと、この一通をお殘しなされ、お部屋において見事の御自害、

〽月日も替らず同じ日に、お二人共に非業な御最期、

七日もたゝぬ其の内に、御追放になつたれば、菩提の爲めにあなたをば檀那寺ゆゑ誓水寺へ、お弟子に頼んで御剃髪、その頃お家に若黨を勤めました此の六兵衛、せめてお側で朝夕の御用を足さんと御住持へ頼んで寺の下男となり、御成長なされますを樂しむ甲斐も情ない女犯の罪で御追放、是れが愚鈍な者ならば悔む所もござりませぬが、人に勝れた學問や又御器量がありながら、

破戒墮落のお身となりしは、實に悔しうござりまする。

へ主人を思ふ一心に、拳を握り六兵衞が悔し涙に暮れければ、聞く清玄は己の科に、重き頭を上げ兼ねて、(ト此の內六兵衞宜しく思入、清玄も面目なきこなしあつて、合方にて、)

清玄 不圖した心の迷ひより師の高恩を忘却なし、出家の身にて遊里へ通ひ、遂には寺法の掟通り勘氣を受けて追放され、破戒墮落の身となりしは、此の清玄が愚ゆゑ、かゝる姿に成果てしを見捨てぬ忠義なそなたへ對し、合す面があらざるわえ。

六兵 此の間から幾度となく同じことを申しますが、御改心なされましたら小櫻どのをふッつりと、思ひ切つて下さりませ。

清玄 菓子屋の名さへ小櫻といへば床しく思ふのも、戀慕に迷ふ煩惱ゆゑ今の異見に是れからは、出家堅固に勤むるから、そちも安心してくりやれ。

六兵 愚鈍な生れの六兵衞が詞をお用ひ下すつて、思ひ切つて下さるとはまことに嬉しうござりまする、それに附けても御存じの、一徹な氣の私ゆゑ、手荒いことをいたしましたは、御免なされて下さりませ。(ト兩手を突いてあやまり、)力任せにいたしましたが、お胸が痛くはござりませぬか。

清玄 いや／＼胸は痛くはないが、病のせゐか痛いほど、肩が張つてならぬわいの。

六兵　お肩が張るなら、わたくしがやはらげて上げませう。

〽後へ廻り揉みかゝれば、〈ト六兵衞後へ行き、肩を揉みかける〉

清玄　いや〳〵、それには及ばぬわい。

六兵　元御家來の私ゆゑ、御遠慮なさるにや及びませぬ。

清玄　それでは少し揉んでくりやれ。

六兵　はい〳〵、畏まりました。

〽背撫でさすり瘦せ果てゝ、骨ばかりなる清玄が窶れし姿を見るにつけ、其の古を思ひ出で落つる涙を搔き撫でゝ、〈ト六兵衞清玄の肩を揉みながら姿を見て、よろしく思入あつて〉

清玄　此の二三日この方は、寐てさへ體が痛いから、餘程瘦せたことゝ見える。大層お瘦せなされましたな。

六兵　誓水寺に御辛抱なされましたことならば、何御不自由もないお身に、お體も太りませうに、お心柄とはいひながら壁も破れた庵室に、見る影もないこのお姿、斯樣にお瘦せなされたも元はといへば吉原の、狐女郎の小櫻ゆゑ、よくも化かし居つたと思へば、憎うて〳〵なりませぬ。

〈ト六兵衞腹の立つ思入にて、きつく摑む。〉

清玄　あいたゝゝゝゝ、さう手荒うては痛うてならぬ。
六兵　つい小櫻を憎いと思ひ、揉む手に力がはひりました、眞平御免下さりませ。
　へ詫びる折柄裏手より、古骨買が入來り、
　　ト六兵衞詫びる、下手より以前の嘉三七出來り、内へはひり、
嘉三　おゝ六兵衞どのござらしッたか。
六兵　これはお長屋の嘉三七どの、毎度主人がお前さまの、お世話さまになりまする。
嘉三　いえ、獨り者のことなれば、別にお世話もいたしませぬ。
清玄　これ六兵衞、痩せたせゐか肩を揉むと、胸へ響いてならぬから、もう止しにしてくりやれ。
六兵　はい〳〵、左樣なら止しにしませう。(ト六兵衞下手へ來る、嘉三七は竹椽へ腰を掛けて居る、)
嘉三　清玄さまの御病氣も、俗にいふぶら〳〵病、嘸お前も心配でござらう。
六兵　近い所なら朝夕に參つて御用を足しますが、小梅からは十町餘り、餘程暇がかゝりますので、奉公の身でござりますから、さう度々は參られませぬ。
嘉三　晝は稼業で留守勝ちだが夜は内に居ますから、都度々々ござるにや及ばない、長屋の者が氣を附ければ案じさつしやるな。

清玄　これ六兵衞、よく皆さまが御親切にお世話をなされて下さるから、厚くお禮を申してくりやれ。

六兵　皆さま方の御親切は、實に有難うござります、遠くの親類近くの他人、お長屋の衆がお力ゆゑ何分お願ひ申しまする。(ト辭儀をなす、此の時暮れ六ツの鐘を打つ)おゝ今の間に日が暮れた。行燈を點けてまゐりませう。

嘉三　わしが點けて上げるから、足下の明かるいうち、お前は早く歸らつしやい。

清玄　空も曇つて居る樣子、降らぬうちに行つたがよい。

六兵　左樣なればわたくしは、お暇いたすでござります。(ト六兵衞下へおりる)

嘉三　跡を案じさつしやるな。

六兵　有難うござりまする。(ト合方きつぱりとなり、六兵衞門口へ出る、清玄思入あつて)

清玄　これ、六兵衞待ちや。

六兵　はい、御用でござりますか。

〽立戻りたる六兵衞が、顏を見やりて淚を浮め、

ト六兵衞後へ歸る、清玄六兵衞の顏を見て愁ひの思入あつて、

清玄　長い間のそなたの世話、死んでも忘れはいたさぬぞ。

六兵　えゝ縁起でもない、死ぬなどゝ、假にも言うて下さりますな。どれ〳〵早く歸りませう。

ト合方にて門口へ出る。

嘉三　そんなら、六兵衞どの。

六兵　又明日お目にかゝりませう。

〽暇を告げて立出でしが道の邊へ佇みて、

ト六兵衞花道へ行掛け、心に掛る思入にて立留り、

清玄さまの御病氣も、次第々々に痩せ衰へ、所詮御全快は覺束ないと思ふ矢先へ今のお詞、死んでも恩は忘れぬと、心にかゝる折も折、泣出しさうな今夜の空合、あゝ涙の種にならねばよいが。

〽心殘して立歸る、嘉三七は行燈ともし、

ト六兵衞よろしく思入あつて花道へはひる、此の内嘉三七は行燈をつけ、

嘉三　さあ行燈はつきましたが、油がちよつと少いから後に持つて來て上げませう。

清玄　それは有難うござります。

嘉三　何ぞ用があつたら、大きな聲で呼んで下され。

清玄　何分お賴み申します。あゝ若し嘉三七どの、今六兵衞に貰ひましたが、氣にかゝらずば饅頭を

一包み進ぜませうか。

嘉三　寺門前に居るからは、葬ひの饅頭は書入でござります。

清玄　それなら是れを、上つて下され。（ト一包みやる）

嘉三　それは〳〵有難うござります、どれ茶を淹れて喰べませう。

　　〽包みが解けて饅頭の落ちしを拾ひ歸り行く。

　　ト嘉三七饅頭の包解けて饅頭の落ちしを拾ひ、砂の附きしを吹きながら下手へはひる。

　　〽跡見送りて清玄は、息切れなすを撫で擦り、（ト床の合方になり、清玄胸を擦り思ひ入あつて）

清玄　あゝ又降出して參つたわえ、人の落目を見捨てぬが世の人情とはいひながら、長屋の衆が親切によく世話をして下さるは、破戒墮落の僧なれどまだしも佛のお助けなるか、殊には父の代よりして奉公せしとて六兵衛が遠い所を每日來て、萬事世話をするのみか、母が末期の書置を取出しては數度の異見、これ皆母が冥土より我れを案じて言することゝ、思へば犇と身にこたへ、先非を悔いて最前も改心なすと六兵衛へ　堅く言うては歸したが、

　　〽胸に忘れぬ戀情の、煩惱の犬追へども去らず、清玄が身に附纏ひ、

寐ても覺めても小櫻のたゞ面影が眼前に見え、忘れたいと思うても忘るゝことのならぬ因果、生

涯人に疎ろゝ破戒墮落の身となりしも、御教諭受けし師の恩を忘却なしたる此の身の罰、濟まぬことぢやと幾度か改心なさうと思うても、改心されぬ淺ましさ、所詮思ひ切られねば六兵衞どうぞ許してくれ。

〽戀慕の闇に迷ひ入り、移り香慕ふ片袖を、取出して打見やり、

ト清玄六兵衞へ詫びるこなしあつて、懷より序幕の片袖を出し、

いつぞや逃げるを逃さじと捉へし時に切れたる片袖、是れを肌身に附けて居るは、戀しと思ふ小櫻と添臥しをして居る心。

〽多年修行をなしたるも今では水の泡となり、

斯くまで愚痴になりし清玄、以前は五條七條の法衣を纏ひし身なりしも、

〽見るもいぶせき破布子、乞食坊主同樣な果敢ない姿になつたのも、

是れも誰ゆゑ小櫻ゆゑ、

〽情を賣るが傾城の、勤めといふにたゞ一度、

優しい詞を掛けぬといふは、あまりといへば情ない心、今は廓へ行けぬ身に、寐ても覺めても逢ひ度いと思ふより外念のない、此の清玄の一念が、など小櫻へは通らぬか。

〽物狂はしく淸玄が、廓の方を打見やり、ほうと吐いたる一息の炎と見ゆる灯の光り、恨みも咳に氣の折れて、（ト淸玄向うをきつと見込み、物凄き思入あつて、咳入り氣を替へ、）

あゝ忘れたい〳〵、此の片袖を抱きしめて、どれ一寐入りして忘れようか。

〽枕につくや寺々の鐘も哀れに、

ト淸玄括り枕を取り、寐ようといふ思入、時の鐘三重にて此の道具廻る。

（入間屋の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面一間床の間、掛物、時の花の置花活、續いて一間袋戸棚違ひ棚、此の下襖、上の方一間障子屋體、中仕切に障子、下の方次の間夜具棚、此下白木の簞笥、茶簞笥などよろしく、下手誂への六枚屏風、よき所に丸行燈、箱火鉢に鐵瓶を掛けあり、爰に序幕の新造花川花里住ひ、お爪の遣手立ち掛り居る、この見得太鼓入り、賑かな流行唄にて道具留る。

花川　もし花里さん、今廊下の隅に立つて居た、汚ない裝の坊さんは、ありやあお客ぢやアあるまいね。

花里　毬栗のやうに月代が生え、ろく〳〵わたしや見なかつたが、何だか蒼い顏であつた。

お爪　なに、廊下の隅に汚ない坊主が、立つて居たと言ひなさるのか。

花川　今二人して手水に行つて、

花里　歸りしなに見ましたよ。
お爪　そりや誰ぞの影法師だらう、今夜そんな坊主が、あがつた覺えはありやしない。
花川　大方あれが幽靈といふものかも知れません。
花里　さういへば櫺子の方で、どろ〳〵といひましたよ。
お爪　えゝ、馬鹿なことをお言ひでない、此の賑かな二階などへ何で幽靈が出るものだ、お前方は臆病でこはい〳〵と思ふから、櫺子の破れへ吹き込む風が、どろ〳〵のやうに聞えたのだ。
花川　ひうどろ〳〵といつたのは、櫺子の破れか知らないが、
花里　その時窓から腥さい　風が吹いて來ましたよ。
お爪　大方そりやあ裏の臺屋の、わた樽が匂つたのだらう。
花川　それにしても不思議なのは、
花里　襟元がぞつとしました。
お爪　そりやお前方が薄着だからだ、そんな跡方もない　ことをべら〳〵とお喋べりでない、入間屋へ幽靈が出るなどゝいはれると、見世の衰微になることだから、決して言つてはならないよ。
花川　ほんにさうでござんした、内の衰微になつては濟まない。

花里　是から口を愼んで、誰にも話しをしますまい。

お爪　お前方もお客があるのに、早く床へお出でゞないか。

花川　さあ花里さん、一緒においでな。

花里　廊下の隅が怖いねえ。(ト右の鳴物にて兩人下手へはひる。)

お爪　今夜かたゞゝ惣太さんが來る積りゆゑ待つて居るに、又川岸へでも引ッ掛つたか、小遣錢がないといふから金を拵へ待つて居るのに、若い者を情人に持つと餘計に苦勞をしにやならねえ、(ト此の時一ッ鉦を打込む、お爪びつくりして、)幽靈が出たといふ所へ一ッ鉦はどつとしない、さつき聞けば此の裏の損料屋の婆さんが、お目出度くなつたといふが、枕念佛は眞平だ。

ト流行唄の合方にて下手へはひる。時の鐘誂への獨吟になる、

〽きのふ見し花もいつしか風に散り、けふは若葉の木下闇、宵に降りにし村雨に、落つる雫のしめりがち、

ト合方になり上手の障子を明け、松三郎着流しにて出來り、後より小櫻部屋着の裝にて出來り、松三郎よき所へ住ふ、小櫻袖で涙を拭ひながら、

小櫻　それではどうでも今宵限り、當分お出でなさんせぬか。

松三 浮世の義理ゆゑ、もう來られぬ。

小櫻 悲しいことでござんすなあ。

〽晴れぬ思ひに音もくもる、緣も淺き淺草の、鐘を重ぬる別れ際、

ト小櫻始終泣き居る、松三郎是れを見て不便だといふ思入あつて、

松三 よく昔からいふことだが、廓の金には詰るが習ひ、茶屋の拂ひに差支へ質入れなしたる千葉家の寶、世にも稀なる青磁の香合、日限りの切羽に旣のこと、おぬしと二人死なうとまで迫つた所へ清水屋の女房が屆けた百兩の、金の出所は地主の娘、重なる恩に是非なくも別れともなき中をば別れ、内へ歸れば地主から善は急げと三日目に、表と裏の俄婚禮、目出度い中へ千葉家から、一昨日納めし香合は見紛ふばかりの出來なれど、正しくこれは贋物なりと差戾されてびつくりなし、よく〳〵見れば贋物ゆゑ受戾したる質屋へ行き、品の違ひし事柄を掛合ひたれど質屋にて、其の節中を改めてお持ちなされた品なれば此の方にては存ぜぬと、言はれて見れば我が過失、合點の行かぬは番頭と小道具仲間のはたしの與市、不斷贋物を拵へて諸方へ賣込む奴ゆゑに、若し番頭と馴れ合つて贋物をこしらへ摺替へしかと、思へど千葉家へ憚りて表向きにて詮議がならず、年來お出入りする德に五十日のお日延をお聞き濟み下すつたが、其の日限さへもう僅か、行方の知

れぬ其の時は、石濱樣のお身の上、さうなつたらばどうしたものと、實に夜の目もろく〳〵に寐られぬほどのおれが心配、心の内を察してくりやれ。

小櫻　おとつさんとお姉えさんの、お賴みゆゑに義理づくで、辛い別れをしましたも、折角おいでなされたればお二人さまへ花を持たして、お歸し申したわたしの切なさ、跡でお前のお心を聞かうと思つて居りましたが、文を上げても返事もなく、あれぎりお出でなさんせぬゆゑさういふことゝは露知らず、實は今日までお前さんを、お恨み申して居りましたわいな。

松三　定めてそんなことであらうと、思つて居たれど來られぬは、あの香合が此の儘に、在所の知れぬその時は、數年來のお出入に御恩を受けた千葉樣をしくじるのみか是れまでに、厚き御贔屓蒙りし石濱樣へ濟まぬとて、眼の不自由に一方ならず親父が心配するを見ては、いくら逢ひ度く思つても內を拔けて出られぬ仕儀、附いては姉は我が身を思ひ、一日浮世の義理づくで、餘儀なく別れしことなれば、嘸逢ひたからうが一晩でも今そなたが明けた日には、おとつさんが一途な氣に地主へ濟まぬと若しひよつと、ひよんなことでもあつた時は、世間へ對して濟まぬわけ、その內逢はしてやらうからどうぞ辛抱してくれと、言はれて見れば出られもせず、逢ひ度く思へど逢はれぬは、切ないわけゆゑ許してくれ。

〽花を見捨てゝ故郷へ一羽おくれし雁金の、落ちて行方を忍び鳴き、

ト松三郎許してくれとぢつと思入、小櫻もこなしあつて、

小櫻　さういふ事なら仕方もなけれど、地主樣のお孃さまと仲睦じう片時も、離れともなくそれゆゑに、あれぎりお出でのないことゝ、思へば眞に悔しうて泣かぬ日とてはござんせぬ。

松三　それは大きな推量違ひ、ませたやうでもまだ年が、行かねば夫婦のその中も、他人のやうに餘所餘所しく、殊に婚禮した日より降つて湧いたる香合の、騷ぎに共々心配なし、ほんのことだがろくろくに一ッ寐さへもせぬ程にて、色氣というては少しもない。

小櫻　それはどうだか一ッに居ねば、知れたことではござんせぬ。

松三　噓だと思はゞ此の頃に、姉が禮に來るといへば、其の時聞いて見たがよい。

小櫻　お姉えさんとてお嫁方、まことのことはおつしやるまい。

松三　はて、疑ひ深いことぢやなあ。

〽空にとぎれし浮雲の、行きつ戻りつ戻りつ行きつ、迷ふ心に、あゝ何とせう。

ト小櫻つんと脇を向く、松三郎袖を引くを振拂ふ。

出られぬ内を今も言ふ姉が察して內證で、今宵出してくれたゆゑ、僅かな道も三枚の駕籠で態々

逢ひに來たも、其の香合が知れぬ時は、長い別れにならうも知れねば。(トぢつと思入)

小櫻　えゝ長い別れと言はしやんすは。

松三　知れねば遠い上方へ、捜しに行かねばならぬゆゑ、長い別れにならうわいの。

小櫻　さうなる時は此の儘に、

松三　暫し逢はれぬ憂き別れ、

小櫻　せめて今宵一夜さは、

松三　それさへならぬ姉への義理、

小櫻　本意ないことでござんすなあ。

〽いつしか又も雲閉ぢて、袖に涙の降るや春雨。

ト松三郎は香合が出ねば死ぬといふ思入、小櫻は別れを惜しみ泣く、獨吟の上げ合方になり、下手より惣太脊流しにて出來り、

惣太　こりやあ吉田屋の松三郎さん、お珍らしうございますな。

松三　こなたは兄御の惣太さん、定めてお前も小櫻から話しを聞いたでござらうが、餘儀ない譯で二月越し、久しく廓へ來ませなんだ。(ト惣太下手へ住ひ、)

惣太 今次の間で承はれば、伊勢屋へ預けた香合が質物になつたといふことだが、そりやお番頭の兀天窓と與市が仕業でござりませう。

松三 わたしもさうかと思つて居れど、迂濶に詮議の出來ぬのは、世間へぱつとする時は、お屋敷の名が出るのみか、質に置いたは內證ゆゑ、それが知れゝばお出入りを上げられねばならぬ譯、それゆゑどうか內々で、在所を詮議したいものだ。

惣太 向うが太え奴だから、たゞぢやあ所詮言ひますまい、然しそんなことを探るのは惡事に馴れた此の惣太聞き糺して上げませう。

小櫻 どうかお前の働きで、知れることなら、其の所を、聞き糺して下さんせ。

惣太 手前がお世話になる旦那、すつかりおれが洗ふ氣だ。

松三 何分共に賴みます。

惣太 それに附けて申すのも、何だかきざな話しだが、此の頃出るとは取られ通しで、小遣ひ錢にも困る始末、どうか松さん十兩ばかり、お貸しなすつて下さりませ。

松三 折角のお賴みだが、わたしも此の頃愼み中、お恥かしいが懐中も僅かな金ゆゑ今といつては、どうも貸して上げにくい。

惣太　これが百兩といつたらば、今といつては無からうが十兩ばかりの端た金、器用に貸しておくんなせえ、其の代りには香合をわつちが尋ねて上げませう。

松三　僅かなことゆゑ常ならば、直に貸して上げるけれど。

惣太　それぢやあわつちに其の金は、貸せねえと言ひなさるのか。

松三　まことにお前に氣の毒だが。（ト惣太むつとせし思入にて）

惣太　なに、貸せなけりやあようござります、達てとは言ひませぬ、千葉の屋敷の岩淵さまは、網船を漕ぐ時分から久しいわつちが馴染の旦那、これから行つて十兩の金を借りに行きますが、口が辷つて香合をお前が質にぶち込んだ話をしめえものでもねえから、若し言つたら御免なせえ。

ト松三郎ぎつくりして、

松三　それをお前に言はれては、お出入りの屋敷をしくじつて家に拘はる一大事、どうぞ言はずに居て下さい。

惣太　妹が馴染のお客だから、言はゞ兄弟同樣ゆゑ、言はねえ氣だがお喋べりだから、つい言はうかと念を突くのだ、それとも屋敷へ行つて惡くば、十兩貸してくんなせえ。

松三　さあ、今といつては。

惣太　それぢやあ僅か十兩の、金がお前は出來ねえのか。
松三　さあ、それは、
惣太　どうでも金は貸せねえか。
松三　さあ。
惣太　金と力はなかりけりか、いやはや意氣地のねえことだ。
松三　むゝ。（ト松三郎口惜しき思入。）
惣太　金を貸さにやあ仕方がねえ、岩淵さまの所へ行つて、お喋べりをして借りて來よう。
　　ト ずつと立つて行かうとする、此の内小櫻戸棚から金を出し、紙に包み、
小櫻　これ兄さん、待ちなんせ。
惣太　待てとは何だ。
小櫻　松三郎さんから此の間お貰ひ申した金があるから、それを貸して上げるから、行くのはよして下さんせ。
惣太　金せえ借りやあ窮屈な、何で屋敷へ行くものだ。（ト小櫻松三郎に向ひ。）
小櫻　この間お前さんから、お貰ひ申した此のお金、今入用もござんせぬから、これを貸して下さいま

し。

ト松三郎の前へ出す。

松三　それぢやというて、此の金を。

小櫻　はてわたしの方は何時でもよいから、これを遣つて下さんせえな。

ト松三郎忝ないといふ思入あつて、

松三　それではお前の頼み通り、十兩貸して上げますぞ。（ト金を出す。）

惣太　そりやあ有難うございます。此のお禮には香合を、わつちが尋ねて上げましよう。

松三　それも內證のことなれば、

惣太　言つて惡くば言ひますまい。

小櫻　金を借りたら、お前は早く、

惣太　爰に居ては邪魔になるか、こいつア己が野暮だつた。（ト言ひながら立上り、）それぢやあ松さん。

松三　惣太さん。

惣太　又なくなると、借りに來ますよ。

ト端唄にて、惣太思入あつて下手へはひる。

松三 愼み中に懷中も、僅か途中の入用だけ、それゆゑそなたに十兩の金を出させる意氣地なし、嘸や愛想が盡きたであらう。

小櫻 いえ〳〵それはお前さんより、あゝいふそでない兄さんが繫がる緣でござんすゆゑ、愛想が盡きたらどうせうと、わたしや苦勞でならぬわいな。

松三 惡い兄のあることも元より承知のことなれば、決して愛想は盡きねども、浮世の義理に今宵ぎり、暫く顏が見られぬぞ。

小櫻 所詮この世で添はれぬわたし、暫くお顏の見られぬも、淚を呑んであきらめますが、お心にさへ變りがなくば、未來はどうぞわたしをば、女房に持つて下さんせ。

松三 この世は親の賴みにより、餘儀なくお花と夫婦になれど、いふまでもない先きの世は、二世を掛けたるそなたと夫婦。

小櫻 それがまことでござんすか。

松三 噓僞りでないことは、取交したる起請をば、反故にせぬのが何より證據、

小櫻 そんなら必ず、彼の世はわたしと、

松三 三世を掛けて夫婦なるぞ。

小櫻　何にも言はぬ、嬉しうござんす。

ト小櫻嬉しき思入にて、松三郎に縋りよろしく思入、下手より禿出來り、

禿　もし松さん、お前さんにおいらんが、お目にかゝりたいと言はしやんす。

松三　何の用か知らないが、今行くといつてくりやれ。

禿　いえ〳〵一緒にお連れ申せと、言はしやんしたわいな。

小櫻　小紫さんが此の間から、いつそ案じて居なさんしたから、早う行つて下さんせいな。

松三　それではちよつと行つて來るぞよ。

ト唄になり、松三郎禿に連れられ下手へ入る。跡時の鐘、誂への合方になり、小櫻思入あつて、

小櫻　此の間から松さんに、逢つて心が聞きたいと思うた甲斐も情ない、摺替られた香合が知れねば遠い上方へ、尋ねに行くと言はしやんすが、長い別れにならねばよいが、斯ういふことに成行くも、わたしを恨んでござんすと噂に聞いた清玄さんの、若しや思ひぢやあるまいか。（ト此の時風の音になり、仕掛にて行燈の燈火暗くなる。）こりやどうしたか、氣味の惡い、行燈がくらくなつた。（ト行燈の側へ行き燈心を掻き立て、）油もたんとついであるのに、何で闇くなるのか知らぬ。（ト明り暗くなる。）庭から風でも當るのか。（トかすめて薄ドロ〳〵になり小櫻行燈を引寄せる、行燈のありし後に清

玄しよんぼりと天窓を下げ蹲まり居る、小櫻心附かず、）ぞつとする程襟元へ、夜風がしみて、おゝ寒い。（ト身ぶるひなして振返り、清玄を見附けて、）そこに居るのは誰でござんす。（ト清玄答へなく俯向きゐる。）默つて居ては分らぬわいな。（ト是れにて清玄少し顏を上げ、）

清玄　これ小櫻、わしぢやわいの。

小櫻　え、さういふ聲は。

清玄　そなたの厭がる清玄ぢや。（ト顏を前へ出す。）

小櫻　えゝ。（トびつくりして後邊にどうとなる、爰へ隣の内の一ツ鉦を打込み、凄き合方になり、）何でお前が此の二階へ。

清玄　そなたの顏が見たいゆゑ、態々こゝまで來ましたわいの。

小櫻　こざんせずともよいことを。

清玄　來ずともよいとは、これ小櫻、さりとは情ない心ぢやなあ。

トドロ〳〵にて蹲みしまゝ、ずる〳〵と小櫻の側へ寄る。

小櫻　あれえ。（ト逃げようとする裾を捉へ、きつと思入、合方きつぱりとなり、）

清玄　一子出家するときは、九族天に生ずといふ佛の教へに得度して、折角出家を遂げし身を、いつぞ

や廓でそなたを見初め、世に此樣な美しい女子は二人あるまいと、思ふにいやます我が思ひ、せめて男と生れた名聞、かうした女と添寐して樂しむならばと思うたが、煩惱の種の蒔き初め、積り積りて五戒を破り、そなたゆゑに師の坊の勘氣を受けて追放され、賴む小蔭に雨の漏る橋場裏の寺門前、軒端傾く庵室に、果敢なく浮世を送る淸玄、崩れし壁や戸の隙の夜風も薄着の肌にしみ、枕に就けど寐られねば、胸に思ふはそなたのみ、未だ世にありし其の砌り繁々廓へ通へども、座敷ばかりでたゞ一夜枕かはせしことなければ、何時も本意なく歸りしゆゑ、戀慕の情に閉ぢられて此の儘死すとも浮ばれぬ、戀に焦れて瘦せ衰へ、見る影もない姿ゆゑ、厭でもあらうが淸玄が、どうぞ思ひを晴らさしてくれ。

小櫻　その恨みは無理ならねど、出家を墮落させましては、此の身の罪の怖しさに、一夜の枕交さぬはお前のお身を思ふゆゑ、出家にこの身は任しませぬ。

淸玄　斯くまで思ひこんだ上は、得心せずば手籠めにして、思ひを晴らさにや置かぬぞよ。

ト淸玄立ちかゝり物凄くいふ、小櫻ぞつとして、

小櫻　あれ、誰ぞ來て下さんせ。

淸玄　あこれ、靜かにいたさぬか、聲を立つれば不便ながら可愛さ餘つて憎さが百倍、咽喉へ喰ひ附き

殺してしまふぞ。

小櫻　え丶、

清玄　命が惜しくば自由になるか。

小櫻　さあ、それは、

清玄　喰ひ殺さうか、

小櫻　さあ、

清玄　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。（ト附廻してぐるりと廻り）

清玄　得心せずば、手籠めになして。

ト清玄抱き附く、小櫻はあれえと言つて氣絶なし倒れる、ばた〳〵にて、下手より松三郎出て來る、

これにて清玄下手屏風の所へ來る、松三郎小櫻を見て、

松三　や、こりや、小櫻が目を廻して居る。

ト抱き起す、ドロ〳〵にて清玄殘り惜しさうに後の屏風へ消える、是れにて合方替り、下手よりお

爪先きに以前の惣太新造二人出來り、

お爪 小櫻さんがどうしましたえ。
松三 目を廻して倒れて居る。
惣太 なに、妹が目を廻した。
新造 そりや大變でござんすなあ。（ト皆々側へ來て）
お爪 もしおいらん、氣をしつかりと持ちなさんせ。
松三 これ小櫻、
新造 おいらん〳〵。（トこれにて小櫻うんと心附く）
松三 氣が附いたか〳〵。
小櫻 松さんでござんすか、あゝ嬉しや〳〵。
惣太 これ妹、何で目を廻したのだ。
小櫻 清玄さんが其處いらに、居やあしないか見て下さんせ。（ト惣太四邊を見て）
惣太 誰も座敷に居やアしねえ。
お爪 清玄さんが來ましたかえ。
小櫻 今までそこに居なさんした。

お爪　今までこゝに居なさんしたとえ。
花川　それではさつき廊下で見たは、
花里　清玄さんでござんしたか。
お爪　えゝ餘計な口をおきゝでないよ。
松三　合點の行かぬ話しだが、清玄どのが爰へ來て、おぬしに何ぞ言つたのか。
小櫻　わたしを捉へて長々しく恨みを言つた其のあとで、是非自由になつてくれと、手籠めに仕ようとしなさんしたゆゑ、怖さに氣をば失ひました。
惣太　病氣で寐て居る清玄が、爰へ來よう譯がねえが、こいつあ死にでもしたか知らぬ。
松三　それでは來たのは幽靈か。（ト此の時また一ツ鉦を打つ）
花川
花里　あれ、氣味の惡い。
お爪　又枕念佛か、よい加減にすればよいに。
小櫻　もし幽靈なら、どうしませう。
お爪　決してそりやあ案じなさんな、あの長屋から來るをばさんに今朝聞いたが、煩らつて居るけれど死ぬやうなことはないとさ。

小櫻　それでは、今の清玄さんは、
お爪　まだ死なゝいから生靈だらう。
花川　生靈が出ますかね。
惣太　それ、そこへ出た。(ト障子を叩く。)
花川
花里　あれえ。(ト俯伏になる。)
松三　たゞさへ怖がる此の二人、詰らぬことを言ひなさんな。
小櫻　ほんにわたしもびつくりして、胸騷ぎがしてならぬわいな。
惣太　びつくりするには及ばねえ、死なねえといふから大丈夫だ。
お爪　それとも果敢ない身を悔み、首を縊つて死にやあしねえか。
惣太　生靈にしろ死靈にしろ、度々爰へ出られちやあ、妹は元よりお内の難儀だ。
お爪　お前これから橋場へ行つて、死んだか生きたか見て來ておくれな。
惣太　おゝ頼むなら行つてやらうが、山谷から田圃道、夜更に素手では物騷だ、何ぞ刄物はあるめえか。
お爪　内の人が死んだ時、早桶へ載せた脇差が、簞笥の底にあつたッけ。
惣太　それぢやあそれを貸してくんねえ。

お爪　わたしの部屋へ一緒においで。
小櫻　そんなら兄さん、行きなさんすか。
惣太　おぬしの迷ひの晴れるやう、實證をおれが見て來てやらう。
松三　然し夜道を橋場まで。
惣太　なに、一走りでござります。（ト流行唄の合方にて、惣太お爪新造附いてひはる、時の鐘になり、）
松三　や、今打つ鐘は淺草の、
小櫻　ありや九ツでござんすぞえ。
松三　九ツまでに是非歸ると、姉に賴んで來たからは、少しも早く歸らにやならぬ。
小櫻　そんなら是れ限りお前さんは、
松三　今宵は二階の見納めだ。
小櫻　本意ないことでござんすなあ。（ト小櫻泣く、松三郎四邊を見廻し、）
松三　これも浮世の義理なれど、
小櫻　別れともなうござんすなあ。（ト松三郎に縋り泣く、）
松三　おれも別れともないゆゑ、せめて今宵は居たけれど、

小櫻　お歸りなさらにやなりませぬか。

松三　親の命にや、（ト縋るを振切る、これを道具替りの知らせ、）替へられぬ。

ト小櫻ハアと泣く、松三郎顏を背ける、此の見得引の拍子木、鐵杵の音、火の用心の聲にて道具廻る。

（元の清玄庵室の場）＝本舞臺元の庵室の道具、二枚屏風を枕元へ立て、清玄蒲團の上に搔卷を掛け寐て居る。中程より床の三重、風の音にて道具留る。

上るり〽小夜更けて田の面に鳴きし蛙さへ、いねてか聲もあれ果てし草の庵に清玄が、物におそはれ唸り聲、

ト淨瑠璃の切れ、清玄魘されし思入にて凄き聲を出す。この時下手より以前の嘉三七油注を提げて出來り、

嘉三　油をついで上げるのをさつぱりと忘れてしまつた。や、こりや清玄さまが魘されるか、どれ〳〵起して上げませう。（ト誂への合方にて內へはひる、清玄又うなされる、嘉三七びつくりして飛退き、）魘されるといふものは、何だか氣味の惡いものだ。（ト側へ寄る。清玄凄き聲をするにぞつとして、）怖い夢でも見てござるか、一方ならぬ魘されやう。（ト嘉三七こは〴〵ながら側へ寄る、此の時うなされながら清玄長く手を出す、嘉三七驚いて下へ飛下り、）おゝ手を出されたので、びつくりした。（ト竹椽を

叩きながら、）若し、清玄さま〳〵、目をお覺しなされませ。

〽物の音にて目は覺せど、迷ひは未だ晴れやらず、

ト清玄起上り、小櫻を捉へし心にて、

清玄　是非とも思ひを、晴らさにや置かぬ。（ト物凄くいふ、嘉三七びつくりして、）

嘉三　えゝ氣味の惡いこと言はつしやるが、何の夢を見さつしツたのだ。

〽いふ聲耳に通じてや、我に返りて清玄が、四邊見廻し吐息を吐き、

ト是れにて清玄正氣になりし思入にて、

清玄　おゝ、お前の聲で目が覺めたが、わしはどうかしましたかな。

嘉三　聞いてもぞつとするやうな、物凄い魘され聲、どんな夢を見さしツたのだ。

清玄　別に夢も見ませぬが、次第に重る病の疲れで、切ない聲でもしましたか。

嘉三　大方お前が惚れてござる、小櫻さんの所へでも行つた夢でも見さしツたか。

清玄　え、そんならわしが小櫻の所へ是れまで通うたを、こなた知つてござるのか。

嘉三　お絹どのが入間屋へ毎日お針に行きますゆゑ、誰も彼も知つて居ります。

清玄　それは面目ないことぢやが、知つてとあれば是非がない、實は出家にあるまじき、不圖した心の

迷ひから、小櫻ゆゑに此のやうな、果敢ない姿になりました。

嘉三　その小櫻といふ女郎は、この間までわしが忰を、年季奉公に遣つて置いた吉田屋の息子殿と、深い中ぢやといふことぢや、さういふ間夫があるからは、思ひ切つておしまひなされ、まだお年も若いから、是れからお心改めて御辛抱をなされますれば、又元々へ立返り、立派なお身になられます。川柳點にある通り、振られて歸る果報者、（ト以前の傘を取つて、）女郎に可愛がられゝばこれ此の傘を見るやうに其の身の破れとなりまして、彈きの金に差詰れば口をすぼめて八方借り遂には懇意も小骨の如く段々はなれて其の末が、瘡毒を背負つて骨搦み、今の内に思ひ切り知識になつて天が下に、お名をお上げなされませ。（ト傘を遣ひよろしくあつて、）いや、飛んだ茶番をいたしました。

清玄　爰へ來てもまだ僅か、お馴染とても薄いのに、御親切な其の御異見、忝うござりまする。

嘉三　油がないからつぎに來て、大きに油を賣りました。（ト行燈の油をつぎ、）若し清玄さま、もう何も御用はござりませぬかな。

清玄　用はないがいつぞやから、聞かうと思うて忘れましたが、お前の息子の殺されたは、小梅の土手でござりまふか。

嘉三　はい、枕橋から半町ほど先きの所でござりました。

清玄　その夜檀家の歸りがけ、通りかゝつて思はずも、其の場の樣子を、わしも見ました。

嘉三　それでは若しや、殺した者を。

清玄　さあ殺した者は、（ト思入あつて、）通りすがりに姿を見たが、夜目ゆゑ慥と覺えませぬ。

嘉三　殺したものが知れたらば、敵を取らねば置きませぬ。

清玄　こなたが敵を取らずとも、天の網は脫れねば、召捕られるでござらうわいの。

嘉三　それを待つて居りまする。

清玄　左樣なれば嘉三七どの。

嘉三　明日お目に掛りませう。

〽すべる小道に太郎どんの、犬に油を舐めさせじと、下駄踏み留めて歸り行く、

ト嘉三七油差を持ち門へ出で、辷らうとして踏みしめ、よろしく下手へはひる。

〽跡を淸玄見送りて、

淸玄　あの夜丁稚を殺したは、正しくそれと知つては居れど、俗人ならぬ出家の身、訴人をなすも本意ならねば口まで出たを言はずに居たが、朝夕厚い世話になる恩返しに知らせようか、いや今宵に

限つたことでもない、惡には延べろといふからは、明日のことに仕ようかい。（ト風の音になり、）病のせるか夜風が寒い、圍爐裏の柴なとくべようか。

〽圍爐裏へくべし麁朶よりも、胸の火燃ゆる淸玄が、煙に咽せる門口へ、忍び寄つたる牛島惣太、簀戸よりのぞく人影に、

ト此の内淸玄火鉢へ麁朶を入れ吹き附ける、これにて煙立ち咽る、よき程に花道より、以前の惣太一本ざし尻端折りにて出來り、花道にて思入あつて　舞臺へ來り、門口より覗く、淸玄これを見て、

そこにござるは、嘉三七どのか。

惣太　いや、そんな者ぢやァねえ。

淸玄　や、さういふ聲は聞いたやうな。

惣太　おゝ知つてる筈だ、牛島惣太だ。（ト竹簀戸から顔を出す。）

淸玄　何でこなたが、夜に入つて、

惣太　用があるから出掛けて來たのだ。

〽門の戸足で押明けて、ずつといりて緣端へ、片足上げて腰掛ければ、

ト惣太足で簀戸を明け、ずつと内へはひり、竹緣へ腰を掛ける、淸玄思入あつて、

清玄　して愚僧に、用があるとは、
惣太　用といふのは外でもねえ、おれが妹の小櫻を、思ひ切つて貰ひてえのだ。
清玄　そりや何ゆゑに、
惣太　世に生靈といふものが、あるとは話しに聞いて居たが、現在見たのは今夜が始めて、さつきこなたが小櫻の部屋へ顯はれ妹に、厭でも自由になつてくれろと、しみしつこく口說いたさうだ。
清玄　えゝ、

ト惣太が詞に淸玄が、さては焦れし我が一念、顯はれしかと打驚き、淸玄よろしく思入あつて、

惣太　それではわしが小櫻の、部屋へ行つたと言はるゝか。
及ばぬことをくよくよと、思ふこなたの生靈が顯はれたので小櫻が、狹い心に目を廻し、既に彼の世へ行く所だつた。
清玄　寐ても覺めても小櫻に逢ひ度く思ふ一念が、假に姿を顯して焦るゝ恨みを言つたとか、それで少しは心が晴れた。
惣太　お前は心が晴れたらうが、毎晩部屋へ生靈が出られて恨を言はれては、惡事千里でその事が世間

の噂になる時は、馴染の客も落ちてしまひ、終には妹が身の詰り、またそればかりか入間屋の見世の衰微になることだ、幾らお前が焦れたとて、二枚目なれどお職にも勝つた器量の小櫻が、乞食坊主同樣な寐臭え裝の清玄と、枕を並べて寐られるものか、所詮無駄なことだから生靈などの出ねえやうに、迷ひの念をすつぱりと、思ひ切つてしまひなせえ。

清玄　いゝや思ひ切ることならぬ、亡き父母の爲め出家となり、十二の年より學問なし、八宗九宗の修行を積みし、その功顯はれゆく〳〵は後住になるべき身の上も、心柄とはいひながら錦の袈裟に引替へて破れ法衣に古布子、かゝる姿になつたのも皆誰ゆゑぞ小櫻ゆゑ、一夜たりとも我が思ひ、晴らさぬ內は思ひ切らぬ、いつかな思ひ切らざるぞ。

惣太　それぢやあどうでも思ひ切らぬか。

清玄　假令死んでも思ひ切らぬ、戀しと思ふ小櫻に、附纏ふからさう思へ。

惣太　いけ强情な坊主だな。

〽有合ふ傘をおつ取つて、傍若無人に打ちかゝれば、（ト惣太あり合ふ傘を取り清玄を打つ。）

清玄　こりやおれを何とするのぢや。

惣太　痛え目させて妹を、さつぱり思ひ切らせるのだ。

清玄　いかほどそなたに打たるゝとも、小櫻ばかりは思ひ切られぬ。
惣太　執念深くさうぬかせば、打つて／＼ぶちすゑて、是非とも思ひ切らさにや置かねえ、さあ思ひ切れ思ひ切れ。（ト清玄を打ち、）これでも思ひ切らねえか。

〽續け打ちに打ちすゑる傘に取附き清玄が、苦しき息をつきあへず、

ト惣太續け打ちに打つゝ、清玄傘に縋り苦しき思入にて、

清玄　やあおのれが命を助けて置くに、うち打擲なすとは恩知らずめが。
惣太　なに、このおれを恩知らずとは、
清玄　小梅堤で吉田屋の、梅松といふ丁稚を殺し、金を取つたであらうがな。
惣太　むゝ。（トぎつくり思入、）
清玄　通りかゝつて其の場の様子、小蔭で見たれど出家の身、罪に落すも殺生と今日まで人に言はざりしは、我が戀ひ慕ふ小櫻の兄ゆゑ見脱し置いたるが、人我に辛ければ我又人に辛しの譬、現在おのれに殺された丁稚の親が隣家に居れば、是れを知らせて敵を討たせ、惡の報いを見せてやるぞ。
惣太　それをおのれは言ふ心か。
清玄　恩を知らざる人畜の、命を取つて腹を癒るのだ。

へ病に足もひよろ／＼としどろもどろに駈出すを、襟上とつて引倒し、足下に掛けて踏躙り、

ト清玄ひよろ／＼と立上り、

惣太　何だといふとおれが惡事を、ぬかすと言ふから有樣は、今夜手前を殺しに來たのだ。（トきつと思入、一ツ鉦誂への合方になり、）及ばぬ妹に戀焦れ、破戒墮落の身となつてぶら／＼病で瘦せ衰へ、死に掛つて居る病人を殺すはあんまり無慈悲な話し、殊にやあおれも四年越し旅を駿河の府中から明日は名古屋京大阪、經巡り歩いて歸り早々憎まれ役は仕たくねえが、小梅堤で素丁稚を殺したことを言はれりやあ、三途河原の柳島應擧が名代の閻魔より、この世の地獄へ行かにやあならねえ、下手な亡者を見るやうに轉す賽の六道に、まご／＼しちやあ居られねえ、手前を死出の魁に殺して邪魔を拂ふのだ、どうで破戒の罪があれば阿鼻叫喚は淨玻璃の、鏡に掛けて見たやうだ、逆緣ながら牛頭馬頭の牛島惣太が引導を渡してやるから往生しろ。

ト清玄を蹴返す、清玄起上りきつとなつて、

清玄　むゝ、生き甲斐のない體ゆゑ、命はさら／＼惜しまぬから、非道の刄におれを殺せ、假令この場で死ぬるとも、おのれが惡事を言はずにおかうか。

惣太　さう根性が据つたら、少しも早く殺してやらう。

清玄　おゝ、殺されるなら殺して見よ。
惣太　どれ、一思ひにばらしてやらうか。
〽かねて用意の一腰を拔手も見せず切りかゝれば、病みほうけても武士の果て、傘にて受ける早速の手練、
ト惣太一腰を拔き切つてかゝる、清玄身を躱して以前の傘で受留める、是より紙礁の入りし誂への鳴物にて、傘を遣ひ兩人立廻りよろしく、此の內下手よりお爪裾を端折り、頰冠りにて出來り、門口より家を見てびつくりして窺ひ居る、此の內清玄一刀切られ糊紅になり、どうとなる、
〽始終を窺ふ遣手のお爪、門の戶明けて走り入り、（トお爪思入あつて內へはひり）
お爪　惣太さん、
惣太　おゝ、お爪か、
お爪　こりや淸玄を殺すのか。
惣太　おれが大事を喋べるから、生して置かれずばらすのだ。
お爪　手に餘るなら手傳はうか。
惣太　武家上りで手が利くから、手前も側から助けてくれ。

お爪　合點だ。

清玄　何でおのれ等に殺されようぞ。

惣太　えゝ、やかましい。

〽又切込むを身を躱し、其の手に縋る横合から、お爪がさそくに打つ眉間、どうどなりたる清玄が、流るゝ血汐を振拂ひ、

ト惣太又切つてかゝる、清玄身を躱し刀を持つ手に縋りきつとなる、此の時お爪麁朶の太きを取つて清玄の眉間を打つ、清玄アッと俯伏になり、顔を上げると仕掛にて、天窓より糊紅顔へ流れる、清玄きつとなりて、

清玄　病みほうけたる其の上に、深手を負ひし上からは、所詮存命叶はぬ清玄、一思ひに殺してしまへ、憎しと思ふ一念の、魂魄この土に止まつて小櫻はじめ惣太お爪、生き代り死に代り、恨みを晴さで置くべきぞ。（トきつといふ、お爪せゝら笑ひ、）

お爪　おゝ恨みがあるなら幽靈に、なつて毎晩出掛けなせえ、さつき生靈が出たといふも、小櫻さんの心の迷ひ、そんなものが出るものかね、そりやあ林屋正藏が怪談話しの道具に遣ふ目吉が細工の幽靈を、怖がる時分の人なら知らず、これまで意氣地のねえ女郎を、責殺したこともあるが、終

に一度恨みなどを受けたことのないお爪、こんなことにびく〳〵して遣手の役が勤まるものかね。

ト清玄の顔を薪で突く。

清玄　この清玄を此のやうな酷い目に合はすのは、我を嫌ふ小櫻が大方頼んだことであらう、返す〴〵も憎い奴等、今に思ひ知らしてやるぞ。（ト立ちかゝらうとするを。）

惣太　ぐづ〳〵せずと、くたばつてしまへ。

ト力任せに切下ぐれば朱に染みたる清玄が、虚空を摑んで四苦八苦、最期の程ぞ哀れなる。

ト惣太切下げる、清玄よろしく苦しむ思入あつて、ばつたり倒れる。

お爪　到頭非業な最期をした。

惣太　これで跡腹が痛めなくていゝ。

ト時の鐘合方になり、惣太糊紅を拭ひ鞘へ納める、此の以前下手へ嘉三七出で、太え奴だといふ思入。

お爪　生きて居てさへ生靈が、二階へ出たといふからは、死んだら必ず出るだらう。

惣太　面は菊五郎に似て居るが、幽靈に出る智慧はねえ。（ト此の時風の音雨車になる、又ばら〳〵と降つて來た。今の間に眞闇に、空は黑を流したやうだ。

お爪　どうか大降りになりさうだね。

惣太　降らねえ内に出掛けよう。

お爪　幸ひ爰に傘があつた。（ト以前の傘を取上げる、）

惣太　そりやあ破れて、させやあしねえ。

お爪　これでもさゝねえには増しだらう。（トお爪傘をさし雨車台方にて門口へ出る、これにて嘉三七藪の蔭へ入る、お爪傘の柄の血を見て、）おや、柄漏りがするかと思つたら、傘の柄が血だらけだ。

ト糊紅の附きし手を見せる。

惣太　溝ッ川で洗ふがいゝ。

〽折柄吹き来る小夜風に、心引かるゝ後髪、行かんとすれど歩み得ず、

ト両人花道へ行きかゝる、風の音烈しくなり、両人行きかねる思入あつて、

何だか跡へ引かれるやうだ。

お爪　これが後髪といふのだらうか。

ト風の音、傘吹きまくらるゝ思入にて、傘杯になりたち／＼と両人舞臺へ歸る、下手より嘉三七出て窺ふ、ドロ／＼になり火鉢の麁朶ぼうと青き火をたてゝ燃上る、是れと一時に清玄ひよろ／＼と立上る、両人これを見てどうと下に居る、これを木の頭。

〽あやしおそろし、
ト清玄立身にて凄く見込む、兩人顔へ居る、門口の嘉三七半纏をすつぼり冠る。此の模様凄き合方ドロドロにて、

ひやうし幕

大詰

向島長命寺前の場
寺島新田別荘の場
總泉寺石地藏の場
東橋西廣小路の場
同東川岸邸前の場

返し

（浮瑠璃）淵瀬と變る身の末に水色凄き角田川　夢見草朧八重咲（清元連中）

〔役名　藏前の若隠居蘇夕實は清玄の亡靈、鳶の者水車の淀五郎、牛島惣太、吉田屋松三郎、寺男六兵衛、廻り髪結鳥羽七、古骨買ひ嘉三七、質屋の番頭利兵衞、小道具屋與市、遣手お爪、松井屋の娘お花、同下女お民、入間屋の小櫻、別荘の下女お賤等。〕

（長命寺前の場）――本舞臺一面の平舞臺上の方葭簀で圍ひし片附けし出茶屋、下の方土手普請竹矢來の書割の張物、正面低き土手の張物、向う今戸川岸を見たる灯入り夜の遠見、此の前に櫻の立木、日覆より櫻の釣枝と月を下し、總て向島長命寺前土手の體　爰に入間屋の若い者三人○△□尻端折り草履にて、入間屋と記せし弓張提灯を持ち立ちかゝり居る、流行唄波の音にて幕明く、

○今日暮合のどさくさ紛れに、小櫻さんが家を脫け、何處へ行つたか行方知れず、仲の町の茶屋を始め、藝者の家まで尋ねたが、何處でも知らぬといふばかり、

△その內山谷の地廻りが玉姬稻荷の曲り角で、女郞姿を見掛けたといふのを當てに橋場へ來て今渡し場で聞いたらば、向う越しをしたといふから、向島に違ひない。

□松三郞さんと一緖なら意氣に淸元の淨瑠璃で心中にでも出たかと思ふが、たゞ一人ゆゑさうでもあるまい、聞けば橋場に淸玄さんが、煩つて居るといふことだが、是れを尋ねる氣遣ひなし、

○向うへ越したといふけれど、向島から來るものは、今夜來て居た兄貴ばかり、外に馴染の客はないが、何處を目當に向うへ越したか、

△爰等近所を門並に聞いて步いたことなれば、行方の知れぬこともあるまい。

□おゝ何か爰に落ちてゐる。（ト舞臺にある手紙を拾つて出す。）

○是れを讀んで淨瑠璃觸れも、あんまり古い趣向だが、讀まずにも置かれまい。
△先づ此の中での手書だから、
□お前が先きへ讀んでくんねえ。
○それぢやあおれが開封しようか。
△□「東西々々。」（ト是にて○手紙を開き、）
○「淨瑠璃名題――、」（ト淨瑠璃名題を讀み、△へ廻す、）
△「淨瑠璃太夫――、」（ト太夫連名を讀み、□へ廻す、）
□「相勤めます役人――。」（ト讀みしまふ。）
○そりやこそ極りの淨瑠璃觸れだ。
△これを讀むのが役だから、
□古めかしくも仕方がない。
○觸れを讀んだら小櫻さんを、もう一遍搜して見よう。
△其の前方に紋切形の、
□引ッ込みを附けてくんなせえ。

○　おゝそれを言ふのが肝腎だ、いよ〳〵此の所淨瑠璃始まり、其の爲め口上左樣。（ト辭儀をなし）

△□　さあ行きませう。

ト波の音にて三人上手へ入る、波の音打ち上げ、知らせに附き下手の張物を打ち返す、爰に淸元連中居並び直に淨瑠璃になる。

〽月影も花の木の間に隅田川、水に影浮く夜櫻を船の内より三圍の、川岸を上りてそこはかと物いふ花の優姿、

ト合方になり、花道よりお花序幕の娘、餘所行きのこしらへにて出來る、跡よりお民の下女餘所行きのこしらへにて出來り、花道へ留る。

〽年も二八に昨日まで蕾といひし生娘も、今日は定まる夫ありて雛かしき一對のよき女夫ぢやとなぶられて、赤らむ顏の櫻色過せし酒を醒さんと、船をば出でゝ舵を取る下女を力に步み來て、（ト兩人花道にて振あつて舞臺へ來り、合方になり）

お民　もしお孃さま、晝と違つて夜櫻は靜かでよいぢやござりませぬか。

お花　ほんに生醉が通らなくて、ゆつくり櫻が見られるわいの。

お民　若旦那さまも御一緒に、おいでなされはようござりますに。

お花　わたしと一緒に歩くのを厭がつておいでなさるゆゑ、それでおいでなさらぬのぢやわいな。
お民　まだお若いから恥かしいと思召してゞござりませうが。御夫婦になる上からは手を引いて歩いたとて誰に遠慮もござりませぬ。
お花　いえ〳〵ないことは無いわいの、松三郎さんは今以て吉原の小櫻さんに思ひが殘つてゐるわいな。
お民　そりやお廻り氣でござります、此の間も私へあなたが、お利口で何事にもよくお心が屆きますのを、大層お褒めなされましたから、それでは廓の小櫻さんへお心は殘りませぬかと申しましたら若旦那が、何で心が殘らうぞ女房は眞の生娘に限ると、にこ〳〵お嬉しさうにおのろけなされましたわいな。
お花　そりやあほんまのことであるかいの。
お民　ほんか嘘かは私より、毎晩一ツにおよりますあなたが御存じでござりませう。
お花　そんなことを知るものかいの。
お民　何知らぬことがござりませう。
〽しかも一昨日お相手のお茶に浮されうか〳〵と、寐られぬ耳にさゝめ言、あじな心になる鐘の九ツ階子を踏み外し、粂の仙人ならねどもどつさり落ちて大笑ひ、

ト お民をかしみの振りあつて、

とんだお邪魔をいたしました。

お花 あれまあ、そんな嘘ばかり。

〽あの夜は雨もしつぽりと、しめやかゆゑに寐もやらで、田舍源氏を讀みはじめ、ほんに畫組も吉原の小櫻さんが此の本の阿古木のやうであるならばと、ぢつと身の毛も立廻す屏風に防ぐ夜の風、（ト お花よろしく振あつて、）

お民 えゝ、何とでもおつしやりませ。

〽戲れ遊ぶこなたより、花見歸りの生醉が、

ト 合方にて上手より鳥羽七羽織を疊みて肩へ掛け、二升樽を提げ生醉の思入にて出來り、

〽醉うた醉たく／＼十分に酒の廻りの髪結が、未下りの早仕舞ひ、一人花見に呑過ぎて足もひよろ／＼ぶら／＼と、樽をかたげてちよろ／＼目、

ト 鳥羽七樽を提げ、生醉の振りあつて兩人を見て、

鳥羽 イヨウ是れは松井屋のお孃さま、いや、今は吉田屋の御新造さま。

お花 おゝ、お前は廻りの髪結さん、

お民　鳥羽七さんもお花見かえ。
鳥羽　花は附けたり呑みたいので、今日早仕舞ひに帳場をしまひ、風流めかして夜櫻へ暮合から出掛けましたが、お孃さまも夜櫻を御見物でござりますか。
お花　今宵は月がよいゆゑに、夜櫻を見に参りました。
鳥羽　見れば外にお連もなく、たゞお二人でござりますか。
お民　いえ〳〵お連れは當時の旦那さま、松三郎さまでござります。
鳥羽　して若旦那は、何處においでなされまする。
お民　お船においでなされまする。
鳥羽　扨はお船でお睦じくお二人連で夜櫻とは、おうら山吹でござります。
お花　二人で歩くと人が笑ふと、何處へもお連れなされませぬが、お父さまが見て來いと、お勸めゆゑにわたしをば、お連れなされましたわいな。
鳥羽　いやお目は見えぬが大旦那は、お若い時に道樂をなされましたお方ゆゑ、家の内では御窮屈ゆゑ此の夜櫻にかこつけて、お船で二人をお出しなさるは、流石は所が藏前だけ、野暮にいへば通り者、お察し心がござります。

お花　いえ〳〵そんな譯ではない、船の內でも松三郞さんは、お話しさへもなされませぬ。

鳥羽　たゞしん〳〵、いゝ、ねことは氣の惡い、

〽まだ春風の夜は寒く、行火へ掛けし船宿の蒲團に野邊の萠葱縞、出す早蕨の手がさはり蘆は角組む川岸に、鬢のほつれも青柳の、いとし可愛も口の內、物も得言はで揚り場の、雁木へ船が着いて候。

ト鳥羽七厭がるお花を引出し振りあつて、お民代つて振りよろしく、是れより鳥羽七一人になり早きのりにて、

〽ひつたりひた〳〵筑摩のお祭り、お前三枚わたしは五枚しやも屋の鍋ではなッけんけれども、薺の薫りと浮名が高くて、七枚冠つた性惡後家御が、腰をふな〳〵搖りかけ歩みも、向うが見えねば、ばつたり轉んで、鍋は毀れる鼻血は流れる、毀れた缺片をば集めて見たらば、三千三百三十三缺け、これがまことの男の數とは、さりとは〳〵ヨホ〳〵ヨホ〳〵さんな又あろかいな。〽きやッ〳〵と騷ぐ洒の癖。

ト鳥羽七早き振りあつて、トゞ猿のこなしにて兩人を追廻し、よろしく納まる。

お民　さつきから餘程の間、髮結さんの振事で大きに遲くなりました。

お花　嘸松三郎さんがお船の內で、お待ちなされてゞあらうわいな。
鳥羽　お船へお出でなされますなら、私がお送り申しませう。（ト立ちかゝるを留めて、）
お民　それはお前でもござんせぬ、折角今日はお二人で、お船でおいでなされたに、御一緒とは氣がきかないね。
鳥羽　なに、中へお邪魔に入りやあしねえ、お前と艫で一杯呑む氣だ。
お民　わたしはお酒が嫌ひだから、お前と一緒は厭でござんす。
鳥羽　そんな野暮を言はねえで、（ト側へ寄るを、）
お民　えゝ、知らぬわいな。（ト鳥羽七を突倒す。）
お花　此の間に早う、
お民　お船へお出でなされませ。
〽下女が手をとつかはと、揚り場さして急ぎ行く。
ト波の音にてお民お花の手を取り、下手へ急ぎはひる、鳥羽七起上り、
鳥羽　船へ行つてあの下女を、こぢ附けふうと思ひの外、突倒されて呑んだ酒が、天窓へのぼつて醉が出た、爰は芝原で綺麗だから、風に吹かれて醒して行かう。

ト鳥羽七下に居て、樽にもたれ居る、時の鐘になり、

〽上手歸りの屋根船の途切れて岸へ打寄する川波高く吹きおろす、筑波北風に掛茶屋の葭簀をあほる小陰より、始終を聞きし小櫻が、

ト時の鐘、波の音、上手出茶屋の葭簀の蔭より、小櫻部屋着の裝、上草履にて出來り、下手を見て、ト跡を見送り居る、鳥羽七これを見て側へ寄り、顏をすかし見て、

小櫻　そんなら今のが藏前の、松井屋の娘御で、松三郎さんの女房になつた、お花さんでござんしたか。

鳥羽　や、さういふお前は入間屋の、小櫻さんではござりませぬか。

小櫻　え、思ひ掛けないどうしてわたしを、

鳥羽　知つて居るのは松さんの、お供でいつか參りました、鳥羽七といふ廻りの髪結さ。

小櫻　さう言はれて思ひ出したが、鳥羽七さんでござんしたか。

鳥羽　酒が好きゆゑ呑み過ぎて、次の間へ寐てしまひ、大御厄介になりました、さうしておいらん、お前さんも夜櫻でござりますか。

小櫻　いゝえわたしは、馴染のお客がこつちにあつて、今日は遊びに參りました。

鳥羽　それはお樂しみでござりますな。

小櫻 今後で聞いて居れば、松三郎さんと娘御と、仲の好いといふことだが、まことのことでござんすかえ。

鳥羽 お前の前では言ひにくいが、あんまり仲が好過ぎます、醉うて言ふのぢやなけれども、〽片時側を離れねば、世間の人が鴛鴦といふのも無理か中の間で、旦那の髭を剃りかゝれば側でお孃が痴話るので、數ヶ所の疵でやう〳〵に、

仲びた鼻毛を剃りじまへば、〽わたしが剃つて上げようと、ぴらりしやらりと櫛取れば、さあ〳〵梳いてと寄掛る背中を膝でとんと突き、はたで見る目も腹が立ち、なぐり散らして橫ッちよに、髷をば結つて叱られた。

ト此の內鳥羽七振りあつて、

小櫻 すりや其のやうに娘御と、仲がようござんすか。

鳥羽 これを知らずにおいらんが、居るのは實にお氣の毒。(ト鳥羽七義太夫にて、)〽嘸や悔しうござんせう、お前の胸を察しると、わしや悲しうてなりませぬ。(ト鳥羽七泣落しよろしくあつて、)したがおいらん仕方がない、もう再び松さんは立歸つては來ないから、思ひ切つてしまひなせえ、それ

といふのも器量はよし、まだ手入らずの生娘ゆゑ、ほんのことだがわたしでも、どつちを取ると言はれゝば、ハヽヽヽ、跡はよろしく御推もじ、ハヽヽヽ。

トこれを聞き小櫻悔しき思入にて、

小櫻　それでは彼の世の約束を、したのも水となつたかいなあ。

鳥羽　おゝ、水とも〳〵。

〽今日は上手へ夜櫻といふのをだしに障子船、立切る中は水入らず、跡は言はずとハヽヽ考へだてをする時は、ハヽヽ、堪つたものでは、ウム、ハヽヽヽないわいな、ハヽヽわけ生醉は樽を提げ、笑ひ興じて歸り行く、

ト鳥羽七よろしく笑ひながら花道へはひる。跡替つた合方になり、小櫻悔しき思入にて、

小櫻　彼の世をかけて起請まで、取交した中なれど、あの娘御に見替へられ、思ふ男に捨てられたれば最早死ぬより外はない、斯ういふ心と知らざれば一目逢ひ度く廓を脫け、向島の知邊に隱れて、明日は竊に迎ひを上げ、逢はうと思うた甲斐もなく、斯ういふことになつたのは、死ぬる時節が來たことか、跡から追手の掛らぬうち、少しも早くおゝさうぢや。

〽小石を拾ひ袂へ入れ、月も傾く西の方、手を合して伏し拜み、

ト小櫻石を拾ひ、裏向になり、
南無西方阿彌陀如來、罪障深き身の上ゆゑ、後世の苦患を救はせたまへ、南無阿彌陀佛〳〵。
へ既に斯うよと見えたる所へ、始終を窺ふ男が立ち出で、
ト小櫻後の川へ飛込まうとする、此の以前上手へ藏前の若隱居露夕羽織着流し好みのこしらへ、駒下駄にて此の樣子を窺ひ居て、此の時つか〳〵と出て小櫻を留め、
露夕 あゝこれ待つた、まあ待ちねえ。
小櫻 死なねばならぬ身の上ゆゑ、どうぞ見脫して下さりませ。
露夕 いや、知らぬことなら仕方がないが、通りかゝつてわたしの目にかゝつたからは見脫されぬ。
ト小櫻を引戻して留める、
小櫻 それではあなたは私を、見脫しては下さりませぬか。
露夕 お前を見脫す位なら、何で斯うして留めるものか、惡いことは言はねえから、まあ氣を靜めて待ちなせえ。
小櫻 御親切にお留め下され、有難うござりますが、是れには深い譯あつて、
露夕 大事な命を捨てるには深い譯があらうから、仔細をとつくり話しなせえ、及ばずながらわたしの

力で片の附くことならば、どうなりとして上げようから、早まつたことをしなさんな。

小櫻　はい、有難うござります。

露夕　見ず知らずの者ゆゑに、不審に思ひなさるだらうが、わたしは藏前の札差で露夕といふものだが、病身ゆゑ隱居して、つい此の先きの寺島に、氣樂に浮世を送るものだが、お前が今夜死なうといふ深い樣子を聞きたいが、何をいふにも爰は往來、先づ兎も角もわたしと一緒に家へ來て話しなせえ。

小櫻　お慈悲深く左程までおつしやつて下さいますゆゑ、お家へ上つて身の上を、お話し申しませうわいな。

露夕　委しい話しを聞いた上、どうか片附けて上げよう。

小櫻　有難うござりまする。

露夕　それぢやあわたしと一緒に來なせえ。

小櫻　お供いたしませうわいな。

〽堤を下りて畦道をたどる田の面に鳴く蛙、雨を知らすかばら〳〵と、朧の空に花散りて雪かと思ふ肌寒さ、風に追はれて一村を、越えて風雅な侘住居、枝折の許に佇みて、

ト此の内水の音蛙の聲をあしらひ、露夕、小櫻東の假花道より花道へ廻る、此の内舞臺の道具廻る。

（向島別莊の場）――本舞臺三間の間中足の二重、本庇本緣附、向う上手一間床の間、茶掛の軸籠花活時の花を活け、續いて三尺の瓦燈口、下手一間地袋戸棚、この脇腰張の茶壁、上の方一間後へ下げて低き腰障子、例の所枝折戸の庭口、下の方後へ下げて建仁寺垣、石燈籠、樹木のあしらひ、總て向島別莊の體。よき所に遠州行燈を置き、よろしく道具留る、と兩人枝折戸へ來て、

露夕　お賤や〳〵。（ト奥よりお賤前垂下女のこしらへにて出來り、）

お賤　はい〳〵、お早うお歸りなされましたな。（ト出迎ふ。これにて内へはひり、）

露夕　三圍の宗匠へ行くつもりで出掛けたが、差掛けた用が出來て、途中から歸つて來た。さあ遠慮はないから入りなさい。

小櫻　はい、御免なされて下さいまし。（ト小櫻會釋して内へはひる、）

お賤　お連れさまでござりますか。

露夕　今土手で逢つた女中だ、權助は内に居るか。

お賤　旦那さまのおつしやり附けを、忘れたとか申しまして、今し方藏前の松屋へお菓子を取りに參り

ました。

露夕　それでは内には此ればかり、外に憚る者はない、爰へ上んなせえ。

〽主人の詞に小櫻が、會釋こぼして座に附けば、

ト二重上手の小櫻、お賤下手に住ひ、合方になり、

小櫻　御親切におつしやつて下さいますから何もかも、包まずお話し申しますが、私は江戸町の入間屋の遊女にて、小櫻と申しますもの。

露夕　してどういふ譯で身を投げて、死なうと覺悟しなさつたか、譯を話して聞かしなせえ。

お賤　さう言ひなされば何時だつたか、仲の町の清水屋で、お前を見掛けたことがあつた。

露夕　私もさつきから、小櫻さんだと思ひました。

お賤　よく手前知つて居るな。

露夕　こちらへ上る其の前に、善孝さんの所に居りましたから、それで存じて居ります。

お賤　しておいらんはどういふ譯で、今夜死なうとしなすつたのだ。

小櫻　お話し申せば入譯は長いことでござりますが、あなたと同じ藏前の吉田屋の松三郎さんと、深い仲でござりましたが、其處の地主の娘御を嫁に貰はにやならぬ義理で、おとつさんとお姉えさん

が事を分けてのお頼みによんどころなく別れましたが、此の世は是非もないけれど、彼の世へ行つたことならば女夫になつて下さんせと、申しましたら其の折に、起請をこの儘持つて居るのが心變らぬ證據ぢやと、好い加減なこと言はしやんして、それぎり便りもしなさんせず、貰うた地主の娘御と鴛鴦とまで名の附く程睦まじいと聞きまして、悔しくてなりませぬから、此の世で見聞きをするよりも、死んだ方が遙かに増しと、思ひあきらめ身を投げて、死ぬる覺悟をいたしました。

露夕　そりや見替へられたと思ふから、女の身では悔しくも又口惜しくもあらうから、尤ものやうに聞えるが、死なうといふは惡い了簡、一方ならず起請まで取交した中なれば、其の松三郎といふ人も浮世の義理で別れる時は、定めて切なく別れたらうが、去るものは日々に疎しの譬、貰つた地主の其の娘と仲のいゝのも夫婦合、どうも仕方のないことだ、近附きではないけれど、わたしも同じ藏前ゆゑ人の噂に聞いて居る、お前に氣をば持たすやうだが男の心が替つたら、思ひ切つてしまひなせえ。決して死なうなどゝいふ無分別を出しなさんな、廓内でも評判の人に勝れた器量ゆゑ、立派な所へ片附いて、先きを見返してやんなせえ、それが死ぬより上分別だ、それに附けてもまだ主人へ、定めて年季があるだらうね。

小櫻　はい、まだ二年ほどありまする。

露夕　まだ二年ある年季をば、其の儘にして死ぬ時は、主人に損を掛けねばならぬ。たゞ損ばかりかこんなことが、内にあると不吉になつて、必ず後の障りになれば、これまで長年世話になつた、恩を仇で返すも同然、爰の道理を思つたら、迂濶に命は捨てられまい。

小櫻　成程あなたのおつしやる通り、一途に迫つてこの年月、お世話になつた主人方へ、難儀を掛けては濟みませぬ。

露夕　そこへ心が附いたらば、死ぬのは思ひ切りなさい、お前も生きる心なら、及ばずながら力にならう、袖振り合ふも他生の緣、測らず爰で身の上を聞いた上はこつちも話さう、わたしは家督をする身だが風雅を好んで女房も持たず、家は弟を準養子に家名を讓つて家督をさせ、此の寺島に若隱居、菊阿彌といふ阿彌號を附けて居るだけ善根好きて、物の命を取るのが嫌ひ、助けることなら何程でも金を出して助ける心、さつき測らず目にかゝり、死ぬるお前を助けたは、是れも宿世の緣であらう、力になつて上げようから、氣を落さずに安心しなせえ。

小櫻　お慈悲深い旦那樣に、お目にかゝつて助かつたは、神や佛のお引合せ、えゝ有難うござります。

トよろしく思入。

露夕　斯うしてわたしが留めたからは、何處が何處まで引受けて、再び廓へ歸るのが厭なら直に身請けをして、親があるなら親元へ引渡して上げようし、情人があるなら其の方へ、送らせて上げようから、異見に附いて死ぬことは、ふツつり思ひ留んなせえ。

〽流石十八大通の、餘風殘りし藏前の生れに野暮な事言はで、粋な異見に小櫻は嬉し涙に暮れながら、（トよろしく思入あつていふ、小櫻嬉し涙に泣きながら、）

小櫻　見ず知らずの私へ、御親切な其の御異見、何と申してよからうやら、お禮の申しやうがございませぬ。

お賤　女子の狹い了簡では、死なうとお思ひなされたも御尤もでございますが、今旦那さまの御異見をお聞き申せばそれも又、御尤もでございまする、何にいたせおいらんのお仕合せでございました。

小櫻　もう一足お出でが遲いと、隅田川へ身を投げて死ぬ所でございました。

お賤　危いことでございましたなあ。

露夕　それではいよ〳〵死ぬことは、思ひ止つてくんなさるか。

小櫻　はい、御異見に附きまして、死ぬのは思ひ止ります。

露夕　それでわたしも安心した。（ト時の鐘鳴る。）お賤、あれは何時だ。

お賤　もう九ツでござります。
露夕　まだ暮れてから間がないと、思つて居たがもう九ツか。
お賤　夜は大層詰りました。
露夕　廓へ行つて掛合ふにも、これから行けば大引前、向う越しをするまでも、土手の内が淋しいな。
お賤　昨夜も追剝ぎが出ましたと、申すことでござりますから、明日の朝になさりませ。
露夕　さう聞いては不氣味だから、明日早く行くとせう。
お賤　それがよろしうござりまする。
露夕　時にお前も夜更だから、今夜は爰へ泊んなせえ。
小櫻　どうぞお泊めなされて下さりませ。
露夕　外に遠慮の者はないから、必ず心を置きなさんな。
小櫻　有難うござりまする。
お賤　おいらんがお泊りなさるなら、奥へお床をのべませうか。
露夕　おゝ、客夜具を出して取つてくれ。
お賤　畏まりました。

〽氣轉利かして奥の間へ心殘して入りにける。（ト お賤奥へはひる。）

〽跡には二人差向ひ、つきほなけれど人なれし小櫻は側へ寄り、

ト露夕此の内煙草を呑む、小櫻恥かしき思入にて側へ寄り、媚きし合方になり、

小櫻　ほんにまあ世の中に、あなたのやうなお優しいお方は二人とござりますまい。

露夕　なに、ないことがあるものか、お前の惚れた松さんなども、男にしては優しい人だ。

小櫻　いえ優しい人ではござりませぬ、義理をかこつけ別れてしまひ、地主の娘と睦まじうわたしのことを思はぬは、情ない人でござります。

露夕　わたしなどは一人身ゆゑ、其の味を知らないが、夫婦間の仲ばかりは、他人の知らぬ別なものだと、親達などが話しにしたが、その松さんも鴛鴦と世間の人に言はれる程では、夫婦間が格別よく、それで便りをせぬのであらう。然し一旦二世掛けて、約束をした上からは、ちつとそれは不人情だ、わたしなどは氣が弱く、そんな邪險なことは出來ない。

小櫻　實に悔しうござりますから、死なうと思ひ詰めました。

露夕　女にそんな思ひをさすとは、色男は罪なものだ、むき生眞面目な代りには、善根こそすれ其のやうな、わたしは罪は作らない。（ト小櫻思入あつて、）

小櫻　今承はればお一人だと、おつしやいましたが本當に、あなたはお一人でございますか。
露夕　何で噓を言ふものだ。
小櫻　どうも噓らしうござりまする。
露夕　實は一人で不自由ゆゑ、どんな者でも女房に、貰ひたく思つて居れど、こんな偏屈者だから、誰も女房になりてがない。
小櫻　なに、ないことがござりませう、どんな者でもあなたなら。（ト媚いたこなし、）
露夕　え、それではあんまり世辭過ぎよう。
小櫻　いえ〳〵、世辭ぢやござりませぬ。
露夕　世辭でないと言ひなさるが、第一さういふお前などが、人先き厭だと言ふだらうに。
小櫻　何で厭と申しませう。
露夕　それではわたしが、欲しいといへば、
小櫻　飛立つ程でござりまする。
露夕　これはうつかりしては居られぬ、眉毛へ唾を附けねばならぬ。（ト態と眉毛へ唾を附ける）
小櫻　あれまあ憎らしい。（ト打たうとしてにつこり笑つて、恥かしき思入、是れより口說になり）

〽今更いふも恥かしい、今宵死なうとせし時に抱き留められ思はずも、ふつとお顔を御社の火影に迷ふ胸焦し、牛の御前のうき事も今は忘れて白髭の堤の花の水へ散る、浮いた心ぢやないわいな、（ト小櫻露夕を捉へ、口説の振あつて、）

露夕　實はわたしも留めた時、

〽心は同じ八重咲の、花の色香に亂れそめ、胸の綾瀬に氣も關屋、何と庵崎鐘が淵、深き思ひを水神の推量してと言ひければ、（トよろしくあつて、）

小櫻　そんならあなたも、私をば、

露夕　初手から思ひ初めたのだ。

小櫻　それはまことゝ思はれませぬ、大方嘘でござんせう。

露夕　こつちはまことで言ふけれど、嘘が渡世の勤めの身。

小櫻　勤めは昨日の昔にて、

露夕　今日からおれの妻となり、

小櫻　まことを盡す誓ひには、

露夕　放れぬ中の待乳山、

小櫻　隅田川原の淵は瀨と、

露夕　よしや流れは變るとも。

小櫻　變らぬ二世の、

露夕　女夫中、

小櫻　え丶嬉しうござんす。

〽戀には馴れし遊び女が、いつしか解けし袱紗帶、（ト小櫻嬉しき思入、奥よりお賤出來り、）

お賤　旦那さま、奥へお床を延べました。

露夕　床が取れたといふからは、爰は端近奥へ行つて、

小櫻　果敢ないわたしが身の上を、

露夕　寐ながらゆつくり聞きませう。

〽結ぶ緣も深綠、水色凄き川の瀨に、後の浮名ぞ、

ト先きに小櫻奥へ入る、知せに附き建仁寺垣の張物にて淸元連中を消し、跡合方にてお賤奥を見送り、

お賤　旦那さまとおいらんが、四邊も遠き奥の間へおよるといふは猫に鰹節、こんな物騷なことはない、お丶物騷といへば此の頃は、よく泥坊がはひるといふから、役に立たねど男一人、權助どんはど

うしたか、早く歸つて來ればよいに。
ト合方にてお賤奥へはいる、時の鐘誂への合方、蛙の聲にて花道より前幕の惣太尻端折り、草履にて小田原提灯を提げ出來る、跡より前幕のお爪片褄を端折り出來り、花道にて、

お爪　これ惣太さん、内ぢやあ側の人目があるので、おち／＼お前と寐られないから、金にはなるが遣手を止め、早く世帶を持ちたいね。

惣太　そりやあお前が言はねえでも、おれも世帶を持ちてえが、五兩や十兩金があつても、見る間に取られてしまふのが、よく言ふ惡錢身に附かず、金がなければ世帶も持てねえ。

お爪　たんとの金はないけれど、三四十は持つて居るよ。

惣太　そればかりの端た金ぢやあちよつと小綺麗な格子戸造りの、家を持つのはむづかしい、妹を何處へか仕替させ算段しようと思ふうち、彼女に今夜逃げられたので、大きにこつちはぐれはまだ。

お爪　遠ッ走りをしたかは知らぬが、橋場の渡しを越したといふから、先づ向島に違ひない。

惣太　見附け出したら此女を枷に、直ぐに何處へか賣込んで、その上金で世帶を持たう。

お爪　それは何より嬉しいが、お前と年が違ふから、わたしを見捨てゝおくれでないよ。

惣太　年は幾つ違はうとも、お前の肚胸に惚れたから、何でおれが見捨てるものだ。（ト惣太行きかけ躓い

て提灯を消す。）えゝ忌ましい、提灯を消した。

お爪　燈火がなくては眞ツ闇で、一足も歩かれない。

惣太　向うへ行つて燈火を借りよう。（ト右の鳴物にて本舞臺へ來る。）もし、往來の者でござりますが、燈火を貸して下さりませ、誰も内に居ねえのか。

お爪　もつと大きな聲をおしな。

惣太　もし、提灯を消して困りますから、燈火を貸して下さいまし。

ト是れにて奥よりお賤手燭を持ち出來り、

お賤　それは嘸お困りでござりませう。さあ附けておいでなされませ。

惣太　これはお休みなすつた所を有難うござります。（ト提灯の燈火を附け、思はず小櫻の上草履を見て、）や、此の上草履は、（トお爪これを見て、）

お爪　おゝ、こりや小櫻さんの上草履だ。

惣太　それぢやあ妹は、爰に居るか。

お賤　小櫻さんなら今しがた、爰へおいでなさいました。

惣太　いゝ所で燈火を借りて、思ひがけなく居所が知れた。

お爪　もし、小櫻さんを、ちよつと爰へお呼びなすつて下さいまし。
お賤　はい〳〵畏まりました。（卜奥にて、）
小櫻　今そこへ參りますよ。（卜合方きつぱりとなり、奥より小櫻出來り、）おゝ、こりや兄さんにお爪どん。爰に居るのがどうして知れたえ。
惣太　今提灯の燈火を消し、爰の家でお借り申し、思はず見附けた上草履から、
お爪　尋ね歩いたおいらんの、草履で足が附いたのさ。
惣太　よくおれに苦勞をさせたが、爰の家は馴染のお客か。
小櫻　いえ〳〵さうではござんせぬ。
お爪　さうでなくつて何でまた、爰のお家に居なすつたのだ。
惣太　譯をおれに聞かしてくれろ。
小櫻　實はさつき身を投げて、死なうとした時爰の家の、旦那樣に助けられ、酸いも甘いも御存じにて、事を分けたる御異見に、わたしも惡いことをしたと、死ぬのを思ひ止つたれど、夜更ゆゑに歸られねば泊めてお貰ひ申しましたわいな。
惣太　留められたからいゝけれど、是れから外へ仕替させ金にしようと思ふ矢先き、手前に死なれてな

るものか、夜更だらうが何だらうが、おれが爰へ來るからは、直ぐに廓へ連れて行くから、さあ支度をして早く歸れ。

小櫻　いえ／＼、わたしや歸らぬわいな。

惣太　なに、歸らねえとは何のことだ、まだ二年から年のあるのに、おれに難儀を掛ける氣か。

お爪　たゞこの儘に歸らぬとは、あんまりそれは我が儘過ぎるよ。

惣太　さあ、きり／＼と早く歸れ。

小櫻　いえ／＼わたしや歸らずとも、お前に難儀は掛けませぬ。

惣太　えゝ口功者なことをいふな、年季のある身で歸らなくつていゝとは、そりやあ何のことだ。

小櫻　さあ歸らずともよいといふのは、爰のお家の旦那樣が、わたしの身請けをしてやると、さつきおつしやいましたゆゑ。

惣太　そりやあ手前、ほんのことか。

お賤　それはお側で私も承はつて居りましたが、まことのことでござります。

小櫻　再び廓へ歸るのが、厭なら身請けしてやらうと、結構過ぎたお詞に、今宵は泊めてお貰ひ申し、明日は人を上げようと思ふ所へお出でのは、よい都合でござんすわいな。

惣太　むゝ、命を助けて下さつた其の上、手前の身請けまでして下さるとは仕合せだが、

お爪　然しあんまり旨すぎるが、さうして爰の旦那といふのは、

小櫻　お藏前の札差で、伊勢屋宗兵衛さまといふ、立派なお家の旦那でござんす。

お賤　旦那さまは風雅がお好きで、此の寺島へ先達て、若隱居をなさいました、何御不自由のないお身の上、（トこれを聞き、惣太お爪顏見合せいゝ鳥がかゝつたといふ思入あつて、）

惣太　そりやあ何にしろいゝ旦那に、助けられて仕合せだ、親なき後は兄は親、おれも是れから御厄介、おつかあお前も悅びねえ。今に世帶が持たれるぜ。

お爪　ほんにおいらんは、いゝお方に助けてお貰ひなすつたね。

惣太　何にしろ兄のこと、妹を助けて下すつた旦那に逢つてお禮が言ひたい。

お爪　わたしも身請けをなさるとあれば、御相談がしたいものだ。

小櫻　お賤どん、旦那さまへさう申して下さんせ。

お賤　はい、畏まりましたわいな。

ト合方にてお賤奥へはひる、此の時風の音になり、下手屋體の後へ、誂への人魂を引いて取る、お爪見てびつくりなし、

お爪　もし惣太さん、今青く光つたのは、人魂ぢやァあるまいか。
小櫻　あれ、氣味の惡い。
惣太　あれは人魂ぢやあねえ、金魂た。（ト奧にて）
露夕　なに、小櫻の兄が來たと、そこへ行つて逢ひませう。
惣太　今のはどうか、
お爪　聞いた聲だが。（ト兩人思入。）
小櫻　あのお聲は、旦那でござんす。
　　ト誂への端唄の合方になり、奧より以前の露夕出來り、
露夕　今お贓から樣子は聞いたが、兄御が尋ねてござつたさうだな。
小櫻　はい、わたしの實の兄さんと、入間屋の遣手衆が、わたしを尋ねて參りました。
露夕　それはいゝ人が尋ねて來た。（ト宗兵衞眞中へ住ひ、小櫻惣太に向ひ、）
小櫻　もし兄さん、よくお禮を申して下さんせ。
惣太　手前を助けて下さつた命の親の旦那さま、お禮をいはねえでどうするものだ。（ト是れにて小櫻の後を通り上手へ住ふ。惣太天窓を下げ、）これは始めましてお目にかゝりますが、私は小櫻が兄の惣太と

申しますものでござりまする、是れなる妹が身を投げて、死にます所をお助け下され、其の上ならず御親切に、身請けまでして下さりますとは、お禮の申しやうもござりませぬ、まことに有難うござりまする。

ト辭儀をなして顔を上げる、自然に凄き合方になり、瓦斯の光りで露夕の體右の方だけ青く見える仕掛け、惣太露夕の顔を見てびつくりなし、

や、これは。

ト清玄に見えたる心にてぎよつとする、

露夕　それではお前が小櫻の、實の兄の惣太どのか。（ト幽靈の思入にて言ふ）

惣太　はい、左樣にござりまする。（ト合方元の端唄へ戻り、小櫻へ向ひ）

露夕　親なき後は兄は親、今宵ござつたこそ幸ひ、そなたの身分を兄御から貰ふことに仕ようわいの。

ト優しく言ふ、お爪これに心附かず前へ出て、

お爪　これは／＼旦那樣には、お初にお目にかゝりますが、私は江戸町の入間屋の、二階を預る遣手の爪でござります。（ト合方凄くなり）

露夕　そなたが遣手のお爪どのか。（ト振返りて見る、お爪露夕の顔を見て）

お爪　えゝ、（トびつくりして、）はい、左様でござりまする。（トお爪惣太の袖を引き、幽霊だといふ思入。）
露夕　不思議な縁で小櫻を、わしが身請け仕度うござるが、請出す高は何程なるぞ。
　　ト凄く言ふ、お爪顫へながら、
お爪　如何程でもようござります。（ト合方元へ戻り、小櫻に向ひ。）
露夕　今お爪どのに聞いたれば、身請けの高は如何程でもよいとは、遊里に珍らしい慾氣のない話しゆゑ、先づ安心して居たがよい。
小櫻　有難うござりまする。（ト此の内惣太爰には居られぬといふ思入にて、立たうとして立てぬこなし。）
露夕　これ、惣太どの。
惣太　へゝえ。（ト合方凄くなり、）
露夕　わしも丁度獨身ゆゑ、身請けをなして女房に仕度いが、實の兄の惣太どの、こなたを親とせねばならぬが、不承知ではござらぬか。
惣太　結構過ぎた妹の出世、何の不承知でござりませう。
露夕　あとで兎やかう言はれまいな。（ト凄くいふ。）
惣太　決して何にも申しませぬ。（ト又合方元へ戻つて、小櫻へ向ひ。）

露夕　そなたを女房に貰ふのを、親代りの兄御も承知で、何にも言はぬといはるゝぞ。
小櫻　それは嬉しうござります。（ト合方凄くなり、）
露夕　主人に聞かねば分るまいが、凡そ身請けはいくら位だ。
お爪　おつしやる通り身請けの高は、主人に聞かねば分りませぬが、先づ三百兩なら出來ませう。
露夕　三百兩でよいといふのか。（ト凄く言ふ、お爪顫へながら、）
お爪　はい、宜しうござりまする。（ト合方替つて小櫻に向ひ、）
露夕　五百兩ともいふかと思へば、三百兩とは安いこと、これで身請けの相談もあら方出來たといふものぢや。
小櫻　この儘身請けになりまして、あなたと女夫になられますとは、冥加に餘る身の仕合せ、えゝ有難うござりまする。（ト此の内惣太お爪逃げようといふ思入あつて立上る、露夕振返り、）
露夕　遣手どの、待たつしやれ。
お爪　はゝい。（ト顫へながらべつたり下に居る、合方凄くなり、）
露夕　こなたが爰へ來たこそ幸ひ、今金を渡してやらう。
惣太　そんなら金を、

露夕　今渡すから待つて居や。

お爪　はゝい。（ト べつたり下に居て、顫へながら言ふ。）

露夕　何を其の樣に怖がるのだ。

お爪　えゝ。

露夕　わしや笑うて居るわいの、はゝゝゝ。

ト不氣味に笑ひ、幽靈の合方にて露夕奥へはひる。合方元の端唄の合方に戻り、

小櫻　兄さんもお爪どんも、お情深い旦那さまを、何で恐れなさんすごいな。

ト兩人顏を上げ、あたりを見て、

惣太　旦那は何處へ。

兩人　行かしつた。

小櫻　お金を取りに今奥へおいでなさんしたわいな。

兩人　やれ〳〵嬉しや〳〵。（ト兩人胸を撫下す、小櫻心得ぬ思入にて、）

小櫻　何がそんなに怖うござんす。

惣太　是れが怖くなくてどうするものだ、今夜手前が死ぬ所を助けたといふあの旦那は、しかも昨夜お

れが橋場で、いやさ、橋場で非業に死んだと、、、

お爪　おいらんお前が厭がつた、誓水寺の清玄さまだ。

小櫻　何をお前方は言ひなさんす、今の旦那は藏前の、若隱居でござんすわいな。

惣太　そりやお手前の目が眩んで、若隱居に見えるのだ、毬栗天窓で色蒼ざめ、體は痩せて骨ばかり、

お爪　わたしが打つた眉間の血が、顏へ流れて物凄く。

惣太　二目と怖くて、

兩人　見られやしねえ。

小櫻　それは合點の行かぬことだが、今の旦那がお前方には、清玄さまに見えたとかえ。

惣太　この二人に恨みのある、

お爪　橋場で死んだ清玄だ。

小櫻　えゝ、（ト氣味の惡き思入。此の時奥より以前のお賤袱紗包みを持ち出て來る。）

お賤　旦那さまが此の包みを、お上げ申せとおつしやいました。（ト包みを出す。）

小櫻　そんならこれを、旦那さまが。

お賤　中を御覽なされませ。（ト合方にてお賤奥へはひる。）

惣太　何が中に入つて居るか、

お爪　早く明けて御覽なさい。

ト是れにて小櫻袱紗をあける。中に前幕の血のつきし片袖ある、小櫻見て、

小櫻　あれえ。(トびつくりする、)

惣太　や、此の包みの中にあつたは。

お爪　こりやおいらんが切られた片袖。

小櫻　この片袖があるからは、それでは今の旦那といふは。

トドロ／＼になり、上手の障子の紙を引き拔き、此の内へ清玄前幕のこしらへにて現はれ、寐鳥になり、

清玄　牛島惣太が手にかゝり、非業に死したる清玄なるぞ。

小櫻　えゝゝゝゝ、(トびつくりなし、俯伏になる。)

清玄　憎しと思ふ小櫻はじめ、恨み重なるおのれら二人、生き代り死に代り取り殺さいで置くべきぞ。

ト大ドロ／＼になり、清玄引寄せる思入にて上手へ消える、三人は引寄せらるゝこなしにて上手へはひる、これにて知らせに附き道具居所替りになる。

（石地藏前の場）――本舞臺前の屋體を疊んで二間の辻堂に替り、左右數疊み後黒幕、上の方石地藏、下の方柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て橋場總泉寺原中の體、やはりドロ／＼にて道具納る。トドロ／＼にて、指金の蝶あちこちを舞ひ辻堂の内へはひる、これにてドロ／＼打ち上げ、辻堂の内より小櫻部屋着の儘にて出で、夢を見たる思入。

小櫻　そんなら今のは夢であつたか、（ト本釣鐘、合方になり、）一旦義理で別れたれど質入なせし香合を揩拵られてお屋敷へ、五十日の日延をなし所々を尋ね捜せども、今に行方が知れぬとか、昨夜忍んでお出での時心のせるか影が薄く、案じられてならぬゆゑ、一目逢ひ度く廓を脱け、夜道に道を取違へ、橋場の方へ來る折柄、ばら／＼降りにこの堂へ入つて雨を凌ぐうち、寐るともなしに寐たと見え、松三郎さんがお花さんにわたしを見替へはせまいかと心に思ふその事を、爰でありあり夢に見し死なうとせしを止められ、助けられたる其の人に、夢とはいへど身を任せ、跡にて聞けば清玄さま、あゝ思ひ出しても身の毛が立つ。（トぞつとして四邊を見、以前の片袖あるを見て、）え又もや爰に此の片袖、恨みに思ふ清玄さまが、此の身に附添ひ居ることか、ても怖しいことぢやなあ。（ト氣味の惡き思入、ばた／＼と跫音する、）や、爰へ誰やら來る樣子、見附けられては身の大事。

ト時の鐘凄き合方にて堂の後へ隱れる、上手より惣太（幕口の打扮にて出來り、

惣太　小梅の土手で吉田屋の丁稚をおれが殺したが、彼の淸玄が知つて居て訴人をすると吐すゆゑ、據なく殺したが、坊主は執念深いものだと人の話しに聞いて居たが、成程執念深いと見え、あれからこつちへ淸玄が、晝夜おれの目先きに見え、流石の惣太もこれにやあ弱つた。殊には昨夜殺したは上でも考へが附いた樣子、路用の金をこしらへて、奧州筋へ行かにやあならねえ。

ト此の時下手より以前の小櫻出で、

小櫻　そこへ來なさんしたは、兄さんか。

惣太　や、さういふ聲は。

小櫻　わたしでござんす。（トドロ〳〵のやうな風の音、惣太小櫻が淸玄に見える思入にて）

惣太　しみしつこい淸玄め、まだおれに附纏ふか。（トきつと思入）

小櫻　お前は何を言ひなさんす、わたしや妹でござんすぞえ。

惣太　え丶、執念深い奴だなあ。（ト拔打ちに小櫻を一刀切る、小櫻アツと言つて糊紅になり）

小櫻　こりやわたしを、何でお前は。

惣太　附纏ふから切り拂ふのだ。

小櫻　お前は氣でも違つたかいな。

ト縋るを切つてかゝる、小櫻紙を打附け逃げようとするを追廻す。上手よりお爪二幕目のこしらへにて出來り、

お爪　惣太さんは何處へ行つたか。（ト此の中へ入り、小櫻を見てびつくりなし、）や、こりや小櫻さんを切つたのか。（トドロ〳〵のやうな風の音、合方にて惣太お爪が清玄に見える思入にて、）

惣太　又清玄め、うしやあがつたか。（トお爪を一刀切る、お爪糊紅になり、）

お爪　これ、わたしやあ情人のお爪だよ。

惣太　えゝ、やかましい。

ト惣太物狂ほしくお爪を切る、お爪むしやぶり附き兩人體を捨し立廻りよろしくあつて、トゞお爪を酷く切倒し止めを刺す、時の鐘風の音、日覆より灯入りの月をおろし、惣太ぞつとなし心附きし思入あつて、兩人を見てびつくりなし、

やゝ、こりや清玄と見えたゆゑ切つた二人は小櫻お爪、こりやあとんだ事をしたが、今更悔んでも返らねえ、これも死靈の祟りなるか。

ト糊紅を拭ひ鞘に納め花道へ行き掛ける、此の時上手の藪を分け松三郎着流し尻端折りにて窺ひ居て

つか〳〵と惣太の腰を提へて引戻す、振拂つてちよつと立廻り、入替つて惣太は上手、松三郎は下手にてきつと見得、これと一緒に花道より鳶の者水車の淀五郎、紺の腹掛股引尻端折り草履にてつかつかと出で花道にて一時に見得、双盤入りの鳴物になり、淀五郎舞臺へ來り、三人世話ダンマリの立廻りよろしくあつて、トヾ惣太花道へ行く、

淀五　うぬ、待ちやあがれ。

惣太　えい。

ト石を打附ける、兩人身を躱す、石は石地藏へ當り石火立つ、松三郎行かうとするを淀五郎留めるを木の頭、惣太は逸散に花道へ入る、兩人跡を見送り、合方双盤にてよろしく、

ひやうし　幕

ト幕引附けると、鳴物替つて尻明きに直ぐ引返す。

（吾妻橋西詰の場）――本舞臺一面の平舞臺、上の方町木戸同じく扉にて見切り、此の後長屋の下見、木戸の前に六地藏の石燈籠を立て、下の方同じく町木戸扉にて見切る、此の後長屋の下見、向う軒提灯を附けし廣小路を見たる夜の遠見、總て吾妻橋西詰より廣小路を見たる夜の體。爰に紺の腹掛股引入間屋の紺の半纏を着たる出入の者○△□の三人、入間屋といふ弓張提灯を持ち立掛り居る、木魚講の掛念佛、木魚の音にて幕明く、

○ もう今夜も四ッ前だが、十七日の御縁日で、東橋亭もまだはねず、いつもより賑かだ。

△ これから追々夏季になると、九ッまでは宵のやうだ、それはさうと小櫻さんは何處へ逃げて行つたらう。

□ 以前は馴染の情人だといふ吉田屋の松三郎さんは、地主の娘を女房に貰ひ縁が切れたといふことだ。

△ それゆゑ無駄と知りながら、尋ねて行つたが案の定、吉田屋では知らぬ樣子。

○ 何處か外に逃げて行く客色でもあるか知らぬが、そんな噂は聞かなんだ。

□ いや、おいらの思ふは不斷から、氣の狹いおいらんだから、若しや身でも投げやあしまひか。

△ 如何さま、そんなことかも知れねえ。

ト此の時上手より、前幕の若い者一、二、三の三人弓張提灯を持ち出來り、

若一 おゝ、そこに居るは、出入りの衆か。

△ これはお見世の喜助さん、よい所で逢ひました。

○ 駈落をした小櫻さんは、

□ 何處か行方が知れましたか。

若一　知れは知れたが玉なしだ、橋場の方へ行つたといふさつき話しを聞いたから、
若二　三人連れで總泉寺の、原へ行つたら地藏の前に、
若三　小櫻さんとお爪どんが、酷く切られて死んで居た。
△　そりやとんだことだつたが、誰が仕業か知れませぬか。
若一　これといふ證據がなければ、誰が仕業か知れないが、
若二　こんな非業な目に逢ふのも、昨夜切られて死んだといふ、
若三　清玄さんの思ひだらう。
△　生きて居てさへ生靈が、二階へ出たといふ噂、
○　それが死んだら一念で、取殺したに違ひない。
□　第一番に殺されさうな、惣太が無事で居るのが不思議だ。
若一　凡夫盛んに神祟りなしと、強い者勝ちの世の中だ。
△　何にしろ小櫻さんの、行方が知れた上からは、
○　これから皆さんと一緒に歸り、
□　諸方へ知らせに出るとせう。

ト右の鳴物にて六人上手へはひる、と時の鐘跳への端唄になり、上の方より前幕の松三郎思案の思入にて出來り、

松三　心柄とはいひながら、知識といはれし清僧も、小櫻ゆゑに墮落なし、見る影もない清玄どの、昨夜非業の最期をせしと、橋場から來る八百屋の話し、我も恨みを受けた身に心ならねば樣子を聞かうと、いつも見世へ流しに來る義太夫語りの家を尋ね、委しく昨夜の樣子を聞き、山谷へ拔ける田圃道石地藏の其の前に、思ひがけない小櫻と、お爪が切られて非業な最期、殺した者は知れざれど二人が死んだは清玄どのゝ、正しく死靈の祟りならん、是れに附けても我が尋ぬる千葉のお家の香合も、最早日延の日限りも僅か、それまで知れねば我も亦喉でも突いて死なねばならぬ。斯く成行くも清玄どのゝ、恨みが此の身にかゝるのか、これといふのも其の元は皆小櫻に馴染しゆゑ、戀は諸道の妨げぢやなあ。

ト又端唄になり、ちつと思入、此の時ばた〳〵になり、松三郎石地藏の蔭へ隱れる、寄席の鳴物になり、下手より序條の質屋の番頭利兵衞、道具屋與市連れ立ち出來り、

與市　伊勢屋の番頭利兵衞さん、いゝ所でお前に逢つた。
利兵　何ぞわたしに用があつてか。

與市　いつぞやお前に頼まれて、僞物を拵へ吉田屋を一杯喰した千葉家の香合、其のほとぼりの冷るうち何處へも話しをしなかつたが、此の節抹茶が流行するので、上方から來る道具屋へ賣込む積りにしましたから、あの香合を渡して下さい。

利兵　それは丁度幸ひだ、今戸にござるさる隱居が、見たいといふから香合を、今夜持つて行くところだ。

與市　それでは其處にありますか。

利兵　爰におれが持つてゐるのも、是れが賣れる瑞相だ、さうして幾らに賣込んだな。

與市　百兩ならば買はうといふから、見せた上にて氣に入つたら、十か二十しぼる積りさ。

利兵　それは何より忝ない、三ツ割一分こなたに遣るから、賣れるやうに何分頼むよ。

與市　わたしも是れが賣れなければ、旨い酒が呑まれませぬ。

ト番頭懐から小さな風呂敷に包みし香合の箱を出して、

利兵　先づ兎も角も、それでは是れを。

與市　しつかりと預りました。（ト道具屋箱を受取り懐へ入れる。此の内松三郎後へ出て思入あつて、）

松三　さてこそこつちの推量通り、おのれら二人が企みであつたか。（ト兩人びつくりして、）

利兵　やあ、さういふこなたには、

兩人　松三郎か。

松三　掠め取つたる千葉家の重寶、その香合をこつちへ渡せ。

利兵　さう知られた上からは最早包み隱しはせぬ、如何にも僞物を拵へて、此の本物を高く賣り、藝者狂ひをする積り、

與市　其の荷擔人の此の與市も、三分一の割前を貰ふ積りでかゝつた仕事、百兩出すなら渡して遣らう。

松三　僞物を拵へ銜つた香合、いはゞ二人は盜人同然、何で金を出すものだ。

利兵　金を出さねば渡さぬ香合、

與市　たつてと言やあ打ち毀さうか。

松三　さあ、それは、

利兵　金を出すか。

與市　打ち毀さうか、

松三　餘りといへばえて勝手、もう此の上は。（ト香合を取りにかゝるを振拂ひ）

利兵　滅多に渡して、

兩人　なるものか。

ト賑やかな寄席の鳴物にて、三人香合の箱を枷に立廻り、よき程に木魚講の念佛になり、上手より大勢萬字に綱手の揃衣、先達大きな木魚を首へかけ、皆々念佛を唱へ出來り、此の中へはひる、利兵衞與市逃げようとするを、松三郎捉へる立廻り。

先達　木魚講の邪魔をする奴、

皆々　叩きしめろ〳〵。

トこれより皆々ごつちやの立廻り、兩人は講中の者に打たれ、トヾ摺拔けて下手へ逃げてはひる、松三郎追つ掛けようとするを講中支へる立廻りあつて、ばた〳〵になり上手より前幕の淀五郎出來り、

淀五　や、若旦那か。

松三　おゝ、淀五郎頭か。

淀五　爰はわつちが呑込んだ、早くお出でなさいまし。

松三　忝けない。（トばた〳〵にて松三郎下手へ走りはひる。）

皆々　彼奴をやつては、

淀五　どういふ譯か知らねえが、わつちが詫を仕ようから了簡してくんなせえ。

○ 何の遺恨もねえけれど、木魚講の邪魔をされ、
△ 此の儘默つて引込んぢやあ、
□ 諸講中へみつともねえ。
◎ 遣る所まで遣ッ附けろ。
淀五 さういふことなら横合から、喧嘩を買つたおれが相手だ、見掛はけちな小野郎だが、生れ附いたお喋べりに水車の淀五郎と渾名を取つた鳶の者、お得意多いこの土地で大きな聲を仕度くもねえが、默つて居られぬ癇癪持ち、首に掛けた木魚より大きなことを吐かしやあがるが、見りやあ一人も知らねえ顔、六千日やお十夜に踊に出掛ける婆アさんの大方孫か悴だらう、叩きなれた馬鹿囃子の太鼓と違つて江戸ッ子は、うぬ等の腕ぢやあ叩けねえ、いはゞ十把一からげの小松菜賣のせなお達、相手にするも大人げねえが、喧嘩はおれが言ひ直で買ふから、さあしめられるならしめて見ろ。
○ おゝ、しめなくつて、
皆々 どうするものだ。

ト双盤入りの派手な鳴物になり、皆々かゝるを淀五郎相手に立廻りよろしく、よき見得にて此の道具

廻る。

（吾妻橋向川岸の場）――本舞臺一面の平舞臺、上の方屋根附の屋敷、下手一面日窓の屋敷長屋、上下黑塀見越しの松、日覆より同じく松の釣枝、總て吾妻橋向川岸の體、爰に前幕の惣太一本ざし尻端折りにて立身、下手に中幕の六兵衞、一本ざし尻端折りにて詰寄り居る、此の見得波の音、佃にて道具留る。

惣太　こりやあおれを何とするのだ。

六兵　おのれが命を取らねばならぬ。

惣太　そりや何ゆゑに。

六兵　よくも橋場でおれが御主人、清玄さまを殺したな。

惣太　何でおれが殺すものか、そんな覺えはありやあしねえ。

六兵　いや覺えないとは言はさない、長屋の者が見て居つたぞ。

惣太　そりや何者が。（ト此の時下手より、嘉三七棒を持ち出來り、）

嘉三　おのれが酷くも清玄さまを、殺すを怖々垣根越しに、此の嘉三七が見て居たぞ。

六兵　斯ういふ慥な證人あつては、覺えないとは言はれまい。(ト惣太是れ迄だといふ思入あつて、)

惣太　む丶、か丶る證據人があるからは大方上へも訴へたらう、所詮繩目の脫れぬ體、番屋へ引かれる置土產に、手前達に言つて聞かせる、如何にも妹の邪魔になる、清玄坊主はおれが殺した。

六兵　何科もない御主人を、殺すといふは極重惡人、

惣太　殺すは先頃小梅の土手で蹴倒す機みに息を止め、思はず殺した丁稚の梅松、その折そこへ通り掛り清玄坊主が知つて居て、訴人をすると吐かすゆゑ、おれが命に拘はるから、それで是非なく殺したのだ。

嘉三　さては小梅でわしが忰を、殺して金を取つたのは、惣太おのれであつたるか。

惣太　それでは、うぬが丁稚の親か、

嘉三　おのれと白狀したからは。

六兵　主人の敵、

嘉三　我が子の仇、

六兵　最早脫れぬ、

兩人　覺悟いたせ。

惣太　毒喰は皿、返り討ちだぞ。

兩人　何を小癪な。

ト波の音佃にて惣太六兵衛抜合せ嘉三七は棒を持ち三人立廻り、よき見得にて、爰へばた〳〵にて上手より以前の利兵衛與市出來り、此の中へ入り、びつくりして取附くを惣太切附ける。

利兵　人殺しだ〳〵。

ト聲を立てるゆゑ、惣太六兵衛を切らうとして利兵衛を切倒す。爰へ嘉三七掛る、惣太嘉三七を切らうとして又與市を切倒し、立廻つて六兵衛受太刀になり、後退りに立廻りながら三人上手へはひる。ばた〳〵波の音合方にて、以前の松三郎上手より出來り、

松三　木魚講の多人數に妨げられて番頭も、又道具屋も見失つたが、橋を越える後影を認めたなれど二筋道、どつちへ逃げて行き居つたか。(ト尋ねる思入にて兩人の死骸に躓きびつくりなし、)やゝ、こりや、番頭も道具屋も二人ともに切られて居るが、今敵討があつたといへば、二人も敵の内なるか、何にもせよ懐中に、尋ぬる香合所持なし居らう。(ト兩人の懐中袂など捜し香合がなきゆゑ驚きて、)ややゝ、兩人ともに香合を所持なし居らぬは何れへか、早くも人手へ渡せしか。(ト本釣鐘を打込み松三郎途方に暮れし思入、)詮議をせうにも二人は死人、千辛萬苦も水となり、進退谷まる松三郎、

最早尋ぬる手蔓もなければ、身の言譯に命を捨て、死ぬより外に思案はない。

トちつと思入れ ばた〳〵にて上手より、以前の淀五郎走り出來り、

淀五 そこにおいでなさるのは、松三郎さまか。

松三 おゝ淀五郎頭か、これ、二人は愛で切り殺され、尋ぬる大事の香合を所持なし居らねば詮方なし、死ぬより外に思案はない。

淀五 いや決してそれには及びませぬ、其の香合は手に入りました。

松三 え、その香合が手に入つたとは。

淀五 木魚講の田舍講中を叩き散らした其の跡に、落ちてあつた風呂敷包み、若しやと思つて明けて見れば、あなたの尋ぬる正しく香合、（ト懐から香合の箱を出して渡す。）

松三 どうしてこれが其の場にあつたぞ。

淀五 察する所どさくさ紛れに、落したものと見えまする。（ト此の内箱を明けて中を改め、）

松三 紛ふ方なき千葉家の香合、

淀五 お手に入つたも天の惠み、

松三 ちえゝ、忝けない。（ト押戴く、波の音佃にて、道具廻る。）

（元の花川戸の場）＝＝本舞臺元の花川戸の道具、爰に惣太六兵衞嘉三七立廻りの見得、やはり佃にて道具留る、と立廻つて六兵衞受太刀になり、

惣太　返り討ちだぞ、覺悟しろ。
六兵　ちえゝ、口惜しい。（トばた〳〵になり、上手より淀五郎松三郎出て、）
淀五　敵を討つのは、とつさんお前か。
六兵　おゝ、お前は檀家の鳶頭。
嘉三　助太刀をして下さりませ。
淀五　合點だ。

ト六地藏の榜示杭を引拔き打つて掛り、ちよつと立廻つて惣太の刀を打落す、嘉三七是を取つて、

六兵　天命思ひ、
兩人　知つたるか。（ト惣太の脇腹へ突き込む。）
惣太　ちえゝ忌々しい。（ト立身で苦しみ、ばつたり倒れる。兩人止めを刺す。）
松三　斯く討たるゝも其の身の惡事、これに附いても不便なは。
淀五　いや、小櫻さんが橋場裏で切られて死んだも自業自得、こりやお全く天の罰。

六兵　悪人亡び、
嘉三　善人榮え。（ト爰へ木魚講大勢出て、）
皆々　さつきの返報。（ト掛るを立廻つて、）
四人　目出度い〳〵。（ト引張りの見得よろしく、頭取出て、）
頭取　先づ今日は是れぎり。

ト目出度打出し

浮世清玄（終り）

猿若座新築溫古新敷

世界は古書太平記

引書新著鎌倉史

天狗の奇怪

龍神の感應

新歌舞伎十八番

酒宴の席に高時が
太刀を振りて
田樂を舞ふ
稻村が崎に義貞が
太刀を投じて
干潟を祈る
是へ拙き作意を加へて

北條九代名家功

「北條九代名家功」は明治十七年十一月猿若座に於て書卸された、作者六十九歳の時のことである。上、中、下の三幕中、上の巻の「高時」だけが最も好評であつたし、今以て上演されるのは此の部分のみである。團十郎も高時の爲めに苦心し、又その出來榮えもよかつた。此の作はその前年の一月頃から、活歴に熱心であつた、黑川眞頼、關根只誠、松岡明壽、川邊御楯の諸氏を中心とし、團十郎の爲めに發企された、「求古會」の評議の結果、同じく會員の一人であつた默阿彌が執筆するに至つたもので、作者は求古會の期待に背くまいとして執筆したと傳へられてゐる。「高時」は新歌舞伎十八番の一である。

書卸しの役割は市川團十郎(北條高時、本間山城左衞門直家、新田小太郎義貞)、中村仲藏 秋田城之介入道延明)、市川九藏(本間和部太夫直高、篠塚伊賀守重長)、市川權十郎 大佛陸奧守貞直)中村福助(高時妾衣笠)、岩井紫若(直家の妻さゞなみ)、市川八百藏(本間臣得行彌四郎、畑六郎左衞門時能)、中村勘五郎(長崎次郎高貞)、中村鶴藏(大館次郎守武)、中村鶴五郎(安達三郎泰忠)、市川新藏(田樂法師天狗、江田四郎行壽)、岩井しげ松(安達の母なぎさ)等であつた。

挿繪にしたのは九世團十郎の高時が天狗に取圍まれたる舞臺寫眞とである。

大正十四年一月

編者誌す



北條九代名家功（高時、本間山城、義貞太刀流し――三幕）

高時（中幕の上）

北條家門外の場
同奥殿田樂の場

〔役名　北條相模守入道高時、秋田城之介入道延明、大佛陸奥守貞直、浪人安達三郎泰忠、長沼次郎高貞、犬掛り赤黑兵太、田樂法師の天狗六人、近習四人、下部三人、捕手四人。高時の妾衣笠、安達の母渚、同、子泰松、侍女六人。〕

（北條家門外の場――本舞臺上の方白木の冠木門、襷の入りし扉にぐるみ金物の書割、是れより下一面に筋塀、後淺黄幕下の方に松の立木、日覆より同じく松の釣枝、總て北條家庭口門外の體、爰に誂への山駕籠やうの駕籠に錦の蒲團を敷き、是れへ錦の首玉を掛けし大犬を載せ、兵太背割羽織達附大小、筒袖達附の下部〇△□の三人立掛り居る、此の見得時の太鼓にて幕明く。

兵太　上のお噂いたしては濟まぬことではあるけれど、先達より我が君には、春日住吉兩社の祭りに技藝をいたす田樂を殊の外好ませたまひ、兩社を始め諸國より業の勝れし者を集めて、日毎夜毎の御催し。

〇　名に負ふ天下の御威勢に、祿を與へて法師等を此の鎌倉に住居をさせ、御酒宴のある度毎にその

△場の興に召したまひ、品玉又は劍の舞、一本竹の放れ業など、なか〳〵舞樂の舞などより遙に興があるゆゑに、遂には是れを學ばせられ、

□その田樂を御自身に舞ひたまふゆゑ法師等へ、その度毎に下されるかづけ物も大したことにて、なか〳〵過分の御物入り、

兵太　又々此の頃何者が、お勸め申せしことなるか、頻りに犬を愛したまひ、大小名より勝れたる犬を獻上せしゆゑに忽ち數千の數に至り、それをお庭で鬪はし咬合ふ體を御覽なされ、殊の外なる御悅び、

○その虚に乘じて我が君の御髭の塵を取る者が、蒲團を敷いて駕籠に載せ、人より重い取扱ひ、

△それゆゑ御犬の通行に、若し粗相でもある時は、直に其奴を召捕つて、重き罪科に行ふよし、

□されば諸人が御犬を恐れ、市中を往來なす時は傍らへ道を避け、御家門方も同じこと、

兵太　今日妻子を養ふも御扶持を戴くお蔭ゆゑ、何をいたすも我が君へ、御奉公ではあるけれど、斯うして犬の供をなすは、餘り出來したことではない。

○同じことならお妾の、衣笠さまのお供をなし、

△　附添ふ女中の腰附きを、見ながら行くが何より役得、

□　人と生れた身の上で、犬のお供は眞平だ。

兵太　ときに、最前より餘程の間これにて休息なしたれば、闘犬掛りの上役に見られぬ内に少しも早く

○　御庭内へ連歸り、

△　部屋へ歸りてゆつくりと、

□　盛切り酒でも呑みませう。

ト合方になり、花道より渚やつし裝ふけたる浪人者の母のこしらへにて杖を突き、やつし裝の孫泰松の手を引き出來り、花道にて、

渚　今日はそなたの誕生ゆゑ、浪人なせど身祝ひに、行末開運出世なすやう鶴ヶ岡の八幡樣へ、お願ひ申して來たわいの。

泰松　坊も立派な侍になられるやうに、八幡樣へお願ひ申しましたわいの。

渚　おゝ賢い〳〵、そなたがお願ひ申したなら、必ず御加護があらうわいの。

ト右の合方にて舞臺へ來り、子供犬を見て、

泰松　祖母さま、綺麗な犬ぢやわいの。

渚　おゝ見れば錦の蒲團を敷き、此の上もない立派なこと、憚りながらお飼主はどなたさまでござりまするゝ。

兵太　此のお犬は雲龍とて、忝なくも執權職北條家のお犬にて、その強きこと衆に勝れ何時闘犬のお催しにも、相手の犬を咬み伏せて、遂に負けたことがない。

○　世にも稀なる名犬だが、玉に疵なは氣が荒く、

△　おのが心に叶はぬ時は、忽ち怒つて咬み附くゆゑ、

□　ひよつと怒るまいものでもないから、子供は離れて居るがよい。

渚　それは怖いことでござります、必ず側へ寄るまいぞ。

泰松　あい〳〵。

ト後へ下る。此の時ばた〳〵にて上手より縫包みの犬二疋走り出て來る。これを見て雲龍飛出し咬み伏せる、四人これを制する、二疋の犬は鳴きながら逃げる勢ひに渚に突當る、渚ばつたり轉び、雲龍渚の足へ喰附く。

渚　あいたゝゝゝゝ。（ト足を押へる。此の間に二疋の犬は下手へ逃げてはひる。）

泰松　やゝ、こりや祖母さまに喰附いたか。うぬ、憎い犬め。

ト渚の杖を取つて打たうとする、四人雲龍を圍ひ、

兵太　やあ、上の御犬に手向ひなさば、子供なりとも容赦はないぞ。

○　命が惜しくば、

三人　退いて居ろ。

泰松　いえ／＼敵を取らねばおかぬ。

兵太　えゝ、こましやくれた、

三人　ことを言ふな。（ト立掛り、泰松を手荒く突き倒す。）

渚　あゝこれ、怪我させて下さりますな。

ト這寄り泰松を介抱する。ばた／＼早き合方にて、花道より安達三郎清流し大小浪人者のこしらへ、編笠を持ち走り出來り、花道にて舞臺を見込み、

三郎　老婆犬に咬まれしとは、若し母人にはあらざるか、心元なきことなるぞ。

ト言ひながら右の鳴物にて舞臺へ來る。泰松見て、

泰松　や、父さまか、祖母さまが犬に咬まれたわいの。

三郎　すりや母人が、（トつか／＼と渚の側へ寄り）して、疵所は何れなるぞ。

諸　足を咬まれて思はざる、此の身に怪我をしましたわいの。
三郎　見れば餘程の疵なるが、咬みしは是れなる犬なるか。
兵太　御身は是れなる老婆の悴か、御上の御犬に咬まれゝば如何なる疵を受けるとも、それはそちらの咬まれ損、此の方にては構はぬぞ。
○　まだ疵位はおろかなこと、
△　喰ひ殺されても手當はないから、
□　早く療治をするがよい。
三郎　すりや一命を取られても、上にてお構ひござらぬとか。
兵太　何でお構ひ、
四人　あるものか。（ト三郎思入あつて、）
三郎　此の程より民家の者が暴政なりと申すのは、かゝることをや申すらん、町人百姓共は兎もあれ、浪人なせども我は武士、たゞ此の儘に見捨て難し、諸人に害なす悪犬を打殺して害を除かん。
兵太　やあ、上の御犬を殺すなどゝは、身の程知らぬその一言、
○　それ、浪人めを喰ひ殺せ。

三人　おゝしきノ\。
ト犬なけしかける。これにて飛び掛る、三郎これを振拂つて腰に差したる鐵扇にて犬の眉間を打つ、これにて犬はくるノ\廻つてばつたり倒れる。四人びつくりして、
兵太　やあ、大切なる雲龍を殺せし上は命がないぞ。
三郎　犬に替へて人命を斷たんなどゝは何の囈言、汝とても手向ひなさば犬諸共に打殺さん。
兵太　小癪なことを、それ、者共。
三人　心得ました。
ト早舞になり、三人木の息杖にて打つて掛る、三郎鐵扇にてあしらひ立廻りあつて打ち据ゑる。四人叶はず上手へ逃げてはひる。三郎追つ掛け行かうとするを、
渚　これノ\怜悧もう好い加減にいたしやいの。
ト此の内渚は懷中より血留めを出し、これを附け、白の手拭にて結へる。
三郎　北條家の暴政を心憎く思ひしゆゑ、折がなあらば挫かんと存せし折柄母上へ、疵負はせし憎き惡犬打殺して、某が日比の鬱憤散じました。して疵所は如何でござりまする。
渚　幸ひ血留めを所持せしゆゑ、それを附けて血が留まれば、最早案じることはない。

三郎　何にいたせ大毒あれば、醫者を招きて御療治なされませ。
泰松　祖母さま、歩けますかえ。
渚　おゝ、杖に縋つて行つたならば、歩けぬこともあるまいわいの。
三郎　若し御難儀なら某が、背負うて歸宅いたしませう。
渚　いや／＼それには及ばぬわいの。
泰松　どれ、手を引いて上げませう。

ト泰松渚の手を引き立上らせる、此の時ばた／＼になり、上手より長沼次郎烏帽子素袍大小にて、以前の兵太に手綱達附の捕手六人附添ひ出來り、

次郎　我が君御秘藏の雲龍を、打殺せし浪人とは、それに居る其の方なるか。
三郎　如何にも只今手前が母へ、これなる犬が咬附きて思はぬ疵を負はせしゆゑ、この鐵扇で打ちましたが、眉間の疵に死したる樣子、
次郎　たゞ打つてさへ相當の咎めを申し附けるのに、打殺せしとあるからは、申さば汝は下手人なり、繩打つて引く、
六人　覺悟なせ。

三郎　犬を害せしお咎めにて、拙者に御詮議あるならば何方までも參るべし、此の身に繩は受けませぬ。
次郎　受けぬといつても我が君の、御愛犬を害せし上は、繩を受けるは當り前。
兵太　それをとやかう申しなば、手籠めになして召捕らうか。
次郎　憂目を見んより神妙に、
兵太　脱れぬ所と覺悟して、
捕手　さあ、きり／＼と、
六人　繩に掛れ。（ト皆々取卷く。）
三郎　今は斯くまで世に落ちて、尾羽打ちからせし浪人なれど、武士の家に生れし某、此の上もなき身の恥なる、いかで繩目に掛らうや。
次郎　やあ兎角の問答無益なり、手籠めになして搦め捕れ。
六人　心得ました。
三郎　ならば手柄に搦めて見よ。
六人　小癪なことを。
トドン／＼になり、六人十手にて打つて掛る。三郎身を躱しちよつと立廻つて、見得より誂への鳴物

になり、捕物の立廻り、此の時、次郎、兵太は渚と泰松を捉へ、刀を拔いて胸へ差附け、

次郎　さあ、手向ひなさば此の母と、忰を突で殺さうか。
三郎　さあ、それは、
次郎　尋常に繩にかゝるか。
三郎　さあ、それは、
次郎　刺し殺さうか。
三郎　さあ、
次郎　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。
次郎　觀念なして繩に掛れ。
三郎　むゝ。（トぢつと思入。）
渚　わしは明日をも知れぬ身に、さら〳〵命は惜しうないが、生先き長いこの孫を、殺すが不便でならぬわいの。
泰松　父さんの爲めならば、わしは命は惜しうない、祖母さま一緒に死にませう。

次郎　我が子は兎もあれ現在の、親を此の場で殺しても、汝は縄に掛らぬか、
三郎　さあ、
次郎　子として親を殺すのは、五常に缺けし不孝者、
兵太　思案極めて、
皆々　返答いたせ。（ト三郎ぢつと思入あつて、）
三郎　是非に及ばぬ、某に、縄掛けて下されい。
諸　すりや伜には、その身に縄を。
三郎　今は天理に缺けますれば、あなたの御身には替へられませぬ。
諸　ても情ないことぢやわいの。（ト泣く。）
兵太　覺悟いたさば、
六人　縄にかゝれ。（ト合方きつぱりとなり、三郎に縄を掛ける、これを見て、）
次郎　おゝ、よくぞ觀念いたせしぞ、汝に縄を掛ける上は、老母伜も許し難し。
三郎　すりや母上や伜にまで。
次郎　一應詮議濟むまでは、縄を打つのは掟なるぞ。

三郎　はて、是非に及ばぬことでござる。
次郎　して其の方が姓名は。
三郎　安達三郎泰忠と申す者。
兵太　して又母と小悴は。
渚　私事は渚と申し、又泰忠が是れなる悴は、
泰松　泰松と申しまする。
次郎　その出生は何處にて、この鎌倉表へは何用あつて參りしぞ。
三郎　手前は長州豐田郡稻見村の產にして、祖父は平氏の武士にて由緒ある者なれど、故有つて年久しく民間に浪人なし、今般仕官の望みあつて是れなる母と悴を召連れ、此の鎌倉へ參つてござる。
次郎　仕官の望みで鎌倉へ參りし者とあるからは、大小名の其の內の何れへ仕官いたさうとも、皆北條家の幕下たり、何ゆゑ君の御愛犬を其の方は殺せしぞ。
三郎　全く君の御愛犬と存ぜざるゆゑ殺しました。
兵太　いや存ぜぬとは申させぬ、其の折君の御愛犬雲龍なりといふことは、身共が慥に申せしぞ。
三郎　むゝ。

兵太　よもやそれを忘れはせまい。（ト三郎ぐつと詰りしこなし。）

三郎　長々民家に身を潜め土民に等しき此の泰忠、執權職の北條家へ何の恨みがござりませうぞ。

次郎　恨みなくば何ゆゑに、御愛犬を打殺せしぞ。

三郎　これなる母に咬附きて疵を負はせし其の上に、又もや猛く飛掛り一命取らんも計り難く、母に替へて餘儀なくも、打殺しましてござります。

次郎　いや〳〵それは汝が僞り、遺恨あるに相違ない、さあ有體に白狀いたせ。

三郎　この身に毛頭覺えなければ、白狀いたすことがござらぬ。

次郎　汝が白狀いたさずば、これなる母と小悴を拷問なして白狀させん。

渚　すりや、私と此の孫を拷問なすとおつしやりまするか、私事は兎も角も年も行かざる此の孫は、お許しなされて下さりませ。

泰松　いえ〳〵わしより祖母さまを、お許しなされて下さりませ。

次郎　爰は御庭の門外、往來ゆゑに詮議場へ、引立て參つて兩人共、拷問なすからさう思へ。

ト　これにて三郎きつとなり、

三郎　それは無益の御詮議なり、犬を殺せし科により一命斷つと言はれても、天下の補佐の執權職、北

條殿の嚴命とあれば權威に是非なくも、我が一命を捨つる所存、此の身に遺恨があるなどゝ覺えもなき事言ひ掛けて、年を重ねしこの母や何頑是なき忰をば、拷問なすとは非道な仕方、斯かる行ひあるゆゑに、北條殿は暴政なりと、四民が誹謗なす筈だ。（トきつと言ふ。）

次郎　やあ暴政なりとは憎き一言、その息の根を止めてやるぞ。

三郎　その成敗が則ち暴政、我が一命を進上申さう。

次郎　いや、汝ばかりか母子も共に、

兵太　一命めさるゝから、

兩人　さう思へ。

渚　すりや私や此の孫を、

次郎　今に首を竝べてやるわ。

三郎　斯樣な成敗なされては、當家も長くは續くまい。

次郎　えゝ返す〴〵も憎き奴。

兵太　それ、三人共引ツ立てい。

捕手　きり〳〵歩め。

ト時の太鼓になり次郎先きに三郎、渚、泰松、兵太捕手繩を取り、門の內へはひる、知せに附き門を上手へ引き、筋塀を上へ疊んで引揚げ、淺葱幕を切つて落す。

（北條家奧殿の場）――本舞臺四間の間置舞臺の高二重、襖欄間、正面厚木の踏段、正面緣張りの襖、土佐風檜山の彩色書革紐の引手附き、此の襖後に田樂にして杉林になる誂へ、後へ下げて高欄附の廊下、この向う塗骨障子屋體出入りあり、屋體と廊下の境杉戶、この屋體前側一面に翠簾をおろし、總て北條家奧殿の體、三重調べにて道具留る。と床の淨瑠璃になる。

〽行空も晴渡りたる秋の晩、木々の紅葉の泉水へうつらふ色に媚きし北條殿の奧御殿、高時公は愛妾に酌を取らせて數獻を重ね、御機嫌斜なかりける。

トこれへ音樂を冠せ、よき程に正面の翠簾を卷揚げる、眞中に高時坊主鬘好みの衣裳にて住ひ、脇息に寄掛り居る、後の刀掛けへ刀を掛けてあり、上手に衣笠下髮娘好みのこしらへにて控へ、下手に侍女四人下髮誂へのこしらへにて控へ、三方に土器を載せ瓶子緣高に肴を並べ酒宴の體、高時土器を持ち酒を呑み居たる思入、誂への合方へかすめて音樂を冠せ、

高時　酒は天の美祿にして愁ひを拂ふ玉箒、數献を重ねて醉を覺え、此の上もなき心地ぢやぞ。

衣笠　私こともお相手いたし、多分に過しましたゆゑか、軒端の風に吹かれますが好い心地でござりま

するが、定めて色に出しこと〻お恥しうござりまする。

高時　さのみ過しもせぬやうぢやが、常より餘程赤うなつた。

○　これは只今召上りし、九獻よりも御前栽の、

△　紅葉の色が夕日影に、うつろひますのでござりまする。

□　うつろひますと申しますれば、今宵は長月十三夜、

◎　暮れなばお池へうつろひて、よいお眺めでござりませう。

○　又々それを御肴に、

△　九獻をお過しなされませ。

高時　おゝ、晩には月見の宴を開き、衣笠、そちに酌をとらせ、夜すがら杯を取るであらう。

衣笠　今宵は月をお題となし、お歌合せを遊ばしませ。

高時　いや考へごとは席上が陰氣になつてならぬゆゑ、やはり催馬樂でも唄ふ方が時の興になつてよい。

〽高時公は愛妾の膝にもたれて餘念なき、折から出て來る長崎次郎、

ト高時衣笠の膝にもたれよろしく思入、ばた〳〵になり下手より以前の次郎出來り、緣下へ下に居て、

次郎　はッ、我が君へ申し上げまする。

高時　おゝ長崎次郎、何事ぢや。
次郎　只今お庭の御門外にて、御愛犬の雲龍を、長州稻用の浪人安達三郎と申す者が打殺しましてござります。
高時　なに、我が愛犬の雲龍を、浮浪人が害せしとか。
〽聞くに忽ち高時は、面に怒りを顯して、（ト高時きつとなり、）
次郎　仰せの如くにござりまする。
高時　かねて國中へ觸れ置く通り、予が飼犬を害せし者は、有無を論ぜず死罪にいたせ。
次郎　はッ、畏つてござりまする。
〽勢ひ込んで立ち上る、折柄こなたに聲あつて、（ト次郎立ち掛る、此の時下手障子の内にて、）
陸奥　その御成敗、暫くお止まり下さりませう。
〽一聲かけて次の間より立ち出る大佛陸奥守、廊下へ平伏なしければ、高時公は打見やり。
トばたばたにて、下手障子屋體より陸奥守烏帽子素袍にてつかつかと出で、下手へ平伏なす。
高時　その方は陸奥守、何ゆゑあつて止めしか、是れへ參つて仔細を申せ。
陸奥　はッ。

○　我が君さまの仰せゆゑ、

△　これへお進み、

四人　なされませ。

陸奥　眞平御免下さりませ。

〽威儀を正して末座へ住ひ、（ト陸奥守二重下手に住ひ、）

恐れながら御次にて承つてござりまするが、御愛犬の雲龍を害しましたる科により安達三郎並びに母子、死刑の御沙汰は我が君に似合しからぬ御成敗、何卒寛典の御處置をば願はしう存じまする。

高時　寛典の處置をいたせよとは、我より大佛その方が常に似合はぬ詞なるぞ、群犬のうち一といつて二なき雲龍害せし浪士、かねて觸れ置く我が命を背くは則ち犯罪人、彼れを死刑に行はねば後日に又もや愛犬を害さん者のあらんも知れず、今忽せになすときは其の時罰を與へ難し、それゆゑ彼れを成敗なすは、之れ當然のことなるに、何ゆゑ汝は止め居るぞ。

陸奥　お止め申すは外ならず、假令君の御愛犬にせよ、獸類の爲め大切なる人命を失ふは、是れ天の道にあらず、上を見習ふ下ゆゑに物の道理も辨へざる下民の者が上を見習ひ、若し獸類を害せし者

の一命を取りし其の時に死刑の罰を當て難し、普く萬民の手本なれば篤と御賢慮廻らされ、何卒助命の御沙汰をば願はしう存じまする。

高時　そりや其の方が申さずとも、下萬民の手本となるは我れも心得居るなれど、天下の政事は嚴なるにしかず、彼れを死刑に行ふも高時深き所存あれば、汝が諫めは用ひぬぞ。

陸奥　如何なる御所存あつてのことか、愚昧の拙者に御胸中御察し申し上げ難し、御當家御先祖時政公より順を助け逆を討ち仁義の道を專らに人を懐けたまひしゆゑ、遂には日本六十餘州向ふ敵を切り隨へ執權の職に登りたまふ、それより數代連綿と御血統にて御家續き謀叛を企つ者もなく、多年天下平穩なるは御武德備はる御功し、然るに今日人命を獸類に替へて討ちたまはゞ、不仁の君と蔑さん、此の沙汰國中へ及ほしなば、賴み甲斐なき不仁の君と、謀叛を企つ者あつて終に國亂の因とならば、上は主上の震襟を惱まし下は萬民の歎きとならん、是れ等の邊は御承知ある君へ御諫言申し上ぐるは恐れ入つたる事乍ら、御家のお爲めを存ずるゆゑ、何卒御助命下さりませ。

〽忠臣無二の大佛が思ひ入つて諫むれば、高時公も打ちうなつき、

高時　汝が諫言尤も至極、一々肝にこたへしぞ、斯かる家臣を持ちたるは此の高時が幸ひなり、以後は汝が諫めにつき犬を害せし者あるとも、必ず寬典の處置に及び人命を失ふまじ。

陸奥　扨は愚臣が御諫言御採用下さりまして、死刑を御免下さりますとか、はゝ、有難う存じ奉つりまする。

〽低頭なして禮なせば、傍に聞き居る衣笠が、

ト陸奥守兩手を突きて辭儀をする、衣笠思入あつて、

衣笠　常から君の愛でたまふ大佛さまのお諫めゆゑ、助かり難き浪人の親子の者まで命助かり、

〇　これに列なる私共まで、

衣笠四人　お嬉しう存じまする。

〽長崎次郎は最前より合點の行かぬ面色にて、（ト次郎思入あつて、）

次郎　すりや、御愛犬を害したる浪士をお助けなされますとか。

〽高時又も怒りを生じ、

高時　いゝや助けぬ、死刑にいたせ。

次郎　でも大佛殿の御諫言にて、思ひ止まりたまふと聞くに。

高時　諫言によつて止まるは是れより以後のことなるぞ、一旦思ひ立ちしことは是非を論ぜず貫くが、此の高時が性質なり、愛犬害せし犯罪人、浪士親子は死刑にいたせ。

次郎 はッ、こりや斯うなうてはならぬ筈、

〽打つて替りし高時の、詞に貞直座を進み、（ト陸奥守きつと思入あつて、）

陸奥 扨は浪士親子の者を、死刑に行ひたまふとか。

高時 以後は汝が諫めにつき、きつと死刑を愼む程に、こたびの所を許してくれよ。

〽せゝら笑へば詰寄りて、（ト高時せゝら笑ふ、陸奥守思入あつて、誂への合方になり、）

陸奥 此の度限りと仰せあれど一度なすも百度なすも、其の道理は一にして必ず數によるべからず、一度不仁の御處置あつて六十餘州へ流布なさば、後にて百度我が君がよしや愼みたまふとも元へ復すは難きことなり、そも御先祖たる時政公より御代々の御主君にいづれも愚はなけれども、中にも五代の時賴公は夫の平氏に名の高き小松の內府重盛公に劣りたまはぬ賢君にて、五常の道正しくして仁を施したまひしゆゑ、世は平穩に安全なれど、遠境僻地に至りなば其の政事行屆かず、代官地頭に邪の行ひあらんも計られずと、世上へ所勞と申し觸らし、二階堂を召連れられ、邪正をたゞさん其の爲めに嚴冬素雪の寒中に粗衣粗食を厭ひたまはず、諸國を竊に巡回あつて慈悲を施したまひしも、天下の爲め御家の爲めなり、君には近頃驕奢に泥みかゝる不仁の御所行あらば、時賴公のお心には必ず叶ひ申すまじ、何卒御心飜へされ、邪正を正して御慈悲の御沙汰を、

只管願ひ奉つる。

〽詞を盡して大佛が、諫言なせば高時公日頃の我慢に氣色を替へ、忽ち怒りを面に顯はし、

ト是れまで高時、諫言を餘所事に聞きゐて、思入あつて此の時きつとなり、

高時　やあ、最前よりの汝が諫言、重臣ゆゑに癇癖に障るを忍びて聞き居ればよきことゝ心得て、最明寺殿を引事に此の高時を愚昧なりと言はぬばかりの汝が過言、臣下の身にて失敬なり、如何ほど慈悲を施すとも慈悲で此の世は治らず、勇氣を以て取挫ねば一天下は納らぬ、今慈悲を以て浪士をば此の儘助け遣はすとも、一旦縄目に逢ひしを恨み必ず後日に害をなさん、この後難を思ふがゆゑ再應汝が諫言なすとも、此の高時は用ひぬぞ。

陸奥　すりや、斯ほどまで申し上げても。

高時　聞く耳持たぬ、重ねて申すな。（トきつと言ふ。）

陸奥　是非に及ばぬことでござる。

〽是非なきことゝ大佛が、歎息なせば怒りに募り、

高時　やあ猶豫いたさず長崎次郎は、罪を犯せし浪人の、素頭刎ねて我が意を休めよ。

次郎　畏まつてござります。

〽又立ち掛ればこなたにて、（ト次郎勢ひこんで下手へ行掛ると上手障子屋體の内にて、）

城之　あいや、暫くお待ち下され。

次郎　又止むるは、何人なるか。

〽見返るこなたへ城之入道、御前間近く立ち出れば、

ト上手障子屋體より城之介入道延明、更けたる坊主鬘長絹白の袴にて出來り、下手へ控へる。

衣笠　おゝ、よき所へ城之樣、君の御氣色あしければ、何卒よしなにお執成しを、

○　お願ひ申し、

四人　上げまする。

高時　城之入道、その方も浪士が成敗止むるか、聞入れぬゆゑ決して止むるな。

城之　いえ、お止め申しまする。

高時　えゝ、止めるなと申すのに。

城之　最前よりの此の場の樣子、お障子越しに承はりしが、大佛殿は天晴忠臣、よくぞ御諫言申されたり。

陸奥　すりや、秋田殿にも、

城之　やはり貴殿と同意でござる。

高時　扨は城之入道にも、我が成敗を非なりと申すか。

城之　仰せまでも候はず、人は萬物の靈長にして其の水上を溯れば二柱の御神にして則ち神の御末なり、恐れ多きことなれど十善萬乘の大君も罪を犯せし浪人も同じ日本の人たるに、その獸類の犬に替へて一命を取るはよろしからず、浪士を死刑に行ふはふッつり思ひ止まりたまへ。

高時　むゝ、善きにせよ惡しきにせよ、一旦斯うと思ひしことを後で變ぜぬ我が性質、假令その方が止むるとも、いつかな思ひ止まらぬぞ。

城之　左樣に思召すならば、御存意通りになされませ。

高時　むゝ、すりや存意になしてもよいと申すか。

城之　決してよろしくござらぬゆゑ、大佛殿もお止め申せば拙者も同樣お止め申すが、御聞入れなければ是非もなし、然し御存意通りなされたらば、御先祖樣へ對し御不孝になりませうぞ。

トきつと言ふ。

高時　何と申す。

城之　お忘れありしか今日は、月は替れど十三日、御當家二代の執權職義時公の御命日。

高時 やゝ

城之 生けるを放す放生會、御精進なさる御精進日に人命斷つはよろしからず、御不孝に相成りますれば、浪士親子の御成敗はお止まり遊ばしませ。（ト高時思入あつて、）

高時 二代樣の御命日ゆゑ、今朝拜禮をいたしながら心附ぬは我が過り、浪士の死刑は止まるぞ。

城之 すりやお止まり下さりますか。

高時 おゝ、聞き屆けた。

陸奥 はゝ、御聞き濟み下さりまして、

衣笠 私共に至るまで、

城之 有難く存じ、

皆々 奉つりまする。

〽御會得あつて人々が悦ぶ中に不足顏、（ト皆々辭儀をなす、次郎思入あつて、）

次郎 今日御助命あるからは、最早拙者に御用筋は。

高時 大儀であつた、休息いたせ。

次郎 はッ、

〽はつとばかりに面脹らし、詮議場さして急ぎ行く、

ト次郎、城之介入道を見て邪魔されしといふ思入あつて、下手へはひる。

陸奥　さて只今は我が君へ、過言のお諫め申し上げ、恐縮至極にござりまする。

城之　定めてお怒りにござりませうが、これもお爲めを思ふゆゑ、拙者がお詫び仕つれば、

陸奥　何卒御宥免下さりますやう、

兩人　お願ひ申し上げまする。

高時　我も一時の怒りに乘じ、暴言なせしは許しくれよ。

陸奥 城之　恐れ入つてござりまする。

高時　その方共が諫言に、浪士は助命いたすぞ。

陸奥　すりや寛典の御沙汰にて、

城之　浪士をお助け下さりますとか。

陸奥　はゝ、有難く、

兩人　存じ奉つる。

衣笠　浪士は元より其の親子が、嬉悦ぶで、

四人　ござりませう。

城之　見れば御酒宴の最中へ、思はぬお邪魔をいたしてござる。

陸奥　衣笠どのには我君へ、九獻をお進め下さりませ。

衣笠　畏まりましてござりまする、（と時の鐘。）最早夕景、燈火をこれへ。

◎□　畏まりました。（ト下手へはひる。）

高時　幸ひ今宵は月の宴、これにて一獻過さぬか。

城之　有難うはござりまするが、

陸奥　兩人共に過しませねば、

高時　然らば隨意に、

城之　退出いたすで、

兩人　ござりまする。

〽一禮なして兩人はお次へこそは立つて行く。（と陸奥守、城之介入道辭儀をなし下手へはひる。）

〽跡に高時吐息をつき、（ト高時ほつとせし思入、侍女二人菊燈臺を持ち出て上下へ置く。）

高時　折角の酒宴半へ、二人の者の諫言で、太く醉ひしも覺めてしまつた。

衣笠　又々新にお土器を、
○　早うお取り、
四人　遊ばしませ。
高時　どれ、改めて呑み直さうか。（ト衣笠酌をして高時呑む。）
○　今宵は秋の月も冴え、御庭前へ照渡り、
△　一入夜目の美しく、春にもまさる麗かに、
□　梅や櫻も返り咲きして、
◎　よいお眺めにござりますれば、
衣笠　是れにて九獻を召上がられ、お氣をお散じ、
皆々　遊ばしませ。
高時　予は一徹なる性質ゆゑ、癇に障れば怒りを生ずが、其の座限りにて後はないぞ。
衣笠　ても有難い思召し、そのお詞を承はり、
○　數なりませぬ私共まで、
四人　お嬉しう存じまする。

衣笠　いざ一獻お過し遊ばしませ。（ト高時土器を取り）

高時　おゝ、酌いたせ。

衣笠　はあゝ。（ト音樂きつばりとなり、衣笠酌をする、高時呑みて）

高時　今宵は田樂法師を招き、酒宴の興に舞はせんと先刻迎ひを遣はせしが、參りし沙汰はなかりしか。

衣笠　未だ參りませぬと見え、其の御沙汰はござりませぬ。

○　田樂と申しますのは、神樂催馬樂などゝ違ひ、

〻　只一本の竹に乘り、品玉を遣うたり、

□　又は高き足駄を履き、劍を拔いて舞をまひ、

◎　綾竹などを面白う扱ふ業をいたしますが、

○　何時の頃より田樂は、始りましてござりますか、

△　恐れながら我が君へ、お伺ひ申し上げまする。

高時　その始りは何時なるか確とした證もなけれど、元泉州大津村に田樂法師三人ありて、古くより年毎に住吉春日の祭禮に、法師等出でゝ技藝をなし、それより世々に行はれ、永長年間院の御所へ召されしことがありしとか、今鎌倉にのみ其の人數千人有餘もあるよしなり。

衣笠　その仰せでは田樂も、古きものと見えまする。
○　何は兎もあれ田樂法師を、
△　今宵お招き遊ばしますとは、
四人　お嬉しう存じまする。
〽媚く酒席に高時も、色に心の和ぎて、
高時　法師等が參るまで酒宴の興に衣笠には、何ぞ舞をまうて見せやれ。
衣笠　君の仰せを背きましては恐れ多うござりますが、至つて未熟にござりますれば、お許しなされて下さりませ。
高時　いや〳〵そちが舞ふことは、予も疾くより存じ居る、辭退いたさず舞うて見せやれ。
○　我君さまがあのやうに、仰せられますことなれば、
△　此の酒宴の御肴に、何ぞお舞ひなされませ。
□　幸ひこれに扇もあり、指手引手の一指を、
◎　私共もとも〴〵に、御所望、
四人　申し上げまする。

高時　皆の者も所望いたせば、是非とも此の場で早う舞やれ。（ト衣笠思入あつて、）
衣笠　左樣なれば私が拙き舞を舞ひます代り、君へお願ひがござりますが、お聞きなされて下さりますか。
高時　そもじの申すことならば、何なりとも聞かうほどに、早う申せ〳〵。
衣笠　そのお願ひと申しまするは、只今舞を舞ひます程に、何卒君には催馬樂をお唄ひなされて下さりませ。
高時　いや是れは思ひも寄らぬ賴み、假令何樣の賴みたりとも我執權の權威を以て、そもじが望み叶へてやるが、唄ひ物は大の不得手、是ればかりは許してくりやれ。
衣笠　左樣なれば、わたくしもお許しなされて下さりませ。
高時　これはほんとに困つたわえ。
○　衣笠めのお願ひを、君にもお叶へ遊ばして、
、　神樂唄なり催馬樂なり、早うお唄ひ遊はしませ。
□　私共も此のお館に、久しうお仕へ申しますが、
◎　また我君のお唄をば、承はつたことが、

四人　ございませぬ。
高時　餘り美音過ぎるゆゑ、其の方共に聞かれるさへ面目なきことなるぞ。
衣笠　仰せに隨ひわたくしも、拙き舞を舞ひますれば、早うお唄ひ遊ばしませ。
高時　我が唄はねば舞はぬとあれば、是非に及ばぬ催馬樂を、只今是れにて唄うてやらう。
衣笠　それは有難うござります。
○　早う、お唄ひ、
四人　遊ばしませ。
〽侍女がすゝめに高時は、扇を取りて拍子を取り、催馬樂をこそ唄ひける。
ト高時扇で拍子を取り、催馬樂を唄ふ、衣笠は扇をさし、舞ひにかゝる。
高時　催馬樂〽この殿は、むべも富みけり、さき草の、あはれ、さき草の、はなれ、（ト是より下座へ取り）
催馬樂〽さき草の、三ツ葉四ツ葉の中に、殿造りせりや、殿造りせりや。
〽此の殿の、西の、西の倉垣、春日すら、あはれ、春日すら、はれ、
〽春日すらゆけど、ゆけどもつきず、西の倉垣や、西の倉垣や、
ト始終高時拍子を取り、衣笠舞の振りよろしくあつて納る。

皆々　よいや〳〵。

○　我が君さまのお唄といひ、お面白いことで、

四人　ござりました。

上るり〽興に入りたる折こそあれ、一吹き吹き來る小夜風に、燈火一度に消えければ、

ト風の音になり、燭臺の燈火一時に消える、これにて窓蓋をおろす。

高時　烈しき夜風に燈臺の燈火を一時に消したるか、早う燈火を持つて來よ。

四人　はツ、畏りました。

上るり〽燈火消えて物凄き闇を照せる電光に、衣笠はじめ怖氣立ち、打連れ奥へ入りにける。

ト風の音仕掛にて、日覆より舞臺へ稻光する、これにて女形皆々びつくりなし、廊下より下手屋體へはひる。

〽跡に高時空打ち仰ぎ、（ト高時空を見上げ思入あつて、）

高時　秋の習ひといひながら見る間に空も掻き曇り、冴え行く月の影もなく物の黑白も分らぬに、池中へきらめく電光は、節の替りに雷鳴なすか、はて物凄き空合ちやなあ。

ト脇息に掛り居る、これにて大薩摩になる。

大薩摩〽それ一迅の風に連れ、空は忽ち磨墨を流せる如く雲震ひ、電光かゞやく縁側へ、實に高時が驕慢の、心に魔魅の附入りてか、虚空遙かに飛び來る天狗。

トドロ／＼のやうな風の音稻光りあつて、下手日覆より頭巾半面羽根を負ひし天狗一人、早ぶさにて二重下手へ下りる。

上るり〽妖魔の術に惑され田樂法師と高時が、目には見ゆるか打ち悦び。（ト高時天狗を見て、）

おゝ、汝は春日の田樂法師南圓坊か、よく參つた。

大薩摩〽又もこなたへ突然と、怪しの姿顯はす天狗。

トドロ／＼のやうな風の音稻光りにて、上手へ同じこしらへの天狗すつぽんにて出る、高時見て、

おゝ、住吉の田樂法師、東江坊參りしか　兩人共待つて居つた、さゝ、近う參れ／＼。

上るり〽見返る後に數多の天狗、高時ぞく／＼打ち悦び、

此の内やはり風の音にて、後上下へ同じこしらへの天狗出で、下に居る。高時左右を振返り見て悦び、

や、何時の間にか兩派の法師、打ち揃うて、よく參つた／＼。

ト床下座好みの合方にて、高時天狗の言ふを聞く思入あつて、

なに、神樂唄になぞらへて浪華江といふ新曲を物せしとは面白し、幸ひ徒然の折なれば、これに

てそれを舞うて見せやれ、なに、その浪華江を予に敎へ、祕曲を傳授なすと申すか、おゝ學ばうとも學ばうとも、予も此の程より稽古の功積み餘程上達なしたるぞ。おゝ、高足を履き劒を拔き、品玉をいだすなどは下賤の業にて見所なし、神樂催馬樂などにより唄ひ物のある方が遙に勝りて興深し春日住吉兩派の者が、物せしとあるからは定めて巧みなことであらう、其の新曲を勸めて見せよ、さあ〳〵早く所望ぢや〳〵。

大薩摩 〽所望々々と高時が、促す詞にうなづき合ひ、

上るり 〽聲うら枯れし天狗等が、唄ふ唱歌ぞ怪しけれ。

トこれにて前の天狗二人立上り、前へ出る、拍板の入りし鳴物になり、

大薩摩 〽住の江の松はとこしなへにいと古し、松はとこしなへにいと古し、おんそれな〳〵。

上るり 〽神の御惠み海より深い、世さは靜にはれ波たゝず、

大薩摩 〽心安らに、安らに民も、枕ようして夜さいねる、おんそれな〳〵、

ト天狗二人にて掛り、よき程に高時心浮れし思入にて此の中へ入り一緒に振りになる。

上るり 〽賴み甲斐なの浮世の中は、

大薩摩 〽變り易さよ秋の空、あはれ月影雲間に入りて、

上るり 〽時雨さそうて、さそうて風が、

大薩摩 〽梢落せは、はれ波立ちて、

上るり 〽蘆の葉音のさわがしく、

大薩摩 〽音におどろくむら／＼鷗、

上るり 〽共に音を鳴く、音を鳴く千鳥、

ト此の内高時二人の天狗を相手に振りあつて、蘆の葉音の騒がしくといふ頃より、薄ドロ／＼稲光なあしらひ、むら／＼鷗といふ件へ四人の天狗飛んで出で、ちよつと振りあつて淨瑠璃の切れ大薩摩竹本の打合せの合方へ凄き誂への鳴物を冠せ、天狗高時を惱ますことあつて、皆俯伏しになる、高時見え思入にて尋ね廻る、天狗出で邪魔をなす、始終狂ひのやうなる烈しき振りあつて高時疲れし思入、此の内下手より以前の衣笠○△の侍女二人雪洞を持ち出來り、下手杉戸の隙より内を覗き、びつくりなして下手へ逃げてはひる。

上るり 〽風に揉まれし飛び交ふさまは、

大薩摩 〽實にや軍も斯くばかり、あはれ斯くやと澪標、

ト此の内高時だん／＼に疲れし思入にてどうとなる。

上るり 〽天狗は笑壺に手拍子打ち、

〽天上寺のや、妖靈星を見ざるか〳〵。

トこれを繰返し囃し立てる、高時立上るを突倒して囃し立てる、又高時立上るを引倒して囃し立てる、高時ひよろ〳〵となり苦しき思入、此の時下手より以前の城之介入道先きに近習四人雪洞を持ち、衣笠附添ひ出で、城之介戸の隙より內を窺ひ、

城之　いでや化生を見顯はさん。

大陸摩〽いふ聲聞きて天狗等は、掻き消す如く失せにけり。

トドロ〳〵になり上手へ誂への煙りを出し、天狗は此の內へ消える。高時は俯伏になり居る、下手杉戸を明け、城之介入道先きに皆々內へはひり、

や、見ればこれには我が君のみ、天狗は何れへ參りしか。

一　人の來るを疾く悟りて、

二　逃げ失せたりと覺えたり、

三　御殿の內はいふに及はず、

四　お庭の隈々、

四人　詮議なさん。

城之　飛行自在の魔魅なれば詮議なすとも行方は知れまじ、衣笠どのには我が君の御介抱をいたされよ。

衣笠　畏まりました。

上るり〽衣笠はじめ介抱なして聲々に、（ト衣笠高時を起し、）

衣笠　お心慥にお持ち遊ばせ。

近習四人　我が君樣〳〵。

上るり〽呼ぶ聲耳に通じてや、我に返りし高時は、夢の覺めたる如くにて、四邊の人々見返りて、

高時　城之助入道、近習の者、おゝ、衣笠もこれに居つたか。

城之　君には只今田樂を舞はせたまふと聞き及びしが、いたくお疲れなされし御樣子、

高時　なに、心を慥に持てといふは。

城之　只今これにて田樂を、舞ひしを眞の法師等と、君には思召したまふか。

高時　何と申す。

城之　今宵お相手いたせしは、何れも天狗でござりまする。

上るり〽聞くに高時打ち驚き、

高時　や、それはまことのことなるか。

衣笠　しかも最前お次まで響き渡りし足拍子に、これへ參りてお杉戸の隙より内を窺ひしに、羽を負ひたる怖しき、天狗の姿に足も空に、お表へ駈け參りて、其の由を、お知らせ申してござります。

城之　その訴へも女儀のことゆゑ信じ難なく是れへ參り、只今手前も戸の隙より天狗を見屆けましてござる。さるにても心得難きは彼等が其の折同音に、天王寺の妖靈星を見ざるかと手を打つて囃せしが、元妖星は凶星なれば、若し天王寺の其の邊に、凶變のある知らせなるか。

一　見ればこれなる板敷に、

二　獸の足跡數多あり、

三　正しく天狗が參つたか、

四　これが印でござりまする。

衣笠　我が君、これを御覽遊ばせ。

上るり〽燈火を擧ぐれば高時が、殘る足跡打ち見やり、

ト近習雪洞を差出す、此の明りにて高時四邊を見て、

高時　これに獸跡殘りあれば天狗が來るに疑ひなし、北條九代連綿たる執權職高時が、好める道に魂奪

はれ、魔界の天狗に欺かれしか。

大勢〽はて口惜しやと齒嚙をなす、折しも虚空に聲ありて、（ト日覆にて）

天狗　はゝゝゝ、（ト天狗笑ひ、稻光りする）

城之　只今虚空で笑ひしは、

衣笠　君を惑はす、

四人　正しく天狗。

高時　扨は妖魔の、（ト上を見上げるを木の頭）所爲なりしか。

ト きつと思入、此の時又日覆にて、

天狗　はゝゝ。

ト大勢笑ふ、皆々これを見込む引張りよろしく、ドロ〱誂への鳴物にて、

ひやうし幕

本間山城邸宅の場
極樂寺口合戰の場
大佛陣所實檢の場

本間山城（中幕の中）

〔役名〕――本間山城左衞門直家、本間刑部太夫直高、大佛陸奥守貞直、大館次郎宗氏、本間の臣得行彌四郎、守役出石但馬、大佛の臣四人、兵士大勢、軍兵大勢。本間の妻小波、藩中の妻尾崎、同小谷。〕

（本間邸宅の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面一間床の間、是れへ八幡宮といふ掛物を掛け、三方へ瓶子を載せ供へあり、是れより下小形の襖出入り、欄間へ槍を掛け、上の方一間障子屋體、下の方九尺の玄關、左右間平戸、正面大形の襖、二重と玄關の間低き四ツ目垣、床の間の脇へ毛氈を敷き鎧兜太刀小手臑當など武器を飾り、總て本間邸宅の體。爰に小波屋敷女房のこしらへ下手に尾崎、小谷同じく屋敷女房のこしらへにて見舞に來りし體、合方調べにて幕明く。

尾崎　今御注進のお話しでは、追々新田の軍勢が、間近く押して參りしと、申すことでござりますが、厭なことでござりまするな。

小谷　お上からも足弱は、何れへなりと近鄕へ早く逃せとお觸れはあれど、武士の妻が此の期に至り、逃ぐるといふは卑怯なこと、

尾崎　銘々夫がお供して、戰場へ出る上からは、

小谷　跡を守るは妻の役、留守居をせねばなりませぬわいな。

小波　君のお供で戰場へ、お出張りなされしは武士の身の願ふところ、お手柄次第でどのやうにも、御出世のなることなれば、お羨ましうござりまする。

尾崎　ほんに此方の山城さまは、

小谷　まだ御勘氣がゆりませぬか。

小波　此の軍をば幸ひに今日もお詫に出ましたが、まだ戻つて參りませぬ、御近習方のお執成で御免にならば早速に、戰場へ出る心ゆゑ、御覽の通り武器を揃へ、支度をいたして居りまする。

尾崎　山城さまは不斷から我が君樣の御意に入り、御勘氣ありしも餘儀ない譯、常とは違ひ一人でも味方のほしい戰の中、

小谷　御免があれば一方の將になるべき御器量あれば、今日は御免がござりませうから、お悦びなされませ。

小波　忠義一途な了簡に、勤め向きに粗相はなけれど、常から好む酒ゆゑに、無禮がありて御勘氣受け、出仕をお止めありしゆゑ此の戰にもお供がならず、悔しいことぢやと申しまして、老臣の方々へお詫び願ひに參りました。戻りの遲いはお許しのないことであらうかと、案じられてなりませぬ

わいな。

尾崎　これはお案じなされますな、神は誠を照したまへば、八幡様の御加護でも、

小谷　今日は御免になりませうから、御本陣からお歸りを、お待ちなされませいな。

小波　どうぞお聞き濟みのあるやうに、八幡樣の幅を掛け、切ない時の神頼みに朝夕お願ひ申しまする。

尾崎　取紛れて御隱居樣を、お尋ね申し上げませぬが、

小谷　お快ろしうござりまするか、

小波　父上樣の御病氣も大したことではござりませぬが、夫の御勘氣がゆりぬので、それを御苦勞になされるゆゑ、兎角にお氣がむすぼれて、捗々しくござりませぬが、これも御免になりましたれば全快いたすでござりませう。

尾崎　何にいたせ此の戰が、味方の勝利になりまして、早う鎭まればようござりますが、

小谷　當殿樣のお持場所極樂寺口まで敵勢が、押して參りしと申すこと。

尾崎　實に油斷がなりませねば、安い心はござりませぬわいな。

小谷　いや、ちよと御見舞に上りまして女子の口の長話し、大きにお邪魔を。

雨人　いたしましたわいな。

小波　かゝる戰の中ゆゑに、何の御愛想もござりませぬ。
尾崎　いえ、斯ういふ時にはお互ひに、無事なお顏を見ますが樂しみ。
小谷　又後程に上りませう。
小波　左樣なればお二人さま。
尾州　吉事をお待ち、
兩人　なされませ。（ト合方調べにて兩人下手へはひる、小波跡を見送り、）
小波　戰の樣子を見に參りし、彌四郎は如何せしか、若い者ゆゑ戰ひの近くへ參りて流れ矢に、當りでもせねばよいが。夫の歸りの遲いといひ、心に掛ることぢやわいな。
ト合方ばたばたにて花道より、彌四郎達附大小草鞋若黨のこしらへにて走り出て來り、直に舞臺へ來り、
彌四　はッ、御新造さま、只今歸りましてござります。
小波　おゝ彌四郎か、待つて居つた、戰の樣子はどうぢやぞいの。
彌四　只今申し上げまする。
ト草鞋を解き砂を拂ひ、內へ入りて平舞臺下手へ來る、此の時上手障子屋體の內にて、

刑部　彌四郎が歸りしとか。

小波　只今申し上げませうと、存じました所でござりまする。

刑部　今日の戰の樣子をば、それへ參つて承はらん。

ト合方きつぱりとなり、小波上手障子を明ける、內より刑部太夫着流し更けたるこしらへにて出來る、小波介抱なして上手へ蒲團を敷き、此の上へ刑部太夫を住はせる、彌四郎辭儀をなして、

彌四　御隱居さまには御不快なるに、端近へお進みあつて、恐れ入りましてござりまする。

刑部　先刻よりそちが歸りを、今か〱と待つて居つた。して、戰場の樣子は如何に。

彌四　はツ、仰せに任せ戰場へ赴きまして一通り撿分なしてござりまするが、當殿樣のお持場所は極樂寺の切通し、道幅狹き坂道へ二千の兵を二手に分け、山手と平地へ嚴重に兵を配りて防戰あれど、寄せ來る敵は新田方の十六黨のその內にて力量衆に優れたる勇將大館次郎宗氏、一萬四千の兵を引き無二無三に攻め來れば、味方も必死の勇をふるひ爰を先途と戰へど、譬に申す多勢に無勢、敵は新手を入替へれど味方は後に援兵なければ、とても防戰覺束なく始終は破れと存じられます。

刑部　むゝ、すりや英勇の聞えある大館次郎が向ひしとか、病苦でなくば老いたりとも戰場へ出で防戰なさんに、是れに附けても悴山城、御勘氣受けてお供叶はず、殘念なことなるぞ。

彌四　今朝お詫びにおいでなされし、旦那樣には御本陣より、未だお歸りはございませぬか。
小波　疾うにお歸りなさる筈ぢやが、遲いは吉事と思ふわいの。
彌四　どうぞ今日御免があつて、拙者も軍のお供をして、手柄が仕たうございまする。
刑部　今其の方の話しを聞けば、押し寄せ來る大館は、一萬四千の兵とやら、如何ほど御主人防戰あるとも、極樂寺口は保つまじ、多分は破るゝことならん、さもなきうちに悴をば戰の御用に立てたいものぢや。
彌四　御勘氣お詫びの御樣子は、如何なるか拙者めが、御本陣の外まで參り承はつて參りませう。
小波　途中でお目にかゝるも知れねば、大儀ながら行つてくりやれ。
彌四　畏まりましてござりまする。
刑部　最早歸るであらうから、迎ひに行くには及ぶまじ。
彌四　ではござりますが、途中までも、
刑部　然らば道の違はぬやう、
小波　氣を附けて行つてくりや。
彌四　心得ましてござりまする。（ト門口へ出て向うを見て）おゝ向うへ見ゆるは旦那さま、もし、御新造

さま、お歸りでござりまする。

小波　お丶、お歸りなされましたとか。

刑部　御勘氣お詫びも凶事か吉事か、早く樣子を聞きたいものぢや。（ト時の鐘、床の淨瑠璃になり、）

〽薪こる鎌倉山の星月夜、曇りなき世に晴れやらぬ今は日陰の勘氣の身、思案に暮れてとつおいつ歩むともなく門へ來て、

ト此の內花道より本間山城、小さな陣羽織逹附大小草履にて、思案の思入にて出來り、花道にて氣を更へ、舞臺へ來る、此の內小波、彌四郎は玄關へ出迎へ、

小波　只今お歸り、

彌四　遊ばしましたか。

山城　思ひの外に遲刻いたし、嘸父上もお待兼ね。

小波　先刻よりお居間にて、

彌四　お待ちなされてござりまする。

山城　然らば早くお目に掛らん。

〽我が宅ながら武士の、禮儀正しく座に附けば、

ト山城刀を小波に渡し、玄關より平舞臺眞中へ住ふ。

刑部　おゝ悴、歸りしか、待つて居つた〳〵。

山城　陣中混雜いたせしゆゑ、遲刻いたしてござりまする。

刑部　して、極樂寺口は如何なるぞ。

山城　今朝より數度の合戰、敵にも多數の死傷あれど、味方も餘程の損じでござる。

彌四　先刻拙者が參りし折は、味方の方が負色に見受けましてござりまするが、今は如何でござりますな。

山城　殿の烈しき采配に何れも必死を極めし働き、見る間に敵を追ひ退け、盛返したる勝利なるぞ。

彌四　それは悅ばしいことでござりまする。

小波　どうぞ味方の勝軍に、いたしたいものでござりまする。

〽勝利と聞くに、父は猶、勘氣の詫びを打案じ、

刑部　して、其の方の御勘氣の、お詫びは如何であつたるぞ。（ト山城歎息なし、）

山城　未だ御免がござりませぬ。

刑部　むう、すりや御免があらざるとか。

小波　今日は定めしお許しの、あらう事と思ひましたに。

彌四　残念なことでござりまするな。

〽人々顔を見合せて、何の詞もなく妻は歎息の外なかりける、我が身の恥に山城は四邊窺ひ

聲潛め、

ト三人當惑の思入。小波は涙を拭ふ。山城四邊を窺ひ、誂への合方になり、

山城　御本陣の幕外へ磯上殿をお招き申し、君へお詫びを願ひし所、幼年よりして劍道の指南を受けし師弟の中に信義厚く、詞を盡して再度までお詫びをなしてくれたれど、一つの功を立てざる内は何樣歎願いたすとも只此の儘には許し難し、今や合戰最中ゆゑ一人たりとも味方の者の、欲しき時節のことなれば、勘氣を許して先陣の役に立てたきものなれど、平民ならぬ武士の身に掟が立たねば許されぬと、君の仰せを幕外にひれ伏して聞く我が切なさ、御勘氣受けずば人先へ、出陣なして手柄をなさんに、出仕叶はぬ日蔭の某、雜兵にまで心を置き肩身を狹く立歸るも、酒興の上の粗忽ゆゑ、我が身で我が身を悔むのみ、只申し譯のあらざるは、お年召されし父上へ御苦勞掛くる不孝の段、御免なされて下さりませ。

〽兩手を突いて身を詫びる、心を不便と親刑部、

ト山城手を突いて詫びろ、刑部太夫これを見て不便だといふ思入あつて、

刑部　今更それを悔みても返らぬことゆゑ是非もないが、再三お詫びをいたしても御免のあらざる上からは、如何いたす所存なるぞ。

山城　斯く亂世にあらざれば、時節を待つて功を立て御詫びいたす所存なれど、眉に火の附く合戰中うか〳〵當地に居りまして、後指をさゝれますが、口惜しうござりますゆゑ、一先づ當地を立ち退いて、何れの地へか足を止め浮世の日和を見ます所存、御老體の父上へ濟まざる儀ではござりますが、何卒御暇下さりますやう、お願ひ申し上げまする。

刑部　事によりなば、其の方へ暇をやるまいものでもないが、他境へ參つて如何いたすな。

山城　お恨み申すも恐れあれど、酒興の上の過りを再三お詫びいたしても御聞き濟み之れなきは、餘りと申せば仁心なく賴み少なき主人ゆゑ、何れへなりと身を寄せて、二君へ仕へる所存でござる。

へ忠義に凝りし山城が常に替りし返答に、父は眉を打ち顰め、（ト刑部太夫思入あつて、）

刑部　して某や此の妻を、同道なしてそちは參るか。

山城　御老年の父上にお氣の毒ではござりまするが、幸ひ武藏の川越にあなたの御舍弟民部殿が鄕士となりて居住あれば、これへ御身を寄せられて寓居なされて下さりませ。又妻ことは朝夕の御介抱

の其の役に御供いたさせます所存。

刑部　むゝ、すりや川越の民部方へ、小波諸共參れと申すか。

山城　如何にも左樣にござりまする。

小波　お年を召した父上の御介抱をいたすのは、妻の役にござりますれば、決して否とは申しませぬが、人に指をさゝれるのが悔しいゆゑの他國なら、あなたも一緒に川越へなぜお出でなされませぬ。

山城　手前は思ふ志願あれば、一先づ京都へ立ち越えて、それより仕官なす心。

へ心得難き山城が、詞に彌四郎進み出で、

ト此の內彌四郎思入あつて前へ出で、合方きつぱりとなり、

彌四　して、私はじめ中間共を、あなたは如何なされまする。

山城　殘らず暇を遣はすほどに、何れへなりと主取りして、後の榮えを計るべし。

彌四　いえ、餘人は知らず私は、幼年よりしてお側に仕へ、御厚恩を蒙りて人と成つたる身の上、何れへおいでなさるとも、旦那樣のお供して生死を一つにいたす所存、役に立たぬ者ゆゑに主取りなせとおつしやりませうが、憚りながら私は二君へ仕へますやうな、そんな心ではござりませぬ。

小波　御病中の父上さまを、御親戚とはいひながら、民部さまへお預けなされ、お一人おいでなさると

は、そりや御不孝でござりまする、これが御勘氣のお詫びが叶ひ、殿のお供で戰場へおいでなさることならば、父上さまの御供なし御介抱をいたしますが、其のお望みもおつしやらす武士の身の恥となす、二君へ仕へる其の爲めに他國へお出でなさるとは、常に似合ぬあなたのお詞、今一應御思案を篤となされて下さりませ。

彌四　こりや御新造さまが御尤も、よく御異見をなされました、私などは取るに足らぬ愚昧者でござりますが、大旦那樣や御新造さまへ、なぜ御相談をなされませぬ、三人寄れば文殊の智慧、よい御工夫もござりませうに。

小波　お別れ申すが悲しさに、お止め申しはいたしませぬ、世上の人の物笑ひに、

彌四　成りませぬやう、とつくりと、

小波　御思案なされて、

兩人　下さりませ。

〽妻と家來が眞實の、諫めも態と餘所に聞き、

ト小波彌四郎思入あつて言ふ、山城は思入あつて、

山城　主君の御勘氣御免なく、人に面を見らるゝが如何にも面目なきゆゑに、他國へ此の身を退きて二

君へ仕へて行末の榮えを願ふ我が望み、斯くと決心せし上は最早外に思案はない、又父上や妻などに相談なすともよき事と、得心なきは言ひ甲斐なき二君へ仕へる望みゆゑ、たゞ何事もこれまでの緣と思ひあきらめよ。

小波　すりや、どうあつてもあなたには、父上さまや私を跡へ殘してたゞお一人、

彌四　二君に仕へる其の爲めに、他國へおいでなされますか。

小波　てもお情ない、

兩人　お心ぢやなあ。

〽歎く詞を耳にも掛けず、父の刑部に打向ひ、(ト山城思入あつて、刑部太夫に向ひ、)

山城　只今是れにてお聞きの通り　決心なせし上からは、何卒お暇下さりませう。

刑部　さほどまでにその方が、決心なせしことなれば、如何にも暇を遣はさう。

山城　え、すりや、御聞き濟み下さりますとか。

刑部　所詮留めても留まらぬ性質、存じ居るゆゑ許せしぞ。

山城　はゝ、有難うござりまする。(ト辭儀なする。)

刑部　我が聞き濟めば其の方は、これより直に參る所存か。

山城　即刻出立いたしまする。
小波　すりや、我が夫には、
彌四　これより京都へ、
山城　出立いたせば、跡を賴むぞ。
小波彌四　はあゝ。（ト兩人愁ひの思入。）
刑部　忰、心殘りはあらざるか。
山城　最早心殘りもござりませねば、御機嫌よろしう。
〽これが別れと山城が、涙を隱して立上る、心を察して父刑部、
ト山城これが別れといふ思入あつて、辭儀をなして涙を隱して立上る、此の內刑部太夫思入あつて、
刑部　こりや忰、親子は一世行くならば、そちが本心明して參れ。
山城　なに、本心を明せとは。
刑部　京都へ行くは僞りにて、一命捨つる所存であらうが。（トきつと言ふ。）
山城　えゝ、（トぎつくりする。）
〽星をさゝれて山城も、はつとばかりに驚けば、

刑部　死する所存と見抜きしに、よもや相違はあるまいがな。

山城　驚き入つたる御賢察、今は何をかお隱し申さん、死する覺悟にござりまする。

刑部　おゝ、さもあらん、さもあらん、そちが日頃の性質では、今日御勘氣お許しなければ、死すると推察いたせしぞ。

〽父が察しに威儀を改め、（ト床の合方になり、山城思入あつて、）

山城　抑々御先祖時政公より九代續きし北條家も、滅する時の至りてや、高時公が暴政に四民恨みを抱くの折柄、新田義貞義兵を起し當鎌倉へ攻寄せしその勢凡そ十萬餘騎、久しく治世になづみたる味方の油斷に取圍まれ所詮防戰叶ひ難し、鎌倉御所も遠からず焦土とならんは目のあたり、今日主君の持口なる極樂寺の切通しも寄手は新田の勇士といふ、大館次郎宗氏が一萬四千の兵を率る力戰なすとあるからは、如何程智略を廻らすとも敵しがたく持口の、破れとなるは必定ゆゑ、今日御免を蒙らば是れより六具に身を固め、御馬前に於て某が必死の働きなせし上、御不興うけし申し譯に討死なさんと思ひしも、御免なければ望み叶はず、是非なくこれより菩提所の建長寺へ赴きて、切腹なして死する所存、取出し置きし甲冑も畫餠となりし身の不幸御推量下さりませ。

〽初めて明す本心に、父はさこそと領けど、側に聞き居る二人は驚き、

ト山城よろしく思入、刑部太夫はさてこそといふ思入、小波彌四郎は驚き、

小波　扨は二君に仕へるとおつしやりましたは僞りにて、御切腹をなされますとか。

彌四　旦那樣にも似合はざる御卑怯なことゝ思ひましたが、さういふことでござりましたか。

刑部　我は病苦に引籠り、戰地の樣子は知らざれど、此の鎌倉は海のみにて要害惡しき地理ゆゑに防禦の功はあらずして、數代續きし北條家も最早近きに滅亡なし、爰に住居のならざるは坐して居つても存じ居る、其の期に至らば某も戰地の御供はなさずとも、これにて殉死なす所存。

山城　すりや、父上にも御生害をなされるお心で。

刑部　生きて詮なき老の身に、疾くより死する覺悟なるぞ。

小波　さほどまでにお二人さまが、御覺悟ありし上からは、私とても只一人、なにしに跡へ殘りませうぞ。

彌四　拙者とても同じこと、皆樣方と諸共に、冥土のお供いたしまする。

山城　斯く心中をお明し申せば、是より直に菩提所にて切腹いたすでござりまする。

刑部　とても死すなら潔よく、一つの功を立てゝ死ね。

山城　一つの功を立てよとは。

刑部　これに飾りし甲冑を、着して君の持場なる極樂寺口へ赴きて、必死の働きなした上、御馬前に於て討死いたせ。

山城　それは元より某も望む所に候へど、御勘氣御免なき內に濫りに其な場へ立越しては、臣たる身にて主君をば蔑ろにするも同然ゆゑ、殘念ながら菩提所で死する覺悟をいたしてござる。

刑部　その儀は我れより我が君へ、御詫びの書翰を差上ぐれば、心置きなく出陣なし敵將の首討取つて、それを一つの功となし、御勘氣御免を願ふべし。

山城　むゝ、忝なき其の仰せ、父上よりお詫び下されゝば望み通り出陣なし、必死を極めて敵將の、首討つてお詫びを願はん。

刑部　猶豫いたす所ならねば、片時も早く支度なし、末世の記錄へ殘るやう比類なき働きせよ。

山城　仰せにや及ぶべき、吉左右お待ち下さりませ。

〽勇み立つれば妻もまた、淚隱してもろともに、

小波　お別れ申すは悲しけれど、武士の身は戰場で討死なすは譽れゆゑあきらめますでござりまする。

彌四　御出陣とあるからは、役に立たねど拙者めも御供いたして共々に手柄が仕たうござりまする。

山城　斯くなる上は片時も早く、彌四郎、汝も手傳ひくれ。

彌四　畏まつてござりまする。

〽かたへに飾る物の具を、妻も共々手傳うて、着する鎧の黒革に苦勞重ぬる段縅し、籠手臑當にしつかりと結びし緣も亂れ燒き、白刄の露と消ゆる身をかこつ涙を忍びの緒、兜を傍沖の石乾く間もなき袖袂、

ト此の内小波彌四郎手傳ひ、山城鎧を着、籠手臑當を附け、太刀を佩き馬手差をさし、陣立の拵へよろしくあつて下に居る、兜を傍に置き、

刑部　支度がよくば八幡宮へ、供へし御酒をこれへ持て。

小波　畏まりました。

〽はツと答へて床の間へ飾りし瓶子土器を、刑部の前へ差し置けば、

ト小波床の間より土器を載せし三方、瓶子を載せし三方を刑部太夫の前へ置く、刑部太夫思入あつて、

刑部　こりや悴、今別れゝば又再び、最早この世で逢はれぬ親子、

山城　まことにこれが今生の、お暇乞にござります。

刑部　小波、酌いたせ。

小波　はツ、

トこれより笙の入りし誂への合方になり、刑部太夫、土器を取上げる、小波酌をする刑部太夫呑みて、

刑部 目出度く受けよ。(ト土器をさす。)

山城 頂戴いたすでござりまする。(ト山城土器を出す、小波酌をなし、山城呑む、)

刑部 その土器は嫁女へ遣はせ。

山城 はッ、(と小波へ土器を差し、)長々そちにも世話になりしが、之れが此の世の別れなるぞ。

ト愁ひの思入

小波 はあゝ。(ト泣く。)

山城 戰場へ出て討死なすは、武士たる者のはれなるに、悅びこそすれ其の妻が、泣くといふがあるものか。

トきつと言ふ。

小波 いえ、決して泣きはいたしませぬ。(ト彌四郎酌をして小波呑む、)

刑部 目出度く呑んでそなたより、彌四郎へ遣はしやれ。

小波 はッ、畏まりました。(ト彌四郎へさす。彌四郎土器を戴き、小波酌をする、)

彌四 これは〳〵恐れ入りまする。(ト一口呑み咽せる、)

小波　何でそのやうに咽せるのぢやぞいの。
彌四　このお流れを頂戴いたし冥加に餘つたことゝ思ひ、有難涙がこぼれました。(ト涙を拭ふ。)
刑部　いざ、手前が納杯いたすであらう。
彌四　左樣ならば憚りながら。(ト刑部太夫へ土器をさす、刑部太夫土器を取上げ)
刑部　目出度くこれで納杯なせば、悴祝しやれ。
山城　はッ、(ト小波泣き居るを見て不便だといふ思入あつて朗詠をうたふ。)「君が代は千代に八千代にさゞれ石の、巖となりて苔のむすまで」(ト山城愁ひの思入にてうたひ、涙を隱して長押の槍を取り。)時刻うつさず、拙者めは、
刑部　御勘氣御免なるやうに、戰場に於て手柄をいたせ。
山城　はッ、後刻吉左右お知らせ申さん。
彌四　拙者も是れより御供なし、
刑部　いや、其の方は支度をなし、主君へ詫書を持參いたせ。
彌四　然らば跡より追附き申さん。
山城　左樣ござれば、父上樣、

刑部　悴、まことにこれが、

山城　今生の御別れ、

〽これ今生の別れぞと惜しむ名殘りに顏見合せ、親子は一世妻は二世主從三世四人してしぼる淚の五月雨、晴間は更になかりける。

ト四人顏見合せ皆々愁ひの思入、手を取り交しよろしくあつて小波はツと泣伏す、刑部太夫きつと氣を替へ、

刑部　いそふれ、悴、

山城　はツ。（ト槍を持つて行かうとする。）

小波　あもし（ト槍の柄へ縋る、）

〽暫しとすがる女房を、淚と共に振拂ひ戰場さして、

ト小波泣くを山城左衞門槍で拂ひ退ける、此の機に脇腹を突かれゝ、ゝんと倒れる、彌四郎介抱する山城ちよつと振返り、氣を替へて槍を搔込み、どんちやんカケリにて、山城花道へはひる、舞臺は引ツ張りよろしく、此の道具廻る。

（大佛貞直引揚の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面極樂寺を見たる遠見、上下岩山の張物にて見切り眞中に松の大樹、日覆より同じく松の釣枝、總て鎌倉極樂寺切通しの體、眞中に大佛陸奥守鎧兜附太刀陣羽織陣立てのこしらへ、傍に鎧裝の武者四人後に軍兵一人馬印を持ち、持口破れて引き揚げし體、どんちやん床の三重にて道具留る。

〽行く空の日ざしも西へ傾きし、味方の運に持口の破れて爰へ引揚げし大將大佛一息つき、

ト此の內皆々疲れし思入あつて、誂への合方へどんちやんを冠せ、

陸奥　今朝よりして數度の合戰、何れも粉骨碎身なし必死の働きなせしゆゑ、戰ふ每に勝利を得たれど敵は一萬四千の大勢、味方は僅か二千餘り、我が持場なる極樂寺口も追々敵に討破られ、遂に防戰なし難く、餘儀なく是れへ引揚げしが、味方の人數は如何せしぞ。

一　一纏めにして引き揚げんと、種々心を盡したれど、

二　一方破れて敵味方、入亂れになりしゆゑ、

三　右往左往に人數分らず、是非なく見捨てゝ此所へ、

四　引き揚げましたも我が君の、御身の上が氣遣はしく、

一　やう〳〵一方切り拔けて、

軍兵　これまで引き揚げ、

五人　參つてござる。

陸奥　所詮援兵あらざれば一先づ當所を引揚げて極樂寺へ屯なし、新手の兵を迎へし上花々しく一戰なさん、是れに附けても山城左衞門、勘氣の詫びに參りしを掟を守つて許さゞりしが、斯く敗走なせし上は、一人たりとも味方が頼み、殘念な事をいたしたわえ。

一　臣下の内にて一二といはるゝ、

二　武藝勝れし山城左衞門、

三　先手の内にござつたら、

四　此の敗北はいたすまじきに、

陸奥　我が勘當を許さゞりしは、まことに後悔千萬なり。

〽味方の不足に後悔なす、折柄爰へ戰場を、引揚げ來たる味方の兵士、

トどんちやんばたくになり、花道より鎧武者一人軍兵六人附添ひ出來り、直に舞臺へ來り、

一　敵の追手と思ひしが、長谷部殿で、

皆々　ありしよな。

長谷　寄手の兵を追散らし、やう〳〵引揚げ、
軍兵　參つてござる。
皆々
長谷　只今群がる敵勢の中へ一人躍り入り、討死をなす所存なるか、必死の働きなす者を、見受けまし
てござります。
二　味方の内にて、
四人　誰なりしぞ。
長谷　二町餘り隔てしゆゑ、兜に面は知れざれど、黑革縅の鎧を着し、千段卷の槍をふるつて先手の者
を突き崩し、見る間に敵兵十四五人無二無三に突殺し、忽ち死人の山をなし、阿修羅王の暴れた
る如き由々しき働きなす者が、今戰場にござりまする。
へいふに貞直小首を傾け、
陸奥　今朝よりの戰ひに、何れも疲れし者のみなるに、さほどの働きなさん者は臣下の內で誰なるか。
一　左程の勇士をやみ〳〵と、
二　討死さすは殘念なり、
三　是れより參つて加勢をなし、

四　叶はぬ時は諸共に、

一　我々どもゝ、

四人　討死なさん。

〽勇み立つたる其の所へ、宙を飛んで馳せ來る彌四郎、

トやはりどんちやんにて、以前の彌四郎立文を持ち走り出來り、直に舞臺へ來り、

彌四　はッ、申し上げまする。

一　やあ、汝は本間山城の家來、

二　何用あつて、

四人　參りしぞ。

彌四　恐れながら我が君様へ、刑部よりのお願ひ。（ト立文を出す、陸奧守見て、）

陸奧　何事なるか、これへ持て。

彌四　はッ、御取次下さりませう。

〽近習が取次ぐ立文を、陸奧守は開き見て、（ト侍の一取次ぎ出す、陸奧守開き見て、）

陸奧　むゝ、願ひの趣き、（トうなづくを道具替りの知せ、）聞き届けしぞ。

彌四　はッ、

〽笑みを含みて、

ト陸奥守思入、彌四郎はッと平伏する、此の見得三重、どんちやんにて道具廻る。

（本間山城功名の場）＝本舞臺上の方岩の張物、下の方松並木、向う切通しの山續き、遠く海を見たる遠見、日覆より松の釣枝、總て極樂寺切通しの體、爰に大館次郎鉢巻、鎧、小手、臑當、武者草鞋、附太刀、陣立のこしらへにて太刀を振上げ居る、これを軍兵七人刀にて取卷き居る、どんちやんにて道具留る、と立廻つてきつと見得、大太鼓入りの鳴物になり、次郎八人を相手に立廻りよろしくあつて軍兵は花道へ逃げて入る、これを追掛け花道へ留り、

次郎　敵將大佛陸奥守の首級を取らんと、只一騎深入りなし、討漏らせしは殘念な。

〽跡を見返り口惜しと無念を忍ぶ其の所へ、眞一文字に馳け來る本間、槍を捻つて突き掛くれば、

ト次郎向うを見送り太息を吐く、どんちやんばた〳〵にて花道より山城左衞門鎧に矢を負ひ手を負ひしこなしにて出來り、次郎に槍を突つ掛け、ちよつと立廻つて舞臺へ來り、

やあ、我れに刄向ふ猪武者、そも先づ汝は何者なるぞ。

山城　我が名を問はゞ、汝が名をば名乘るべし。
次郎　おゝ、聞き度くば名乘つて聞かせん、冥土の土産によツく聞け、新田小太郎義貞が十六黨の一人にて、勇力衆に勝れたる大館次郎宗氏なるわ。
山城　扨は敵の一將たる大館次郎宗氏よな、我は北條高時の重臣、大佛陸奥守貞直が身内にて、本間山城左衞門直家なるぞ。
次郎　陪臣づれを相手になすは、我れに取つて不足なれど、今突ッ掛けし槍先が鋭きゆゑに相手になさん。
山城　我に於ては望む敵、いでや此の場で勝負を決せん。
次郎　汝が主人の大佛も今に跡から冥土の旅、三途の川の魁せよ。
山城　さいふ汝も、道連れなるぞ。
次郎　何を小癪な。
　　トどんちゃんの入りし誂への鳴物になり、槍と太刀との立廻りよろしくあつて、太刀を投げ捨ていで、引ッ組んで、
山城　勝負をなさん。

ト鳴物替つて、兩人組討の立廻り、山城痛手に弱りし思入あつて組伏せられ、次郎馬手差を拔き、首を搔かうとする、此時ばた〳〵にて、以前の彌四郎出來り、びつくりなして次郎に組附く　これを拂ひ退けようとするを山城刎返し、直に次郎を組伏せ、馬手差を捥ぎ取り、咽喉を突く、次郎あつと苦しむ。

彌四　おゝ、お出來しなされた、お手柄でござりまする。

山城　むゝ、（トがつくり心の弛みし思入、これを道具替りの知らせ）心地よや。

トにつたり笑ふ、どんちやんにて此の道具廻る。

（首實檢の場）――本舞臺元の道具上下へ幕を張り、上手に陸奥守床几に掛け、左右に以前の鎧武者四人外に鎧武者軍兵大勢控へ、軍勢の引揚げし體、どんちやんにて道具留る。陸奥守思入あつて、

陸奥　先刻子息安若を安達氏へ賴みしゆゑか、今朝よりして數合の戰ひ身體いたく疲れしも今は忘るゝやうになりしぞ。

一　君の御心晴れたまへば、

二　今一戰花々しく、

三　最後の戰なせし上。

四　叶はぬ時は一同に、

○　枕を並べて、

皆々　討死なさん。（トどんちやんばた〳〵にて、花道より△の武者一人走り出來り、直に舞臺へ來り）

△　はッ、御注進申し上げまする。

一　何事なるぞ。

△　お悦びなされませ、味方の吉事でござります。

二　して味方の、

皆々　吉事とは。

△　只今敵將大館次郎、何者にか討たれしと申すことでござりまする。

陸奥　それは何より吉事なるが、大館次郎は名譽の勇士、

一　これを討ちたる味方の者は、

二　天晴勝れし、

皆々　手柄でござる。

（何者なるやと待つ所へ、數ケ所の痛手も屈せずに大館次郎が首引ッ提げ、從者を隨へ御前

へ來り、はッとばかりにひれ伏せば、

ト此の内かすめてどんちやん、花道より以前の山城切首を提げ、彌四郎に縋り、手負の思入にて出來り、花道にて舞臺を見てきつとなり、一人にて苦痛を怺へ舞臺へ來り、下手に彌四郎ゐて、共に平伏する、陸奥守見て、

陸奥　それへ參りしは、本間なるか。(ト山城顔上げ。)

山城　はッ、御勘氣の身の上も顧ず、今日君の御持場所なる極樂寺危しと承はつて出張なし、一戰なして計らずも、敵の將たる大館次郎を、討取りましてござりまする。

陸奥　今その注進を承はりしが、扨は汝が討ちたるか。

一　力量勝れし大館を、討ちしは誰かと思ひしに、

二　本間殿に。

皆々　ありしよな。

山城　いざ、大館が此の首級、御實檢下さりませ。

陸奥　その首級、これへ持て。

彌四　はッ。

〽はツと答へて陣笠へ、首級を載せて差し出せば、陸奥守とつくと見て、
ト彌四郎我が腰に附けし陣笠へ首を載せて差出す、陸奥守扇を翳しこれを見て、

陸奥　最前これにて出會ひしゆゑ、見覺えのある大館次郎、實に天晴の働きなるぞ。

山城　これを一つの功となし、御勘氣御免下さりますやう、御願ひ申し上げまする。

陸奥　敵の將たる大館を、討ちしは上なき汝が手柄、一つの功を立てしゆゑ、勘氣は許し遣はすぞ。

山城　すりや御免下さりますとか。はゝ、有難う存じ奉つる。

〽嬉し涙に暮れければ、

彌四　君の御勘氣御免になり、嘸御本望でござりませう。

山城　おゝ、これにて思ひ置くことなし。

〽何思ひけん山城は、鎧脫ぎ捨て肌くつろげ、馬手差ぬいて弓手の脇腹がばとばかりに突立つれば、人々これはと打ち驚き、
ト山城上帶を解き鎧を脫ぎ、鎧下をくつろげ馬手差を拔き腹へ突立てる、皆々びつくりして、

彌四　こりや御主人には、何ゆゑに、

一　斯く切腹を、

皆々　いたされしぞ。

陸奥　こりや直家、仔細を申せ。

〽言ふに手負は吐息をつき、（ト竹笛入りの合方になり）

山城　御勘氣御免あらざるゆゑ、既に今日切腹なし相果てんと存ぜしところ、此の儘死すれば後年までその身の恥辱に相成れば、御免はなくとも戰場へ出張なして手柄をなし、それを功に御免を願へと、父が勸めに出張なせしが、天も憐れみたまうてか思ひ掛なき敵將の大舘次郎を討取りて、多年の御恩を報ぜし上へ、御勘氣御免を蒙りて心に掛る雲も晴れ、此の身の望み叶ひしゆゑ、冥土の御先き仕らんと、切腹いたしてござりまする。

〽苦痛ながらに物語れば、聞く大佛も落涙なし。

ト山城よろしく思入にて言ふ、陸奥守もこなしあつて、

陸奥　可惜勇士の其の方が、果敢なき最期は殘念ながら、御運も傾く御家の末、所詮勝利のあらざれば我れも討死なす覺悟、冥土へ參つて再會なすぞ。

山城　すりや我が君にも討死の、お覺悟でござりまするか。

陸奥　德を以て怨みを報ずと、申すは汝のことなるべし。かゝる誠忠の武士にこれまで勘氣を許さゞる

我が心中が恥しきぞ。

山城　恐れ入つたる其の仰せ、有難涙に暮れまする。

陸奧　某も亦厚志に感じ、忝け涙がこぼれるぞ。

〽主從涙にくれければ、並居る諸士も一同に鎧の袖ぞ濡しける。

ト山城陸奧守よろしく愁ひの思入、山城氣を替へ、

山城　こりや彌四郎、嘸父上が待つてござらう、此の場の樣子を注進いたせ。

彌四　この場の樣子をお二人樣へ、御注進をいたしなば、直に其の場で御生害。

山城　むゝ、冥府で待つと傳へくれよ。

彌四　はツ。　ト本釣鐘を打ち込み、

〽折から告ぐる鐘の音に、無常を感じ直家が、（ト山城左衞門苦しき思入にて、）

山城　最早近附く此の身の知死期、今生のお別れに君のお面拜したけれど、眼中衰へ見えざるか。

ト山城陸奧守を見度き思入、これを見て陸奧守つか〳〵と側へ行く。本釣鐘

陸奧　こりや、貞直はこれに居るぞ。（ト山城聲をしる　に陸奧守の方を見て、）

山城　君には益々、（と喉のくさりを切り、）御機嫌よろしう。

ト これが言へぬ思入にて俯伏しになる、彌四郎すがり泣く、

一　はて天晴な。

皆々　左衞門殿。

陸奧　まことに武士の、（ト頷くを木の頭、）鑑ぢやなあ。

ト 淚を拭ふ、皆々引張りよろしく、本釣鐘、揚螺貝の音にてよろしく、

ひやうし幕

義貞太刀流し（中幕の下）　稲村ヶ崎太刀流の場

〔役名━━新田小太郎義貞、篠塚伊賀守重長、瓜生左衞門忠良、畑六郎左衞門時能、亙新左衞門早勝、江田三郎光義、同四郎行義、桃井次郎尙義、大島太郎盛之、篠塚郎黨六人。〕

（濱邊の場）━━本舞臺後淺葱幕上下山組の張物、日覆より松の釣枝、爰に鎧裝の郎黨六人陣笠を冠り立掛り、浪の音かすめて遠寄せの鳴物にて幕明く。

郞一　さて各は何と思ふぞ、昨日の戰に小袋口極樂寺口を打ち破り、勝に乘じて大館樣が敵將たる、大佛の首を取らんと只一騎、敵の陣所へ踏込んで、思ひ掛けなく敵に討たれ、

郎二　忽ち味方の崩れとなり、追討をして大佛に盛り返されて負けとなつたが、あんな悔しいことはない、それといふのも極樂寺の、切通しは左右が山で、おまけに道の幅が狹く、寄手の爲めには大きな難所、

郎三　夜中竊に御主人の篠塚樣の御供をなし、物見に出張り見てさへも、ぞつとする程嶮岨な要害、濱邊へ出し難所にて、主人を遂に見失ひ、

郎四　尋ぬる暇も荒磯ゆゑ、寄せては返す浪同樣、後へ返つて參つたが、何でも山手の方に當り篝が空へうつりしは、夜駈をされぬ要害に、伏勢ありと覺えたり

郎五　又濱手には軍船が逆卷く浪を事ともせず、碇をおろして數十艘船繫りをして居るからは、敵の備へは嚴重なり、

郎六　名に負ふこゝは鎌倉へ攻入る濱邊の咽喉首にて、爰さへ越えれば味方の勝利、短兵急に攻め入れと、夜半からの御陣觸れ。

郎一　それと申すも昨日の戰に、大館樣が討たれしゆゑ、御大將義貞公には、俄に濱邊へ御出陣、

郎二　夜中を冒し御出馬をなさる〻樣子に御主人が、君の御下知はあらざれど物見をなさんと仰せられ、

郎三　われ〳〵共を引率なし、御出張をなされしかど、道幅狹き難所にて見失ひしに相違なし、

郎四　あれぞ所謂北越の街道筋にありと聞く　親知らずにも似寄りし難所、
郎五　主人が浪に足を掬はれ、引込まるれども其の家來が、これを助くること能はず、
郎六　家來が足を掬はれても、主人が救ふこと能はず、惡い難所が出來たものぢや、
郎一　いや由井ヶ濱には斯樣な難所の、あることなどは聞かざりしが、
郎二　こたびの軍に敵方にて、要害堅固にいたさんと、
郎三　濱邊の道を狹くさせ、かゝる難所にしたのでござらう。
郎四　何でもこたびの戰ひは、彼處が干潟にならざれば、
郎五　容易に攻め入ることならねば、
郎七　い、、ひかた(仕方)がないと申す儀は、これから起つたことでござらう。
郎一　われ〳〵ども、打連れ立ち、い、、ひかたがなきゆゑ立歸らう。
五人　それがよい〳〵。

ト皆々下手へはひる。後浪の音にて繋ぎ、舞臺花道共一面浪布を敷詰め、向う正面東西の棧敷三方共、水引打ち返し浪になる。これより床の淨瑠璃になり、

〽それ邪は正に敵せざる例しを擧ぐる白旗も、王化を助け逆を討つ義兵の聞えよし貞に、味

方の諸軍招かずして隨ひ靡く時津風、隈なく晴れし片破れの下弦の光り山の端へのぞむ出馬の弓張は、武門の譽れ有明けや、

ト此の留り誂への鳴物になり、知せに附き淺葱幕を切つて落す。

(太刀流の場)＝＝本舞臺一面常足の二重八枚飾り、砂地の蹴込み、正面奧深に山又山切出しの遠見、此の内へ硝子張りの半月を切拔き、上下同じく山組の張物、よき所に磯馴の松、日覆より同じく釣枝、所々に腰を掛ける程の岩臺などよろしく、總て鎌倉稻村ケ崎の體、右鳴物にて道具納る。

〽月毛の駒に跨りし大將守護の畑、亙、瓜生も共に腰越の麓を廻り磯端の、稻村ケ崎へ繰出し、左右をきつと打ち見やり、

ト此の内誂への鳴物をあしらひ、下手の山組の蔭より義貞甲冑好みのこしらへにて月毛の駒に跨り出ろ、跡より瓜生左衞門、畑六郎左衞門、亙新左衞門、江田の三郎、同四郎、桃井次郎、大島太郎、何れも鎧裝附太刀武者草鞋にて、其の外三階總出の軍兵附添ひ出る、義貞二重の眞中へ來り、馬上の儘向うを見遣り、これより誂への合方になり、

義貞 如何に者共承はれ、昨日先手の大將たる大館次郎宗氏が極樂寺口を打破り、十分味方の勝利となり、勝に乘じて只一騎深入りなして圖らず討たれ、再び敵に盛返され遂に敗軍なしたれど、そ

れにたゆたふ所にあらず漢に張良、韓信あれども、項羽が爲めに敗北すること、七十餘度に及べども、嘗て鋭氣を屈せずして終に烏江の一戰に利を得て、四百餘年の基業を開く、此の期を過さず義貞も自ら進んで高時入道の首を得んことは、我が掌の内にあり、夜駈をなして敵陣へ押寄せ勝利を仕つれ。

ト勇氣烈しく鞍壺にて、諸軍に令したまふにぞ、一統實にもと勇み立ち、

と皆々こなしあつて、

左衞　君慮の如く我々も、いかで猶豫を仕つらん、假令敵兵何萬騎鐵壁城に籠るとも、

六郎　この期を過さず敵陣へ、不意に押寄せ蹴散らしなば、極樂坂はたゞ一揉み、

新左　勝利に乘じ戰場の若宮口へ打つて出で、敵の大軍追ひまくり營中近く攻め寄せなば、

三郎　暴惡無道に榮華をなし、驕奢に耽ける高時の睡りを覺さし入道の、首討取るはいと易し、

四郎　いで〳〵渚邊を打越して、極樂坂を手始めに、

次郎　昨日敗軍いたしたる、味方の恥辱を雪ぎし上、

太郎　面々奪激突進なし、功名手柄を顯はすべし。

左衞　いでや先手を、

皆々　仕つらん。

〽勢ひ込んだる折こそあれ、（卜皆々きつとなる、此の時上手の山組の張物の蔭にて、）

伊賀　あいや、各先づ待たれよ、その御出馬は然るべからず。（卜聲をかける、）

皆々　何と、（卜きつとなる。）

〽見やるあなたの山間より、砂を蹴立て伊賀守、眞一文字に馳せ來り、

卜浪の音はげしくばた〳〵になり、上手より伊賀守の好みの鬘鎧裝附太刀武者草鞋にて走り出來り、

伊賀　御出馬お止まり下さりませう。（卜きつと言ふ、皆々伊賀守を見て、）

義貞　汝は篠塚重長ならずや。

左衛　何ゆゑ御出馬、

皆々　止められしぞ。

伊賀　其の仔細言上なさん。（卜是れより肥前節様なる合方になり、）君の御出馬氣遣はしく、夜半の頃に某が空を仰ぎて天文を、窺ひ見しに東北の空に當り太白星逆に柳鬼の分野を犯し、光り流れて斗牛に至るは、正しく敵の計策ありて味方の將を挫かん結構、油斷ならじと存ぜしゆゑ、物見なさんと出張なし敵の樣子を窺ひしに、案に違はず敵陣こそ要害堅固に候ふなり。

義貞　やあ、假令如何程敵陣にて要害堅固にいたすとも、義貞自ら出馬をなし、たゞ一戰に蹴散らせば、何の恐るゝことあらん。

左衛　常に似氣なく篠塚氏には、何ゆゑ恐怖めされしか。

六郎　高の知れたる鎌倉勢、要害堅固にいたせばとて、破れぬことのござらうや。

新左　して、又夜半天文を窺はれし時、敵陣にて、

三郎　計策ありと知られしは、如何なるところを見拔かれしか。

四郎　事の次第を我が君へ、

次郎　言上あつて御出馬の、

太郎　御心得にいたされよ。

伊賀　さればに候ふ、敵方では昨日の一戰に先手の將たる大館氏を、易々討取りしゆゑ、我が君自ら御出馬にて夜駈けの戰ひあらんを悟り、極樂坂へ攻め入るべき一方口の濱手には、數艘の大船備へ置き、すわと申さば矢倉より横矢を射掛け敵兵を、漏らさず射留る手筈なり、又切通の左右なる山手の方には數萬の兵矢石を貯へ陣取りなし、すはと申さば一時にこれを投げ掛け山上より、不意に起つて敵兵を微塵になさん其の要害、堅固に相見え候へば、虎穴に陷る我が君の危き事を推

量り、お止め申して候ふなり。

〽敵の機密を重長が、探りて注進なしければ、義貞につこと打ち笑みて、

ト双方よろしくこなしあつて、

義貞 小賢しき其の要害、何程のことあるべき、いで〳〵者共出陣せよ。

左衛 すりや、篠塚の注進も、

六郎 君にはお用ゐ、

皆々 なされぬよな。

義貞 おゝ、天に代つて逆を討つ、この義貞に逆臣等の刄鐵が立つてなるべきや、汝等共に恐るゝな、

伊賀 あいや逆臣なればとて、天定らずば征す能はず、義兵を擧ぐる君なりとも地の理に暗く戰場へ、赴きたまはゞ害あらん、されば兵書に天の時は、地の理に如かずと記しあるを、お辨へはござりませぬか。

義貞 して又、地の理に暗きとは、如何なる所を申すのぢや。

伊賀 是れより先きは一筋の濱續きにて道狹く、高浪烈しく打寄する相州名代の由井ヶ濱、假令數萬の大軍にて押寄せ行くとも此の間は、一騎立ちにて過ぎざれば駈抜けることいと難し、然るを弓手

の山上より矢石を投げかけ、濱手なる數艘の船よりは矢を射かけ、防がん術のござりませうや、

但しこれにも我が君の御軍慮あつて易々と、其の大難を打ち過ぐる御計策がござりまするや、軍慮に敏き大館が不覺を取りしも是れ全く地の理に暗きゆゑならん、篤と御賢慮回らせられ、御出馬あつて然るべしと、憚りながら存じまする。

ヘ地の理を計り重長が虎穴の難と諫むれば、鬼神を挫ぐ勇將も暫く默して居られしが、何思ひけん馬上より、ひらりと下り立ちたまふにぞ、

ト此の内義貞思入つて、馬上より下りろ、皆々此の體を見て、

左衛　すりや、我が君には篠塚の、

六郎　御異見により御出馬を、

新左　止まりたまふ、

皆々　御所存なるか。（ト是れよりコイヤイの合方になり）

義貞　いや斯くまでに重長が、我を諫めて今曉の出馬の難を避けんとなすも、忠義の赤心さこそあらん、然れども義貞萬乘の君へ忠義を盡さんと、義兵の旗を本國なる世良田の莊に擧げしより、今日に至るまで、天地神明の冥助にや一度武州久米河にて敗軍せしも、三浦義勝味方に加はり勝利とな

り、數日を過ぎず鎌倉の咽喉の地へ攻入りしも、驕奢に募る高時が怠慢油斷と申せども、弓矢の神の應護にこそ、此の理を以て義貞が今滄海の龍王へ、祈誓を掛けて眼前の難を避けんと思ふなり、汝等暫く控へ居よ。

伊賀　して御祈誓を掛けたまふとは、

左衛　如何なることをなしたまふや、

六郎　我々とても一統に、

新左　味方勝利と相成るやう、

三郎　塵手水なし身を淨め、

四郎　百拜いたし、龍神へ、

次郎　祈念を籠めて君諸共、

太郎　誓ひを掛けるで、

皆々　ござりませう。（ト義貞思入あつて、）

義貞　その祈誓こそ外ならず、傳へ聞く、漢の貳師將軍李廣は城中に水盡き渇に責められける時、劍を拔いて岩石を刺しゝに飛泉俄に湧き出でき、我が朝の神功皇后は三韓を征したまひし時、自ら干

珠を取つて海上に投げたまひしかば、潮水遠く退きて終に勝利を得たまへり、是れ皆和漢の佳例にして古今の奇瑞と承知せり、我は干珠にあらなくも、先祖重代傳はりし太刀一口を龍神へ、捧げて納受あらんことを、祈りて出馬の難を避けん、一統謹みて控へ居よ。

左衛　左樣ござらば、我々も、

伊賀　共に禮拜、

皆々　仕つらん。

義貞　いで〳〵納受の驗しを見せん。

へ兜を脱いで附隨ふ臣下に渡し海面を、望んで義貞禮拜なし、ト此の內義貞よろしくこなし、跡皆々同じく兜を脫ぎ鉢巻など取ることあつて、並よく下に居て禮拜のこなし、義貞二重眞中の端に出て、

新田小太郎源義貞、南無滄海の龍王へ謹んで祈誓し奉つる。傳へ受はる日本開闢の主伊勢天照皇大神は、本地を大日の尊容に隱し垂迹を滄海の龍神に顯はしたまへりと、我が君其の苗裔として逆臣の爲めに西海の浪に漂ひたまふ、義貞今臣たるの道を盡さんが爲めに斧鉞を取つて敵陣に臨む、其の志し偏に王化を助け奉つり蒼生を安んぜしめんと思ふにあり、仰ぎ願くば內海外海の

龍神八部、臣が忠義を憐みて、潮を萬里の外に退け、道を三軍の陣に開かしめたまへ。

へ至心に祈念し佩きたまふ黄金作りの太刀おつとり、諸手に捧げ再拜なし海底望んで投ずれば、不思議や今まで滿々たる潮も引きて遠干潟、いるさの月の照り添ひて平砂の光り渺々たり。

ト此の内浪の音烈しく、義貞帶せし太刀を取つて押戴さ、前の切穴へ打ち込む、これにて浪の花ぱつと立ち、舞臺前の浪布を殘らず雨落へ引いて取り、跡一面の砂地に替る、是れと一時に花道の浪布を向うへ引いて取ることよろしく、皆々此の體を見てびつくりなし、

伊賀　やゝ、今我が君が御祈念ありて、

左衞　投げ入れたまふ御太刀、

六郎　龍神納受したまひしか、

新左　見る間に潮の引き行きて、

三郎　平砂となりし此の干潟、

四郎　不思議といふも餘りあり、

次郎　かゝる奇瑞を見る上は、

太郎　必定勝利に、

皆々　疑ひなし。

義貞　一統勇んで、（トきつとなるを木の頭、）出陣いたせ。

　へ勇みたまふぞ。

　ト皆々よろしくこなし、浪の音カケリ床の三重にて、

幕

北條九代名家功（終り）

〔附錄〕主なる興行年表

河内山と直侍

年時	明治十四年三月	明治二十三年十月	明治二十五年五月	明治二十八年十月	明治三十三年三月	明治卅八年十一月	明治四十一年七月	明治四十三年四月	大正二年七月	大正三年三月
座名	新富座	歌舞伎座	春木座	明治座	歌舞伎座	歌舞伎座	大阪角座	歌舞伎座	歌舞伎座	帝國劇場
名題	天衣紛上野初花	三幅對上野風景	天衣紛上野初花	雲上野三衣策前	天衣紛上野初花	三幅對上野風景	天衣紛上野初花	雪夕夜入谷畔道	河内山	河内山
役割 河内山	市川團十郎	市川團十郎	坂東家橘	市川團十郎	市川團十郎	市川高麗藏	市川高麗藏	—	市村羽左衛門	松本幸四郎
直次郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川小團次	—	尾上菊五郎	市村羽左衛門	市村羽左衛門	市村羽左衛門	尾上菊五郎	澤村長十郎
市之丞	市川左團次	市川左團次	中村芝鶴	—	市川八百藏	市川八百藏	澤村訥升	市川猿之助	—	—
三千歳	岩井半四郎	澤村源之助	岩井松之助	—	中村福助	尾上梅幸	尾上梅幸	尾上梅幸	—	—
丑松	市川小團次	尾上幸藏	中村駒之助	—	尾上幸藏	尾上菊五郎	尾上菊五郎	中村吉右衛門	—	—
小左衛門	中村宗十郎	市川左團次	中村雀右衛門	市川左團次	市川八百藏	片岡市藏	尾上松助	—	中村吉右衛門	尾上菊四郎
出雲守	坂東家橘	市川新藏	中村芝鶴	市川小團次	市村家橘	尾上菊五郎	澤村訥升	—	坂東三津五郎	澤村宗之助
丈賀	尾上梅五郎	尾上松助	中村勘五郎	—	尾上松助	尾上松助	尾上松助	尾上松助	—	—
大膳	市川團右衛門	尾上松助	市川宗三郎	市川荒次郎	尾上松助	市川宗三郎	市川團右衛門	—	中村翫助	尾上松助

大正三年五月	本郷座	河内山	市川左團次	｜	｜	｜	｜	市川八百藏	中村又五郎	｜	市川荒次郎
大正四年二月	市村座	天衣紛上野初花	中村吉右衛門	尾上菊五郎	尾上榮三郎	尾上芙雀	坂東三津五郎	中村東藏	守田勘彌	中村東藏	中村福助
大正五年三月	帝國劇場	雪夕夜入谷畔道	｜	尾上菊五郎	坂東彦三郎	尾上菊次郎	坂東三津五郎	｜	｜	尾上松助	｜
大正六年十月	新富座	天衣紛上野初花	市川左團次	｜	｜	｜	｜	市川段四郎	市川壽美藏	｜	市川荒次郎
大正八年二月	市村座	雪夕夜入谷畔道	｜	尾上菊五郎	中村吉右衛門	尾上菊次郎	尾上伊三郎	｜	｜	中村東藏	｜
大正八年十二月	新富座	雪夕夜入谷畔道	｜	市村羽左衛門	市川中車	尾上梅幸	片岡市藏	｜	｜	尾上松助	｜
大正十一年三月	明治座	河内山	市川左團次	｜	｜	｜	｜	市川中車	片岡市藏	｜	市川荒次郎
大正十二年五月	明治座	河内山宗俊	中村吉右衛門	｜	｜	｜	｜	片岡市藏	坂東三津五郎	｜	中村吉之丞
大正十三年一月	大阪中座	天衣紛上野初花	松本幸四郎	林長三郎	｜	｜	｜	市川市藏	嵐吉三郎	｜	市川箱登羅

島ちどり

年時	座名	名題＼役割	島藏	千太	望月	おてる	野州徳	磯右衛門	おはま	清兵衛	お仲
明治十四年十一月	新富座	島衞月白浪	尾上菊五郎	市川左團次	市川團十郎	岩井半四郎	尾上松助	市川團右衛門	坂東秀調	市川左團次	中村福助
明治二十三年七月	市村座	島衞月白浪	尾上菊五郎	市川左團次	尾上菊五郎	澤村源之助	市川小團次	尾上松助	尾上榮之助	市川左團次	中村鶴松
明治三十三年九月	歌舞伎座	島衞月白浪	尾上菊五郎	市川八百藏	尾上菊五郎	中村福助	尾上松助	片岡市藏	尾上榮三郎	市川八百藏	｜

浮世清玄

年時	座名	名題	清玄	淀五郎	小櫻	松三郎	惣太	おくめ	六兵衛	七助	お若
明治四十二年五月	市村座	島衛月白浪(しまちどりつきのしらなみ)	尾上菊五郎	中村吉右衛門	—	尾上芙雀	中村駒助	市川新十郎	岩井粂三郎	中村駒助	市川雷藏
大正四年十一月	歌舞伎座	島衛月白浪(しまちどりつきのしらなみ)	市村羽左衛門	尾上菊五郎	尾上榮三郎	中村歌右衛門	片岡市藏	市川八百藏	市村龜藏	—	中村福助
大正八年七月	帝國劇場	島衛月白浪(しまちどりつきのしらなみ)	尾上菊五郎	中村吉右衛門	—	尾上菊次郎	中村東藏	市川新十郎	河原崎國太郎	—	中村時藏
大正七年十月	新富座	島衛月白浪(しまちどりつきのしらなみ)	市村羽左衛門	中村吉右衛門	市川中車	—	中村鶴藏	中村傳九郎	中村芝鶴	—	中村時藏
大正十三年十一月	本郷座	島衛月白浪(しまちどりつきのしらなみ)	市村羽左衛門	市川左團次	市川中車	中村歌右衛門	市川壽美藏	—	中村鶴藏	中村芝鶴	市村竹松
明治十七年四月	市村座	浮世清玄廓夜櫻(うきよせいげんさとのよざくら)	尾上菊五郎	尾上菊五郎	岩井松之助	片岡我童	中村時藏	尾上松助	關三十郎	市川壽美藏	河原崎國太郎
明治三十六年四月	眞砂座	浮世清玄廓夜櫻(うきよせいげんさとのよざくら)	市川八百藏	—	澤村源之助	澤村訥升	中村成太郎	大谷馬十	嵐璃宗	澤村宗十郎	—
大正八年四月	明治座	浮世清玄廓夜櫻(うきよせいげんさとのよざくら)	市川八百藏	—	市川松蔦	市川壽美藏	片岡市藏	中村芝鶴	市川壽美藏	市川小團次	中村雀右衛門

高時

年時	座名	名題	高時	城入道	陸奥守	衣笠	安達三郎
明治十七年十一月	猿若座	北條九代名家功(ほうでうくだいめいかのいさをし)	市川團十郎	中村仲藏	市川權十郎	中村福助	中村鶴五郎

明治二十年七月	新富座	名高時天狗酒宴(なもたかときてんぐのさかもり)	市川團十郎	市川左團次	大谷門藏	中村福助	—
明治卅五年十一月	歌舞伎座	高(たか)時(とき)	市川團十郎	片岡市藏	市川八百藏	市川女寅	市村家橘
明治四十年三月	歌舞伎座	高(たか)時(とき)	市川八百藏	市川猿之助	市川高麗藏	澤村訥升	中村吉右衞門
明治四十二年一月	市村座	高(たか)時(とき)	中村吉右衞門	市川新十郎	尾上菊五郎	岩井粂三郎	中村駒助
明治四十三年六月	明治座	高(たか)時(とき)	市川高麗藏	市川左團次	市川小團次	市川壽美藏	市川市十郎
大正七年二月	帝國劇場	高(たか)時(とき)	市川高麗藏	尾上松助	澤村宗十郎	澤村宗之助	澤村長十郎
大正六年四月	歌舞伎座	高(たか)時(とき)	市村羽左衞門	市川段四郎	中村歌右衞門	中村福助	林長三郎
大正八年二月	市村座	高(たか)時(とき)	尾上菊五郎	中村吉右衞門	坂東三津五郎	尾上菊次郎	中村東藏
大正十一年四月	帝國劇場	高(たか)時(とき)	松本幸四郎	守田勘彌	澤村宗十郎	澤村宗之助	澤村田之助
大正十三年十二月	帝國劇場	高(たか)時(とき)	松下幸四郎	尾上松助	大谷友右衞門	初瀬浪子	助高屋高助

大正十四年二月十二日印刷
大正十四年二月十五日發行

著作權者印

上演、轉載等の場合は藏版者の許諾を得られ度候。

『默阿彌全集第十六卷』 非賣品

補修 河竹糸女

校訂編纂者 河竹繁俊

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者 和田利彦

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷者 上村新輔

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所 博文館印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所 春陽堂





